箕面市文化財総合調査報告書Ⅰ

旧萱野地区・旧豊川地区

２００１年３月

箕面市文化財総合調査団

箕面市文化財総合調査報告書Ⅰ　正誤表

ﾍﾟｰｼﾞ	行	誤	正
2	34	しきれず。	しきれず、
7	18	祭られて	祀られて
41	14	ははじめは	のはじめは
43	28	帰らせるの	帰らせるのが
61	23	良いが	良いものが
77	20	詰めると	煮詰めると
99	7	撞いて	ついて
103	17	現在で	現在は
108	20	槲の	鶏の
125	3	3分の一	3分の1
126	18	尼ノ谷	山ノ谷
126	図33	郷久	郷久保
127	2	33戸でり	33戸であり
150	29	セタを	セタと
158	22	いており	おり
161	5	行員	講員
165	14	道祖元	道祖本
	22	余韻を楽み	余韻を楽しみ
167	8	お祭り	お祀り
	16	講演	公演

序　　文

箕面市は大阪府の北部に位置し、名勝箕面山と北摂山系に見守られています。豊かな緑に囲まれた環境の中で、古くより人々の生活が営まれてきました。近年に至り、この地も時代の変化とともに、大阪の衛星都市のひとつとして発展してまいりました。

しかし、農村から町へさらに衛星都市へとその姿が大きく変化するのに伴い、生活や習俗も大きく変化してきました。私たちの生活はうつろいやすいものであり、変化し続けていく中に生活文化が存在しています。古来より続いている習俗や行事でさえ、変化し続けていく中での今の状態を示しているに過ぎません。

環境の変化とともに忘却の中に消え去ろうとしている、私たちの生活文化を、かつての日常とともに現在の日常をそのままに聞き、変化とともに記録することによって、将来に伝え残すことも必要ではないかと考えられるものであります。

この報告書は、上述した状況において国の緊急雇用対策事業の一環として、実施した箕面市内の民俗調査の報告書であります。本書が民俗文化の理解に役立てば幸いと存じます。

調査の実施にあたり多くのご指示、御助言をいただいた諸先生方、並びに各関係機関をはじめ、各調査区内の住民の方々におかれましては、調査の趣旨に対して格別の御理解と御協力をいただきました。心より感謝と敬意を表し、厚く御礼申し上げます。

平成 13 年 3 月

箕面市文化財総合調査団
団長　　村川　行弘

例　　言

1　本書は、緊急雇用対策事業として箕面市教育委員会より委託を受けて、箕面市文化財総合調査団が実施した民俗を中心とした調査の報告書である。

2　本年度の調査対象区と期間は下記のとおりである。

稲・萱野・坊島・如意谷・白島・西宿・石丸・今宮・外院
粟生外院・粟生新家・粟生間谷・小野原

調査期間　　平成12年4月2日より10月31日

3　執筆の分担は佐々木康人（第2章第3節・第8節）、加藤謙一（第2章第2節、第3章第4節）、内田吉哉（第2章第7節）、竹島大祐（第2章第4節、第3章第3節）、石本倫子（第2章第9節、第3章第1節）、鈴木許恵（第2章第1節、第3章第2節）、福田郁理（第2章第5節）、星川明子（第2章第6節）、野村大作（第4章）、馬部隆弘（第5章　古文書解説）、上谷浩司（第5章　古文書解訳）、編集は箕面市文化財総合調査団が行った。

4　本文中の写真・図・表は一連の番号を付け、原典からの引用については文字などの表現を統一し本文中にて出典を示した。

5　地区ごとの記述は、調査のために任意に各地区において実施した、聞き取り調査に基づいている。そのため、調査地区内における、すべての民俗を記述できたものではない。

6　調査団の編成については下記のとおりである。

団　　長　村川行弘（大阪経済法科大学教授）

委　　員　上井久義（関西大学教授）、藤本　篤（元大阪市史編纂所所長）、青山賢信（大阪工業大学教授）、高橋隆博（関西大学教授）、奥野義雄（奈良県立民俗博物館学芸課長）、中川秀一（文化財保護審議委員）、伊郷好文（文化財保護審議委員）、島田竜雄（元箕面市立郷土資料館館長）

調　査　員　佐々木康人、加藤謙一、内田吉哉、竹島大祐、石本倫子、鈴木許恵、福田郁理、星川明子、野村大作、上谷浩司、辻美穂

調査補助員　安中佐貴子、石田美登利、中澤寛史、藤原篤、松下夏実

7　謝辞

調査に際して、各調査地区の住民の方々・各団体に民俗調査に対して深く御理解と御協力をいただいたことに対して深く感謝いたします。

粟生新家地区の方々　粟生外院地区の方々　粟生間谷地区の方々　石丸地区の方々
稲地区の方々　今宮地区の方々　小野原地区の方々　萱野地区の方々
西宿地区の方々　如意谷地区の方々　坊島地区の方々　（順不同 50 音順）

阿弥陀寺　為那都比古神社　萱野三平記念館　願生寺　教学寺　正念寺
正願寺　浄円寺　浄国寺　常照寺　善福寺　帝釈寺　理照寺　善福寺
法泉寺　法蔵寺　本成寺　粟生新家寿老人会　他多くの団体・個人の方々
京阪バス株式会社　阪急バス株式会社　（順不同 50 音順）

目　　次

第1章　調査の経過
　第1節　歴史環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第2節　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第2章　萱野地区の詳細
　第1節　稲地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第2節　萱野地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
　第3節　坊島地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　第4節　如意谷地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
　第5節　白島地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
　第6節　西宿地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
　第7節　石丸地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
　第8節　今宮地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
　第9節　外院地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
第3章　豊川地区の詳細
　第1節　粟生外院地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
　第2節　粟生新家地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
　第3節　粟生間谷地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
　第4節　小野原地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・156
第4章　箕面とバスの出会い・・・・・・・・・・・・・・・169
第5章　参考資料
　粟生村誌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・177
　摂津国豊島郡白嶋村差出明細帳・・・・・・・・・・・・238
　増字新刻大節用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・293
　稲荷大明神内陳一切手跡・・・・・・・・・・・・・・・332
　白姫大明神・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・343

挿　　図

図１	箕面市内の遺跡	2	図２	調査対象地区	4
図３	稲旧字名	6	図４	稲集落周辺	8
図５	稲のメンギョ山	１１	図６	稲のマンドロの場所	１４
図７	稲の墓道	１６	図８	萱野旧字名	１９
図９	萱野集落周辺	２１	図１０	坊島旧字名	３０
図１１	坊島集落周辺	４０	図１２	如意谷の寺社	４１
図１３	如意谷旧字名	４２	図１４	如意谷集落周辺	４４
図１５	白島旧字名	５０	図１６	白島集落周辺	５２
図１７	西宿旧字名	６７	図１８	西宿集落周辺	６８
図１９	石丸旧字名	８３	図２０	石丸集落周辺	８４
図２１	今宮旧字名	８３	図２２	今宮集落周辺	９３
図２３	外院旧字名	９６	図２４	外院集落周辺	９７
図２５	溜池と用水	９８	図２６	マンドロの道順	１０５
図２７	垣内とドウギョウ	１０８	図２８	粟生外院旧字名	１１０
図２９	垣内とドウギョウ	１１０	図３０	溜池と用水	１１１
図３１	新池の樋	１１１	図３２	粟生外院集落周辺	１１３
図３３	粟生新家旧字名	１２６	図３４	現在の区切り	１３３
図３５	粟生新家集落周辺	１３４	図３６	粟生間谷旧字名	１３５
図３７	奥の寺社とトンド場	１３６	図３８	中村の寺社とトンド場	１３５
図３９	山ノ口の寺社とトンド場	１３６	図４０	川合の寺社とトンド場	１３５
図４１	粟生間谷の墓域	１５１	図４２	粟生間谷の石造物・祠等	１３５
図４３	小野原旧字名	１５６	図４４	小野原集落周辺	１５７
図４５	桜井―高槻間の路線図	１６９	図４６	井戸の辻―高槻間の路線図	１７０
図４７	池田本町―高槻間の路線図	１７１	図４８	阪北自動車からの譲渡路線	１７５
図４９	阪急バスへの譲渡路線	１７５	図５０	箕面周辺の主要路線	１７６

写　　真

写真１	如意谷遺跡の銅鐸	2	写真２	西国街道と稲の集落	5
写真３	屋敷脇の地蔵	5	写真４	稲二丁目の神社跡	7
写真５	教学寺	7	写真６	勝満寺	7
写真７	西稲のトンド場跡	9	写真８	布ヶ池の現況	１３
写真９	地蔵１	１６	写真１０	地蔵２	１６
写真１１	地蔵３	１６	写真１２	萱野三平邸	１７
写真１３	萱野三平の墓	２５	写真１４	タイマツ（街道沿い）	２５
写真１５	タイマツ（街道沿い）	２５	写真１６	鍋田地蔵	２５
写真１７	報恩講（善福寺）	２７	写真１８	門松の飾り付け	３１
写真１９	門松	３１	写真２０	注連縄１	３２
写真２１	注連縄２	３２	写真２２	トンド場の跡	３３
写真２３	坊島の土取り場跡	３４	写真２４	施餓鬼供養１（浄国寺）	３５
写真２５	施餓鬼供養２（浄国寺）	３５	写真２６	施餓鬼供養３（浄国寺）	３６
写真２７	ハツボンの塔婆	３６	写真２８	地蔵堂	３７
写真２９	大宮寺池	３７	写真３０	浄国寺のダントウサン	３９
写真３１	現在の村墓１	３９	写真３２	現在の村墓２	３９
写真３３	善如竜王神社	４１	写真３４	如意輪観音堂	４１
写真３５	瀧安寺の大護摩	４５	写真３６	お盆のお供え	４６
写真３７	常夜燈	４７	写真３８	医王岩	４９
写真３９	水神社	５１	写真４０	参道の庚申さん	５５
写真４１	施餓鬼棚	５７	写真４２	浄土宗の檀家の盆棚	５７
写真４３	真宗の檀家の供物	５７	写真４４	新棚と供物	５８
写真４５	阿弥陀寺の地蔵盆	５８	写真４６	マンドロの松明	５９
写真４７	マンドロ風景	６０	写真４８	龍神さんのお祭り	６３
写真４９	撞木(萬延元庚申七月)	６３	写真５０	太鼓念仏講	６３
写真５１	西宿遠景	６７	写真５２	施餓鬼供養（浄国寺）	７３
写真５３	無縁仏のお供え	７４	写真５４	新棚（アラタナ）	７５
写真５５	地蔵盆の寄り合い	７６	写真５６	地蔵盆の数珠繰り	７６
写真５７	地蔵盆の御詠歌をあげる	７６	写真５８	秋祭りの提灯	７７

写真５９	北向き地蔵	７９	写真６０	庭内の地蔵	７９
写真６１	ハカノシタの地蔵	７９	写真６２	庚申塚	８０
写真６３	サイマツの祠	８０	写真６４	児童遊園の祠	８０
写真６５	昔の墓跡	８０	写真６６	三王神社の石碑	８２
写真６７	れんげ祭り	８５	写真６８	薬師堂（大宮寺）	８７
写真６９	報恩講	８７	写真７０	天満天神社跡	８９
写真７１	今宮旧道風景	８９	写真７２	川横の供え場所	９０
写真７３	メンギョ山の風景	９１	写真７４	牛回しの木	９１
写真７５	手植え風景	９１	写真７６	愛宕神社のお祭り１	９２
写真７７	愛宕神社のお祭り２	９１	写真７８	道標の基礎	９４
写真７９	檀徒墓入口の祠	９７	写真８０	ガンショウジ山の祠	９７
写真８１	願生寺での仏迎え	１０３	写真８２	盆の供物	１０３
写真８３	新仏のアラタナ	１０４	写真８４	無縁仏の供養	１０４
写真８５	ダイトボシの灯篭	１０５	写真８６	ミタラシサンの供養	１０６
写真８５	観音講の集まり	１０７	写真８８	観音堂の供物	１０７
写真８９	地蔵	１１２	写真９０	五字神社	１１２
写真９１	帝釈寺の注連縄	１１５	写真９２	仏迎え	１１７
写真９３	供物	１１８	写真９４	新仏の供養	１１８
写真９５	米１升入りの重箱	１１９	写真９６	施餓鬼壇	１１９
写真９７	供物と朱塗りの膳	１２０	写真９８	地蔵盆	１２０
写真９９	地蔵盆の御詠歌	１２０	写真１００	彼岸の数珠繰り	１２１
写真１０１	庚申塚	１２３	写真１０２	庚申講の掛軸	１２３
写真１０３	伊勢講の掛軸	１２３	写真１０４	行者講の掛軸	１２４
写真１０５	春日神社の常夜燈	１２７	写真１０６	愛宕講の社	１３１
写真１０７	大日講の地蔵	１３１	写真１０８	御神楽の獅子舞	１３２
写真１０９	善福寺の境内	１３８	写真１１０	本成寺の堀	１３８
写真１１１	山ノ口のトンド	１４０	写真１１２	田植え風景	１４１
写真１１３	法蔵寺施餓鬼供養	１４２	写真１１４	本成寺施餓鬼供養	１４２
写真１１５	善福寺施餓鬼供養	１４２	写真１１６	お盆のお迎え(法泉寺)	１４３
写真１１７	お盆のお迎え(本成寺)	１４３	写真１１８	仏壇のお供え	１４４
写真１１９	オガラの梯子	１４５	写真１２０	餓鬼棚	１４５
写真１２１	地蔵盆１	１４６	写真１２２	地蔵盆２	１４６
写真１２３	太鼓	１４６	写真１２４	現在も残る農村風景	１５６

写真１２５　理照寺施餓鬼法要　１６２　写真１２６　盆のお供え　１６２
写真１２７　地蔵盆（理照寺境内）　１６４　写真１２８　一心講結願のお勤め　１６６
写真１２９　集落西部の常夜灯　１６８　写真１３０　黎明期のバス　１６９
写真１３１　西国街道　１７０　写真１３２　当時のバス　１７０
写真１３３　現在の井戸の辻　１７１　写真１３４　新家バス停跡(井口堂)１７１
写真１３５　昭和１０年頃の女子車掌１７３　写真１３６　当時の代燃車　１７３
写真１３７　戦前の阪急バス　１７５　写真１３８　昭和１５年頃のバス　１７６
写真１３９　昭和２０年頃のバス　１７６　写真１４０　昭和３０年頃のバス　１７６

第１章　調査の概要

第１節　位置と環境

箕面市は、大阪府の北部に位置し、市域の大部分が北部の止々呂美地区地区を含む北摂山系によって占められている。市域の南部に広がる平野部は、箕面川によって形成された西部と、千里川によって形成された中央部、勝尾寺川によって形成された東部に分類される。このいずれもが千里丘陵の北端をもって境となす。西部・中央部は緩やかな傾斜を持つ沖積平野を呈しているが、東部は北摂山系から伸びた丘陵が広がり茨木市域へと続いている。北摂山系から緩やかに東西へと広がる平野部であり、中央には西国街道が古代より通過し中央と地方の文化・物流の大動脈であった。

このような自然環境と地理的要因の中で、多くの人々がこの地に生活を営むようになったのは、旧石器時代からであることが近年の発掘調査等によって明らかになりつつある。

旧石器時代

箕面市内における旧石器時代の遺跡は少なく、わずかに新稲西遺跡・外院遺跡が知られている程度である。両遺跡とも国府型ナイフ形石器が採集されているものの遺構については未確認である。

縄文時代

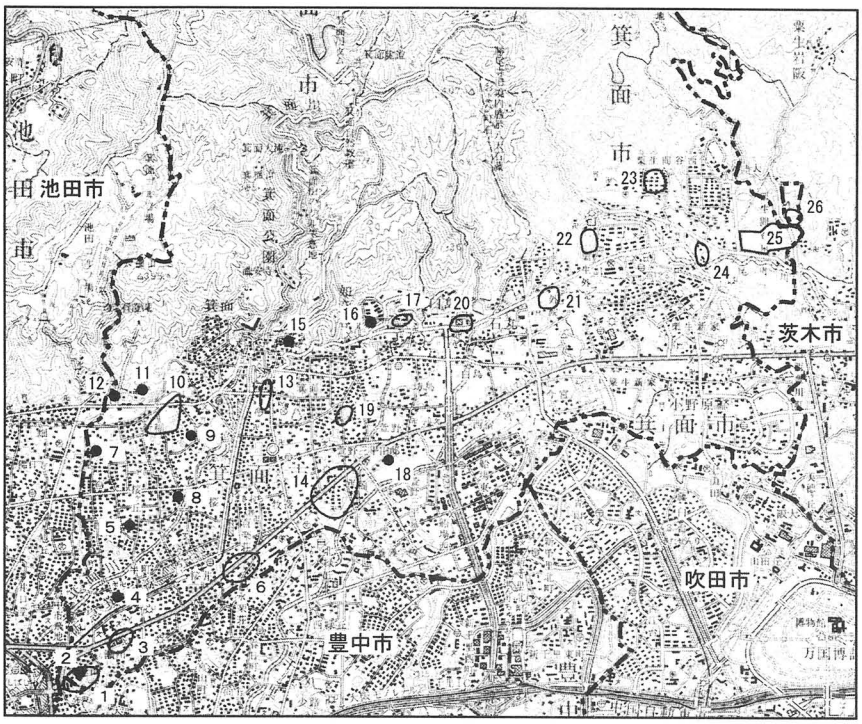
縄文時代に入ると隣接地域と競うように遺跡が増加し、この地域でも人口が増加していったものと見られる。なかでも、瀬川遺跡より出土した「の」字状垂飾は蛇紋岩製で全国でも 11 例目という貴重なものであるが、遺構が未確認のためその特異性は不明である。

その他にも、石器・土器が出土・採集されている遺跡として、稲遺跡・新稲遺跡・新稲西遺跡・外院遺跡があるが遺構等については不明である。本格的な発掘調査が及んだ白島遺跡においては縄文晩期の住居跡や多数の土器片が出土しており、箕面市内における人々の営みの一端がうかがえる。

弥生時代

弥生時代の遺跡としては、如意谷銅鐸出土地が著名であるが、遺跡消滅によって詳細は不明である。その他では、弥生時代後期の住居と土器が出土した、池ノ内遺跡が知られる程度であり。まだまだ、未解明な部分が多い。

写真 1　如意谷銅鐸(郷土資料館蔵)



1	待兼山遺跡	8	桜古墳	15	青木字陣屋跡	22	善福寺原城跡
2	待兼山古墳	9	稲荷社古墳	16	如意谷銅鐸出土地	23	粟生谷城跡
3	瀬川遺跡	10	新稲西遺跡	17	如意谷遺跡	24	大日遺跡
4	瀬川半町宿駅跡	11	新稲古墳	18	萱野三平旧邸	25	粟生間谷遺跡
5	中尾塚古墳	12	山口古墳	19	唐池遺跡	26	徳大寺遺跡
6	権田遺跡	13	池ノ内遺跡	20	白島遺跡		
7	髪切塚古墳跡	14	稲遺跡	21	外院遺跡		

図 1　箕面市内の主要遺跡分布図

古墳時代

周辺の池田・豊中・茨木市に比べ規模と量において比べるべくもないが、池田市との市境付近にいくつかの小円墳が点在している。その幾つかはすでに、消滅しているものの金銅製耳環が出土した新稲古墳と中尾塚古墳、石室が現存している桜古墳、墳丘を残す稲荷社古墳などが点在するにとどまる。これらの古墳は大きさも 20m 以下のものが多く、古墳時代の後期のものが多いが、池田市域の小円墳と巨大な石室を持つ鉢塚古墳や、前方後円墳の二子塚古墳との関わりは無視できないものがある。

歴史時代

奈良・平安・中世となると、西国街道は正式官道として整備され。文化と物流による波及効果から、集落遺跡の出土遺物の内容にも変化がみられる。これは、人口の増加と経済力の集中によって、小規模な領主層の発生が考えられる。戦国時代に入ると、地勢学上の要点である当地域は、幾度か戦場となり江戸時代になるまでの間、安定した社会性があったとはいいがたい。しかし、池田氏や勝尾寺などが箕面市内の村々に対して「禁制令」を発布しなければならないほど、民衆の力も増大していったといえる。

江戸時代に入ると、各種の政策によって、この地において人々の生活は安定的に営まれたが、すべてにおいて固定化され大きく変貌するのは明治になってからである。

なかでも特筆すべきは瀬川半町駅宿である。残念ながら、地理的要因がそろわず他の宿駅の繁栄には及ぶべくもなかった。そのため、駅所役務は瀬川村だけでは負担しきれず。半町村も経営に参画し、立会駅所となったが、両村にとっては過重な負担となっていたようである。

第２節　調査の趣意および手法について

民俗とは「ある地域に生きる人々の中で何世代にもわたって伝えられてきた生活の仕方」といえ、その多くが無意識、無批判的に繰り返されてきた点に特徴がある。日本各地でそうした民俗の消失、変貌が叫ばれて久しい。これらは近代化とか都市化といった地域の発展の過程で生じるもう一つの側面といえよう。箕面市においても早くは阪急電車の開通に始まり、大阪万国博覧会前後から現在に続く発展の中で、旧来の農村風景は変貌を遂げてきた。農地の減少と都市生活の浸透によって、そこに生きる人々の生活も大きく様変わりし、民俗行事の中には消滅したものや、簡略化されてしまったものも少なくない。民俗行事はそれ自体が次世代への文化の伝承の場として機能していることを考えれば、箕面における近代化以前における人々の暮らしぶりの大半が、もはや古老の記憶の中にしか残されていないのかもしれない。

本報告書は古老達の記憶と調査時点で存在の確認できた民俗文化を記録・保存することで近代化以前から今日までの箕面の一般庶民の暮らしぶりを知る一助となること、また将来こうした行事復活の際の参考資料となることを目的として作成した。平成１２年度は市の東部（如意谷・坊島・稲以東）を対象として調査および報告をおこなった。なお平成１３年度には西部（平尾・西小路・牧落以西）と止々呂美地区を対象として同様の調査、報告を実施する予定である。

調査は上記の目的に基づき、各地区の特色が現れやすい年中行事を調査の中心に据えて各地区の古老からの聞き取り方式でおこなった。まず調査地域における年中行事の実態を把握するために平成１２年３月から約１か月間の予備調査を実施し、この結果をもとに本調査で使用する年中行事調査項目を作成した。予備調査は箕面市シルバー人材派遣センターの協力によって同センターに登録されている方々と調査地の古老からの聞き取りを並行しておこなった。

４月からの本調査は各行政地区ごとに調査員をおき、年中行事調査項目に基づく古老からの聞き取りを中心におこなった。本調査は９月いっぱいを目途とし、その後は調査資料の整理を経て報告書作成へと移った。なお、９月以降も行事の取材や補助調査を重ねて資料の補完に努めた。報告書は地区ごとに１、地区の概観　２、年中行事　３、その他の民俗からなり、年中行事に関してはあらかじめ全地区共通の記述項目（別記参照）を設けた。地区によっては項目に該当する行事や習慣が確認ができなかったり、逆に項目以外の行事に出会うこともあった。そうした場合は項目の追加・削除が適宜なされている。また、調査の過程で年中行事と関わりの薄い事柄についても聞く機会がたびたびあったので、それらも可能な限り「その他の民俗」として記述することとした。

おもな報告書記述項目

（１）正月の準備

門松、注連飾り、鏡餅、大掃除、大晦日の晩

（２）正月行事

若水、雑煮、初詣、お年玉、ハツシゴト、フクアカシ、正月七日、鏡開き、トンド、ヨウネン講、ヤブイリ

（３）春から夏の行事

節分、初午、寒施行、節句（3 月）、彼岸、メンギョ、ヨウカビ、牛回し、節句（5 月）、サナブリ、夏越の祓い、ハゲショウ、七夕、龍安寺の護摩焚き

（４）盆行事

墓掃除、施餓鬼、先祖迎え、供え物、新仏、先祖送り、ヤブイリ、盆踊り、地蔵盆、マンドロ

（５）秋から冬の行事

月見、彼岸、十夜、秋祭り、亥の子、誓文払い、冬至

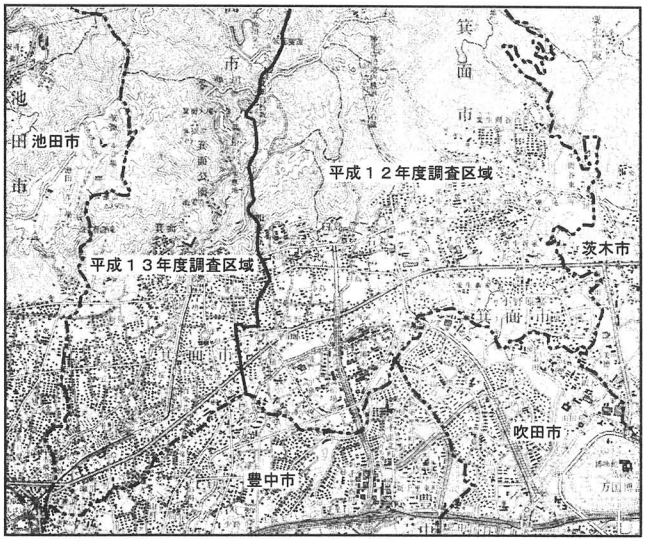


図 2　調査対象地区

第２章　旧萱野地区の詳細

第１節　稲地区

１．地区の概要

概要　現在の稲の集落は、西国街道沿いにあり、西稲と東稲とが入り組んでいる。

この地域は、中世には萱野郷に含まれ、この「イナ」という地名は応永11年（1404）12月3日の如法経奉加帳（『勝尾寺文書』）に「一品　イナ臼井殿」とみえることからも、この頃から使用されていたと考えられる。また、近世初頭までは一村であったが、その後、寛永―正保（1624―48）ころに村切りが行われ、西稲村と東稲村とに別れたと考えられている。

西稲村の南部は千里丘陵の北端部にあたり、千里川が西流、中央部を西国街道が走っている。名称の初見は、正保4年（1647）7月の『水論済口証文』（「四大字水利組合文書」）に「かやの西いな村」とみえ、寛永―正保期（1624―48）の『摂津国高帳』には「西伊奈村」が記されている。享和3年（1803）には、戸数は32であった（村明細書上帳『稲田家文書』）。現在は再び東稲村と一村にまとまっている。

東稲村は西稲村の東側にあり、千里川が南西流し、村のほぼ中央を西国街道が東西に走る。村切りが行われるまでは、稲村として一村であったため変遷は西稲村とほぼ同じである。

この稲地区を流れている千里川は洪水などのため、その流れが大きく変わり、以前とは景観が大きく変わっているという。

また、この地域には、昔からの伝わるものも多く残されている。稲2丁目2―41には13体ほどのお地蔵さんが祭られている。この場所は、以前は「ウマヅカ」と呼ばれていたという。由来は、かつて伊丹城で飼われていた馬が、歳をとったためこの辺りに預けられたことによるという。これ以上の詳しい話は残されていないが、この辺りに伊丹城に縁の深い人がいたという話である。また、河童についての話も残されている。畑でキュウリを作り、そのキュウリに子どもの名前を書いて、川のほとりにあった楠に吊し、河童が足を引っ張らないように祈願したという。千里川には水難事故が多かったのであろう。

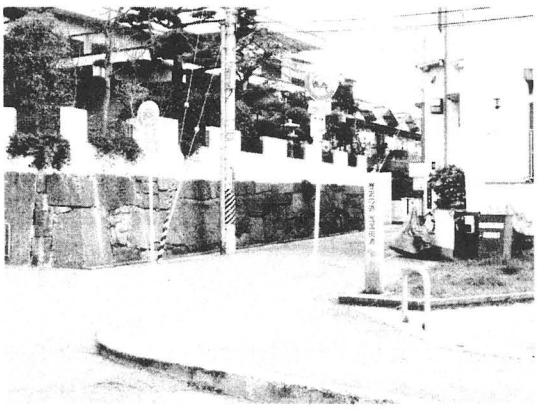


写真2　西国街道と稲の集落

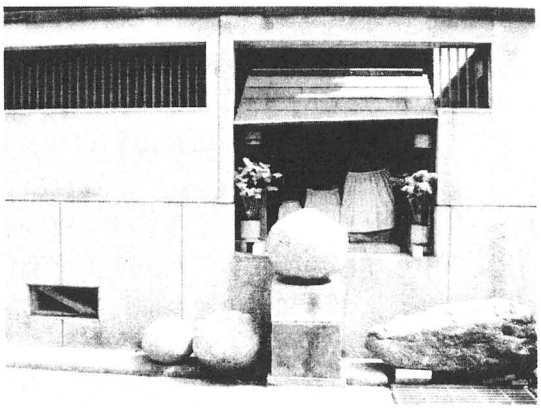


写真3　屋敷脇の地蔵

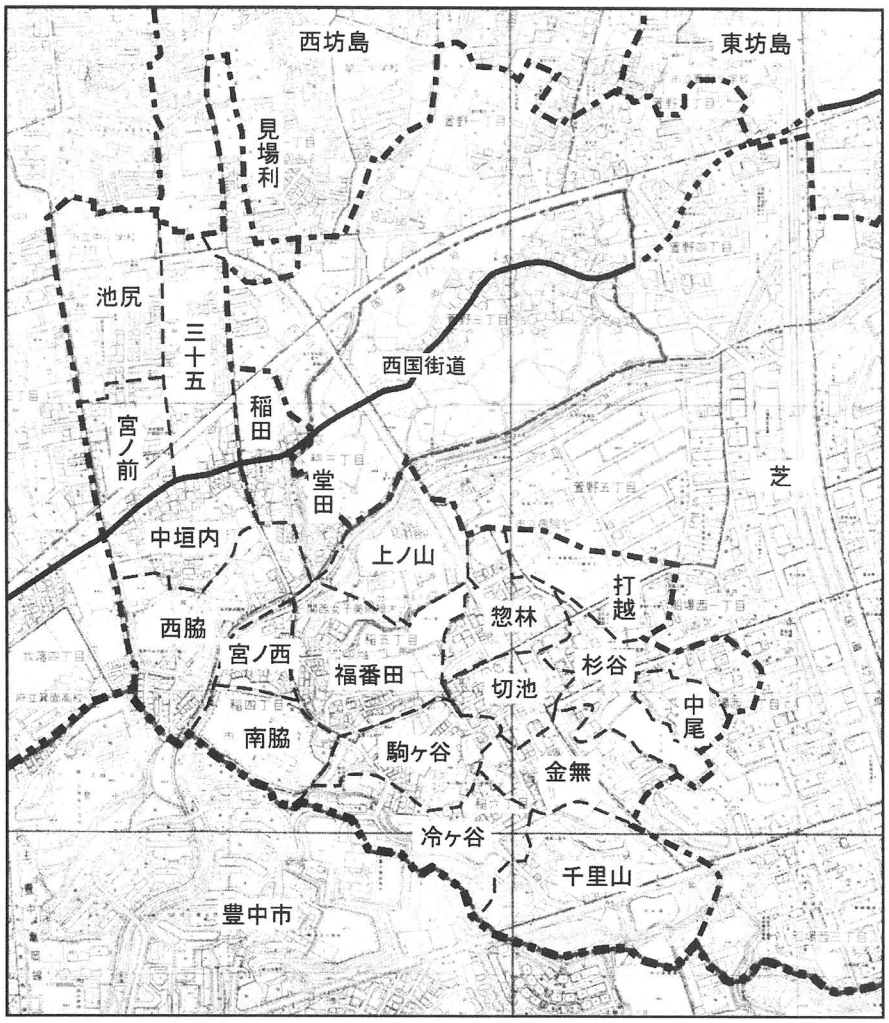


図3　稲旧字名

自治会　現在は稲自治会のもとに、25組の隣組にわかれ、ひとつの組が約30軒程度にまとまっている。戦時中には、この隣組は7組あったといわれている。

水利　稲地区は、農業を営んでおられる家が多かったため、水利の問題は重要であった。この地区には、「ミズバン」と呼ばれる人が置かれていた。このミズバンの人は、夜などに水が盗まれることがないように番をしたという。また、池の端に土管を埋め、その土管に蓋をして勝手に水を引くことができないようにと工夫もされていた。

かつて、水利組合には、田300坪（1反）につき、お米で2升、あるいは3升を支払っていた。その後、お金で支払うようになったという。ただ、この水利組合に支払う金額は、農家の人々にとっては楽な金額ではなかったという。

現在の中小学校の所にあった、イナダ池が灌漑用の池であり、夏至の前後になるとその年の雨の具合によって池の堰を開けて田んぼに水をひいた。

また、自治会の管理のもとに、「消防田」と呼ばれる消防団に属する共有の田が残っている。現在も中小学校の北側に一部残っている。まとまったお金が必要な時に売り払っていたという。

神社　この辺りの神社は為那都比古神社に統合されたため、現存する神社は1つだけである。

神社（西稲）　西稲村には、現ライフプラザ（ショッピングセンター）の場所にお宮があった。名称などは不明であるが、為那都比古神社に統合された時に、この宮の所有していた御輿や、御神楽の道具などはどこかに埋められたという話が残っているが、詳細は不明である。

稲二丁目4のあたりにある個人所有の神社

名前は現在不明。「シラヒゲ（白髭？）大明神」（木曽の御嶽山に詣っていたことがあるという）をお祭りしていたという。社も多少残っているが、大正末期、もしくは昭和のはじめあたりに再建されたものであると言われている。現存はしないが、木製の鳥居があった。元禄15年の碑の入った灯籠があるため、そのころから存在している神社であると思われる。この神社を所有しているお宅の方（女性）がかつて、巫女のようなことをしていて、毎月3日を神様の日であるとして拝みにいっていたという。3日以外にも頼まれれば拝みにいき、祈祷などを行っていたという。このお宮には地蔵も数体祭られているが、これらは開墾した時などに出てきたもので、特に由来などはわかっていないという。

写真4　稲二丁目の神社跡

このお宮には、白栄講（はくえいこう）という、講も存在していたというが、詳細は明らかではない。

(村明細書上帳『稲田家文書』によれば、西稲村には稲荷社、弁財天社、こうとう殿と呼ばれる小祠があったことが記されている。これらのお宮がどれにあたるのかは、不明である。)

神社（東稲）　東稲村には、「ゴウシンさん」と呼ばれていたお宮があり、稲の人々には「東のお宮さん」として親しまれ、大変栄えていたというが、詳細は不明である。

(『摂津名所図絵』によれば東稲村には天照皇太神社の存在が認められるため、これにあたるのではないかと考えられる。)

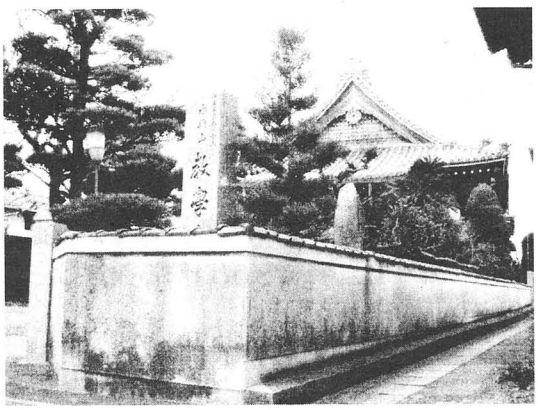


写真5　教学寺

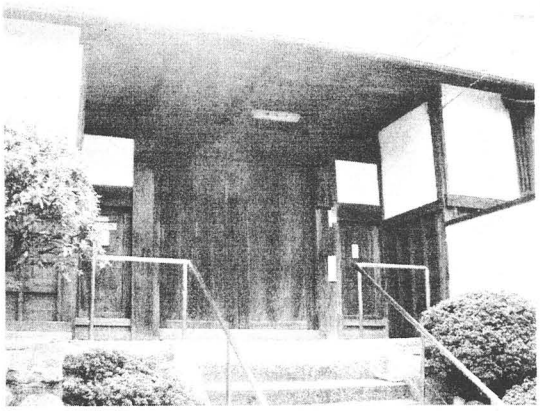


写真6　勝満寺

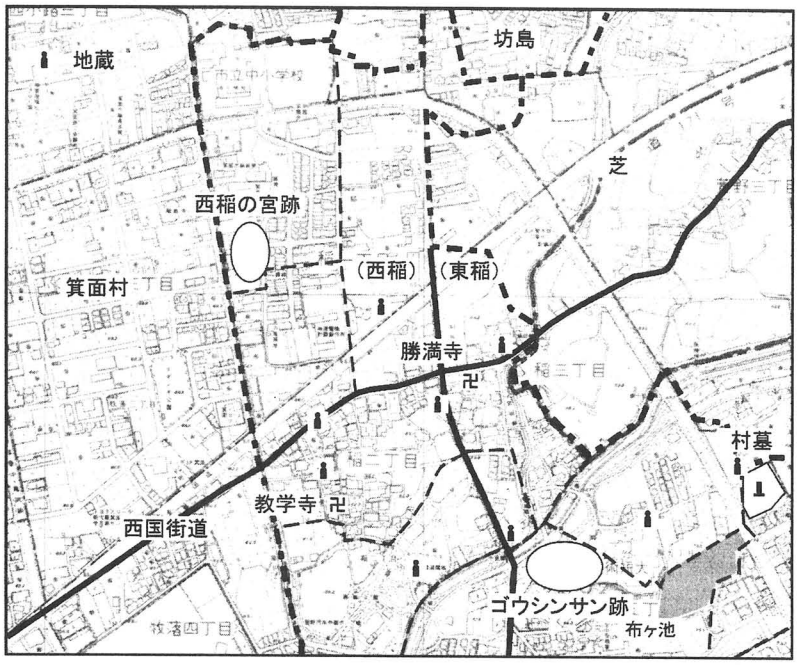


図4　稲集落周辺

寺院　西稲村には、浄土真宗本願寺派教学寺が、東稲村には浄土真宗本願寺派勝満寺がある。古くから稲に居住する家は、それぞれの檀家になっている。

２．年中行事

（１）正月の準備

正月の準備は、ほぼ28日ごろから始められる。この日に餅つきをすることが多い。
また、稲地区では門松、鏡餅を飾り、注連飾りは飾らない。

門松　門松は、雄松の松の枝を切ったものに竹、梅を加えて紙を巻き、水引をかけて門に掛けた。戦後は、松を守るという運動が起こって門松を作らなくなった。すべての材料は山から採ってきた。竹は教学寺に大きな笹があったので、そこからいただいてくることもあった。

鏡餅　餅つきは28日に各家の主人が行う。「苦」(9) のつく日は避けるのが通常であった。また、30日は「せきすぎる」といい、されなかった。餅は臼でつき、量は一俵程度であった。

鏡餅はみかん、干し柿に昆布を垂らして台座を作った。それらを床の間、三宝、神棚、ノエ（田、山）の神様、おくどさん、荒神さんなどに飾った。特に三宝に飾る鏡餅は三段重ねにした。稀に、仏壇に供えることもある。

（２）正月行事

雑煮　三が日の間雑煮を食べ続けることが通常であった。餅は丸餅を用いた。味付けは味噌味と、すましとあり、日によって食べ分けていた。どの家も一日は味噌味。自家製の白味噌を使った。具は、大根・人参・牛蒡・小芋・油揚げであった。具材はすべて角が立たないようにと丸く切られた。また、すましの雑煮は焼き雑煮がほとんどであった。

また、雑煮は「まめになるように」という願いをこめ、豆殻で火をおこしていた。本来は家の主人、男性が作るものであったが、実際は各家の主婦が作っていることが多い。

初詣　為那都比古神社へ行く。以前は為那都比古神社で相撲が行われ店もでて、賑やかであったという。

お年玉　お金をもらうというよりも、外出着の着物、履き物など実用的なものをもらっていた。

レイマイリ　「レイマイリ」「オレイマイリ」といい、正月二日の日に行われる。二日の日は朝風呂にはいり、田んぼに水を引く場所を鍬で三回たたいて手を合わせる。その次の日から通常通り仕事を始める。この日が初仕事ということになる。

正月七日　一月七日を「七日正月」と呼び、七草粥をつくって食べる。実際に七種類を入れることはあまりなく、水菜など青いものを入れた。粥といっても、実際には米だけではなく餅を入れることもあった。すましの粥が多いが、味噌味の粥の家もあった。

鏡開き　特に鏡開きの日としては定まっておらず、各家により異なっていた。多くの家は正月三が日が終わると開いていた。開いた餅は雑煮に入れたりし、毎日の食事として食べていた。子どものおやつとしても用いられた。

トンド　稲地区では、西稲と東稲と別々に行われていた。

東稲では、15日に行う。昔あったトンド場は、子供の頃には既になくなっていた。大きな柿の木の下がトンド場になっていた。無くなってからは各家の庭で行っていた様子。このトンドの火で餅をやくと風邪をひかないといい、竹にさして黒くなった餅を叩いて、ちぎって食べた。

また、西稲では、13日に行われ、トンド場は千里橋の近くの田（現ペプチド・元ゴウシンさんと呼ばれる神社のあった辺り。話者によって多少場所は異なるが、おおよそこの辺りであったということ）で行われており「トンドの田」と呼ばれていた。トンドの火を持って帰り、お粥を炊いたという。その後、トンド場でではなく各家庭の庭で焼いていたが、やがてそれもしなくなってしまった。

西稲のトンド場は場所を特定することができたが、東稲のトンド場は特定することがで

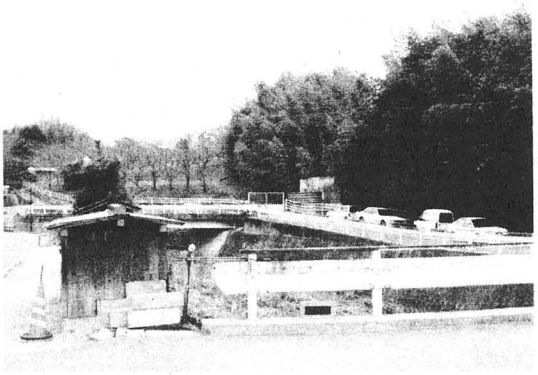


写真7　西稲のトンド場跡

きない。

ヨウネン講　小正月の前日である14日の日に、女性だけで夜通し仕事をするヨウネン講があった。夜に納屋でコンニャクをたいて、それを食べて仕事をした。針仕事や縄ないが主な仕事であり、それぞれに仕事をした。西稲では現在も続けられている。

小正月　正月15日に、小豆粥を作る。この小豆粥はお米でつくるが、お餅も入れる。

ヤブイリ　16日に実家に帰ることができ、「ヤブイリ」と呼んだ。実家に帰っている期間は決まっていなかったが、多くて奉公人は二日程度、嫁は三日程度であった。

（３）春から夏の行事

節分　2月3日に行われる。農家のお宅が多く、食べ物となる大豆を撒いたりしなかった。また、豆まきをするお宅では、二月三日に「鬼は外、福は内」のかけ声と共に大豆を撒いた。この大豆は焙烙（ホウラクと呼ぶ）を使って炒った。子どもが豆を撒き、年の数に一つ足した数の豆を食べ、この日を「トシコシ」とよんだ。

実際にされていた家は少ないが、このトシコシの日に、「メツコハナツコ」と呼ばれていた葉のついた柊の枝にイワシの頭を飾り、家中の入り口に立てた。また、イワシを食べる習慣のある家も少ないがある。

寒施行　西稲で行われていた行事で「カンセンギョ」と呼ばれる。寒の時期にお餅（寒の餅）をついて、おかきやあられを作りおやつにした。昭和35年ぐらいまで行われていた。「寒」の間で、田に氷の張っている時期のことであったという。この時に赤御飯（あかごはん、赤飯とは異なり、普通の御飯に小豆を炊いて塩を加えて作ったもの）を炊く。この赤御飯と油揚げをもって、普段から狐や狸のいるといわれる場所（人によっては狐塚と呼ぶ）に配った。この配る作業には「オガミヤ」というおばあさんがいて、若い男の人がこのオガミヤについて行った。このオガミヤはかなり年輩の方であった。オガミヤと一緒に1町ほど行くと笹藪になり、この笹藪を走り抜けていった。狐や狸のいる場所に着くと、オガミヤのおばあさんが榊を振ってトランス（狐が乗り移った？）状態になる。そうすると若い者がオガミヤのおばあさんの肩をたたき、「なんぼあげさしてもらったらええか？」と尋ねる。その問いに対して、オガミヤさんが「そうやの、ワシは子どもが多いさかい、〇〇くれ」などと答えるので、いわれた分の赤御飯のおにぎりを大きな竹の皮を敷いて置く。15個前後の数をいわれることが多かったという。供え終わってオガミヤさんの家に帰ると、狐がお礼に来るという。この人が「えらい道やさかいに、遠いさかいに走って礼にきた」「よくやってくれた」などといった調子でおばあさんが狐にかわって礼を言った。この時に狐がどこから来たのかということを告げたという。

また、このカンセンギョが終わると田に礼をするといって、小さなおにぎりを3つずつ供え、帰ってきてから近所の人たちと一緒に巻きずしを食べたという話も残っている。

節句　4月3日に行う。2月の初めころに飾りはじめ、終わったらすぐ（4月3日中）に片

づけた。早く片づけることで、縁づきが早くなると言われていた。
　女の子が初めて産まれた年の雛祭りには、ひなあられなどを近所の子どもに配ったという。

彼岸　お彼岸にはお墓参りをした。この時にぼた餅を作り、それを食べた。

メンギョ　「メンギョ」「ムメンギョ」ともいい、4月15日ごろにお寿司を一段、バラ寿司を一段、おかずを一段に詰めたお重を持って、近くの山に出掛けていった。おかずは卵焼きや筍、かまぼこ、ちくわなどの御馳走だった。東稲は市立病院付近にあった桃畑が、西稲は豊島高校の辺りがメンギョ山になっていたため山へ遊びにでかけた。野遊び、山登りというよりもお花見といったようなものであった。時には山菜なども摘んだ。気候の良い年には、男の子は池で泳いだりしていた。雨天の時は、お寺や自治会館などでお弁当を食べた。

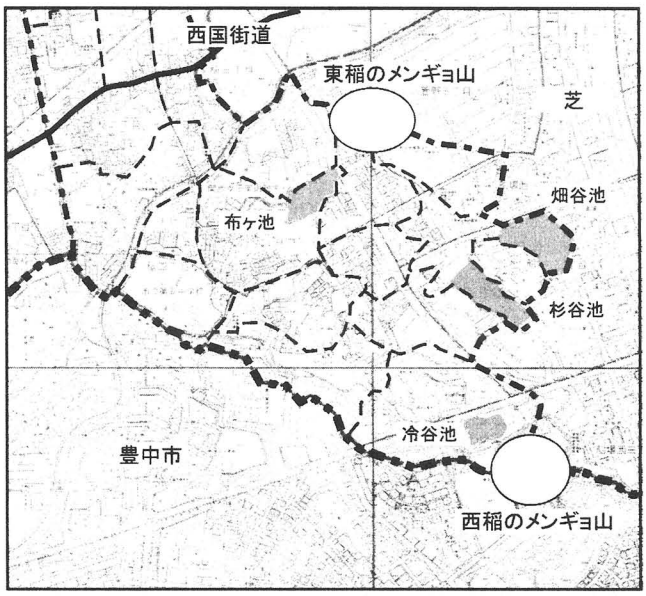


図5　稲のメンギョ山

ウシのヨウジョウ　時期は不明であるが、イナダ池の堤に筋（線）をひいて、場所を区切りそこへ牛を連れて行って草を食べさせた。場所によっては草の善し悪しがあったため、くじ引きなどで誰がどの場所にするのかを決めていた。これらの場所では、一旦草を刈り、改めて芽を出させた柔らかい二番草を牛に食べさせ、爪も切ったと伝えられている。

端午の節句　5月5日には、ちまきをつくり鯉のぼりを立てた。鎧や兜はなかった。竹竿ではなく、ヒノキで家の角に立てた。また、菖蒲と蓬、あるいは菖蒲だけをくくって屋根に放り上げたり、頭に飾ったりした。男の子ははちまきに、女の子はピンでとめたという。これらの菖蒲や蓬は山に採りにでかけた。
　また、その夜乾燥した菖蒲をお風呂に入れると病気をしないといわれていた。この菖蒲湯は「薬湯」とも呼んだ。また、この薬湯はしないお宅もあった。

タネオトシ　5月2日ごろ行われ、籾種を落として、苗代をする。この日を「ノシロ」と呼び、日が長く気温も上がって作業に適した時期であった。八十八夜の種落としともいった。

ミゾサライ　6月1日以降にはじまる田植えに備えて行われた。「ミゾサライ」と呼び、田の溝が埋まってしまっていたり、草が生えているのをきれいに掃除した。

サナブリ　田植えのあとのお休みを「サナブリ」と呼んだ。田植えが終わると「アルキさん」と呼ばれる人が触れて回った。このサナブリの日は区長さんが決め、全員がお休みの日であった。皆で集まることはなく、家でご馳走を食べてお休みした。この時のご馳走は白御飯に生節が多かった。

ハゲショウ　7月2日ごろに仕事を一日休むことがあり、この日を「ハゲ」とよんだ。この日に「ハラミ団子」を食べたところもある。ハラミ団子とは、あんに空豆を炒り、炒り終わったら水につけ、それを炊いて作る。これを小麦の粉を練って作った皮で包んだもの。

このお休みの明くる日から田の草取りがはじまり、7月いっぱいかかった。草取りは、1度目（1番草）には田んぼの縦方向に、2回目（2番草）には横方向に、3回目には再び縦方向に、4回目には横方向に、と交互に草取りをしていった。（全部で6回程度）このとき「タテ」と呼ばれる専用の道具を使っていたという。

七夕　子どもがいるお宅はやっていたようである。現在の小学校のあたりに竹藪があったので、そこから竹を切って持ってきていた。片づけはどうしていたのか記憶にない。

瀧安寺の護摩焚き　瀧安寺の大護摩に参加した。この日は仕事は皆休みになっていた。このとき灰をいただいて帰り、虫除けの祈願に竹の皮に包んで竹の先を割って、そこに灰を包んだ皮を挟み田にさして立てた。虫除けのまじないであった。これは戦後、農薬が一般的になるまで続けられていた。

バクロさん　農閑期になると、牛が常には必要でなくなる。この頃に「ばくろさん」とよばれる人がくる。「たじま」からきていたと言われるが、どこの「たじま」であったのかは不明である。この「ばくろさん」と農繁期に使っていた成長した牛を、子牛と交換してもらう。このときには子牛であっても、翌年の農繁期には成長するため不自由はなかった。牛は長くても二年に一度は交換していた。時には、牛と一緒にお金のやりとりもあった。

（４）盆行事

8月の13日～16日、家によっては15日までを盆と捉えられている。16日には地獄の釜が開く日であると言われている。

７日盆　8月7日を七日盆といい、この日に盆行事に向けて墓掃除に出掛けていった。

供え物　自分たちの畑で採れたものをお供えする程度である。稲地区は浄土真宗の家が多いため、特に決まり事はないという。飾り物も特になし。供えるものは14,15日にお仏壇に供える。供物はお下げして、皆でいただく。

盆の食事　何日に何を食べるというきまりはないが、ご馳走（白御飯）を食べることが

できた。普段は麦御飯であった。この時に限られたことではないが、一膳飯は仏様のたべる量であったため、一口でもいいから御飯はお代わりするよう言われた。

新仏　「ニイボン」と呼び、その年には例年よりも何事も控えめにするように気をつける。

盆踊り　浄瑠璃踊りを踊っていたという。その時の村長（区長）の家の庭で行い、男の人も女の人も一緒に参加した。

もともとは戦前にやっていたものを、戦後再開した。炭坑節などが流行していた頃に再開された。

地蔵盆　御詠歌をあげる日であった印象が強いと云う。

稲地区の地蔵というのは、池や川から出てきたものであるため、昔からの行事というものではなかった。地蔵もたくさんあり、どこの地蔵のところで行っていたかは定かではないが（キタムキジゾウの辺りか)、子どもがお参りをし、菓子をもらって帰ってきていた。

マンドロ　西稲と東稲と別々で行っていた。

東稲村では、14,15日に布ケ池の堤のところで行った。実際に行うのは14,15日の両日であるが、7日の日にその準備として松明のための松の枝や根を採ってくる。根は「コエマツ」といい良く肥えた松の根が、油の塊で燃料としては理想的なものだった。これは事前に切っておくと芯だけが残り、根が腐ってくる。それをスコップで掘って取り出して切断する。これを松明にくくりつけて燃やすと松の油だけが燃え続けるために長時間使うことができた。この「コエマツ」は必ずしも採れるわけではなかったので、無いときには普通に燃料として使っている薪を使用した。

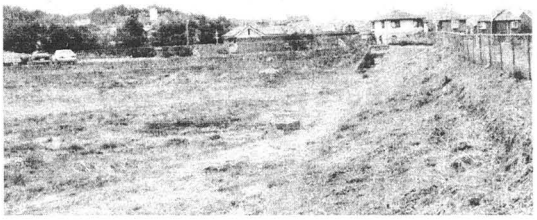


写真8　布ヶ池の現況

マンドロでは火をつけるが、平面からでは見えにくい。そのため斜面になっている堤防の腹の所に穴を縦に三段掘って火をつけた。人は竹の松明をもって歩いて、見る人にみえるように振ったりまわしたりした。昔は視界を遮断するものがなかったので、見通しがきいた。昔はほかの村のマンドロが見えたため、火をつけるときはほかの村が始めていたら、始めるといったものだった。

マンドロには、大きな篝火も焚いた。それを作るために、農家をまわって麦藁をもらってくる。この麦藁をもらうときに一軒につき、5銭から10銭のお小遣いをもらい、必要なものやお菓子を買った。竹は近くの竹藪から採ってきた。堤の上の広いところに竹を立てて、その上に麦藁を積んでトンドの時の櫓のようなものを作り、火をつける。この時、櫓の腹の部分に掘っておいた穴に火をつけ、おおきな篝火に火をつける。最後に人のもっている松明に火をつける。当日の午前中はその準備をし、マンドロは午後からはじまる。

また、西稲村では、現在は無くなってしまっているが、イナガ池（イナダ池）の堤のと

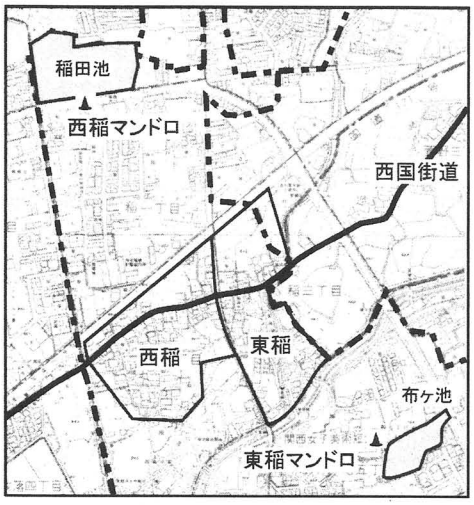


図6　稲のマンドロの場所

ころで行っていた。参加することができたのは男の子だけであった。材料などは、東稲と同じく、松の根を掘って準備をした。開始時間は特に決まっておらず、晩ご飯を食べてから出掛けていったという。お盆の間に二回やったという。その他詳細は東稲と同様であった。

東稲の方が戸数が多かったため、このマンドロの規模も東稲の方が大きかったという。

無縁仏　お盆だから特別に無縁仏に何かするということはない。自分の家のお墓のお参りのついでにお参りをする。お花も線香も少し多めに持参し、無縁仏にも供えてくる。

ヤブイリ　8月16日は「ヤブイリ」で他の地域から嫁にきた人は、実家に帰ったという。

（５）秋から冬の行事

月見　十五夜にお月見をする。里芋や柿を供えた。団子を供えると、近所の子どもが先の割れた竹で盗みにきた。里芋は炊いたもので、一年は12ヶ月であるから12個供えた。団子の数は特に決められていなかった。

栗節句（１０月９日）　西稲村では、かつて10月9日には栗を必ず炊いて、栗節句をした。この他に特に何かをするということはないが、栗節句は必ずしたという話が残っている。

豆名月（１０月１３日）　西稲村では、かつて10月13日に豆名月というものをした。翌日の14日が秋祭りであって、その宵にはお月様に豆を供えたという話が残っている。

彼岸　秋のお彼岸にも、お墓参りをするだけであり、特に供え物や団子などは準備しなかった。家によってはぼた餅を作る家もあった。

秋祭り　10月14日、為那都比古神社のお祭りに参加する。ただし、距離があったため疎遠になっていた。全く参加しないという家もある。以前、稲地区に御神楽があったという話を聞いたが、実際に見た人はいない。そのため、どの時期に行われていたのかは不明。

為那都比古神社のお祭りでは、相撲がされ、出店がでていた。

お祭りのときには、ご馳走を食べた。時期的に、マツタケを食べたりもした。

カマオサメ　11月の初旬から、来年の田植えにむけて田の草取りをした。この草取りが終わると「カマオサメ」（鎌納め）をした。農作業の終わりに鎌に御飯を供えた。この

時に供え物をしたのは鎌だけであったという。

亥の子　いつ行うのは日は決まっていないが、当日は晩御飯を食べてから回り始めるのが慣習だった。この時使われる道具には特に名前はなく、「亥の子をつく」と呼び、子ども同士が集まって作ったり、親が作ったりした。地面を叩いたときに良い音が出るように、芯（竹や木などのクズ）を通して硬く藁を結んで作る。亥の子をつきに各家を回る順番は決まっておらず、新婚さんの家からまわるようにしていた。亥の子の後、使用した道具は特に意識されることもなく燃やしていた。ほかには、屋根にあげる家もある。

各家をまわってお菓子やお金（5銭から10銭）をもらった。新婚の家は、それよりも多くくれた。

亥の子をつきにまわるときには

♪亥の子　亥の子　亥の子の晩に　重箱ひろた（て）　開けてみれば　重兵衛さんのきんたま

この後に続いて、おじいさんおばあさんのいる家なら

♪おじいさんとおばあさんと　いわいましょ　もひとつまけとけ　もひとつまけとけ

と続き、新婚さんの家なら

♪嫁さんと婿さんと　いわいましょ　もひとつまけとけ　もひとつまけとけ

という言葉が続く。

また、この亥の子の日にぼた餅を作る。この時に限っての特別な作り方、呼び方などはない。

亥の子が終わると、炬燵の準備をした。

また、亥の子の日に中山さんにお参りした。この日ススキの穂で小さな箒を作って、お地蔵さんを掃除した。中山さんは安産の神様で、子どもの神様なので、亥の子の日には詣るものだと思っていた。

誓文払い　池田の誓文払いに参加した。12月の1日から5日までやっていたので、その間に出掛けていった。

冬至　冬至の日にはカボチャを食べた。お風呂には柚子をいれて柚子風呂に入った。

ホウオン講　12月になると、ホウオン講として檀家が皆で一軒一軒まわって、お参りをした。その時に一年の寺勘定をした。

アゼヤキ　農作業の終わった冬の時期に、「アゼヤキ」といって田を焼いていた。焼いた後良い草が生える上、虫も死ぬので行っていたという。消防署から注意されるようになったため、行われなくなった。

３．その他の民俗

講　稲地区には伊勢講が2月11日に行われていた。かつて、この伊勢講は稲の中に4～5つほど存在したという。この伊勢講はたいへん裕福で、皆お金を預けてはその利子を受け

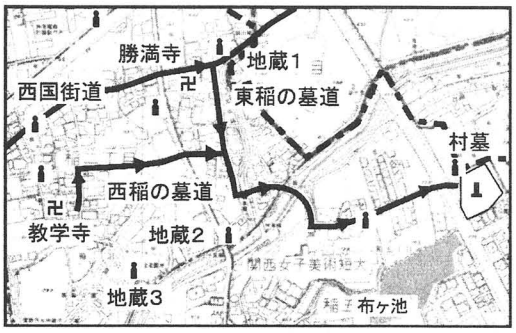


図7　稲の墓道

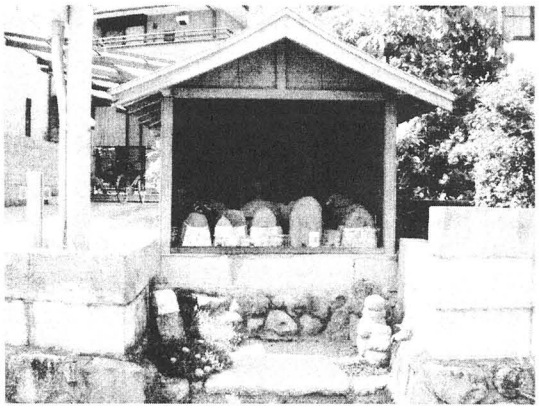


写真9　地蔵１

写真10　地蔵２

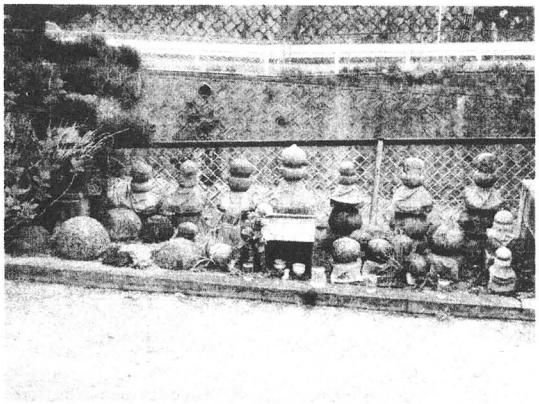


写真11　地蔵３

取っていたという。この伊勢講の名残で頼母子講も成立したのではないかと言われている。頼母子講は昭和30年ごろまで存在したという。

葬送　稲の墓地は布が池の西側、現市民病院の東側に存在する。

稲地区では土葬は昭和38年ごろまで行われていた。土葬の際は穴を水が湧くほどの深さまで掘った。その穴に棺をいれるが、獣よけのために竹の上を括って巻いた「マングロ」とよばれるものを作っていたという。

葬送の際の、墓道は出発点は各家であったが、多くの場合は勝満寺、教学寺の前を通って、墓場までいったという。

地蔵　稲地区には、道の角にたくさんの地蔵が祀られている。それぞれの地蔵に特に由来はなく、開墾や、川の工事などのときに引き上げられたものであるという。

第２節　萱野地区

１．地区の概要

概要　箕面市のほぼ中央に位置する萱野地区は、中世の萱野郷を淵源とした萱野十ヶ村の内の芝村として近世を経て、明治22年以降は大字芝となった。現在の萱野への名称変更は昭和60年におこなわれている。地区内には西国街道が横貫し、その周辺部と国道171号線の北側に古くからの集落が展開している。また、萱野は赤穂浪士の萱野三平の出身地であり、街道沿いの旧家が萱野三平記念館として保存されている。

萱野でも箕面市の他の地区と同様、高度経済成長期以降に開発の手が加えられ、地区の景観は大きく変わってきている。民俗行事の視点からこの開発を眺めてみると、萱野の人々にとってのヤマであった街道沿いの千里丘陵地の大規模な開発では、後で触れるメンギョやマンドロといった行事が消失、変貌の道を辿っている。これは、単にそれらの行事の消失や変貌を意味しているのではなく、行事やそれが行われる場所に人々が込めた意味や共通のイメージの消失や変貌である点に注意しなくてはならない。

なお、萱野地区は前記の、街道沿いと国道171号線の北側とでは年中行事が若干異なる。その違いについて報告書中では、「街道沿い」と「北地区」でそれぞれを書き分けている。また、そうした違いを明記していない場合は差異が認められなかったことを示している。

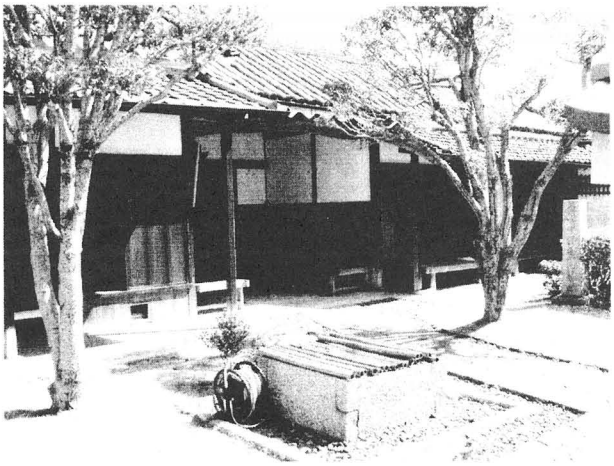


写真12　萱野三平邸

写真13　萱野三平の墓

自治会　北地区は1つの自治会でまとまっている。

街道沿いは現在6つの組に分かれているが、以前はニシガイチ、ヒガシガイチ、ミナミガイチというカイチ（垣内）単位に分かれていたという。

クラブ　地区では何か集まりごとがある時はここに集まる。北地区では昔からトンド場の北側にあり、街道沿いでは以前は萱野三平邸の西側にあったが、今は善福寺の西側に移動している。

水利　萱野地区は農業用水のほとんどを周辺の池でまかなっている。普段は北地区が新池と当対池、街道沿いが曲り池と木戸池（埋め立てにより消失）の水を使う。水が不足したときには北地区が白島の五藤池や薩摩池、街道沿いが同じく白島の奥池の水を借りることになっている。

寺社　地区には現在3つの寺院があり、いずれも浄土真宗（本願寺派）である。このうち北地区は正願寺、街道沿いは善福寺と浄円寺が地区の檀那寺となっている。

２．年中行事

（１）正月の準備

北地区では20日を過ぎた頃から少しずつ買い揃えていく。コトハジメという言葉は聞かれない。

街道沿いでは27日頃から少しずつ始める。昔は忙しかったので、押し迫ってからでないと準備には取り掛かれなかった。

門松　北地区では昔は材料を山へ取りに行った。松は男右女左（オンミギメンヒダリ）といって門の右に雄松＝黒松を、左に雌松＝赤松に飾る。松は半紙を巻いて水引でくくる。街道沿いでは多くの家で鏡餅しか飾らないという。

注連飾り　北地区では作る人は家々によってまちまちである。藁は餅藁を使い、12月に入ったら藁の青いあいだに作っておくという家もあれば、20日頃に作るという家もある。飾るのは30日か大晦日が多い。御幣・橙・ユズリ葉・ウラジロを付ける。

鏡餅　餅は28日か30日に搗いた。29日は苦餅といって搗かない。家族総出で餅つきをする家が多い。鏡餅は仏様（仏壇）・玄関・床の間・ヘッツイサン（竈）などに供える。ヘッツイサンには清荒神の荒神さんが祭られている。一番大きなものは、檀那寺へお供えする。

大掃除　昔は8月の盆までに一斉に大掃除があった。年末は30日に煤払いなどの台所の掃除をした。

大晦日の晩　年越しそばを食べる。鰯を食べるという家もあった。

（２）正月行事

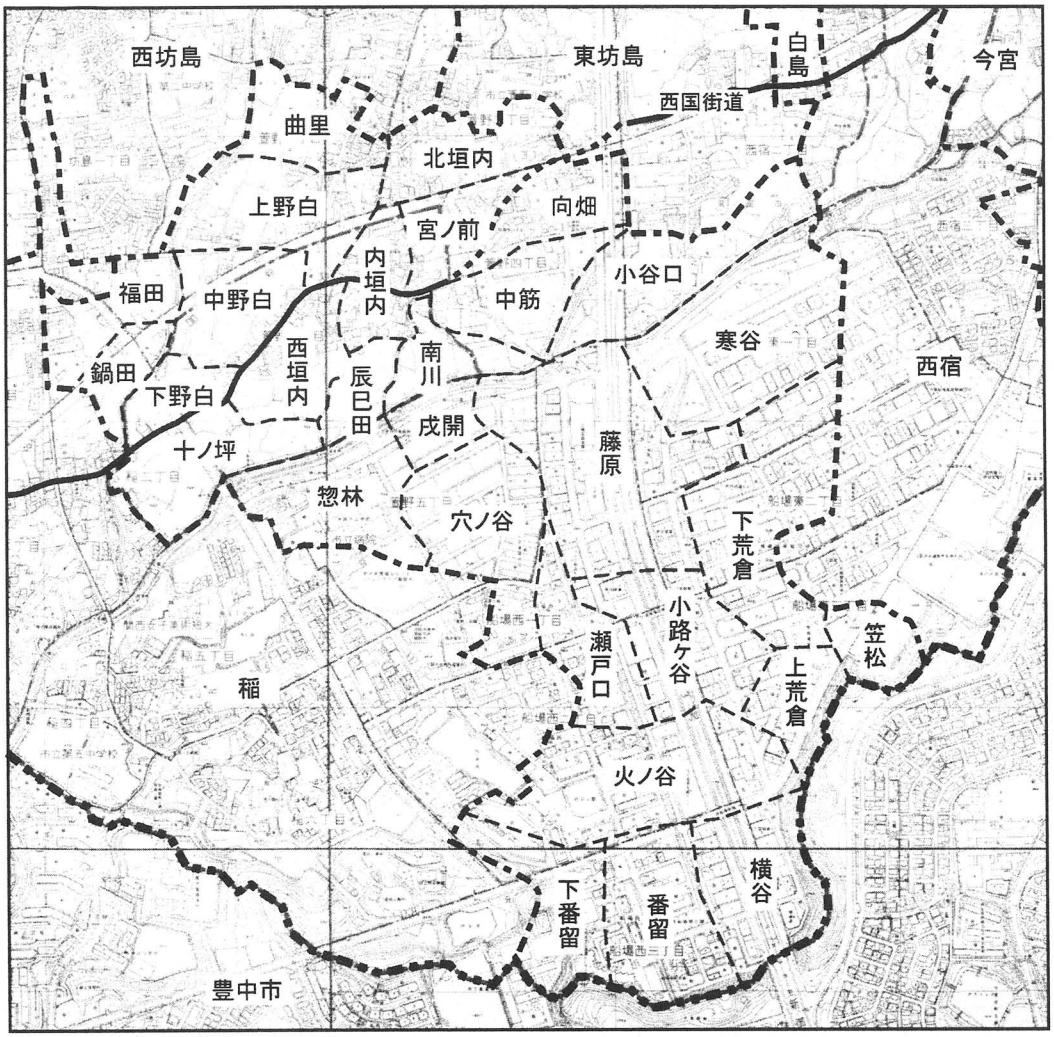


図8　萱野旧字名

北地区では正月の三日間は福が出ていってしまうので玄関を開けてはいけないと言われた。昔の家は縁側に戸袋があってそこは絶対に開けてはいけなかった。また妊婦さんがいる家では、年が明けて最初の訪問者と同じ性別の子供が産まれると言われた。

街道沿いでは正月の間は福が逃げるので箒で掃いてはいけないと言う。

若水　昔は初水といって元日の朝に自宅の井戸に水を汲みにいった。誰が汲みに行くかは特に決まっていなかったようだが、その日の雑煮を家の主人が作る家では主人が汲んでいた。汲んできた水は雑煮作りのほか、仏壇の花の水替えに使った。

雑煮　北地区では雑煮は3日間とも味付けは白味噌で具は薄揚げ・大根・人参・子芋・三つ葉の5品は必ず入れ、これに豆腐と餅を入れて7品とする家もある。具は物事が丸く収まるようにとすべて丸く切って入れる。雑煮は主に女性が作ったが、男性が作る家もあった。その場合も準備は前日の内に女性が済ませていたという。

街道沿いでも元日の雑煮は主人が作る家が多く、その場合も女性が前日に下ごしらえをしておいた。燃料には「1年まめに暮らせるように」と大豆のまめ殻を使う。味付けは1日、

2日がみそ味で3日はすましという家と1日と3日がみそ味で2日がすましにする家が確認できた。餅は丸餅で、すましの時には焼いて「焼き雑煮」にする。具はみそ味では大根・人参・牛蒡・小芋・油アゲはどこの家庭も入れ、ほかに豆腐を入れる家もある。具は「丸く収まるように」とすべて丸く切る。すましには水菜と焼き餅を入れる。

初詣　北地区では最初にお詣りするのは氏神の為那都比古神社が多い。ある家では、11時半頃にそばを食べて年が明けて一番にお詣りする。正願寺へは元旦の早朝にお詣りする。そのほかに墓にお詣りに行く家もある。街道沿いでも為那都比古神社と檀那寺である善福寺・浄円寺に詣る。

お年玉　70歳代の人はお小遣いをもらっていた人が多く、80歳代の人は暮れの誓文払いで正月用に着物や履き物を買ってもらったという。

ハツシゴト　北地区では以前、正月2日にレイマイリといって御神酒を持って田に出かけ、田に2・3回鍬を入れる習慣があった。街道沿いではハツシゴトと言い、肥料をまきに行き、少しだけ畑仕事をした。2日から畑仕事を始めることについては、たまってくるので放っておけなかったという人もいた。お店をしていた家では1月1日は店を開けると福が逃げるといって戸は閉めたままにしておいたが、2日目は開けた。この場合もハツシゴトといった。

正月七日　北地区ではナナクサ・七日正月と呼んだ。正月のご馳走づくしの体を休めるために水菜を入れた粥を食べた。これを七草粥と呼んだ。また、別の家では粥ではなく餅を入れ、すましの味付けで七草雑煮と呼ばれるものを食べた。七草を揃える必要はなかった。街道沿いでは七日正月とかナナクサガユと呼び、ナナクサガユを食べる。事前に鏡開きをしている家はナナクサガユに餅を入れる。七草は7種類入れるのではなく、畑で青菜を採ってきて入れる。

鏡開き　北地区では4日か5日にする家が多い。5日の寒の水に漬けるためとする家もある。どの家も餅があまり固くならないうちにおこなった。鏡開きの後の餅は焼いて食べたり、味噌汁や雑煮・ぜんざいに入れたりして食べる。御飯の代わりに食べた。また、カキモチにもする。以前は乾燥させてカンテキ（七輪）で焼いた。また、カキモチのために鏡餅とは別にエビ・海苔・黒豆・大豆などの入った餅をつき、それを薄く切って渇かして作る家もあった。

街道沿いでは6日か15日におこなう家が多い。ナナクサガユやトンドの日の小豆粥に入れ、雑煮・ぜんざい・焼き餅などにして食べる。なお、寺の鏡開きは6日頃おこなうという。

ヨウネン講　北地区では以前、14日はヨウネン講があり、未婚の女性たちの少女会と青年団がクラブに集まり、「夜明かしヨーネンコウ　明日はトーンド」と言って夜を明かした。また、この時「一年中蚊にくわれないように」と言ってこんにゃくを食べた。

トンド　北地区では15日のトンドは「ぶせん田」の横の窪地になっているところ（現在の萱野4丁目の交差点のあたり）で行われた。近所の竹薮から青竹を取ってきて高く組んで、各家が1束ずつ持ち寄った藁を合わせて火を付け、正月飾りや書き初めなどを焼いた。書き初めは灰が高く昇ったら、字が上手になるといわれた。

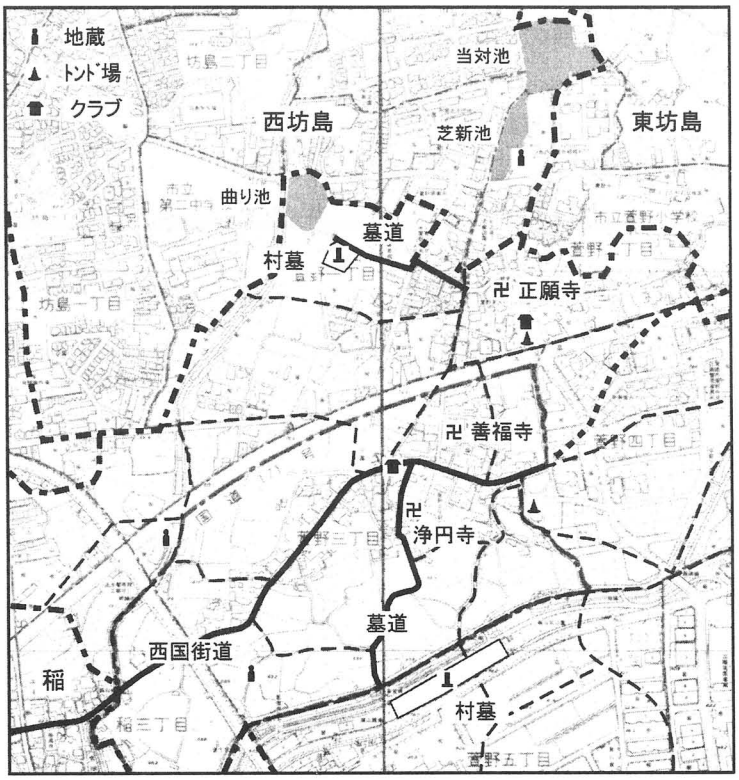


図9　萱野集落周辺図

また、竹の先を二つに割って、餅を刺して焼いて食べた。病気にならないといわれた。この餅は正月の餅があっても新しくついた。餅を食べた後の竹串は家に持ち帰り、蛇が入らないようにという意味を込めてスナギ（床の下）に入れた。トンドの後の灰は持って帰り、たんぼに撒いた。虫が付かないといわれた。この日には、小豆粥を作って食べた。米と一緒に鏡割りした餅を入れたり、作るときに豆殻を火にくべて炊いたりした。3食とも小豆粥を食べる家もある。今はクラブに各家が正月飾りを持ち寄って野焼きするようになっている。

街道沿いではトンド場で正月飾りや書き初めを焼いた。大きな竹を三角に組んで枝のところに藁を置いて火をつけた。餅を焼いたりもした。残った灰は特に持ち帰ったりはしなかった。この日は家で鏡開きした餅を入れた小豆粥を食べた。今は家々で正月飾りを処分している。

1月15日には両地区とも満20歳の男子は伊勢参りに出かけ、2月頃戻ってきた。戻ってきたときにはみんなでご馳走を作ってねぎらった。

ヤブイリ　北地区では姑がいる家の嫁は実家に帰った。街道沿いでは嫁は2、3日実家に帰った。また、奉公人のいた家でも彼らに着物とお土産を持たせて2、3日実家に帰した。

厄払い　北地区では1月19日に19歳の厄年の人が池田の尊鉢神社で餅まきをした。この餅はヤクモチという。

（３）春から夏の行事

寒餅　北地区では寒の水に餅米を漬けておき、2月4日頃の寒明けに寒餅をついて一年間のおやつにした。餅には青海苔・エビ・黒大豆などを入れた。餅はカキモチ・あられにし

た。ある家では隣近所に配るので、同じ日につくのは避けたという。
街道沿いでも寒の間に寒餅をつき、エビ・海苔・シソ・大豆などを入れてカキモチを作る。

節分　北地区では2月3日はトシコシと称し、主婦がホウラクを使って大豆を煎り、それを主人や子供が「鬼は外、福は内」とかけ声をかけて家の外や内に撒いた。戦後もホウラクを使って煎っていた。また豆を年の数だけ食べた。少女達は年が一つ増えると言って髪をイイワタ（桃割れ）に結ってもらい一日遊んだ。この日は麦飯と鰯の塩漬けやヘシコ（サバ・イワシなどに塩をまぶし、ぬか漬けしたもの）を焼いて食べた。また、鬼を払うといって、魔除けのためにイワシの頭をヒイラギに刺して玄関や軒先に飾った。
　街道沿いでもこの日をトシコシと称し、主婦がホウラクで大豆を炒り、その豆を子供が家の中や外に「鬼は外、福は内」とかけ声をかけてまく。また、ヒイラギにイワシの頭を刺したものを戸口に飾る。また、トシコシイワシと呼ばれる塩漬けにしたイワシを焼いて食べる。

節句（３月）　北地区では雛飾りは2月の上旬から中旬に出し、3月3日の節句を過ぎると嫁に行き遅れないようにといって、すぐに片づける。雛人形・菱餅・桃の花を飾った。ちらし寿司・巻き寿司・ハマグリのお吸物を食べた。
　街道沿いでは雛祭りには七段飾りの雛人形を飾ったり、掛け軸に紙のお雛様を挿して軸の前にボンボリや団子を飾った。雛飾りは2月はじめに出して、3月3日が過ぎると「嫁に行くのが遅れる」といってすぐに片づける。この日は巻き寿司・蓬団子のほか、あん入りの団子をイバラの葉2枚で挟んで作った柏餅のような団子や白と蓬の2色の菱餅をつくって食べた。初節句には親戚がイチマさん（市松人形）をもって集まった。

彼岸　北地区では熱心な人は彼岸の7日間は毎日お墓にお参りし、お寺でも毎日オツトメがあるので、彼岸の香料をあげてお参りする。彼岸には「彼岸団子」と呼ばれるおはぎを作る。蓬団子は彼岸に関わらず作った。
街道沿いでは彼岸には昔から各家で墓参りや墓掃除をしている。彼岸の中日にはお寺でオツトメがあり、その後にオコウという味噌汁のようなものを、持参した御飯にかけて頂く。家ではボタモチや蓬餅を食べた。

花祭り　4月8日の行事。北地区ではお釈迦様の誕生日ということで、以前はお寺で花を飾った盥にお釈迦様の像を置き、それに甘茶をかけた。
　街道沿いでは花祭りと称して水仙など自分の家で作っている花をお寺へ持っていった。学校へあがるまでの小さな子供がおこない、お釈迦様に甘茶をかけて自分も飲んだ。現在は子供会がお寺でしている。

メンギョ　北地区は4月15日をメンギョともいうが「春まつり」の方がなじみ深い。ヤサカ山（現在の箕面山荘のあたり）や一本松（現在の新船場南橋付近）へ行った。重箱に巻き寿司・かまぼこ・卵・生節を炊いたものを詰めて持っていき、一日中遊んだ。
　街道沿いはちょうどツツジが見ごろの4月15日にメンギョ山（現在の市民病院あたり）や一本松（新船場南橋の辺り）へでかけた。重箱いっぱいに巻き寿司・かまぼこ・たまご・ワラビの天ぷら・タケノコなどを入れて持っていき、一日中遊んだ。子供と年寄りの

行事だった。雨が降ったらお寺に集まってお弁当を食べた。

牛の爪切り　5月頃に博労がやってきたので、北地区のトンド場に牛をつなぎに行って爪を切ってもらった。

節句（５月）　鯉のぼりを揚げ、柏餅・蓬餅を作った。一年間の厄除けとして多くの家で菖蒲湯に入る。風呂に入れた後の菖蒲を頭にくくると頭痛にならないといった。残った菖蒲は屋根に放りあげた。

ホネツキモチ　北地区では土用の頃にホネツキモチといって力餅のようなものを食べて元気をつけた。

サナブリ　北地区では田植えがまだ終わっていなくても、街道沿いで田植えが終わるとサナブリの知らせがくる。サナブリは地区内で一斉におこない、この日は仕事を休んで一日中遊び、巻き寿司を食べた。五藤池（白島・石丸）の水をもらったときは1日、雨水や自分の村の池（当対池・新池・木戸池）から水を引いた時は2日間休んだ。サナブリには柏餅（タンキリバラで餅を包む）を作る。また、前もってタコを注文しておき、それを炊いて食べた。昔は柏餅とタコが大変楽しみだった。

街道沿いではこの日はハゲとも呼ばれ、田植えの済んだあとに村一斉に休む。生節をほぐして甘辛く味付けしたものを御飯にのせて作った押し寿司やバラずし、たこ・ボタモチなどを食べた。また、豆芝居という芝居が北芝や西宿・箕面に来たので見に行った。

また、この頃に豆芝居が現在の北芝第2児童遊園に来た。芝居当日はチンドン屋が興行を触れ回ったので子供たちは後からついていった。この時期がちょうど豆の種をまく時期と重なるので豆芝居という。

七夕　北地区ではこの日をタナバタと呼び、竹薮で竹を取ってきて子供が飾りや願い事を書いた短冊を付けた。タナバタが過ぎると鍋田川に流したり、ごみとして燃やす家が多いが、笹飾りを田の鬼門に飾り、7日が過ぎると藁などと一緒に燃やし、稲刈りが済むまで残骸はそのままにしているという家もある。タナバタの夜12時頃には五色の虹が架かり、その時、流れ星に願い事をするとかなうという。

街道沿いでは、この日をタナバタと呼ぶが特に何をするわけではない。

龍安寺の護摩焚き　灰を持って帰り、竹の皮に包んで、それを竹串に挟み田に立てる。立てる場所は田の中であったり、隅であったり家によって異なる。また、護摩の煙を頭にかぶった。かぶると頭痛にならないといった。当日はかき氷やバナナの叩き売りやガマの油売りなどたくさんの出店が出たので楽しみにしていた。

（４）盆行事

墓掃除　北地区では8月の第1日曜日に村中一斉に墓掃除を行う。

街道沿いでは盆に墓掃除をするのは戦後になってからで、昔はしていなかったという。

墓参り　北地区では8月15日に墓に花を供えに行く。街道沿いでは盆の期間特に日は決まっていないが花を供えに行く。

供物　北地区では13日に仏壇の前にお供えする。特に棚は設けない。ソーメン・蓮や菊のハクセンコやご先祖さんの土地から採れたものとして果物を供える。ソーメンは毎日作る。このときのソーメンのゆで汁を盥に入れて、水を足して行水すると「あせも」にならないといった。また、ぼたもちを15日の朝にご先祖さんに供える。お供えは16日の朝にさげる。さげたお供えは捨てずに必ず食べるという家が多い。食べられないものは燃やす。

街道沿いではボタモチやスイカ・マッカ（マクワ瓜）などの自分の畑で取れたものを13日に準備して14日に供える。棚などは特に設けない。16日にさげる。お下がりは食べる。

新仏　初盆（ハツボン）というが特に何かをするということはない。

盆踊り　北地区ではお盆の頃にトンド場・萱野小学校・滝道の弁天さんなどで行われた。江州音頭・伊勢音頭・鉄砲音頭などに合わせて踊った。

街道沿いでは戦前は個人の庭で女性や青年団がやっていたときがあるが、あまり長続きはしなかった。そのあとはやっていない。

マンドロ　北地区では昔、8月14，15日におこなっていた。マンドロとは言わずにタイマツと言う。夜になるとマンドリ山である一本松から木戸池まで、青年団は大きい松明を、年寄り・子供はふつうの松明を持って駆け下りた。一本松は現在の新船場南橋の辺りにあったらしく、山の神としてゴンゲンさんをまつっていたという。「天道さんのおかげ　米百升いっとこせー」とかけ声をかけて駆け下りていった。一方、女子は浴衣を作ってもらい、鉦・太鼓を叩きながら提灯を持って木戸池まで迎えに行った。

何日も前から少しずつ準備がなされ、当日は午前中に松明を作り、午後から松明を持って山へ登って準備する。スイカなども持っていき、時間が来るまでそれを食べて待った。一本松には松の根の部分を組んでおき、火をつけて燃やす。みんなが走っていった後も、この火が長く燃えているように油分の多い松の根の部分を使ったという。人々はタイマツを豊作を祈った行事と捉えている。この日は親戚中が戻ってきてにぎやかだった。タイマツは大阪万博の頃にマンドリ山の開発と共におこなわれなくなった。しかし近年、7月の終わりに萱野保育所の駐車場から地区内を八方へ散って、ライトピア21へ集まるという形になって復活している。

街道沿いでも8月14，15日におこなわれる。昔は10日前後から準備のためにマンドロの際の通り道となるあぜ道の芝を刈ったり、草を抜いたりして走りやすく整えておき、当日は昼に「くすべ」をして護摩焚きのように煙を上げる。くすべでは竹を四角に組んだ「愛宕さん」と呼ばれるものを作り、そこに青葉を入れて灯油をかける。それに竹の先に丸いボンボリを刺したもので火を付ける。このとき男子は「天道さんのおかげ　米一斗五升」と歌った。

夜になると、はちまきをした男子が最初に「ダマシ」といって小さめのタイマツを2本持って半分くらいまで降りてくる。半分まで来るとまた山へ戻って、今度は本タイマツを持って降りてくる。降りてくるときはタイマツを左右に振り回しながら走る。青年会は男子達のあとを追っかけて、火や灰の始末をして火事にならないようにしていた。タイマツ

は集落内を東西に貫く西国街道の東西村はずれまで持って行ったという。70歳代の人は、タイマツは東のはずれまで、80歳代の人は西のはずれまで行ったと記憶している。タイマツには竹の先を割ってコエマツ（松の根っこの油の多い部分）を4、5本刺してくくる。ダマシ用のタイマツにはコエマツ2本を使う。女子はくすべの時は手伝い、夜は浴衣を着て提灯を持って見に行った。マンドロは天候に恵まれ、米がよく取れるようにとの願いを込めて行われた。今は南山北公園から千里川沿いに墓地を過ぎた辺りまで行っている。

写真14　タイマツ（街道沿い）

地蔵盆　両地区とも8月23日におこなわれる。北地区では新池の横にある庚申塚でご詠歌をあげたり、子供がお菓子をもらったりする。昔は箕面の北向き地蔵に夜店がたくさん出たので、こずかいをもらってお参りに行った。

街道沿いでは箕面の北向き地蔵の出店を楽しみにしていた。また、鍋田川のほとりにある地蔵を鍋田地蔵と呼び、これにお供えをして、おさがりを子供がもらった。今は墓地の無縁仏になっている地蔵のところでおこなっている。

写真15　タイマツ（街道沿い）

（５）秋から冬の行事

月見　北地区では旧暦8月15日に萩・女郎花・ススキ・団子・里芋を供えた。供え物を子供たちがつつきに来るので番をしたが、盗まれるのは良いこととされていた。

写真16　鍋田地蔵

街道沿いではススキ・萩・団子・小芋・女郎花・柿を供えた。団子は13個供えることになっている。大人が番をしている目を盗んで、男子が竹の槍で団子をつつきにきた。「今日、月見やぞー」と誰かれなしに声が上がり、学校から帰るとみんなでクラブに集まって竹を削って準備した。団子を取られると運が悪くなるが、取った子供は運がよくなるといった。

彼岸　春の彼岸と内容は、ほぼ同じである。

秋祭り　10月14日は為那都比古神社で秋祭りが青年団を中心としておこなわれる。14日の本宮を中心に前日を宵宮、翌日を後宴という。祭の期間中は辻々に小さい提灯が付けられ、本宮ではお参りすると甘酒をくれた。また、お参りすると抽選券を氏子総代からもらってする「くじ」があった。どの家でも飼っていた鶏を男性がしめて、女性がネギ・こんにゃく・豆腐などと一緒にすき焼きを作った。昔は、牛や豚の肉を食べることはまずなく、鶏も年に数回食べられるご馳走だった。ほかにも生節の押し寿しや巻き寿し・赤飯を作って食べた。祭のあと、15日には村中で運動会をした。

亥の子　北地区では11月中旬に亥の子に使う道具の準備には青年団が作ったという1メートルくらいの大きいイノコヅチ（木を芯にして、そこに籾干しした藁の束を結わえたもの）の伝承と子供がつくったイノコ（藁を束ねてひもで巻いたもの）の伝承が聞かれた。当日は子供たちが家をまわり、かけ声を掛けてイノコヅチで地面を叩き、少々のお金をもらったりした。かけ声は「亥の子　亥の子　亥の子の晩に　重箱ひろて　開けてみれば中にボタモチ」であったと言い、「中からボタモチ」の部分を「ほこほこまんじゅう」や「イノヤンのキンタマ」とする歌詞も聞かれた。終わった後の道具は捨てるという人と燃やして灰を田にまくという人がいた。亥の子の日にはぼたもちを作るが、この餅に特別な呼び名はない。亥の子は豊作のお礼や厄災除けのために行われていたという。

街道沿いでは11月の初旬と中頃にあった。当日は日が暮れてから子供たちが家々を端から順に、イノコと呼ばれる藁製の棒で地面を叩いてまわった。その際、「イノコ、イノコ、イノコの晩に重箱ひろて、開けてみればジンベエさんのキンタマ」、新婚夫婦の家では続けて「1つ祝いましょ、ここの庭に水をうって舟を浮かせて船頭さんをやとて」と歌った。これを2回繰り返し歌うとたくさんおひねりをくれた。おひねりは後でクラブで年長者が等分に分配した。イノコは子供が竹を芯にして藁の束をきつく結わえて作る。イノコはぼろぼろになっているので捨ててしまう。この日には、ボタモチを作ったが、あんは小豆ではなくササゲを使った。また、亥の子を境にコタツを出したという家が多かった。亥の子は豊作のお礼のためにおこなったという人が多かったが、中には穀物を食い荒らす猪よけのための行事と考える人もいた。

誓文払い　池田の誓文払いの大売り出しに足袋やシャツなどを買いに行った。

冬至　1年間風邪をひかないといって柚湯に入る。この日はかぼちゃを食べる家が多い。風邪をひかないようにとか、中風にならないようにという意味があったという。

オヒチヤ（お七夜）　北地区では12月20日前後からの7日間、親鸞上人の命日に因んで連日、お寺でおつとめがある。最終日は午後7時頃からお寺にあつまり、夜を明かして朝6時頃に太鼓が鳴るのと同時に持参した御飯にオコウをかけて食べた。オコウは味噌汁に豆腐や野菜がたくさん入ったもので、とても美味しかったという。

３．その他の民俗

（１）講

伊勢講　北地区では青年団が伊勢講から帰ってくる時には木戸池の辺りまで村中で迎えに行き、その後はお寺の庭にゴザを敷いて、ごちそうを囲んで歓迎した。街道沿いでも昔はカイチごとに伊勢講があった。

キョウシン講　街道沿いにある講で、現在も存続している。固定された22軒で行われるため二十二人講ともいう。善福寺、浄円寺いずれの檀家からも参加している。春と秋に持ち回りで当番の家に集まって法座を催す。また、葬式の際などは親戚縁者と同様の役割を果たす。京都の大谷に毎月2人がお参りに行っている。この順番は12月に籤をして来年のお参り順を決めている。

報恩講　親鸞上人の忌日に行う法会。北地区ではお寺でおこなう報恩講は9月におこなわれ、各家を廻る報恩講は10月から2月にかけておこなわれる。街道沿いでは11月頃に2日間にわたってお寺で報恩講がおこなわれる。善福寺と浄円寺は報恩講の時期をずらし、檀家に関わりなく両方のお寺の報恩講を勤める人もいる。また、以前は正月明けに青年会以上の男女が着物を着てお寺でおこなったお勤めは今は3月に移った。

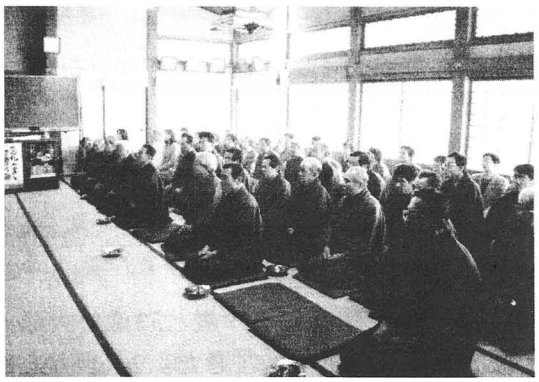


写真17　報恩講（善福寺）

（２）人の一生

調査の中で、北地区在住の大正14年生まれの女性から出産、結婚、死に関する話を聞くことができたので、その内容を以下に記した。

出産

・妊娠中には、「妊婦がびっくりする」「生まれてくる赤ん坊の顔に痣が出来る」といって火事の時には外に出てはいけないとされた。また、葬式にも出てはいけないといわれた。
・妊娠5カ月目の戌の日に中山寺にお詣りして晒しの腹帯とお守り、ろうそくをもらい安産祈願をする。ろうそくは神棚に供え、それが消えるまでに生まれるといわれている。
・宮まいり：生まれて33日目に為那都比古神社へお詣りに行く。
・お礼参り：さらの晒しを中山寺に返す。
・ケがつく（産気づく）と萱野にいた産婆さんを夫が呼びにいった。最初の子供のときは実家で産んだ。出産は床に筵を敷いて、寝産でおこなった。
・出産の時、夫はヘッツイさん（竈）で八升鍋に湯を沸かして産湯の用意をする。
・丑年の朝に生まれると苦労し、夜に生まれると楽をすると言った。これは牛が朝から1日働かないといけないが、夜だと畑仕事から帰ってきて後は寝るだけだからだという。
・後産はすぐに主人が布に包んで墓に埋めに行く。深く埋める。
・生まれた直後の子供は、お腹の中に黒い便があり、これを出さないと子供が死んでしまうといって「ゴコ」と呼ばれる黒い番茶を飲ませた。ゴコは、産婆さんが持ってくるが、

ないときは濃い番茶を綿にすわせて口に含ませた。
・最初の乳は黄色で子供が飲むとお腹をこわすといって、飲ませずに盥などにためておいた。ためた乳を捨てるときは人が踏んだらいかんといって、壁にかけた。その間、子供には番茶を飲ませていた。
・産まれた子には「土用のノノコ」といって土用の頃までノノコ（ちゃんちゃんこ）を着せておいた。着せておかないと病気をするといった。女の子は赤色、男の子は黄色のノノコを着せた。
・七日タチビ：出産後、７日目に赤飯とお椀に高野豆腐・あげ・椎茸を炊いたもの入れて親戚・近所に配った。
・出産を終えた女性は35日経つまで仕事をしたらいけないといって家で静養した。
・初めての子供のことを「ウイノコ（初の子)」と呼ぶ。
・子供の名前は七日タチビが過ぎたら、夫がつけた。
・初節句：3月3日、5月5日ともに実家から雛人形や兜が贈られる。3月3日はちらし寿司、蛤の吸物を、5月5日には柏餅を作った。雛人形は古くなったら「雛流し」で有名な和歌山県の淡島神社に持っていく。
・百日の一粒食い：家でおこなう食い初めの儀式で、為那都比古神社で用意してきたお膳・お椀・お箸を子供の前に並べ、一粒の米を口の中に入れてやる。
・七五三は11月15日に男児が5歳、女児が3歳で為那都比古神社でおこなった。その際、子供には産着を着せてやる。
・十三参りはウイノコの時だけした。為那都比古神社で神主が御幣を振って祝詞をあげてくれた。
・厄年は男が42歳、女が19歳と33歳で大厄（ダイヤク）は42歳と33歳。厄除けに門戸厄神へ行き、お札をもらってきた。2人目からは近いので尊鉢さんに行った。厄除けがすむと、家で親戚を呼んで厄除けの祝いをした。お膳に鯛を据えてお祝いした。女性の33歳の大厄で子供が産まれると、座布団を敷いた箕の中に入れてそれを辻に置いておく。子供は前もって頼んであった家の人が拾って、返しにくる。こうすることで、産後の肥立ちが悪くならず、「女の人が負ける（死ぬ)」ことがないという。

結婚　萱野では、お見合結婚が多かった。昔は、村の青年団と少女会で素人芝居という催しを農閑期にしていたが、これが男女の出会いの場となっていた。
・トックリコカシ：結婚することが正式に認知される儀式。嫁の家に本人同志と両家の親が集まり、お酒を飲む。これ以降、嫁の家に婚約者が遊びに来るようになる。反対に嫁は決して婿の家に遊びに行くことはなかった。
・結納は熨斗袋にわずかなお金を入れて贈る。(戦後直後のことなので貧しかった、何もなかった。)
・仲人は嫁の母方の祖母が1人でした。
・結婚式の日取りはトックリコカシの後に大安の日を選んで決めた。この女性の場合は昭和22年の2月か3月にトックリコカシをして、その年の10月に結婚式をした。
・結婚式：家を出るとき仲人のおばあさんが迎えに来た。晩の7時か8時頃で日が暮れていた。嫁入り行列は5、6人ですべて兄弟だった。途中、長持歌を歌っていったように思う。留め袖、頭に角隠しをつけて行った。嫁入りの4、5日前に嫁入り道具を男の兄弟が嫁ぎ先に運んでおく。婿方の家に入ると、仏壇にお詣りする。そのあと、仏前に両家が向かい合

う形で座が設けられ宴会になる。仏壇の手前から仲人、新郎新婦、続いて両家の父、母が座り、その後は年の順に座った。友人は2人ほど呼んだ。嫁は嫁ぎ先の父親の杯に酒をつぎ飲んでもらった。次の日に主人の姉に付き添われて、紅白の饅頭を親戚、おじさん、おばさんに配って挨拶に回った。
・ソウブツ：夫から妻に、結婚してから最初の盆にドウの着物、正月に袷の着物を贈った。
・結婚して初めての正月は3日から1月いっぱいを実家で過ごした。
・ヤブイリ（1月16日、8月16）は15日間実家に帰った。
・離婚者は男性はバツイチ、女性はデモドリムスメと呼ばれた。また、嫁に行かない女性をイカズゴケと呼んだ。

人の死

・死の予兆：家の中が線香臭くなる。
・死が確認されると僧侶を呼んで枕経をしてもらう。遺体を北枕にして刀を置く。ご飯をすぐ炊き、生前に使っていた茶碗に山盛りによそって箸をさして枕元に置く。善光寺さんへ旅に行くといって納棺の際にこのご飯を一緒に納める。神棚は紙で覆って隠した。家族は夜通し起きている。
・死の知らせは主人が1人で行く。
・葬式は同行がすべてを仕切る。
・座棺の棺桶を輿に乗せて墓地まで行った。この際、輿の前後4人づつで担ぐが担ぎ手は故人と血のつながりのある人。このうち血の濃い人が前後2人づつ担ぐことになっている。
・葬列は先頭に提灯持ちが左右に1人ずつ（孫）、位牌持ち（長男）、次いで身内、棺をのせた輿、故人の妻、子供、僧侶と続く。この際の服装は黒い喪服を着た。着物は「死が続くから」といって袷は着なかった。野辺送りとは言わず、単に「墓へ送っていく」と言う。
・死者には背中に「南無阿弥陀仏」と書かれた白い帷子を着せる。棺にはタバコ、お酒など故人が生前好んだもののほか、枕飯のご飯を入れる。棺の蓋に釘を打つのは一番血の濃い者がする。蓋は簡単に外れないように、荒縄で十字にくくった。
・出棺のときには、個人の茶碗を割り、塩を撒く。墓から帰ってきたらその塩を踏む。
・シカの花を半紙で作り、これを墓の迎え地蔵に供える。迎え地蔵にはこのほかに「いなか饅頭」も供える。年寄りがなくなった場合には食べると長生きするといってもらいに行った。墓の六地蔵に6束の線香を供える。墓で3回こけたら死ぬといった。
・墓穴掘りは一番血の濃い人がする。妻がする場合もある。
・湯灌に使った湯は下肥を入れるコエカゴに入れて墓地まで持っていき、墓の水を溜めてあるドツボに捨てる。火葬の時に棺の下に敷く筵はドツボの水につけて濡らしたものを使う。
・松の木を燃料にして火葬する。火葬の間は一番血の濃い人（兄弟、妻）が火が消えていないか見に行く。
・死者の家族は四十九日　過ぎまで神社へ行ってはいけない。49日間（忌中）は四つ足は食べてはいけない。臭いものは食べてはいけないとされ、だしを取るにもかつお節や雑魚を使わずに昆布でとった。

第３節　坊島地区

１．地区の概要

概要　坊島は、萱野山の南斜面に広がる萱野郷11ヵ村の中の東坊島と西坊島が一つになった地区である。

坊島は、豊島郡に属し近世初頭は一村であったが、寛文年間頃、東坊島と西坊島に分かれた。現在は、坊島一村に戻っている。村内には浄土宗浄国寺と曹洞宗太春寺（現如意谷）がある。大半が浄国寺の檀家および信徒である。

垣内は、現在7組に分かれている。北條垣内（キタンジョガイチ）、南條垣内（ミナンジョガイチ）、東條垣内（ヒガンジョガイチ）、西條垣内（ニシンジョガイチ）、土居垣内（ドイガイチ）、巽垣内（タツミガイチ）、垣内垣内（カキンジョガイチ）である。なお現在は西條垣内は、北と南に分かれている。

天保2（1831）年当時の東坊島村では、天保2年の「摂津国豊島郡東坊島村差出明細帳」（池永家文書）によると米のほか麦・大豆・粟・蕎麦・大根・綿・柿・棗・桃などが作られていたことがわかる。

同文書によると、当村では、作物の栽培時期として次のように栽培日を定めている。

早稲は、3月の八十八夜頃に苗代に種籾を蒔き、5月中旬以前に植付ける。刈取りは彼岸前後であった。中稲晩稲の刈取りは秋土用（立冬の前18日間）10日前後であった。

畑作では、麦は冬土用（立春の前18日間）に種蒔きし、五月節前後（二十四節気の中の「芒種」前後）に刈取った。以下、大豆は五月節前後に植付、十月節後（二十四節気の中の「立冬」後）に収穫した。粟は春土用（立夏の前18日間）前後に植付、夏土用（立秋の

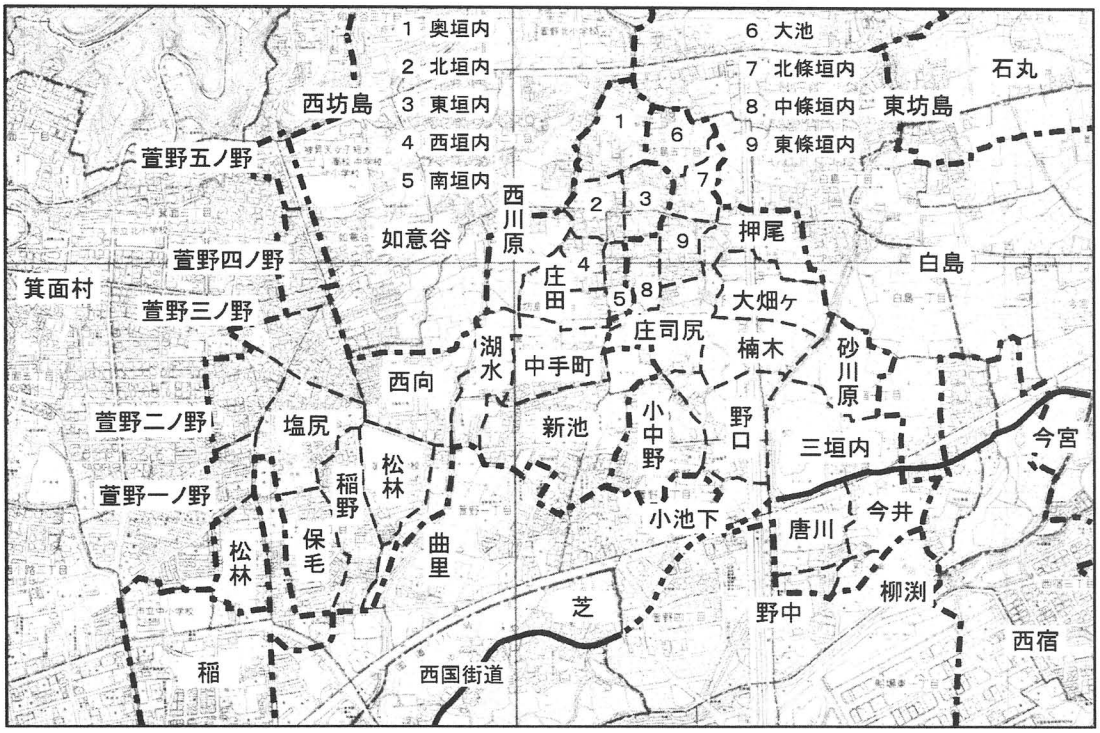


図10　坊島旧字名

前18日間）が明けて15、6日頃に収穫した。蕎麦は、夏土用明け14、5日頃に蒔き、十月節後に収穫した。畑1反に付、種は大豆・小豆は2升麦は4升から5升を蒔いた。

綿は、八十八夜前後に植付け8月頃までに追々採り入れた。大根は夏土用の明けより18日後に種を蒔き冬至に採り入れた。

天保2年当時、肥料として干鰯が、田は1反につき20貫目、畑は1反につき40貫目使用され、その他にも種粕・白粕が使われた。

2．年中行事

（1）正月の準備

大掃除は箕面町時代には町から日時の指示があり、それに基づいて行っていた。

家によって区々であるが、おおよそ12月25日頃から始める。家によっては、20日以降の大安の日を選び注連飾りを作る家もある。材料は、山から採ってきた。餅つきは、29日は苦に通じ、「苦餅」だと云い、搗くのを避け、30日に搗いた。31日に仏壇、神棚などを掃除したり、煮染めなどの正月料理を作り正月準備をした。

29日には為那都比古神社へ氏子総代など役員が注連縄を作りに行く。本殿、鳥居と御輿の注連縄を作る。

鏡餅は床の間、仏壇、神棚、井戸、蔵などに飾る。床の間は、一番大きな鏡餅で、二段重ねにして昆布を敷き、干し柿と蜜柑ものせる。その他の所は小餅の鏡餅を供える。台所に祀る三宝荒神への鏡餅は三段重ねにする。

日頃使っている包丁などの道具を元日だけ休ませると云い、これらの道具をこの日には使わなかった。また、元旦には風呂に入ってはいけないと云われた。

大晦日　大晦日は、質素にするという意味で、メザシと蕎麦だけを食べるという家もあった。

また、正月用に作り、重箱に詰めた残りの煮染めなどを大晦日に食べるといういう家が

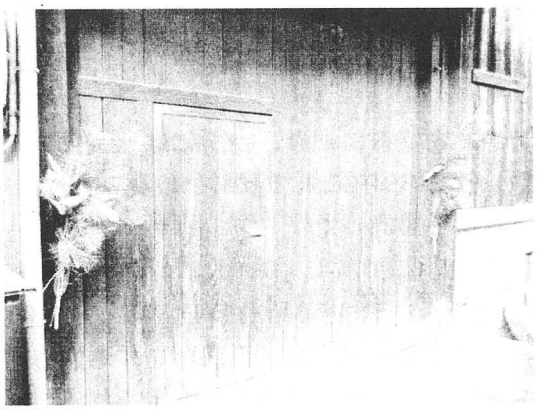


写真18　門松の飾り付け

写真19　門松

あると同時に、それらの正月料理の残りでも正月が来るまで食べてはならないとする家があった。

門松と注連縄　山から採ってきた松・竹・梅の3本を水引で束ねて、門の所に立てた。

門松には右に雄松、左に雌松を使った。

出入口や窓には、7・5・3本単位で藁をない、輪を作り、そこに裏白・雌松・しま笹を付けたものを掛ける。

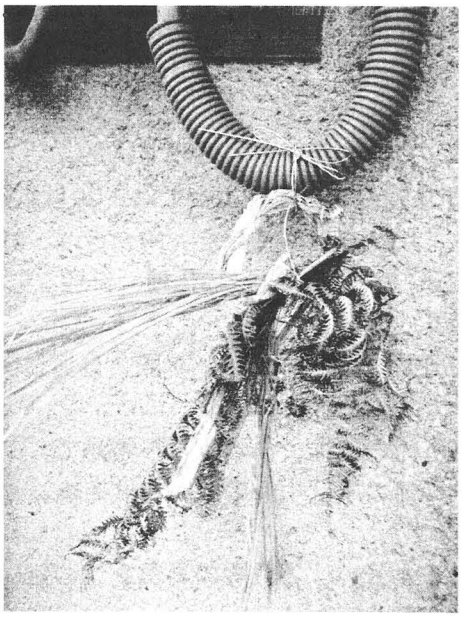


写真20　注連縄１

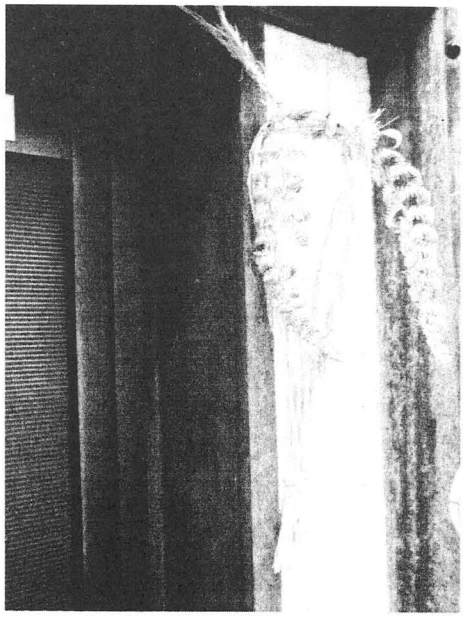


写真21　注連縄２

（２）正月行事

正月　元日早々に、仏壇と神棚、荒神さんに御神酒と灯明を灯して正月が始まる。これは家長の役目であった。

若水　ハツミズ（初水）とも云い、誰が汲むかは決まっていない家が多いが、中には、主婦、家長、男性（長男）が行う家もある。

汲んだ若水は、仏壇と神棚（普段からお伊勢さんを座敷に祀り、台所には三宝荒神を祀っている）、蔵などに供える。供え終わった若水を雑煮の中に入れる家もある。

家によっては、若水で家族みんなが顔を洗うところもあった。

雑煮　女性がするところが大半であるが、主人が元旦だけ作る所も多い。ある家では、元旦は、女性を休ませる為にと云い、男性が台所に立ち、竈を焚く手伝いをする家もある事などから推すと、本来当地域では、一家の主人が雑煮を作っていたと考えられる。

味噌仕立てで、丸餅を入れるのは共通するが、味噌は各家によって白味噌であったり赤味噌と白味噌を混ぜたりと区々である。具は、大根・人参・牛蒡・焼豆腐・竹輪・油揚

げ・土芋（里芋）等を入れ、家によってはその上に添えたり、とろろ昆布を入れる家もある。そして、「丸くおさまるように」や「角が立たないように」と云い、具は全て輪切りにする。

雑煮は、元日しか食べない家もあれば、三が日食べる家もある。が、三が日食べる家でも、元日に味噌雑煮を食べ、2、3日目は、すまし雑煮の家や、2日目は元日の残りの材料で雑煮を作り、三日目にはすまし雑煮の家などがある。いずれにしても、元旦は味噌雑煮を食すようである。

また、家長と長男には親芋（その他の家族には小芋）を雑煮の中に入れる家もある。

牛を飼っている家では、牛に雑煮を食べさせた。

初詣　正月三が日の間、為那都比古神社に詣る。このとき旧年のお札を持参し、境内の焚き火にくべた。以前は勝尾寺に詣っていたが現在はあまり詣らない。中山寺や清荒神に詣る者もいる。

1日の午前10時に浄国寺で修正会が行われるために、檀家総代などはこれにも出席する。

お年玉　お年玉をもらうときに、新しい服を着せてもらった。

ハツシゴト・レイマイリ　レイマイリともハツシゴトとも云う。正月2または3日に、その年が豊作になるように、田畑で鍬を数鍬打ち、その年の豊作を祈った。

また、山に行き鎌で木を切ってくることも行う家があった。

七草　この日のことをナナクサと云い、7日の朝に七草粥を食べた。以前は田畑から七草を取って来ていたが、その折、七種類そろわなければ、白菜、水菜などを入れて代用した。

鏡開き　七日正月の過ぎた後、餅のまだ軟らかいうちに焼き餅やぜんざいにして食べた。

尚、七日正月という言葉だけがあるが、特に行事自体はない。

トンド　15日に遅れると嫁にいけないと云われたりした。

1月15日に、坊島公園の精米所（以前は空き地であった）で、注連縄、門松、書初め、などを燃やした。燃やした残り火で、餅を焼いて食べたが、これを子供が食べることで寿命が長くなると云ったり、風邪を引かないなどと云った。

燃やし終わった灰はそのままにしておくことが多いが、中には持ち帰るものもいた。

写真22　トンド場の跡

ヤブイリ　1月16日に以前は藪入りがあった。嫁の実家に姑も一緒についていく家もあった。

（３）春から夏の行事

節分（トシコシ）　この日のことを年越しと云い、中には鰯の頭を柊に指し、玄関先に飾る家もあった。

主婦が焙烙で畦豆（大豆）を炒った。豆まきは、玄関を境にして「鬼は外、福は内」と唱えながら撒く。その後、年の数だけ豆を食べた。

この日には鰯を食べた。近年、切っていない巻きずしを作り、その年の恵方に向かって食べる。

子供は、為那都比古神社に歳の数だけ大豆をお供えとして持ってお参りに行った。すると宮司が飴をくれた。

つい最近の行事として太巻き寿司の丸かぶりもするようになった。

雛祭り　雛人形は、節分後から飾りだし、3月3日の雛祭りが終わると片づけた。片づけるのが遅れると婚期も遅れると云った。もし片づけが間に合わないときには、人形を横向きにしておくと良いとされた。

雛祭りでは、あられ、ちらし寿司、吸い物を食べた。白酒を雛壇に供えた。

彼岸　墓参りは毎月行っているが、春秋の彼岸にももちろん行った。蓬餅やぼた餅を作って、仏壇に供えたり、自分たちも食べたりした。墓は、浄国寺と市立病院前の墓地の2ヶ所があり、両墓制の家は、両方の墓に参る。

浄国寺では、京都の本山（知恩院）から僧が来て説法を行う。

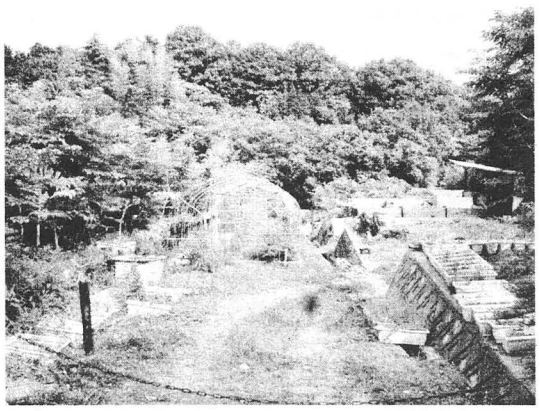


写真23　坊島の土取り場跡

メンギョ　4月15日をメンギョウと云い、女性と子供が巻き寿司や卵焼きなどを重箱に詰め、薬師堂の上にある坊島の土取場に行き会食した。

ヨウカビ　花祭りと称して、浄国寺において、子供が昼の2、3時間程度遊び、甘茶の接待を受ける。

牛回し　家の主人が、牛の鼻に粽をつけ、坊島受水場の北側に牛回しの場所があり、牛を連れていった。以前は牛まわしの木と称する欅の木があった。

この時に萱野地区から博労2～3人に来てもらい、坊島公園の下の広場（現精米所）で牛の爪を切った。

端午の節句　鯉のぼりをあげる。蓬を田から採ってきて、蓬餅を作った。菖蒲を玄関などに挿したり、屋根に上げる家もあった。以前は菖蒲湯にも入った。

溝浚え　大宮寺池とふしん池、取池、丸池からの水が流れ易くするために、水利組合が6月4日に水利の溝浚えを行う。

水おろし　白島が6月18日に池から田へ水を下ろしたので、坊島は、これより2日遅れの20日に水下ろしをすることになっていた。これは、白島の池は強かった（水が豊富）ので、白島が先に水下ろしをすることによって、坊島の水路に少し水が流れ込んでくることを見込んで、二日遅れで坊島では水下ろしをした。近辺では石丸が18日、如意谷が20日に水下ろしをしていた。

苗代作り　「八十八夜のあとさき5日」と云い、八十八夜前後に苗代作りをした。
この苗代作りは、先に述べた天保2年頃の苗代作りの時期とほぼ一致している。

サナブリ　田植えの後、戦後は実行組合が曜日を決めて、皆にサナブリの時期を伝える。
サナブリでは、女性を休ませると云う者もある。

七夕　この日に瀧安寺の護摩焚きがあったので、この日を「箕面の護摩」と云っていた。午前中に田の草取りをして、午後から瀧安寺の護摩焚きを見に行き、護摩木の燃えかすを持ち帰り、害虫予防になると云い、田の巽の方角の隅に挿した。
七夕の行事は戦後に始まり、竹を藪から各自が採ってきて飾っていた。行事が終わると銘々が竹を燃やして片づけていた。

（４）盆行事

盆の期間は、8月13日から8月15日までである。8月7日のことは、七日盆と云い、萱野11ヵ村の盆と呼んでいる。
13日に現市立病院前の墓に参った後、盆の準備をする。
樒は、8月10日までに各自が山（土取場）から採ってきて、井戸水につけて置いたものを供える。
先祖に供える水は、盆の期間中、先祖が喉を乾かさないようにと云い、朝昼晩と取り替える。

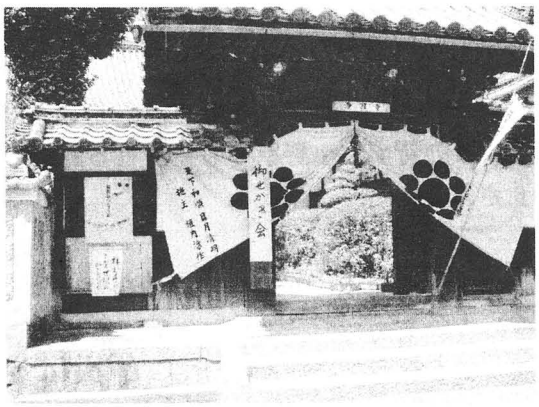


写真24　施餓鬼供養１（浄国寺）

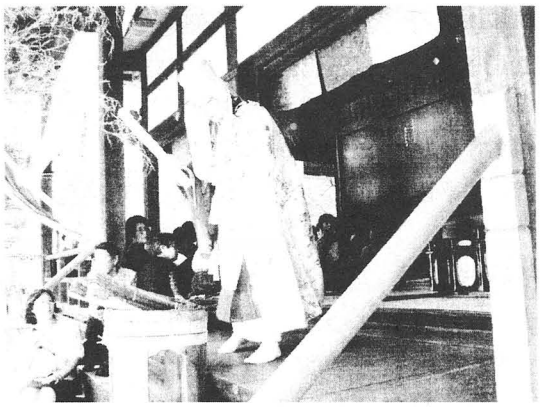


写真25　施餓鬼供養２（浄国寺）

写真26　施餓鬼供養３（浄国寺）

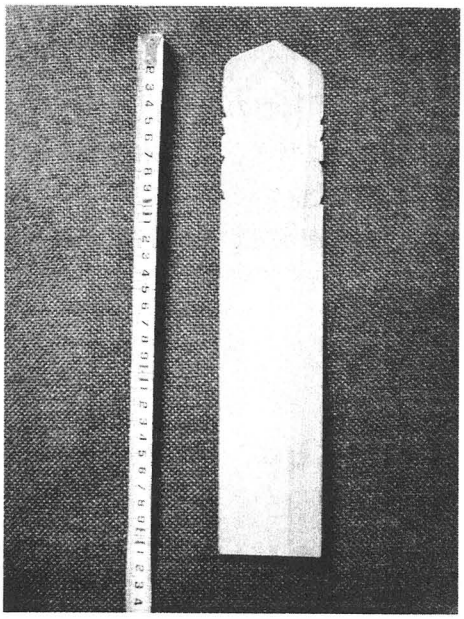


写真27　ハツボンの塔婆

僧侶は、14日頃までに浄国寺から各家に拝みにやってくる。その一日遅れで曹洞宗の太春寺からもやって来て拝んでもらう家もある。これは、現在は如意谷自治会に属している太春寺が、もと坊島の北條垣内（キタンジョカイチ）だったためであると云われている。

施餓鬼　8月5日に浄国寺において行われる。

先祖迎え　仏壇に迎え団子を供える。

供物　13日に茄子、胡瓜、トマト、芋、果物、ほおずきなどを蓮の葉を引いた上に置き供える。

新仏　前年の盆以降に出た死者を盆に祀ることをシンボトケ（新仏）、ハツボン（初盆）と云う。ハツボンの家では、12日から、仏壇とは分けて、仏壇の前に茄子、胡瓜、トマト等の夏野菜や西瓜、ナンバ（トウモロコシ）、ホオズキ、素麺などを蓮の葉の上に置いて、椪等も供える。盆灯籠も飾る。仏壇には、新仏が上がるためと称して、小さな7段の梯子をオガラで作り付ける。

13日にハツボンの家の親戚や近所の者が浄国寺からハツボンの戒名を書いてもらった塔婆（長さ30cm程の剥板）を貰いに行く。塔婆は茄子を半分に切って割り箸を立てて、それに塔婆を挟んで立てる。15日までその塔婆を村人各家でお祀りし、15日夜に塔婆に半紙に包んだお金を縛り付け、晩ハツボンの家へお参りに行く。このとき「何もできませんでしたけど」等と挨拶し、祀ってもらった家では、「長いことご馳走さんでした」などとお礼を述べる。

ハツボンの家では、16日に塔婆を浄国寺へ、親戚などが一緒に持ってきてくれたお金を付けて返却しに行き、浄国寺で供養をしてもらう。この習慣は小野原でも見られる。この行事は平成11年から檀家総代会の決定により中止された。

先祖送り　当対池の堤に供え物を持って行き、蝋燭と線香を一緒に供えて流した。現在は、水の汚染につながるとして、各家の田で燃やしている。

真言宗の家での聞き取りでは、早くあの世に戻ってもらうためだと称して、この日のお供えを「足のはやいもの」（腐りやすい物）として大角豆で赤飯や南瓜を炊いたものを供える。

盆踊り　坊島公園が造られて以来、マンドロの行われる8月15日を除いた前後に行われる。
踊りの曲は、炭坑節、ジョウロリ音頭（浄瑠璃音頭)、河内音頭である。

地蔵盆　8月24日に坊島5丁目にある場所で地蔵盆を行う。メイショウ会が、御詠歌を揚げた。寛政6年の「東坊嶋村諸色附込帳」（池永家文書）には、地蔵堂として浄国寺支配の一間半四方の地蔵堂がみえる。

写真28　地蔵堂

マンドロ　8月14、15、24日に小学2、3年生から6年生までの男子30人程度が中心となり行なう。昼食用の西瓜、マッカ（真桑瓜）と各自が作ってきた松明を持って坊島の愛宕山に登る。

まず始めに、午前10時頃と午後3時頃にクスベを行う。

クスベ（燻べ）というのは、生の松葉を燻して煙を立てて、お堂に煙を入れることである。次に愛宕山への階段の所に並び大きな声で「マンドロ灯せ、マンドロ灯せ」と叫ぶ。

クスベのために早い子供で午前7時くらいに愛宕山にやってきている者もいた。遅れるといじめられるので、みんな早く来た。

夕方まで待機して晩に松明に火をつけて山から降りてくる。その時、「マンドロ灯せ」と皆で言い合いながら降りる。

写真29　大宮寺池

松明は、自分たちでも作ることが出来、その松明の大きさを競った。松明を持って順番に並ぶが、一番大きい松明を先頭にして、下級生を真ん中にして並んだ。並ぶ順番は青年会の者が決めてくれた。たいがい青年会の者にかわいがってもらっている者が先頭にたった。

愛宕山から松明を持って、大宮寺池の所まで下りてくると、そこにまだ参加できない子供達が、親に小さな松明を作ってもらい、マンドロの火を着けてもらうために待っていた。そして、みんなで村まで戻ってきて、坊島のお地蔵さんのところで松明を燃やしきった。

（５）秋から冬の行事

月見（旧暦８月１５日）　縁側に、月が食べるようにと、月見団子と子芋（里芋)、サツマイモを供える。その横に一緒にススキと萩などを花瓶に挿して置く。団子は普通12個、閏年には13個供える。供え物を子供が長い竹の先に釘を付けた竿で突いて盗んだ。こ

のときは家に入ってきても怒られなかった。

彼岸　おはぎ、彼岸団子を用意して墓参りした。
浄国寺に本山から僧が来て説教するのは春の彼岸に同じ。

秋祭り　10月14日に三平祭と云われる祭りが為那都比古神社である。氏子総代計13名（各村から一名ずつ氏子総代が選ばれるが、坊島だけは2名が選ばれる。これは坊島が東西に分かれていたときの名残である）が、提灯をつけにくる。以前は大変賑やかで、素人の田舎芝居や青年団の相撲大会等もあり夜店が多くでて楽しかった。学校から、先生を先頭に一列に並んで為那都比古神社まで歩いてお参りに行った。お参りの後、紅白饅頭をもらって解散した。この日の夜には家で飼っていた鶏ですき焼きをした。
子供が家に帰ってくると、家々からすき焼きの臭いがしたという。子供達は赤飯とすき焼きを食べた後、小遣いをもらって為那都比古神社へ行くと、田舎芝居があってそれを見物したり、出店で買い物したりした。翌日の15日は学校の運動会であった。

亥の子　戦前ぐらいまであった。子供たちが藁を湿らせて堅く束ねて縄縄を巻き、鬼の金棒状のものを作る。それを持って家々を回り、玄関口で、地面をたたく。この藁の作り物は、各家に子供が持ち帰り、燃やした。風呂炊きのときに燃やしたと記憶するものもいる。各家ではボタモチを主婦が作った。
亥の子では、次のような唱え言を言いながら各家を回った。
「亥の子の晩に重箱拾ろて開けてみれば、ホコホコマンジュウ、さあ祝いましょ、ポッペンポン、ポッペンポン、も一つおまけたけだポッペンポン」と唱えるが、商売人の家では、上記の歌の後に「商売繁盛めでたいな」と付け加えるとお礼が多く貰えた。この歌を門口で唱え終わると、家の者が出てきてお菓子やお金をくれた。この亥の子の唱え言は、村人にとって恥ずかしい歌だという認識があったようである。
亥の子の日に、大根畑に入ると大根が割れると言われていたことを記憶する人もいる。

誓文払い　池田市の誓文市に行き、正月用の品物を買いに行く人が多かった。池田までは徒歩で行った。

冬至　南瓜を食べると長寿になると云い、食した。

３．その他の民俗

伊勢講　現在分かっているだけで、伊勢講として株喜講（かぶきこう）・中子講（なかごこう）・東大講（ひがしのおおこう）・西大講（にしのおおこう）があった。20歳になった者が伊勢神宮へ参詣し、講員のお札を受け取ってきた。20歳になると伊勢神宮まで参らせることで一人前として認められた。20歳になって伊勢に参ることになった家では、お祝いに幟を立てた。伊勢参詣後、参詣者が戻ってくる時は、国鉄茨木駅まで講員が迎えに行った。迎えに行った者は、村に戻ってくると「ごくろうさま」と云い酒を振る舞われた。
2月の第1日曜日に伊勢講がある。現在は株喜講（カブキコウ）、中坊講、東大講がこの

日に講の集会を行う。当屋の家で、天照皇太神の掛け軸、鏡餅を準備する。鏡餅は講員の数だけ作り、講が終わると分ける。現在は小餅を講員の数用意し、それを配っている。各講には伊勢講田があった。区画整理の折、売却される以前は、この田から上がるお金で講をまかなった。

この日の講では、鶏のすき焼きや魚の造り、茶碗蒸しなどが食事として出されたが現在では幕の内弁当になっている。

墓地　墓地は箕面市立病院前にあり、坊島と芝との共同になっている。お墓と呼んでいる。赤穂義士萱野三平の墓もここにある。この坊島、芝の共同墓地は、元は市民病院の所にあったが、病院建設に伴い、現在地に1979年に移設された。現在の墓地の敷地面積は2830m²であり、その内、芝地区が655m²、坊島が1322m²を占めている。移設以前は、小高い山になっており、山腹に各家の墓が建っていた。段になった斜面の高低差による家格などの区別はなかったようである。火葬場は、墓地内の六地蔵横にあり、芝との共同であった。死者が出たときには、焼き場を予約するために、夜中でも焼き場に予定の日時を書いた紙を貼りにいった。もし同日に複数の死者が出た場合、予定の紙の順に火葬するので、後の者は次の日まで待たねばならなかった。墓地左側を坊島、右側を芝が使用し、坊島と芝の墓地数比は2：1であった。この比率は、現在も同じである。お墓は、元々の坊島の村人でないと設けることが出来ない決まりになっている。天保2年の「摂津国豊嶋郡東坊嶋村差出明細帳」にもこの墓地のことが記されているので、少なくとも天保年間まで遡っても、ここの墓が存在したことが分かる。

垣内ごとに葬式を手伝う「同行」があり、その人々で火葬をはじめとする葬式全般を手伝った。

同行は、墓までの道を掃除をし、辻々に竹を立て線香を立てた。墓では同行が坐棺を火葬し、その場で番をし、棺がバンと弾けると一端村へ戻った。その後、同行は夜12時にもう一度、きちんと焼けているかどうか火葬の様子を見に行った。同行も、近

写真30　浄国寺のダントウサン

写真31　現在の村墓１

写真32　現在の村墓２

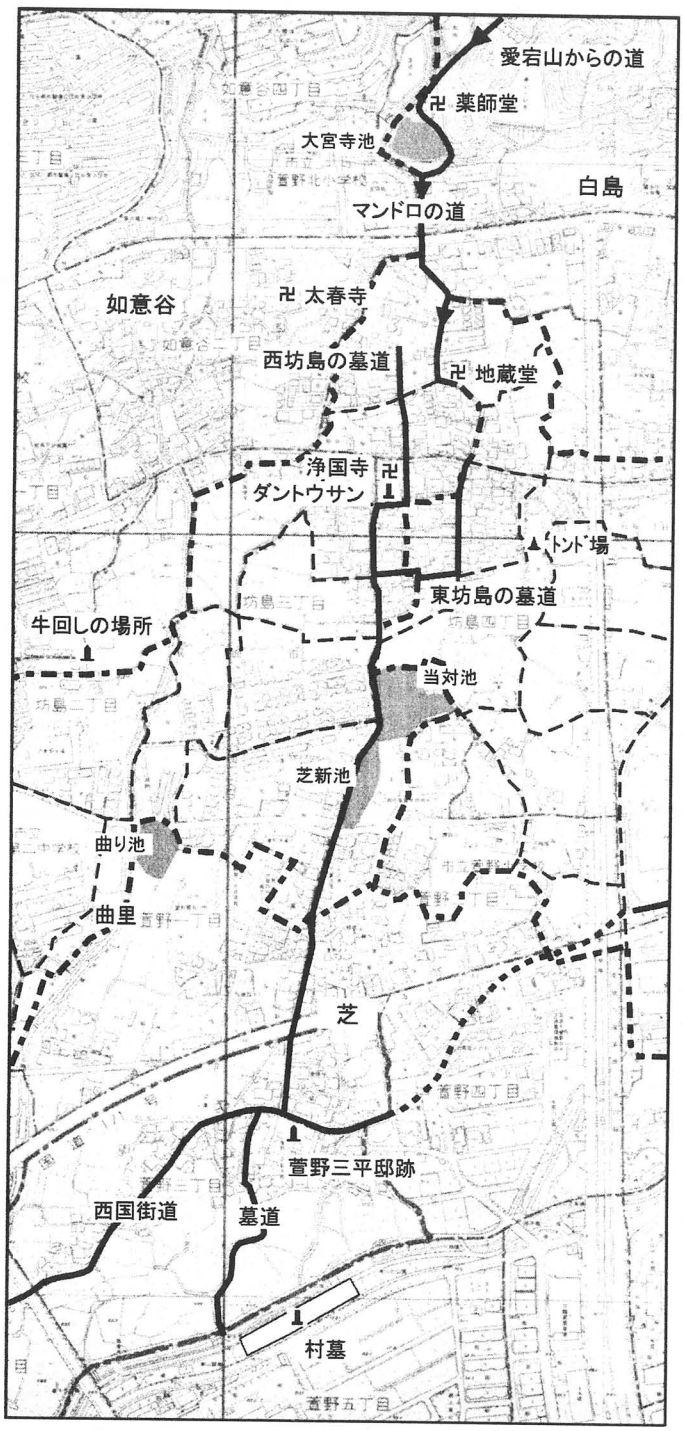


図11　坊島集落周辺

年葬式の簡略化や葬儀屋に依頼するようになったために解散した。

坊島から墓までの道をハカミチと云い、葬送時、棺の担ぎ手は、当対池（とたいけ）の横辺りまでは、担ぐ肩を変えてはいけなかった。

その他にも墓地は、浄国寺にもあり、こちらの墓のことをダントウサンと云う。ダントサンは、同寺の檀家のみが墓を設けている。

また当対池の西側の一帯は昔、モトバカあるいは、フルバカと呼ばれる雑木林だった。

年齢階梯的組織　男子は青年団があり、15、16歳から35歳までの人が加入した。女子は、結婚する前までの人が処女会に加入した。結婚後は婦人会に入った。

第４節　如意谷地区

１．地区の概要

概要　如意谷地区は箕面市の中央部に位置している。旧萱野村を形成した村の1つで、その北西端にあたる。集落の北側を府道箕面池田線が東西に貫いている。

地区の北部からは3世紀末の銅鐸が出土しており、早くから開けていた地域である。また東部には鎌倉時代から室町時代にかけての住居遺跡がある。『勝尾寺文書』の文永元年七月二日、法橋経朝注進状に「如意谷左衛門入道宗内」と見えるのが如意谷の初見である。

江戸時代ははじめは幕府領で、その後寛永11年（1634）から千洞領、天和元年（1681）からは再び幕府領、元禄7年（1694）には武蔵忍藩領となった。文政6年（1823）にはまた幕府領となり、翌年一橋家領となり明治をむかえた。

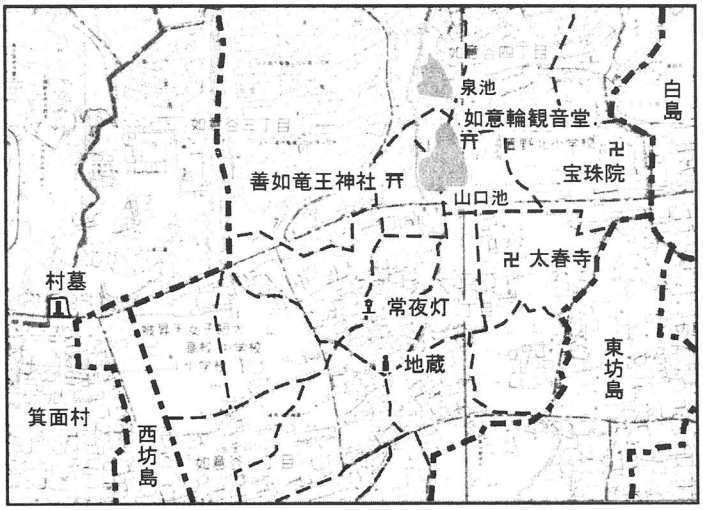


図12　如意谷の寺社

自治会（垣内・組）　東垣内・北垣内・南垣内の3つに分かれている。

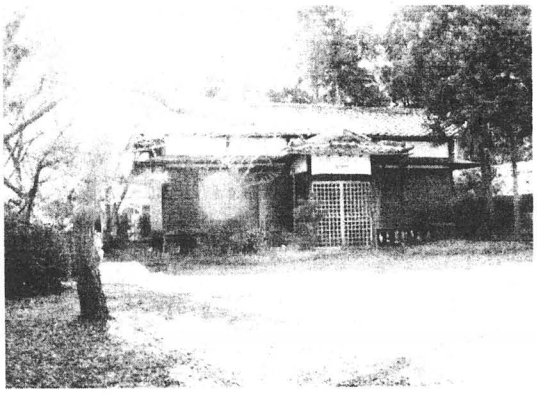


写真33　善如竜王神社

写真34　如意輪観音堂

寺社　地区の北部に善如竜王神社、北東部に真言宗宝珠院、如意輪観音堂がある。東部に曹洞宗太春寺があるが、もとは東坊島の飛地であり、地区の寺という意識は薄い。また『大阪府全志』によると曹洞宗集雲寺が字奥垣内に明治維新まであったようである。

宗派　慶応四年の「三宗宗門人別御改帳」（如意谷地区共有文書）によると

真言宗宝珠院	2軒、	男6人・	女3人・	計9人
浄土宗浄国寺	4軒、	男8人・	女8人・	計16人
一向宗東多田村光遍寺	21軒、	男40人・	女42人・	計82人
合　計	27軒、	男54人・	女53人・	計107人

とあるが、現在は川西市東多田の浄土真宗大谷派光遍寺18軒、坊島の浄国寺2,3軒、芝の善福寺3軒、宝珠院1軒である。

生業　農業。昔は酒米を作っていたようで、昭和17年の「酒米勘定帳」（如意谷地区共有文書）が残されている。米の他に昔はみかん作りが盛んだった。

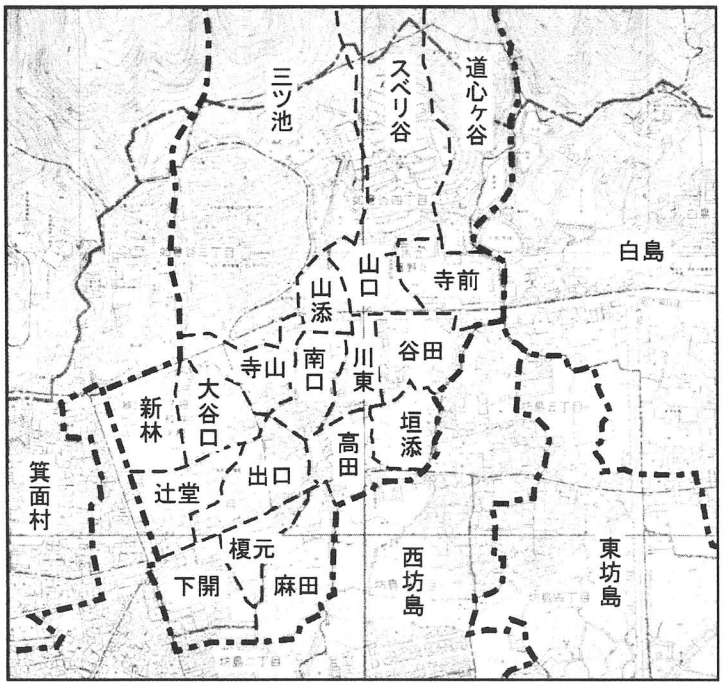


図13　如意谷旧字名

2．年中行事

（1）正月の準備

具体的に何日から始めるということはなく、20日以降に始めるところが多い。

餅つき　12月28、30日に行う家が多いが、決まってはいない。29日は苦の餅といって避ける。が、逆に苦をつくのでよいとする家もある。

今でも餅米を蒸す際にはヘッツイさん（かまど）を使うという家もある。

鏡餅　鏡餅は床の間、仏壇、神棚、荒神さん（三段重ね）にウラジロ、昆布、みかんを添えて供える。つるし柿を添える家もある。このほか小餅を下駄箱、自動車、農具、裁縫台、勉強机にも供える家もある。

また床の間に山の神を祀り小判型の鏡餅を供えるという家、竜王神社にも供えるという家もある。

門松・注連飾り　ほとんどの家が注連縄、門松を飾らない。松竹梅を仏壇に供えるという家が多い。昔は材料は山で取ってきた。また松竹梅を水引でくくって玄関の両側に置くという家もある。最近では注連縄、門松をするところが出てきている。

大掃除（煤払い）　31日に行うという家、餅つきが終わってからという家などがある。しないという家もあった。

大晦日の晩　そばを食べる家が多い。

（２）正月行事

若水　1日の朝早く井戸で水を汲み、神仏に供えた。しない家の方が多い。

雑煮　丸餅、自家製の味噌で作る。具に慈姑、大根、人参、蓮根、小芋などを入れる。神仏に3元日は毎日供える。昔はまめに暮らせるように豆の枝、殻を燃やして雑煮を炊いたという。主婦が作る。昔は旧正月には男が雑煮を作った。

初詣　竜王神社、観音さんに参る。為那都比古神社には昔は行かなかった。

お年玉　現在はお金だが、昔は下駄や足袋、前掛けを買って貰った。何も貰えない家もあった。

ハツシゴト・シゴトハジメ　最初に山に入るときお供え（餅）をした。日にちは決まっていない。昭和30年頃まで行われていた。

フクアカシ　4日。お粥の中にお餅を入れて食べる。これで正月が終わるといった。

寒の入り　5日。揚げを甘辛く煮て食べた。

正月七日　この日を七日正月といって、七草粥を食べる。七草全部入れなくても良い。これといって何もしないという家もある。

鏡開き　昔は15日に下げて、焼いて食べたり、ぜんざいに入れたりした。最近は早いところで3日、遅いところでも7日には下げて、水に浸けてしばらく置き、蒸し直して食べるところが多い。

トンド（ヨウネン講）　14日の夜、ヨウネン講といって寝ないで一晩過ごした。この夜は友達同士で集まって、縄などを作って過ごし、コンニャクを食べた。縄は商売人が買いに来た。

15日、お地蔵さんの前に各家から一束の藁とお飾りを持ち寄って竹を立て掛けて作ったトンドで燃やした。書き初めを燃やして、高いところに上がるといいといった。終わった後の火を家に持って帰り、小豆粥を炊いて神仏に供え、その後食べた。灰は家の四方にまくと火事が起きないといったり、畑にまくと野菜がよく育つといったりした。20年ほど前になくなった。今は各自がお宮さん（為那都比古）に持っていって燃やす。

ヤブイリ　嫁や奉公人はこの日実家に帰った。奉公人（丹波から来ていた）が帰るのに布を織って着物を作り、それを着て帰らせるの大変だった。嫁は土産を持たせてもらい実家に帰った。実家へは1～5日間帰った。

観音さん　1月18日は観音さんのお祭りだった。昔は賑やかでたくさん店が出た。箕面や小野原あたりからも来ている人がいた。

（３）春から夏の行事

トシコシ（節分）　2月3日。この日をトシコシという。昔はホウラクで豆を煎った。豆は神仏に供える。豆まきは家の各所で「鬼は外、福は内」と言って行う。年の数豆を食べる。また戸口にヒイラギと鰯の頭を飾った。何もしない家もある。最近は巻き寿司を食べるようになった。

寒施行（初午）　2月最初の午の日にお稲荷さんを祀り、家の中で護摩を焚いて、キツネが来てのりうつる。イナリセンギョとも言って、拝み屋のような人（十三からお代理さん（お稲荷様の代理）が来られたという人と村内にいたお婆さんだったという人がいた）が指定する場所に指定数のイナリ寿司を置いてまわった。この人はとても足が速くついていくのが大変だったようである。

宝殊院でも二の午や三の午といって稲荷をお祀りしていた。本堂の中の横の方に小さい社を置いて、そこにいなり寿司を供えた。

節句（３月）　3月3日。雛飾りは早目（節分頃から）に出し、明くる日に片付ける。この日はハマグリのおつゆとちらし寿司をして食べた。

彼岸　墓参りに行く。よもぎ餅やおはぎを供える。

メンギョ　4月15日。弁当を持って北側の山（今はこの山は団地になっている。）に行った。弁当はお重にいっぱい巻き寿司が入っていた。この日は学校が半日で終わった。今は行われていない。

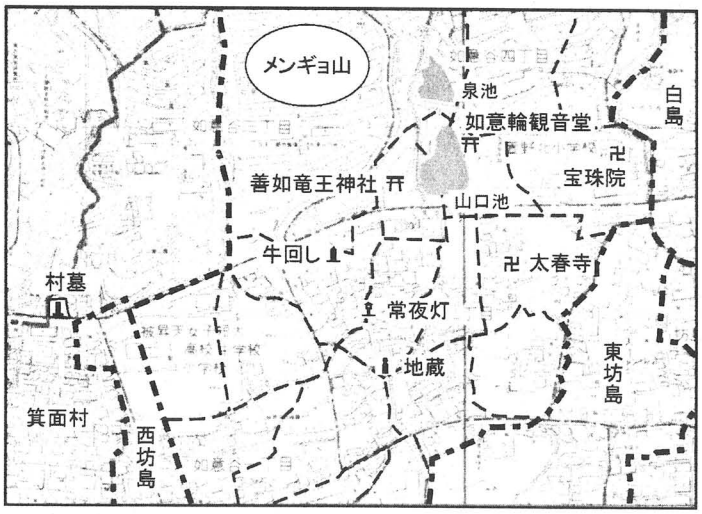


図14　如意谷集落周辺

龍王神社本祭　平成12年（2000）は4月9日に行った。4月と10月にお祭りをする。今は日曜日にすることにしている。4月が本祭。当番は約20年に一度まわってくる。本祭には神主が来る。昔は宝珠院が来た。神事をし、御神酒を飲む程度。山から下ろしてきてから盛んになった。

節句（５月）

5月5日。鯉のぼりを上げる。昔は菖蒲と蓬を括って尾根に

のせたり、菖蒲湯に入ったりした。

牛まわし　5月5日。牛の角にちまきを巻いて「牛まわし」といった松の大木を牛を牽いて3回まわった。麦を炊いて麦とヌカを混ぜ、牛にご馳走した。この松の木は30年ほど前に落雷に遭い、その後しばらくして枯れた。今その切り株に祠を置いている。ここに生える草木は切ってはいけないといわれているが、昔この木の枝を持って帰り薪にした人がいた。その人は夜中に木かえせぇ木かえせぇといわれる夢を見た。今なおここの草木は採らないと云う。

牛は30年ほど前まで飼っていた。数軒で共有することもあった。

サナブリ　田植え後、村全体が終わるとサナブリといって休んだ。

半夏生　ハゲッショ、ハゲといって半日仕事を休んだ。田に入るとはげるので入ってはいけないといった。

溝さらえ　5月最後の日曜か6月最初の日曜に田んぼを持っているものはみんなで溝さらえをした。道掃除の日もあった。

七夕　7月7日。瀧安寺の大護摩に行く。灰を持って帰り、家の四隅にまくと、火事がいかないと言った。

土用　土用の入りに餅をついた。土用餅といって神棚と仏壇に供えた。

（４）盆行事

墓掃除　8月6日。墓掃除をし、お花を供える。7日は家の仏壇を磨く。この日ギフ提灯を出す。

先祖迎え　13日、新粉団子をこしらえてお餅をついてお墓へお迎えに行きお供えするが、すぐ下げて帰った。夏痩せしないように他家のを貰うと良いといった。帰宅後すぐお水、お茶を供える。ソンジョさん迎えともいう。

供え物　ハスの葉の代わりにイモの葉を広げ、スイカ、18豆、桃、とうもろこし、ブドウ、マクワウリ、ナス、キュウリ、トマト、ソーメン、お花、まんじゅう等を供える。8月15日に小豆御飯、南瓜の煮たものを供えると足が早くなるといって先祖が早く帰れると言った。

写真35　瀧安寺の大護摩

写真36　お盆のお供え

先祖送り　15日の夕方。供えていたもの（餅、果物、饅頭）を川に流した。今は川が汚れるので禁止になった。

新仏　初盆という。特別に祀るということはない。

マンドロ　14、15、24日。マンドーローといった。男の子は昼、たいまつと西瓜と麦藁（一束）を持って村内の愛宕山まで登り、掃除をして集めた木の枝や葉をくすべて、大きな煙を上げていた。大きいほど良いとされる。夜たいまつに火をつけ「マンドロとぼせ、けやせもやせ」といって走って下りた。下から見えるところは走って、竜王さんで一回休憩し、池まで下りて、たいまつは池に投げ入れた。青年団が監視しながら下りてくる。昭和30年代後半火事騒ぎがあってやめた。

観音さんの庫裏に子供の世話をするのが好きな人がいた。この日はその人がおでんを作ってくれるので、子供たちはそれを楽しみにしていた。

盆踊り　8月18日観音さんのところでしていた。伊勢音頭、河内音頭を踊った。

地蔵盆　東垣内・北垣内・南垣内の3地区の当番制で女性だけで行っている。8月23日朝当番の垣内がお地蔵さんの前掛けを新しいものに変え、花を供える。14時頃に集会所に集まり、般若心経と御詠歌をあげる。昔は24日にお地蔵さんの前で夕方からしていた。子供にお下がりを分けていた。

（５）秋から冬の行事

八朔盆　ギフ提灯をかたずける。盆踊りをした。

月見　旧8月15日夜。子芋を炊き、鉢に13個（15個の家もあった）盛って、採ってきたススキと萩と共に月の見えるところに供える。子供が竹の先に針金をつけて、隠れて盗みに来た。芋名月と呼ぶこともあった。

彼岸　墓参りをする。おはぎ、奈良茶飯（大豆を焙烙でいって塩味にし米を炊く）を作って供えた。

秋祭り　10月14日。氏神は為那都比古神社だがお参りに行く程度。如意谷の入口の両側に提灯を上げる。10/13朝に出し10/15朝に片付ける。東垣内・北垣内・南垣内の3地区の当番制。

亥の子　最初の亥の日。夕方男女一緒に4～5人で行った。ワラの渋を取り芯（直径5～6cm）をオの紐（麻紐）またはしゅろの紐で固く巻き、直径1cm位の木の棒を40cm長さ位を中に入れる。持つ所は穂の部分で柔かい。大人に作ってもらった。ボタモチ（キナコ、アンコ）の大きなものを1コずつ作った。戸長さんの家からその近所を回ったりしたが、特に順番はなかった。おかき、アラレを貰って皆で分ける。

この日を境にして初めて炬燵を入れると火事が起こらないと言った。また大根畑に入ると大根が割れると言った。

誓文払い　12月1日～5日。池田の誓文払いに毎年連れて行ってもらい、色々と買ってもらった。楽しみにしていた。

冬至　南瓜を食べ、柚子風呂に入る。

３．その他の民俗

（１）講

愛宕講・行者講・伊勢講　1月15日に同時に行う。当番が掛け軸（愛宕、行者、伊勢）を管理している。25軒が持ち回りで、2軒が当番になる。集会所で行う。以前はすきやきをだったが、今は御神酒とつきだしだけ。

昔は3つの講がそれぞれ別の日にあって、経済的に大変だったので一緒にすることにした。愛宕山への代参は昭和30年頃までは行っていたが今は行っていない。

愛宕の常夜燈が会館の側に立てられている。

大峰山参りは戦前までは若い男は皆行っていたようである。文政七年の「行者講記録」（如意谷地区共有文書）には如意谷村講中として23人が名を連ねている。

庚申講　その年最初庚申の日に行う。当家（2軒）は事前に四天王寺の横の庚申堂に札をもらっておく。当日、当家の家で庚申の軸を掛けておまいりして、その後会食。

サイマツリ　いつかはわからないが冬にトウヤの家に集まってすきやきを食べたという。お札を伊勢の猿田彦神社にもらいに行った。4軒ぐらいで1つの組を構成していたらしく村に何組かあったようである。

ホンコサン（報恩講）　12月14日に報恩講があり、多田の光遍寺の院主が14、15日と泊りがけで来た。泊まる家は決まっていて、それらの家には上のお風呂、上のお便所があり、院主専用であった。当家の家で女性だけが集まり正信偈をあげる。昔は男も行っていたが、いつの頃からか行かなくなった。

写真37　常夜燈

寺のホンコサンには世話人さんの2軒がおまいりに行く。

オコウサン　2月24日。当家の家に女性が集まり、正信偈をあげる。

雨乞い　旱魃の時、竜王神社でした。昔竜王神社は山の上にあった。

葬式　昔は野辺の送りをして墓で火葬にしていた。遺体を輿にのせて4人で担いだ。この4人と喪主は白装束を身に着けた。喪主の白装束は違う形をしていた。道中には竹を立ててその上に大根を薄切りにしたものを置き、さらにその上にロウソクを立てて、火を灯した。

第 5 節　白島地区

1．地区の概観

概要　白島は、旧萱野郷十カ村の内の1つで、北摂山地の萱野山南麓台地、千里川（旧・唐子川）最上流域に位置し、集落内で新御堂筋線と箕面池田線が交わっているが、現在、新御堂筋を止々呂見まで繋ぐ開通工事が進められている。また、白島の名所として有名なのが、『摂津名所図会』（慶長10年）にも見られる「医王岩」（写真・医王岩）であり、全長10ｍ以上の巨大岩が、西北部の山中にひっそりと聳え立つ。

写真38　医王岩

字名の初見は『勝尾寺如法経奉加帳』（応永年間）の「泊嶋」であるが、他に、「城島村」（『摂津国絵図』）、「はな村」（『摂津一国高御改帳』・元和初年）などが見える。また、現在は「はくしま」と読むが、地元の人々は古くからの呼称である「はくのしま」の読みを用いている。

北部には北方の勝尾寺に連なる山地が広がり、その裾野には五藤池・新薩摩池・薩摩池をはじめとする溜池が十余り存在する。

これらの溜池は白島だけでなく、その周辺集落の灌漑用水としての役割や川の氾濫を防ぐ役割を果たしてきたが、大雨の際に決壊し付近の家屋を浸水させたり、旱魃による池の渇水で周辺集落との水利争論に拍車をかけたりすることも度々あった。

戦前、白島の村域（現・白島1～3丁目に坊島5丁目及び、石丸1～2丁目の一部を含む）の9割以上が耕作地として利用され、家屋（約80軒）は現在の白島2丁目辺りに集中していた。水回りの良い耕作地で作られた野菜は、箕面周辺の村々に売りに出されることもあったが、地元では手に入れることのできない魚介類は坊島からやってくる行商人などを通じて得ていた。戦後は、農業を離れる家が増加したため、耕地面積は全体の五割を占めるにとどまり、その背後で宅地化が進められて、現在、世帯数は300世帯以上を数える。

垣内　「○○垣内の○○さん」というように呼称として用いているだけであり、実際に垣内単位での行われる行事などはない。

・奥垣内（オクンジョ）･･･白島北方面。集落の中で少し飛び出していた。
・南垣内・・・・・・・・・・・・・白島南方面。自治会館辺り。
・西垣内・・・・・・・・・・・・・常照寺の裏辺り
・東垣内（ヒガシオ）・・・・白島東方面。
・中垣内・・・・・・・・・・・・・白島中央。

図15　白島旧字名

組　地区ごとの集まりで浄土宗・浄土真宗が混在している。戦中・後から「隣組」と呼ばれるようになった。葬式の主流となる作業はドウギョウが行うことが多いが、最近は隣組が葬式の作業を手伝うことも増えてきた。4月頃に京都の愛宕さんへ行く「愛宕参り」は組ごとにいける者が代参者となって、行くことになっている。

水利　以前は、白島所有の池の水を利用する者から灌漑費用（1回単位）をとっていたが、白島と石丸で水利組合を組織してからは、入会金さえ支払えば、度々の灌漑費用をとらなくなった。また、テントウダといって湧き水を利用して灌漑している田は、水利組合には入っていないこともある。水利組合は、両地区が共同で利用する五藤池・薩摩池・打越池の管理を基調としているが、組合員同士の結束が強く、水利とは関係のないことでも互いに助け合うという決まりが設けられている。

水利組合の作業は、1月下旬に行われる五藤池と薩摩池の土手の草焼きから始まる。2カ月後の三月中旬に五藤池から打越池へ送り水が実施されてから、6月の初めに灌漑用水の水出しが始まるまでは、組合員による草刈や溝浚えが入念になされている。特に夏場は溜

池周辺の草がすぐに伸びるので、組合員だけでは手が足りずシルバー人材センターに依頼して草を刈ってもらっている。その他、池などの補修や整備は随時行っている。

また、以前は、池の貯水に優先順位があり、五藤池・薩摩池を満たした後、新薩摩池（東西坊島・芝の立会）に水を通していたそうだ。

寺社　白島の檀家は、浄土宗阿弥陀寺（約50軒）と浄土真宗本願寺派常照寺（約25軒）に7：3の割合で分けられ、阿弥陀寺、常照寺ともに集落のほぼ中心部に位置する。開基以来、檀家と寺の繋がりは深く、寺の行事は檀家総代が中心となって準備などを取り仕切っている。戦時中（昭和19～20年）、両寺は、大阪市からの疎開学童への宿として利用されたが、常照寺は箕面市最初の託児所を昭和4年に、保育園を昭和23年に設立し、阿弥陀寺の前住職は子供への教育普及を周辺の人々に訴えかけるなど教育面でも熱心に活動された。

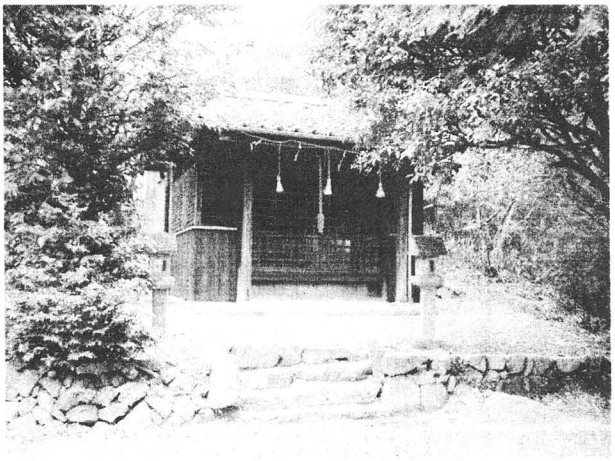


写真39　水神社

また、如意谷との境には医王山薬師寺があり、この寺の辺りに、為那都比古神社の神宮寺である大宮寺（医王山持宝院）があったといわれる。しかし、大宮寺は明治の廃仏棄釈により廃絶され、その跡には持宝院銘の層塔と「大宮寺池」が残されているのみである。

旧萱野十カ村の氏神は為那都比古神社であり、白島もまたその氏子圏に入り、神事の準備等に関しては中心的な役割を担っていた。当社は元来、為那都比古神と為那都比売神に分かれており、比古神は現在地に、比売神は大婦天王社として、小字土居の山中（現・薬師寺付近）に鎮座していた。そのため、以前は「1年に1度の逢瀬の日」として大祭の宵宮（10月13日）に大婦天王社から為那都比古神社へ太鼓御輿を出していたが、明治40年頃合祀された。なお、為那都比古神社は現在、石丸地区にある白島の飛地である。

そして、東北部には白姫大明神と水神社がある。当社は白島・石丸に氏子を持ち、雨乞いの神として祀られ、小ぢんまりとした神社であるが、地元の人々だけでなく、水に関わる全国の商売人の信仰を集めている。

その他、『摂津国豊島郡白嶋村差出明細票』（文政7年）には「具満寺」と「神明神社」の名が見えるが、明治の頃には廃絶され、それ以降は地籍図等で小字名としてこれらの名が確認できた。しかし、現在その正確な場所を知る人はいない。なお、神明神社跡の辺りには小祠があったが、道路の拡張工事にともない白島石丸共同墓地に移された。

2．年中行事

（1）正月の準備

正月準備の幕開けは「餅つき」からと認識している人がほとんどであり、この日に関して、特に呼称はない。

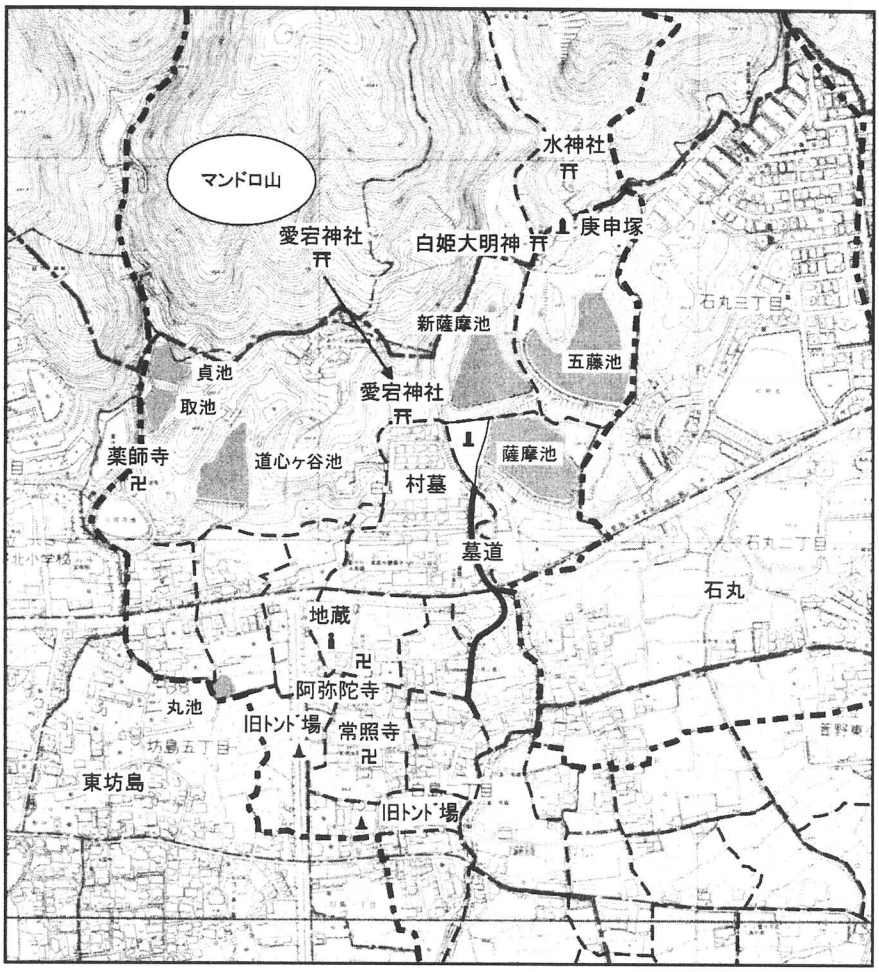


図16　白島集落周辺

門松　材料となる松・竹・梅などを近くの山や家の庭から調達するのは25日前後であるが、作られるのは「餅つき」の行われる頃であり、30日か31日に飾られる。

雄松（オンマツ）・竹・梅、雌松（メンマツ）・竹・梅を夫々束ねたもの一組として表門の左右に分けて飾る。雌松を飾らない家もあるが、雄松は必ず飾られるようだ。その他、松竹梅に加えて熊笹・南天・葉牡丹を飾る家や、小さく切った松竹梅を神棚・仏壇に供える家もある。

注連縄　各家の門口や玄関口などに飾られる注連縄は、門松などと同じ日に作られることが多いが、作る際の作法としては、左方向に縄をなうことと、手にツバをつけてはならないということである。最後に、橙・稲穂・ウラジロ・御幣などを付けて出来上がる。以前は主人が作っていた家が主流だったが、現在は購入しているという家が目立つ。

なお、為那都比古神社や水神社の注連縄は夫々の氏子総代らによって毎年年末に丸一日かけて作られている。

鏡餅　餅つきは、早い家では28日に行われるが、30日に行う家が多く、家の主人が中心となって家族だけで行う。29日は「苦の餅」といい、また31日は「気ぜわしい」といって忌み、

意識的に避けている。他に「仏滅」を避ける家もある。

こうして作られた鏡餅は、大きく2段重ねにしたものの下に半紙とウラジロを敷き、餅の最上部に昆布・干し柿・橙を順にのせたものを床の間に、小さく2段重ねにしたものを神棚・仏壇に飾る。竈（ヘッツイさん）に飾るのはサンポウコウジンさんに供えるためとされ、小さい3段重ねの鏡餅を飾るところが主流で、竈の上に特別に棚（南向き）を設けている家もあった。

他に、農具の置かれた納屋・井戸（ミズさん）にも飾られ、氏神である為那都比古神社や、山で仕事をするものは山の神のためにコシヌカ山などにも供えに行く。また、真宗は檀那寺である常照寺に世話方が2升5合のもち米で作った特大の鏡餅を持って行くならわしもある。

大掃除　早い家では25日頃から始められるが、31日に行われることが多い。子供の頃は「煤払い」と言って、笹を物干し竿にくくりつけたものなどで天井や庇を掃除させられたことを記憶している。

大晦日の晩　普段どおりの夕食、又はお煮しめの半端ものを食べた後、22時頃に年越しそばを食べるという家が多い。

（２）正月行事

初詣　「宵参り」といって、元日に入ってすぐに為那都比古神社に参る家もあり、浄土宗・真宗共に初詣の時間帯は問わないが、まず一番に氏神である為那都比古神社へ参ることが多い。その後に、浄土宗であれば阿弥陀寺、真宗であれば常照寺、というようにまず地元の寺社に参ってから、2日以降各地の名高い寺社に参る。特に、常照寺では元日の朝7時からオツトメ（修正会）があるので、檀家は必ず元日に参る。

若水　特別に意識して汲む家はほとんどないが、汲んでいる家は、家の井戸から汲んで来て神仏に供える。他に、水道から一番に出た水を若水と意識してとっておく家もあり、書初めに使うのに利用する。また、「若水」とはあまり呼ばず、「初水（ハツミズ）」と呼ぶ家があった。

雑煮　元日は、白味噌仕立てで丸餅、アゲ、豆腐、牛蒡、人参、大根、小芋などを入れるが、縁起をかついで昆布だしにしたり、「家族円満」という意味を込めて野菜はなるべく丸く切るという家もある。正月用に小さい大根なども栽培されていた。また、雑煮を炊くときは「マメに暮らせるように」と、燃料に豆殻の木をつかった。2日は焼き雑煮で、すまし汁に焼いた餅、水菜をいれる。

子供の頃に、家の主人が「女性の日頃の苦労を労うため」といって元日に台所に立っていたことを記憶している人もいたが、この地域の男衆は「神さん参り」が忙しいので元日も嫁に台所を任せていたという。真宗の家では、元日早朝のオツトメが終わったらすぐに食べられるように、早めに用意しておくことが多い。

ハツシゴト　一般の家庭では特に行われていないが、山と関わりのある仕事を行う人は、10日前後にコシヌカ山の頂上へ酒と塩を持って上がり、山の神に1年の無事を祈りながら撒くという。9日は「苦を招く」といって、決して山に入ってはならないという禁忌がある。

また、1月3日前後田に出て鍬入れのようなことをしている人を見かけたという人もいる。

お年玉　正月に貰ったり、あげたりしたものはお金が主流のようだが、子供の頃（昭和初期）に親から貰うのはお金であったが、石丸に住む親戚などからは正月の遊び道具（羽子板、凧など）や下駄をもらったという人もいた。

正月七日　「七草粥」と呼び、春の七草もしくは三つ葉、大根、人参などの野菜を入れた粥を炊いて食べる家と、「七草雑煮」といって、餅と7種類の野菜を入れた白味噌もしくはすまし汁の雑煮を作る家がある。

鏡開き　日にちは特に決めていないが、大抵の家では正月三カ日が済んだら下げる。開いた餅はカビが生えないように水に浸けて水餅にしたり、ぜんざいや雑煮にしたりして食べる。

また、1年のうちで大量に餅をつくのは年末ぐらいなので、正月用の餅とは別にカキモチ用の餅も作っておき、縁側に干しておいたという家もあった。

ヨウネン講　1月14日、宿となる家に集まってコンニャクを食べ、寝ずに夜明かしや博打などをしていた。集まることは戦後しばらくして行われなくなったが、現在でもこの日にコンニャクを食べる家がある。

トンド　1月15日の昼間に行う。近年は、為那都比古神社で回収して行っているが、昭和初期には、いろいろなところにトンド場があったので、家によって様々である。

公共のトンド場としては、現・白島2丁目の箕面池田線の辺りや、現・自治会館などが利用されていたが、そこに4本の長い竹を組んで正月飾りや書初めを燃やした。火の管理は青年団がしていたようだ。しかし、トンド場が近くにない家は、川辺（現・千里川）で焼いたり、家の庭や田畑で焼いた。また、この作業は家の男性が中心となって行ったので、女性の中にはどのように行っていたのか見たことがないという人もいた。

トンドが終わると、持って帰った灰を家の畑に撒いたり、帰ってから食べる小豆粥をその火で炊くという家も見られる。

ヤブイリ　1月16日頃、嫁に手土産を持たせて、子供がいれば一緒に実家へ帰らせていた。聞いたことはあるが、嫁の実家が遠いのでしていなかったという家も多い。15日頃から農作業を再開するので、正月三カ日が明けたら帰り、15日までに戻ってくるという家もあった。

（３）春から夏の行事

節分　2月3日、家族全員で「福は内、鬼は外」と言って、家の中と外に豆を撒く家が多

く、この日を「トシコシ」と呼ぶ。また、このとき、家の主人が柿の木に向かって「なるかならぬか　ならぬなら　切るぞ」と言いながら豆を撒いたという家もあった。

大豆は主婦が焙烙で炒り、撒く前に一合枡に入れて神棚に供えておき、年の数だけ豆を食べる。この日の夕食には、焼き鰯を食し、食べた後の鰯の頭をヒイラギにさして魔除として玄関口や裏口に飾っておく。

「年を越してから結婚するのはゲンが悪い」といって、トシコシ前に嫁入りが多いそうだ。

寒施行　寒施行もしくは、「カンギョウ」という言葉を聞いたことがある。

2月初旬の夜、勝尾寺から僧侶が1人で山を下って村までやってきたが、その際、僧侶が家々を回るので、村で米を集めて寄付していたことを覚えている。これは戦後まで続いた。

また、昔は妙見講（「妙見さん」）という講が、「寒施行」といって大寒のうちに講員を集め、家に祀ってあるお稲荷さんに油揚げで包んだおむすびを供えていたが、お稲荷さんに参った人に油揚げのおむすびを配っていたのを記憶している人も多い。

節句（３月）　雛人形は、3月3日までに出して、4月3日までに片付けるという家が多い。各家、初孫のときは親戚を呼び、蓬と色紅で色をつけた餅（緑・紅・白）を重ねた菱餅とご馳走を作ってもてなす。

彼岸　墓参りに行き、蓬団子やオハギを作って、仏前に供える。

阿弥陀寺では、午後からオツトメがある。当日は檀家の奥さん5，6名が、毎年当番制で午前中から手伝いに行き、五目飯や少しばかりのおかずを折りに詰めたものを用意する。この折り詰めはオツトメに来た檀家全員に配られ、みんなで一緒に食べたり、持ち帰ったりする。また、吉水講も行われる。

阿弥陀寺の檀家は、白島・西宿・今宮合わせて約150軒あるが、寺の行事は、檀家総代（白島・西宿・今宮から1名ずつ出されるので計3名）と世話方衆（白島6名・西宿2名・今宮7名。男性のみ）が中心となって準備などを進めている。世話方衆は満80歳で定年となるが、昔は死ぬまで務めていたようだ。

花祭り　4月8日を「花祭り」といって、阿弥陀寺へお供えに行き、甘茶の接待を受けた。この日には「花がよく咲く」と言われていた。

メンギョ　20年程前までは行われていた。4月15日に、五藤池まで家族みんなで巻き寿司などを入れたお弁当を持って出かけた。子供たちは池の回りで兵隊ごっこをしたり、走り回ったりして遊び、この日は白島の人で五藤池の回りは埋め尽くされていた。

メンギョは「免業」、「無縁経」が訛ったものという人もいる。

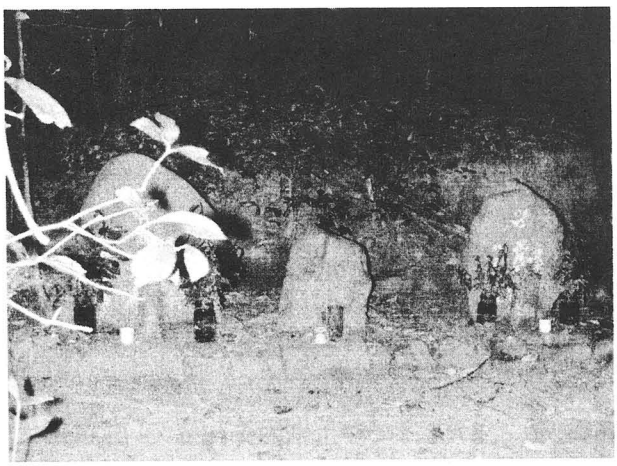


写真40　参道の庚申さん

牛回し　5月の初旬、牛に粽の葉（五藤池の周囲でとれたもの）を食べさせながら、庚申塚（現・白姫大明神前）（写真・龍神さんのお祭り参道の庚申さん）へ連れて行き、塚を1周させてから近くの大きな松の木に牛をつないで爪を切ってやる。博労も来ており、昭和10年頃まで行っていた。牛を飼うことは40年程前まで続いたが、1軒に1頭いる家もあれば、2軒で1頭を飼い、月交替で順番に利用していたという家もあった。

牛馬の健康を庚申塚の前で祈るということを聞いたことはあるが、見たことのない人が多い。

節句（５月）　5月5日、長男が生まれたときに嫁の実家から送られた武者人形と鯉のぼりを飾り、蓬餅や粽を作る。初節供のときは嫁の実家の両親を招いて、かしわ（鶏）料理で振舞った。また、初節供に大きい餅を作って、男児をその上に座らせ嫁の両親に持って帰ってもらうという家もあった。

菖蒲は束にして家の軒下に吊るしておき、その菖蒲をお風呂にいれて入った。

ヨウカビ　5月8日のことをそのように呼ぶ。特に何もしない。

サナブリ　「サナブリ」もしくは「アキヤスミ」といい、田植え終了後に1日休んだ。この日は、各家がご馳走を作り、みんなで集まって博打などをしてハメをはずすこともあった。また、苗を3つ束ねたものをサンボウさんの前に供えたという家もある。田植え時に人を雇った家では、その給料を払う日でもあった。

現在でも回覧版がこの日を知らせてくれる。

ハゲショウ　ハゲショウとは言わなかったが、夏至3日前を「ハンゲシ」と言って、一番田植えに適した日であるといわれていた。

七夕　7月7日を「七夕」と呼ぶが、七夕行事は特に行っていない。どちらかと言えば子供の頃は瀧安寺の護摩焚きのほうが楽しみだったので、「護摩の日」と呼んでいた人が多いようだ。

瀧安寺の護摩焚き　7月7日を「護摩の日」と呼ぶ。二化螟虫除けのおまじないとして灰を持って帰って、そのまま家の田に撒いたり、灰を竹の皮に包み、それを棒に挟んで田に立てたりした。箕面市外からも農業をする人が灰を求めてたくさんやってきた。

（４）盆行事

墓掃除　8月7日を「七日盆」と呼び、この日に墓掃除を行っていたが、現在は老人クラブの人がおこなっている。

施餓鬼　8月1日に浄土宗阿弥陀寺で「施餓鬼会」が行われる。
世話方が準備や片付けを全て取り仕切り、北向きに祭壇へ向かって施餓鬼棚が設けられる。午前中から新仏の遺族と吉水講が参列して、経や御詠歌を上げる。

先祖迎え　8月13日の朝10時頃に墓へお迎えに行き、帰ってから仏壇にオヒカリさんをあげる家が多く、また、13日の夕方に家の前で提灯を灯して迎えたという家もある。

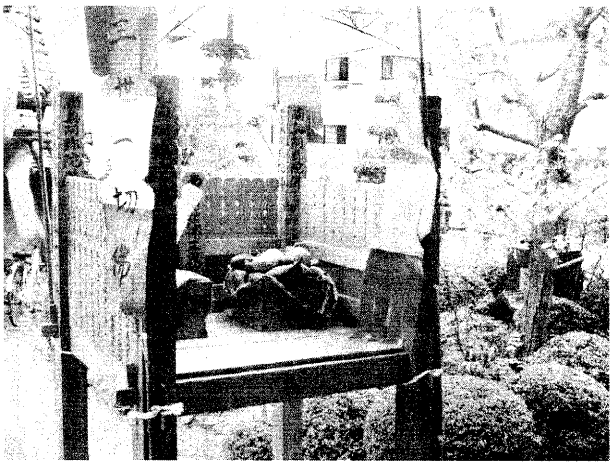


写真41　施餓鬼棚

棚経　浄土宗は、墓参りをおこなった後に、阿弥陀寺の住職が棚経を上げに檀家を回る。

真宗は、常照寺の住職が日を割り当てて（12日・西ドウギョウ、13日・中ドウギョウ、14日・東ドウギョウ）経を上げに家々を回る。

供え物　浄土宗は、箸を立てた御飯を3膳と素麺などを祭壇に置き、おかずと御飯をのせた小さな膳も供えられている。お茶は冷めきる前に取り替える家が多く、花生けには、樒や季節の花が生けられる。

また、以下のように日ごとに献立を変えている家もある。

・13日　お迎え団子
　（こぶし程の大きさの餅5個）
　メイとアゲを炊いたもの
・14日　素麺を炊いたもの
・15日　小豆御飯のおにぎり
　シンコ団子

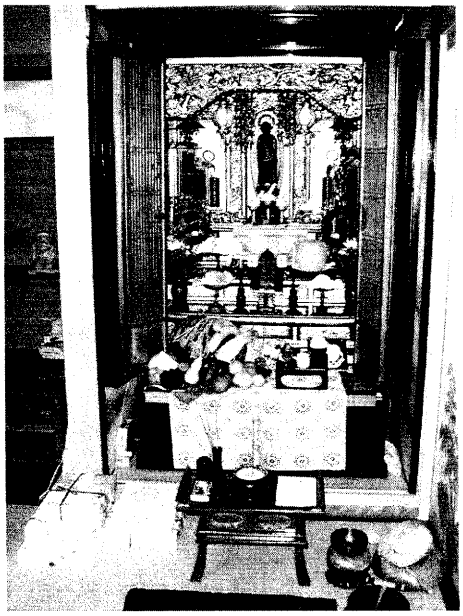


写真42　浄土宗の檀家の盆棚

真宗は、日常のオキュウジ（供物）であるオッパン（御飯）とお水を毎日供える他に餅も供え、花（マキ・レンゲ・オミナエシなど）をできるだけ豪華に生ける。また、盆の期間の食事などは普段とそれほど変わらないが、精進ものにすることを意識している。

浄土宗・真宗共に、大きい蓮の葉か里芋の葉の上に、スイカを中心としてホオズキ、夏野菜、果物などを置いたものが、盆の間供えられるが、浄土宗の家の方が少し多めにお供えをしているようだ。

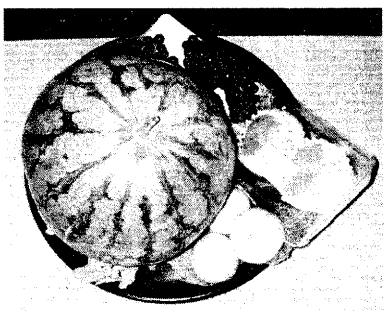


写真43　真宗の檀家の供物

新仏　浄土宗は、「新仏」といい、去年の盆以降亡

くなった身内のために仏壇の横に新しく棚（アラタナ）を設ける。アラタナには、輪切りにした大根に塔婆を突き刺して立て、棚の前にはオガラで作った20ｃｍ程の長さの梯子をかける。また、横には提灯を立てておく。

真宗もまた、「アラタナさん」と言って、満中陰といわれる49日の間、仏壇の横に簡単な棚を設け、先祖とは別にして祀る。

先祖送り　現在は夕方4時頃から花や線香を持って墓地に送りに行っているが、戦後までは夕方、唐子川（現・千里川）の川べりに供物と蝋燭を置いて、蓮の葉の上にシンコ団子や小豆御飯のおにぎりなどをのせたもの（シンコのフネ）を流して送った。その後、衛生面の問題から廃止された。

また、真宗のある家では夕方、玄関口に供物を置くことで先祖送りとしている。

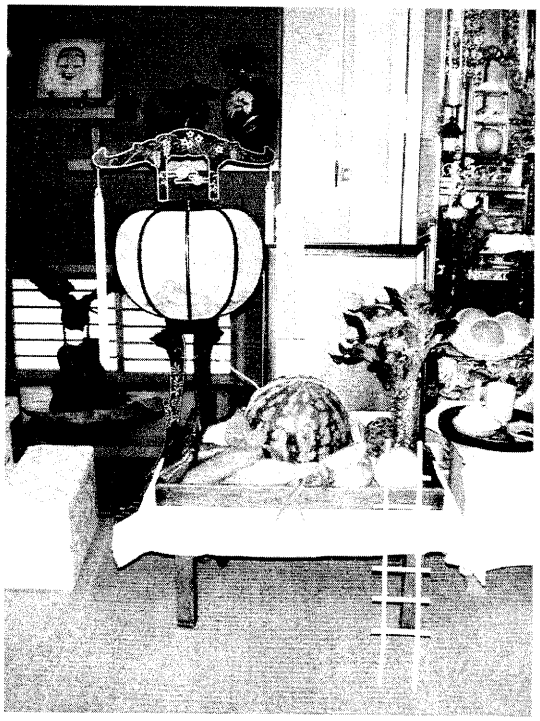


写真44　新棚と供物

盆踊り　現在は、8月19日の夜6時から9時に萱野東小学校で行われているが、戦後は青年団主催で、田や白島自治会館の広場を利用して行っていた。日にちは定かでないが、周囲の村が始めれば始めるといった様子であった。その日は櫓を組んで、江州音頭・炭鉱節・河内音頭などを夕方から深夜3時頃まで老若男女問わず踊り続けた。

地蔵盆　現在は、8月23日に浄土宗阿弥陀寺で行われており、昼間は子供会、夜8時からは吉水講による御詠歌という構成になっている。阿弥陀寺での地蔵盆は20年程前から始められたそうだ。

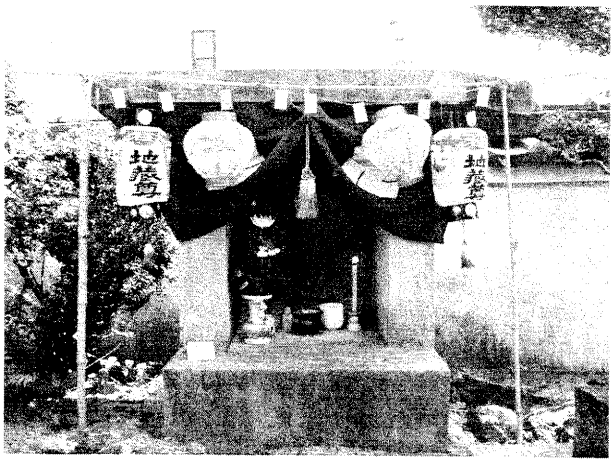


写真45　阿弥陀寺の地蔵盆

真宗は、地蔵盆を行っていないが、阿弥陀寺や個人が所有する地蔵にお供えを持っていくこともある。

最近まで家で所有する地蔵を祀っていた家も、少子化が進むにつれて個人の地蔵盆を行わなくなったが、以前は、23日か24日に、家もちのお地蔵さんや祠の前にも筵が敷かれて、近所の子供たちが集まり、年輩の女性5，6名が御詠歌をあげているという光景が見られた。また、戦後しばらくは青年団で箕面の北向き地蔵や坊島地蔵に参りに

行くこともあったそうだ。

マンドロ　昭和45年頃にマンドロで山火事が起こるまでは8月14・15・24日の夜に行われ、小学3年生から6年生の男の子が愛宕山から松明を灯して阿弥陀寺の近くの広場まで下りて行った。松明は、竹の割り木を束ね、全長約2mもあるものを自分で作り、大きくて立派であるほど周りに自慢できた。
次に以前行われていたマンドロの過程を記す。

＜マンドロの過程＞

・13日・・・・・・・・・麦藁をもらいに村中を回る。麦藁のない家はお金をくれた。

・14日・・・＜午前中＞　マンドロで通る山道の草刈をするが、そのときに集まった木の枝や草などをはらったものと前日の麦藁の台車にのせるなどして山に持って上がる。急傾斜の上、3日間分の麦藁を運ぶので、運ぶときに藁や葉が台車からたくさんこぼれ落ちたという。

この日ばかりは特別に親から丸一個もらえたという自家製のスイカを摺鉢池につけておき、みんなで1時間程泳いだ。その後、スイカを山に持って上がって、食べるが、食べ終わったスイカの殻は松明の火の粉で火傷しないように、本番の時にかぶるなどした。

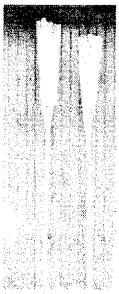


写真46
マンドロの松明

＜昼＞　マンドロ山の愛宕さんの灯篭の火をもらい、愛宕さんのお社の前で午前中に刈り取った木の枝や草などを焚く。また、他の村も同様に行っていたので、他の村に負けないくらいたくさんの煙が出るようにくすべた。

＜夕方＞　今度は麦藁だけを焚く。他村の目を欺くために、「ダマシ」といって麦藁を束にしたものを持って、山頂と中腹を走って往復し、中腹で一斉に消すという行為を2，3回繰り返した。

午後6時頃には青年団が山に上がってくる。

＜晩＞　いよいよ本番。麦藁で大火を焚き、松明に火を灯して、愛宕さんの広場にある石の上に一列に並ぶ。その後、松明を持って山を下るが、麦藁を運んだときの順路と反対側の道を通る。この時に、「マーンドーロー　火ーとーもーせー　けーやーせー　もーやーせー」と大声で唱えながら下りる。声が小さいと青年団に叱られるので大声を張り上げた。熱くなったら鎌などで青年団が燃えカスを落としてくれたそうだ。

どんどん山を下っていき、摺鉢池の近くでは「とっくりころがせ　すりばちおくれ」と唱える。うまく長い間燃やすことができると村の人たちにも自慢することができた。

最後は阿弥陀寺の横の広場で松明を全て燃やす。

※15日、24日も同様に行われる。

その後、山火事で中断されてから10年間途絶えたが、現在は形を変えて14日に行われている。

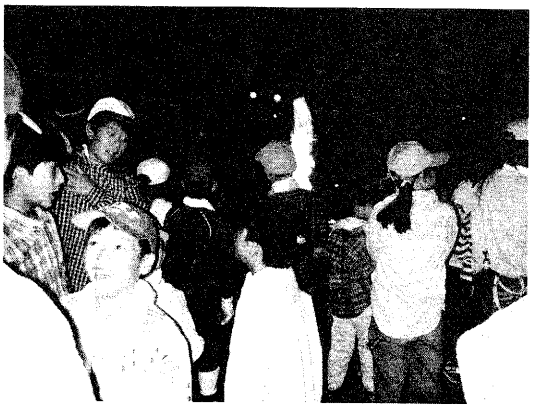


写真47　マンドロ風景

順路は、五藤池付近から白島公園までであり、保護者同伴で20名前後の子供たちと消防団の誘導によって行われている。また、ダマシの代わりに花火を数回打ち上げている。以前は男の子のみが参加できる行事だったので、女の子は眺めているだけであったが、現在の形になってからは女の子も参加できるようになった。

また、特筆すべきことに、マンドロは先祖の「迎え送り火」に充てられることが多いが、白島においてはマンドロを「害虫を追い払う行事」と認識している人が多いようだ。

（５）秋から冬の行事

月見　お月見は9月15日に行われ、各家縁先には、花瓶にいけたススキや萩と共に、月見団子と里芋がうずたかく盛られる。

戦前は、夕方になると、男の子2～4名ずつ（小学3～6年生）がグループを組んで、各家の軒先に供えられた団子や里芋を突きに出かけた。隠れて家の人が番をしている中、忍び足で近づき、垣根からそのすきを見て長い竹の竿の先に釘を取り付けてあるものなどで突いて取る。

突いた方は縁起が良く、突かれた方は縁起が悪いとされ、水をかけられたという人や、盗まれるのは縁起がいいこととされ、怒られなかったという人もおり、様々であった。子供たちは盗んだ量が多ければ多いほど縁起が良いとみなしていたので親に叱られることはなかった。しかしながら、戦後は道徳教育上、団子を盗みに行くことは悪行とみなされたため廃れていったようだ。

彼岸　中日の前後に墓参りに出かけ、各家ではオハギが作られる。

阿弥陀寺のオツトメ（彼岸法要）が中日にある。この日に出される料理は、毎年当番制で檀家の女性（4，5名）が用意し、畑でとれた物を各自が持ち寄って作る簡単な精進料理である。また、餅20個（丸餅。中身は何も入っていない白餅。直径約10ｃｍ、2升で20個作る。昔は自家製であったが、現在はもち米を専門店に持っていき作ってもらう）をオツトメのときに白島の檀家総代が寺に必ず供える決まりとなっている。

寺のオツトメとは別に、戦前には一心講が行われていた。「イッシンンコウハン」と呼ばれる世話役が各村に2，3名おり、農家の大きな家が当番制で務めていたようだ。一心講は、春と秋の彼岸前後に行われ、各村のイッシンコウハンの家で数珠くりを行っていた。イッシンコウハンが先導して、1週間のうちに7カ村以上（白島・坊島・平尾など）を回り、この時期は各村で出店が並ぶほど盛大であった。

秋祭り　10月14日に為那都比古神社で行われている。戦前は、小学校も休みになり、5，6年生が学校の先生の引率で参拝に行き、翌日は小学校の運動会と決まっていた。戦中か

ら戦後までは「相撲大会」が青年団主催で行われていた。境内には土俵も設置されていたらしい。相撲大会がなくなった後は4年間ほど「演芸大会」が行われた。初年は青年団による素人芝居が行われ、大変評判が良かったので、本職の役者を招いてするようになった。初めのうちはよく儲かったらしい。今は祭の娯楽も「福引」になってしまった。

昔は11月に入ってから稲刈りを行ったので、10月は祭の準備に専念することができた。現在は10月に稲刈りを行うので、祭にまで手が回らなくなったようだ。戦後しばらくは白島青年団が中心となり、祭の準備が行われていたが、青年団がなくなってからは、氏子総代が旧萱野十カ村（坊島は東西に分かれる）から1名ずつ出され計11名。更に旧萱野十カ村を南北に分けて責任役を北萱野（別称：北垣内）から1名、南萱野（南垣内、芝のあたり）から1名ずつ選出し、計13名が中心となって祭の準備が進められている。

各家は言うまでもなく、祭が近づくと各村の中心地には鳥居（木製）に御神燈（5つ）を取り付けた「鳥居提灯」が建てられた。祭の当日には赤飯が作られ、嫁入りした娘などもこの日には帰ってくるので、家の鶏を使い、夕飯にすき焼きなどのご馳走をして楽しんだ。

御輿は、合祀されてからも出ていたらしいが、喧嘩があってからは取りやめになったそうで、御輿が出たのを記憶している人はいない。太鼓御輿も一緒に出ていたらしいが、現在は白島から為那都比古神社の辺りに、「太鼓道」という名の道が残っているのみである。

亥の子　11月最初の亥の日に行われた。亥の子に使用する道具（「イノコ」）は、細い木を芯にして藁を束ねて縄で巻いたものを各自が作った。また、棒の先には藁を輪にしたものが持ち手として付けられている。

当日は夕方に集まり、5，6名（小学3～6年生）がグループを組んで、新婚の家や子供の誕生した家、区長さん（現在の自治会長にあたる人）を中心に回った。めでたい家や景気の良い家でなければ良いがもらえないからである。

イノコを打つときに唱える言葉は、

「亥の子　亥の子　亥の子の晩に　花嫁さんもろたー　ひとつ祝いましょう
　ポッペンポーン！」

「亥の子　亥の子　亥の子の晩に　大雨降って　船を浮かべて　船頭さんのせて
　○○さんが舵をとる！」

など、家の状況によっていろいろ変えたらしいが、必ずめでたい言葉を言わなければならなかったようだ。

炬燵仕度や、農作業に使用した莚叩きはこの頃に行われた。

十夜　11月の中旬に阿弥陀寺でオツトメが行われており、この日には小豆御飯（または、五目御飯）とのっぺい（野菜の煮物）を食する。

誓文払い　女性は12月1日に、池田で行われている誓文市に出かけて衣類などを買っていたようだ。

冬至　各家では中風に効くということで、南瓜の煮たものを食べた。また、風邪の予防のため、風呂に柚を浮かべて入る。

３．その他の民俗

（１）講

庚申講　農業の神を敬い、牛の無病息災を願う日と認識している。毎月、庚申の日に当番の家に集まっていたが、現在は1月だけになった。当日は、当番の家で夕方から夜中まで農業の話をして過ごす。当番家の床の間には掛け軸が祀られ、その前にお神酒が供えられる。四天王寺の庚申堂に参り、三猿の御札を購入して、母屋に貼っている家もあった。・行者講・・・・年に1度「行者参り」といって大峰山に登る。行者参りは以前、青年団で行くことが多かった。（その際、洞川で一泊したそうだが、遊郭などもあって賑わっていたようだ）

当番家の床の間には役行者の掛け軸が祀られ、お経が上げられる。なお、お経は口頭伝承であったが、最近書物に残された。

愛宕（講）　講という認識は特にないようであるが、毎日当番制でマンドロ山にある愛宕さんの灯篭の火を付けに上がる。愛宕（京都）参りといって年に1度参っている。白島で農業を営んでいた人は皆この役目を担い、盆に行われるマンドロが愛宕さんの行事の中で一番盛大なものと認識されている。

伊勢講　以前は年に2度オツトメをしていたが、現在は11月20日前後（アキヤスミ）の1日だけ行われている。5，6軒ずつでグループを組み（合計4組）、各組が別れて当番制で宿を提供するが、当番になった家は、床の間に伊勢講の掛け軸をかけ、その前に鏡餅と鯛を供えて、おひかりを上げ、その後、皆で飲食を共にする。

昔は、講員の人が代参者のために積み立てをおこなっていた。青年団が伊勢講員の代わりに代参に行っていたという時期もあり、代参に行かない団員も今宮まで行ってノボリを立て、送り迎えをするために、団長の家に1週間泊まって代参者の帰りを待ち続けた。帰宅後、各青年団員は自分の組の伊勢講へ帰宅の報告に上がり、その証拠として伊勢音頭を踊らなければならなかったそうだ。

なお、以前は組ごとに伊勢講の田畑を所有し（『摂津国豊島郡白嶋村差出明細票』・文政7年より）、こうした「伊勢講田」を貸出することで講の資金を得ていた。

観音講　女性のみ。浄土・浄土真宗関係なく、入ることができる。

吉水講　浄土宗の女性のみ。施餓鬼会や地蔵盆のときに御詠歌をあげる。

一心講　白島は「西組一心講」に入っていたが、西組一心講は春・秋の彼岸に大きな行事を行っていた。また、白島だけの一心講は毎月1度、夜に集まり、数珠繰りを行っていた。戦後しばらくはあったが、世話をする人が亡くなったので白島ではなくなった。

尼講　「ゴジュウ」を受けて戒名を貰った女性が、老後になると入れる講。彼岸の後に1

日集まるが、重要な役割としては、葬式の「野辺送り」の際、白装束を着て御詠歌を詠うということである。

水神講　大正13年の大旱魃を起源とする。世話役が白島・石丸合わせて9名。毎年元旦（元旦祭）と8月21日（水神祭）に水神社で祭りをする。元旦には注連縄を新しく作り変え、8月21日の大祭では、護摩焚きをした後、参詣した人におにぎりを配っていた。

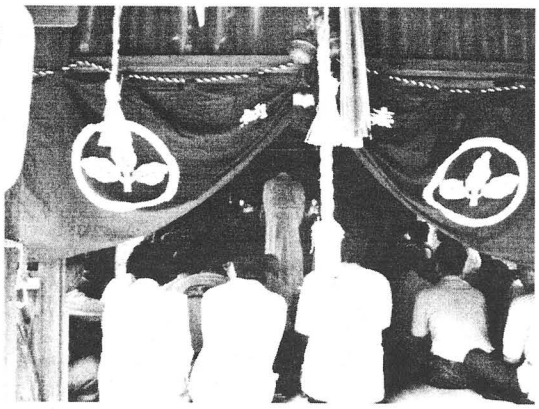


写真48　龍神さんのお祭り

薬師講　薬師寺の講。毎月8日に集まる。講員は、萱野十カ村のうち8カ村で、合わせて10軒。

太鼓念仏講　太鼓念仏講は、ドウギョウを同じくする者で組織されている。本来、本家9軒で構成されていたが、最近、10軒となった。

現在は経の内容や打ち方を全て書物にまとめているが、昔は完全に口頭伝承であったため、太鼓念仏講の起源などを知ることはできない。ただ、太鼓念仏講がもつ最も古い資料で「万延元年庚申七月」と記された撞木が残っているため、少なくとも万延元年（1860）には発足されていたようだ。

念仏を唱える際に使われる道具は、太鼓（2丁）と鉦（8丁）で、「導師」と呼ばれる者の先導により、「ツンツラツンツン･･･」などと唱える声に合わせて太鼓と鉦を打つ。（太鼓念仏講の譜面）

写真49　撞木（萬延元庚申七月）

写真50　太鼓念仏講

太鼓念仏

(上の句)

導師　至心帰命阿弥陀佛　南無阿弥ダンガ

南無阿弥ダンガ　南無阿弥ダンガ　ヒッツンツン
ツンツラツン　ツンツラツン　ツーン　ツーン
ヒッツン　ツンツン　ヒッツンツン
ツンツラツン　ツンツラツン　ツーン　ツーン
ヒッツン　ツンツン　ヒッツンツン
ツンツラツン　ツンツラツン　ツーン　ツーン　ヒ
ツンッ　ツンッ　ツツツツツツ

ツンッ　ツンッ　一ツ　ニツ　三ツ　ツンッ　一ツ　ニツ　三ツ
ツンッ　一ツ　ツンッ　一ツ　ツンッ　一ツ　ツツンッ
ツツンッ　ヒッツンツン　ツツン　ツン　ヒツ
ヒツン　ツンツン　ツツン　ツン　ツンツン　ツツツツツツ
ツツツツツツ

ツンッ　ツンッ　一ツ　ニツ　三ツ　ツンッ　一ツ　ニツ　三ツ
ツンッ　一ツ　ツンッ　一ツ　ツンッ
ツルン　ツルン　ツンツン　ツルン　ツルン　ツンツン
ツツン　ツン　ツンツン
ツツツツツツ　ツツツツツツツ

ツンッ　ツンッ　一ツ　ニツ　三ツ　ツンッ　一ツ　ニツ　三ツ
ツンッ　一ツ　ツンッ　一ツ　ツンッ　ツンツン　ツンツ
七ツン　ツンッ　ツンツン　ツンヤ　ツンツン　ツンツン
ツツツツツツツ　ツツツツツツツ　ツツツツツツツ
ツン　ツツン　ツン　ツツツツツツツ　ツン

(下の句)

導師　阿弥陀佛

南無阿弥陀佛　　南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛　　南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛

導師　十方三世の諸佛はなあ

功徳のいわれを尋ぬれば　唯この弥陀の名号は

六字の中に納まれる
七重宝樹に咲く花は　散れども更に着きせられ
時に変わらぬ色なれど　春とも秋とも言いがたし

導師　阿弥陀佛

南無阿弥陀佛　　南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛　　南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛

導師　唐木先祖のお地蔵はなあ

西の川原で大悟して　安楽国

導師　西を遥かに眺むればなあ

四方に雲がたなびきて　安楽国

念仏一会

一同　願似此功徳平等施一切同發菩提心

往生安楽国

毎月1軒、講員の先祖の命日に順番で家をまわって奉納している。また、講員の家族が亡くなったときは、その通夜の席でも奉納することになっている。

最大の行事は、盆の期間中（平成12年度は8月14日）に行われる奉納であり、肩に和袈裟をかけ、朝8時に白島石丸共同墓地に集合する。まず、墓地内の会所にある西向き阿弥陀坐像前で念仏を唱え、その後、夫々の講員の家10軒を、道なりで順番に回っていく。席順は、導師が仏壇の正面、その後ろに鉦が座り、最後尾に太鼓が立つということになっている。導師は熟練の者が務めるが、その他の楽器は誰が何をしても良いことになっている。夫々の家で約30分間休みなく念仏と、それに続いて「日用勤行」が唱えられ、最後の10軒目を回り終えるとちょうど昼飯時となる。輪番制で1名ずつ当番（「ヤド」）を務め、当番にあたった者は終了後、家に招いて茶菓子などを出すが、以前は「泥鰌にゅうめん」を当番が昼に振舞い、酒宴を開いたという。現在、講の積立金などはない。なお、太鼓念仏は大阪府の無形民俗文化財に指定されている。

神明講　戦前は16軒あったが、現在は約8軒に減少した。年に1度・2月16日に当番家（輪番制）の床の間に天照大神の掛け軸をかけておひかりを上げ、講員を集めて共食をする。供え物は伊勢講と似ている。現在も講所有の田畑があり、以前は積み立てをして旅行に行っていた。

妙見講　現在は存在しないが、ある家の先代が組織していた講で、屋敷内に祠を設けて月に1度講員を集めていた。「寒施行」が最も大きな行事であり、太鼓をたたき、油揚げのおむすびを参拝者に配布していた。

ドウギョウ　ドウギョウは浄土宗と浄土真宗で分かれている。式の全作業はドウギョウ単位で手伝っていたので、「ドウギョウは大切にしなければならない」といわれている。特に、浄土宗では「ゼン送り」と呼ばれる野辺送りの際に、尼講が経を唱えて見送りをしているが、五仏（僧を五人呼ぶこと）以上のときに勤める「警固引き」が持つ竹の作成、村中に知らせる「寄せの鐘」を打つこと、火葬の準備や火の管理などもドウギョウが行っていた。なお、「警固引き」などの役を務める者は裃を着用していた。戦前、遺体は白島石丸共同墓地で焼いており、火葬場ができたので戦後は火葬場で焼くようになっていたが、それ以後も墓地で焼く家が多かった。

暮らしの中の池　白島で今でも語り継がれている出来事として、大正13年の大旱魃がある。千束シバを焚くなどの雨乞いは最近までよく行われていたが、その年の旱魃は近畿地方全体の池を渇水に追い込むほど長期に渡るものであった。そのため、人々の力だけでは手に負えず、四国から祈祷師を招いて、村人総出で雨乞いを行い、翌日の8月21日に雨を降らせたという。以来、毎年8月21日前後には水神社で水神祭が行われることになっている。また、集落内に点在する竹薮は、洪水に備えたものであり、昭和10年頃にも大雨により五藤池が決壊し、家や住民が流されるなど大きな被害を起こしたこともあった。

白島の人々が特に池を重要視していたことは、他の地域ではメンギョを山で行っていたのに対し、白島は五藤池のほとりで行っていたことからもわかる。

※池の由来

五藤池（五島池）・薩摩池・新薩摩池の順に作られた。五藤池は豊臣秀吉の時代に、新田開発に伴い作られたといわれており、名称の中に含まれる「籐」は、籐吉郎の一字をとっていると伝えられている。薩摩池は、萱野郷が薩摩・島津氏の知行地であった頃に作られたといわれているので、薩摩池と名付けられた。

新薩摩池の原型である奥薩摩池と中薩摩池は、文政年間、印藤佐衛門氏の所有する池であり、佐衛門は現・永寿園周辺一帯にあった自分の田に引水していたが、死後、2つの池は1つにされて新薩摩池が誕生し、東西坊島と芝の溜池となった。天保12年の記録（『白島石丸共有文書』）には既に新薩摩池の名が見える。

第６節　西宿地区

１．地区の概観

概要　西宿地区は、旧萱野郷十カ村のうちの一つであり、国道171号線の南側を東西に走る旧西国街道と、それに交差する北の白島地区へ通じる道を中心に古くからの家が立ち並ぶ。ムラができたごく初期の頃は、街道沿いに3～4軒あるだけだったという。西国街道沿いには、元禄時代には既にあったという北向き地蔵や、「宿屋」「お茶屋」などと呼ばれた家があり、参勤交代の大名の供をする侍たちが休んだ家であった。大名の宿であった茨木市の椿の本陣の西にあるので、「西宿(にしじゅく)」といったという。

江戸時代、宿屋で休んだ侍が馬をつないだといわれる場所は、かつてカスガと呼ばれ、常会や青年団主催の紙芝居などが行われた、地区の中心的な場所であり、地区の会館も以前はそこにあった。現在は児童遊園となっており、サイマツと愛宕の祠がある。西国街道と交差して北の白島地区へ通じる道は、西国街道より南に伸びて集落を抜け、そこから墓道と呼ばれて田畑の間を進み、ヤマの斜面の墓へと続く。斜面のすぐ下のあたりの田を「ハカノシタ」と呼んだ。

現在の船場は、昭和47年の開発までは、多くの田畑や池があり、マンドロやメンギョをした西宿地区のムラヤマであった。萱野地区のヤマとの境界はあいまいで、ミナミヤマや天神山、マンドロヤマなどと呼ばれていた。北の勝尾寺のある山は、ムラヤマと呼びシキビ等をとりにいってはいるものの、正式な西宿地区のヤマではない。

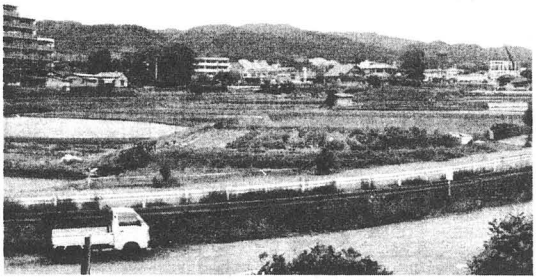


写真51　西宿遠景

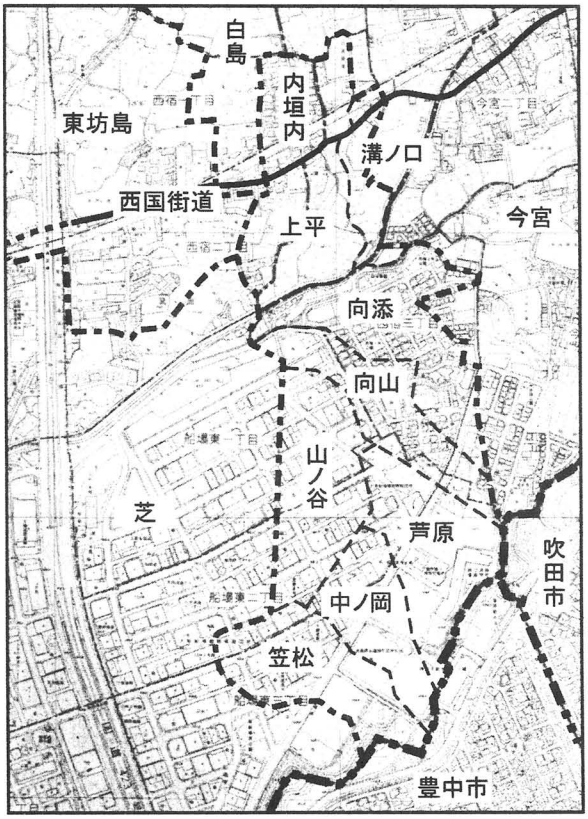


図17　西宿旧字名

自治会（垣内・組）　垣内という言葉は通用しない。ただ、西宿地区の北部にある本家のことを「オクンジョ」ということもあったらしい。村株は19株であり、分家なども行われたが、昔から殆ど数に異動はないという。

地区内は171号線以北の地域は白島地区へ通じる道で東西に分かれ、171号線以南の地域は西国街道によって南北に区分されて、合計4組の隣組がある。回覧版を回したり、葬式の手伝いをしたり、1年ずつ当番で地蔵盆と秋祭りの提灯を立てる。当番は、8月の地蔵盆が済んでから、次の組に交代する。

西宿地区の自治会には西宿地区に住む住民全てが入っているが、実際に活動に携わっている人は家を地区内に持っている人だけである。「西宿」といった場合は二十数軒の家だけをさし、西宿の会館は自治会の持ち物ではなく、これらの昔から住んでいる人たちのものであるという。

水利　171号線以北の田は白島地区の五藤池の灌漑領域にある。白島地区から流れてきた水は、西宿地区を潤した後、萱野地区へと流れていく。171号線以南は西宿地区内にある竹狭間池と、今宮地区から流れてくる「シンケ（新池）」と「31名の個人池（沼田池）」で灌漑をしている。田の持ち主は、池ごとにある水利組合にそれぞれ属するため、自分の田が二つの池から水を引いているような場合、一人で二つの水利組合に属することになる。木戸ヶ池は、西宿地区の中にあるが、萱野地区の田の灌漑をしている。

かつてミナミヤマが存在した頃はヤマに多くの池があり、ヤマの田畑を潤していた。

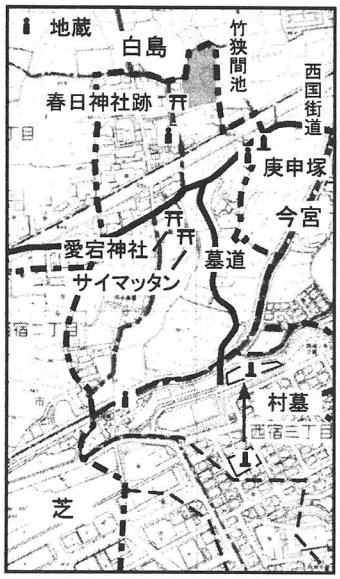


図18　西宿集落周辺

寺社　宗派は浄土宗が多く、ついで浄土真宗が多い。浄土宗の檀那寺は阿弥陀寺が殆どだが、浄国寺の檀家もある。村の中には寺がない。為那都比古神社に統合される前までは、竹狭間池の付近にこの地区の神社があった。『角川日本地名大辞典』によると春日神社といったらしいが、昭和初期には最早その名を呼ばれなくなっていた。

2．年中行事

（1）正月の準備

12月20日を過ぎた頃から正月の準備を意識し始めるが、特に改まった呼び名はない。実際に作業を始めるのは大体25日を過ぎてからが多い。

門松　今は、殆どの家ではたてられていないが、船場の開発前のヤマがある頃は、小さな松や竹や梅をそこでとってきて、紙で巻き、水引でくくったりして門口につけた。門口にヤマでとってきたさら土を盛り、その上に松を立てる家もあった。現在ある家では、門松の代わりに、嫁が近所の竹狭間池の竹林で青竹を切り、シュロの縄で縛って門柱に巻いている。

注連飾り　31日に玄関に一つだけ飾る家が多いが、自動車にもつけるという家もある。今は、地域のコミュニティセンターで作って配ったものか、買ってきたものが主流である。地区の総代が、為那都比古神社に奉納しに行く。

ウラジロなどの山草は、北のムラヤマにとりにいく。注連縄作りは、家の主人の仕事であるとする家と、嫁の仕事であるという家がある。

ある家では、本来は嫁の仕事であるが、嫁に渡さずに自分が今でも昔同様に作っているといい、それによると、11月の稲刈りが終わってすぐにモチワラで5〜6個つくり、自分の家用に一つだけ残して、近所や嫁の実家、息子の養子先に配っている。嫁の実家へは、農家にとって大事な労働力たる嫁を育ててくれた事を感謝して、自分の家の分と同じくらいの大きさのものを12月20日頃までに作って持たせている。12月25日頃、ウラジロと榊をとりに勝尾寺の手前のムラヤマまで、仲のよいもの同士で山歩きをする。坊島や他の地区からもそのあたりへ採りにくる。自分は山の神におむすびを一つ供えてから採るが、供えない人もいるという。

鏡餅　餅つきは、29日は「苦がつく」といって忌み、28日か30日につく。機械を導入してからは、嫁だけの仕事となっている家が多いが、それ以前は、嫁の仕事という家と、家の主人の仕事という家がある。浄土宗、浄土真宗とも檀那寺と為那都比古神社、もしくは檀那寺のみに大きな二段の鏡餅を持っていく家が多い。近年では餅の代わりに米やお金を持っていく家もある。ある家では、直径25cmほどの盆に一杯の大きさの鏡餅を作って載せ、ウラジロと橙をつけて持っていく。

多くの家では、三方に三段重ねの鏡餅を載せ床の間、もしくは神棚や台所に飾る。荒神さん（ヘッツイサン）・三宝荒神に供えるという意識が強い。蜜柑、昆布、串柿、ウラジロ等をつけ、ある家では「供え物は端数がよい」といって、これら四つの飾りと餅とで合計五つのお供え物からなる鏡餅を供える。

ある家では、二段重ねの鏡餅を三方に載せて2ヶ所ある床の間に飾り、それとは別に三段重ねの鏡餅をヘッツイサン（荒神）に供える。仏壇と神棚、井戸にも鏡餅が飾られる。トイレに飾るという家や、かつて蔵に飾っていたという家もある。神棚と仏壇には小餅を2個供えるだけの家もあれば、小さな二段重ねの餅の上に蜜柑を載せて飾る家もある。また、仏壇に一番大きい鏡餅を供えるという家もある。

ある家では、墓とかつて家の敷地内に祀っていた祠に、児童遊園に場所を移した現在も30日に供え、他のところへは31日に供えるという。

大掃除　年末を意識し始めた頃から家の内外を片付け始める。多くの家では、年末に丸一日をかけた大掛かりな掃除は行わない。29日頃から始める、という家もあれば、31日に竹箒ですす払いをしていた、という家もある。「はきだしごとはよくない」といって、1月1日に箒で掃除をしたりお金を使う事を控えていた、という家もある。

昭和30年代頃までは、8月のお盆前に十ヵ村同じ日に虫干しをし、市の人が見回りに来ていた。

大晦日の晩　年越しそばと称してそばを食べるが、あまり強いこだわりはなく、うどんと両方用意しているという家や、とにかく麺類を食べる、という家が多かった。昔から年越しそばを食べていたという家もあった。その他に特に決まって食べるものはなく、お

煮しめの残りを食べる家がある程度である。

（２）正月行事

若水　1月1日、その年初めて井戸から汲む水のことで、昭和の初期頃までは「若水」として意識されたらしい。井戸がある時期は、若水を雑煮や神仏に供えるのに使っていた。

ある家では、「初水（ハツミズ）」ともいって、「若水をよそに先に汲まれるのはよくない」といって、嫁が早起きして汲まねばならなかった。また、その家では「水の恩はおくれない」といい、水を汲む前は普段から手を合わせて拝んでいた。

雑煮　多くの家では、1月1～3日の三カ日同じ味付けの雑煮を食べるが、元旦だけ食べる家や、三カ日同じ雑煮を一番雑煮、二番雑煮、三番雑煮といって食べる家、フクアカシといって3日目をすまし汁で食べる家、1日と3日に味噌味の雑煮を、2日にすましの雑煮を食べるという家もある。元日に神仏に供える家もある。

餅は丸餅で、昔はどこも自家製の味噌で味付けをしていたが、近年では白味噌を買ってきて使う家が多い。具については、「丸く切るのがよい」「餅を入れて7種類になるようにしている」と意識している家もあった。クワイもしくは小芋、牛蒡、人参、大根、あげ、豆腐か竹輪をいれる家が殆どである。豆腐は焼き豆腐を入れる家もあり、牛蒡の代わりにネギを入れるという家や、クワイ、小芋、牛蒡、人参、と餅で作る、という家もあった。また、3日目にすまし汁で食べるといった家では、餅、揚げ、水菜で雑煮が作られる。

殆どの家では、昔から雑煮作りは嫁の仕事として認識されていたが、古くは一家の主が作っていたという家もある。

燃料には特にこだわっていなかったが、ある家ではウラジロとは別の日に北のムラヤマで取ってきた柴で火を焚いた。また、豆殻の木はよく燃えるので、普段から焚きつけるときに使っていたという家もあった。

初詣　浄土宗では、1日に檀那寺と為那都比古神社に参る。浄土真宗の家は檀那寺へは行かず、神社だけに参る。為那都比古神社へ宵参りをする家もある。大体の家では、朝、先に神社へ参ってから寺へ参るが、寺で早朝の修正会のオツトメを済ませてから神社へ参るという家もあった。その後、墓へ行く家や会館へ行くという家もあった。昔は会館でなく区長の家に新年の挨拶にいっていた。また、中山の清荒神に2日に行くという家や、8日まで（子どもが学校の休みのうち）に参る家もあった。

お年玉　もらった覚えがないという人もいたが、もらった記憶のある人はお金でもらっていた。ボールや玩具など物でもらう事もあった。昔は金銭的にゆとりのある家以外では行われていなかったらしい。

ハツシゴト　オレイマイリといって、嫁が1日に各田を少し鍬で掘ってごまめを2～3匹ずつ埋めていたという家や、ハツシゴトといって、家の主人が2日に鍬で形だけ耕していた家があった。昭和初期までは個人的にある程度行われていたらしい。

フクアカシ　言葉自体聞いたことのない家もあったが、1月3日に食べるすましのお雑煮のことをフクアカシという家と、1月4日に行う鏡開きのことをいう家、1月4日に餅と菜をいれた粥を食べることをいう家がそれぞれ1軒ずつあった。

正月七日　多くの家では、1月7日のことをナナクサといって水菜と粥と餅を入れて作る七草粥を食べる。ある家では、セリ、ハコベ、ホトケノザ、スズナ（カブラ）、スズシロ、餅をいれて「ナナイロ（7種類）の具」で食べる。神仏に供える家もある。

鏡開き　3日に下げる家、4日に下げる家、15日に下げる家とあり、時期はまちまちである。

開いた後の始末は、切って餅箱に入れて保存する、寒の水につけて水餅にする、焼く、干す、おかきやあられにして食べるなど色々である。

「寒の水に餅をつけるとカビが生えにくい」という言い伝えを聞いている人もいた。鏡餅とは別に、三カ日の間におかきを作るという家もあった。

トンド　トンドという言葉自体は殆ど使用されないが、注連縄など正月の飾り物は1月15日に外す。多くの家では、個人で畑等で燃やしていた。今は塩で清めてからゴミとして出している家もある。また、青年団主催で毎年同じ田を借りて、正月に使った飾りものや箸や書初めを燃やしていたという家もあった。ある家では、「稲の厄除けになる」といって終わった後の灰を持って竹にはさみ、自分の田に刺していた。また、「無病息災になる」といって餅をその火で焼いて食べることもあった。

1月15日の朝には餅の入った小豆粥を作り、神仏に供えたり、食べたりする家が多い。この小豆粥を食べる事で、正月をしめくくるという意識がある。

ヤブイリ　1月16日から数日間嫁が子を連れて里帰りをする。土産に菓子などを持たせる。今でもしている家もあるらしい。ある家では、仏壇に供えていたお菓子等を姑が下げてきて、「ミアカシ」といって土産にもたせてくれた。

（３）春から夏の行事

節分　2月3日のことをトシコシと呼び、昔は畑でとれた豆を炒って、「鬼は外、福は内」の掛け声とともに皆で豆撒きをした。豆は焙烙で嫁が炒るか、網で炒った。豆は豆撒きに使うほか、神仏に供えたり、数え年の数だけ食べた。多くの家では鰯を焼いて食べ、その後の鰯の頭をヒイラギに刺して玄関と勝手口に差した。鰯を食べるだけで飾らない家もある。そのほか、昔からの慣わしとして、麦御飯を食べる家や、神社の張り紙に書いてあるその年の恵方を向いて細まきの寿司を黙って食べる家もある。

ある家では、「保存がよくなる」といってこの頃、寒の水に餅をつけて干していた。

寒施行　稲荷行事の一つで、昭和10年頃から40年頃まで、村の信心家が、個人でお金を出して祈祷師を呼んでカンセンギョを大寒の日に行っていた。最近は祈祷師を出来る人がいないので行っていない。祈祷師に神が乗り移ると、50～60歳くらいの年配の人が元気に

走り回り、村の内外の地蔵や祠の前で立ち止まって、そこに餅と油揚げを置くように言う。場所によって数は決まっており、どんな祈祷師が来ても告げる内容は変わらず、毎年同じ場所に同じ数だけ供えていた。お供えした餅を食べると厄除けになるといい、子どもが祈祷師の後をついて走ったが、神が憑いているときの祈祷師は足が速く、幅2mほどの川を飛び越えたりして、11～12歳の男の子がついていくのがやっとであった。祈祷師を呼んでいた家では、近所の子どもに甘酒とぜんざいの接待をしており、子どもの祭りのような日であった。

また、神が憑いているとき聞にしゃべった事を祈祷師は覚えていないらしい。竹狭間池の西側に、伏見の稲荷神社に名前がある「豆八大神（マメハチダユウ)」という神がいる事を祈祷師に教えてもらってから、数年前に身内で不幸が出るまで毎月伏見に信心家がお参りにいっていた。

節句（３月）　3月3日の雛祭りには、ちらし寿司などの混ぜごはんや、蓬団子（あんこをつける)、菱餅（紅白)、白酒（年によってある時とない時があるが、甘酒で作る）が用意される。

雛飾りは、2月中旬～3月3日まで出している家と、2月中旬～3月末まで出している家があり、あまり遅くまで出していると縁が遠くなるといい、4月になる前にはしまう。飾りは、人形の方が一般的だが、昔は掛け軸を出して飾っていた家もある。ある家では、毎年掛け軸の布を架け替えていた。これはある程度金銭的にゆとりのある家での行事らしい。

彼岸　3月21日、墓参りをする。浄土宗の家では檀那寺の彼岸法要のオツトメへいく。金一封を用意する家もある。多くの家では、蓬団子やあんこのついた彼岸団子やオハギを用意する。それを仏壇に供える家もある。また、うどんやそばを用意する家やちらし寿司を用意する家もある。

釈迦の誕生日　4月8日に、子供を対象とした行事として、阿弥陀寺の甘茶接待がある。

メンギョ　4月14日か15日の為那都比古神社の春祭りに行ったという家と、4月18日に行ったという家があった。学校が半日休みになり、巻き寿司などのごちそうをお重につめて子供同士や家族連れで現在船場になっているヤマの畑へ遊びに行った。土筆をとったり、青竹を曲げてそりですべったりして遊んだ。餅で呼ばれたりもした。

牛回し　大正から昭和初期頃までは、5月中旬に行われていたらしい。船場の開発前、ヤマの畑へ行く道が二股に分かれているところに大きな松が生えていて南向きの地蔵があったが、そこへ大人の男性が牛を連れて行き、爪を切り、「ワラグツ」や「ゾウリ」と呼ばれる藁で編んだ履物を履かせる。これの鼻緒には、左縄が使われた。行事がなくなった後の牛の爪切りは家でされていたらしい。行事そのものがなくなった後も、その場所の名をさすのに「牛回し」という言葉が使われていた。

節句（５月）　多くの家では、5月5日に菖蒲湯に入り、粽や団子（蓬と白、あんこつき)、ちらし寿司を用意し、嫁の実家から貰った鯉のぼりをたてる。婿入りした家では、婿の実家から鯉のぼりを持ってきていた。五月人形の掛け軸を飾ったり、4月中旬～5月い

っぱい、五月人形を飾る家もあった。人形は、あまり遅くまで出していると縁が遠くなるといって5月中にしまった。またある家では、菖蒲を屋根の上にあげていた。

サナブリ　6月下旬、田植えが終わった後の休みをいう。サナブリというよりもアキヤスミという方が一般的である。伊勢講をしていた家もあり、家で骨休めをするという家や、オハギを作って食べるという家もあった。昔はボタモチを作り、田植えを手伝ってもらった家に御礼として配っていたらしい。親戚など近い関係の家の場合はボタモチでよく、お金を払ってきてもらっている家には、サナブリのときに渡しに行っていたという。

ハゲショウ　特にする事はないが、遅くとも、この日までに田植えが済んでいないといけなかったらしい。

瀧安寺の護摩焚き　7月7日、お参りに行った家では、灰を持ち帰り、紙や笹の葉に包んで竹に挟み、田に突き刺す。

（４）盆行事

墓掃除　七日盆といって昔は8月7日にしていたが、現在は8月の第一日曜日に墓地委員会の世話でする。早朝に行われる。

施餓鬼　浄土宗の家では、新仏が出たとき、檀那寺で行われるものに参加する。8月1日に阿弥陀寺で、8月5日に浄国寺で行われる。

先祖迎え　多くの家は8月13日の昼過ぎから夕方に墓へ迎えに行くが、朝に行く場合もある。1人か2人で迎えに行く家もあれば、先祖霊の「数が多いから」といって家族で列なってお墓へ迎えに行く家もある。先祖霊をおぶって帰ってくるという家や、連れて帰るとき振り返ると霊が帰ってしまうので、前を向いて家へ帰るという家があった。もし振り返ってしまった場合は、もう一度お墓まで戻らないといけない。ある家では、お墓で火をつけた線香の煙にのって帰るという。迎えに行く前に、門口でオガラで迎え火を焚いたり、提灯をつけたりする家もある。迎え火は、毎年焚く家と新仏が出た年のみ焚く家がある。

写真52　施餓鬼供養（浄国寺）

棚行　棚行という言葉は聞かれないが、14日に檀那寺の住職が各家を回り、仏壇の前に設けられた棚の前で経をあげる。多くの家では、先祖霊が家にいる間は墓へは行かないが、ある家では、経をあげてもらった後、墓参りをする。

供え物　多くの家では、仏壇の前に机をおいて白い布をかけて棚を設け、その上に供え物を載せる。机は毎年同じものが用いられる。白い布をかけない家や、仏壇の一番手前の部分にも白い紙を敷く家もある。

写真53　無縁仏のお供え

ある家では、8月10日にシキビをとりにムラヤマへ行く。浄土真宗のある家では、普段は一つしか供えない仏花を盆と法事のときだけは二つ供える。また、盆のときに限らず、「仏の花は盗んでもたてるものだ」といわれた事のある人もいた。

主な供え物は、「海のもの山のもの」「新しくとれたもの」といって野菜や果物、お菓子などであり、それらの下には蓮の葉か、代用として小芋の葉を敷く。盆の上に蓮の葉を敷いてから供物を供える家もある。大体は、スイカやメロンやブドウや茄子、ジュウハチササゲ、モモ、リンゴ、ミカン、バナナやサツマイモ、南瓜やトマト等で、ある家では、盆に間に合うようにサツマイモを早めに植えるという。ワカメやアラメ、昆布を供える家もある。食べ物ではないが、提灯としてホオズキもいっしょに供えられる。

「餅は仏の一番のご馳走で、仏の食べたいものに何でも変わることが出来る」といって、餅をついて供える家が多い。また盆の先祖霊を迎えている期間には、オチャトウは1日に何度あげてもよい。

先祖霊をもてなすため、三度の食事が供えられ、「ご先祖さんの数だけ」(位牌の数だけ)食事を供え、オガラの箸をつける。大体の家では、普段使いの小皿などの中から毎年決まった器を用いているが、ある家では、仏事に使う専用の器が揃っており、それに御飯や団子や煮物等を入れて供える。無縁仏のための食事を仏壇の中の見えにくいところに供える家もある。献立は家によって異なり、「肉や魚は霊が嫌がる」といって精進料理を作る家もあれば、特に拘らずに家族と同じ物を供える家もある。ただ、先祖を送る15日には「足のはやいもの」を意識して腐りやすい物を供える。毎年決まった献立を用意する家を3軒、具体例として次にあげる。

【A家】
13日　―シンコの団子
15日夕―小豆御飯

【B家】
13日　―餅5個
夕―迎え団子と小芋

14日朝―菜のおひたし
昼―素麺
夕―アラメ
15日朝―椎茸と高野豆腐とオクラの煮物
昼―シンコのひねったもの
夕―南瓜と赤飯
おやつ（10時と3時）―蒸かしたサツマイモ

【C家】
13日夕―南瓜
14日朝―アラメ
昼―素麺
夕―高野豆腐と椎茸の煮物
15日朝―麩と揚げの煮物
昼―里芋と揚げとシンコのひねったもの
夕―かやく御飯や小豆御飯、カイワレ

新仏　殆どの家では、アラタナというが、アラボンという家もあった。浄土宗の場合、親類中に新しく仏が出た時は、先祖霊の棚と同じくらいの大きさの棚を並べて築き、先祖霊同様に供物を捧げてもてなす。オガラで梯子を作り、床から棚にたてかける。オガラの梯子を作るのは、嫁の仕事であるらしい。また、ある家では、アラタナには簾を敷く。30ｃｍ程の卒塔婆を寺で貰ってきて、オガラの棒に貼り付けオガラの先端を茄子の台に突き刺し、棚に飾る。茄子は丸のままか、輪切りにしたものを用いる。卒塔婆は、中山寺に貰いに行くという家や、本来なら檀那寺で貰うところを、家にたくさんあるため自分で書いている、という家があった。また住職に拝んでもらう順番も、先祖霊の後という家と、アラタナは客なので先祖霊より先にお経を上げてもらうという家があった。

写真54　新棚（アラタナ）

先祖送り　多くの家では、15日の夕方に送るが、14日の夕方に送る家もある。今は墓へ送っていき、弁当や花も墓へ持っていくが、昭和40年代頃までは千里川や芋川で流していた。蝋燭と線香を持っていき，供物を桟俵に入れて流していた。

「足が速くなるように」といって、シンコや南瓜などを弁当にして入れ、土産にする。単に「シンコにのって帰る」と言う家が多かったが、「シンコを馬にする」と表現する家もあった。

ある家では、玄関を出たところで、箸に使ったオガラなどを燃やし送り火をたく。

ヤブイリ　8月16日は正月のときと同様、嫁が里帰りした。

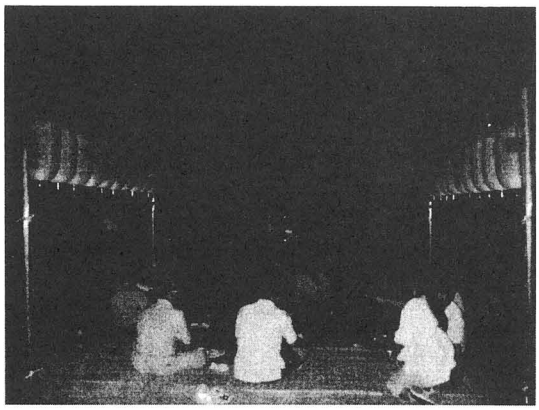


写真55　地蔵盆の寄り合い

写真56　地蔵盆の数珠繰り

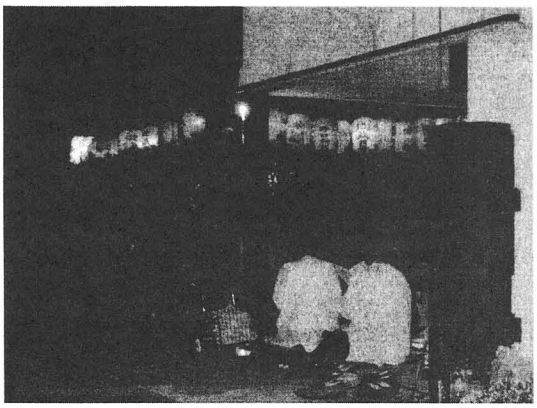


写真57　地蔵盆の御詠歌をあげる

盆踊り　お盆と地蔵盆の間で都合のよい日に、祠を祀ってある児童遊園で行われた。その他、区長の家の庭や、神社跡でもしていた。曲目は、河内音頭や炭坑節などで、吉水講ができてからは黒谷和讃等も詠われるようになった。

地蔵盆　23日、24日の2日間にわたって行われる。

23日朝6時から地区の女性が水子地蔵の供養をする。この世話は毎年浄土宗と浄土真宗が交代で当番する。夜に阿弥陀寺で御詠歌をあげる。24日、隣組のうち、当番に当たっている組が、児童遊園と北向き地蔵の所に提灯を立て、児童遊園にある愛宕の祠に新しい札を納める。夜になると提灯に火をいれ、男性が集まって茣蓙を敷いた上でお神酒とつまみを飲み食いする。同じ遊園にあるサイマッタンも愛宕の祠と同様に祀る。

北向き地蔵では、念仏講の人々が、夜お参りにきた子供に数珠繰りをさせ、おさがりを渡す。子供たちが帰った後、御詠歌をあげる。個人の家で祀られている地蔵に飾られる提灯には子供の名が入っており、お参りにきた子供たちにおさがりを渡す。念仏講の人たちが、北向き地蔵の後に御詠歌をあげにくる。

マンドロ　昭和35年位前まで青年団が主催で、10歳前後の男子中心の行事として24日の晩に行われていたが、ミナミヤマがなくなって途絶えた。藁と竹で道具を作り、火をつけてから山へあがるか、もしくは山の上で火をつけた。村へ戻ってくるのにかかった時間は5分程度であった。

（５）秋から冬の行事

月見　旧暦の十五夜のときに行うが、できないときは新暦の十五夜にしていたという家、十三夜にしていたという家があった。大抵の家では団子と小芋（里芋）とススキを13個ずつ供える。12個ずつという家もある。ある家では団子を箕の上で飾る。萩や女郎花、桔梗等の花も飾る。二百十日、二百八日が無事すぎるようにと、豊作を祈って供えていたらしい。

昔、団子つきといって、子供が団子を盗んで回った。大人は咎めだてをしてはいけなかった。

彼岸　9月23日に、春と同じで、彼岸団子（蓬と白、あんこつき）を用意して、墓参りを行う。浄土宗は檀那寺の彼岸法要のオツトメに行く。

十夜　阿弥陀寺でオツトメがあるが、特に何もしない。

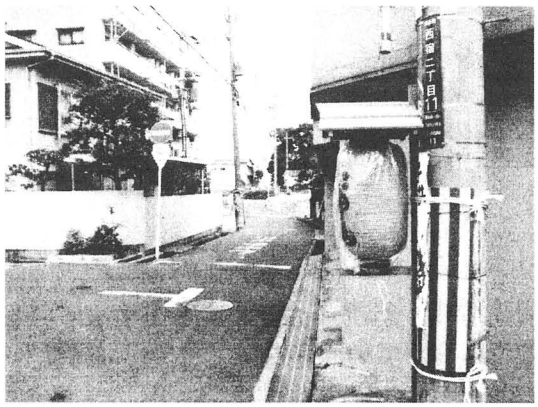


写真58　秋祭りの提灯

秋祭り　10月14日、為那都比古神社の秋祭りに、個人的にお参りにいく。当番の組が西国街道と白島地区への道に12個の御神灯の提灯をたてる。かつては鳥居のような大きな提灯を辻にたてていたが、現在はたてられていない。また、親戚と訪ねあいをした。昔は、神楽を囃す人々が回ってきて、天狗に扮装した人が家に入ってきて泣いている子がいないか聞いて回ったらしい。

亥の子　昭和10年代までは、11月の初めの亥の子の日、子供たちが藁で縄を捲いて亥の子のツチを作って家々を回っていた。それ程大きな行事という認識はなかった。

ある家では、亥の子の日にオハギを作り、竹の箕に一升枡の中皿を入れ、オハギを供えて縁側に飾っていた。月に2回亥の子の日があるときは12個、3回のときは13個供える。小豆の餡がないときは、詰めると同じような色になるので、ソラマメで代用していた。大根畑の立ち入り禁止をいわれていた家もある。

誓文払い　12月1日に池田まで行っていたという家もあったが、行く人の数は少なかった。

ある家では、12月1日の早朝に嫁が為那都比古神社へ参り家族の健康を祈願するという。この道中に誰かと会っても口を利いてはならない。

冬至　「中風に効く」といって柚湯に入る家や、南瓜を食べる家がある。

３．その他の民俗

（１）講

昔はそれぞれ講田や講の畑があったが、開発で土地がなくなり、収入源を絶たれたため、当番にあたったときの負担が増え、休んでいる講が多い。また隠居の家は講に入らない。

念仏講　浄土宗のオツトメで、現在12軒入っている。昭和20年代初期までは男性中心の

講で、年長の男性が導師を勤め、三十三番の御詠唱をうたっていた。その後女性中心の吉水講に変わり、今にいたる。一粒直径約1cm、長さ4～5mの数珠の入った黒塗りの箱を各家で1ヶ月ずつ預かり、順番にまわしていく。月に二度、まわってきた家の仏壇の前に夜集まり、念仏と御詠歌をあげる。子供は姑が面倒をみていてくれるが、連れて行ってもよい。昭和30年代は大体20人位集まっていた。同世代の女性同士で茶飲み話が出来、解放感があった。講費を積み立てており、これで本山の講費や阿弥陀寺の行事のときのお金にあてる。数珠も女性の講に代わった時は壊れていたが、講のお金で直して数珠繰りをするようになった。女性による念仏講の開始と前後して、月に1度阿弥陀寺から住職がやってきてオツトメをしてくれるようになった。会館で掛け軸を飾り、念仏や御詠歌を習い、お説教をしてもらう。

ツキナミ　浄土真宗のオツトメ。月一回当番の人の家に集まり経をあげる。大体は主婦が出るが、出られない場合は男性が出て行く。

行者講　平成11年まであった。月に一度7のつく日に、その月の当番の家に集まり、掛け軸をかけて行者の作った和讃を唱える。男の人の講で、12軒入っていた。大峰山に登る。行者講田がわずかに1カ所だけ残っているが、荒地になっている。西宿で残っている唯一の講田である。

愛宕講　今も行われており、順番で各家に当番が回ってくる。毎年近所同士4家より1人ずつ男性が代表で出て、その4人が京都の愛宕神社までいってお札を頂いてきて、地蔵盆の日に祠に納める。戦前は地区の人々の分もお札をもらってきて配っていた。

伊勢講　平成10年まであったが、現在は休み中である。村の中にオンゴとコウゴの2組があり、オンゴの方が人数が少し多く、12軒あった。オンゴは春と秋のアキヤスミに飲み食いをしていたが、コウゴは秋だけであった。代参者が伊勢のお参りから帰って来てくるのを迎えに行き、当番の家が鶏をつぶすなどしてもてなす。昔はすきやきと白御飯、漬物と丁稚羊羹と蜜柑で済ましていたが、近年贅沢になってお膳をとったりするようになって、トウヤの負担が増えた。

春日講　春日大社の札をもらってきていた。

サイマツ講　百姓の神で、サイマッタンと呼ばれる。村の中の家を転々とした後、現在の児童遊園の中に祠を祀られる。ご神体は丸い石で、祠の向きは南向きである。神仏は南向きが一番よいとされているので、南向きに安置しているのだという。年に1度秋の伊勢講の後に提灯と幕を立て、秋刀魚や鰯等の尾頭付きの魚を供える。この世話は廻り番であたった。

庚申講　年に一度あった。トウヤでコンニャクを炊いて出した。春日講とともに最も古い講であるという。

ネハン講　年に一度、寒い時分に男の人たちが寄り合ってトウヤで用意されたコンニャクを食べながら話をしたという。

一心講　柳田の一心講があったらしい。

（２）地蔵

地蔵は、人々の心の拠り所として、宗派を超えて祀られている。村の中には5カ所に祀られている。

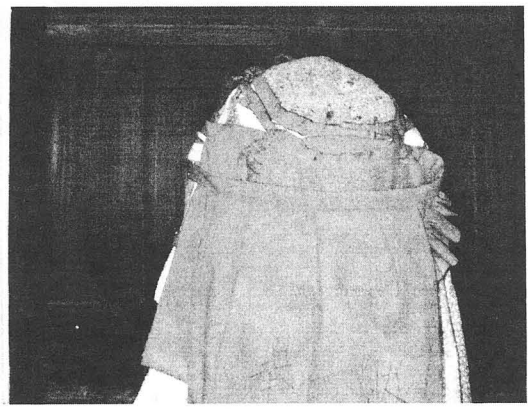


写真59　北向き地蔵

北向き地蔵　西国街道の今宮寄りの場所に位置する「村のお地蔵さん」で、こんもりと茂る小さな木立の陰に地蔵を安置した祠があり、元禄時代には既にあったといわれる。夜泣きを直してくれるというご利益もあるらしい。今宮からお参りにくる事もあった。かつて、この祠の傍にあった桜の木の下で侍が死んだ事がある、という言い伝えもある。

個人の家の地蔵　為那都比古神社に統合される前の村の神社跡に放置されていたものをひきとって庭で祀ってある。まだ1体地中に埋まっているが、祈祷師によると、「このお地蔵さんはまだ地面の中にいたいといっている」とのこと。

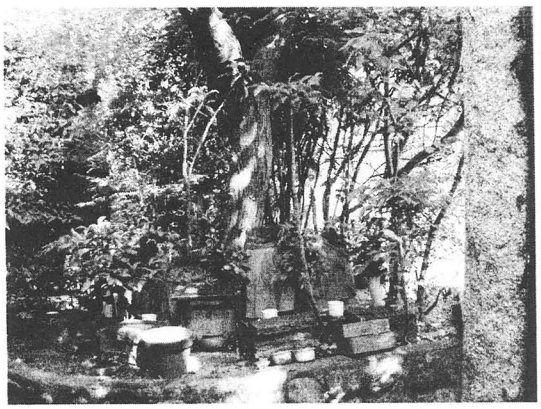


写真60　庭内の地蔵さん

ハカノシタの地蔵　あちこちから集めてきた地蔵で、全部で5体あり、芋川のほとりに祀ってあるが、村の地蔵という意識は薄い。地蔵盆のときも特別に祀らない。

水子地蔵　昭和50年代に地区の人々の浄財でたてた。

木戸ヶ池の地蔵　平成12年現在、工事中のため行方不明。

写真61　ハカノシタの地蔵

（３）祠・塚など

現在の児童遊園には、愛宕の祠とサイマツ

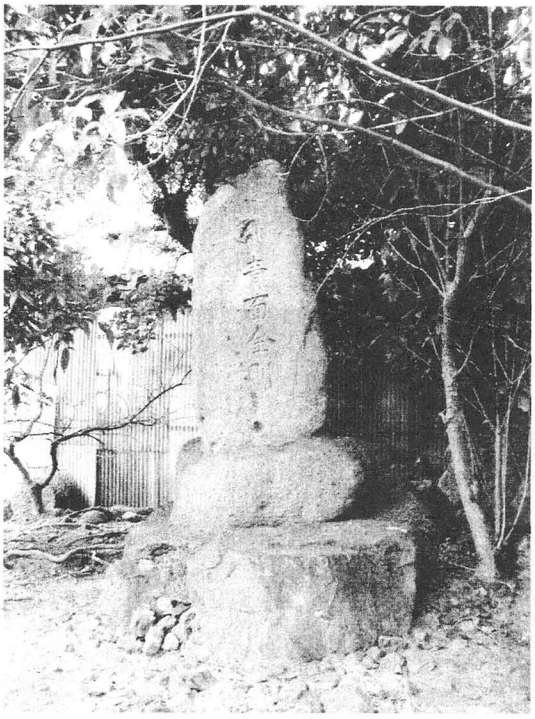


写真62　庚申塚

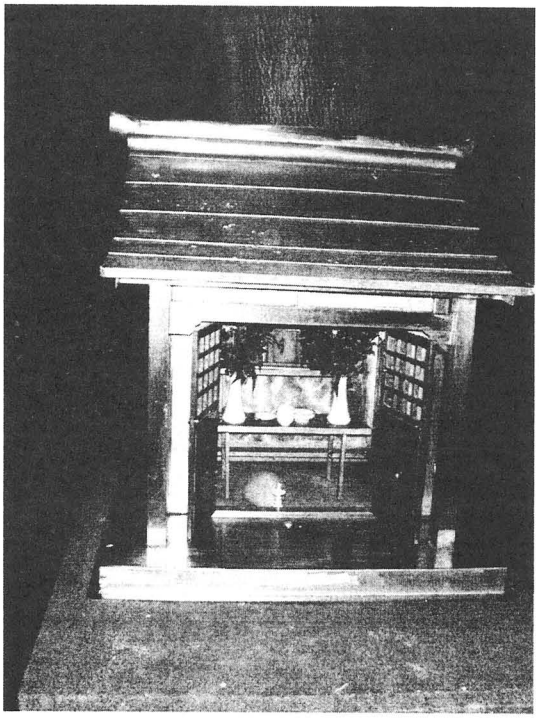


写真63　サイマツの祠

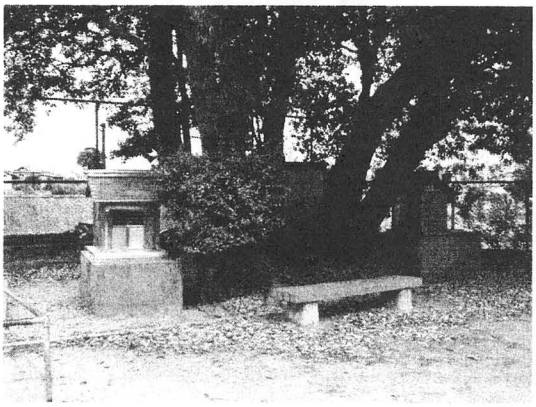


写真64　児童遊園の祠
（左：愛宕神社　右：サイマツの祠）

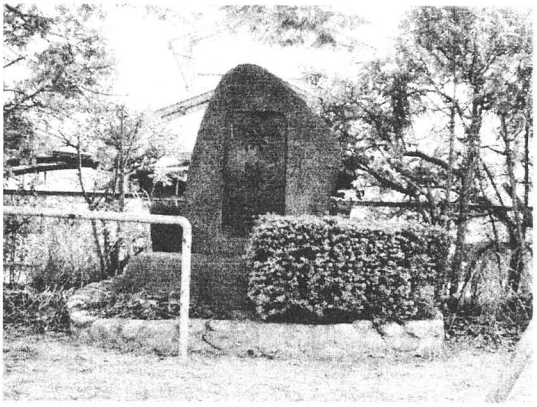


写真65　昔の墓跡

の祠が祀られ、竜神の祠が、地蔵を祀ってある家の庭で祀られている。北向き地蔵の近くには背面に昭和2年3月建立と彫られた庚申塚が、西宿3丁目の公園には、かつて墓のあった場所である事を示す石碑が建てられている。

（４）墓

元々昔からあった墓が船場の開発計画予定地の範囲に入ったため、昭和50年、現在の位置に移転した。地図上ではほぼ北から南への移動で、ヤマの中腹から集落寄りに下りてきたため、ムラとの方位関係は変わらず、その結果、かつての墓道や「ハカノシタ」という

場所の呼び名がそのまま用いられている。元々は土葬であったが、移転してからは、火葬に替わった。移転の際には、墓石だけではなく、それまでの墓地を掘り返して骨を集め、新たな墓地へと移した。土葬の頃は、死者を乗せた輿が4人がかりで担がれて、墓道をとおり墓に運ばれ埋葬されていた。

（５）狐に化かされる話

戦後に西国街道を走っていた乗合バスが道路から1mほど下の畑にまっすぐストンと落ちた。祈祷師さんに見てもらったところ、この場所についている狐がはめたものだと言うのでお祓いをしてもらった。他にも、トラックが川にまっすぐ落ちたりした。道から外れかけたとき、運転手がハンドルをきって元に戻そうとしても直らなかったという。「コンコンさんはいたずらが好きだから」と言われていた。

また、かつて船場のヤマに畑があった頃、野良仕事を終えた人がムラへ帰ろうと歩いていたところが反対方向へどんどん歩いていってしまった。ムラへ帰り着いた後、昼飯の残りのおにぎりを持っていたため、それを欲しがった狐にだまされたのだといわれたという。このような場合は、握り飯を狐にあげればすぐにもとの道に戻れるものだという。

（６）生業

多くは農業で生計をたてていたが、宿を営む家や、造り酒屋もあった。桑畑を持ち養蚕を行う家や、藍染めを行っていた家もある。

（７）その他の昔の話

・かつては村全体でアマヨロコビをしていたという。

・かつては、自治会長の家で村の太鼓を預かっていた。祭りや盆踊りのときに出してきていたという。

・年に1度、秋頃に「伊勢の神楽」といって神楽回しが来ていた。4～5人できて獅子舞などの芸を見せてお金をとっていた。

第７節　石丸地区

１．地区の概要

概要　石丸は、旧萱野郷十ヵ村の一つである。北部は北方の勝尾寺に連なる山地である。南部はその山地の南麓斜面にあたり、集落をなす。地名は、元暦元年（1184）九月日の「摂津国垂水西牧萱野郷百姓等解」（春日大社文書）に、「石丸名」とみえるのが初見である。また、年代は降るが、慶長10年（1605）の『摂津国絵図』にも村名がみえる。

写真66　三王神社の石碑

寺社　旧集落の全18戸のうち、13戸が浄土真宗を信仰する。次いで4戸が浄土宗を信仰する。浄土真宗のうちでは、善福寺（萱野地区）を檀那寺とする家が10戸、残りの3戸は浄円寺（萱野地区）・帝釈寺（粟生外院地区）のいずれかの檀家である。浄土宗では、4戸すべて浄国寺（坊島地区）の檀家である。

石丸の内部には白島の飛び地が存在し、為那都比古神社の所在地がこれにあたる。為那都比古神社は真砂谷池の南東に鎮座し、祭神は為那都比古神および為那都比売神である。かつて、旧萱野郷では十ヵ村の中に15社が混在していた。石丸の神社は三王神社で、今でも跡地に石碑がある。明治40年（1907）に、これら近隣の諸社を合祀し、現在の為那都比古神社となった。

２．年中行事

（１）正月の準備

門松・注連飾り　12月28日ごろより、飾り物の準備を行う。飾り物は門松と注連縄を用意する。門松は松竹梅をあしらう。注連縄は、かつては近所の住人が集まり、皆で製作したが、近年では売られているものを購入して済ませることが多い。石丸では浄土真宗寺院を檀那寺に持つ家が多いため、飾り物は簡素に済ませる事が多い。中にはまったく門松や注連縄を飾らない家もみられる。

鏡餅　餅つきは、12月28日から30日の間に行う。このうち、29日は「九」という数字が「苦をつく」に通じることから縁起が悪いとして避ける。したがって、実際には28日あるいは30日のいずれかに餅つきを行うが、各家庭によって異なる。

餅つきを終えた後、鏡餅を作る。鏡餅の飾り付けは12月30日に行われる。鏡餅の飾り付けを31日に行うことは、一夜飾りになるので験が悪いといって避ける。鏡餅にはウラジロ・干し柿を添える。鏡餅は、床の間・蔵・井戸・台所の三宝荒神・仏壇・神棚に飾る。かつては、山や川へ行き、山の神と川の神にも鏡餅を供える家もみられた。

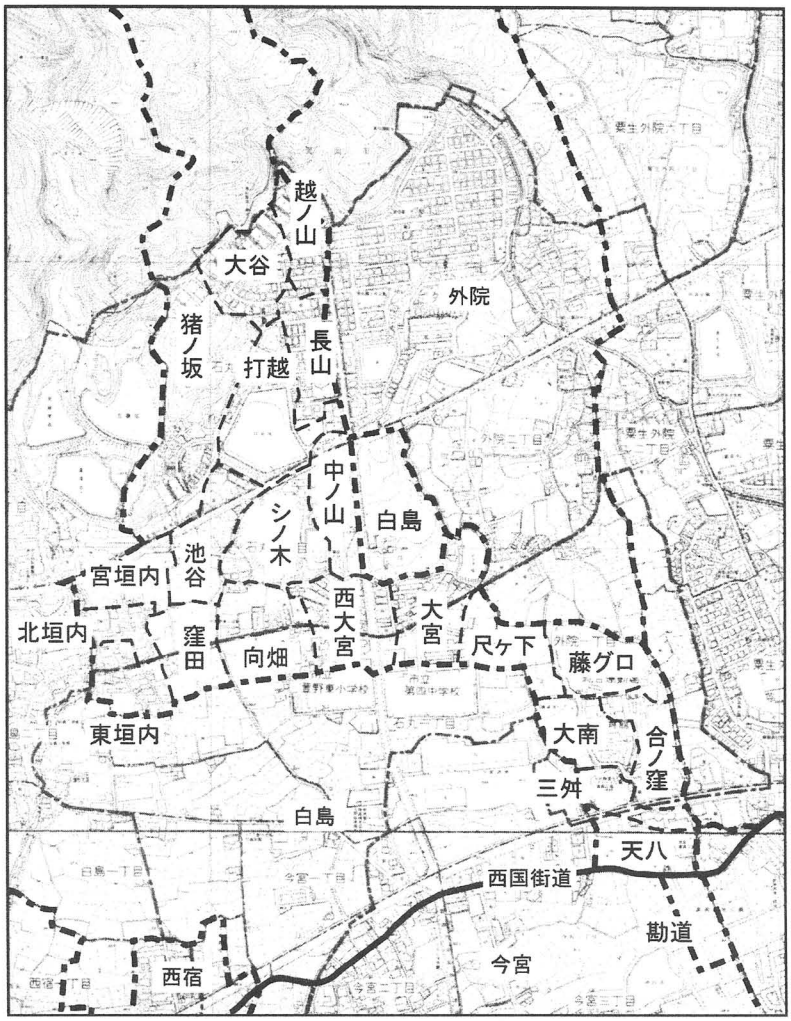


図19　石丸旧字名

大晦日の晩　大晦日には、夕食に蕎麦と麦飯を食した。正月の雑煮をたくさん食すると験がよいとされるため、大晦日の夕食は軽く済ませる家もある。

（２）正月行事

若水　水道の普及に伴って、井戸を備える家が減少したため、現在では正月に若水を汲む行事はみられない。かつては1月1日の朝に家の主人が若水を汲み、その水を使って雑煮を作った。家によっては1月1日ではなく2日に若水を汲み、書初めに用いた。

雑煮　1月1日の朝には白味噌の雑煮を食する。餅は丸餅を用い、具は大根・人参・牛蒡・油揚げ・焼き豆腐などを入れる。

2日にはすまし汁の雑煮を食する。3日以降の雑煮は、家によって実に多様である。味噌味の雑煮を食すると決まっている家や、特に味付けを指定しない家もあり、中には3日以降には雑煮は食しない家もある。

雑煮を作る際には豆の木を燃料として用いた。「一年マメに働くように」との願望を込

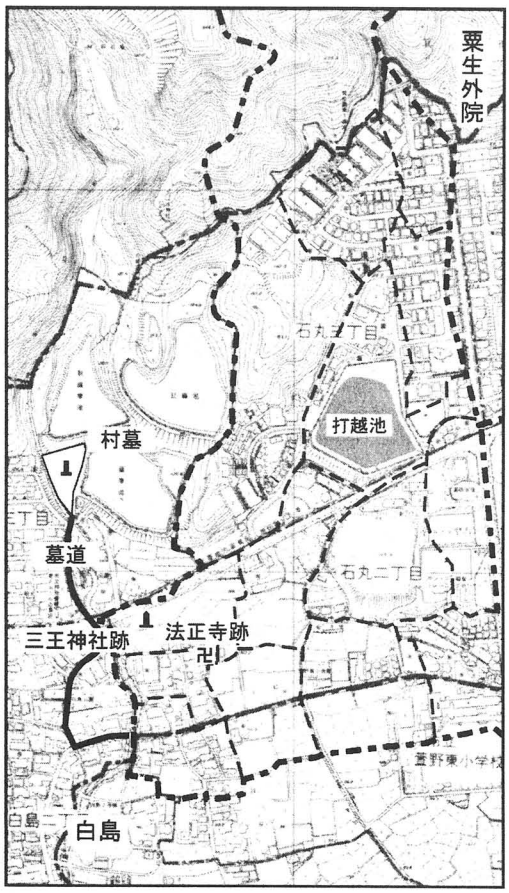


図20　石丸集落周辺

められている。

初詣　1月1日に為那都比古神社・水神白姫大明神へ参詣する。その後、檀那寺へ行き、住職に新年の挨拶と旧年中のお礼を述べる。

お年玉　お年玉は各家によって実にさまざまな形態がみられた。ある家では、家族からはお年玉をもらわず、1月16日の薮入りの日に実家に帰ってきた人間からもらった。商家では、主人が使用人にお年玉を渡すということが行われた。

ハツシゴト　1月2日の朝、田へ行き、米と塩を田の四隅に撒いて田の神を拝んだ。この時、家によっては御神酒を供える場合もみられた。

正月七日　1月7日には七草粥を食する。前日に七草を集めるが、七草すべてを入手することは困難であるので、実際にはナズナを摘んでくる程度である。このため、七草粥には水菜・大根などありあわせの具を加える。焼餅を加え、すまし汁で味を調え、焼き雑煮にしたてる場合もある。

鏡開き　鏡開きは、昔は早くとも1月5日に行い、他に7日に行う家、15日に行う家もみられた。5日・7日に鏡開きを行う家は、七草粥に焼餅を入れた。15日に鏡開きを行う家は、餅を切り分けておかきにした。

現在では、1月3日に鏡開きを行う家が多い。鏡餅が硬くなってしまうのを嫌うためである。ただし、このような場合でも、鏡餅を一つだけ残しておき、15日にあらためて鏡開きを行うという家もある。

トンド　1月14日に門松・注連縄などの飾り物をはずす。それらの飾り物を15日に近所の山や為那都比古神社へ持ち寄り、焼いた。現在では飾り物の量が少なくなったため、各家庭で個々に焼くことが多くなっている。

トンドの火で、鏡開きした餅を焼いて食した。飾り物を焼いたあと、トンドの火を各家に持ち帰り、その火をかまどに移した。15日には、その火で小豆粥を作って食した。

ヤブイリ　昭和55年（1980）頃までは広くみられたが、現在は少なくなっている。家によってはヤブイリで帰ってきた者からお年玉をもらうという風習があった。

（３）春から夏の行事

節分　2月の節分の日をトシコシと呼ぶ家が多くみられる。節分の日には焙烙で大豆を炒り、少量の豆を神棚に供えた後、豆まきを行った。豆まきの際には「オニハソト、フクハウチ」と掛け声をかける。豆まきの後、歳の数より一粒多い量の豆を食する。

節分の日の夕食には、麦飯とイワシを食した。イワシの頭を玄関や裏口など戸口に飾る家もみられるが、浄土真宗寺院の檀家が多いため、飾り付けを重要視しない場合が多い。中には、イワシは頭から尾にいたるまですべて食するので、飾るべきイワシの頭など残らない、という家もある。

節句（３月）　雛祭りには、雛人形を飾る。2月20日頃から飾り、雛祭り当日のうちに片付ける。旧暦の雛祭りにあわせ、4月3日まで雛人形を飾る家もある。雛人形を、雛祭り当日に片付けるのは、片づけが遅れると縁談が遅れるといわれるためである。

雛祭りの日には、ちらし寿司・ヨモギ餅・白酒を食する。なお、石丸ではちらし寿司のことをバラ寿司と称することが多い。

彼岸（春）　彼岸の日には墓参りを行う。また、おはぎを食する。人によっては、ヨモギ餅などもち米を使って作られたものを食する。

メンギョ　4月15日に野遊びに出かけた。この行事をメンギョと呼ぶが、石丸では、メンギョという言葉は無縁経という言葉が転訛したものであると伝えている。

メンギョの時には、重箱に弁当を入れて、近所の山や池の堤などへ行った。弁当には巻き寿司などを入れていた。現在では形を変え、れんげ祭が行われている。

写真67　れんげ祭

節句（５月）　5月5日の端午の節句には鯉のぼりをたてる。また、菖蒲湯に入る。菖蒲湯に入る際には頭に菖蒲の葉を巻いたりした。他に、菖蒲を束ね、屋根の上に投げ上げるということも行われた。

サナブリ　田植えが終わった後、2日ほど休日をとった。この日には、餅をついたりおはぎを作るなどした。家によっては、この休日を利用して墓掃除を行う。

瀧安寺の護摩焚き　7月7日に、瀧安寺の大護摩法要が行われる。大護摩法要が終了したあとの灰を紙に包んだ。それを竹棒の先にはさんで持って帰り、田に撒いた。または竹

棒にはさんだまま田に立てた。こうすることによって稲に虫がつかず、豊作になるといいつたえられているためである。

（４）盆行事

墓掃除　盆行事の準備として墓掃除を行うが、特別な宗教的行事は伴わない。日時も特定されない。家によっては、田植え終了後のサナブリのときに、休日を利用して墓掃除を行う。

墓参り　8月13日に墓参りを行う。浄土真宗寺院の檀家であるため、それぞれ自分の気がすむように墓参りを行えばよいとする家が多い。

供え物　浄土真宗寺院の檀家では特に定まった供物・行事はみられない。浄土宗寺院の檀家では、蓮の葉の上にスイカ・豆・サツマイモ等夏に収穫される野菜類を載せて供物とする。

先祖送り　浄土真宗寺院の檀家では特に定まった行事はみられない。浄土宗寺院の檀家では、15日の夜、千里川に供物を流すという行事が平成元年頃まで行われた。

マンドロ　8月14日・15日・24日の夕刻、まだ日が沈まないうちに、少年たちが愛宕サンへ集合する。あらかじめ竹や木で作った松明を準備しておき、日が落ちるころから松明に火を灯す。各々が手に松明を持ち、列を作って山を下った。マンドロに参加しない大人たちが、松明が列をなして山を下ってくる様を見て楽しんだ。

（５）秋から冬の行事

月見（旧暦８月１５日）　月見は中秋の名月、すなわち旧暦の8月15日に行われる。ススキと萩を縁側に飾り、団子と小芋を供える。家によっては餅・おはぎを供える場合もある。この日には子供たちが各家をまわり、竹竿を使って縁側に供えた団子・小芋を取った。各家では、子供たちに供え物を取られるほうが縁起がよいとして歓迎した。

彼岸　彼岸の中日に、浄土真宗寺院において報恩講が行われる。檀家の者が集まって住職の講話を聞く。彼岸にはおはぎを食した。

秋祭り　10月14日に、為那都比古神社の祭りが行われる。かつては神輿・芝居小屋・草相撲・夜店などがでておりにぎわった。家によっては、屋敷の門を新築する際に、神輿が中に入ることが可能な大きさにした。ところが、ある年の祭りの時に神輿をめぐって喧嘩があり、以降、神輿は中止されたという。

亥の子　昭和17年（1942）頃まで、11月最初の亥の日に亥の子行事が行われていた。子供たちが家々をまわり、藁を束ねたもので地面を叩いて歌を歌った。亥の子の日にはお

はぎを作った。

冬至　冬至の日に南瓜を食すると、中風に効果があるといわれている。また、冬至の日にはゆず湯に入る。

３．その他の民俗

（１）講

愛宕講　かつては3月24日に行われていたが、現在ではなるべく当日に近い日曜日を選んで行う。石丸の旧集落の全18軒が参加する。愛宕講に際して、当番の家が2軒、くじ引きによって選出される。これらの2軒のうち、1軒は京都の愛宕神社への代参の役目を果たす。他の1軒は宿の当番と呼ばれる役目を務める。宿の当番の家は講員に集まってもらい、御馳走をふるまうことになっている。

伊勢講　2月11日に行われる。石丸の中でそれぞれ7～8戸からなる二つの組に分かれて講を形成する。

薬師講　1月8日に初薬師がある。講員は白島にある薬師寺へ参詣する。参詣の際には米を持っていって供える。

写真68　薬師堂

水神講　大正13年（1924）、近畿一円に干ばつが起こった。この時、四国から祈祷師を招き、雨乞いを行ったところ、見事に雨が降った。そこで水神社を創建し、以降、水神サンを祀るようになった。講は8月21日と元旦に行われる。石丸では旧集落の全18戸が参加する。8月21日には、お金と酒、餅を用意して水神社へ参詣する。

報恩講　彼岸の中日に行われる。朝8時30分に講員が宿（毎年1件ずつ持ち回り）に集合し、帳面を見てその年の順番を決める。9時に住職が2人来る。1人が午前中に3件、午後に3件まわる。各家に行くと、住職は縁側から講員は玄関からあがり、全員で40分位読経し、お茶が出る。1件に1時間位かかる。住職は宿で昼食を取り、講員は各家で食べる。午後3時頃、宿に全員が揃うと、

写真69　報恩講

約1時間読経する。仏壇の蝋燭は、最初は赤色、仏飯も赤飯である。中ごろで、白い蝋燭と白飯に変える。その後、講話を聞く。終了後、住職に夕食や酒などを出す。その間、講員は別室で待機し、最後に挨拶をして解散する。

第８節　今宮地区

１．地区の概要

概要　今宮地区は、西国街道が村内を東西に貫く、街道沿いに集落が発達した地区である。

白島の浄土宗阿弥陀寺の檀家の家が多い。

豊島郡に属し、旧萱野郷11ヵ村の一つである。今宮の地名は、建治2（1276）年11月16日の「萱野今宮銭米上日記」（『勝尾寺文書』）を初見とする。また時代を下って慶長10（1605）年の「摂津国絵図」にも今宮村の名が見える。村内には天満天神社があった。境内は、東西40間南北20間である。為那都比古神社は萱野郷白島村の飛地にある為、神宮寺である持宝院の僧が社僧を勤めていた（『植村家文書』）。天満天神社は、明治40年為那都比古神社に合祀されている。

図21　今宮旧字名

２．年中行事

（１）正月行事

正月の準備　正月の準備は、12月28日から30日くらいまでに始める。

その内、注連飾りは27から30日くらいに作る。10月頃餅米を刈り取った後、稲を干して保存しておき、この藁で作る。煤払いは30日頃に行う。

大晦日の夕食は、正月のおせち料理の重箱に入りきらなかっ

写真70　天満天神社跡

写真71　今宮旧道風景

た余りや年越しそばを食べる。

鏡餅　餅つきは28か30日に家の主人が搗いて、30か31日に鏡餅として飾る。
鏡餅は、床の間と蔵、納屋、三宝荒神に飾る。

若水　調査した家では、若水を汲むことはなかった。

雑煮　母親や主婦が作る。正月三ヶ日とも白味噌仕立ての丸餅雑煮の家が多いが、中には二日目をすましにするところもある。具は、丸餅の他に、大根、人参、ゴボウを輪切りにして入れる。

初詣　初詣は、為那都比古神社と白島の阿弥陀寺（浄土宗）に行く。

ハツシゴト　豊作になるようにと、正月4か5日に田で鍬を2、3回打つ所作をハツシゴトと云う。

七草　正月7日をナナクサと云い、七草粥を作って食べる。材料は春の七草が揃わなくとも大根の葉などあり合わせのもので作る。

鏡開き　1月3日に鏡開きをする家もあるが、おおむね14か15日に行う。
開いた餅は水につける「水餅」や薄く切って「寒餅」にして保存して、あられにして食べたり、カビが付く前に雑煮にして食べる。

トンド　為那都比古神社で竹を組んで門松や注連縄を焼いている家もあれば、各自の庭で焼いている家も多い。

ヤブイリ　大方の家の嫁は1月16日に実家に帰った。大阪に奉公に行っているものもこの日に里に帰ることができた。

寒施行　「狐つき」「台の人」とも云った。大寒の頃、近在の「村岡のおばあちゃん」が寒施行のためにやって来た。このおばあちゃんに狐が付いて田の畦道を歩いて廻る。そのとき後ろを子供達が一緒に付いて廻りおいなりさん（いなり寿司）やおにぎりを「ここに一つ、こっちに二つ」などと「村岡のおばあちゃん」に言われるままに、その場所に置いていった。寒施行も「村岡のおばあちゃん」が亡くなってからは、跡を継いでやる者も無く、行事も亡くなった。「村岡のおばあちゃん」が何処の人で何処から来るのか誰も知らなかった。

写真72　川横の供え場所

（２）春から夏の行事

節分（トシコシ）　母親や祖母が焙烙で大豆を炒る。その豆を父親や主人が家の外や内に「鬼は外、福は内」と言いながら撒いた。その後、年の数だけ豆を拾って食べた。残った豆は荒神さんや仏壇に供えた。

その他、柊と鰯を戸口や納屋など全ての入り口に飾った。

この日には鰯を食べることになっている。

雛祭り　人形を飾ったぐらいで他に行事はなかった。

彼岸　墓参りをした。

メンギョ　4月15日を、メンギョウと云い、休み日であった。村の南にある山へ重箱にごちそうを詰めて持って行って食べた。この日は学校も休みになり村の子供全員で行って食べた。昭和30年頃までやっていた。

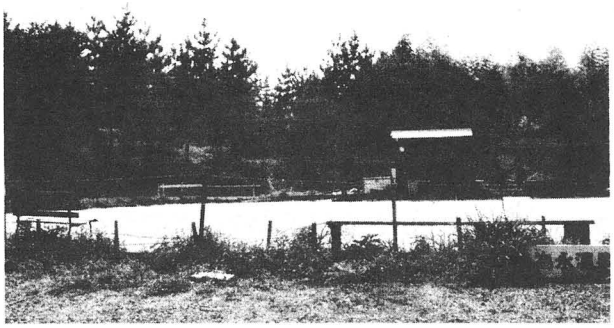


写真73　メンギョ山の風景

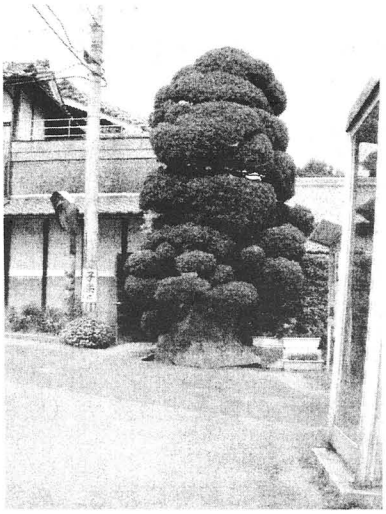


写真74　牛回しの木

牛回し　飼い主が自治会館横の「牛回しの木」に牛を連れていった。

「今宮村々定ならびに萱野郷極」(『植村家文書』)には、「五月節ちまき牛之計」とあり、これも牛回しと関連があるものと思われる。

端午の節句　特に行事はなかった。

サナブリ　田植え後、日を決めて、回覧板で知らせて村中が農作業を休み、寄り集まって簡単な宴会をした。

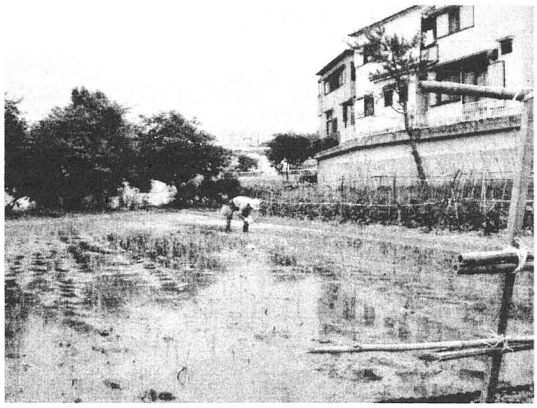


写真75　手植え風景

半夏生　この日をハゲと云い、餡が入った米粉で作った団子を茨の葉で包んで蒸して食べた。

七夕　7月7日は七夕とも云ったが、瀧安寺で護摩供養があったので、護摩供養とも云っていた。護摩供養の灰を持ち帰り、田んぼに供えて虫送りとした。

この日に女性は、髪の油がとれると云い、髪を洗っていた。またこの日、仏具の掃除もした。これは、七日盆の名残と考えられる。

（３）盆行事

盆の期間は13日から15日までである。供え物の準備などは8月13日以前に畑から取ってきたり、足りないものは買ったりして用意する。

施餓鬼　施餓鬼供養は阿弥陀寺（白島）でやっている。

先祖迎え　主婦が13日の早朝、家から墓地まで歩いて「お迎え」にいって、家の門で線香をたくさん焚いて迎え入れた。

供物　仏壇の前に小さな組立式の棚を置いて、食事とお茶を日に三度取り替えて供える。その他、家で取れた野菜や季節の果物、素麺などを供えた。

新仏　新仏の霊をアラタナ（新棚）と云い、棚には、小さな梯子を掛けてアラタナが上れるようにする。

新盆は14日にお寺に行き、戒名を書いてもらった塔婆をいくつかもらってきて、親戚や故人の友人の家に持っていき供養してもらった。

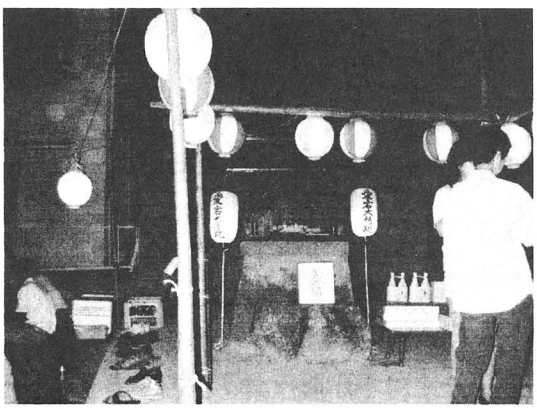


写真76　愛宕神社のお祭り１

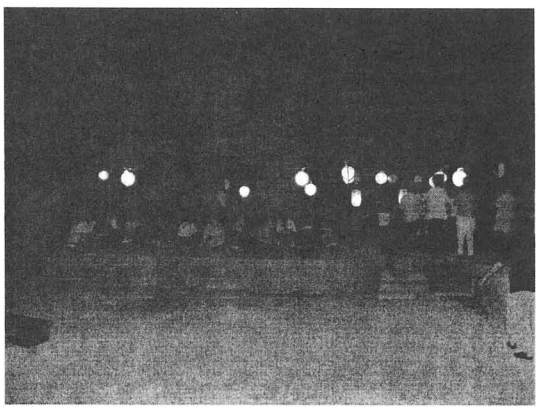


写真77　愛宕神社のお祭り２

先祖送り　先祖送りと称して、盆のお供えは、今は家の前や墓で焼くが、昔は川に流した。

盆踊り　愛宕神社の広場で8月24、5日にやった。
江州音頭で踊っていた。今宮は人数が少ないので、小野原や白島など近在に踊りに行っていた。

マンドロ　8月13、14、15日に愛宕神社の広場で行った。男の子が中心となり、青年団が後見に付いていた。女の子は松明を持たず、男子の後ろを付いて回った。
昼には火を付けずに松明や藁を燻して煙だけを出し、夜は麦藁を河原で燃やし松明に火を付けた。そのときに「火の用心、火の用心、マンドロ灯せ」とかけ声をかけた。

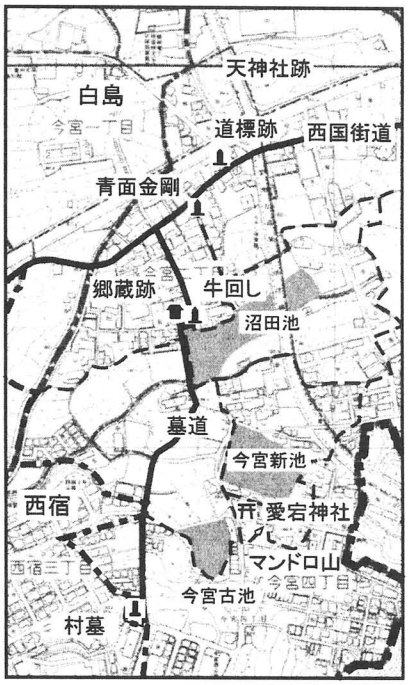


図22　今宮集落周辺

（４）秋から冬の行事

月見（旧暦８月１５日）　この日を芋名月と云った。米粉の団子と子芋をゆでた団子を三宝にのせて供えた。
男の子が「団子突き」をして供えた団子を盗んだ。女の子はその後ろを付いて回り、取った団子を分けてもらった。

彼岸　おはぎを作り、墓参りに行った。

秋祭り　為那都比古神社の祭りがあった。各村から年番制の世話方が出て支度などした。
山車、御輿、太鼓は出なかった。事故や喧嘩があり早くから無くなっていた。
素人芝居や相撲大会があった。

亥の子　11月の一回目の亥の日に行った。木の棒を芯にして藁を撒いて、道具を作った。各家を回りながら「いのこ、いのこ、いのこの晩に、重箱拾ろたらご馳走いっぱい・・・」と唱えた。この日には母親が、ボタモチを作ってくれた。
この日から炬燵を出し、冬支度をした。

誓文払い　池田の誓文市に買い出しに行った。池田の他にも石橋や箕面の誓文市に行くこともあった。

冬至　南瓜の炊いたものを三宝さんと仏さんに供えたり、食べた。
柚の皮や蜜柑の皮の干したものを小袋に入れ、風呂に入れた。

３．その他の民俗

（１）講

講　伊勢講・庚申講があったが、参加者が2、3人になったので近年廃止された。

伊勢講は明治の頃までは、旗を先頭に歩いて伊勢参りをしていた（旗は『箕面市史』第2巻457頁参照）。伊勢講は、13、4軒づつ2つに分かれている。2月11日に例会があった。昔は講員の数も多かったので年貢も多く上がり、一週間ぐらいかけて伊勢参りに行ったが、それでも費用は余ったほどだったと云う。伊勢参りに行かなかった者は、講員の家に集まり、宴会をした。

寛政5（1793）年2月の「伊勢参宮願」（『植村家文書』）には、2月28日に伊勢へ出発し、3月7日頃に帰村する旨の記述が見られ、伊勢参宮が年頭に近く、しかも農繁期に先だつ時期に行われたことが伺える。

以前は柳谷講もあり、春と秋の彼岸に畑（池田市）から平尾（箕面市）辺りを廻り寄付を集めて、柳谷観音へ持っていった。その他、青年会を中心に構成する行者講があり、年に2、3回大峰山へ登った。薬師講もあったが講員は少なかった。但し、天明2（1782）年の「郷社祭礼費用算用定」（『植村家文書』）には、祭礼に参加する人員の中に、持宝院などと共に「薬師講拾五人」として薬師講の名が見え、当時は郷社の祭礼に薬師講が深く関わっていたことが伺える。このことは為那都比古神社の神宮寺であった医王山持宝院との密接な関係があったからであろう。

（２）青年会・処女会

青年会・処女会　女子は、だいたい小学校を卒業するくらいから「処女会」に加入し、結婚すると婦人会に移った。青年会ほど行事や役はなかった。

男子は15、6歳で必ず青年会に加入しなければならなかった。年長になると消防団に入るが、人数が多く定員を超える場合は、準団員となって、順番待ちをして正団員となった。

（３）結婚

結婚　だいたい近く小野原や萱野・白島から嫁を迎えていた。遠方から嫁入りする場合は、能勢や亀岡辺りから働きに来ていた者が、そのまま村にいて結婚した。

（４）道標

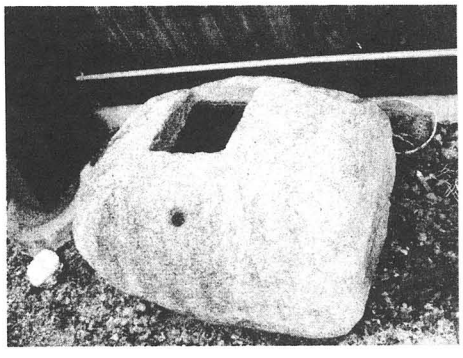


写真78　道標の基礎

道標　今宮西交差点の南にあるＡ氏宅の庭隅に置いてある石は、もともとは道標の台座の石であった。この上に勝尾寺徳本上人筆と伝わる石碑・道標？（四面に観音像が刻まれていたという）が、建っていたが昭和14、5年に盗まれたと言われている。

今宮は西国街道と池田・箕面道及び大阪道の分岐点であり、庚申塚から大阪方面への道標が郷蔵

横・沼田池・村墓と点在している。

第９節　外院地区

１．地区の概要

概要　外院地区は勝尾寺山地の南麓斜面から国道171号線まで南北に細長く広がる地域であり、北西部は箕川の流域となっている。近年中央部を横断する山麓線の開通に伴って地域が発展した。古代以来豊嶋郡に属し、近世以降は稲・芝・西宿・白島・坊島・如意谷・石丸・今宮ら萱野郷11か村の一つとされている。

「外院」という地名は勝尾寺別院の帝釈寺（粟生外院）に由来するとされており、寛元元年（1243年）の『沙弥心空筆勝尾寺古流記』などにみえる。ここにみられる外院庄の庄域は島下郡と豊嶋郡の2郡にわたって設定されたため、それぞれの郡を「粟生東外院」「西外院庄」と称するようになった。これらはそれぞれ現在の粟生外院地区と外院地区にあたり、今でも外院地区住民は粟生外院地区のことを「東外院」（ヒガシゲイン）と呼ぶなど、近代まで続いた行政上の境界認識は生活の中に根付いている。

自治会（垣内・組）　天保12年（1841年）の『宗門人別改帳』（藤井家文書）に家数27とあるが、これが旧来の集落部分で、現在もこの27軒は3つのカイチ（垣内）もしくはクミ（組）で構成されている地域として、南部の新興住宅地域とは異なる地縁的結合をみせている。

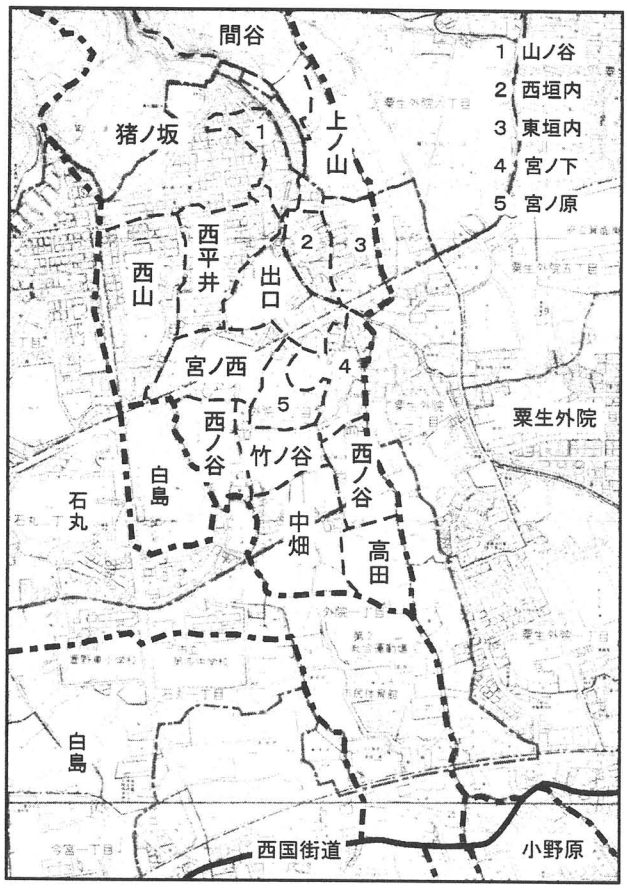


図23　外院旧字名

3つの垣内は上垣内（カミガイチ）9軒、中垣内（ナカガイチ）8軒、下垣内（シモガイチ）もしくは南垣内（ミナミガイチ）9軒となっている。この垣内が現在も行事などの役割分担の単位となっている。当初は5、6軒の村だったのが隠居や分業などで家数が増えたと言われている。

寺院（願生寺）　地区の檀那寺は浄土宗願生寺である。応永元年（1394年）正誉覚山の開創と伝えられ、過去帳の最古の年代である元禄元年（1688年）から数えて現住は第33世にあたる。正確な年代は未詳であるが永代帳には少なくとも江戸末期もしくは明治初期からの記述があり、明治26年（1893年）落雷で焼失した際に一部修築された。

浄土宗寺院の住職は一般的に檀家には「オオッサン」と呼ばれることが多い。箕面市は比較的浄土宗寺院

が多いが、これは勝尾寺境内の二階堂との関係が想起されている。二階堂は法然が流罪を許されて京都に入るまでの4年間居住していたところである。ここでも願生寺と同じように御忌法要が行われている。

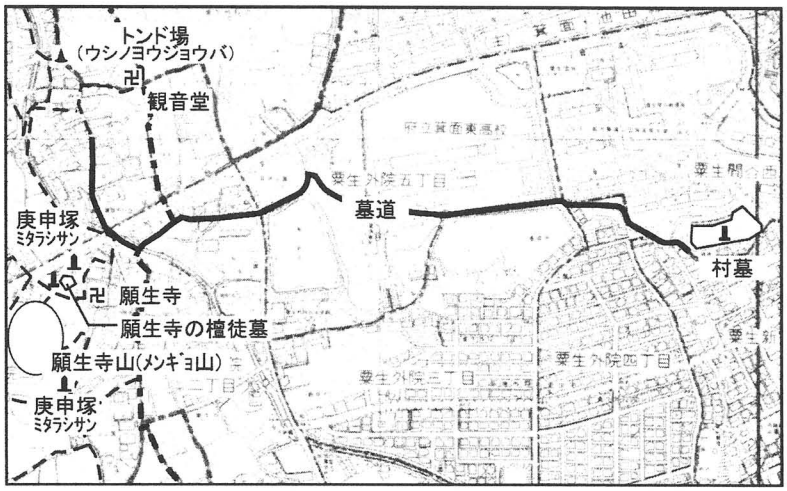


図24　外院集落周辺

檀家総代（世話役）は各垣内（上・中・下〔南〕）からそれぞれ1軒の計3軒が務める。大抵は居住歴が長い家や年長者のいる家から順に、集会で選出される。任期は4年であるが実際は当人が亡くなるまで留任することが多い。

境内には水子地蔵と稲荷が、檀徒墓の入り口には庚申塔とミタラシサン・水神さんが祀られている。水神については当初作られた古い祠がガンショウジヤマの麓に今も残っている。昔はここの井戸からよく水が出ていたため、隣接する粟生外院地区の地主が作ったものとされている。

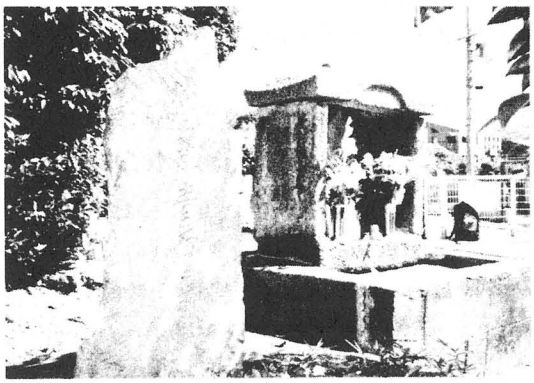


写真79　檀徒墓入口の祠

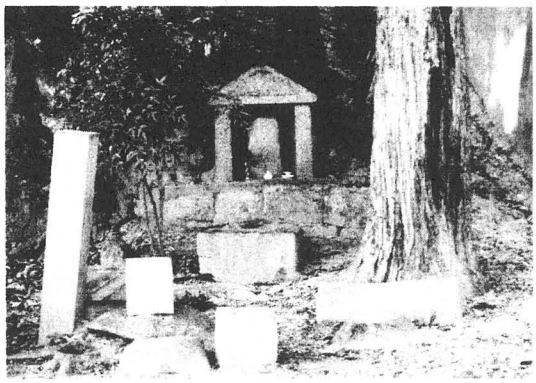


写真80　ガンショウジ山の祠

寺院（観音堂）　観音堂の管理は地区の観音講がおこなっているが、天保3年（1832年）の記録には「観音明王寺」とあり、江戸末期には寺院があったようである。現在は3体の観音菩薩像が安置されている。地蔵のない外院地区では、この観音堂が村堂として地蔵に似た性格を持っているようである。

神社　外院地区の鎮守としては神明神社が願生寺の裏手に鎮座していた。天保3年（1832年）の記録には「当村氏神蔵王権現牛頭天王戎三郎」とある。明治3年（1870年）『外院村鎮座社地取調帳』には「神明宮社」と明記されており、牛頭天王（素盞嗚尊）、戎三郎（蛭児尊）、左王権現（別雷尊）が祀られていたことがわかる。勧請は承和5年（838

年）とされているが正確な由緒は不明で、明治40年に為那都比古神社に合祀された。外院地区の人々はすべてこの神明神社の氏子となっていたが、萱野11カ村では「惣社素盞嗚命」「惣社天満天神宮」（為那都比古神社）の氏子となっている。

また各家では平素からカミサンダナ（神棚）には伊勢皇太神宮・伏見稲荷・中山さん（満願寺）・為那都比古神社（氏神）・清荒神・成田山（車の神様）・淡島神社（女性の神様）など先祖代々祀っている神様を引き継いで、それぞれの神社でもらってきたお札や縁起物などを置いている。

台所には30cm四方の棚の上に小社を置いて荒神さんを祀る。勝尾寺にも荒神が祀ってありお参りするがお札はないので、清荒神でお払いしてもらうことが多い。

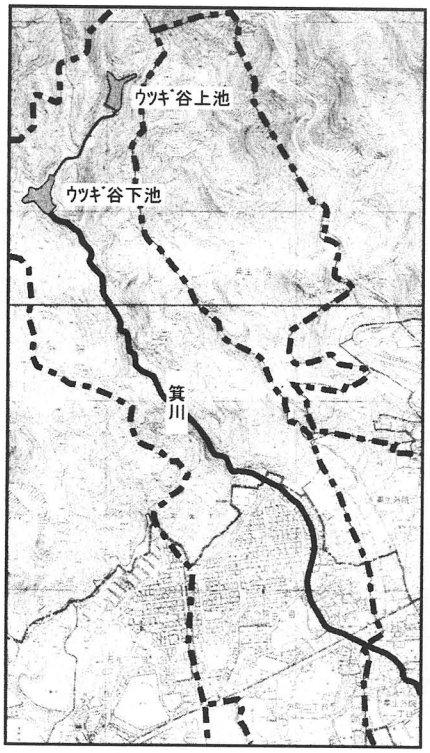


図25　溜池と用水

水利・入会　外院地区には河川がないため、用水は池がかりとなっている。用水溜池は文化14年（1817年）から文政8年（1825年）にかけて萱野郷11か村で築造された八カ池の一つであるウツギタニイケ（奥の池）とジンドリイケ（ヨウガシタ池）を利用した。入会山は萱野郷11か村立会の萱野山である。

2．年中行事

（1）正月の準備

各家ごとに28～30日頃から、飾り物の作成、餅つき、大掃除を始める。準備を開始する日はとくに呼称しない。

大掃除は28～29日頃で不定。ススハライと呼ぶこともある。年末は忙しいため神棚は25日ごろに掃除していた。

正月飾りの作成時期は各家によって異なる。10日頃から始める家もあるが、大抵は男性が普段の仕事が休みになる29～30日頃から作り始める。

注連縄　裏白を山に採りに行き、幣は半紙で作る。藁はもち米の新米のものがよいとされており、刈入れ時に別に保存しておき、青味のあるきれいなものを選んだ。作るときには「つば（唾液）をつけてはいけない」と言われ、洗面器にはった水で手を湿らして「七五三」（7・5・3本単位）で左向きに三つ編みで綯った。

玄関には裏白・みかん・木炭・昆布などを付けた最も豪華な帯飾りを飾った。神棚にも帯飾りを飾り、裏口・窓など家中の入り口には直径約20cmの団扇形の輪飾りを飾った。トラクター・コンバインなどの大型農耕機具にも飾っていた。

神社の注連縄は29日に集まって作る。31日の夕方か、「一夜飾りはよくない」として30日に飾る。現在でも毎年12月10日頃、萱野東小のコミニュティーセンターで注連縄講習が行なわれている。外すのは1月14日の昼で、トンドで集めて燃やすため15日の朝に門外に出す。

門松　山で採ってきた松・竹・梅の根元を半紙で巻き、上から紅白の水引きをかけた。竹は「まっすぐ伸びるように」という意味があるとされており、松竹梅のほかには「難を逃れる」の意から南天の木も使用していた。大きさは大体高さ50～60ｃｍで、年々簡素化され現在は門の両脇だけであるが、昔は蔵にも飾っていた。

鏡餅　餅つきは28日か30日に行われる。29日は「クノモチ」といって忌避されたが、最近は「苦を餅が持っていく」「フクモチ」として吉と見なすむきもある。30年前からは機械だが、それ以前は男性が撞いて女性は水とりをしていた。ここでは鏡餅用・雑煮用の小餅・かきもち（あられ）の3種類を準備する。

鏡餅は、まず床の間に串に刺した干柿・昆布・蜜柑・裏白などをつけた最も大きなものを飾った。干柿は「仲睦まじく」と真中に6つ、両側にそれぞれ2つづつ刺す。蔵の入り口にも二段重ねのものを飾っていた。蔵は米や嫁入り道具を収めることから、家に「徳（得）」が入る場所とされていた。神棚や仏壇、三宝荒神には小さめのものを供える。そのほか牛も財産であることから牛小屋や井戸にも供えていた。現在も「道具の神様」として大型農耕機具に供えているところもある。また、宮当番や檀家総代の家は寺社にも供える。

大晦日の晩　夕食は通常どおりで、その後年越しそばを食べてから願生寺に除夜の鐘を撞きに行った。家によって差異があり、うどんの家もある。具は板蒲鉾・卵・トロロ昆布などに最近はてんぷらを入れることもある。

（２）正月行事

若水・ハツミズ　女性が自宅の井戸から汲んでくる。神棚に供えたのち飲んでいた家もある。

雑煮　三が日とも白味噌もしくは合わせ味噌の家と、1・3日が白味噌で2日は焼き雑煮（焼餅を入れた吸い物）にする家とがあった。元日の早朝、初詣に行く前に支度をするのが女性の仕事であった。

具は焼き豆腐・小芋・ゴンボ（牛蒡）・油揚げ・大根・人参などにかつおぶしをまぶした。具を角切りにするのはよくないとされていたため輪切りにされ、直径約6cm程度の小さい丸餅も切らずに用いた。焼き雑煮の具は主に水菜と油揚げであった。

初詣　初詣は元日の早朝に地区で集まって区長（自治会長）に挨拶し、為那都比古神社、願生寺の順に参詣した。寺では元日の朝に修正会（シュショウエ）がある。檀家が集まり住職と世話方が年始の挨拶をする。

大体三が日のうちにヤワタハチマン（石清水八幡宮）・伏見稲荷神社・生駒の聖天さん（宝山寺）・城南宮・香里園の成田山（寝屋川市・成田不動尊明王院）、そのほか年毎に異なる恵方（アケホ）の神様と知恩院に参詣することもあった。最近は三が日にこだわらず小正月頃までに三社参り（門戸厄神・勝尾寺・中山寺）などをしている。

お年玉　子供に普段より若干多めの金銭が与えられ、オトシダマと呼称されていた。

ハツシゴト　2日に「ノエの神さまに礼に行く」などと言って、家長が田の決まった場所に一鍬入れ1・2株おこした後に願い事をした。

また3日に「田に礼に行く」として、洗い米を紙に包んで田に置き、鍬を立てて柏手をして拝んでいたところもある。その時は作業着ではなく、着物を着ていった。

4日を「ハツシゴト」と呼んで軽作業を行なっていたところもある。その際とくに作法はなかった。

七草　正月7日を「ナナクサ」「ナノカショウガツ」と呼んで七草粥を食していた。七草が全部揃わないこともあったので、餅のほか白菜や水菜などを入れていた。七草粥は正月の餅による胃もたれに効くと言われていた。

鏡開き　大抵の家庭では15日のトンドで行なっていたが、3日以降に随時下げる家や七草粥に用いる家、10日にぜんざいを炊く家や小豆がゆにいれる家もあった。神棚の餅は25日にさげる家もあった。かびが生えないように水に浸していたという。

トンド　14日に青年団が藁や芝で土台となる櫓を作る。その晩はヨウネン講と称して酒盛りをした。14日の日没後から火をおこすこともあったが、大抵は15日の早朝に小豆御飯を作って、取り外して門外に置いておいた正月飾りに供え、飾り物を集めて小豆御飯と一緒に火にくべられた。書初めは、高く燃え上がれば字が上手になると言われていた。鏡餅をトンドの火で焼くと「福が来る」と言われていた。焼いた印に焦げ目をつける程度にあぶり、家で再び火に通して「おかがみをいただく」と言って食した。トンドは牛の爪切などが行われていたウシノヨウジョウバで行われていたが、辻々で各家もしくは2・3軒単位で燃やすこともあった。

薮入り　16日は嫁や奉公に出ていた丁稚などが里帰りをした。農作業を開始する時期と重なっていたため、大事な労働力である嫁が里帰りすることが家庭内の不和を引き起こすこともあったという。

正二月の世話畑　小正月を過ぎたあたりから農作業を本格的に始める。12月は比較的雨が多いため、1月から2月にかけて、田畑に生えている下草を枯らして中耕（田畑の土を柔らかく）した。このことを「正二月の世話畑」と呼んでいた。

（３）春から夏の行事

節分　2月3日の節分には、女性が焙烙で大豆を炒ってまず神仏に供えた。それから男性が中心となって「オニハソトフクハウチ」もしくは「フクハウチオニハソト」の掛け声に合わせて座敷を閉めて撒き、最後に玄関から外に撒いた。撒いた後は食べていたが、年の数ほど拾う家と年の数にはこだわらない家とがあった。

この日を「トシコシ」と呼んでおり、この日に年をとると言われていた。魔除けとして、柊に鰯の頭を刺して玄関・蔵・門などに飾り、夕食には焼いた鰯を食べた。また豆を包んで賽銭一銭とともに為那都比古神社へ夕方持っていくと、ジョウセンアメ（赤い筋が入っ

たねじり飴）をくれた。

初午　初午という名称は知られているが、とくに行事はなかった。ただし「初午までに玉ねぎを植えたらよく採れる」という言い伝えがあった。

シモクサヤキ　2月の風のない日に村中で下草を焼いて、ウンカなどの害虫を退治した。この時期は「霜が下りないと草が枯れない」と言われていた。

雛祭り　3月3日の雛祭りには段飾りの人形が飾られた。人形は早めに片付けるのが良いとされており、雛人形を淡島神社へ持っていって流し雛にしたり、神社で焼いたりしてもらうこともあった。
各家では甘酒（白酒）やちらし寿司、ひし餅（ゆぐい餅・白餅・ヨモギ餅）、まんじゅう、果物を三宝に載せ雛人形に供えてから食した。ご馳走としてビスケットが出されたこともあった。
大抵の家庭ではトウジメ（田畑仕事に出ているため家が留守）なので、雛飾りがあったり年寄りがいたり、多少金銭的に余裕のある家庭に子供が集まって来ていた。

彼岸　彼岸は「オヒガンサン」と呼び、各家では墓参りをするほか牡丹餅・草団子など作った。中日に願生寺で先祖供養が行われ、各家から重箱に米一升と2000円程度の金銭を持参する。婦人会は詠歌を唱える。住職による法話や簡単な食事の接待があり喜ばれていた。婦人会が本堂と願生寺境内の水子地蔵に詠歌を唱える。8～10年に一度は勝尾寺に参詣して詠歌をあげることもあった。

アイシ　3月から4月にかけて、再び田畑の下草を鎌で刈って、中耕（土を柔らかくする）して基寄せ（土を寄せて畝を作る）する。これを「アイシ」と呼んだ。

アマチャ　4月8日は願生寺で、甘茶の接待があった。子供たちは楽しみにしており、何回も並んでもらっていたという。

メンギョ・ハナマツリ・ハルマツリ　4月15日に煮物や寿司を重箱に詰めて、村中でガンショウジヤマへ出かけた。この日をメンギョあるいはハナマツリ、ハルマツリなどと呼んでいた。上垣内では観音さんの桜の下に集まった。大人も参加していたが、行事の中心は子供であった。

牛回し　自家の牛をウシノヨウジョウバへ連れて行った。角には菖蒲ではなく赤いはちまきをつけた。牛は豊かな生活を表すもので、牛の背中には意匠を凝らした布をつけて当日の日付を織り込んだりしていた。牛は爪を切り、馬はカネ（蹄鉄）を削った。この日はバクロ（牛の仲買人）が来ていた。

ギョキ（御忌）　4月24日に願生寺で法然上人の追善供養をする。これは浄土宗では最も大きな行事で、本山の知恩院でも盛大な御忌法要が行われる。上人の忌日は1月25日

だが、大正ぐらいから寒中であるため4月となった。各家から米一升と2000円を持っていき、お経と詠歌があげられるほか、法話や茶菓の接待があった。

モミアライ　4月末から5月初旬にかけて、籾の選別を行った。古くはアカ（銅）の籠に籾を入れて用水などで洗い、浮いた悪い籾を落としていた。籾の選別を行った後、日当たりのよいところに籾を置いて、少し発芽させてから苗代をはった。時代が下ってからは塩水で悪い籾を浮かして選別する塩水選を行なうようになった。その際の塩水の濃度は卵の浮き沈みで確認した。

端午の節句　5月5日は端午の節句で、こいのぼりやかぶとを飾った。こいのぼりは雛祭りと同様に遅くまで出しておくのは良くないとされている。子供が菖蒲を鉢巻にして、紙で折ったかぶとと一緒にかぶって遊んでいた。菖蒲を屋根に放り上げたり、風呂に入れたりしていた。蓬団子・ちまきを食べていた。

ハゲ・ハゲショウ　7月1日は農作業を休んで、妙見山のお祭りへ朝暗いうちから出かけていった。妙見山の奥の谷では相撲も行われていた。帰路が遅くなるため、あらかじめ勝尾寺から高山辺りの山中に提灯を預けたり置いておいたりした。各家ではハナミダンゴ（セイロで花形に蒸して餡を包んだもの）を年寄りが作っていた。

サナブリ　7月初旬にタウエヤスミ、サナブリなどと称して村中で農作業を休んだ日があった。これは区長が決定・伝達した。青年団は団服を来て梅田などへ活動写真や漫才小屋などに遊びに出かけた。伏見稲荷や石清水八幡宮などにお参りしたお札（「五穀豊穣」）を竹の皮にはさんで田の一つに竿で立てたりしていた。稲の刈り入れ後の休みもサナブリもしくはアキヤスミと呼ばれていた。

タナバタサン・瀧安寺の護摩焚き　7月7日をタナバタサンと呼んでいた。七夕飾り自体は小さな子供のいる家で行われていた程度で、聖天さんの護摩（瀧安寺の護摩）に仕事を休んでお参りすることが中心だった。護摩の灰は虫除けとして持ち帰り、紙に包んで竹の先を二股に割いて挟んで田に刺していた。

為那都比古神社の草取り　7月15日は萱野郷11か村から一人づつが境内の草取りを行なう。これは8月15日の慰霊祭の準備作業である。

大掃除　7月から8月にかけて、日にちは決まっていなかったが全市一斉に大掃除が行われた。掃除が済むと検印シールが貼られたという。

（４）盆行事

施餓鬼　8月7日13時より願生寺で先祖供養が行われる。本堂に南面して縦2ｍ横1ｍの施餓鬼壇が設けられ、壇には提灯・野菜・花・果物・餅・シキビを供え、檀信徒のすべての位牌を中心部に置く。

餓鬼供養については、本堂の外にも2m四方の櫓を建てる。四本柱の上に2m四方の板を張り、米・野菜・果物に位牌を一つ置く。柱には笹を結び、偈文を書いた色紙をつける。

各家は2000～3000円程度の金銭と重箱に入れて風呂敷掛けした米一升と供物を寺に持っていく。初盆の家はまた別に供物と布施を持っていく。

供養は最初に新仏のある家・その親類の家・その他の檀徒の順に名前を呼ばれたら塔婆を受け取り、半紙に包んだ賽銭と共に壇に供えて焼香する。まず古い永代（先祖）供養があり、一旦衆中（法会を執り行う僧侶たち）が退場し、その間にアマ講（婦人会）によって詠歌があげられる。その後新仏の供養が行われる。いずれの場合も信徒よりも檀家が優先される。

当番は世話方3人が務め、当日の朝から櫓を建てたり幕を張る。昔は当番のアマ講（婦人会）が寺に集まって精進料理の昼食を作ってみんなで食べていた。

仏迎え　8月10日の朝、願生寺本堂に集まり、先祖の名を書いた塔婆をもらって持ち帰る。初盆のときの塔婆は戒名が書かれてある。本堂では各自もらった塔婆を乗せた盆を前に置いて円座する。盆には塔婆のほかに、じゃがいもを半分に切ったものに線香と蝋燭を立てたものを置く。これらは法会が終わった後、寺に隣接する檀徒墓に供える。檀徒墓には前日に花を供えておく。

供物　飾り物としては現在で提灯を立てるが、これはとくに新仏のある家がすることが多い。床の間の掛け軸は、観音像や南無阿弥陀仏の名号、西国三十三カ所、四国八十八カ所などの描かれた仏事用のものに替えられる。仏迎えでもらってきた塔婆は13日に仏壇に祀る。

供物は各家で採れたスイカ・茄子・ぶどうなど旬の野菜類を、蓮の葉に載せて仏壇に供え、毎日替える。盆の期間中の食事は一般的に魚肉が避けられ、山や畑のものが供えられる。

写真81　願生寺での仏迎え

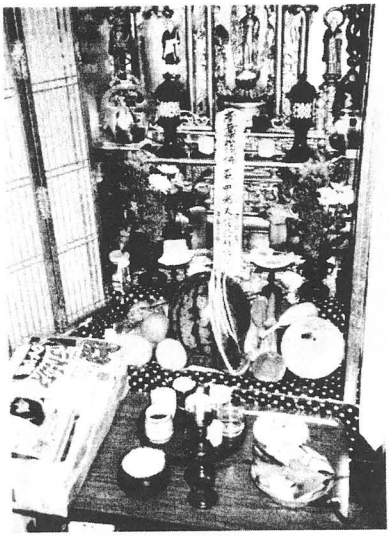


写真82　盆の供物

〔 例 〕
13日 昼：オチツキモチ（餡餅：先祖が旅から帰ってくるのを労う力餅）
　　夜：茄子やかいわれの和え物
14日 朝：茄子の胡麻和え、漬物
　　昼：そうめん、麩の汁物
　　夜：新粉団子、ひじき、筑前煮
15日 朝：南京（足が速い＝腐りやすいことから、先祖の霊が早く帰ることを願う。）
　　昼：オクリダンゴ、馬方の野菜（茄子などに棒を刺して馬などの「足の速い」動物に模したという）、赤飯など

棚経　8月14日に寺の僧侶が村内の各家を廻って、仏壇、無縁仏の供養棚、新仏にお経を唱える。昔は各家を回る順番が決まっていたが、最近は「今年は上垣内から」というように垣内ごとに毎年かわっている。新仏があるときはとくにその名を呼んで唱えてもらう。各家では寺に布施を渡す。

先祖送り　飾り物や供物は14日の夕方に片付けて、15日の午後に南京（かぼちゃ）を食べたあと、供物や塔婆を菰に載せて、川の砂洲のところに置き、雨が降れば自然に流れるようにした。昔は「達者で長生きできる」として置いてあるものを拾い食いしていたが、野菜や果物に比して御飯は「餓鬼がついている」と捨てられることが多かった。最近では塔婆を寺に返すときに、供物も一緒に寺の塵芥場へ捨てている。

新仏　前年または前々年に不幸があった家の盆をシンボトケと呼ぶ。自家や近親にシンボトケがあるときはアラタナという小さな棚を座敷の真中に設ける。棚には高さ40ｃｍ位の7段の梯子を直径2～3ｃｍの麻幹で作って架ける。先祖の霊はこの梯子を上ってくると言われた。供物は20ｃｍ四方の朱塗りの膳に載せる。

無縁仏の供養　無縁仏は「三界無縁さん」「ムエンサン」「ガキ」と呼んで各家で供養する。縁側に棚を設けて仏壇やアラタナと同じように、蓮か里芋の葉を敷いた上に花、線

写真83　新仏のアラタナ

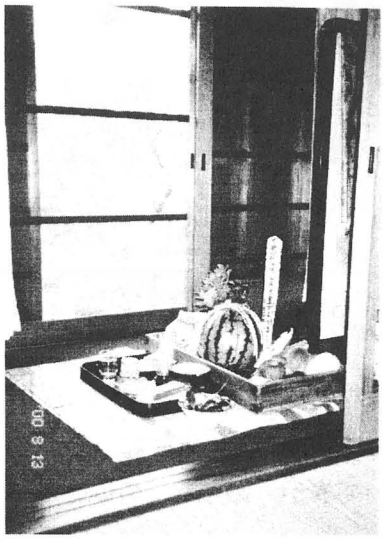


写真84　無縁仏の供養

香、蝋燭、なす・きゅうり・トマト・十八豆などの野菜、ごちそうとされたほおずきなどを載せて供える。塔婆は茄子かジャガイモを二つに切ったものに麻幹で作った箸を二本足のようにさす。シキビで水をかけ「サンパラ、サンパラ」と言いながら塔婆や供物に軽く水をかけて供養する。

墓参り　お墓へは参るが、花を替えるなどとくにいつもと変らない。

盆踊り　大正の初め頃までは8月17日に観音堂で盆踊りがあり、河内音頭や炭鉱節など踊っていた。若者が方々から集まって自然と揉め事が多く発生するようになったため行なわれなくなった。

マンドロ・マントラ　8月14・15・24日の三日間にそれぞれ上垣内・中垣内・南垣内と垣内ごとに行なう。13日の朝、当番の垣内が参道の整備（ミチツクリ）をしておく。昭和30年ごろまでは、夕方から垣内の人数分（1軒につき2本）の松明を持ってアタゴハラまで登り、松明に火を点して「マントラ～、マントラ～」と唱えながら下山した。

15歳～成人までの青年団を筆頭に小学校3年ぐらいまでの男子が行事の担い手であった。女性や子供は浴衣姿に団扇を持って見物していたが、下山して松明を一箇所に集めて燃やす火で一緒に花火をした。明治2年（1869年）『外院村田畑名寄帳』に「愛宕田」の記載が見られるように、昔は愛宕山信仰の一環として、村全体で行事を楽しんだ。

また、田の虫を山へ誘い込むという言い伝えもあった。箕面の山中から煙が出る様は壮観で何処の村（のマンドロ）が良く燃えているか口々に言いあうこともあって、よく燃えるようにしていた。現在もダイトボシの灯篭まで蝋燭を持ってあがり、燈篭に点火してお神酒を頂く。

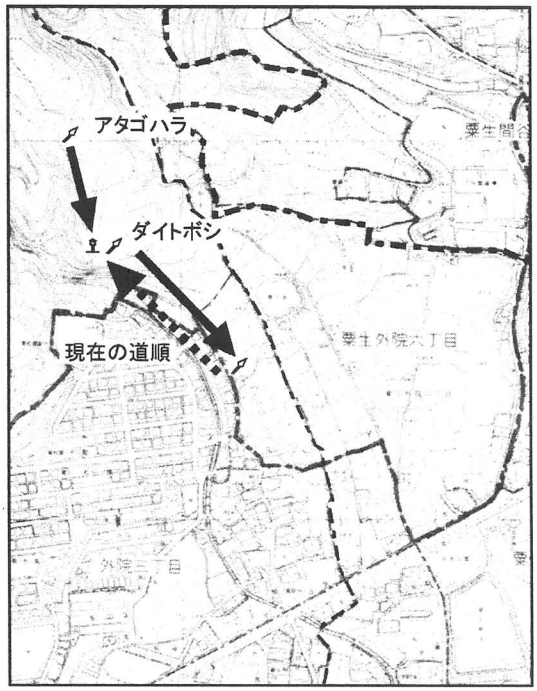


図26　マンドロの道順

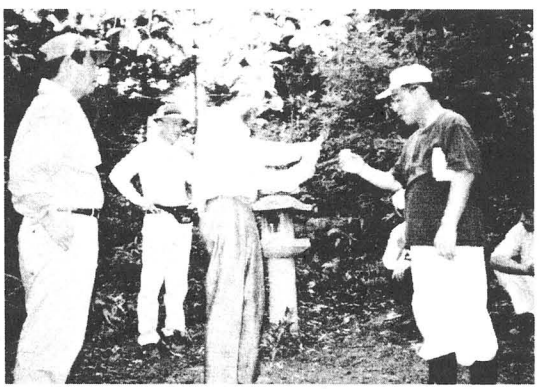


写真85　ダイトボシの灯篭

（５）秋から冬の行事

ミタラシサン　9月8日はミタラシサン（水神さん）の供養が行われる。祠の前に茣蓙を敷き、海山の幸・酒・里芋などを供え、お経があげられた。以前は雨乞いも行われていた。2・3軒が毎年交代で当番を勤めて、

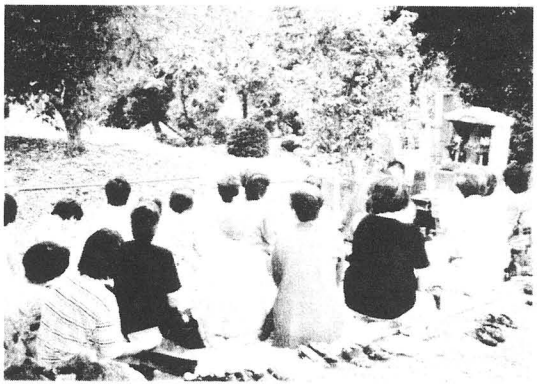


写真86　ミタラシサンの供養

茶菓などを用意した。半紙に少額の金銭を包んで持っていき、ミタラシサンの祠のほかにも願生寺の本堂、境内のミズコサン（水子地蔵）、ヤクシサン（薬師如来）も供養した。

オツキサン・ツキミ　一五夜（旧暦8月15日）に小芋、月見団子、萩、薄などを供えて月見をした。昭和15年ぐらいまで、子供が長い棒でお供えの団子を突いて盗む慣わしがあった。

彼岸　墓参りをして、晩に寺に集まる。セイロで蒸して中に餡を入れた花見団子をいばらの葉で包んで供えたり食したりしていた。法要の内容自体は春秋の彼岸は同じであるが、法話の内容は春と秋で変えている。

秋祭り　10月14日は為那都比古神社の秋祭りで、萱野11か村（稲・芝・萱野・西宿・今宮・白島・坊島・如意谷・外院・石丸）全体で参加する。戦前までは「ミチツクリ」があり、11か村からそれぞれ一人づつ人夫を出して、歩きやすいように参道を整備した。「モチマツリ」「ゼンザイマツリ」の別称に見られるように各家ではもちや赤飯を作った。親戚が集まって、槲や鯖寿司などのご馳走をすることもあった。戦前までは神輿と太鼓が出ていたが、けんかや揉め事が生じたため廃止された。

ジュウヤマイリ　10月24日の夜、願生寺で法要が行われる。お経や詠歌があげられ、住職が法話を話す。世話役（檀家総代）の伝達によって希望者が参加するが、女性が多い。

亥の子　11月第3回目の亥の日に夕方から行なう。使用する藁製の道具はイノコと呼んでいる。幼少時は親に作ってもらい、小学5・6年からは自分で作る。年寄りが留守番などで暇があれば家で牡丹餅を作る。各家を回る順番は決まっていないが各垣内の家を回り、玄関口にしゃがんでイノコをぶつけて「♪いのこいのこいのこの晩に重箱あけておっさんとおばはんとぼたもちいおうてたべなはれ♪」などと囃した。一軒あたり3〜5銭程度もらい、年長の子が等分に分けた。金銭をくれない家には行かなかったという。使用したイノコは普通に捨てていた。この日を境にしてこたつを出した。

センモンバライ　12月中旬になると、池田まで歩いて出かけて正月用品を購入していた。

冬至　かぼちゃを食べると「長生きする」と言われ、柚子湯に入ると「体が温まる」と言われていた。

３．その他の民俗

（１） 講

伊勢講　垣内やドウギョウとは異なる3つの講があり、それぞれのヤド（当番宅）に集まり、掛け軸と三宝を飾って飲食を共にした。文政13年（1830年）ならびに明治2年（1869年）『外院村田畑名寄帳』に「伊勢講田」の記載が見られる。当時はその収益で講を経営していたことが窺える。

ヤドの家では二升餅や酒の準備をして、「天照皇太神」の掛け軸を床の間に飾りその前に三宝を3つ置く。向かって左右の三宝にはスルメ・昆布・野菜、中央には洗米（白米を洗ったもの）・お神酒を置く。食事の中心は、明治までは芋の煮物など田畑で採れたもの、大正以降はスキヤキなどであったが、寿司、弁当と年々簡素化され、平成12年（2000年）からは伊勢神宮へ日帰りで参詣するだけで、ヤドに集まることはなくなった。

かつては1・3・9月の11日に集まっていたが、終戦後は1月だけとなった。さらに20～30年前に、年始は忙しく観音講の行事とも重なることから2月11日になり、ヤドの家は前年に掛け軸や三宝など道具一式を入れた箱を引き継いだ。また講同士で比較や揉め事が生じたため、現在は垣内単位の講となっている。

観音講　1・8月17日に観音堂に村中で集まる。観音は安産の神様とされ、モッソウ（味なし握飯）をその年に出産予定の女性に授けた。賽銭も500円程度を女性の名前で供える。

冬はイナリセンギョウと一括される意から、アカゴハン（小豆ごはん）を5合（現在は1升）炊いて握飯を作り、重箱にバランの葉を敷いて入れ、為那都比古神社の周辺、山中、寺内の稲荷さん・ゴンジュウロウサン（願生寺境内）など狐狸の出そうな所に置いた。

27軒がヤド（当番）を持ち回りする。ヤドは1軒だが、垣内全体が朝から集まって供物の作成や掃除などの準備をする。観音堂の正面に飾る幕と提灯、控帳（会計帳）もヤドの家が管理していたが、現在は幕と提灯は自治会館で管理している。控帳は行事のあとに当番の男性が収支を計算したのち、箱に入れて翌年のヤドに渡す。

供物はモッソウと直径約3ｃｍの塩味のコモチ（子持ちの意か）を女性がこしらえ、お飾りを男性がこしらえた。コモチは各家に配られた。お飾りは高野豆腐・おくら・椎茸・南京・湯葉・ズイキ、冬は大根や人参など旬の野菜を串に刺して、観音像の前に供える。平成12年（2000年）からは準備が大変なためパンになった。

ヨウネン講　昭和初期頃まで、青年会がトシコシ（2月2日）の晩に集まった。当時は

写真87　観音講の集まり

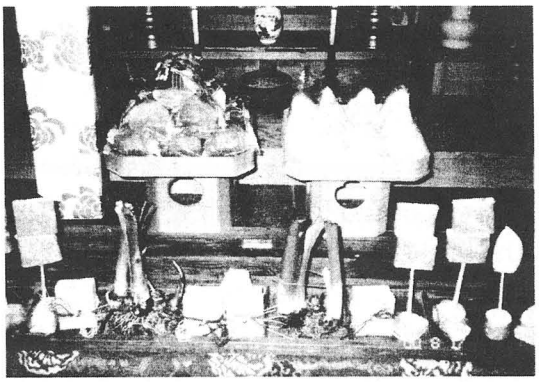


写真88　観音堂の供物

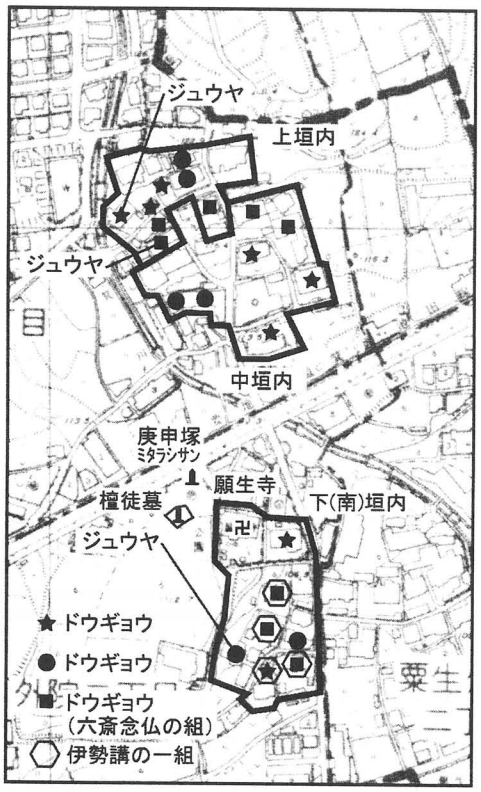


写真27　垣内とドウギョウ

ご馳走とされた鰊を塩に漬けてやわらかくし、火にあぶって飲食した。豆は臼で挽いて豆御飯にした。「トシコシの神様」として為那都比古神社へ参ることもあった。

六斎念仏講　8月14日の昼、マンドロ行事の前に男性が鉦や太鼓をたたきながらお経を唱えて地区の家を一軒一軒回り、子供たちがそれに付いてまわった。家々では新粉（団子）と10銭ずつ包んでくれたので、その金で当日の夜にヤドで飲んだ。ヤドは1年交代で、鉦と太鼓の入った箱を保管した。

近世中期、享保年間に始まったと考えられ、戦前まで続いていたが、現在分かっているのは8軒の家だけであり、8軒はドウギョウ（→後述）の1組と一致する。

ジュウヤ講　ドウギョウの成員がお盆と10月10日（ジュウヤ）にヤドに集まった。現在では盆には集まらずジュウヤのみに集まっており、1つの組は廃止された。

ヤドの家の仏壇に向かってお経をあげるほか、榊のすき焼き・松茸ごはん・果物などを作って飲食していたが、徐々に簡略化され今は茶菓程度となっている。会計帳などが入った箱はヤドの家が順番に保管している。

（２）葬送儀礼

葬式の際の互助組織をドウギョウと呼び、垣内とは異なる構成となっている。ドウギョウの成員は毎月交代のヤドに集まってお経を唱えた。このときに導師を務めるのは読経の上手な在俗の者で、「アリガタヤ」と呼ばれていた。集まる日は毎月定まっていなかったが雨天の翌日など畑仕事を休めるような日を選んでヤドの家が伝達して行なっていた。

葬式には地区外の親戚は干渉してはいけなかった。そのため、葬式を手伝うのは死者の出た家の地区内の親戚＝地下の親戚であった。この地下の親戚が必ず二人一組でドウギョウの成員に手伝いを頼みに行き、つまり地下の親戚以外では、死者の家と同じ垣内のドウギョウからは男女二人、他の垣内のドウギョウからは男性1人が葬式を手伝った。したがって地下の親戚がいない場合は葬式を執り行うことが困難であった。

葬式に関する食事の準備は死者が出た家が準備し、ドウギョウは関与しなかった。村に食料品店があった他の地区では食べ物の準備もドウギョウがしていた。地区に食料品店がない場合は池田まで買い物に出かけることもあった。

ドウギョウの仕事は「旗持ち」、「提灯もち」、「棺桶かつぎ」などがあり、棺桶は4人で粟生霊園まで担いでいった。ただし墓地で僧侶に傘で日除けをする「傘もち」はドウギョウ以外の者がしていた。またドウギョウが仕事をするのは通夜と告別式だけであった。通

夜の朝から火葬のときに敷く芝・割木・濡れ筵等の準備や、ハカミチの草取りをした。墓地では墓穴を掘り遺体を埋葬する役目も務めた。遺体がきちんと燃えているか夜中に確認しにいくのは恐ろしかったという。

一般に火葬には困難が伴うため、土葬されることも多かった。遺体は粟生霊園に埋葬され、願生寺の檀徒墓は詣り墓的な性格を持っていたようである。粟生霊園までのハカミチは隣接する粟生外院地区と同じ行程となっている。通夜で詠歌があげられることもあった。告別式は墓地で行われ、子供には菓子が配られた。

（３）農業

アサノマシゴト　年寄りがいる家では、年寄りがアサノマ（朝食までの時間）に、田に下肥を撒くなどの軽作業を行っていた。これらをアサノマシゴトと呼んでいた。

アメノヒシゴト　30～40年前までは藁は田に積んで屋根型にして20把＝1束にして保管していた。そして冬季から、雨天時などにはアメノヒシゴトとして藁から縄を作っておく。10月に入ると早稲の刈り入れが始まるので、9月中から少しずつ俵編みを始める。俵編みは非常に時間と労力のかかる作業であったという。

タドン　8・9月の農作業の合間にタドンを作っていた。タドンはへっついさん（かまど）に残った炭（空消・カラケシ）をたたき、糊を入れて練って団子状にして、炬燵などに使用した。昭和に入ってからは豆炭が出回ったが、当初は豆炭が高価であったため、依然としてタドンを用いることが多かった。

第３章　旧豊川地区の詳細

第１節　粟生外院地区

１．地区の概要

概要　粟生外院地区は箕面市の西北部に位置し、北を箕面山、南を国道171号線に挟まれた箕川流域の地域である。戦前までは、けし畑が一面に広がっていたという。また、冬季に山から吹き付ける風は冷たく、「キタヤマオロシ」と呼ばれてる。

粟生村は粟生外院・粟生新家・粟生間谷・茨木市粟生岩坂からなる大村で島下郡西端に位置する。村名は康治元年（1142年）12月24日の「佐伯子犬丸譲状」に「島下郡中条粟生村」と見える。享保6年（1721年）までは粟生・新家・外院・岩坂の小村4か村で、文政10年（1827）村内は山之口・中村・岩坂・外院・川合・新家の6株に分かれていたが、行政的には江戸時代を通じて粟生村1村として扱われている。

「外院」という地名は勝尾寺別院の帝釈寺（粟生外院）に由来するとされており、寛元元年（1243年）の『沙弥心空筆勝尾寺古流記』などにみえる。ここにみられる外院庄の庄域は島下郡と豊嶋郡の2郡にわたって設定されたため、郡の違いを「粟生東外院」「西外院庄」と称するようになった。これらはそれぞれ現在の粟生外院地区と外院地区にあたり、

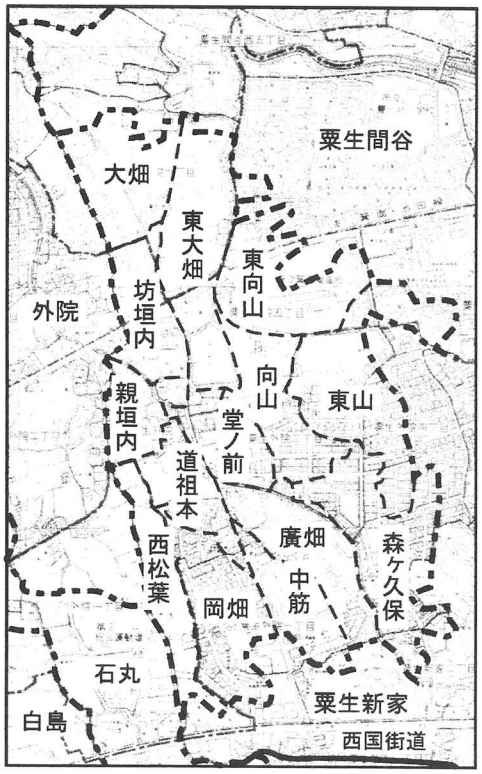


図28　粟生外院旧字名

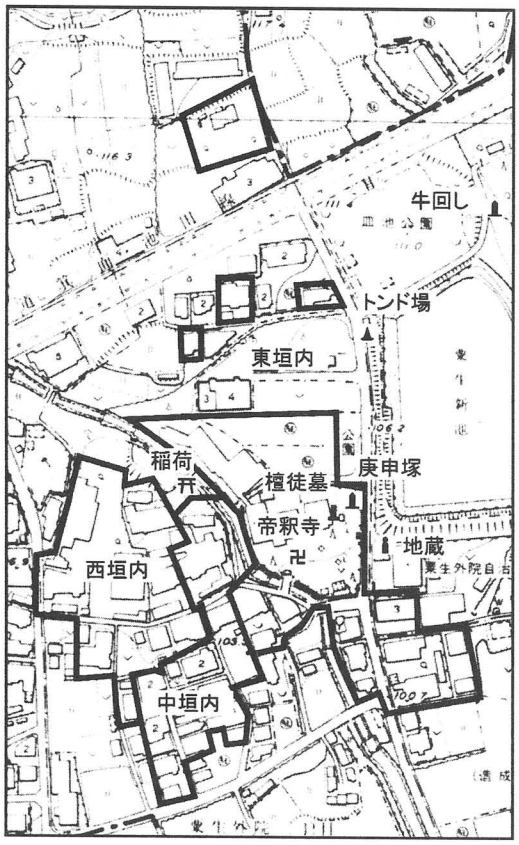


図29　垣内とドウギョウ

地域の人は粟生外院を「ゲイ」、隣接する外院が北方に位置するため「キタゲ」と呼んでいる。

自治会（垣内・組）　帝釈寺付近に3つの垣内（組）があり、この地域が古くからの集落となっている。それぞれ「ヒッガッショウ」（東組）「ニシンジョ」（西組）「ナガガイチ」（中組）と呼ばれ、現在も行事の役割分担や講などの単位となって村落生活と結びついている。

また現在からさかのぼって先々代あたりの人物の名前が屋号となっている。昔は牛の尻に各家の焼き判を押すなどして識別の指標となっていたが、現在はあくまでも地域内の通称であり、また公然と使用することには若干の抵抗感がみられるようになっている。

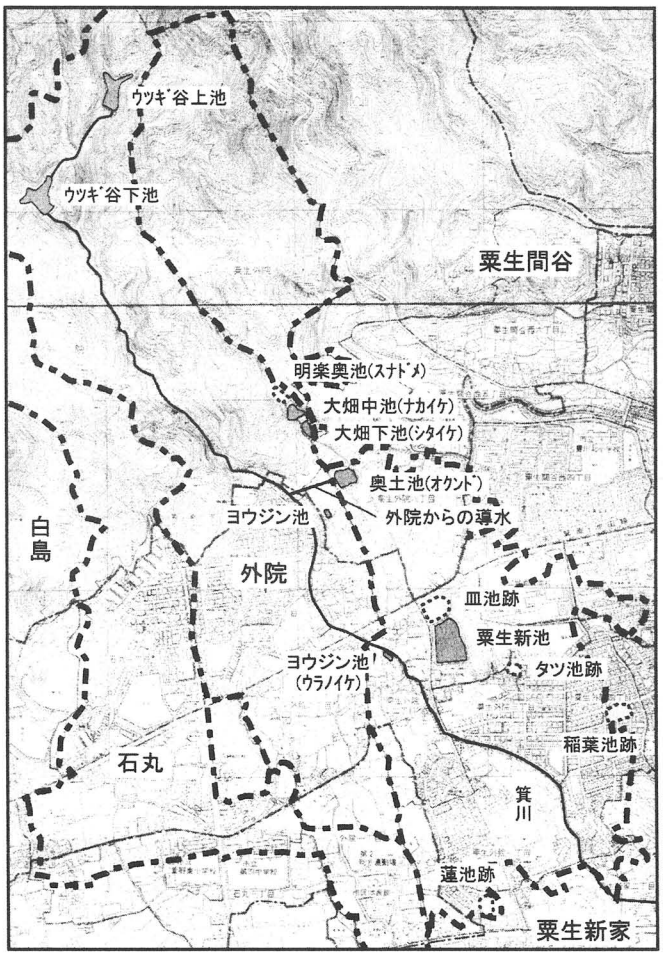


図30　溜池と用水

水利　粟生外院地区は高台であるため、用水の確保は重要であった。溜池も多く、大きなものでは集落付近に今も残る新池や、公園となっている皿池があり、数箇所の樋から周辺の耕地に導水していた。ただし箕川に隣接するヨウジンイケだけは決して水を抜かなかったという。山麓部ではスナドメ（明〔銘〕楽奥池）、ナカイケ（大畑中池）、シタノイケ（大畑下池）、オクンド（奥土池）があり、現在の外院の里住宅内にはタツ池、稲葉池、国道171号線付近には蓮池があった。

これらの溜池や箕川から樋や水路をめぐらして田地に導水していたが、さらにオクンド（奥土池）は冬季（10月～3月）の間隣接の外院地区内の箕川上流部から導水

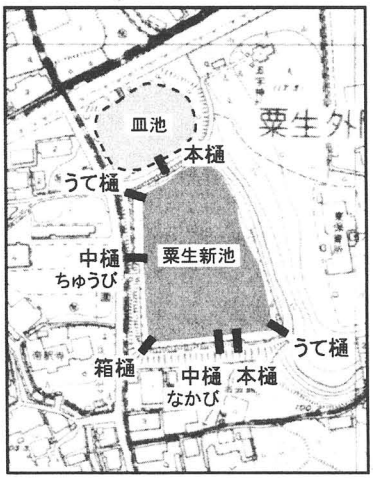


図31　新池

していた。これによって粟生外院地区は外院地区に水年貢あるいは溝年貢と称して、現在でも毎年12月20日頃5000～6000円程度の米を支払っている。

写真89　地蔵

寺社（帝釈寺）　真言宗宝生山帝釈寺は地域の檀那寺として地域の人々の生活と密接に結びついている。年間の諸行事のほかに毎月20日の「お逮夜」（タイヤ）には檀家が持仏前に集まり、観音経を中心とした法要が行われる。これは弘法大師の命日3月21日に因んだもので、各家からは重箱に米一升または同程度の金銭を持参する。また当番1軒は茶菓の準備として自宅から茶葉を持ってくる。

また寺が中心となって婦人会が詠歌の練習を行っている。高野山金剛流の詠歌を、地蔵盆・春秋の彼岸・葬式・初七日の際などに、数種の中からいくつかをあげる。右手で支木をもちカネ（金剛鉦）を叩き、左手ではレイ（金剛鈴）を鳴らして調子をとる。正座して帯状の簡素な袈裟をかぶり、手首に数珠をかけておく。

地蔵は池の移転で現在の場所に移ったとされるが、このとき地区中に腸チフスが蔓延したことから畏怖され、地蔵盆以外では無闇に触れないようにしている。寺が院内諸尊にお参りする「おついたち」と地蔵盆にはお経があげられる。地蔵とされている石造仏のいくつかは観音菩薩や弥勒菩薩であるとも言われている。

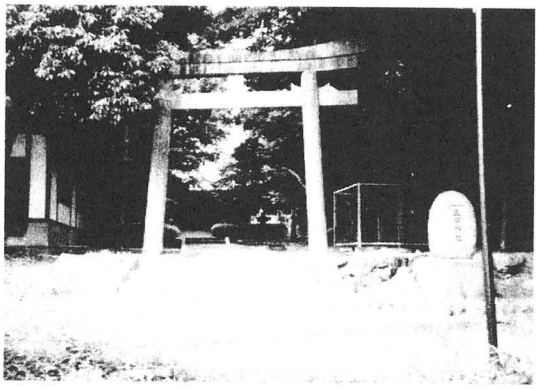


写真90　五字神社

寺社（五字神社）　正確な創建は不明であるが、棟札によると当初は帝釈寺境内に鎮守として祀られており、安永6年（1777年）に現在地に遷宮された。本殿は昭和50年（1975年）に再建され、阪神大震災後に部分改築された。また平成12年（2000年）10月からは、境内全域に及ぶ改築が行われている。祭神は知恵の神とされる八意思兼命（やごころおもいかねのみこと）、三宝荒神、愛宕権現である。

神社の管理は自治会が行っている。宮当番は毎月3軒が月の上・中・下旬を1軒づつ受け持ち、月末に集まって掃除する。1と6のつく日（1・6・11・16・21・26日）に海、山、里の幸とごはん、お神酒、水を供える。

当初は素盞嗚尊神社が粟生6か村全体の鎮守であった。宮単位で粟生6か村という時は粟生外院・中村・奥・河合・山の口・ハックイ（岩坂）で新家は含まれなかった。粟生外院は最も遠方であったため、宮山の山地を売却した際に分担金をもらって氏子から脱退した。

稲荷の小祠は普段から「ゴンジュロウが姑とってしまう」と忌避されており、葬式の際も通らなかった。帝釈寺の境内にも小祠があるが、これは昭和44年（1969年）宿坊建築

の際に建てたものである。寺では「おついたち」にこれらの稲荷祠にも経を唱える。

また各家では、平素からカミサンダナ（神棚）にはアタゴサン（愛宕権現）・オイセサン（伊勢）を祀るほか、アワシマサン（淡島神社）・ヤハタサン（石清水八幡宮）・伏見稲荷神社など「よろずの神様」にお参りした際のお札を貼っているほか、札だけを箱に入れていることもある。その他サンボンサン・コウジンサンと呼ばれる三宝荒神を台所に祀っている。

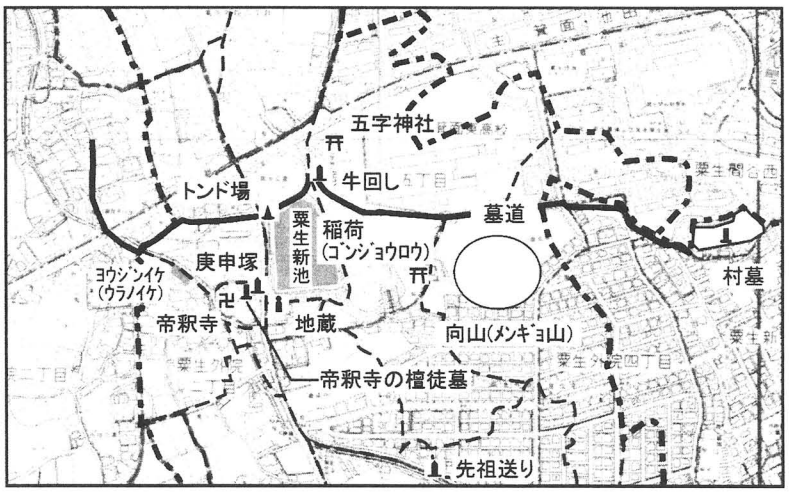


図32　粟生外院集落周辺

２．年中行事

（１）正月の準備

正月のことは「ネンシ」と呼ぶが、準備をはじめる日やその呼称は特に定まっていない。各家によって農作業の合間や悪天候の日などを中心に、20日以降主に30日・31日ごろから始める。具体的には大掃除をしたり、注連縄用のウラジロやシキビ・榊を山へ採りに行く。

注連縄　主として輪飾りだが、玄関には40～50cmの大きな帯飾りをつける家もある。多くの家では戸主にあたる男性が作る。女性が作るときは、「注連縄が穢れるため念入りに手洗いをしなくてはならない」という言い伝えもある。材料の藁は、秋の刈入れ時に注連縄用として別に保存しておいたものを、7・5・3本単位で綯い、「先祖代々すみやかに」の意から橙（ダイダイ）・炭・ウラジロを付ける。

飾る場所は、玄関に一番大きいものを飾り、井戸・便所・納屋そして家中の入り口と鬼門にあたる場所に、早い家では28日頃から飾る。取り外しは1月14日で、朝外して玄関先に置いておいたものを子供たちが持っていき、その日の夜のトンドで燃やした。

門松　主に門だけに飾る。40～60ｃｍの松・竹・梅の枝をそろえて帯状の紙で包み、その上に水引をかけるという簡素なものであった。

鏡餅　餅搗きは28日か30日。29日には「クノモチ（苦の餅）」として忌避された。スルメはつけないことが多く、「よろこぶ」の意から昆布、ほかには橙（ダイダイ）をつけた。

床の間や大黒柱に二段重ねの一番大きいものを飾る家が多い。そのほか神棚・仏壇、昔

は蔵や箪笥などにも飾った。また、三宝荒神（かまど）・井戸には小ぶりの三段重ねのものを飾った。

年越しの食事　大抵の家で年越しそばを食べるが、うどんの家もある。具には葱や油揚げのほか正月料理の余りものをいれることもある。

除夜の鐘撞き　帝釈寺の鐘撞堂に大豆（アドマメ・アゼマメ）を108粒置き、鐘を一度撞く毎に豆を一粒本堂に供えながら、夜通しかけて除夜の鐘をついていたという話がある。大正以前に行われていたようである。

（２）正月行事

若水　若水を神仏に供える家が若干あった。ハツミズ（初水）という呼称も残っている。

雑煮　多くの家庭では、元日と3日が白味噌仕立てで、2日が澄まし汁の焼き雑煮である。ただし三が日とも白味噌の家や三日目にはほとんど雑煮をしない家もある。以前は合わせ味噌を用いていたところもあるが、いずれにしても自家用味噌の仕込みは12月中に終わらせていた。

餅は丸餅で、具は大根・人参・小芋・牛蒡・油揚げなど。長いものは縁起が悪いとされ、だし昆布と油揚げ以外の具はすべて丸く切って入れる。また豆腐は葬式のときに食するものとして忌避されることが多かった。調理用の薪としてとくに大豆の枝を使う家もあった。

40～50年前までは、元旦の早朝には五字神社本殿・アタゴサン（五字神社境内の愛宕社）・ウシマツサン（五字神社境内の牛頭天王碑）・地蔵・帝釈寺本堂・帝釈寺釣鐘堂の順に雑煮を供えた後、食していたという。五字神社の供え台に全種類の具を少量づつ供えたという話もある。

初詣　着物で正装して、まず氏神の五字神社、次いで帝釈寺に参拝した。また男性だけが帝釈寺に集まって会合を開き、地区の一年の方針を決めた。石清水八幡宮には縁日にあわせた17日に行くこともあった。伏見稲荷神社にも大体15日ごろまでに、京都に野菜の種苗を買いに行くついでに参詣したりしていた。

寺社以外には、2日に親戚の家に行くほかはとくに年始まわりをするという風習はあまりなかった。

お年玉　昔は正月に金品の贈答をする風習はあまりなかった。子供がせいぜい1、2銭程度もらうことはあったが、とくに「お年玉」と呼ばれることはなかった。

ハツシゴト・ヤマイキ・ハチビ　1月2日に「田へまいる」「ハツシゴト」として田に入った。60～70年前までは雑煮を、30年前頃では洗い米を田へ持っていき「田の神さん」に供えたという。

4日には山で小さい鏡餅を焼き、紙の幣・柿・みかん・昆布などをつけて供えた。これを「ヤマイキ」という。

また8日（あるいは6日）は「ハチビ」「ヤマノカミがあれる」などといって、共有地の一角へ正月の餅を持って行って焼いた。餅は半紙で作った幣や葉の上に載せて供えたあと食べた。

七草　1月7日は「ナノカショウガツ」「ナナクサ」と呼び、七草粥を食べた。

鏡開き　早い家では7日頃から鏡開きが行われた。これを「お鏡を下げる」という。開いた餅は15日のトンドで焼いて食するところが多いが、七草やトンドにこだわらずに11日ごろまでに済ます家もある。

また、鏡餅が割れたら日照りがおこるというように、「年占」（農作物の豊凶を占うこと）がされることもあった。

ナイショシバ　1月10日から14日のトンドの前に、檀家が総出で帝釈寺用の薪を採った。薪採りは12月から3月にかけて新芽が出る前の期間に行われていたが、このときに限って村共有地と私有地に関わらずどこの山でも自由に立ち入ることができた。

トンド　1月14日の夜に皿池の堤へ鏡餅・注連縄・供花を持っていった。子供が書初めを燃やすこともあった。青年団が火の管理をし、残り火を持ち帰って15日の朝に小豆粥を作る家もあった。また灰を田に撒くことが多かった。

薮入り　1月16日は嫁が生家へ里帰りをする。この日に加えて正月2日に里帰りをする家もある。

ツナウチ　1月16日、村の男衆（男性）が集まって帝釈寺の注連縄を作った。材料の藁は、原則として家ごとに稲束6把を奉納した。注連縄は、以前は境内にあった松の大木に掛けていたが、現在は本堂の軒下に年間を通して掛けている。稲穂のような形で、12本の榊を（閏年には13本）処々に挿す。また五字神社の注連縄も同時に作った。注連縄の作成が終わり奉納したあとにお神酒を飲んだ。このときの肴はこんにゃくと決まっており、現在はおでんになっている。

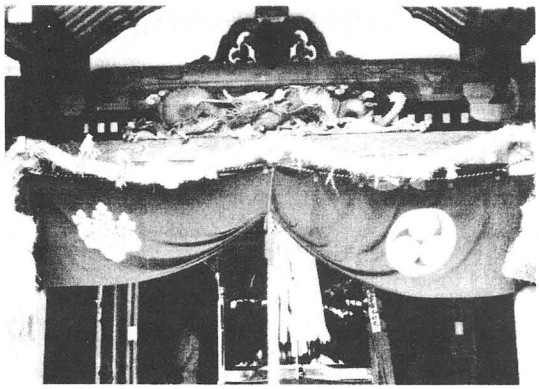


写真91　帝釈寺の注連縄

骨正月　1月20日に、蔵に供えて硬くなっている鏡餅を割って丸餅にし、白味噌雑煮を作ていた家がある。正月の雑煮は魚でだしをとることをしないが、この日は鮭の頭でだしをとる。

カキモチ　大寒の頃に「カンノモチ」「カンモチ」（おかき・あられなど）を作っていた。寒の入り後、寒の期間に「寒の水」に二、三日浸けてから餅を搗くと餅が腐らず長生きでき

ると言われていた。

（３） 春から夏の行事

節分　2月3日の節分では、焙烙で炒めた大豆を「フクハウチオニハソト」の掛け声でまいて、年の数ほど食べた。この日を「トシコシ」と呼び、鰯の頭を柊の切り枝に刺して、裏口・便所・鬼門に飾った。また日持ちさせるため塩干しにして赤くなった辛い鰯を食べた。昔は大豆を畦でよく作っていたという。

カンギョ・イナリセンギョ　1月か2月に「オガミヤ」と呼ばれる女性が如意谷からやって来て、座敷で護摩を焚いた。女性が来る家は地区で1，2軒。その女性の指示で「ゴンジュロウ」「ゴロミヤ」と呼ばれる稲荷の小祠や、狐やマメダ（豆狸）の出そうな「キツネアナ」（狐穴）に酒・稲荷寿司・赤飯などを供えに回った。手伝いの女性に狐狸が憑いて急に踊りだしたことがあったという。

雛祭り　人形は段飾り。余暇のある日曜などに適宜出され、早めに仕舞わないと縁談が遅くなると言われていた。この日の食事は各家によって異なるが、巻き寿司やひな団子（よもぎ団子）を作ったり、自宅で取れたもち米でひし餅を作った家もあった。

彼岸　墓参りをするほか、牡丹餅を作る家が多い。団子を作る家もあった。春秋とも彼岸の入り・中日・彼岸明けには帝釈寺の持仏前で先祖供養の法会があり、檀家が参加する。また春の彼岸のみ大般若経の転読が行われる。

アマチャ　4月8日は帝釈寺で甘茶の接待がある。昔は盛大に行っていた。一月遅れの5月8日頃につつじの花を山で切ってきて、高いところや竹の先端に結んで立てて飾る家もあった。

メンギョ・ハナミ　4月18日、村中でムカイヤマ（向山）に登った。茣蓙を敷いて弁当を食べたが、子供が遊ぶのが行事の中心で、新池で泳ぐこともあった。

トリアゲヤスミ　田植え仕事は基本的に週に一日休みを取っていたが、メンギョのあとから田植えまでは休みがない。このことを「トリアゲヤスミ」と呼んだ。

牛回し　牛の角に菖蒲をつけてウシマツサンのぐるりを牛を牽いて三周した。50年前ぐらいまでは牛は農業生活においては最も重要なものであったため、田植えの前に牛が怪我をしないように、作業の安全を祈って行われたという。

端午の節句　5月5日には40～50年前まではのぼりを揚げていた。のぼりは5～10ｍの長方形の旗で源義経など武者の絵が多く描かれ、旗の下側に干支の人形3～4個ぶら下げたものなどがあった。こいのぼりを揚げるところもある。現在は具足を飾る程度になっているが、飾りは比較的長い間座敷に出していた。

草餅・柏餅を食べるほか、よもぎと菖蒲を結びつけたものを屋根の上に載せた。菖蒲はよく畑で作っており、端午の節句に限らず5～6月頃はちまきにしたり、五右衛門風呂に入れていた。風呂に入れた際は独特の臭いがしたという。

サナブリ　田植えが終わったあと、農作業を村中一斉に休む日があった。「五月休み」とも呼ぶ。家によっては押し寿司などのご馳走を作った。またサナブリ以降一週間程経って雨が降ったときにも「アマヨロコビ」といって休むことがあった。いずれのときも休みは区長が決定して伝達した。青年団や消防団は遊びに出かけることもあった。

ハゲ・ハゲショウ　7月初旬に仕事を休む日をこう呼んだ。「ハゲショウまでに梅干に紫蘇の葉を入れないときれいな色がつかない」という言い伝えもあった。

七夕・瀧安寺の大護摩　7月7日は農作業を休んで、瀧安寺の護摩に参加する。護摩の灰は持ち帰って田に撒くと害虫除けになり豊作になると言われていた。とくに水を張る田の取水口から撒くと効果があるとされていた。竹竿の先端を割ったところに竹の皮に灰をつつんで田に立てることもあった。七夕飾りは家庭ではなく、子供が学校で行なっていた。

夏祭り　7月15日は粟生地区全体の夏祭りであった。素戔嗚尊神社の式典に役員が参加したほかはとくに行事はなく、農作業が休みになった。

大掃除　7月末から盆までの期間に、畳をあげるなどの大々的な掃除が行われていた。地区ごとに日程が決められ、自治会長や駐在所からも見回りが来ていた。

雨乞い　粟生外院は高台で池がかりであるため干害に弱く、雨が少ないときは盆の前後あたりに帝釈寺と勝尾寺で雨乞いが行われた。忍頂寺（茨木）の雨乞いに参加することもあった。

井戸替　8月中に各家ごとで井戸の掃除を行った。

（４）盆行事

ホトケムカエ　8月2日朝5時から、帝釈寺境内のダントバカ（檀徒墓）で先祖の霊が迎えられる。以前はもっと早朝から待つ者がいたため時間が定められたという。各家で線香・蝋燭・供物を墓前に供え、来た順番に院主に読経してもらい、本堂にお布施を供えたあと供物を持って帰る。供物は自家で採れた野菜や果物、故人の好物などで、以前はそのまま墓前に置いておいた。

写真92　仏迎え

花は前日に供えておく。檀徒の先祖迎えが終わった後、境内の地蔵と無縁仏を寺で供養する。塔婆は13日に渡されて、仏壇に飾る。

ナノカボン　8月7日を「ナノカボン」と呼び、盆の支度を始めた。主に墓掃除が行われる。

ココノカビ　8月9日について、「ココノカビ」という呼称のみが残っている。

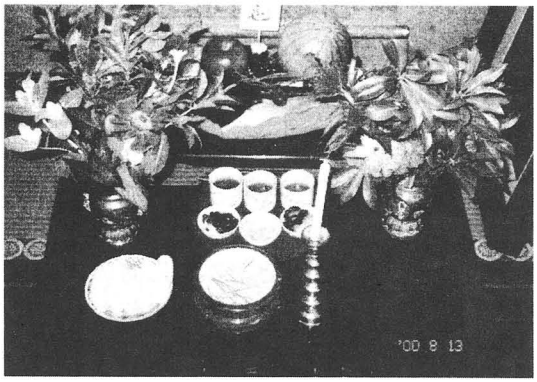


写真93　供物

供物　各家で供養する対象は先祖（仏壇）・新仏（アラタナ）・三界万霊である。三界万霊はあらゆる霊をさすものであるが、とくに無縁仏が意図されている。

仏壇には仏花・仏木として菊・シキビなどが飾られる。供物はじゃがいも・さつまいも・なす・オクラ・西瓜・南京・メロン・もも・ぶどう・みかん・バナナなど自家用の野菜が中心で、とくに十八豆を盆用に作っているところもある。肉類はなく、そうめん・干菓子のほかに珍味のものがあれば、それらを蓮の葉に載せる。40〜50年前までは蓮池に蓮の葉をとりにいくのが子供の仕事であった。蓮の葉は帝釈寺からもらうこともあるが、ないときは里芋の葉を代用する。

供物は食事に合わせて三食替えられる。

13日　夜から供える。ありあわせのものでもよく、厳密に決まってはいないが、先祖の霊が落ち着くようにとオチツキモチが作られ餡が入れられることもある。

14日　昼にそうめんを供える。昔は白蒸し（新粉）などもしていた。

15日　赤御飯（小豆ごはん）を炊く。以前は夜食として14日の晩に炊いた。

小豆御飯や南京は足が早い（腐りやすい）ため、先祖を送るのに適していたとされる。そのほか先祖が帰るための弁当になるようなものを作った。

床の間にも餓鬼供養のための供物が置かれる。掛け軸は通常のものは外され、主に西国八十八所の朱印などが描かれた仏事用のものに替えられる。また現在でも8月は盆月として縁談などのめでたい話をしない。

写真94　新仏の供養

新仏　前年の盆以降に近親者に不幸があった場合は、「アラタナサン」「シンボトケ」と呼び、仏壇の横や床の間に高さ30〜50cm程度の棚を別に設けて供物を載せる。供物は同じであるが、アラタナバシラと呼ばれる回り灯篭を仏壇の横に立てるほか、棚の上に菰を敷く。

また、浄土宗や真言宗の家では、座敷から棚に先祖の霊が上っていくための7段もしくは9段の梯子を麻幹で作って棚に架ける。またシンボトケがある場合には

16日の施餓鬼会の日に親類が集まることもある。

墓参り　8月13日、墓で掃除や供花を取り替えたあと、寺に塔婆をもらいにいく。このとき重箱に米一升か同程度の金銭を寺に持っていく。この日は改めて先祖の霊を丁重に迎える日とされている。

棚経　8月14日に寺の僧侶がムラの各家々を廻り仏壇に経を唱える。

詠歌　8月14日夕方頃から各家で詠歌を詠う。西国三十三番詠歌のほか通夜のときなどと同じく「コジキエイカ」を詠う。長さは小一時間。最近では高野山金剛峯寺で販売されているカセットテープを買ってきて練習したり、それを流したりしている。

先祖送り　15日の午前中から先祖を送る儀式として供物を川に流す。供物は浅めの箱に蓮の葉を敷き、線香・蝋燭・塔婆を立てて、5〜6年前までカワラバシから流していた。現在は下流にあたる新興住宅地から苦情が出たため塔婆は寺へ持っていき、そのほかの供物は捨てている。

盆踊り（ネンブツオドリ）　盆期間の土日もしくは地蔵盆頃に、30〜40年前まで帝釈寺の境内で盆踊りが行われていたことがある。境内には提灯を飾り付け、豊作になりそうな年ほど盛大であったという。各村から青年団中心の踊り手達が揃いの浴衣で他村に踊りに出かけて先祖の霊を慰めた。そのため村ごとに開催日をずらしていた。遠方から河内音頭の音頭取りが来たこともあった。炭鉱節や江州音頭に合わせて太鼓をたたき唄いながら踊る。地蔵盆が荒天などであった場合は、八朔盆の9月1日まで延期することもあった。

施餓鬼会　村の檀家は8月16日、村外の信徒は17日に帝釈寺に集まり、先祖供養を通じて無縁の霊も含めた三界万霊を供養する。14日の棚経も各家における施餓鬼供養のようなものと考えられている。世話役は檀家総代3軒の夫婦6人で務める。各家は重箱に米一升か

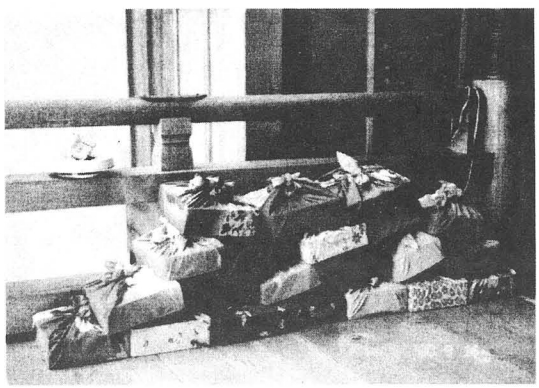


写真95　米一升入りの重箱

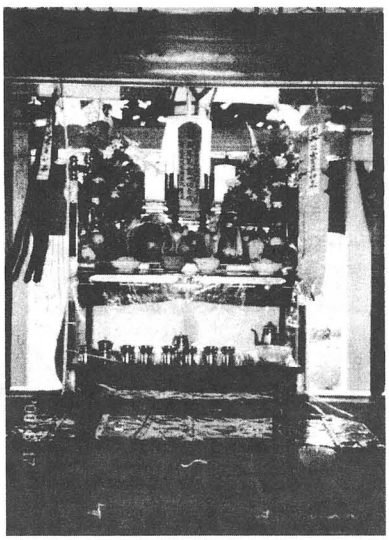


写真96　施餓鬼壇

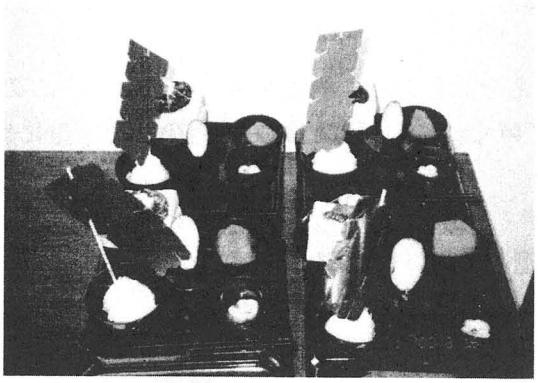


写真97　供物と朱塗りの膳

同程度の金銭を寺に持参する。

施餓鬼壇は、本堂の内陣に対面する形で設ける。壇上には中心に餓鬼供養ならびに先祖供養の塔婆を立て、その周りに野菜や果物、仏花・仏木などを供える。手前には中心に餓鬼飯と水、左右に焼香鉢を置く。壇のまわりには白赤黄青黒ののぼりを付ける。これは五色結界と呼ばれているもので厄除けの意味があり、寺の須彌壇には平素から施されている。

本尊に向かって左側に新仏のある家が座る。読経の後、新仏のある家から呼ばれて、施餓鬼壇の手前で塔婆・供物・色紙で作った幣を載せた20ｃｍ四方の朱塗りの膳を受け取る。壇に塔婆と膳を供え焼香した後、シキビの葉で塔婆に水をかけ、餓鬼飯を壇全体にふりかける。新仏のある家はこれらの作法のあと一旦本堂から出る。その後檀家が垣内ごとに呼ばれる。垣内の順番は一年交代になっている。

餓鬼飯は白米・人参・きゅうり・なす・かぼちゃを5ｍｍ四方に細かく刻んだものに水を入れている。供養が終わると塔婆と幣を寺の檀徒墓に供えて帰る。

地蔵盆　23日早朝から1年交代の当番が地蔵の横にテントを架け、夜から子供の名前の入った提灯を飾り付けておく。

24日の昼にアマ講（婦人会）が帝釈寺の境内から地蔵の方を向いて座り、詠歌をあげる。この詠歌の以前は地蔵の横のテントで行っていた。詠歌のあと各家から出された供物のお菓子を子供に配るために小分けにする作業を行う。

夕方頃から地蔵に人々が集まり、帝釈寺の僧侶がお経をあげる。子供たちはお菓子をもらい、自分の名の入った提灯を持って帰る。各家でそうめんや小豆ごはんを作ることもある。

地蔵流し　盆の後半は地蔵中心の祭りとなる。宗派の別なく粟生5か村全体でバスで海へ行き、小舟を出して地蔵の札を流した。これは生きとし生けるもの全ての霊を供養するもので、墓地法要と同時期に帝釈寺の先住職が始めた。

写真98　地蔵盆

写真99　地蔵盆の御詠歌

墓地法要　8月末の日曜に、粟生5か村の寺（本成寺・法泉寺・善福寺・勝尾寺・願生寺・法蔵寺・帝釈寺）の僧侶が粟生霊園に集まって阿弥陀仏・六地蔵・無縁仏・迎え地蔵を供養する。各家で桶に供え物をすることがあった。帝釈寺の先住職が発起人となって粟生霊園ができた昭和49年ごろから始まったもので、帝釈寺が集会所（しゅえしょ）となっている。

八朔盆　9月1日を八朔盆と呼ぶことがあった。日蓮宗の家では妙見参りをしていた。

（５） 秋から冬の行事

月見　9月15日、萩の花を飾り団子・里芋・棗などを供える。「ダンゴツキ」と言って子供が庭先から長い竹で団子を盗む慣わしがあった。子供が団子と里芋を間違えることも多かったという。

彼岸　各家では墓参りをし、おはぎを作る。彼岸の入りと中日と明けには寺の持仏前の座敷に集まって先祖供養の法会が営まれる。

中日の夜には「念珠くり」が行われる。夜に檀徒が寺の持仏前の座敷に集まりお経と詠歌を唱えたあと、円座して直径5メートルほどの大きな数珠を経にあわせて繰る。各家で重箱に入れた一升分の白米か1000円程度の金銭を持参する。法会のあとは供物のお下がりを頂くというかたちで茶菓を囲む。

写真100　彼岸の念珠くり

秋祭り　秋祭りは10月15日、現在はそれに最も近い日曜日に行なわれる。昔は粟生6ケ村（新家・外院・中村・河合・奥・山ノ口）の鎮守であった宮山の素戔嗚尊神社のお祭りに参加していた。粟生外院は6か村のなかで最も遠方であったため、素戔嗚尊神社の山地を売却して株を分けた際に配当分をもらって宮座から脱退したという。

太鼓には6か村から1人づつ計6人が乗っていたが、五字神社だけの祭りになってからは4人乗りの太鼓が粟生外院地区内を回っていた。行程は神社を出発、寺の前で一旦休止し、また神社に帰ってくるというもので、乗り手は小学校5，6年生までの長男であった。子供が少なくなり、乗り手もかき手（担ぎ手）もいなくなったため15年前ぐらいから途絶えてしまい、現在は式典のみである。

この日の式典は平素は閉じられている本殿内で行われる。各家の戸主全員が朝から本殿に揃って神主が来るのを待つ。神主は小野原の春日神社に常住で、近隣の地域を回って来る。神主は伊勢神宮からの幣帛料1000円を奉納し、地区で受け取る。式典のあとはお神酒が下げられて、茶菓とともに振舞われる。

当番は3軒づつ家の並び順に出され、前日から提灯やお神酒・茶菓の準備をする。提灯は前日に鳥居・参道・境内に立てる。現在は参道には立てないが、火の守（提灯の番）は2日間に振り分けている。家では餅をつき、「ゼンザイマツリ」と呼びぜんざいを作るとこ

ろが多いが、赤飯を炊く家もある。

亥の子　11月最初の亥の日に、子供が「イノコ」と呼ばれる藁細工を持って村内の家々を順番に回った。小学校5、6年生を先頭に、夕方から「イノコ」を各家の玄関先の地面にぶつけて「♪亥の子亥の子亥の子の晩に重箱開けて（ひろうて）開けてみればジュウベエサン（ゴンベンサン）のきんたま～おっさんとおばさんとでいわいまひょか～まけとけーまけとけートントコトンのトンもひとつおまけにトントコトンのトン♪」などと囃した。これには収穫を祝う意味があったと言われている。子供たちは各家から500円程度の金銭をもらって、最後に等分した。

家々を回る順番は厳密には決まっていなかったが、最後は当時村で一番の地主であった家に決まっており、毎年その家で「イノコ」を解体して捨てて帰ったという。

「イノコ」は新米の藁で大小二つ作っていた。これは地面にぶつけているうちに痛んでくるのと、大きさによって異なる音が出るためである。また、子供の体の大きさに合わせて作ることもあった。子供が幼少のころはその親が作っていた。近年は芯にプラスチックの棒を入れたりした。

各家では牡丹餅を作る。12～13年前から子供が少なくなったため、行われなくなった。

お神楽　11月から12月の間に、伊勢から皿回しなどの芸道の一団が荷車を牽いてやってきた。神楽舞が各家の仏壇とかまどの前で踊り、子供の頭を噛んだりしていた。11月頃に地区から伊勢神宮へ初穂がだされ、年末までにお札が地区へ送られてきた。各家ではその札を正月に神棚に供えた。神楽舞の荷車はその当時地区で最大の地主であったり檀家総代である家の前に置かれた。これは亥の子で最後に回る家であったり、薬の行商が来る家であったりした。

センモン　12月初頭の商店街での大売出しを「センモン」「センモンイチ」呼んでいた。近郊では池田の「センモンバライ」が大規模だったため、そちらへ赴いて衣類や食料など正月の準備をすることが多かった。平素から物入りの時は池田に行くのがこの近辺のならいであった。

冬至　冬至の日にはナンキン（かぼちゃ）を食べる。冬至用のかぼちゃ（トウジナンキンと呼ぶこともある）を夏から別に保存しておくことが多い。その他食事を神仏に供えるところもある。風呂には体を温めるために柚子にこだわらず薬草のようなものを入れることもあった。

３．その他の民俗

（１）講

40年ぐらい前までは、庚申講・行者講・一心講・愛宕講・ショウジョウ（猩猩カ）講など、様々な講があった。現在の婦人会も以前はアマ講と呼ばれていた。

庚申講　庚申の夜にクミ（垣内）ごとにヤド（当番宅）に集まり飲食した。ヤドには掛け軸が飾られ、各家では芋やこんにゃくの煮物を作った。特に初庚申と終庚申は重視されていた。しかし、クミ毎に若干の飲食物の差異があると、他のクミとの比較から金銭的な負担が増えたりもめごとが生じたため、廃止された。

四天王寺の庚申堂に参詣して、夜の法会に参加し、夜を徹して踊りに興じるなどした。かつては帝釈寺にも庚申堂があり、現在は庚申塔が祀られている。庚申で祀られる青面金剛は帝釈天の使いとされている。柴又・帝釈天でも、板本尊が本堂再建の際発見された日に因んで庚申の日が縁日となっている。

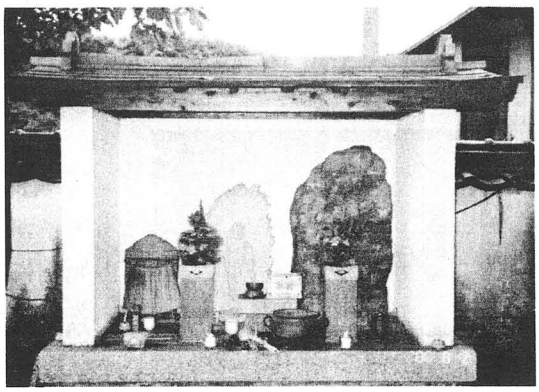


写真101　庚申塚

伊勢講　1月11日（現在はそれに最も近い日曜日）に三つのクミ（垣内）単位でその年のヤド（当番宅）に昼頃から集まり、伊勢講田からの収益で飲食した。その際ヤドには掛け軸を飾りその前にかき・みかん・昆布・洗い米の供え物をする。現在は地区全体で公民館に集まっている。

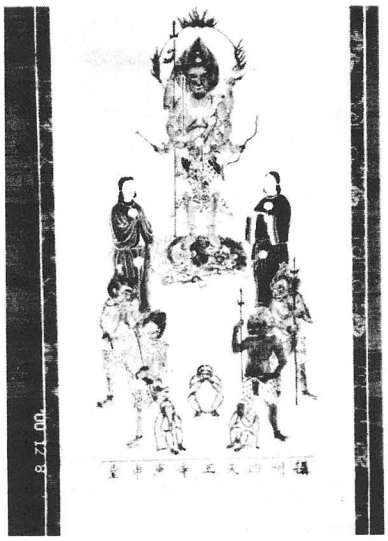


写真102　庚申講の掛軸

愛宕講　地区の愛宕さんは五字神社の中に祀ってある。「伊勢は七度、熊野は三度、愛宕さんには月参り」と言われるように、三つのクミ（垣内）から2人づつ計6人の当番が毎月愛宕山に参詣してお札を持ち帰り地区中に配っていた。その後桜と紅葉の見物を兼ねて春と秋年二回の参詣となった。その後さらに春の参詣のみとなり、30年ほど前からは参詣もされなくなった。現在は地蔵盆の場に愛宕信仰が残っている。

写真103　伊勢講の掛軸

ヤナギダ講　春先、農作業が本格的に始まる前に、目の神様である柳谷観音を祀った超地域的な大規模な集まりがあった。当番の家は地区単位で、近隣の地域からも集まってきたらしい。これは地区単位自の講でなく、各自で参加（購入）していた。

念仏講　現在の皿池公園が地区の念仏講田であったとされる。その田からの収益で春の彼岸の頃にクミ（垣内）単位ではなく地区全体で寺に集まり、煮物を作ったりして交流を深めた。

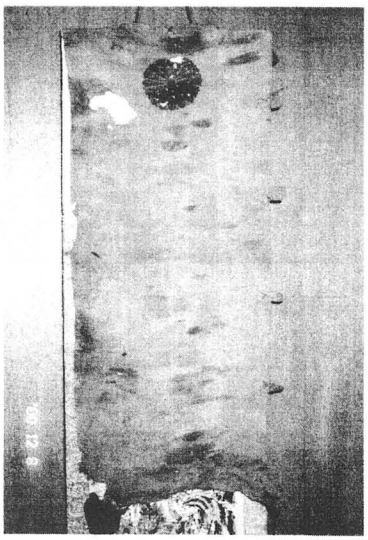


写真104　行者講の掛軸

行者講　不定期であったが大体夏場（5～9月）に、男子が15歳になると願掛けに大峰山に参詣した。出発前には瀧安寺で行を行い体を浄めた。毎年村の宿舎も決まっていた。その際に用いるほら貝・旗・掛け軸・数珠などの道具や台帳は公民館に保管されている。女子は男子の留守中は精進料理を食べ、帰ってきた男子の股をくぐるという作法を行う。男子は五字神社へ参詣したあと解散した。

金毘羅講　古くは天保9年（1838年）から昭和3年（1928年）まで参詣帳にその記載が認められる。基本的に毎年11月9日に村から二人が金毘羅山に代参していたが、明治34年（1901年）から代参者は4人になっている。毎月9日に金銭出納の記載があることから月参りを行っていた可能性もある。

頼母子講　弘化4年（1847年）の「借用帳」には村人がそれぞれある程度の金銭を村から借り入れている様子が記されている。とくに代参講の記載はなく、金銭の貸借のみの頼母子講のようなものがあったと思われる。

（２）葬送儀礼

葬式の際の互助組織をドウギョウと呼んでいる。この成員はクミ（垣内）と同じで、つまり村には3つのドウギョウがある。ドウギョウはミチツクリ（墓道の草取り）、火葬用の薪の準備などをした。またヒトナノカ（初七日）の時に西国三十三ケ所の詠歌をあげる。この状態を観音講と呼ぶこともあった。

葬列では先頭には白い袴を着て、三角布を頭に被り白い袴を着た人が、半分に割った青竹をひきずり、曲がり角で地面を突いた。喪主も袴を着用し、提灯2丁、燈篭2丁それぞれを持つ係りを子供が務め、手伝ってくれた子供には「ハカクヨウ」と言ってお菓子を配った。

40年ぐらい前までは座棺という棺桶を使用していた。これは輿のようなものの上に棺桶を載せて4人で担ぐもので、棺桶はきれいな布で包んで、火葬するときにはハカノタニ（墓の谷）の池で濡らした筵で覆った。棺桶を担ぐときは前後の人間が左右互い違いの肩で担ぐが、これは「ソウシキガタ」「ソウレンガタ」と呼ばれて平素は不吉であると忌避されていた。

終戦直後までは、ハカノタニ辺りに墓番が住んでいたという。火葬場も霊園の中にあった。現在、墓地の管理は粟生霊園墓地委員会（粟生5か村各村から2人）がおこなっている。毎月1日の朝に清掃があり、役員会は春と秋に開かれている。

（３）その他

言い伝え　農作業に関して、仕事にならないで往復しただけのときも一日の労働時間を8時間とすると三分（8時間の3分の一＝2時間45分）ほど日当がもらえた。これを「出戻り三分」と言った。またむやみに山で火を焚いたりして働かない者を「山へ行く奴は棒食わせ（飯を食わすな）」などと戒めることがあった。

食物については、昔から沢蟹、ぜんまい、どんぐりを忌避することが多かったという。また、へっつい（かまど）では不浄物は焚かないとされていた。

七五三よりも十三参りが強く意識されており、嵐山法輪寺へ参詣することが多かった。

第２節　粟生新家地区

１．地区の概要

概要　現在の粟生新家は1丁目から5丁目まであるが、旧村落は現在の1丁目になる。2丁目から5丁目にかけては、近年開発が進むまでは山、田、畑などがひろがり自然の多いところであったという。現在はその多くが住宅になっており、わずかにその面影がのこっているばかりである。そして、西国街道と併走するように171号線が走っている。戦時中には、時には多くの戦車が往き来し、また、滑走路としても利用される予定で電柱などもすべて取り払われていたという。粟生新家南側には、箕川が流れている。この箕川は、灌漑用においてだけではなく、粟生新家の人にとって重要な川であった。また、1丁目は西国街道沿いに位置し、昔の面影を現在でも多く残している。習慣においても、同様である。この粟生新家1丁目は現在粟生新家の自治会のもとに４つの組に分かれている。

粟生新家の属する粟生村は、『勝尾寺文書』に康治元年（1142）12月の文書が残されていることからも、古くから開かれた地であった。平安中期には国衙と摂関家の支配を受けるようになり、平安末期には藤原氏一門の氏神奈良春日社に寄進された（「後白河院庁下文」『春日大社文書』）。その後、江戸時代には、粟生村は文政10年（1827）に山之口・中村・岩坂・外院・河合・新家の6つに分かれた（『池上家文書』）。しかし、行政的には以前のまま粟生村として扱われていたという。そのためか、現在でも粟生村に属するという意識が強い。近世には、粟生新家内は西之池・北畑・向山・墓ノ谷・尼ノ谷・郷ノ久保などの字に分かれていた。

また、粟生新家1丁目には勝尾寺の一の鳥居がある。この鳥居には以前「勝王寺」と額に書かれていた。西国街道を通る大名行列が、鳥居を通るときに馬から下りなくてはならなかった。そのために、「勝尾寺」に変えたという話が伝わっているが、確かではない。

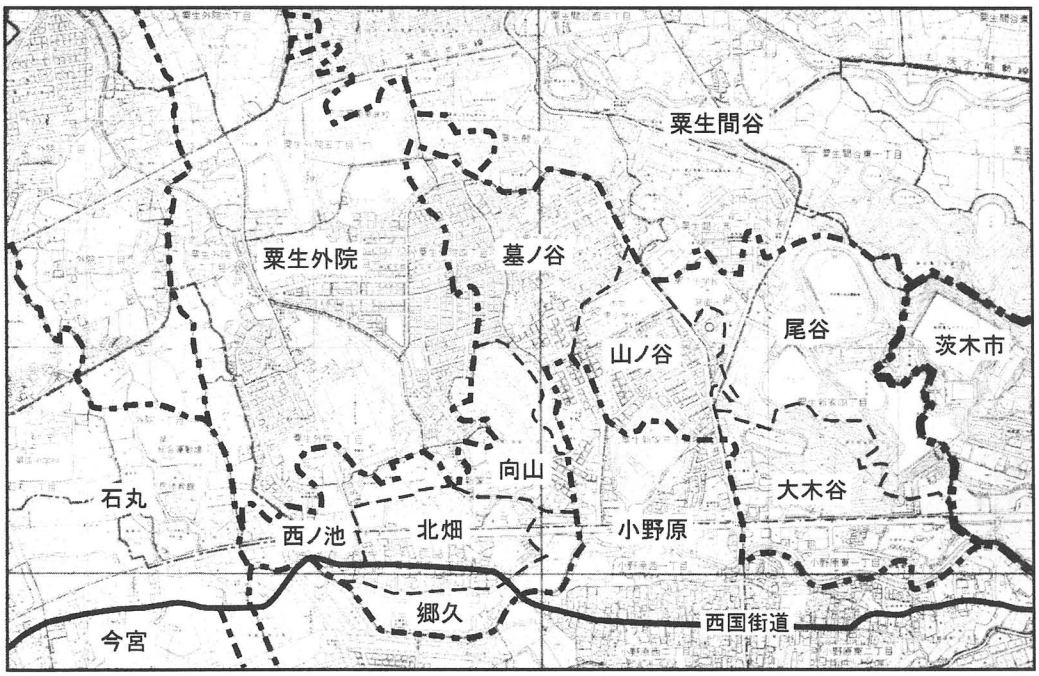


図33　粟生新家旧字名

自治会　全戸粟生新家の自治会に属する。

寺社　粟生新家はかつては33戸でり、その後36戸になった。そのうち浄土宗と浄土真宗が半分半分であったという。現在も旧集落は主にこのふたつの宗派に別れている。浄土真宗は稲の本願寺派勝満寺、浄土宗は粟生間谷の法泉寺であり、粟生新家内には寺院はない。

神社は、春日神社がある。以前より宮司さんがいないため、行事の際には小野原の宮司さんにお願いしている。この春日神社は1995年に立て直され、愛宕講の社も同敷地内に祀られるようになった。また、この神社には元来は鳥居の南側にあったと伝えられる常夜燈がある。道路整備に際し、春日神社内に移動したという。「金比羅権現」の銘記がある。また、この常夜燈は1つだけであり、小野原のものと対になっているとも伝えられているが、確かではない。

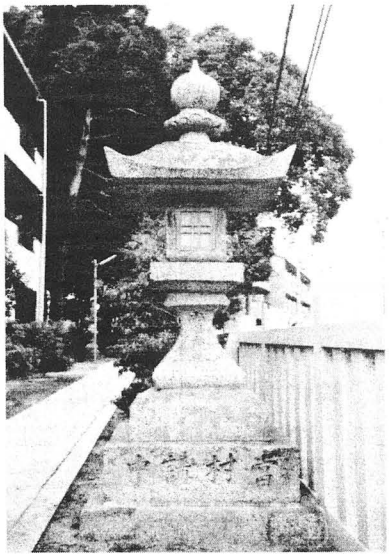


写真105　春日神社の常夜燈

2．年中行事

（1）正月の準備

正月の準備は、新家地区ではどの戸でも30、31日ごろから行われる。31日の午前中には、粟生新家の旧集落（西国街道沿いの集落）の皆で新家の春日神社の掃除をすることが決まっている。各戸の年末の掃除、正月の準備はその間をぬって行われる。

餅つき　12月30日に行われる。29日は数字の9が付くため「苦」がつくとされ、避けられた。餅つきは家族総出で行われ、ついた餅は丸められた。

門松　門松は、ミヤモリの役目として神社と自治会館の門口に、山から松をひいてきて松竹梅とともに飾った。普通の家でも、戦前は門松をかざったが、戦後は飾らなくなった。新家地区には門松を飾る習慣は現在ではないという。

注連飾り　注連飾りは、新家のお年寄りの上手な人たちが作ってくれ、その人たちにお願いするのが慣例になっている。材料はそれぞれの家の藁、主に餅藁が用いられた。

正月飾りは、15日前後にはずすのが慣例であった。

鏡餅　鏡餅を作るために、大きさの違う丸餅を作り、それを二段重ねにした。その二段の鏡餅にミカン（多くは枳殻）・柿・昆布・裏白を飾る。この鏡餅は家・蔵などに飾る。

大晦日の夕食　深夜に年越しそばを食べる。

（２）正月の行事

若水　昔から井戸はどの家にもあり、若水を汲んで神仏に供えていたが、現在は行われていない。

雑煮　かつては家の主人がつくる家もあったが、現在はほとんどその家の主婦がつくることが多い。味付けは味噌味で、丸餅を使う。多くは元日の朝食べる。

具には大根・慈姑・牛蒡・里芋・焼き豆腐・油揚げなどが入れられる。慈姑には、芽がでるといって特に縁起が良いといわれ、大根や人参などは、角切りにするとよくないと言われ、輪切りにする。里芋は小芋が連なってできることから、子供がたくさんできるようにという願いからいれるようにしていた。

初詣　元日に粟生新家の春日神社に詣でる。

仕事始め・礼まいり　正月2日、3日位に「お礼にいく」といい、各戸の戸主が洗米をもち、自分の田圃へ出掛けていき、田の一カ所に鍬で三カブ起こし、その上に洗米を供える。家によっては田にまくこともあったという。

ふくあかし　正月4日に鏡餅を下げて切り餅にし、その餅や水菜などを入れた雑炊を食べた。

七草　正月7日の日を「七日正月」といい、七草粥を食べた。薄い塩味で、以前はきちんと七草をそろえて食べていたが、最近では水菜などで代用し、実際に七草をたべることはあまりない。

鏡開き　撞いた餅が固くなってしまうので、3日にはひらいてしまう。開いた餅はあられにすることもあった。

トンド　トンドは、正月15日に行われた。現在は埋め立てられ、トヨタのお店になっている宮ノ池の堤防の所で行われた。櫓を組むことはなかったが、正月飾りを燃やした。その火で餅を焼き、食べるのが子供にとっては楽しみであったという。また、焼いた餅を食べると健康になると言われていた。トンドの灰を持って帰る人もあったが、具体的な使用方法は定かではない。

また、この日を小正月と呼び、あづき粥を食べた。

ヤブイリ　16日には嫁入りした人達は一週間程度実家に帰ったという。このときに送物として羽織や袴、帯などを嫁ぎ先からみやげ物としてもらって帰った。

8月の盆明けにも（8月16日）にも同様にヤブイリがあった。

（３）春から夏の行事

節分（トシコシ）　この日を「トシコシ」と呼び、「鬼は外、福は内」の声に合わせ畦豆をまく。豆は竈であらかじめ炒っておき、豆まきが終われば、年の数に1足した数を食べた。この日には、柊と鰯の頭を家の角に飾り、鰯を食べた。家によっては、麦ご飯を食べたという。近年になって、まき寿しも食べるようになった。

雛祭り　2月の初旬に飾り、3月3日当日には片づける。片づけが遅れると、娘の婚期が遅れると言い嫌われた。7段、または9段の雛人形を飾る。

この日には、バラ寿司を食べる習慣があった。

彼岸　まず、墓参りに行く。各戸で墓に参る。墓に花を供え、特にきまったものはないが供え物をする。よもぎだんご、おはぎを作って食べることもあったという。

メンギョウ　4月の18日前後の日曜日に山へ「メンギョ」「メンギョウ」といって、山（通称「すべりんこ山」）へ出掛ける。山といっても、新家の墓の向かいにある小高い山で、どちらかというと花見をするといったものである。この行事の中心は子供であり、親は付き添って行くというものであった。大人は仕事を休み、おはぎ、おすしを作り食べた。また、メンギョの前になると「明日はメンギョ（メンギョウ）ですから、仕事を休んでください」などと組々で触れてまわったという。

端午の節句　5月の5日にはこいのぼりを飾り、鍾馗さんののぼりを立てたりもした。

よもぎ餅、ちまきを作り食べた。菖蒲湯にも入る。また、よもぎを乾燥させ5日に風呂に入れた家もあった。また、菖蒲を屋根にのせ、清めた。

溝掃除　5月の初旬に溝掃除をした。

サナブリ・半夏生　田植えが終わった後の休みの日を「サナブリ」と呼んだ。6月の初旬の農作業のお休みのことを指し、「サナブリ」「半夏生」は同じ時期にあったため、特にその違いは意識されていなかったようである。家によってはこの日には宴会が行われ、鶏を料理して食べた。このときにも、メンギョ同様仕事を休むよう触れて回られた。

七夕　7月7日を「タナバタ」といい、前もって井戸を掃除するのが習慣となっていた。タナバタの笹飾りは昔は箕川に流していたが、禁止されてからは燃やすようになった。

墓掃除をする家もあった。また、この頃畳をあげるなどの大掃除をすることもあった。

瀧安寺の護摩焚き　瀧安寺の護摩焚きには参加する。これは新家の家が皆参加するというのではなく、各戸で自由に参加している。護摩焚きに参加する家は、大護摩の灰を持って帰ったという。

その他　田植えの後、田の害虫を払うために、水面に石油をまいたという。農薬が一般的になるまで続けられていた。

（４）盆行事

盆の期間は各戸、宗派によって違うが、大きくとらえて12日～16日である。

墓掃除　墓掃除は、年に4回（盆・春秋彼岸前・正月前）婦人会の人達が掃除をしてくれているが、お盆近くになると、各戸で改めて掃除をするという。また、墓参りの時に行う家もある。

墓掃除の時に、稲刈りにむけて田への道をつくるための草取りも行い、これを「道つくり」といった。

施餓鬼　浄土宗の新仏の家のみ、お寺で拝んでもらう。

墓参り　13日の朝、お墓へ迎えに行く。このときにはお線香を焚き、お供え物をする。迎え火は焚かない。

供物　浄土宗では仏壇にすいか、なすび、トマト、葡萄、ピーマンなどと故人の好きだったものを供える。仏壇に棚になる引き出しがついており、その引き出しの上に供える。家によっては、茄子を半分に切って、線香を立てた。そうめんの束を三等分に切り、赤塗りのお盆にピラミッド状にのせたり、アラタナの家ではおがらではしごを作った。

浄土真宗では、仏壇に故人の好きだったものなどを供え、おまいりをした。

新仏　「アラタナ」「新仏」「ハツボン」などと呼ばれ、浄土宗では14日の日に寺のお坊さんが家々を回る。そのほか、14日の夜にはアラタナの家にお参りに来ることもあったという。

浄土真宗のお宅では、14日の昼間に坊さんが参ってこられ正信偈をあげ、また夜になると同行の人がやってきて正信偈をあげ、その後お茶の接待を受ける。

先祖送り　15日の朝、お墓へ送りに行く。このときにも、お線香を焚き、13日に供えた供え物は持って帰り、箕川に流した。丁度、台風の頃なので、流さなくとも台風により川の水量が増えて、川の水がさらっていってくれたものであった。盆のお供えは15日の朝10時ごろまでに片付けるのが慣例であるという。

盆踊り　昭和30年代には、新家の自治会館の前で行われていた。その後、小野原の盆踊りと一緒に小野原の小学校でおこなっていた。

地蔵盆（愛宕講）　8月の23日、24日に行われる。新家地区内に二つの愛宕講があり、それぞれで行われていたが、その内の一つが休むことになり、しばらくは一つの講だけが活動していた。その後栗生新家の自治会館で行うようになった時に二つの講をまとめ、現在愛宕講はひとつになっている。その後新家の家のほとんどが現在の愛宕講に参加するようになった。

以前は愛宕講の当番（一年交代）の家を「宿（ヤド）」といい、この宿の家がもともと

愛宕講の社を預かっていて（当番の家が社を一年間保管する）、愛宕講の日になると玄関に社を出し、飾り付けたという。この飾り付けは「飾り番」とよばれる三軒の家が行い、提灯などを道筋に飾った。その後、各戸で行うのでは負担が大きいとして、自治会館で行われるようになった。さらに、95年に新家の春日神社が建て直されたのを機会に神社内に愛宕講の社を移し、現在は神社内でお祭りをしている。愛宕講には粟生新家の人たちは皆お参りし、こどもはお菓子をもらった。二つ講があったときには、子どもは二つの講の両方にお参りした。24日にはお供えの果物（西瓜など）を皆でわけ食べた。「宿」の交代は、この24日の行事が終わった後、帳面の記入とともに交代した。

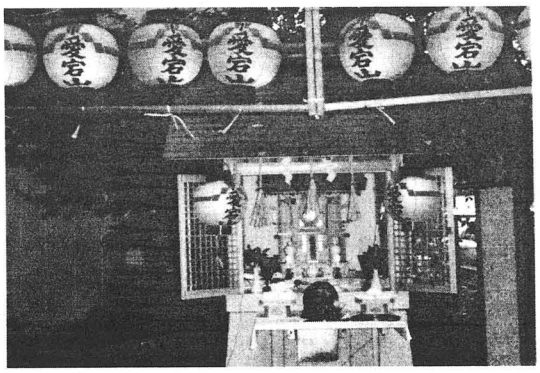


写真106　愛宕講の社

現在、愛宕講の準備は当日の夕方からはじめる。御神酒に洗米、塩、餅、西瓜、果物などをお供えする。準備が終わり日が暮れると、新家の人たちがお参りにやってくる。以前は宿で宴会を行っていたが、現在は神社内で多少の飲食ができるようにしている。また、お参りにきた子どもたちにはお菓子が配られている。かつては、23、24日の両日行われていたが、現在は23日だけ行われている。

愛宕講の当番は、新家の旧村落を順番にまわってくる。その年に不幸があった家などは、次の年にまわすなど協力して順にまわってくるようにしている。この愛宕講の費用は宿が全部負担するか、講員で分担した。

現在でも変わらず、愛宕講の当番の家は4月に愛宕山に登りお札をもらってくる。そのお札を当日愛宕講の社の中に供える。

マンドロ　8月23日、24日に行われていた。すべりんこ山で櫓を組み、松明に火をつけ降りてきたという。櫓には24日に火を入れたという。このマンドロは男の子のみが参加し、戦前までは行われていたが、その後自然消滅したという。

大日講　8月28日に新家地区の公園内にあるお地蔵さんのところで行われる。かつては、現在の位置に公園はなく、里道沿いにお地蔵さんがあったため道の端で行われていた。現在は以前ほどは大きくお祭りすることはなくなりつつあるという。こちらも愛宕講と同様に、大日講の当番があるという。三軒ずつ当番が回ってきて、この当番は粟生新家の旧の村落を愛宕講の当番と反対回りに回って来るという。

写真107　大日講の地蔵

（５）秋から冬の行事

月見　十五夜に月見をする。このときには、だんご・里芋・すすき・はぎを供える。里芋を供えることから、「芋名月」とも呼んだ。また、供えた団子などは、子供が竹などをもって、盗みに来たという。供え物をした家は子供が持って行き易いところにそなえるようにしていた。

彼岸　墓参りをする。墓掃除は前述のように婦人会の人達が定期的にしてくれている。彼岸の時には各戸ですることもある。

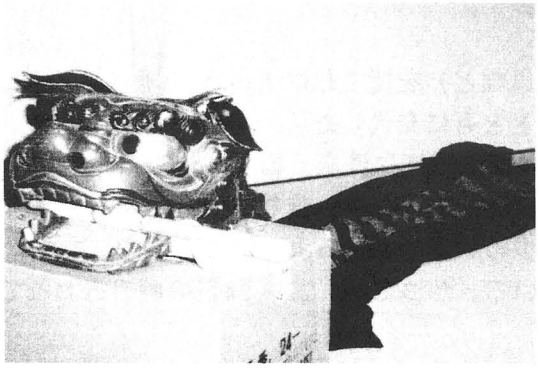


写真108　御神楽の獅子舞

秋祭り　以前は10月15日に決まっていたが、現在は新家の春日神社には神主さんがおらず、小野原の春日神社の神主さんにきていただくため、小野原のお祭りの行われる10月中頃の日曜日に行われるようになった。

新家地区の「ミヤモリ」とよばれる人達が準備をし、前日の日没からお宮に詰めている。秋祭りには、餅・野菜・するめなどが供えられる。供えるものには海のものと山のものを供えるという決まりがある。

昔は、太鼓も御輿もあったのだが、なくなってしまった。新家が所有していた太鼓は8人でたたく大きなものであったが、天理教の人が譲り受けたという。御輿はあったことがわかっているが、その後どうなったのかはわからないという。

また、このお祭りの次の日に御神楽が行われた。獅子舞をかぶった青年会の人たちが1件1件まわって、玄関からヘッツイさんのところまで行き御幣をもってお祓いをする。青年会が戦後無くなったため、その後しばらく消防団の人たちがやっていたが現在は行われていない。

亥の子　行われる日は決まっていたが、詳細は不明。

亥の子に参加できたのは、原則的に男の子だけであったようだが、時代が下るに従い、女の子も参加するようになった。藁を固く縛った棒を作り、それをもっていろんな家をまわり玄関の前の地面をたたいた。家々をまわる順番は決まっておらず、亥の子の歌、

♪いのこ　いのこ　亥の子のばんに～

と歌いながらまわった。この時に、おはぎをつくり、やってきた子供達に配った。また、子供に配るように菓子の用意もした。家によっては現金であったこともあったという。

現在は行われていない。

ヤマアキ　11月3日は「ヤマアキ」といい、この日から誰でも山に入っても良いという日があった。

山に入り、松茸を探したという。

七五三　11月の大安の日に、新家の春日神社に参るのが基本であった。ただし、春日神社には神主さんがいないため、現在では小野原の春日神社へ参ることも少なくない。

七五三のうち、男の子も女の子も一回づつお祝いをした。男の子は五才、女の子は三才で祝うことが多かったという。

冬至　冬至の日には、カボチャを食べた。

お風呂には身体があたたまるとしてゆずを浮かべる。以前は風呂を沸かす時には、ナスの木を燃やす風習があった。

3．その他の民俗行事

伊勢講　以前は村内に三つあり、もっとも大きいもので15軒ほどからなっていた。各講が、年明けから1月11日の伊勢講の日までに伊勢神宮に代表者が代参する。11日に自分の講の人にお札を配る。また、11日当日には宿となる家の床の間に御札をかけ、御神酒と洗米、塩、するめなどを供える。講員は皆宿へ集まり、床の間にお参りして席につく。宿の主人がお供えをさげて、講員に分ける。その後、宿の主人は鶏を料理したり、はものすき焼きなどをつくり講員を接待した。この時使われる野菜などは、豆腐以外はすべて自家製であった。11日の講は、11時頃はじまり、15時過ぎまでお喋りをするなどして宿で過ごした。

観音講　浄土のお宅で毎月17日におつとめをするもの。粟生新家には以前22件あったが、現在は18件であり、この18件のお宅で持ち回りで行われる。通常の月は19時半ごろから1時間ほどかけて行われる。年に1度12月の14日は昼間行われる。現在は1月と8月はお正月と盆があるので行われていない。掛け軸がある。

愛宕講　8月、地蔵盆に同じ。

大日講　8月、大日講に同じ。

行者講（大峰山）
戦前まで続けられていた。宗教宗派などは関係なく、皆が集まっておつとめをした。このおつとめも個人の家の持ち回りで毎月行われていた。毎年8月には大峰山へ出掛けていったという。

また、「ハツギョウ」といい、家に新しい人ができると戒めを込めて行う

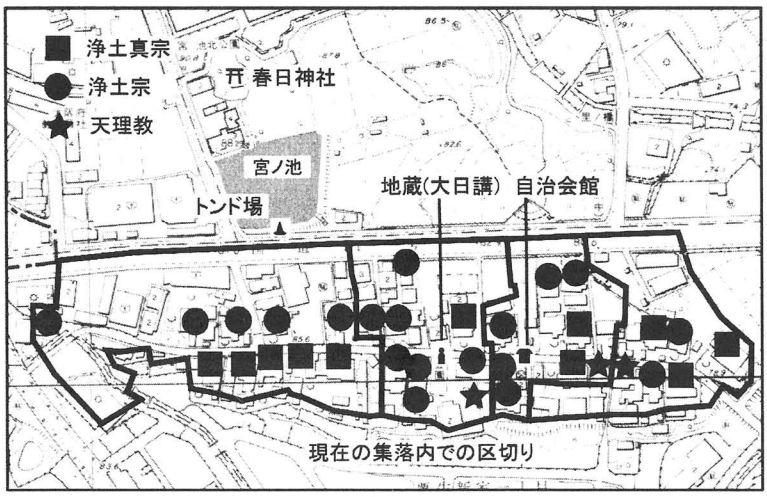


図34　現在の区切り

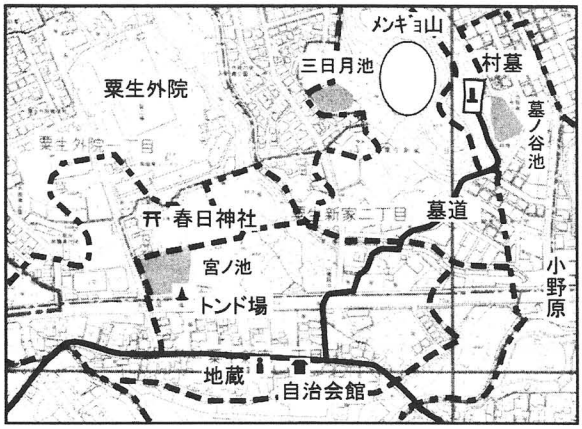


図35　粟生新家集落周辺

行事があったという。

葬送　新家の墓地には旧の村落からの家の墓だけがある。現在は火葬後、墓地に埋葬されているが、以前は土葬であった。一時、土葬でも火葬でも決まりのない時期もあった。火葬に変わってからは、凡そ夕方5時くらいから焼き始め、夜中12時過ぎに見に行く。焼け残りのないように、なるべく夜遅くに見に行ったという。

亡くなった人は列を組んで、墓場まで運んだ。この列は血の濃いものから並び、村のものが皆参加した。墓道も決められていた。地図参照。

ミヤモリ　粟生新家の春日神社の当番ということで「ミヤモリ」と呼ばれる当番がある。この「ミヤモリ」の習慣は長く続いており、粟生新家の旧の村落、1丁目の方たちが続けている。

毎年三軒が当番にあたり、六斎日には神社の掃除をし、正月の神社・秋祭りはミヤモリのしきりで行う。また、それ以外の愛宕講の時なども神社の掃除はミヤモリの仕事と決まっている。

第３節　粟生間谷地区

１．地区の概要

概要　粟生間谷地区は箕面市の北東部に位置し、茨木市と接している。山中を南流している勝尾寺川が南東に流れを変える辺りから平野が開け、勝尾寺川と支流の裏川の周辺に集落が形成されている。北は勝尾寺山、南は向山、西は明楽山の三方を山に囲まれた地区である。地区の北部に西国観音霊場二十三番札所勝尾寺があり、間谷地区を通る参詣者は多い。

粟生村の初見は康治元年（1142）の「佐伯小犬丸譲状」（勝尾寺文書、箕面市史史料編1）で「摂津国島下郡中条粟生村」と見える。

江戸時代は数回の変遷を経て慶安2年（1649）以降は高槻藩領。粟生新家、粟生外院、茨木市粟生岩坂と共に一村を形成していた。

明治22年現茨木市の西部の村々と共に豊川村を形成した。昭和31年箕面市への編入とともに4地区を合わせて大字「粟生間谷」となった。なお川合のうち3軒は水利の関係などから茨木市に編入された。

「農業集落カード」によると1970年の総戸数は川合22軒、山之口77軒、中村25軒、奥36軒であった。近年の大規模な開発により村の景観は大きく変容している。

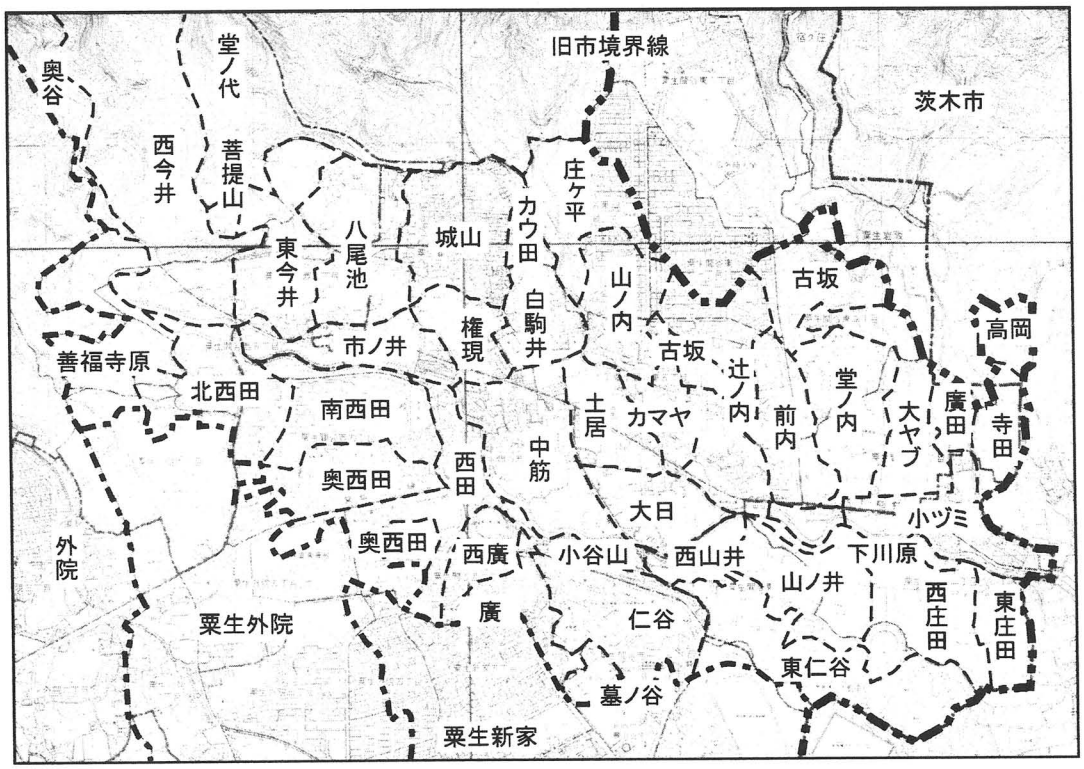


図36　粟生間谷旧字名

自治会（垣内・組）　粟生間谷地区は川合、山ノ口、中村、奥の4つの地区に分かれていて、それぞれが独立した自治会組織によって村の行事の運営をしている。

またそれぞれの地区はさらにいくつかの垣内（かいち）に分かれている。

奥……東、中、西
山ノ口……白駒井（はっくい）、山之口※、釜屋（かまや）、垂井（たるい）、引成（ひきなり）、辻ヶ市
中村……前、東、西
川合……庄田（しょうだ）、小積（こつみ）
※山ノ口は地区名、垣内名の両者が存在する。混乱を避けるため、この報告書では垣内の方を山之口と表記することとする。

山ノ口は他の地区と比べて垣内の独立性が強い。辻ヶ市、白駒井には垣内単位の講が存在し、引成には日蓮宗の家が多い。山ノ口は幾つかの垣内が集合し１つの地区となったと考えられる。

垂井と引成はその中心の家の屋号でもある。

社寺

奥……須盞嗚尊神社、楠木神社、真言宗勝尾寺、同宗善福寺、浄土宗法蔵寺、（真言宗菩提寺）、（浄土宗清竜寺）、（真言宗長徳寺）
山ノ口……五字神社、浄土宗法泉寺、日蓮宗本成寺、（浄土宗安楽寺）
中村……天満宮
川合……春日神社、（黄檗宗徳大寺）
※（）は廃社寺

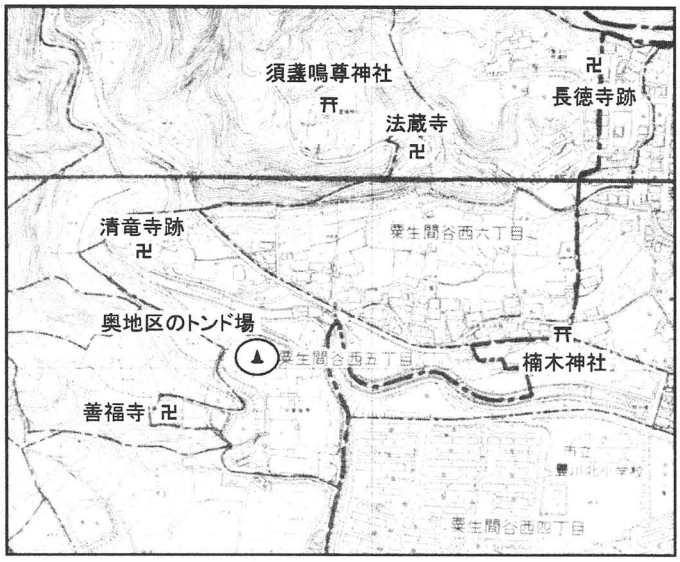


図37　奥の寺社とトンド場

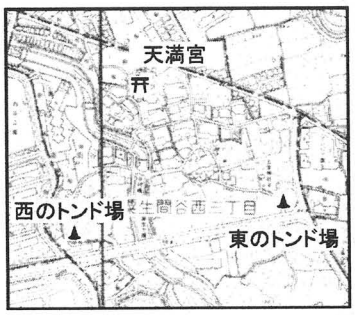


図38　中村の寺社とトンド場

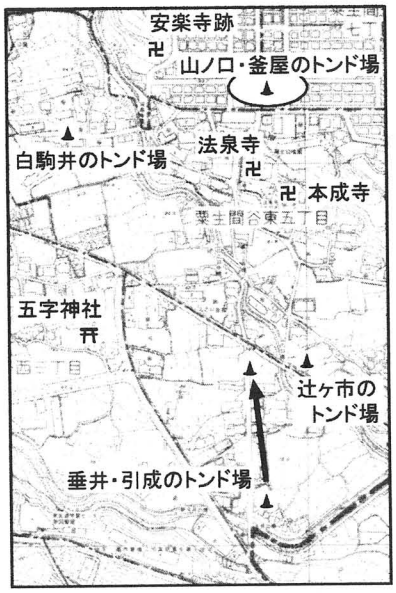


図39　山ノ口の寺社とトンド場

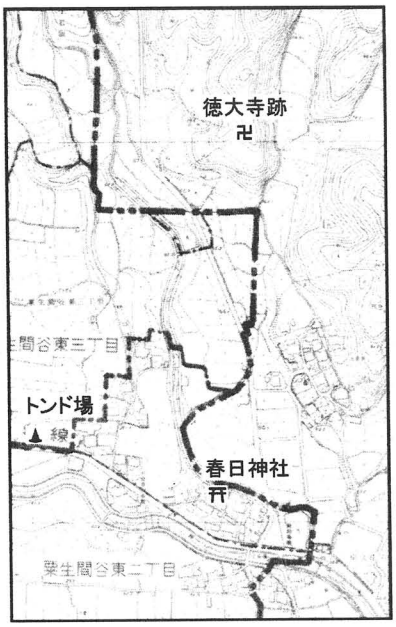


図40　川合の寺社とトンド場

宗派　浄土宗法泉寺の檀家が九割以上、浄土宗法蔵寺2軒、日蓮宗本成寺11軒、粟生岩坂の浄土真宗栄久寺2軒。

弘化二（1845）年の「宗旨御改帳」（池上家文書）によると粟生村全体（粟生外院、粟生新家、茨木市粟生岩坂を含む）で真言宗宝珠院26軒、浄土宗法泉寺 126軒、同宗法蔵寺3軒、法華宗本成寺11軒、浄土真宗教行寺（高槻市富田町）34軒、同宗勝満寺（萱野）13軒となっている。

生業　農業。酒米や枇杷が盛んだった。「村誌」（明治14年）によると、米を2180石生産し、内6割を灘伊丹大阪清酒の配米としたとある。「おまち」という品種の米を多く作っていた。また李、枇杷を天満の市に、西瓜を池田の市に、真瓜を池田、茨木の市に出荷していた。このほか裸麦、小麦、粳米、大豆、蚕豆、菜種、綿、大根を作っていたようである。また戦時中から戦後にかけて芥子も多く作られていた。昭和30年代イチゴが盛んになったが、連作が出来ないので9年ぐらいで衰えた。寒天造りをする家もあった。

写真109　善福寺の境内

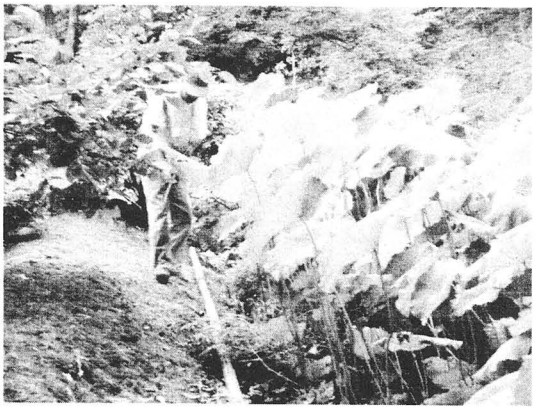


写真110　本成寺の堀

昭和40年頃まで炭焼きが盛んで、釜屋の地名はそこからきていると言われている。山に入ると窯跡を今でも見ることが出来る。

水利　地区の田畑には勝尾寺川、裏川と幾つかの溜め池から用水路を経て水が引かれている。用水路ごとに水利組合が存在し、組合の話し合いによって管理、運営がなされている。

康治元年（1142）の佐伯子犬丸譲状（勝尾寺文書、箕面市史史料編1）には一井溝の名が、嘉禎元年（1235）の僧明鑒田地売券（同文書）には今井溝の名が見える。これらの水路は今もなお使われており、今井溝では毎年5月3日に溝さらえが行われている。他の水路も同時期に、それぞれの水利組合によって溝さらえが行われる。

２．年中行事

（１）正月の準備

具体的に何日から始めるということはなく、20日以降に始めるところが多い。

餅つき　12月30日に行う家が多いが、決まってはいない。28日は荒神さんの日だから火を使ってはいけないと言って避ける。また29日は苦の餅といって避ける。が、逆に苦をつくのでよいとする家もある。今でも餅米を蒸す際にはヘッツイさん（かまど）を使うという家もある。

門松・注連飾り　ほとんどの家で注連縄はしなかった。門松は材料を山で取ってきて、玄関の両側にオン松、メン松をたてていた。竹梅を添える家もあった。31日は一夜飾りで良くないといってそれ以前に飾る。最近では門松をする家は少なくなり、逆に注連縄が増えてきている。

神社の注連縄は12月最後の日曜日に当番に当たっている組が作る。

鏡餅　鏡餅は床の間、仏壇、神棚、荒神さん（三段重ね）に串柿、昆布、みかんをのせ

て女性が供える。蔵、井戸、下駄箱、荷車、農具（脱穀機など）、裁縫台、勉強机、自動車にも供えるという家も多い。

大掃除（煤払い）　20日頃、竹の先に笹の葉を付けて天井の煤や蜘蛛の巣を取った。

大晦日の晩　そばを食べる家が多い。つごもりそばともいう。またおせち料理の余りの煮染めを食べる家もある。

中風のまじないに南瓜を食べるという家もあった。

（２）正月行事

若水　行われていない。

雑煮　丸餅、白味噌（昔は自家製の味噌）で作る。具に慈姑、大根、人参、蓮根、小芋、豆腐、揚げなどを丸く切って入れる。主婦が作る。神仏には1～3日までは毎日主婦が供える。また牛も家族同様なので雑煮を与えた。

雑煮箸、丸箸、柳箸などと呼ばれる丸い箸を使って食べる。箸の袋に名前を書き、3が日はこの箸を使う。箸は15日まで置いておき、トンドの時に一緒に燃やす。

具は7種の野菜と決まっている家もある。子芋、大根、人参、ゴボウ、揚げ、焼き豆腐、昆布。（川合、白駒井など）

初詣　各地区の氏神にお参りし、お寺に年始の挨拶に行く。氏神にお参りをしてから雑煮を祝い、その後お寺に挨拶に行くという家もあれば、氏神とお寺に行った後に雑煮を祝うという家もある。昔は午前3時頃から正装をしてお寺へ参った。

お年玉　現在はお金だが、昔は下駄や足袋、前掛けを買って貰った。何も貰えない家もあった。

ハツシゴト　2日、家の主人が豊年になるように田圃に酒をたらした。田の神まつりと云った。5日には山に行き餅を焼き蜜柑、昆布、御幣を付けて、木にくくりつけて、その年の山での安全を祈願した。山の神まつりと云った。（釜屋）

2日、シゴトシゾメといって山に男の人が行った。（奥）

3日、山の入り口の広場で、紙で作った御幣を木につけ、山の神を拝んでから仕事を始めた。（白駒井）

最初に山に入るとき、焼いた餅を持って山の入口に供えた。（川合）

フクアカシ　4日、味噌汁に鏡餅を切ったものを入れて食べる。（奥）

正月七日　7日、この日を七日正月といって、七草粥を食べる。七草全部入れなくても良い。これといって何もしないという家もあった。

七草という名前の草を入れるという家もある。（中村）

鏡開き　昔は15日に下げて、焼いて食べたり、ぜんざいに入れたりした。最近は早いところで3日には下げて、水に浸けてしばらく置いてから食べる。3日の夜切ってしまうという家もあった。

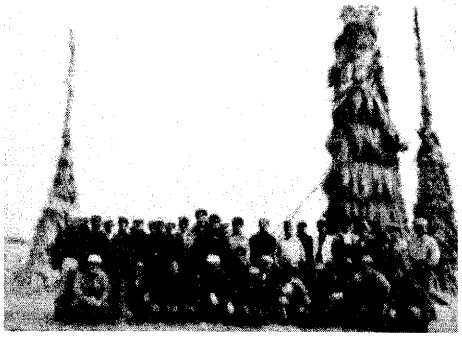


写真111　山ノ口のトンド

トンド　14日の晩か15日の朝にトンドを燃やした。トンドは竹を組んで三角錐状のものをつくり、そこに藁を掛けた。ダマシをたくさん作って他の垣内といつまでトンドを燃やさずおいておけるかを競った。中村では11日の伊勢講の時に子供が集まり、講で酒を飲み気の大きくなっている大人に竹を貰えるように頼んだという。

またこの火を持って帰って、小豆粥を炊いた。燃やした竹は便所に入れると魔除けになるといった。各地区のトンド場は次の通りである。

奥……双葉産業の駐車場辺り
山ノ口
　白駒井……垣内のなかの辻
　山之口……法泉寺の裏手
　釜屋……法泉寺の裏手
　垂井・引成…太成金属の辺りからのち、JAスイミングスクールの前辺りに移った。
　辻ヶ市……現在の山之口橋の側の田圃
中村
　西……豊川北小会館の下の田圃
　東……五字神社の南東
川合……地区西部の共有の田圃

どの地区も現在は行われていない。山ノ口では一時期復活し、個人の田を借り、垣内毎にトンドを作り賑わったが、田が荒れるということとダイオキシンが発生するということで中止された。

ヤブイリ　嫁や奉公人はこの日実家に帰った。姑は嫁に土産を持たせて実家に帰らせた。実家へは1～5日間帰っていた。

荒神さん　1月28日は勝尾寺の荒神さんの日。尼講の人が粕汁やかやく御飯の接待をした。現在はお神酒だけ。また竹を切ってきて杖の接待をするということもあった。

（３）春から夏の行事

トシコシ（節分）　2月3日。この日をトシコシという。昔はホウラクで豆を煎った。

豆は神仏に供え、家の各所で「鬼は外、福は内」と言って豆まきを行っていた。年の数豆を食べ、鰯を食べた。また戸口にヒイラギと鰯の頭を飾った。昔は母屋、便所、蔵の入口など入口という入口全てに飾った。何もしない家もある。最近は巻き寿司を食べるようになった。

節句（３月）　3月3日。雛飾り（人形のものと掛け軸のものがあった）は早目（節分頃から）に出し、終わるとすぐに片付ける。早く片付けると縁が早いといった。この日はハマグリのおつゆとちらし寿司をして食べた。

イチマさん（市松人形）をもらったという人もいた。

彼岸　お寺で彼岸の法要があり、そこで塔婆をもらってからお墓に行く。よもぎ餅やおはぎを供える。

彼岸団子（よもぎを摘んできて作る。）を供える。（奥）

メンギョ　4月18日、お重に巻き寿司を入れて、善福寺の庭に行った。（奥）

法泉寺の裏に巻き寿司を持って出かけた。（釜屋）

垣内で相談して日を決めた。子供だけがコウデン山（現東山住宅）に行って御馳走を食べた。（白駒井）

現在東山住宅になっている山に行き、御馳走を食べた。（中村）

昭和33年頃までしていた。場所は川合の池の周辺で山ツツジがたくさんあった。筵を敷いて周囲に折ったツツジを挿して花の中で巻き寿司を食べた。春日神社の桜の木の下ですることもあった。（川合）

溝さらえ　5月3日に溝さらえをする。（奥など）

米を集めて運営に充てていた。これを井出米という。

節句（５月）　5月5日。鯉のぼりを上げる。昔は菖蒲と蓬をくくって尾根に上げたり、菖蒲湯に入ったりした。頭痛（あたまいた）が起こらないといった。

疱瘡にかからないように道の辻に赤飯を供えた。（釜屋）

ヨウカビ　5月8日。庭に竹を立て上の方を十字にし、その先にツツジの花をつけた。

サナブリ　田植え後、村全体が終わるとサナブリといって休んだ。苗を神棚に供えるという家もある。また、この日田植えを手伝ってもらった家に賃金を支払った。

半夏生　ハゲショウという。田に入ると禿げるとか、枯れるとかいって、入るのを避けた。

写真112　田植え風景

七夕　7月7日。瀧安寺の大護摩に行った。水口にまいたり、竹の皮に包んで竹に挿し田圃に立てたりすると虫がつかないといった。

土用　土用の内は土をいじってはいけないといった。

その他　田植え前に牛の爪切りがあった。言い継ぎが回って知らせた。

写真113　法蔵寺施餓鬼供養

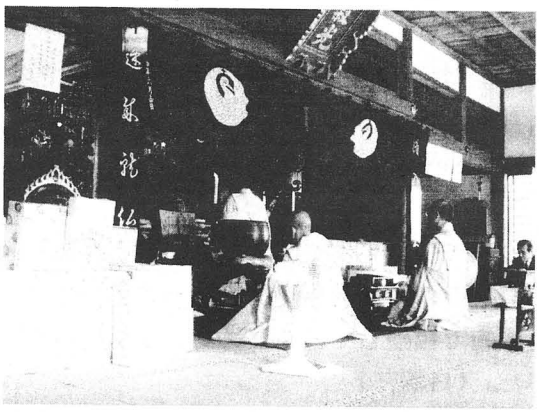


写真114　本成寺施餓鬼供養

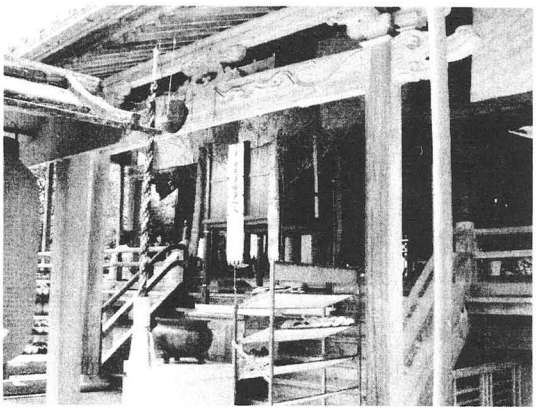


写真115　善福寺施餓鬼供養

（４）盆行事

施餓鬼　法泉寺では8月2日、法蔵寺は15日、本成寺は14日、善福寺は17日。各寺で施餓鬼供養が行われる。各寺の檀家や信者は塔婆をもらって帰る。

墓掃除　お盆前の都合のよい日に行う。また法泉寺では月ごとに決まった地区の人が掃除をする。

ココノカビ　8月9日、中山寺で回向してもらう。アラタナのある家がお参りする。(奥)

毎年行くという家もある。

先祖迎え　12日にダントバに迎えに行く。この時は仏花を供える。13日の朝粟生霊園に迎えに行く。14日に坊さんが各家を回る。15日には各家から寺に礼に行く。(奥)

法泉寺では各地区によってダントバでの先祖迎えの時間が決まっている。

写真116　お盆のお迎え（法泉寺）

写真117　お盆のお迎え（本成寺）

棚経　各寺の住職が檀家を回り、仏壇・盆棚の前でお経をあげる。善福寺、法蔵寺は奥地区の檀家ではない家も回る。

供え物　ハスの葉（無い場合は代わりにイモの葉）を広げ、スイカ、十八豆、ホウヅキ、桃、とうもろこし、ブドウ、マクワウリ、ナス、キュウリ、トマト、ハクセンコウ、ソーメン、お花、まんじゅう等を供え、箸としてオガラも供える。オガラで身体の悪いところを摘むとご先祖さまが持って帰ってくれるといった。8月15日に小豆御飯、南瓜の煮たものを供えると足が早くなるといって先祖が早く帰れると言った。供え物は日によって決まっている家が多い。数例次にあげておく。

中村
- 13日昼　落ちつきメイ
- 14日朝　乾物（高野豆腐、干瓢、麸）
- 晩　南瓜、豆

奥
- 13日晩　本膳、ご飯、おひら、煮染め、漬け物、おつゆ、おつぼ、無縁さんにお茶湯
- 夜食　サツマイモ
- 14日朝　ぜんざい、大根のおひたし
- 昼　素麺
- 晩　ご飯、茄子の胡麻和え
- 15日朝　赤飯、味噌汁（具に牛蒡、土芋）
- 昼　まぜずし
- お土産　おしんこ（米粉を練って作った団子を細長くし、ひねったもの）

引成
- 12日晩　落ち着き団子（おしんこ）
- 13日朝　ご飯、おかず
- 昼　素麺
- 晩　ご飯、おかず

14日朝　赤飯、メイ
昼　お芋
晩　ばら寿司
15日朝　ご飯
昼　素麺
晩　醤油ご飯
醤油ご飯をおにぎりにして船に乗せて川で送った。

白駒井
13日昼　あんころ餅（落ち着き餅という）
晩　メイ
14日朝　南瓜
昼　素麺
晩　乾物（高野豆腐、干瓢、ゆばなど）
15日朝　赤飯、茄子の和え物、大根の間引き
昼　おしんこ

白駒井
13日朝　アンコロ餅
昼から晩　本膳
夜食　お芋
14日朝　御飯、おかずとしてメイ（海藻）、南瓜
昼　素麺
晩　御飯、人参、高野豆腐、ジャガイモ、豆
15日朝　赤飯、カイワレ
昼　本膳

辻ヶ市
13日昼　おはぎ、おむかえだんご
14日朝　お餅の入ったおつゆ
昼　素麺、南瓜やズイキの和え物
15日朝　赤飯、メイ
昼　おしんこ、チラシ寿司

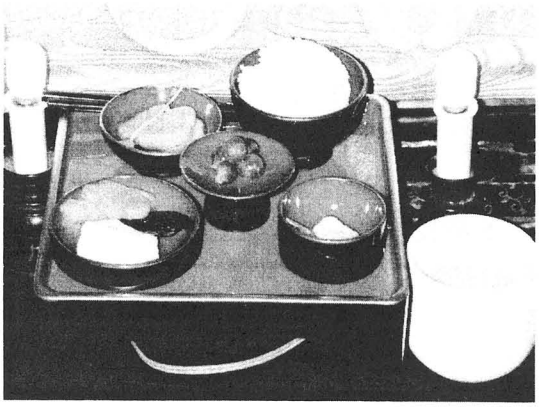


写真118　仏壇のお供え

同じ垣内でも各家によって供える物や順番が違っている。また数軒が互いに供え物を担当しやりとりするところもある。

先祖送り　15日の夕方。供えていたもの（餅、果物、饅頭）を川に流した。今は川が汚れるので禁止になった。

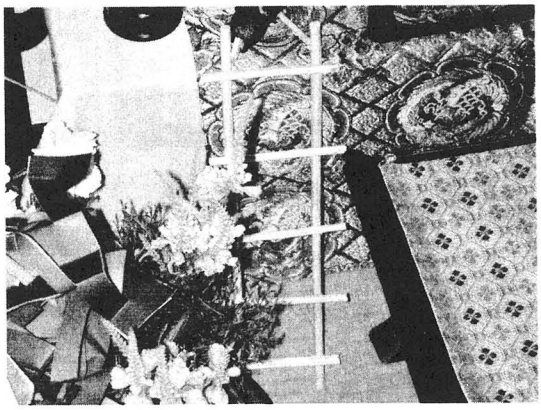


写真119　オガラの梯子

写真120　餓鬼棚

新仏　シンボン、アラタナと言って、先祖とは別に棚を作り、オガラではしごを作った。

無縁仏　道の辻々にお茶と線香を供えた。（釜屋）

先祖を迎えに行くと無縁さんがついてくる。家に来ると遠慮をするというので縁側に先祖とは別に棚を作って祀る。供物は先祖のものと変わらないが、人数が多いということでオガラの箸は多めにしておく。（辻ヶ市）

庭にお茶をかけた。（奥）

マンドロ　村山に木を取りに行った。遠くて重くて大変だった。15日と24日に墓で行った。松明を持ち、マンドロとぼせ、けやせ、もやせ、というかけ声をあげて墓まで行き、帰った。（中村）

迎えマンドロ、送りマンドロの2回あった。（山ノ口）

13日は長さ約2mの竹の先を割り火を付けて松明にし、小高い松林の丘まで先祖を迎えに行った。昼にはその場所でトンドを作って燃やした。15日は同じようにして送った。（奥）

13日にソンジョサン迎えといって、お墓に松明を持って先祖を迎えに行った。マンドロとはいわない。（川合）

盆踊り　現在、どの地区でも行われていない。

善福寺でしていた。(奥)
五字神社でしていた。中村、山ノ口の境の地蔵の前でしていたこともあった。(山ノ口)

写真121　地蔵盆１

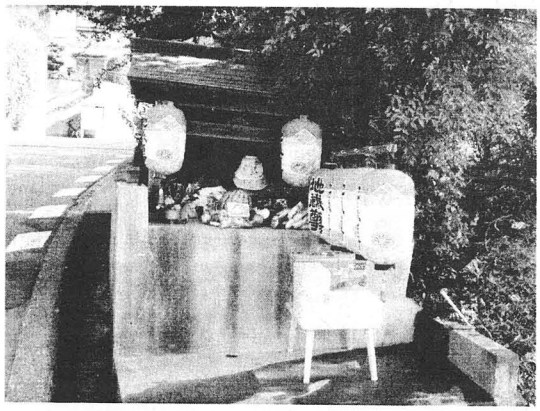


写真122　地蔵盆２

地蔵盆
個人持ちの地蔵が多く個々に行う。ある家では家の前の地蔵の祠に提灯を灯し、西瓜などお盆と同じ供え物をしている。

（５）秋から冬の行事

月見　旧8月15日夜。団子（米粉で作る）、ススキ、小芋を縁側に飾った。子供は盗みに行った。取られないように家の中に供えた家もあった。

彼岸　春と同様に墓参りをする。おはぎを供える。

すなもち　9月中に地区の神社やお墓の掃除をする行事。

写真123　太鼓

秋祭り　元は旧暦の9月9日に行われていたが、新暦の10月15日に変わり、近年15日に近い日曜日に変わった。須盞嗚尊神社から太鼓が出て各地区を通り（昭和50年頃までは粟生外院にも行っていた)、川合まで行き、そして神社に戻る。近年は担ぎ手が少なくなり、また太鼓に乗る子供も減ったので、太鼓が出るのは隔年になった。
昔は長男しか太鼓に乗れなかった。乗り子となる子供は地面に下りてはいけないので太

鼓までは大人が肩に乗せて連れていった。
平成12年は太鼓の出る年だったが、子供の数が揃わず中止になった。

亥の子　11月の亥の日に男の子が数人集まり行っていた。亥の日が3回の時は真ん中で、2回の時はどちらかでした。各家を回り、藁を束ねたもので地面を叩いた。お菓子やおはぎを家の人からもらった。この日から炬燵を出した。
また箕に鎌を入れ、そこにおはぎを供えた。
亥の子歌
亥の子の晩に重箱拾て、開けてみれば重兵衛さんの金玉、ひとつ祝いましょ。
白駒井で小さい子供のいる家の場合
○○ちゃん起きててか、寝ててか。新米わらでいおたろか。ひとつ祝いましょ。
奥
亥の子のぼた餅祝いましょ、一つや二つじゃ足りません。

お十夜　浄土宗の寺院で本来十月十日に行われる行事だが、間谷では農繁期ということで昔から11月か12月に行われている。

冬至　南瓜を食べ、柚子風呂に入る。中風にならないと云う。
旧暦の冬至に善福寺で中風のまじないがある。白南天の箸を長生きのまじないとしてもらった。

３．その他の民俗

（１）講

伊勢講（奥）　1月の第一日曜に行う。以前は1月11日。代参の人は勝尾寺川で水垢離をしてから出発した。昔は2組に分かれていたが、今は一つになった。奥に限らず、伊勢講ではカシワのすきやきをして食べていたようである。

伊勢講（山ノ口）　白駒井。1月10日の夜にオヒマッツァンと称して、次の日を迎えていた。11日トウヤの家で行う。掛け軸を回している。昔は垣内の勘定書きも回していた。伊勢講の掛け軸は五つくらいの神様が書いてあった。今は新調した。
山之口7軒。1月11日にトウヤの家で行う。掛け軸を掛け、鯛、洗い米、お神酒などを供えて、勤める。
山之口1軒、釜屋1軒、垂井3軒、引成1軒。1月11日にしていたが、現在行っていない。5軒ほどで構成されていた。講田があり、それで運営していた。今でも掛け軸は持ち回りで祀っている。大正2年から使われていた勘定帳によると、6軒で構成されており、4軒がそれぞれの事情で抜け、3軒が新たに入っている。
引成5軒、垂井1軒。
山之口2軒、釜屋3軒、垂井1軒、辻ヶ市3軒。1月11日にトウヤの家でしていたが、10年ぐらい前になくなった。代参の人が伊勢に行った。

辻ヶ市の内東寄りの8軒で構成。

伊勢講（中村）　2月11日、会館で行う。昔はオウ講、マエ講の2つに分かれており、1月11日にトウヤの家で勤めていた。3月、12月にもしていた。前垣内がマエ講、東西垣内がオウ講を構成していた。カシワを料理して食べた。

伊勢講（川合）　今は行われていない。トウヤの家に集まり、カシワのすきやきを食べた。

愛宕講（白駒井）　8月24日。午前中に愛宕の祠を掃除をする。その後トウヤの家に集まり、お供え物の準備をし、お昼前にはお供えする。そして夕方頃またトウヤの家に集まり皆で食事を食べる。元々はある家が祀っていたが、後に垣内で行うようになった。現在は東山住宅の端に移されているが、開発前は山の上にあった。

愛宕講（川合）　8月23日の夜、川合地区の太鼓を担いで地区の愛宕神社に行った。神社ではおしんこなどを供えた。現在行われていないが、お祀りはされている。この行事を「しんこもらい」ともいう。

金比羅講（山ノ口）　2月11日に山ノ口会館で行う。もとは10日でトウヤの家で行っていた辻ヶ市6軒、引成1軒、釜屋1軒、山之口3軒、白駒井3軒の計14軒で構成。掛け軸をかけ、鯛2尾を腹を軸に向け、向かい合わせて供える。

善光寺講（奥）　彼岸の期間中に行う。夜、当番の家に集まり、浄土宗のお勤めをし、御詠歌をあげる。

観音講（奥）　女性の講。農繁期（6,7,8,10月）以外の月に勤める。17日が観音の命日なのでそれまでに勤める。夜、当番の家に集まり、浄土宗のお勤めをし、御詠歌をあげる。

お彼岸の月は観音講の時に念仏講、一心講、善光寺講の日取りを決める。

観音講（山ノ口）　女性の講で当家が順番に回ってきた。昭和30年頃まであった。お彼岸に御詠歌をあげた。野辺送りの時ゼンノツナを持った。

観音講（川合）　女性の講。春と秋のお彼岸に12軒で勤めている。当番の家でお勤め（御詠歌、お経をあげる。導師は講の年輩の人）をする。お茶とおはぎとお菓子をして出した。現在はお茶とパン2個になった。

一心講（奥）　春秋の彼岸の期間中に行う。柳谷観音を信仰する講。大きな数珠を講員が持って円になり、その中に導師が入る。数珠を回しながら念仏、御詠歌をあげる。

観音講、善光寺講、一心講のそれぞれの掛け軸は村で不幸があった場合の葬儀の際にも使用する。約30年前からお供えはパン2個に統一した。

一心講（大講）　柳谷観音を信仰する講。垣内、村単位のものではなく信者の講。石丸や白島の人と一緒に大勢が参っていた。

念仏講（奥）　お彼岸に徳本上人の六字名号の掛け軸を掛けて勤める。東、中、西の組ごとに行われている。中組は法蔵寺の垣内が中組にあたるため法蔵寺の住職が勤める。徳本は文化年間に活躍した浄土宗の念仏行者で、勝尾寺の松林庵に滞在していた。箕面市内には徳本の遺品が各所に残されており、間谷地区にも六字名号の掛け軸を所有している家がある。

念仏講（白駒井）　かつて半衛門という人が垣内のために田圃を残した。半右衛門を偲んで位牌を祀って念仏をあげる。以前は毎月していた。今はお彼岸に勤めている。

念仏講位牌
（表）　性空了連禅定門
　　西屋元圓信士
　俱會　半右衛門先祖代々霊位
　　空山浄性信士
　　忍譽榮月信尼

（裏）　性　延享五辰年三月廿二日半右衛門伯父
　　西　享保九辰年七月十四日半右衛門兄
　　空　寛延元辰年十一月十日半右衛門事
　　忍　享保十二未年三月三十日半右衛門母
　　施主　白駒井念仏講田地所有主中

念仏講（中村）　トウヤの家で念仏をあげる。念仏講田があった。

念仏講（山ノ口）　春秋の彼岸に勤める。辻ヶ市以外の山ノ口が講員。言い継ぎにまわってもらってお勤めの日を知らせた。昔は念仏講山があった。

念仏講（辻ヶ市）　農繁期以外の毎月勤めている。トウヤの家に集まり、念仏をあげる。昔、後継ぎがなく、垣内に田を寄進した人がいた。この人を偲んで寄進した田を念仏講田として行われるようになったという。

勝尾寺の尼講　1月28日勝尾寺で荒神さんの縁日があり、粕汁の接待を行っていたが、現在は御神酒の接待をしている。講員は10人ほど。

法泉寺の尼講　お寺の行事の際、お手伝いをする。

法蔵寺の尼講（奥）　奥の数軒で組織。お寺の行事の際、お手伝いをする。

善福寺の尼講（奥）　奥の数軒で組織。お寺の行事の際、お手伝いをする。

吉水講　法泉寺で吉水流御詠歌の練習をする講。昭和47年から始まったもので毎月5、15、25日の夜に法泉寺で行われている（農繁期はなし）。多いときは約80人いたが現在は10数人でしている。お寺の行事に御詠歌をあげたり、御詠歌の大会に参加したりしている。

初御講（日蓮宗）　1月9日。昔はシバシといって本成寺の1年間の柴を作った。その後、新年会のようなことをした。

庚申講　地区内数ヶ所に庚申碑が建てられており、庚申信仰が盛んに行われていたことを伺わせるが、現在庚申信仰または庚申講について知っている人はいない。

行者講　以前は大峰山に行く講があったようである。

（２）

ダントバ　寺にある墓地。法泉寺、法蔵寺、本成寺、清竜寺跡にある。それぞれの寺の昔からの檀家の墓。

浄土宗の家の場合はダントバを詣り墓とし、粟生霊園に遺骨は埋めるという両墓制の習俗が見られる。清竜寺跡にダントバを持つ家は奥に7軒ほどあり、元は清竜寺の檀家だったと思われるが、近世末にはすでに法泉寺の檀家になっていたようである。

日蓮宗の場合はダントバにも遺骨を納めており、粟生霊苑には墓を持っていなかった家もあることから家によって単墓制、両墓制の違いがあったと思われる。粟生霊苑の改修に当たって村の人には1区画与えられたため、最近になって両墓制となった家も見られる。

雨乞い　旱魃の時、勝尾寺の弁財天に鯖を塗り付けて池に入れると怒って雨が降ると云った。

西国巡礼　間谷は勝尾寺に参詣する道中に当たるため昔は多くの巡礼者が歩いて通ったようである。村の人は彼らに対し、米などを接待したり、泊めてあげたりすることもあった。

間谷から勝尾寺へは七曲がりと呼ばれる道を通った。途中に重兵衛の滝があり、その近くに椿地蔵が祀られている。重兵衛という人が巡礼者の接待をしていたという。

中村の鍛冶屋をしていたという家は西国巡礼の人から鍛冶屋の技術を学んで始めたといわれている。

サンドさん　西国三十三度行者のこと。セタを呼ばれる三十三観音の入った笈を背負い西国を廻る巡礼者で、間谷でも戦前までは見られたようである。彼らは決まった宿をもっており、宿帳には箕面市内の幾つかの家も見られる。彼らは間谷で宿となる家に到着するとセタを置き、勝尾寺に参詣する。宿に戻るとセタを開けてお勤めをしたようである。

奉公人　村の大きい家にはたくさん奉公人が来ていた。丹波の人が多かったようである。

また研ぎ屋が来ることがあり、泊めることがあったが、研ぎ屋は「私は軒で・・・」といって必ず軒先で寝たという。

葬式　昔は野辺の送りをして墓で火葬にしていた。遺体を輿にのせて4人で担いだ。この4人と喪主は白装束を身に着けた。

昔は座棺で戦後しばらくは棺の前を観音講の人たちがゼンノツナを持って歩くことが行われていたという。(奥)

俗信・狐　カケラ（川合と山ノ口の間の地名）ではよく狐が出るといった。ある人が通りかかった時、帰り道がわからなくなった。途方にくれ座って煙草に火を付けた。すると途端に道が開けたという。

地面に杭を打つとき、槌で地面を叩き神さんに退いてもらってから杭を打つ。また土用に土を動かすと腹痛になるといい、土に触らないようにした。

昔話　昔、吉田太右衛門という庄屋が現在の垂井の辺りにいた。ある時村民が高い年貢に困っているということで藩に直訴をした。太右衛門は磔となったが、村民の暮らしは楽になった。太右衛門の徳を偲んで、法泉寺には地蔵と観音が祀られた。地蔵と観音の胎内はそれぞれ太右衛門と太右衛門の妻になっている。地区内に太右衛門の子孫と名乗る家が数軒ある。

（３）墓地

粟生霊園　以前は「粟生の大墓（おおばか）」と呼ばれ、現在の霊園より5mほど高い位置にあった。近くには池があり、火葬の際、遺体に掛ける筵 はそこで湿らせた。

奥、中村、山ノ口と粟生外院、外院の墓地。

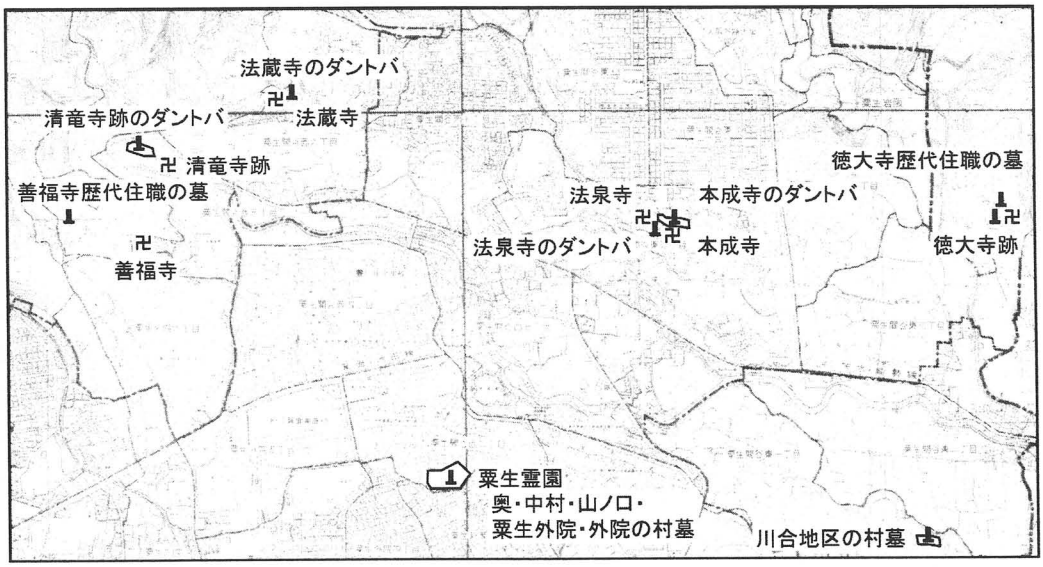


図41　粟生間谷の墓域

善福寺歴代住職の墓　　無縫塔や五輪塔が13基並んでいる。

清竜寺跡のダントバ　　奥のうち7軒の石塔と清竜寺の歴代住職の石塔が並んでいる。

法蔵寺のダントバ　　奥のうち2軒と粟生外院の1軒の計3軒の石塔と法蔵寺の歴代住職の石塔が並んでいる。

法泉寺のダントバ　　法泉寺の昔からの檀家約70軒の石塔と歴代住職の石塔が並んでいる。

本成寺のダントバ　　本成寺の檀家の石塔と歴代住職の石塔が並んでいる。

川合地区の墓地　　粟生霊園の場合と同じく、近くには池があり、火葬の際、遺体に掛ける筵 はそこで湿らせた。

徳大寺歴代住職の墓　　平成九年開発により消滅。石塔は郷土資料館と川合の墓地に移された。

（４）石造物 、祠など

１．地蔵
　中の地蔵と呼ばれている。

２．六字名号碑

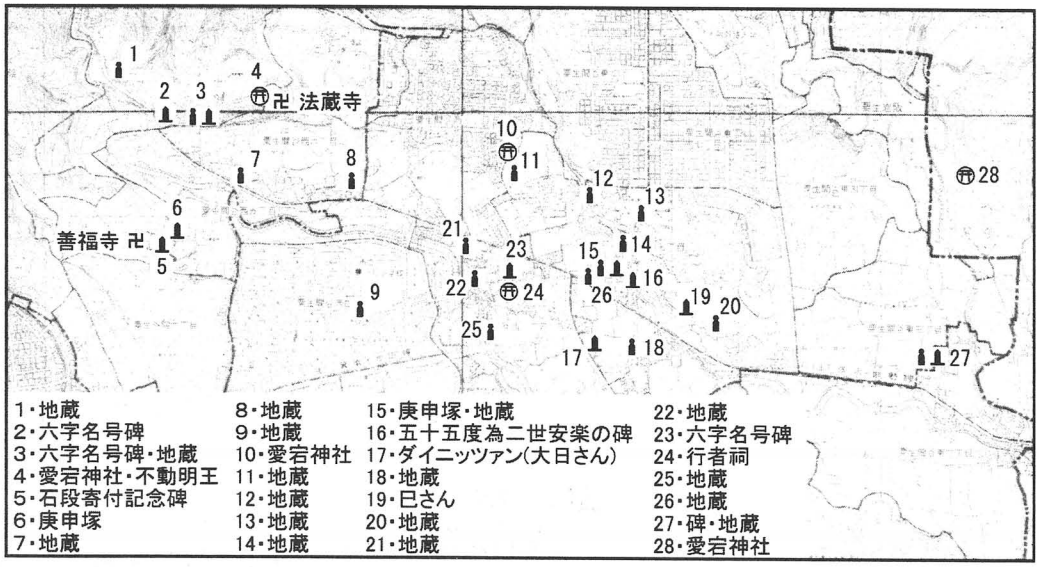


図42　粟生間谷の石造物・祠等

3．六字名号碑、地蔵

名号碑には

嘉永七甲寅年七月建之

南無阿弥陀仏

講中

とあり、もとは少し南にあった。

4．愛宕神社、不動明王

燈籠　施主奥　若者中　愛宕山

不動　文政七申四月五□

西本芝半左エ門

5．石段寄附記念碑

大正3年に善福寺の石段を寄附した人達が建てたもの。

（表）

石段寄附

發	加角庄蔵		黒松シゲ
起	山本弥三左エ門	慈	神崎キクエ
人	山根□三郎	善	山内ヨネ
		講	直島□シ
			岡本ヨシエ
	岩崎與太郎		篠崎タイ
世	福田與三郎		服部カジ
	大久保辰造		泉シナ
話	下村熊吉		岩崎ハル
	石□音吉	尼	種池キク
人	池上安次郎	講	福田サキ
	岡本仙吉		中村アイ
			奥株世話方中

（裏）

大正三年五月

6．庚申

享保二丁酉天

（イ）青面金剛　講中

三月吉日

講中とあるので、庚申講の存在していたことがわかる。

7．地蔵

8．地蔵

９．地蔵

箕面粟生第二住宅の地蔵通りの地蔵。開発前は田圃の畦道の木陰で草に少し埋もれていた。特にお祀りされるようなこともなかった。ところが開発に当たって木々が伐られ、日光にさらされることとなった。ある日奥地区のある人の夢にこの地蔵さんが現れ、暑いから涼しいところに行きたいと訴えた。そこでこの地蔵を勝尾寺に移した。

その後、団地は完成した。が、何度か不幸なことが起きた。団地の住人はその原因を探るうちに、元はそこにお地蔵さんがいたことを突き止めた。そこで勝尾寺に移動していた地蔵をみてもらうと、元の場所に帰りたがっているとのことだった。そこで立派な祠を建てそこにお地蔵さんをお祀りした。すると不思議と何も起こらなくなったという。

団地の住民による地蔵盆が毎年盛大に行われている。

１０．愛宕神社

開発前は山の上にあった。

１１．地蔵

寛延三年（1750）の地蔵。

１２．地蔵

１３．地蔵

昭和40年頃の川の改修で川に埋まってしまったが、3度ぐらい探した末に見つけられ、法泉寺の横に祀られた。

１４．地蔵

１５．地蔵、庚申

村内の地蔵7体と庚申碑2つが集められている。

１６．「五十五度為二世安楽」の碑

正面　　九峯

（カンマン）　　五十五度為二世安楽也

山上

右　　菊治良　□治良　□□□□

吉兵衛　常蔵　□□□□

西鐘掛組　世話人　□右エ門　為右エ門　□□□□

常治良　栄治良　□□□□

元治良　漢右エ門　□□□□

左　聖護院御方五流報恩院直同行

摂州嶋下郡粟生村

大先達権大僧都久世院釜谷田村新□

後　文政八乙酉歳正月吉日

１７．ダイニッツァン（大日さん）
ダイニッツァンと呼ばれる五輪塔がある。牛の守り神ともいわれている。

１８．地蔵

１９．巳さん

この場所は巳さんがいるということで木を切ってはいけないといい、卵を供えると良いという。

２０．地蔵

２１．地蔵

２２．地蔵

２３．六字名号碑
南無阿弥陀仏　誓阿

２４．行者祠
明治24年建立。

２５．地蔵

２６．地蔵
正面に
寛保二壬戌八月三日
安誉浄清禅定門
浄誉妙清禅定尼
寛延三庚午十月六日
とある。

２７．碑、夜泣き地蔵
夜泣き地蔵は元は少し北側にあったが、開発のため現在地に移転した。夜泣きする子供を連れて行くと、夜泣きが止るという。

２８．愛宕神社
開発のため平成五年春日神社内に移転。春日神社ももとはここにあったと言われている。

なお地蔵には他にも家の敷地内に祀られているものもあった。

第４節　小野原地区

１．地区の概要

概要　小野原は東を茨木市に接し、その範囲は箕面市内でも比較的大きい地区である。古くからの集落は、地区内を東西にはしる西国街道沿いに形成されている。近年、周辺の田畑が次々と宅地に姿を変えており、その流れは小野原東部地区に特に顕著である。今でも比較的に農村風景を留めている西部地区も今後急速に開発が進み、数年の内にその景観が大きく変わることは確実である。

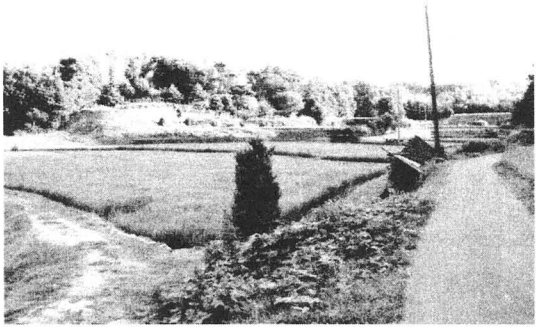


写真124　現在も残る農村風景（小野原西６丁目）

自治会　旧集落部は8つの自治会によって構成されており、西から大西・若宮・宮崎・岩戸・神楽・日の出・日の丸・大東と呼ばれている。以前は自治会ではなく「組（くみ）」と呼びあっていた。組の中には更に東西、南北などに分かれているところもある。

水利　宝暦9年（1759）5月の「小野原村諸色付込帳」（「笹川家文書」119『箕面市史』）には8つの池が記されているが、このうち松出池の上・下、仁鳥池、宮池

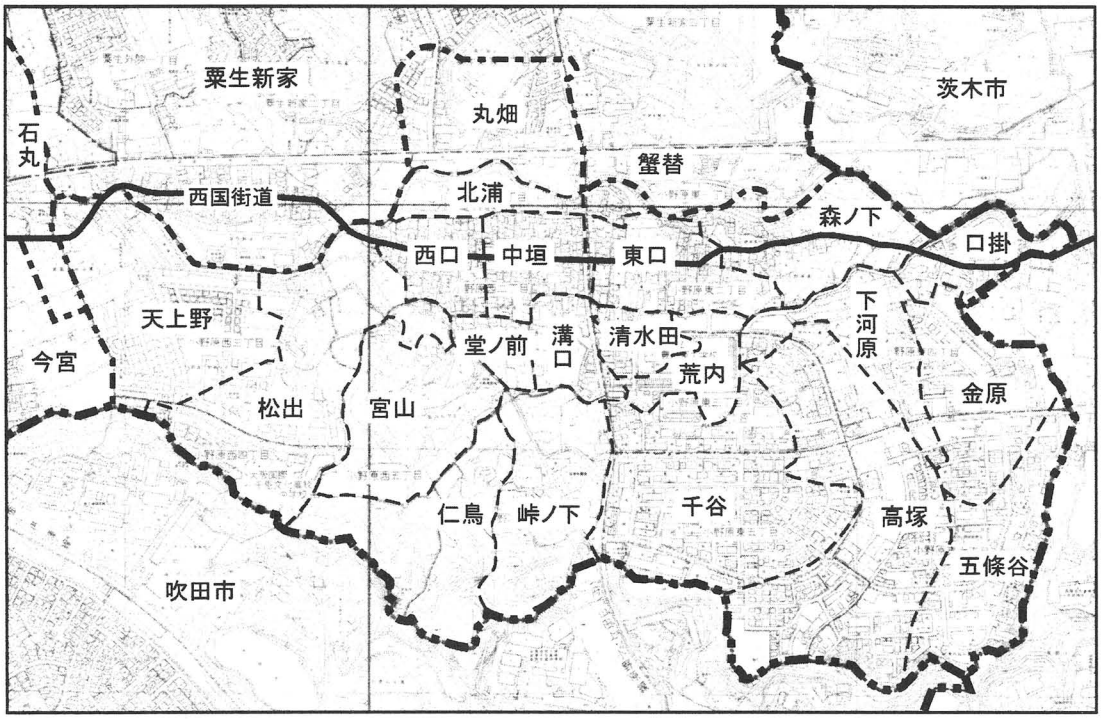


図43　小野原旧字名

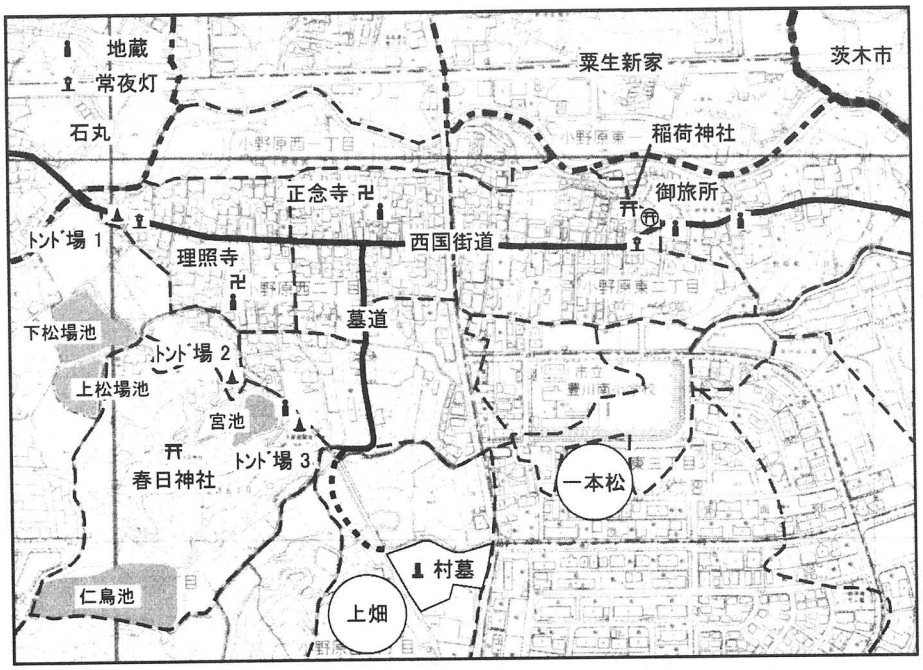


図44　小野原集落周辺

の水が今も小野原の田畑を潤している。仁鳥池はもともと上・下の2つに分かれていたが、明治28年に上池側の土手を下げて、下池側の土手を上げて1つにした。この工事には小野原の大人から子供まで働きに出た。現在、松出池、仁鳥池一帯は都市計画用地に該当するため近い将来、この二つの池は埋め立てられることになっている。

毎年田植え前には「樋が降りる」といって、仁鳥水利組合で決めた日に、これら4つの池の樋を抜き、田に水入れをして田植えの準備をする。

寺社　前記の「小野原村諸色付込帳」によると、今も氏神として信仰を集める春日神社には、春日大明神のほか11の末社と個人所有の2社が鎮座しており、春日神社御旅所の1社、個人の屋敷地内にあった2社を含めて小野原村内には計17の社があったと記されている。一方、寺院は浄土宗の正念寺・理照寺・清福寺、そして真言宗の澄泉寺の計4ヶ寺が挙げられている。このほか清福寺と澄泉寺には観音堂が付属し、村内に大日堂が1カ所あったことがわかる。

正念寺と理照寺は今も地区の檀那寺として存在し、その檀家数もほぼ同数である。清福寺と澄泉寺は、共に明治の廃仏毀釈で廃寺になったという伝承が残る。付込帳には清福寺は理照寺末寺、澄泉寺は勝尾寺中法輪院末寺とある。集落の西端にあったとみられる清福寺は理照寺の隠居寺で、澄泉寺は理照寺の東方にあったという。大日堂は大東の御旅所近辺にあったといわれるが、今でも小野原東公園から御旅所への上り坂は「大日坂」と「だいにっつあん」呼ぶ人がおり、そこにあった大日如来の石仏が今は正念寺で秘仏として大切にまつられている。このほか、日蓮宗の妙見寺があるが、同寺は昭和42年に大阪市内から移転してきたものである。

２．年中行事

（１）正月の準備

多くの家では正月準備を始める日に特別に呼び慣わす習慣は聞かれなかったが、商売をしている家のなかには、12月15日ごろにお歳暮を贈る日をコトハジメと呼ぶ家もある。

門松　門松はどこの家でも昔は立てていた。門松は門口に宮池横の児童公園内にある地層から取ってきた白い砂を敷く。そこに、向かって右に雄松（オンマツ）、左に雌松（メンマツ）を立てる。雄松は黒松で葉が固く、雌松は赤松で柔らかい。

注連飾り　今は既製品を買ってくる家が多くなったが、昔は家の主人が作るのものだった。12月25日頃からウラジロを北の山に取りに行った。作るのは30日頃で、作る際に手に唾を付けると作りやすいが、それはやってはいけないので水に手を濡らしながら作った。ウラジロとだいだいを付けた。大晦日に飾った。お宮（春日神社）には地区の人たちが休みである日曜日に飾った。注連飾りは戸や窓のあるところに全部付けたという家もあれば、門と玄関に付けていたという家もあった。玄関の注連飾りは太い注連縄を横に渡し、そこから一年の月の数に因んで12本の藁を垂らしたものを飾った。注連飾りは8日に外すという。

鏡餅　25日頃から、鏡餅用の餅米洗いを始める。餅は28日か30日に搗いた。29日は「9＝苦」が連想されるので避けられ、28日は「末広がりの八」で好まれたが、最近はこだわらなくなってきている。搗くのは力の強い主人の役目とした家が多い。手水は妻がした。飾り方は昆布とウラジロを敷き、その上に餅をのせて上にみかんを置く。出来た鏡餅のうち、一番大きいものを床の間に飾る。
神棚には氏神の春日神社の他、天照大神、稲荷、八幡、妙見、愛宕、城南宮などを祀っていており、それぞれに小餅を供えた。このほか、蔵、小屋、井戸などにも小餅を供える。また、多くの家庭で竈（ヘッツイさん）の神様である三宝荒神さんに3段の小餅を供える。ある家では以前独自に床の間に飾る鏡餅の前に家族の人数分の小さな鏡餅を供えた。多いときには17、8人家族がいたのでそれだけ飾った。このうち、女性の分は1段目か2段目かを憶えていないが少し長細い形にした。なぜ人数分の餅を飾るのか、女性の分は形を変えるのか、いつごろからやり始めたのかは分からないという。

大掃除　昔は竈があったので煤払いをする必要があった。煤を払うのに竹を切ってきて、その先に笹の枝を付けて箒のようにして煤を払った。その際、畳が汚れないように筵を敷いた。

大晦日の晩　除夜の鐘が鳴る前に年越しそばを食べた。昔はこれを食べると一つ年をとるとされた。他におせちの余りを食べた。ある家は麦御飯と鰯を食べた。鰯を食べると一つ年をとると言った。

（２）正月行事

若水　元日の早朝に家の井戸から若い男性や家の主人が若水を汲んで神さんに供えたり、一番水として雑煮炊きに使ったり、書き初めの墨を磨る際に使った。家によっては汲みに行く人は特に決まっておらず、当日早起きした人がこの役目を負った。女性が行くこともあった。汲む際の唱えごとについては聞かれなかった。

雑煮　元日から3日間作る家が多い。作った雑煮は家族が食べるほかに、神棚や仏壇に供える家もある。

元日に限り、家の主人が作るところがあった。このとき燃料には「まめになるように」という意味で豆殻の木を使った。男性が作るのは、豆殻の木は燃えやすくたくさんくべる必要があり、それだけ力を使うからだという。どこの家も元日はみそ味で丸餅を焼かずに入れる。昔は自家製味噌を使う家が多かった。7という数にこだわり、具は大根、クワイの芽、レンコン、小芋、牛蒡、人参、アゲの7種類を入れるという家もあれば、7つの内の数種類を入れるという家もあった。具は角が出来ないように丸く切って入れたり、ネギや魚のだしを「臭いもの」と言って入れないようにする。作るときは何事も「物事を大きく」ということで大きな鍋で炊いたりもする。

2日、3日は澄まし汁に水菜と焼いた丸餅で焼き雑煮にする家が多い。元日以外は雑煮を食べない家もある。

初詣　はじめに氏神の春日神社にお詣りに行く。神社では拝殿の前に火が焚かれ、昔は朝の4時か5時頃に行った。氏神のほかに清荒神や石切、八幡神社に行く人もいる。

昔は年が明けると、各家の主人が日頃懇意にしている家に新年の挨拶に回った。それが太平洋戦争前後の時期に簡略化され、初詣の時に春日神社でお参りに来た人どうしが挨拶するように変わっている。

お年玉　母親の里から下駄をもらったり、紙に包んで少しのお金をもらったりした。女の子は人形やぬり絵をもらった。

ハツシゴト　小野原ではオレイマイリといって、1月2日に家の主人が鍬を持って田へ行き、1枚ごとに稲株を3株起こして昨年の収穫を感謝した。同じ日に、境界の再確認のために山へ行き境界の目印となっている盛り土の上に1鍬分の芝をのせてくる。

正月七日　七草粥を食べるが、必ずしも7種類入っていたわけではない。今はしていない家が多い。なお、ある家では6日に風邪の予防に大根とアゲを米に炊き込んで食べた。

鏡開き　小野原では家ごとに日にちや、やり方が異なる。ある家では、鏡餅の大割りを2日に行い、小割りを4日に行う。別の家では一番大きな鏡餅を暇なときに割る。小さい餅は水餅にした。割った餅は「オカキ」にして子供のおやつにした。神社やお寺の鏡餅は切って氏子や檀家に配る。

トンド　トンドは15日の昼頃に行われる。以前はこの日に小豆粥を食べた。小野原のトンド場は少なくとも、2度の移転を経験していることが分かった。人々が憶えている中で最も遡られるトンド場は、地区の西のはずれにあった（地図トンド場1)。ここでトンドが行われていたのは明治の頃までで、実際にそれを見た人はいないが、ここが「トンド場」と呼ばれていたことを知る人はいる。
ここからトンド場は春日神社の一の鳥居横にあった宮田の近くに移動した（地図トンド場2)。昔は新入りの若中（小学校5、6年生の男児で長男）がリヤカーを引いて家の前に出してある正月飾りを集落内を東から西へ回収してまわった。トンド場では太い木を3本立てて円錐状にし、その周囲に竹や注連飾りを付けた櫓を作り火を付けた。櫓の頂には大きな鏡餅をのせておき、燃えて崩れ落ちてきた時に、みんなが競ってこの餅を取りに行った。この場所は昭和40年頃までトンド場だったが、その時分にはすでに櫓を組むことはなく、正月飾りは野焼きされていた。現在は宮池横の児童遊園でやっており（地図トンド場3)、正月飾りは各自がトンド当日に持ち寄って燃やすようになっている。

お日待ちさん　1月15日の夜に組ごとにお日さんの掛け軸を祀って朝まで酒を酌み交わして懇親をはかった。今は自治会館を会場とする場合もあるが、昔は個人の家を順番に使っていた。

ヤブイリ　1月16日はヤブイリと言って嫁に行っている娘たちが帰ってきた。2、3日泊まっていった。帰ってくるときは嫁ぎ先からお土産を持たされる。嫁ぎ先へ帰るときは来たときより立派なものを持っていかせるように気を使った。また、オトコシ、オナゴシなどの奉公人にも暇を与えて里へ帰していた。なお、奉公に出したり、引き受けるのは専ら小野原村内で行われることが多かった。

（３）春から夏の行事

節分　2月3日をトシコシと呼ぶ。大豆を焙烙に入れて豆の枝の箸で混ぜながら、豆の枝、葉、殻を燃やして煎った。男がすると決まっており、煎った豆は神棚に供え、豆まきをした。別の家では豆は撒く以外に神仏に半紙に包んで供え、それを後で家族が年の数だけ食べた。余った豆は黄粉にした。また、麦御飯や鰯を食べたり、魔よけのために門口に鰯の頭にヒイラギを刺したものを飾ることは多くの家でやっていた。

寒施行　15年くらい前まで2月最初の午の日に妙見講の講員が行っていた行事。お稲荷さんの使いが狐だと言うことから、狐の出てくる場所に藁を敷いて赤御飯の握り飯、細く切ったアゲを置いておく。狐が乗り移る（さがる）女性が小野原にいて、「さがった」状態で供える場所を指示してまわった。太鼓を叩いたりした。お供え物は食べると風邪を引かないと言われていたので取りに行った。この「さがる」女性がいなくなって、寒施行はなくなった。

節句（３月）　人形や掛け軸を飾った。掛け軸の雛飾りは紙や布で出来た人形が取り外せるようになっている。雛飾りは母方の実家から送られてくるのがしきたりとなってい

る。2月の中頃から飾り、3月4日には片づける。早く仕舞わないと嫁にいけないと言われた。雛祭りには、ちらし寿司、甘酒、菱餅などを食べた。

彼岸　彼岸入りの2、3日前に墓掃除がおこなわれる。蓬餅を食べる。お寺に昔はお米を1升くらい、今は3千円をお供えする。彼岸の最後の日を結縁と呼び、希望した家で一心講の行員がおつとめをする。

甘茶もらい　「お釈迦さんの誕生日」といって、その像に甘茶を注ぐという習わしから、この日は檀那寺へ甘茶をもらいに行き、各家の仏様に供え、家の者も頂いた。

メンギョ　4月8日に上畑（ジョウバタケ）と呼ばれる南の小高い丘へ家族で出かけた。上畑には桃の木が植えてあり、このころは桃の花がきれいだった。重箱に卵、生節、蒲鉾、巻き寿司などを詰めて、茣蓙を持って行った。昭和の初期まで行っていた。なかには終戦後もやっている家もあった。他の家では南にある一本松と呼ばれる場所へ行っていた。

節句（５月）　今は鯉のぼりを立てる。昔は武将などの幟もあった。毒の雨が降ってきても屋根でしのぐことができるといって菖蒲、センダンの枝、蓬など匂いのある物を束ね、屋根へ放り上げた。この日は粽を食べた。また悪い病気にかからないといって菖蒲湯に入ったり、人の頭や田を鋤く牛の角にショウブを巻き付けた。

サナブリ　田植えが終わった頃、昔なら6月25日ごろに2日間、地区で決めた日に休養をとってごちそうを食べた。このとき稲を3把揃えて竈に供えた。

夏越の祓い　昔はしていなかった行事。6月末に春日神社で茅の輪くぐりがある。

ハゲショウ　7月初旬にハゲショウといって仕事を休んだ。この日は一番おいしい時期にあたるといわれる蛸を食べた。この時期の蛸をムギワラ蛸といった。

七夕　七夕飾りを飾るか飾らないかは家によってまちまちである。この日の前後に専門の仕事人が村に来て井戸さらいをしていった。

瀧安寺の護摩焚き　護摩焚きの後の灰は虫が付かないといって、竹の皮に包んで竹に刺して田の隅に刺しておく。

夏祭り　7月11日は春日神社の夏祭りがある。神社へお供えをしてお参りする。

（４）盆行事

施餓鬼　8月3日に理照寺、5日に正念寺で施餓鬼が行われる。組内（クミウチ）といわれる近隣の浄土宗寺院の僧侶が共同で順番に各地区の寺を回って行う。小野原ではこの一年間に亡くなった人をアラタナと呼び、施餓鬼ではこのアラタナを供養する。

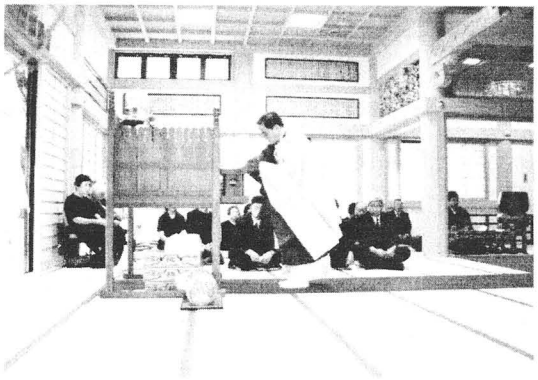


写真125　理照寺施餓鬼法要

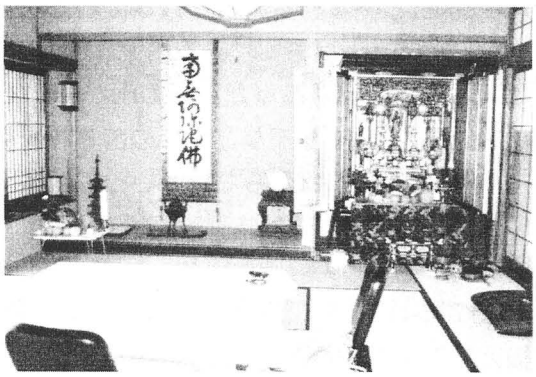


写真126　盆のお供え（左端が三界万霊）

先祖迎え　8日は朝から檀家の人たちが理照寺と正念寺へ盆の期間中に家でおまつりする薄い塔婆をもらいに来る。塔婆をもらいに来ることをお寺では「ソンジョさん迎え」と呼ぶ。塔婆には家の先祖代々のためのものと三界万霊をまつるもの、アラタナのいる家のために用意されたものの3種類がある。

墓掃除　8日のソンジョさん迎えの後に行う。竹を切って、お墓の花さしや線香立てを新しく作り替えた。このころに家の仏具の掃除をした。そのほかに毎月自治会が交代で墓掃除を行っている。昔は墓番がいて掃除などをしていた。

棚経（タナギョウ）　12日から14日にかけて僧侶が檀家の家々をお経を上げるために回る。この順番は8日の「ソンジョさん迎え」で寺に塔婆をもらいに行った際に告げられる。

供え物　各家では仏壇などにお供えを用意する。11日くらいから準備を始めるが、お供えするのは13日から14日の夜までである。供え物は先祖代々と三界万霊とアラタナのそれぞれに同じものを用意する。先祖代々は仏壇の前に台を置き、三界万霊は縁側や窓の近くなどの外に近いところに同じく台を置いて供える。アラタナは仏壇の横や床の間に他の2つとは若干異なる様式で供える。

供え物は蓮の葉を敷いた上にスイカ、桃、マクワ瓜、南瓜、ササゲ（十八豆）、ホオズキなどを置いた。昔は自分のところで採れた物をお供えしていた。昔はお供えする花は、みそ萩・女郎花（おみなえし）は欠かせなかった。そのほかに、鶏頭・虎の尾などもそなえた。お寺でもらって来た塔婆は茄子を半分に切ったものを土台にして、そこにオガラを刺し、その先端を縦に割いたところに挟むようにして付ける。昔は供え物に使う蓮の葉を循環器病センターの下にあった大きな蓮池から切ってきて、家々に配る人もいた。

お供えはこのほかに盆の期間中時間ごとに決まった供え物を用意することになっている。各家によって少しずつ異なるが一例を挙げた。

（例）
13日昼　落ち着きぜんざい、白菜（だしの入ったしょうゆのあえもの）、お茶。

＊昔は昼と夜のお供えの間に48回お水をお供えするのが良いとされていたという話もある。

晩　白ご飯、かぼちゃ、色麩、お茶。

夜　水を供える。

14日朝　なすと餅を入れた味噌汁。お茶。

昼　素麺、椎茸のつゆ、お茶。

3時頃　シンコ（5、6年前)、シンコは耳たぶくらいの柔らかさにする。今はういろうや羊羹を供える。

夜（6時頃）　ナスビのシンケ和え（茄子の味噌和え：茄子を湯がく。山椒の実をすりこぎですって、味噌を入れ、それを湯がいた茄子とあえる。)、白ご飯、お茶。

夜食（9時半頃）　赤飯、ずいきとゴボウの澄まし汁、お水。赤飯は明日からのホトケ様の旅立ちに際してお腹が空かぬようにという意味で供える。
＊そのほかにメイ（ヒジキのような海藻）を油揚げと炊いたものをお供えする。
（何時と決まってはいない。）

供え物のうち、食べられないものは15日の先祖送りのついでに箕川に流した。今は川が汚れるということで、小野原児童遊園においておくと町の収集車が取りに来る。箕川も昔は水がきれいで蛍がたくさん飛んでいたという。洗濯のすすぎもこの川でしていた。

新仏　小野原では一年以内に亡くなった人をアラタナと呼ぶ。アラタナの家には近所や親戚がお盆の期間、それぞれの家でアラタナをまつるために塔婆をもらいに来る。アラタナのまつり方は10年ほど前から簡略化されて、現在は他家のアラタナをまつる家はほとんどない。以前はアラタナの家では8日に、お寺で10枚から20枚ほどアラタナの塔婆をもらっておいた。他家のアラタナをまつる家々では自家の先祖や三界万霊と同じようにお供えを用意した。供え物を置く台には床からオガラで作った梯子をかける点が他のお供えの設えと異なる。実際には2、3軒、多いときには10軒分ほどのアラタナそれぞれにお供えを準備しなくてはいけなかったので盆の期間中はのんびりできなかったという。

先祖送り　昔はアラタナの家は、午前3時頃、その他の家でも4時頃からお墓に送っていった。今は、5時にサイレンが鳴るので、それを合図に送りに行く。

家でおまつりしていたアラタナの家のうち、一番「心安うしている家」のお墓には、提灯と経木、線香を供えに行った。他のアラタナのお墓には経木と線香を供えた。こうしたアラタナへのまつり方も簡素化して今は見られない。アラタナの家ではブリキの菓子箱のようなものに、砂を入れ、線香立てを作って墓においておく。

昔は、アラタナをまつった家がアラタナの家の墓に経木を供えた際には「本年はアラタナさんでオタイテヤ（大変で）ございまへん」と言い、それに対してアラタナの家の者は「よう、おまつりいただきましてごちそうさんでございました」とお礼を言った。

ヤブイリ　8月16日に行われる。内容は1月と変わらない。

盆踊り　戦前、戦後の一時期に御旅所の広場でやっていた。最近は福祉会が小学校のグランドで櫓を組んでやっている。

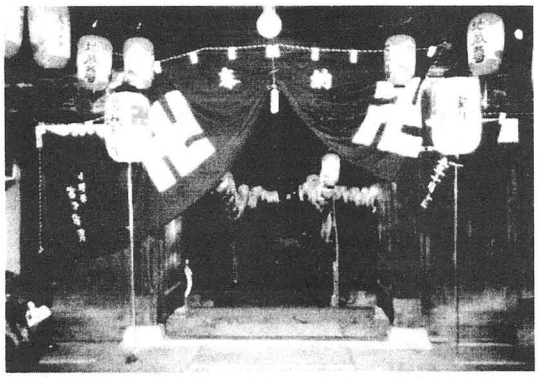


写真127　地蔵盆（理照寺境内）

地蔵盆　小野原にはお寺や道の辻や家の敷地内などにお地蔵さんがある。こうしたお地蔵さんを8月24日の地蔵盆ではおまつりする。地蔵盆は小野原地区として行うものと、お地蔵さんの守をする家で行うものとがある。地区としての地蔵盆は理照寺境内に設けられた屋形の中にまつられている子安地蔵をもとに行われる。子安地蔵は明治の終わりくらいに松出池の脇から移してきたもので、昭和55年に現在の覆いをつけて整備した。
準備は前日に地蔵講の世話方の人達がおこなう。この時に講員の氏名が書かれた札が用意される。これは自治会ごとに世話方が持ち帰り、講員の家に配る。講員は、この札を地蔵盆当日に持参することで抽選をおこなうことが出来る。また、境内には講員の家で子供が産まれた時に奉納された提灯が懸けられる。地蔵盆は子供達が主役の行事で、当日は午後7時頃から9時頃まで多くの子供達がお地蔵さんを訪れる。子供達は抽選をしたり、金魚すくいをしたりして楽しむ。またお坊さんが来てお経を唱える。
家としての地蔵盆の中には、家の井戸から見つかったお地蔵さんをおまつりする家もあった。この家の戦前の地蔵盆では、子供たち30人ほどが長さ約10メートルの大きな数珠を持って輪になり、その輪の中央では正念寺の住職が念仏を唱えた。子供達はそれに従って数珠を回し「南無阿弥陀仏」を唱和して数珠くりをした。その後に地蔵を守している家で、大きな釜で炊いた豆ご飯を子供たちに分けて食べてもらった。昭和7、8年頃からは、そのあと子供たちに童話を話して聞かせたりもしていた。
現在では地蔵盆当日に家の主人が地蔵尊とお寺へお供えをし、おまつりする形となっている。別の家の地蔵盆では親戚、近所が地蔵盆当日にお供え物をする。このお供え物は翌日に近所に配る。新興住宅地の地蔵盆にもたくさんの子供達が訪れる。同じ日に春日神社の愛宕社では「愛宕さん」がある。

マンドロ　近隣の村でやっていたマンドロも小野原では行われていなかったという。昔は他の地区で行われていたマンドロを見ていた人もいた。

（５）秋から冬の行事

相撲　昔は8月から9月にかけて地区の強い人が春日神社で行った。土俵は青年会が作った。優勝すると御幣を頂いた。

八朔相撲　9月1日に能勢の妙見さんでは、相撲の強い人達が集まって相撲をとった。

月見　新暦の9月15日にお月見をした。この夜は団子、里芋、萩、ススキなどを月に供えた。この日を芋名月と呼ぶ家もあった。子供達は長い槍でお供えを突いて取ろうとした。家では取られないように縁側に置かずに奥に引っ込めていた。

彼岸　春の彼岸と同じ。一心講のオツトメが行われる。

十夜　今でも10月10日の夜に、お寺で先祖の供養をする。そこでは甘酒も振る舞われる。また、おもしろい説教をするお坊さんに来てもらって楽しい時間を過ごす。

秋祭り　春日神社の秋祭りは例年、10月17日頃に御輿と太鼓が出て盛大に行われる。昔は宵宮で日雇い仲間により、神社の参道や村の中を太鼓がうまく運行できるように予行演習が行われた。当日は「日の出の太鼓」といって日の出と共に太鼓が出た。まず新家との境まで行き、それから御旅所まで行き神社へ戻る。神社では御輿に神移しが行われる。その後に行われる祭りの行列では警護役、天狗、神楽、太鼓などの後に御輿がついていく。御旅所に御輿を置いておき、午前中に太鼓が村中を3回ほど往復する。昔は午後から今の茨木市との境の道祖元あたりまで太鼓が行っていた。宮入の時に御輿が一緒に神社へ向かう。太鼓は8人乗りの大きなもので、若中（約130人）に新たに加入した子供達が叩いた。若中には実際に祭を取り仕切る十人衆（重任）と、さらに上に名誉職的な五人衆がいた。祭りの前には今はなくなってしまった、お宮の鐘楼の横の大きな木を叩いて稽古をした。本番では太鼓がストンと急降下したりするが、そういった時に8人の調子を合わせるのが苦労する。

今は、太鼓にタイヤが取り付けられていて移動しやすくなった。祭りの時には家で飼っていた鶏をつぶしてすき焼きをした。これが一番のごちそうだった。他に生節も食べた。祭りの翌日は神社や村内の提灯の片づけをしたりして祭りの余韻を楽み休養した。

亥の子　11月の最初の亥の日にやった。この日には、小学生の男の子が日頃よく遊んでいる位の仲間で一つの自治会ほどの範囲の家を回る。その年一年間に婚礼のおめでたのあった家の門で、「亥の子、亥の子、亥の子の晩に重箱ひろて、開けてみれば、ジュウベイさんの金玉、一つ祝いましょ」と歌い、終わったら藁鉄砲で地面を叩く。このとき、家の人は「ごくろうさん」の声だけのところが多かったが、中にはおやつをくれる家もあった。藁鉄砲は親が前もって作ってくれていた見本を元に、子供達が各家で作る。よい音がするように中に竹を入れた。藁鉄砲は終われば各自で適当に処分した。こたつは亥の子の前日の戌の日に入れる。これを「入れ初め」という。こたつの燃料の炭団（たどん）は唐臼で踏んで、それに糊を混ぜてぼた餅のようにして筵の上で干して作った。

刈り納め　10月半ばの稲刈りが終わった頃に、納屋で箕に稲刈り鎌をきれいに洗って箕の中に入れたものにお供えをした。

秋休み　稲の籾すりも終わった12月11日頃、村中で2日間の秋休みがある。このとき土

臼の上に箕を置いたものを納屋に置き、赤飯を炊いて供えた。

誓文払い　12月になると茨木で誓文払いの大売り出しがあったので出掛けた。普段から買い物に行く時は茨木まで足を運んだ。

冬至　冬至には昔から特に何もしないという家も少なくはない。風邪を引かないということでカボチャを食べたり、温まるのでこの日には柚湯に入るという家もある。

3．その他の民俗

（1）講

写真128　一心講結願のお勤め

一心講　小野原全体で約170軒の講員を有し、毎年4月頃に長岡京市の楊谷寺に講参りをする。春と秋の彼岸には希望した講員宅でお勤めをする。各彼岸の最終日を結願といって、当日のお勤めの家と期間中におつとめに回った家、さらに小野原に42人いる戦没者の供養のためのおつとめをする。また、ほかに希望する家の供養もおこなう。
調査に訪れた秋の彼岸の結願では、約150件の供養をした。おつとめは百万遍念仏、数珠くり、ご詠歌と進み、その後に「オコズイさん」という柳谷観音に世話方が汲みにいった井戸の水が振る舞われる。この水は眼病に効くとされ、もらった水をみな目に付けたり飲んだりする。このあと特別回向がおこなわれておつとめを終える。お勤めは終始、導師と呼ばれる人が先導する形で進む。いまの導師はお勤めの中の唱和や鉦を打つ調子などすべてを暗記しており、その記憶力と技は大変なものである。

愛宕講　昔は2つの自治会で1つの愛宕講を組織し、全部で4つの愛宕講があった。4月22日に2人か4人で京都の愛宕神社にお参りに行った。講の掛け金で用意した軸を懸けて拝んで飲み食いした。講で所有する田があったが、農地解放でなくなった。戦後に4つの講が1つにまとまり、春日神社の拝殿右側にある社をおまつりするようになっている。8月24日に、この社で愛宕講の行事がある。準備は自治会が順番に行うので、8年に1回当番が回ってくる。

地蔵講　毎年8月24日の地蔵盆全般を取り仕切る講。講員は小野原全体で160軒あまり。自治会ごとに2名の世話方がおり、8月23日に理照寺境内の子安地蔵で地蔵盆の準備をする。講の活動は地蔵盆以外にないということだが、普段から地区のあちこちにまつられている地蔵に水や花をお供えしている講員もいる。

稲荷講　戦前の一時期に大西にあるお稲荷さんを盛大に奉ってもらおうと稲荷講が作られた。2月の初午の頃にお稲荷さんにお供え物を供え、後日これを講員に配った。この時には「正一位稲荷大明神」と書かれた幟を立てた。

長悦講　妙見講とも呼ぶ。12月下旬に能勢の妙見山にのぼり、お札をもらってきてそれを配ってお金を集め、そのお金を初穂料として妙見さんにお供えする。寒施行と大祈祷（オオギトウ）を行っていた。大祈祷は4月に決まった家で行われ、寒施行と同じく女性が祈祷を行った。この女性が祈祷をしなくなった後は行われなくなった。

荒神講　12月下旬に講員が勝尾寺にある荒神さんをお祭に行く。

（２）その他

市　大正末期くらいまで月に3回、ヒルミセ（昼店）と呼ばれる市が若宮の街道筋の家に出ていた。店が出るときはそれをふれ回る人がいた。呉服、食料品などを村外の人が売りに来ていた。店の出ていた場所の横では普段から散髪屋さんがあって、時々ここで活動映画の上映をやっていた。

芝居　大正末期ころまで五月になると西の端の田んぼで巡業の芝居があった。テントや小屋を作って舞台を据えていた。当時は大流行で、役者の幟が立って昼頃から東西屋が村中を口上して回った。満員御礼が続けば講演は延長された。

葬送　昔は人が死ぬと葬式は家でおこなった。葬式に関わる全般のことは、村の自治会の中にあるドウギョウ（同行）と呼ばれる互助組織と地下一家（ジゲイッケ）と呼ばれる小野原村の中の親戚連中によって行われた。葬式が終わると墓地まで焼きに行ったが、その際は決まった道を通ることになっていた。この道はハカミチと呼ばれ、正念寺から南にまっすぐ下っていき、児童公園から墓地へ向かう田んぼの中の一本道に合流するが、この一本道はむかしはもっと迂回してついていた。大正期に今の児童公園が小山になっていたが、その土を盛り土にして、村の人たちが現在のまっすぐな道に付け替えた。
墓までの葬列は座棺の棺桶をのせた輿から禅の綱と呼ばれる綱がでており、これを白装束の女性達が持って進んだ。鉦をならし、念仏を唱えながら進んでいった。途中の辻々に辻線香を焚いた。焼き場は戦後になって山田の火葬場を参考にして、名古屋から職人を呼んで作った。建て直す前の釈迦堂と合わせて当時で40万円かかった。

雨乞い　終戦頃までは、この時期に日照りが続くと地区内の各組より婦人が出て、茨木市北部の龍王山にある八大竜宮神社まで往復歩いて雨乞いにいった。また、吹田市との境界のあたりで小野原中の人が雑木の束を持ち寄って一斉に燃やした。

米の検査　村の各家より酒米として出す米を村内の各所に集めて検査を受けて1、2、3の等級及び等外の印が押された。酒米の種類は「畿内御町」、それより前は「都穂」であった。この辺りでは粟生間谷で良い酒米が採れた。伏見の酒屋がよく買いに来た。多いと

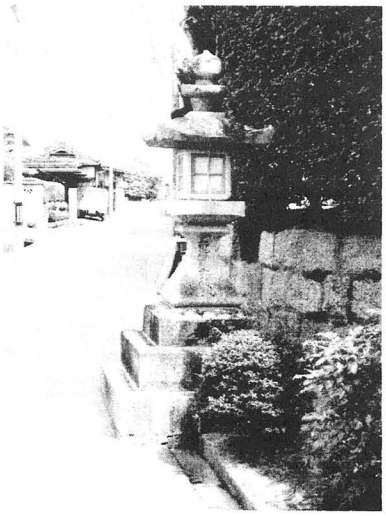


写真129　集落西部の常夜灯

きには75俵（30石）を出す家もあった。

常夜灯　集落を東西に通る西国街道の東西の端に、寛政八年（1796）の銘を持つ常夜灯が建つ。伝染病を村の中に入れないために建てられたといわれるもので、西にある常夜灯には「金毘羅大権現」、東のものには「大神宮」と彫られている。

楠水竜王　大東の御旅所の前にある。ここは、楠木正成が湊川の戦いに行く際に、ここの井戸の水を飲んでいったという伝承が残る場所で、今はその脇に小堂が建てられている。

第４章　箕面とバスとの出会い

現在箕面市内を縦横に走っているバスたちも、時代の変化に従いその姿を大きく変えてきました。そこで、時間を遡って箕面の原風景の中に昔日の姿を追ってみたい。

明治末期に各地で鉄道が開通し徐々にではあるが、経済・交通の流通経路に変革が見られるようになってきたが、「鉄路」に比べて「道路」の整備はかなり遅れ、明治期の「道路」構成は江戸末期とあまり変わらないものであった。

大阪では東京と比べて自動車の登録台数も少なく、物流経路においても鉄道輸送と荷車・馬力等による輸送が主流で自動車による輸送率が低く、さらに地方道を主管する大阪府の財政状況が逼迫しており、「道路」の新設より既設道路の維持補修が中心となっていた。しかし、大正１５年に産業基盤の整備のため「十大放射路線事業」が制定され、昭和初期の金融恐慌への政策として昭和４年に制定された失業対策事業も加味され、大阪市を中心とした「放射・環状道路網」の整備が進んでいった。

時代とともに　（その１）

「西国街道」は京都から山陽地方への幹線として古代から重要視され江戸期には街道として整備され、箕面においても「瀬川・半町」に大規模ではないが駅所と本陣が設置され賑わったものの、瀬川・半町さらに周辺の村は駅所の加役等の維持負担によって、村の財政を圧迫するに至っていた。明治になって駅所は廃止されたが、道路の新設は少なく道路の維持補修や橋の更新等が事業の中心であった。

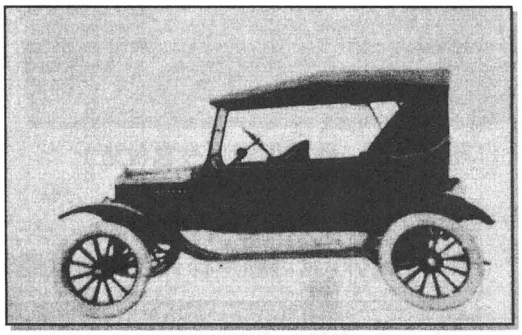


写真 130　黎明期に活躍したバス

明治 43 年に開通した「箕面有馬電気軌道・桜井―牧落間」は一部が「西国街道」と軌道併用線となっていたが、昭和４年頃に軌道線を南に移設し解消された。これを契機に箕

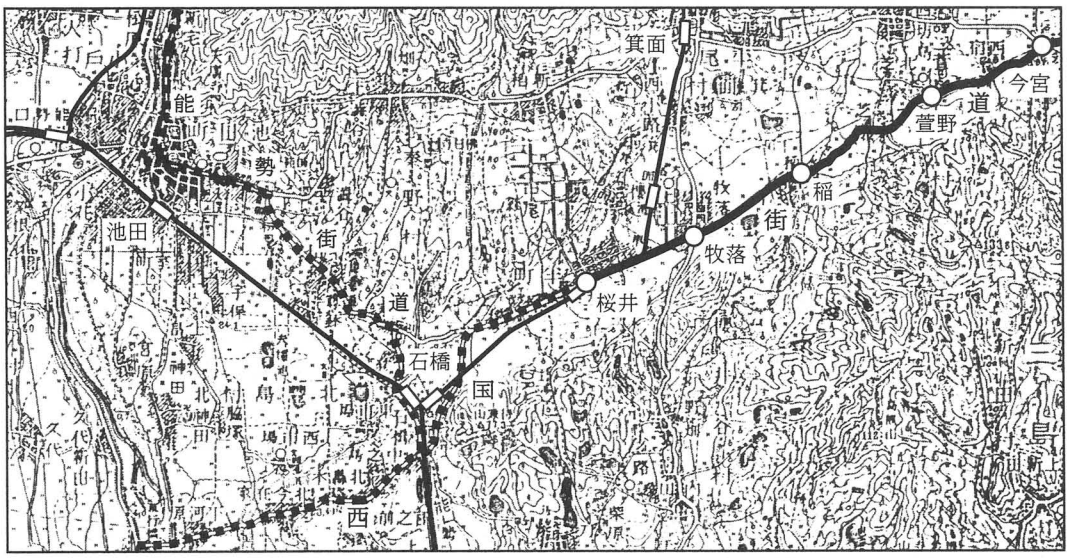


図 45　「北摂乗合自動車株式会社」の「桜井―高槻」間の路線図

面においても旧道の拡幅を中心とした道路整備が行われるようになっていった。昭和６年には旧道に平行して「府道高槻―伊丹線（産業道路　現在の 171 号線）」が箕面でも着工されたが、大阪府の財政悪化により瀬川までの開通にとどまった。その後、昭和 10 年に茨木まで開通し、昭和 12 年に高槻まで全線が開通した。

「北摂乗合自動車株式会社」

「西国街道」を初めてバスが走ったのは、大正１５年４月に「北摂乗合自動車株式会社」が、「箕面有馬電気軌道」の桜井駅前から国鉄高槻前間の営業免許を取得し開業したが、運行路線は幅員２間（3.6m）程度の旧道（西国街道）であり数箇所に待避所を設置しなければならなかった。高槻・茨木周辺と違い農村地帯といえる箕面においては営業成績が振るわず、大正１５年９月には「池田能勢妙見自動車株式会社」に営業免許を譲渡した。

写真 131　西国街道（今宮付近）

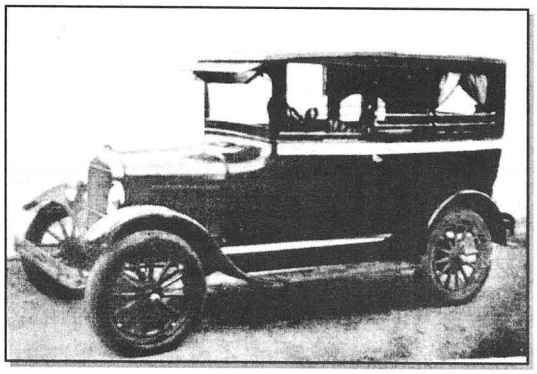


写真 132 当時のバス(1925 年式Ｔ型ﾌｫｰﾄﾞ)

「池田能勢妙見自動車株式会社」

「池田能勢妙見自動車株式会社」は路線引継ぎ時に、新車の６人乗り「フォード」２輌

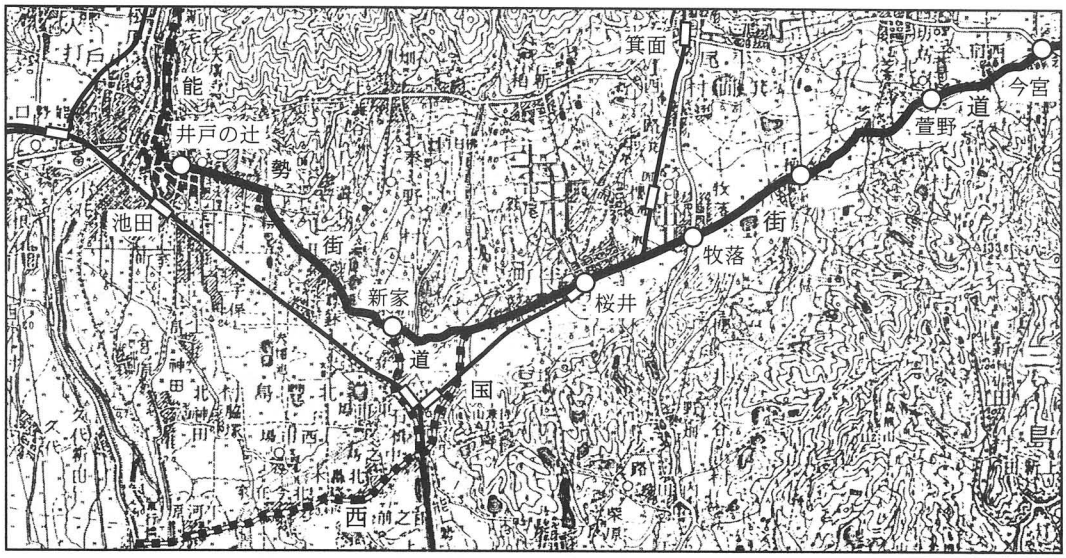


図 46　「池田能勢妙見自動車株式会社」の「井戸の辻―高槻」間の路線図

を投入し、運賃は全線３区で１区 10 銭であった。このころのバスは一日に３・４便程度で、同じ車両がバス営業の合間や夜間にはタクシーとして営業していたが、収益力においてはバス営業よりタクシー営業の収入のほうが多かったようである。さらに、昭和２年１月に桜井駅前より新家（井口堂）を経由して能勢街道を通って池田町井戸の辻（池田本町）に

至る路線延長免許を取得し、新車の６人乗り「フォード」１輌を投入した。しかし、利用者数の低迷から脱却できず。昭和２年３月に池田本町から国鉄高槻駅前の路線を「阪北自動車株式会社」に譲渡した。

「阪北自動車株式会社」

「阪北自動車株式会社」は路線引継ぎ時より３輌体制で運行し、池田南新町 2738 番に２輌収納の営業所と車庫を設置した。さらに、昭和２年５月には「フォード」８人乗りを２輌増車し輸送力を強化したが、８月に牧落踏切で電車との衝突事故を起こし事故処理と補償交渉が難航したためか、事業の縮小に追い込まれるに至った。この頃、「大阪―京都」間の路線工事が完了しつつあった「新京阪鉄道」（現在の阪急京都線）は鉄道路線の集客力の補完として「西国街道」沿線のバス会社の買収・再編成を進めており、昭和４年７月に「新京阪鉄道」の「池田―高槻」間における路線免許出願と同時に、「阪北自動車株式会社」は「新家―高槻」間を廃止し「池田本町―新家」間は休止として、路線を譲渡した。さらに

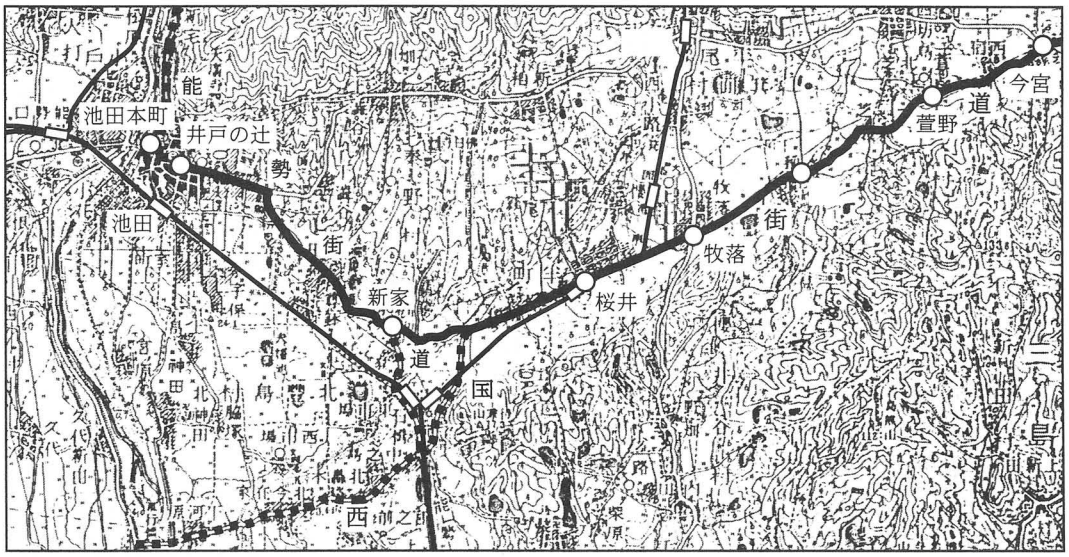


図 47　「阪北自動車株式会社」の「池田本町―高槻」間の路線図

写真 133　現在の井戸の辻(池田本町)

写真 134　新家バス停跡(井口堂)

「阪神急行電鉄株式会社」の系列下に入り、12 月に既設路線の「新家―十三」を「池田本町―十三」に変更し、昭和５年２月に池田本町から阪急池田駅まで路線を延長した。この後、昭和７年に同じ系列下の「阪神合同バス株式会社」に吸収合併された。この「池田―

十三」は現在にいたっても阪急バスの主力路線のひとつである。

時代とともに　（その２）

この時代に鉄道会社が鉄道線に並行するバス路線を買収・再編成を進めた理由は、道路上を単体で運行できるというバスの特性に着目し、駅間輸送・市内輸送の分野をバス事業が担当するとともに、開発された沿線住宅地から駅への輸送、工場地帯と駅との通勤輸送、観光地や寺社巡り等の遊覧輸送、さらに鉄道線に対する同業他社のバス路線競合を排除し、自社の鉄道事業を中心としての発展をめざすためには、中小バス会社の買収・再編成は地域内における寡占化を進めるために必要であったといえる。

「池田―高槻」沿線においても、箕面・萱野・小野原地域では明治末期までは人口もあまり増加しておらず、明治43年の「箕面有馬電気軌道」の開通を契機に、明治44年に桜井新住宅の開発が開始され、大正10年には「牧落駅」の設置とともに百楽荘が開発されるなど、箕面西部地域でようやく人口の増加がみられるようになった。しかし、これらの開発地は電鉄会社による大阪への乗客確保に主眼が置かれており、開発地は「駅」の至近距離圏内に限られていたため、あまりバス事業に対しては営業に直接寄与するものではなかったといえる。しかも、萱野・小野原地域においては「石橋駅」への駅間輸送効果が見込まれるが、利用客数は伸び悩んでいる。聞き取り調査においても、「石橋や箕面ぐらいは、高い運賃を払うより歩いていった」という話がでており、農村地区においては人的輸送より物流輸送のほうが重要であるため、バスの利用は低調であったと考えられる。箕面においては、高槻・茨木のように工場地帯もなく、開発住宅地も「駅」周辺でありバスによる輸送密度は低調なまま、開通から昭和初期まで推移した。この状況が改善に向かうのは、皮肉にも戦争が始まり、燃料事情が悪化していく昭和10年以降である。

バスの運賃と物価推移

	全線運賃	公務員給与(平均)	ビール(大)	銭湯(大人)	かけそば
大正６年		２０円８３銭	３１銭	４銭	４銭
大正15年(桜井―高槻)	１６銭	２４円５６銭	３９銭	６銭	６銭
昭和２年(池田―高槻)	３０銭	３０円２４銭	３５銭	６銭	６銭
昭和６年(池田―高槻)	７０銭	３５円４５銭	３５銭	４銭	１０銭

「能勢街道・府道池田―大阪線」(旧産業道路　現在の１７６号線)

大正１５年に制定された「十大放射路線事業」により制定されたが、昭和４年に制定された失業対策事業も加味されて、昭和６年頃に改良事業が行われ、軌道併用線が解消された。昭和７年頃から産業道路網整備にともない旧道に平行して新道が着工され、昭和１０年に池田まで開通し、昭和１１年からバス運行が開始された。

「西国街道・府道池田―高槻線」(旧産業道路　現在の１７１号線)

産業道路網整備にともない昭和６年に旧道に平行して新道が着工され、昭和１０年に茨木まで開通し、昭和１２年に高槻まで開通した。伊丹―高槻線とも別称される。

「府道箕面―豊中線」(現在の府道４３号豊中―亀岡線)

箕面を起点として、牧落で「西国街道」と交差し、野畑を経由し豊中に至る。産業道路網整備にともない昭和４年に旧道に平行して新道が着工され、昭和６年に開通した。箕面から牧落と稲の間を通過し、野畑で旧道と交差して柴原を経由して豊中に至る。

「新京阪鉄道」（その１）

写真 135　昭和 10 年頃の女子車掌

「新京阪鉄道」は昭和４年７月に「阪北自動車株式会社」から「池田―高槻」間の路線を承継したが、昭和５年９月にバス事業を「京阪自動車運輸株式会社」に譲渡し、昭和６年４月に同社は「京阪自動車株式会社」と合併し路線も承継された。「池田―高槻」間の路線は「新京阪鉄道」に引き継がれたときに、大幅に増便され午前６時から午後９時まで１時間毎に運行され、料金は「池田―高槻」間で１区 10 銭・全線７区 70 銭と事実上の値上げとなった。昭和６年の「満州事変」以降、国内の景気も回復の兆しを見せ始め、各路線で乗客数も増加し、昭和９年に「池田―枚方(延長線を含む)」間の料金を１キロ 4.344 銭から 3.44 銭に、区間変更を１区 10 銭から５銭と大幅に値下げをした。

この時代は、親会社である「京阪電気鉄道株式会社」とともに「京阪自動車株式会社」は最も充実した時期を迎えるにいたった。しかし、この好景気も持続せず、中国大陸での戦況が悪化し始めた昭和 13 年頃から経営も燃料事情も徐々に悪化し、昭和 16 年９月には「池田―桜井」間が「阪神急行電鉄株式会社」宝塚線と平行しているため、路線統合によって休止となった。昭和 18 年 10 月に政府による統廃合計画により、親会社である「京阪電気鉄道株式会社」と「新京阪鉄道」が「阪神急行電鉄株式会社」と合併し「京阪神急行電鉄株式会社」となったのに従い、「阪神合同バス」(現阪急バス)と相互に調整しつつ、運行回数の削減・路線の変更や縮小が相次いで実施され、一部資料が不明で確認できないが、昭和 19 年７月から終戦まで断続的に全線運休せざるを得なくなったようである。

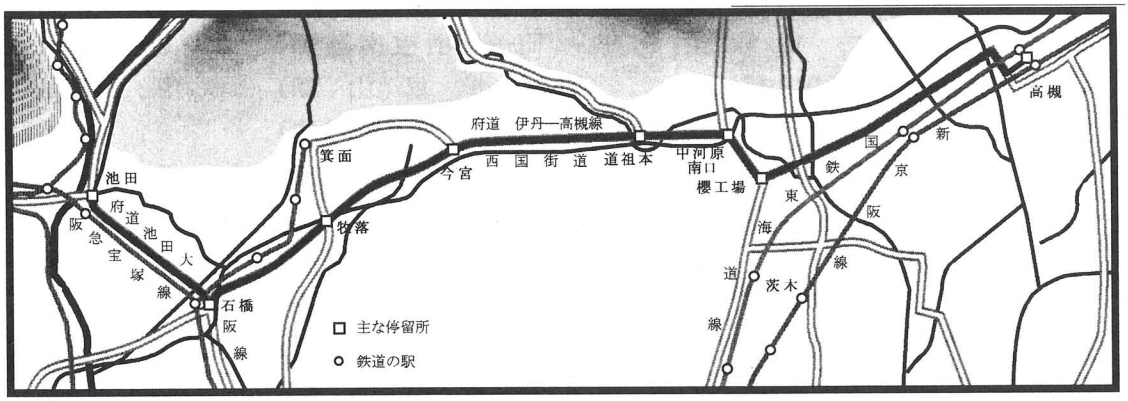


図 48　「阪北自動車」からの譲渡路線(昭和 12 年頃)

時代とともに　（その３）

戦争の長期化にともない燃料事情も悪化し始め、昭和 14 年より木炭・薪・石炭を中心とした代用燃料によるバス運行が政府より全国のバス会社に通達され、急速に代燃車への転換が進められた。しかし、代燃車はガソリン車にくらべて出力不足・維持管理の手間・運転の熟練化等の問題を抱えており、会社や従業員にとってありがたいものではなかった。昭和 15 年頃から乗車率の低い路線や観光路線が順次休止されて、「国家総動員」体制により軍需工場等を中心とした通勤輸送に切り替えられ、日々、軍需工場へのピストン輸送に従事せざるを得なくなったのである。このような困難な状況下においても、各企業や従業員は職務に全力をつくし、昭和 20 年８月 15 日においてもバスは走りつづけていたのである。

写真 136　当時の代燃車

「新京阪鉄道」（その２）

終戦後、すぐに「池田―高槻」間も運行が再開されたものの、昭和 21 年５月には燃料供給の悪化から再び運休となり、燃料供給が好転し始めた昭和 22 年に入ってから営業が再開されたようである。しかし、「池田―石橋」間は再開されず、「石橋―茨木」間で運行されている。昭和 23 年 12 月には、車両の増加と運行回数の増便が実施されており。ようやく復興に向けた兆しが伺えるが、やがて「石橋―茨木」線に大きな転機が訪れることになる。

戦時中の国策によって設立された「京阪神急行電鉄株式会社」から旧京阪電鉄ブロックは、昭和 24 年 12 月１日に京阪・大津線をもって「京阪電鉄株式会社」として再発足したため、新京阪線(現阪急京都線)は「京阪神急行電鉄株式会社」に残された。電鉄系バス路線は軌道線と密接な補完関係にあるため、新京阪線の残留にともない、淀川右岸における営業路線を「阪急バス株式会社」に譲渡することとなり、両社間に於いて昭和 25 年７月 31 日に路線譲渡に関する契約が締結され、昭和 26 年６月１日をもって、「阪急バス株式会社」に譲渡された。

《　譲渡された淀川右岸の路線　》

1	産業国道線	(上　新　庄―小　畑　橋　間)	２５．９ｋｍ
		(柴　島　町―長柄橋南詰間)	２．５ｋｍ
2	吹田千里山線	(市　　場―千　里　山　間)	９．０ｋｍ
		(国鉄吹田駅前―片　山　間)	０．７ｋｍ
3	富田日赤線	(日　赤　前―阪急富田駅間)	３．５ｋｍ
4	石橋枚方線	(石　　橋―桜　工　場　間)	１１．９ｋｍ
		(中　穂　積―茨木車庫前間)	４．２ｋｍ
5	茨木車作線	(三和銀行前―峠　　間)	１４．３ｋｍ
6	茨木余野線	(中河原南口―余　野　間)	１６．４ｋｍ
		(泉　　原―忍　頂　寺　間)	２．０ｋｍ
	以上　昭和25年７月現在に営業中の路線		計　９０．４ｋｍ
7	桂山崎線	(　桂　―大　山　崎　間)	１１．２ｋｍ

8	豊津榎木橋線（豊　　津―榎　木　橋　間）	３．４ｋｍ
9	山崎柳谷線（大　　山　　崎―東　大　寺　間）	０．９ｋｍ
10	向町柳谷線（神足―長岡―開田―西陣町間）	０．５ｋｍ
	（西　　向　　町―柳　　谷　　間）	４．５ｋｍ
11	向町西山線（寺　　戸―大原野神社前間）	４．９ｋｍ
12	長柄唐崎線（柴　　島　　町―唐　　崎　　間）	１４．１ｋｍ
13	高槻枚方線（京　　町　　角―国鉄高槻駅間）	０．１ｋｍ
	以上　昭和25年7月現在に休止中の路線　　計	３９．６ｋｍ
	譲渡路線の合計	１３０．０ｋｍ

※ 譲渡路線の路線名・営業区間名等は「京阪バス５０年史」より転載した。なお「阪急バス３０年史」に記載されている譲渡路線名・営業区間・停留所名と合致しない部分があるが、譲渡路線の合計距離は同じである。

「阪急バス株式会社」

昭和26年6月1日をもって、淀川右岸における営業路線を「京阪自動車株式会社」から譲渡されたことにより、「石橋―茨木」線も運行が阪急側に引き継がれた。この路線譲渡により「阪急バス」の運行距離は約40%増となり、戦後の復興とともに拡大していく基礎となった。

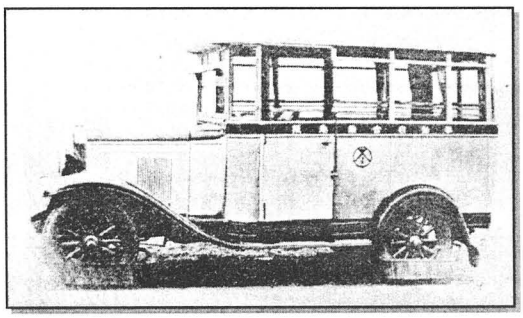


写真 137　戦前の阪急バス

昭和27年8月に「石橋―牧落」間が、復興政策の一環として実施された道路舗装により、通行止めの間は旧街道（西国街道）にて運行された。この頃から、沿線の宅地化が進むにつれて、昭和28年7月に「西宿」停留所が設置され、昭和29年12月に「牧落東」停留所が設置された(現在の「稲」？)。昭和31年6月には「萱野小学校前」停留所が設置されるなど、まだ緩慢な増加ではあるが人口の増加とともに乗車客数も増加している。さらに、高度経済成長期に入ると人口の増加率は急速に上昇し、沿線各地で地方自治体主導の中規模な(人口2000人程度)、集合団地の建設が始まり、本格的な通勤客輸送時代の幕開けとなった。「石橋―茨木」線も、増車・増便が繰り返され大量輸送に対応するべく、拡充がなされていく。

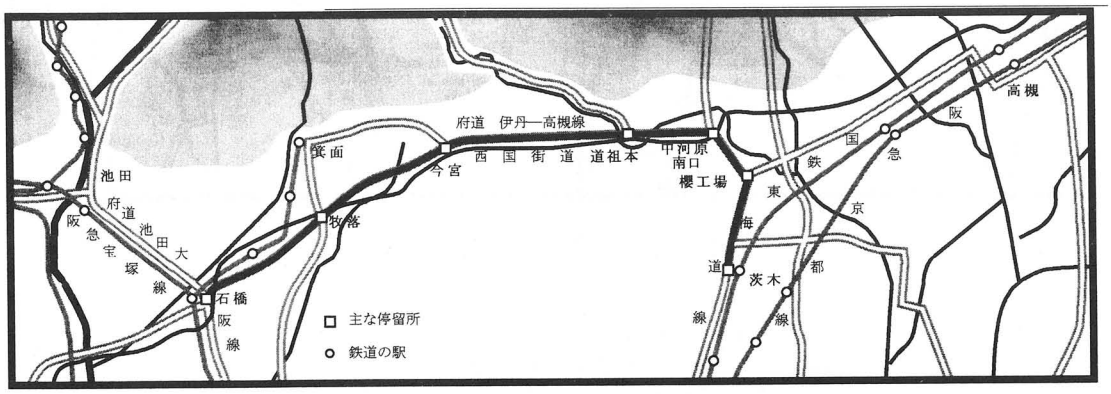


図 49　「阪急バス」に譲渡時の「石橋―茨木」線(昭和26年6月)

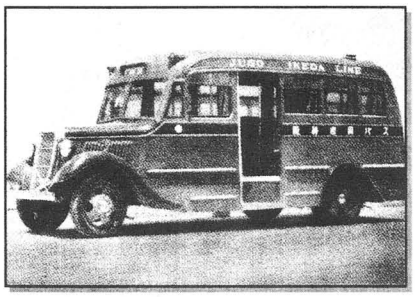


写真 138　昭和 15 年頃のバス

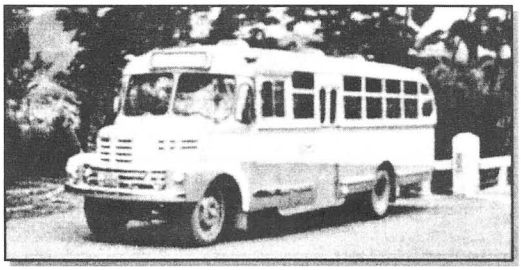


写真 139　昭和 20 頃のバス

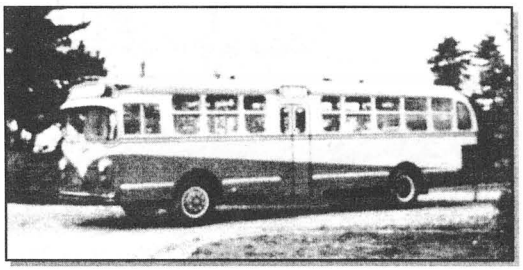


写真 140　昭和 30 年頃のバス

昭和 45 年の「万国博覧会」以降、住宅地の大規模開発が開始され、人口は急速に増加し、住宅地と鉄道駅を結ぶ通勤・通学客を中心とした人的輸送は、もはや増便程度で対処できる状態ではなく、宅地開発時より開発者側との連携によって新規の路線を設定するなどの抜本的な、運輸形態の再構築に踏み込まざるを得ない時代でもあった。これらの沿線に点在する大規模住宅地の出現によって、路線網の整備が急がれ単機能な線的構成から巡回構成などの面的複合線による、運行路線構造に進化していくことになる。

箕面においても昭和 31 年に市制が施行され、昭和 48 年頃より「石橋―茨木」線の周辺でも大規模な住宅開発が始まった。西部地域は電鉄線に沿って開発が戦前から行われており、西部に対して比較的に田園などが遅くまで残っていた東部に開発が集中して進んだ。主なものとしては如意谷・粟生間谷・間谷等が電鉄系企業や日本住宅公団によって建設された。これらの住宅地と鉄道駅を結ぶ路線は、「石橋―茨木」線を一部利用するものの、千里中央・北千里の駅と結ばれている。このように、昭和 50 年代以降において急速に宅地化が進んだことにともない、現在では「石橋―茨木」線を中心として、多くの複合線が設定されて地域全体と鉄道駅を面的に結び付けている。ここにおいて、昭和初期から始まった鉄道とバスによる補完関係と交通体系の複合化によってもたらされる効果が実証されたといえるのではないだろうか。

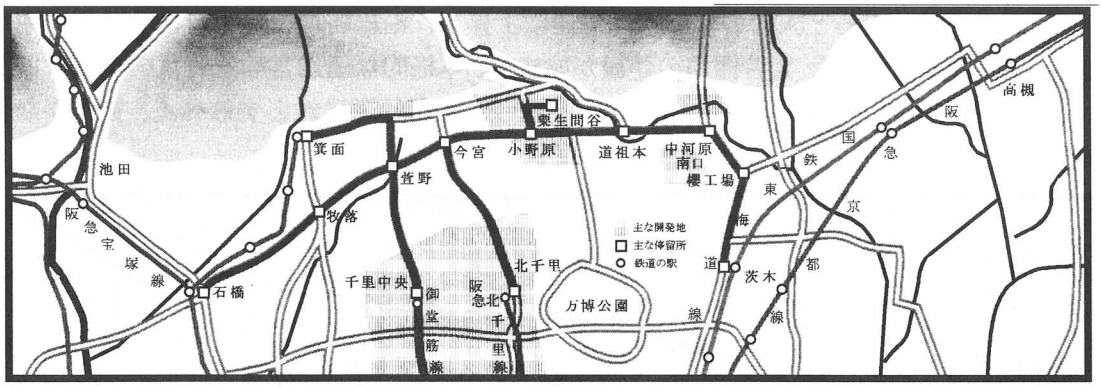


図 50　箕面周辺の主要路線

参考文献　「京阪バス 50 年史」「阪急バス 30 年史」「阪急バス 50 年史」「大阪府史」

写真 130/132/137/138/139/140 は「阪急バス３０年史」より転載

写真 135/136 は「京阪バス５０年史」より転載

第５章　参考資料

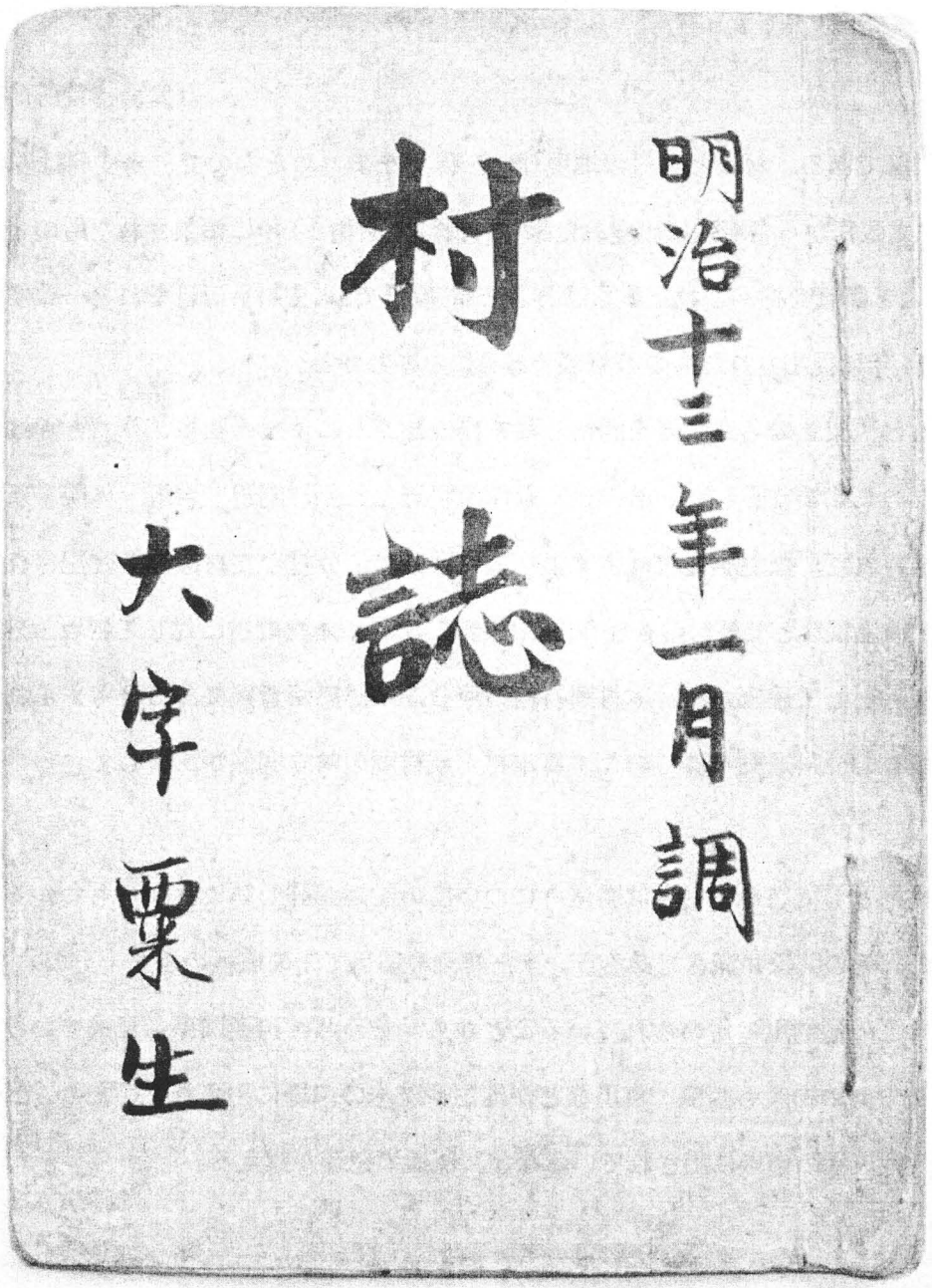
【粟生村誌】

（箕面市役所保管）

粟生村の村誌である。村誌とは村の地理・歴史・風土をまとめたもので、当史料は明治 8 年（1875）に太政官から各府県に出された指示を受けて明治 13 年に編集されたものと考えられる。そのとき調査を指示された項目はおよそ 50 項目で、当史料もほぼそれと一致する。巻末から翌 14 年に提出されたものの草稿であることがわかる。

これによると、粟生の名は原野を開拓し粟を作ったことにより「粟生ノ野」と呼ばれるようになったのが始まりらしい。その後、稲作の浸透とともに間谷・岩坂・外院・新家の四集落が形成された。なお粟生村は古くより一村限りで、分村や支村は無いと記されているが、絵図・検地帳などで枝村の存在が間谷内部に 3 村、本村間谷に対して岩坂・外院・新家なども枝村として確認され、本村間谷側の何らかの思惑が背景にあると考えられる。恐らくは岩坂村の分村運動をはじめとする本村・枝村間の対立関係が影響しているのではなかろうか。

粟生村の性格として特筆すべきは勝尾寺についての記述が詳しいことからもわかるように古くからの両者の関係が深さであろう。また産業の項目で米の収穫のうち十分の六も灘、伊丹、大阪などの清酒用に用いられていることから、そうした流通関係も見逃すわけにはいかない。その他の物産も西瓜・真瓜などが池田や茨木の市場に出されていたり、ビワなどの果物が大阪天満の市場に出されているなど、流通の発達が窺える。

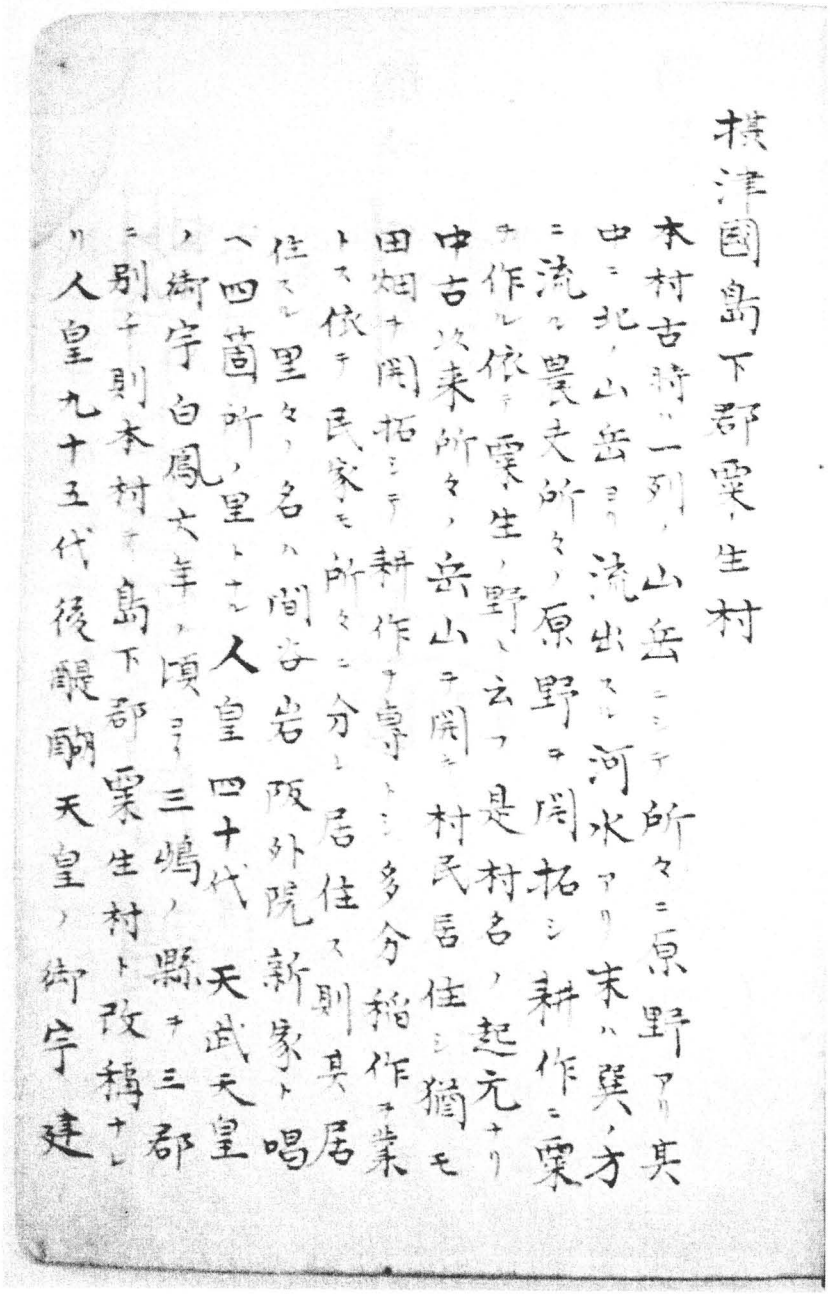

明治十三年一月調
村誌
大字粟生

（二）

明治十三年一月調

村誌

大字粟生



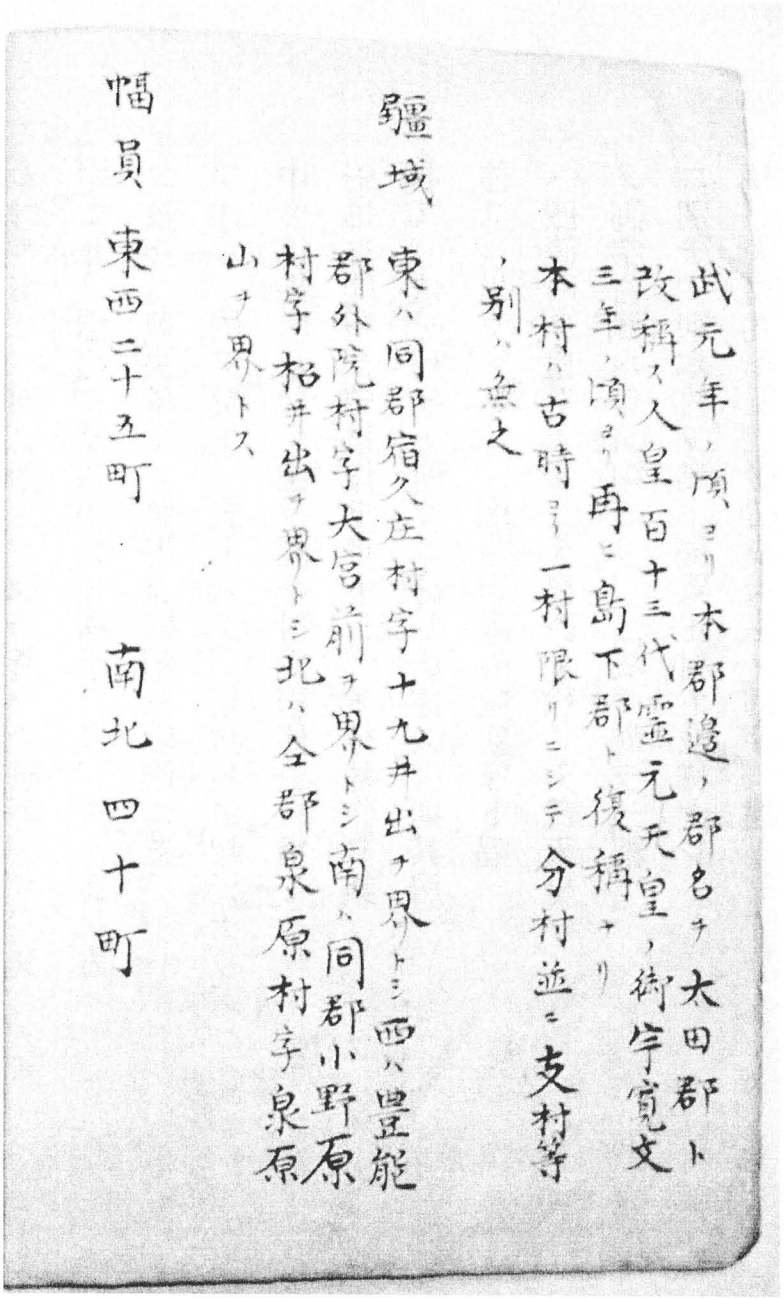
摂津國島下郡粟生村

本村古時ハ一列ノ山岳ニシテ所々ニ原野アリ其
中ニ北ノ山岳ヨリ流出スル河水アリ末ハ巽ノ方
ニ流ル農文所々ノ原野ヲ開拓シ耕作ニ粟
ヲ作ル依テ粟生ノ野ト云フ是村名ノ起元ナリ
中古以来所々ノ岳山ヲ開キ村民居住シ猶モ
田畑ヲ開拓シテ耕作ヲ稼トシ多分稲作ヲ業
トス依テ民家モ所々ニ分レ居住スル里々ノ名ハ間安岩阪外院新家ト唱
ヘ四箇村ノ里トナル人皇四十代天武天皇
ノ御宇白鳳丈年ノ頃ヨリ三嶋ノ縣ヲ三郡
ニ別ケ則本村ヲ島下郡粟生村ト改稱ナ
リ人皇九十五代後醍醐天皇ノ御宇建

（二）

摂津國島下郡粟生村

本村古事ハ一列ノ山岳ニシテ所々ニ原野アリ、其中ニ北ノ山岳ヨリ流出スル河水アリ、末ハ巽ノ方ニ流ル、農夫所々ノ原野ヲ開拓シ耕作ニ粟ヲ作ル、依テ粟生ノ野ト云フ、是村名ノ起元ナリ、中古以来所々ノ岳山ヲ開キ村民居住シ、猶モ田畑ヲ開拓シテ耕作ヲ専トシ、多分稲作ヲ業トス、依テ民家モ所々ニ分レ居住ス、則其居住スル里々ノ名ハ、間谷岩坂外院新家ト唱ヘ四箇所ノ里トナル、人皇四十代　天武天皇ノ御宇白鳳六年ノ頃ヨリ、三嶋ノ縣ヲ三郡ニ別チ、則本村ヲ島下郡粟生村ト改称ナレリ、人皇九十五代後醍醐天皇ノ御宇　建



武元年ノ頃ヨリ本郡邊ノ郡名ヲ大田郡ト改稱ス人皇百十三代靈元天皇ノ御宇寛文三年ノ頃ヨリ再ビ島下郡ト復稱セリ

本村ハ古時ヨリ一村限リニシテ分村並ニ支村等ノ別ハ無之

疆域

東ハ同郡宿久庄村字十九井出ヲ界トシ西ハ豊能郡外院村字大宮前ヲ界トシ南ハ同郡小野原村字柏井出ヲ界トシ北ハ全郡泉原村字泉原山ヲ界トス

幅員　東西二十五町　南北四十町

武元年ノ頃ヨリ本郡邊ノ郡名ヲ大田郡ト
改称ス、人皇百十三代霊元天皇ノ御宇寛文
三年ノ頃ヨリ再ヒ島下郡ト復称ナリ、
本村ハ古時ヨリ一村限リニシテ、分村並ニ支村等
ノ別ハ無之、

疆域

東ハ同郡宿久庄村字十九井出ヲ界トシ、西ハ豊能
郡外院村字大宮前ヲ界トシ、南ハ同郡小野原
村字椹井出ヲ界トシ、北ハ仝郡泉原村字泉原
山ヲ界トス、

幅員

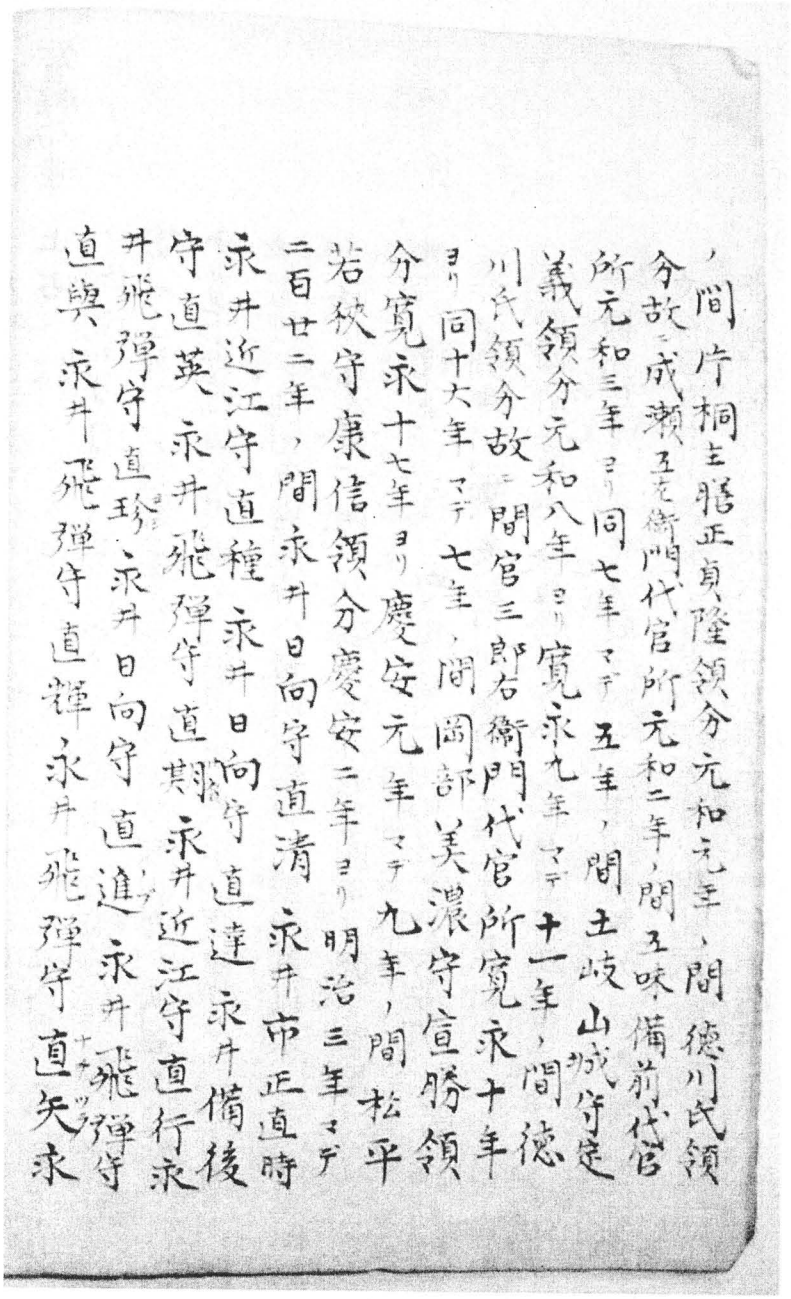
東西二十五町　　南北四十町

管轄沿革

上古ハ詳ナラス中古人皇四十代天武天皇ノ御宇白鳳六年ノ頃ヨリ郡縣ノ政トナリ摂津職ヲ置カル人皇五十代桓武天皇ノ御宇延暦十二年三月摂津職ヲ罷テ國司ヲ置カル人皇五十六代清和天皇ノ御宇貞觀十六年ノ頃ヨリ本村ノ地租ヲ勝尾寺ヘ寄附シ給フ依テ其後来ヨリ近古天正四年ノ頃マテ凡七百四年ノ間勝尾寺ノ領分ト成ル天正五年ヨリ仝十二年マテ八年ノ間中川瀬兵衛尉清秀領分天正十三年ノ間中川修理大夫秀成領分天正十四年ヨリ文祿元年マテ七年ノ間安威五左衛門尉領分文祿弐年ヨリ慶長五年迄マテ八年ノ間川尻肥前守領分慶長六年ヨリ同十九年マテ十四年

管轄沿革

上古ハ詳ナラズ中古人皇四十代　天武天皇ノ御宇白鳳六年ノ頃ヨリ郡縣ノ政トナリ摂津職ヲ置カル、人皇五十代桓武天皇ノ御宇延暦十二年三月摂津職ヲ罷ラレ國司ヲ置カル、人皇五十六代清和天皇ノ御宇貞観十六年ノ頃ヨリ本村ノ地租ヲ勝尾寺ヘ寄附シ給フ、依テ其以来ヨリ近古天正四年ノ頃マテ凡七百四年ノ間、勝尾寺ノ領分ト成ル、天正五年ヨリ仝十二年マデ八年ノ間中川瀬兵衛尉清秀領分、天正十三年ノ間中川修理大夫秀成領分、天正十四年ヨリ文禄元年マデ七年ノ間安威五左衛門尉領分文禄弐年ヨリ慶長五年迄マデ八年ノ間川尻肥前守領分、慶長六年ヨリ同十九年マデ十四年



、間片桐主膳正貞隆領分元和元年、間徳川氏領
分故ニ成瀬五左衛門代官所元和二年、間五味備前代官
所元和三年ヨリ同七年マデ五年、間土岐山城守定
義領分元和八年ヨリ寛永九年マデ十一年、間徳
川氏領分故ニ間宮三郎右衛門代官所寛永十年
ヨリ同十六年マデ七年、間岡部美濃守宣勝領
分寛永十七年ヨリ慶安元年マデ九年、間松平
若狭守康信領分慶安二年ヨリ明治三年マデ
二百廿二年、間永井日向守直清 永井市正直時
永井近江守直種 永井日向守直達 永井備後
守直英 永井飛弾守直期 永井近江守直行永
井飛弾守直珍 永井日向守直進 永井飛弾守
直與 永井飛弾守直禅 永井飛弾守直矢永

ノ間片桐主膳正貞隆領分、元和元年ノ間徳川氏領
分故ニ成瀬五左衛門代官所、元和二年ノ間五味備前代官
所、元和三年ヨリ同七年マデ五年ノ間土岐山城守定
義領分、元和八年ヨリ寛永九年マデ十一年ノ間徳
川氏領分故ニ間宮三郎右衛門代官所、寛永十年
ヨリ同十六年マデ七年ノ間岡部美濃守宣勝領
分、寛永十七年ヨリ慶安元年マデ九年ノ間松平
若狭守康信領分、慶安二年ヨリ明治三年マデ
二百廿二年ノ間、永井日向守直清、永井市正直時、
永井近江守直種、永井日向守直達、永井備後
守直英、永井飛騨守直期、永井近江守直行、永
井飛騨守直珍、永井日向守直進、永井飛騨守
直與、永井飛騨守直輝、永井飛騨守直矢、永

井日向守直諒ノ上十三代ノ間領分明治二年ヨリ高槻藩ト成ル（藩知事ハ永井直諒）明治四年八月ヨリ高槻縣管轄所明治五年ヨリ方今大阪府管轄

里程

府廳ヨリ北ノ方古村ヘ中央迄距離六里十二町　隣村宿久庄村元標ヘ十六町小野原元標ヘ十町泉原村元標ヘ五十町豊島郡外院村元標ヘ八町島下郡茨木村元標ヘ二里十八町

地勢

本村南北長ク東西狹シ半ハ高地半ハ平坦西ニ字郷ケ原山及ヒ鉾樂山ノ頂ヒ東ニ字廣田山ノ頂ヒ北ニ勝尾寺山及ヒ同郡高山泉原山佐保山ノ頂ヲ南ハ同郡小野原村ニ接ス

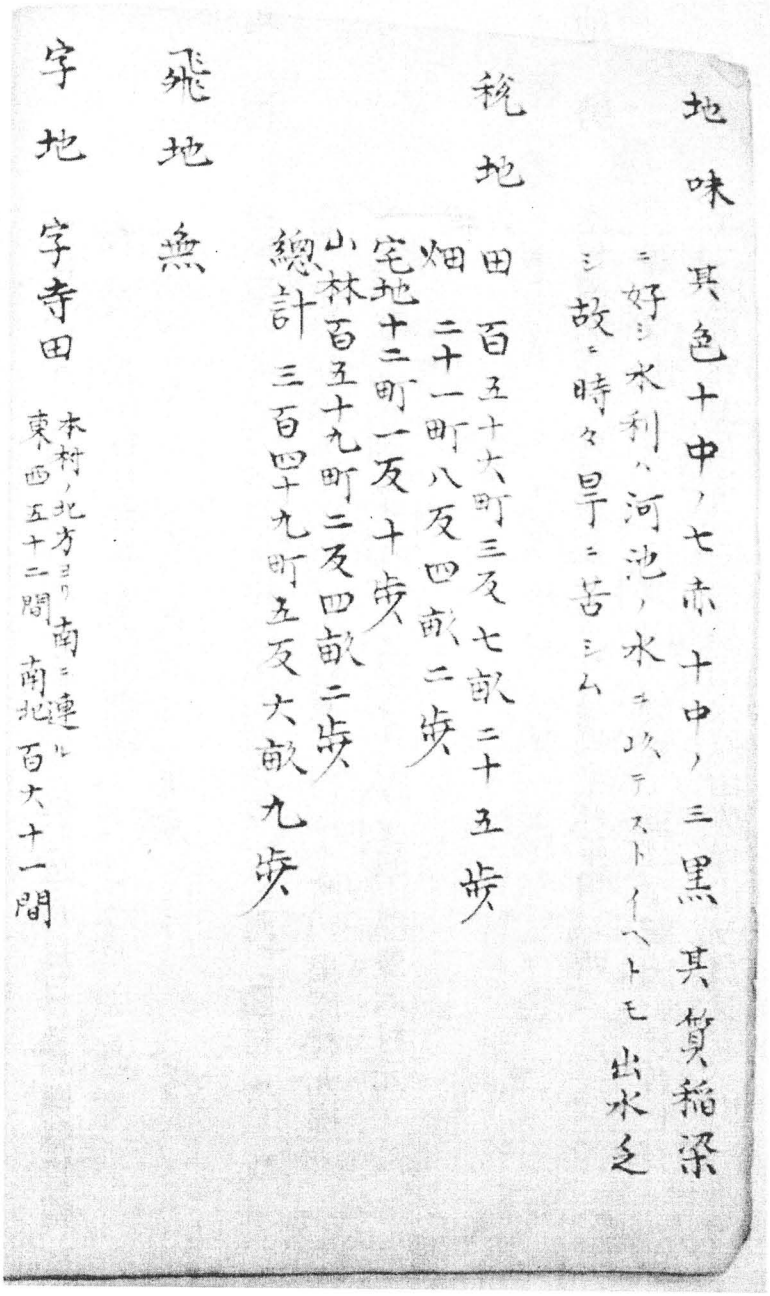
井日向守直諒、以上十三代ノ間領分、明治二年ヨリ高槻藩ト成ル、藩知事ハ永井直諒 明治四年八月ヨリ高槻縣管轄所、明治五年ヨリ方今大阪府管轄

里程

府廳ヨリ北ノ方本村ノ中央迄距離六里十二町 隣村宿久庄村元標へ十六町、小野原元標へ十町、泉原村元標へ五十町、豊島郡外院村元標へ八町、島下郡茨木村元標へ二里十八町

地勢

本村南北長ク東西狭シ、半ハ高抵半ハ平坦、西ニ字郷ヶ原山ニ及ヒ、銘樂山ヲ負ヒ、東ニ字廣田山ヲ負ヒ、北ニ勝尾寺山及ヒ、同郡高山泉原山佐保山ヲ負フ、南ハ同郡小野原村ニ接ス、



地味　其色十中ノ七赤十中ノ三黒　其質稲粱
ニ好シ水利ハ河池ノ水ニ以テストイヘトモ出水乏
シ故ニ時々旱ニ苦シム

税地　田　百五十六町三反七畝二十五歩
畑　二十一町八反四畝二歩
宅地十二町一反十歩
山林百五十九町二反四畝二歩
總計　三百四十九町五反六畝九歩

飛地　無

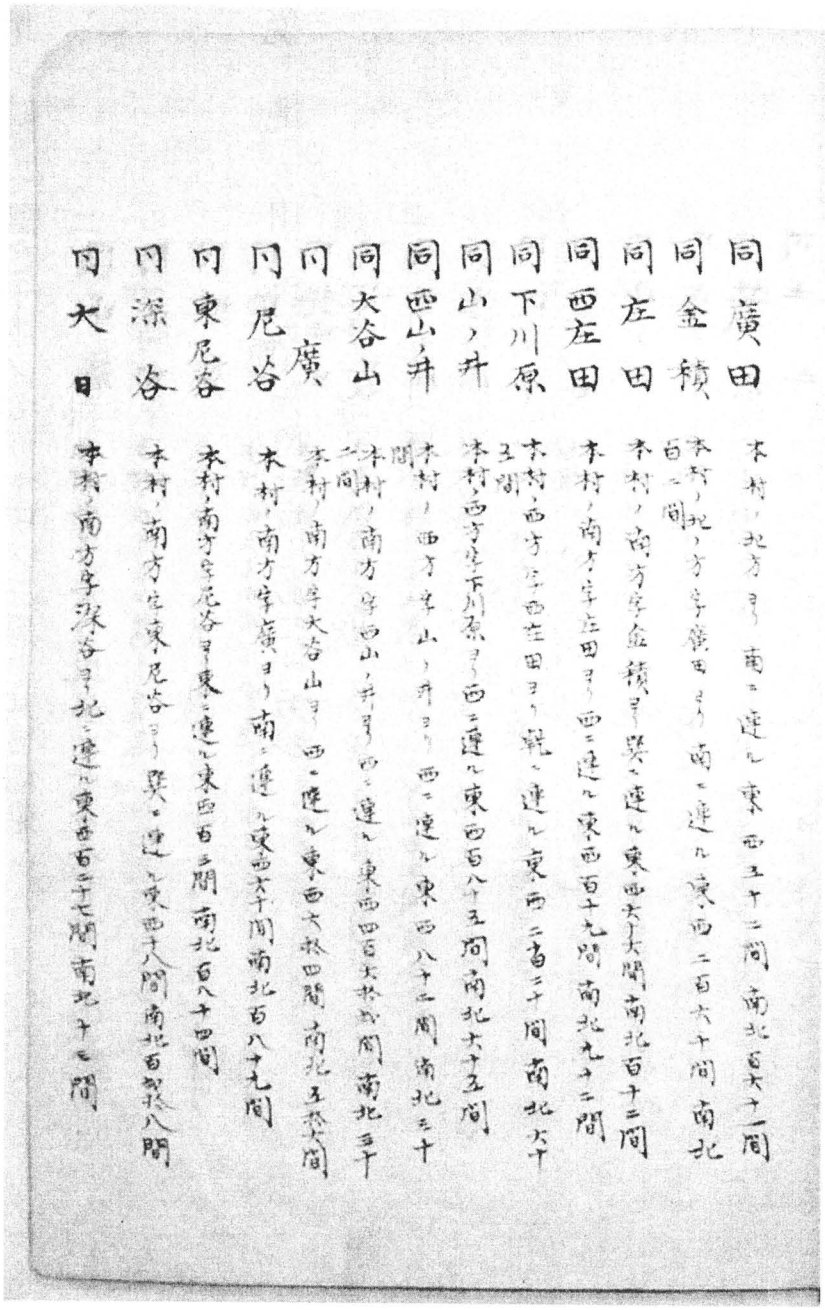
字地　字寺田　本村ノ北方ヨリ南ニ連ル
東西五十二間　南北百六十一間

地味　其色十中ノ七赤十中ノ三黒　其質稲染ニ好シ、水利ハ河池ノ水ヲ以テストイヘトモ、出水乏シ故ニ時々旱ニ苦シム

税地　田　百五十六町三反七畝二十五歩
畑　二十一町八反四畝二歩
宅地十二町一反十歩
山林百五十九町二反四畝二歩
総計三百四十九町五反六畝九歩

飛地　無

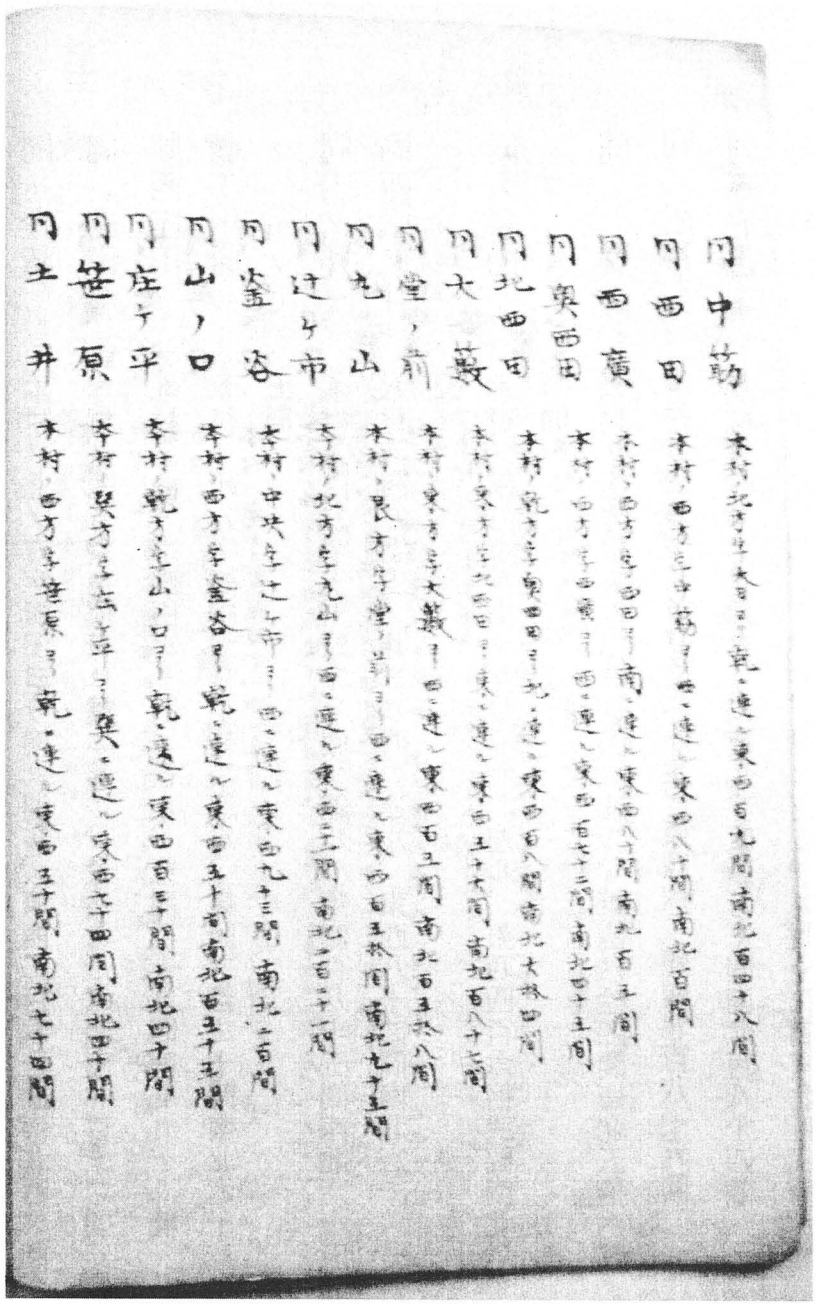
字地　字寺田　本村ノ北方ヨリ南ニ連ル
東西五十二間　南北百六十一間



同廣田　本村ノ北方ヨリ南ニ連ル東西五十二間、南北百六十一間
同金積　本村ノ北ノ方字廣田ヨリ南ニ連ル東西二百六十間、南北百二間
同左田　本村ノ南方字金積ヨリ東ニ連ル東西六十六間、南北百十二間
同西左田　本村ノ南方字左田ヨリ西ニ連ル東西百十九間、南北九十二間
同下川原　本村ノ西方字西左田ヨリ乾ニ連ル東西二百三十間、南北六十五間
同山ノ井　本村ノ西方字下川原ヨリ西ニ連ル東西百八十五間、南北六十五間
同西山ノ井　本村ノ西方字山ノ井ヨリ西ニ連ル東西八十二間、南北三十二間
同大谷山　本村ノ南方字西山ノ井ヨリ西ニ連ル東西四百六拾六間、南北三十二間
同廣尼谷　本村ノ南方字大谷山ヨリ西ニ連ル東西六拾四間、南北五拾六間
同東尼谷　本村ノ南方字廣ヨリ南ニ連ル東西六十間、南北百八十四間
同深谷　本村ノ南方字尼谷ヨリ東ニ連ル東西百二間、南北百八十九間
同大日　本村ノ南方字深谷ヨリ北ニ連ル東西百二十七間、南北十二間

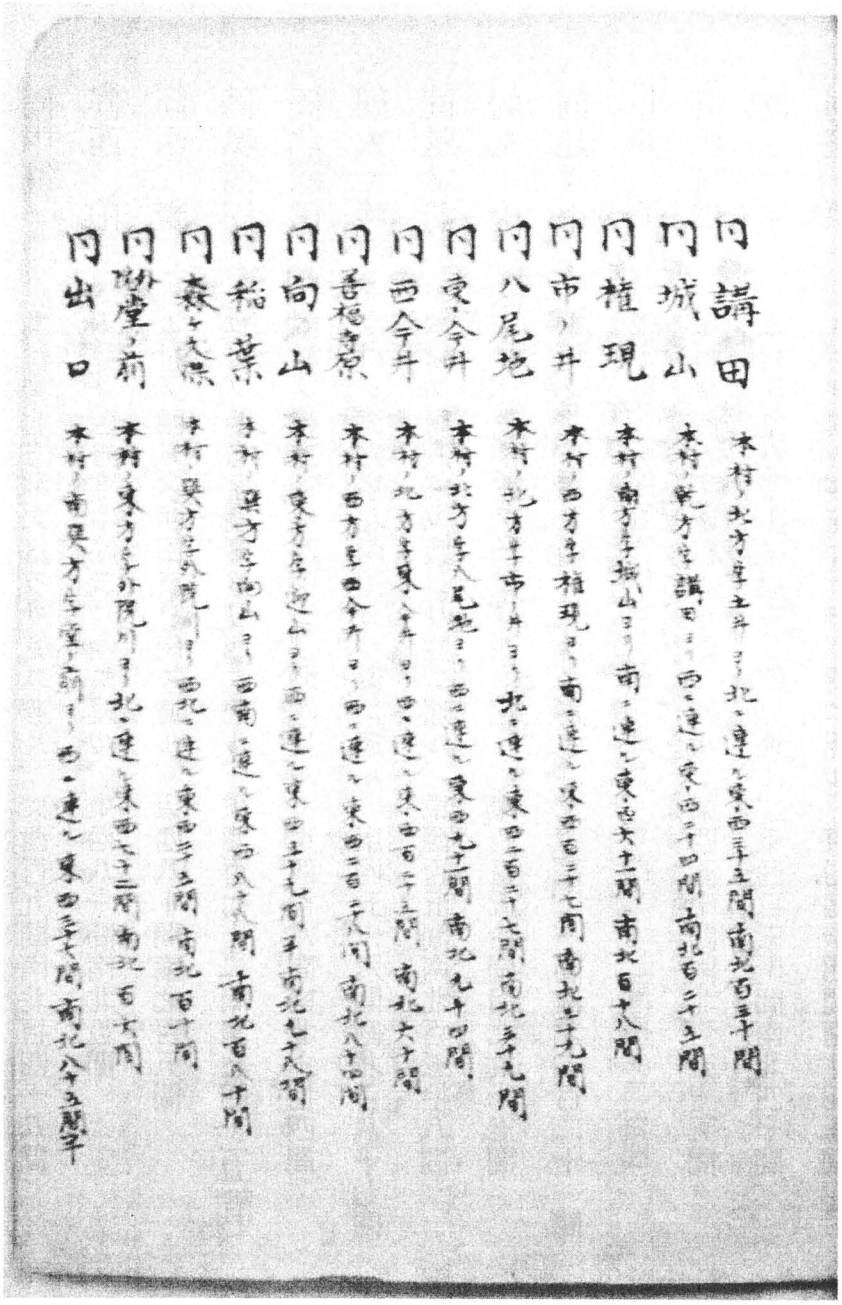
同　廣田　本村ノ北方ヨリ南ニ連ル、東西五十二間南北百六十一間
同　金積　本村ノ北ノ方字廣田ヨリ南ニ連ル、東西二百六十間南北百二間
同　庄田　本村ノ南方字金積ヨリ巽ニ連ル、東西六十六間南北百十二間
同西庄田　本村ノ南方字庄田ヨリ西ニ連ル、東西百十九間南北九十二間
同下川原　本村ノ西方字西庄田ヨリ乾ニ連ル、東西二百二十間南北六十五間
同山ノ井　本村ノ西方字下川原ヨリ西ニ連ル、東西百八十五間南北六十五間
同西山ノ井　本村ノ西方字山ノ井ヨリ西ニ連ル、東西八十二間南北三十間
同大谷山　本村ノ南方字西山ノ井ヨリ西ニ連ル、東西四百六拾弐間南北三十二間
同　廣　本村ノ南方字大谷山ヨリ西ニ連ル、東西六拾四間南北五拾六間
同　尼谷　本村ノ南方字廣ヨリ南ニ連ル、東西六十間南北百八十九間
同東尼谷　本村ノ南方字尼谷ヨリ東連ル、東西百三間南北百八十四間
同　深谷　本村ノ南方字東尼谷ヨリ巽ニ連ル、東西十八間南北百弐拾八間
同　大日　本村ノ南方字深谷ヨリ北ニ連ル、東西百二十七間南北十三間

（六）—①



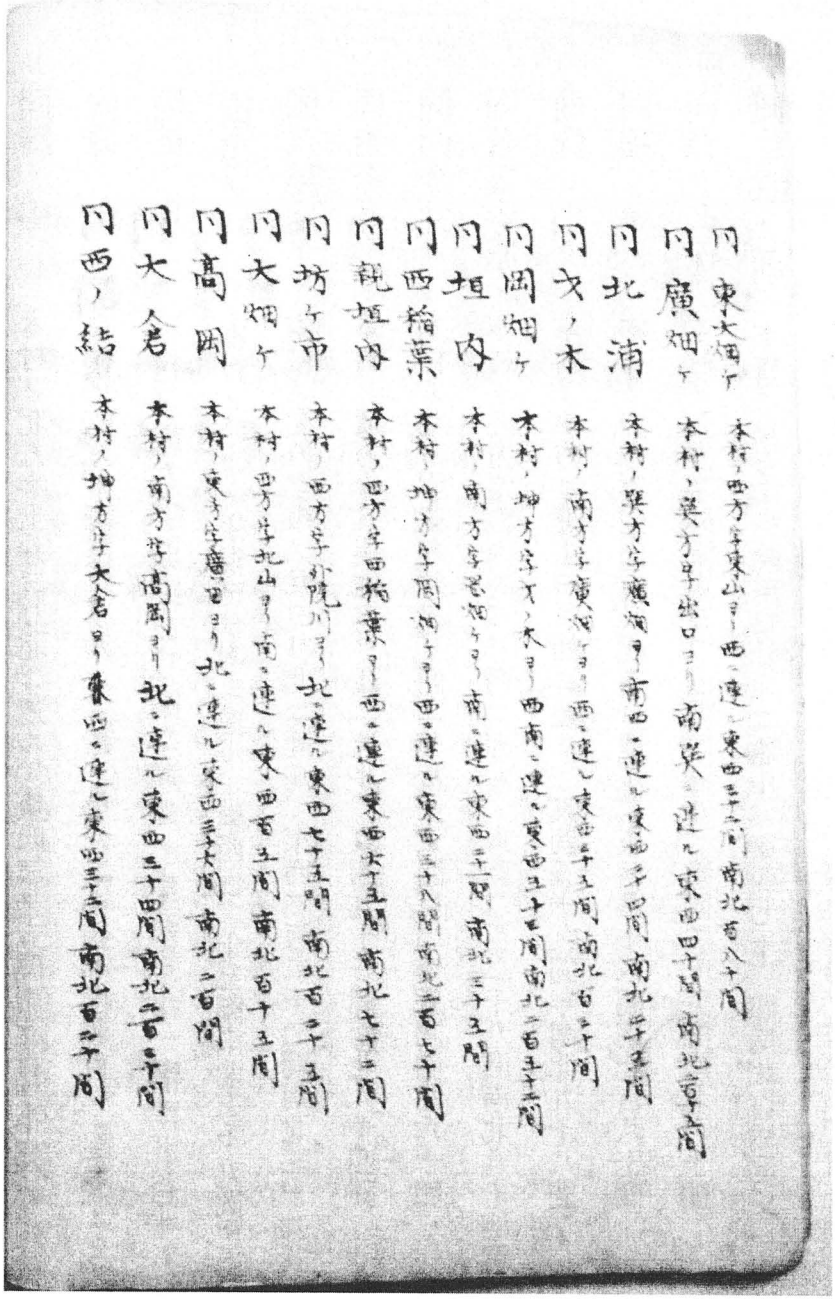
同中筋　本村北方字大日ヨリ乾ニ連ル東西百九間南北百四十八間
同西田　本村西方字中筋ヨリ西ニ連ル東西八十間南北百間
同西廣　本村西方字西田ヨリ南ニ連ル東西八十間南北百五間
同奥西田　本村西方字西廣ヨリ西ニ連ル東西百七十二間南北四十五間
同北西田　本村乾方字奥西田ヨリ北ニ連ル東西百八間南北大林四間
同大籔　本村東方字北西田ヨリ東ニ連ル東西五十六間南北百八十七間
同堂ノ前　本村東方字大籔ヨリ西ニ連ル東西百五間南北百五十八間
同丸山　本村艮方字堂ノ前ヨリ西ニ連ル東西百五十間南北九十五間
同辻ヶ市　本村北方字丸山ヨリ西ニ連ル東西二十一間南北二百二十一間
同釜谷　本村中央字辻ヶ市ヨリ西ニ連ル東西九十三間南北二百間
同山ノ口　本村西方字釜谷ヨリ乾ニ連ル東西五十間南北百五十五間
同庄ヶ平　本村乾方字山ノ口ヨリ乾ニ連ル東西百三十間南北四十間
同笹原　本村巽方字庄ヶ平ヨリ巽ニ連ル東西七十四間南北四十間
同土井　本村西方字笹原ヨリ乾ニ連ル東西五十間南北七十四間

同中筋　本村ノ北方字大日ヨリ乾ニ連ル、東西百九間南北百四十八間
同西　田　本村ノ西方字中筋ヨリ西ニ連ル、東西八十間南北百間
同西　廣　本村ノ西方字西田ヨリ南ニ連ル、東西八十間南北百五間
同奥西田　本村ノ西方字西廣ヨリ西ニ連ル、東西百七十二間南北四十五間
同北西田　本村ノ乾方字奥西田ヨリ北ニ連ル、東西百八間南北六拾四間
同大　藪　本村ノ東方字北西田ヨリ東ニ連ル、東西五十六間南北百八十七間
同堂ノ前　本村ノ東方字大藪ヨリ西ニ連ル、東西百五間南北百五拾八間
同丸　山　本村ノ艮字堂ノ前ヨリ西ニ連ル、東西百五拾間南北九十五間
同辻ヶ市　本村ノ北方字丸山ヨリ西ニ連ル、東西二十一間南北二百二十一間
同釜　谷　本村ノ中央字辻ヶ市ヨリ西ニ連ル、東西九十三間南北二百間
同山ノ口　本村ノ西方字釜谷ヨリ乾ニ連ル、東西五十間南北百五十五間
同庄ヶ平　本村ノ乾方字山ノ口ヨリ乾ニ連ル、東西百三十間南北四十間
同笹　原　本村ノ巽方字庄ヶ原ヨリ巽ニ連ル、東西七十四間南北四十間
同土　井　本村ノ西方字笹原ヨリ乾ニ連ル、東西五十間南北七十四間



同講　田　本村ノ北方字土井ヨリ北ニ連ル、東西三十五間南北百三十間
同城　山　本村ノ乾方字講田ヨリ西ニ連ル、東西二十四間南北百二十五間
同権　現　本村ノ南方字城山ヨリ南ニ連ル、東西六十一間南北百十八間
同市ノ井　本村ノ西方字権現ヨリ南ニ連ル、東西百二十七間南北三十九間
同八尾地　本村ノ北方字市ノ井ヨリ北ニ連ル、東西二百二十七間南北三十九間
同東今井　本村ノ北方字八尾地ヨリ西ニ連ル、東西九十一間南北九十四間
同西今井　本村ノ北方字東今井ヨリ西ニ連ル、東西百二十五間南北六十間
同善福寺原　本村ノ西方字西今井ヨリ西ニ連ル、東西二百二十八間南北八十四間
同向　山　本村ノ東方字迎山ヨリ西ニ連ル、東西五十九間半南北九十八間
同稲　葉　本村ノ巽方字向山ヨリ西南ニ連ル、東西八十八間南北百八十間
同森ヶ久保　本村ノ巽方字外院川ヨリ西北ニ連ル、東西二十五間南北百十間
同外院堂ノ前　本村ノ東方字外院川ヨリ北ニ連ル、東西七十二間南北百六間
同出　口　本村ノ南巽方字堂ノ前ヨリ西ニ連ル、東西三十六間南北八十五間半

（七）―①



同東大畑ケ　本村ノ西方字東山ヨリ西ニ連ル東西三十二間南北百八十間

同廣畑ケ　本村ノ巽方字出口ヨリ南巽ニ連ル東西四十間南北百十五間

同北浦　本村ノ巽方字廣畑ヨリ南西ニ連ル東西二十四間南北二十五間

同戈ノ木　本村ノ南方字廣畑ケヨリ西ニ連ル東西二十五間南北百二十間

同岡畑ケ　本村ノ坤方字戈ノ木ヨリ西南ニ連ル東西五十三間南北二百五十二間

同垣内　本村ノ南方字岡畑ケヨリ南ニ連ル東西二十一間南北三十五間

同西稲葉　本村ノ坤方字岡畑ケヨリ西ニ連ル東西三十八間南北二百七十間

同親垣内　本村ノ西方字西稲葉ヨリ西ニ連ル東西六十五間南北七十二間

同坊ケ市　本村ノ西方字外院川ヨリ北ニ連ル東西七十五間南北百二十五間

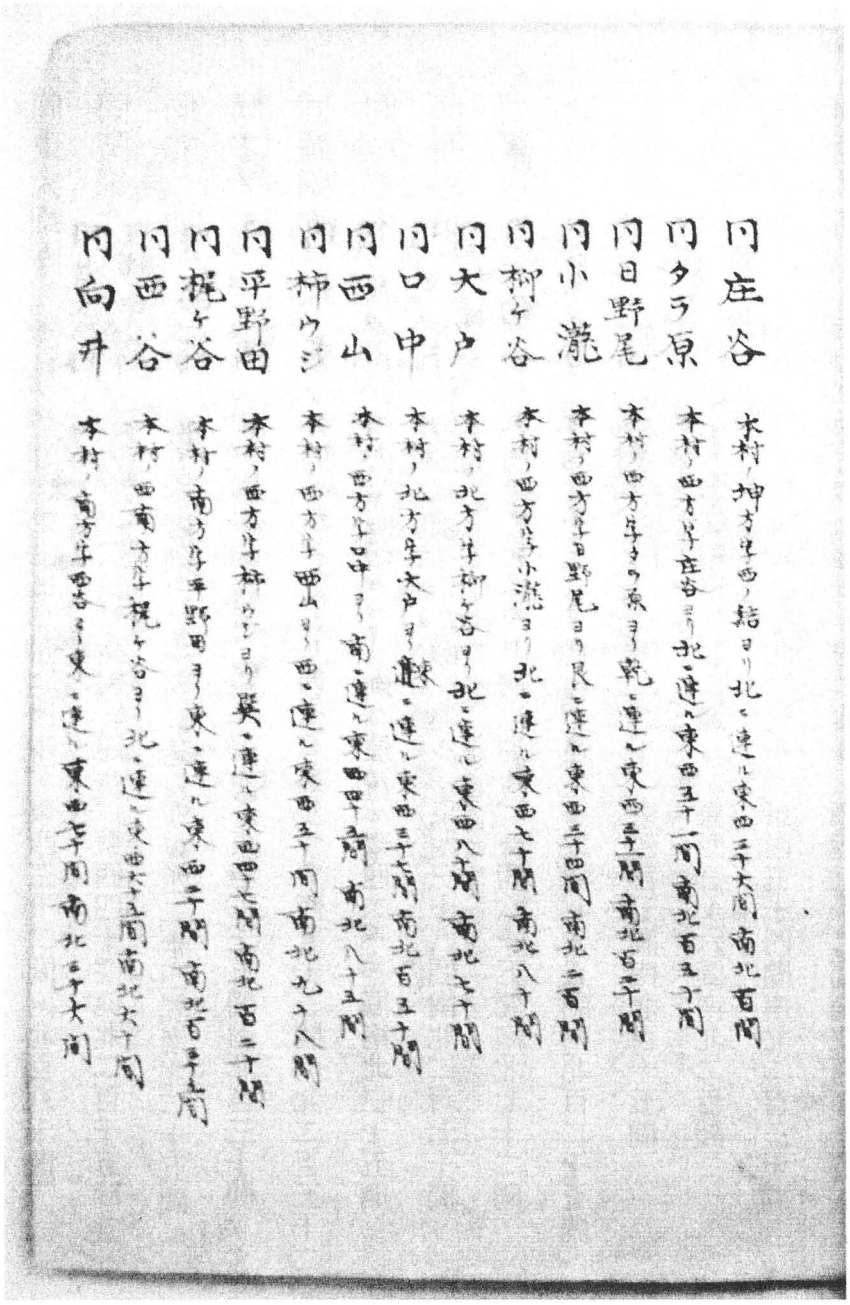
同大畑ケ　本村ノ西方字北山ヨリ南ニ連ル東西百五間南北百十五間

同高岡　本村ノ東方字廣田ヨリ北ニ連ル東西三十六間南北二百間

同大倉　本村ノ南方字高岡ヨリ北ニ連ル東西三十四間南北二百三十間

同西ノ結　本村ノ坤方字大倉ヨリ東西ニ連ル東西三十二間南北百二十間

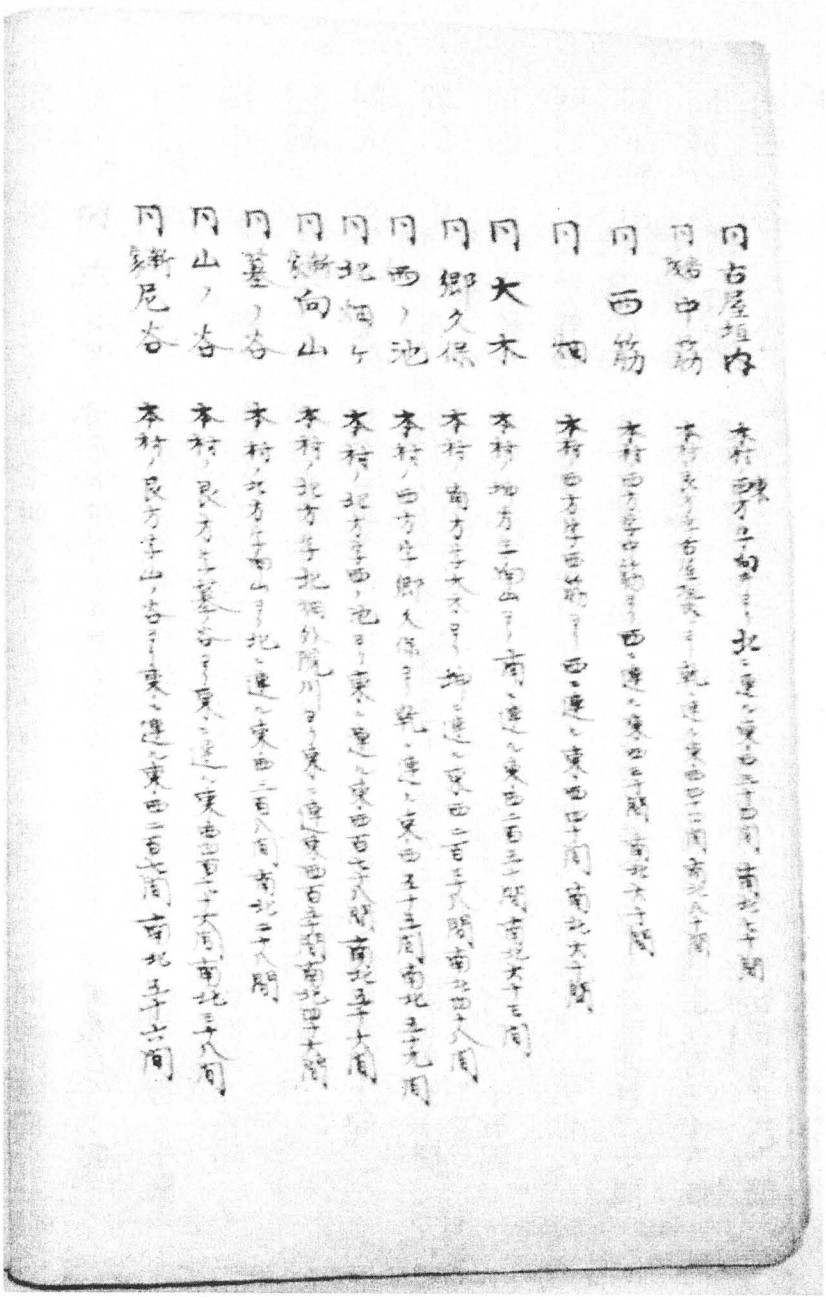
同東大畑ヶ	本村ノ西方字東山ヨリ西ニ連ル、東西三十二間南北百八十間
同廣畑ヶ	本村ノ巽方字出口ヨリ南巽ニ連ル、東西四十間南北二百十五間
同北　浦	本村ノ巽方字廣畑ヨリ南西ニ連ル、東西二十四間南北二十五間
同才ノ木	本村ノ南方字廣畑ヶヨリ西ニ連ル、東西三十五間南北百三十間
同岡畑ヶ	本村ノ坤方字才ノ木ヨリ西南ニ連ル、東西五十三間南北二百五十二間
同垣　内	本村ノ南方字岡畑ヶヨリ南ニ連ル、東西二十一間南北三十五間
同西稲葉	本村ノ坤方岡畑ヶヨリ西ニ連ル、東西三十八間南北二百七十間
同親垣内	本村ノ西方字西稲葉ヨリ西ニ連ル、東西六十五間南北七十二間
同坊ヶ市	本村ノ西方字外院川ヨリ北ニ連ル、東西七十五間南北百二十五間
同大畑ヶ	本村ノ西方字北山ヨリ南ニ連ル、東西百五間南北百十五間
同高　岡	本村ノ東方字廣田ヨリ北ニ連ル、東西三十六間南北二百間
同大　倉	本村ノ南方字高岡ヨリ北ニ連ル、東西三十四間南北二百三十間
同西ノ結	本村ノ坤方字大倉ヨリ西ニ連ル、東西三十二間南北百二十間



同庄谷　本村ノ坤方ヨリ西ノ結ヨリ北ニ連ル東西三十六間南北百間
同タラ原　本村ノ西方ヨリ庄谷ヨリ北ニ連ル東西五十一間南北百五十間
同日野尾　本村ノ西方ヨリ乾ニ連ル東西三十間南北百二十間
同小瀧　本村ノ西方ヨリ日野尾ヨリ艮ニ連ル東西二十四間南北二百間
同柳ケ谷　本村ノ西方ヨリ小瀧ヨリ北ニ連ル東西七十間南北八十間
同大戸　本村ノ北方ヨリ柳ケ谷ヨリ北ニ連ル東西八十間南北七十間
同口中　本村ノ北方ヨリ大戸ヨリ艮ニ連ル東西三十七間南北百五十間
同西山　本村ノ西方ヨリ口中ヨリ南ニ連ル東西四十三間南北八十五間
同柿ノ沢　本村ノ西方ヨリ西山ヨリ西ニ連ル東西五十間南北九十八間
同平野田　本村ノ西方ヨリ柿ノ沢ヨリ巽ニ連ル東西四十七間南北百二十間
同梶ケ谷　本村ノ南方ヨリ平野田ヨリ東ニ連ル東西二十間南北百三十間
同西谷　本村ノ西南方ヨリ梶ケ谷ヨリ北ニ連ル東西六十三間南北六十間
同向井　本村ノ南方ヨリ西谷ヨリ東ニ連ル東西七十間南北二十六間

同庄　谷	本村ノ坤方字西ノ結ヨリ北ニ連ル、東西三十六間南北百間
同タラ原	本村ノ西方字庄谷ヨリ北ニ連ル、東西五十一間南北百五十間
同日野尾	本村ノ西方字タラ原ヨリ乾ニ連ル、東西三十一間南北百二十間
同小　瀧	本村ノ西方字日野尾ヨリ艮ニ連ル、東西三十四間南北二百間
同柳ケ谷	本村ノ西方字小瀧ヨリ北ニ連ル、東西七十間南北八十間
同大　戸	本村ノ北方字柳ケ谷ヨリ北ニ連ル、東西八十間南北七十間
同口　中	本村ノ北方字大戸ヨリ東ニ連ル、東西三十七間南北百五十間
同西　山	本村ノ西方字口中ヨリ南ニ連ル、東西四十五間南北八十五間
同柿ウジ	本村ノ西方字西山ヨリ西ニ連ル、東西五十間南北九十八間
同平野田	本村ノ西方字柿ウジヨリ巽ニ連ル、東西四十七間南北百二十間
同梶ケ谷	本村ノ南方字平野田ヨリ東ニ連ル、東西二十間南北百三十五間
同西　谷	本村ノ西南方字梶ケ谷ヨリ北ニ連ル、東西六十五間南北六十間
同向　井	本村ノ南方字西谷ヨリ東ニ連ル、東西七十間南北三十六間

（八）―①



同 古屋垣内　本村ノ東方字向山ヨリ北ニ連ル東西五十四間、南北七十間

同 鍋中筋　本村ノ艮方字古屋垣内ヨリ乾ニ連ル東西四十二間、南北八十間

同 西筋　本村ノ西方字中筋ヨリ西ニ連ル東西五十間、南北六十間

同 畑　本村ノ西方字西筋ヨリ西ニ連ル東西四十間、南北六十間

同 大木　本村ノ地方字向山ヨリ南ニ連ル東西二百五十間、南北六十三間

同 郷久保　本村ノ南方字大木ヨリ地ニ連ル東西二百五十八間、南北四十八間

同 西ノ池　本村ノ西方字郷久保ヨリ乾ニ連ル東西五十五間、南北五十九間

同 北畑ケ　本村ノ北方字西ノ池ヨリ東ニ連ル東西百七十八間、南北五十六間

同 新向山　本村ノ北方字北畑外院川ヨリ東ニ連ル東西百五十間、南北四十六間

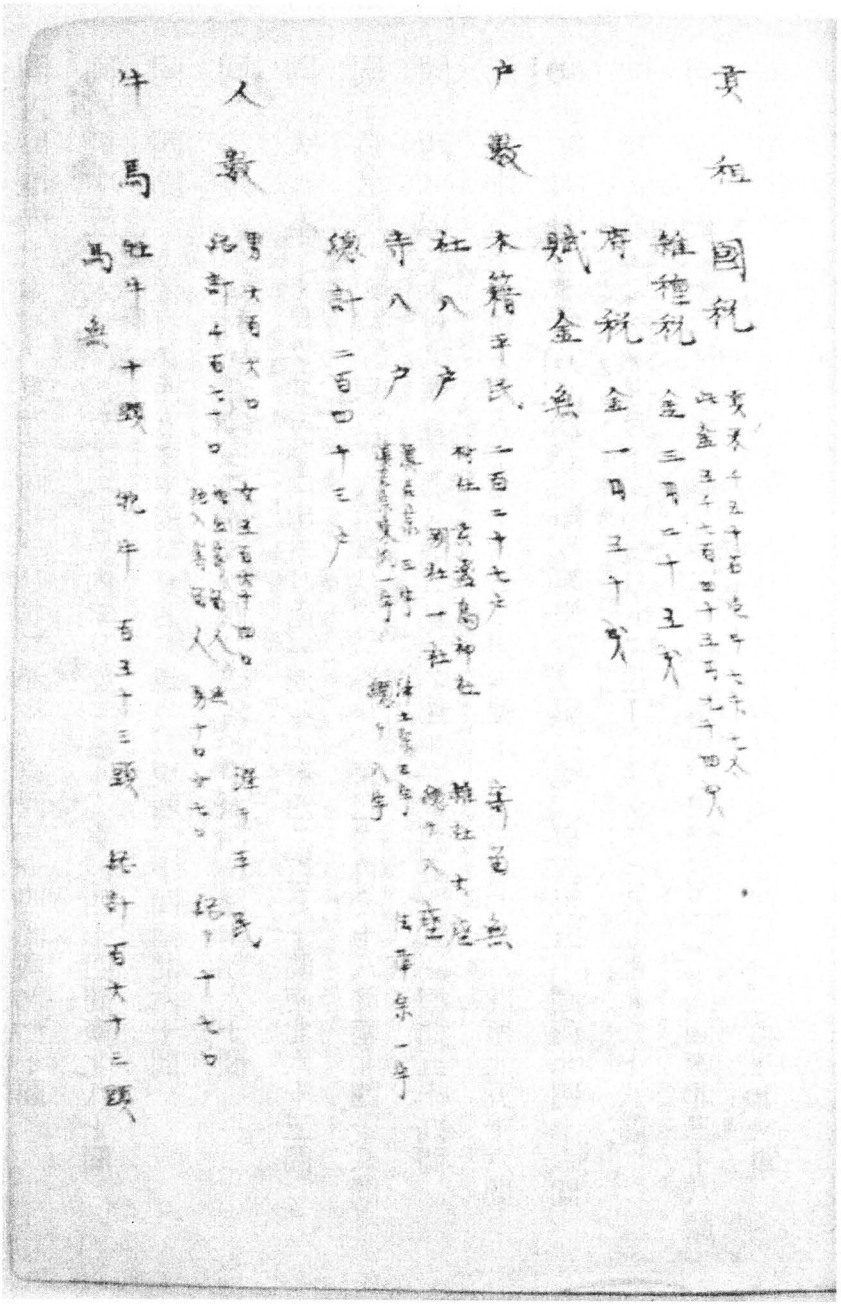
同 墓ノ谷　本村ノ北方字向山ヨリ北ニ連ル東西三百八間、南北二十八間

同 山ノ谷　本村ノ艮方字墓ノ谷ヨリ東ニ連ル東西四百七十六間、南北三十八間

同 新尼谷　本村ノ艮方字山ノ谷ヨリ東ニ連ル東西二百七間、南北五十六間

同古屋垣内　本村ノ東方字向井ヨリ北ニ連ル、東西三十四間南北七十間
同岩坂中筋　本村ノ艮方字古屋垣内ヨリ乾ニ連ル、東西四十四間南北八十間
同　西筋　本村ノ西方字中筋ヨリ西ニ連ル、東西三十間南北六十間
同　畑　本村ノ西方字西筋ヨリ西ニ連ル、東西四十間南北六十間
同　大　木　本村ノ坤方字向山ヨリ南ニ連ル、東西二百五十間南北六十三間
同　郷久保　本村ノ南方字大木ヨリ坤ニ連ル、東西二百三十八間南北四十八間
同　西ノ池　本村ノ西方字郷久保ヨリ乾ニ連ル、東西五十五間南北五十九間
同　北畑ヶ　本村ノ北方字西ノ池ヨリ東ニ連ル、東西百七十八間南北五十六間
同新家向山　本村ノ北方字北畑外院川ヨリ東ニ連、東西百五十間南北四十六間
同　墓ノ谷　本村ノ北方字向山ヨリ北ニ連ル、東西三百八間南北二十八間
同　山ノ谷　本村ノ艮方字墓ノ谷ヨリ東ニ連ル、東西四百七十六間南北三十八間
同新家尼谷　本村ノ艮方字山ノ谷ヨリ東ニ連ル、東西二百七間南北五十六間

（八）—②



貢租　國稅　貢米千五十石　[illegible]
此金五千七百四十五万九千四分
雜種稅　金三万二十五分
府稅　金一万五十分
賦金無

戶數　本籍平民　二百二十七戶　寄留無
社八戶　村社　[illegible]　雜社　[illegible]
別社一社　總ヶ八座
寺八戶　[illegible]　[illegible]
總計　二百四十三戶

人數　男六百六口　女五百六十四口　[illegible]
總計　千百七十口　[illegible]　總ヶ十七口

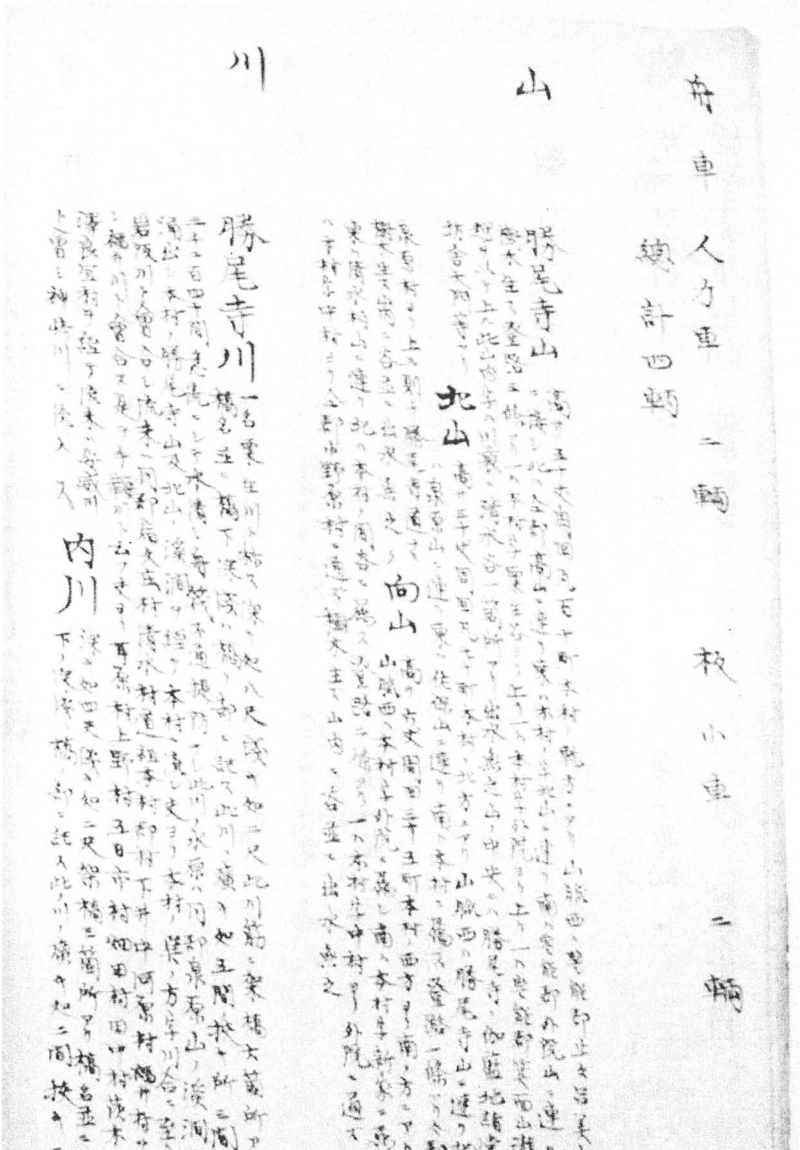
牛馬　牡牛　十頭　牝牛　百五十三頭　總計　百六十三頭
馬無

貢租　國稅　貢米千五十石壱斗七升
此金五千七百四十五円九十四銭
雑種税　金三円二十五銭
府税　金一円五十銭
賦金　無

戸数　本籍平民　二百二十七戸　寄留　無
村社　素盞烏神社　雑社　六座
社八戸　別社一社　総テ八座
寺八戸　真言宗三宇　浄土宗三宇　法華宗一宇
真言宗東瓜一宇　総テ八宇
総計　二百四十三戸

人数　男六百六口　女五百六十口　渾テ平民
総計千七十口　他出寄留人　無　総テ十七口
他入寄留人　男十口女七口

牛馬　牡牛　十頭　牝牛　百五十三頭　総計　百六十三頭
馬　無



舟車　人力車　二輛　枚小車　二輛

総計四輛

山

勝尾寺山　高サ三十丈周回凡五十町本村ノ乾ニアリ山脈西ハ[illegible]

北山　高サ三十丈周回凡[illegible]

向山　高サ六丈周回三[illegible]本村ノ西方ヨリ南ノ方ニアリ[illegible]

川

勝尾寺川　一名粟生川ト称ス深サ凡八尺浅サ凡二尺此川筋ニ架スル橋大[illegible]箇所アリ[illegible]

内川　深サ凡四尺浅サ凡二尺[illegible]

舟車　人力車　二輌　　板小車　二輌
総計四輌

山

勝尾寺山　高サ五十丈周回凡百十町本村ノ乾方・アリ、山脈西ハ豊能郡止々呂美山ニ接シ、北ハ仝郡高山ニ連リ、東ハ本村ノ字北山ニ連リ、南ハ豊能郡外院山ニ連ル、樹木生ス、登路三條アリ、一ハ本村字粟生間谷ヨリ上リ、一ハ本村字外院ヨリ上リ、一ハ豊能郡箕面山瀧越ヲ以上ル、此山内字ハ川裏ニ清水谷一箇所アリ、出水無之、山ノ中央ニハ勝尾寺ノ伽藍地諸堂坊舎大門等アリ、

北山　高サ三十丈周回凡七十町本村ノ北方ニアリ、山脈西ハ勝尾寺山ニ連リ、北ハ泉原山ニ連リ、東ハ佐保山ニ連リ、南ハ本村ニ属ス、登路一條アリ、仝郡泉原村ヨリ上ル、則チ勝尾寺道ナリ、

向山　六丈周回三十五町本村ノ西方ヨリ南ノ方ニアリ、樹木生ス、山内ニ谷並ニ出水無之ク　山脈西ハ本村字外院ニ属シ、南ハ本村字新家ニ属シ、東ハ清水村ニ連リ、北ハ本村ノ間谷ニ属ス、登路ニ條アリ、一ハ本村字中村ヨリ外院ニ通ズ、一ハ本村字中村ヨリ仝郡小野原村ニ通ズ、樹木生ス、山内ニ谷並ニ出水無之、

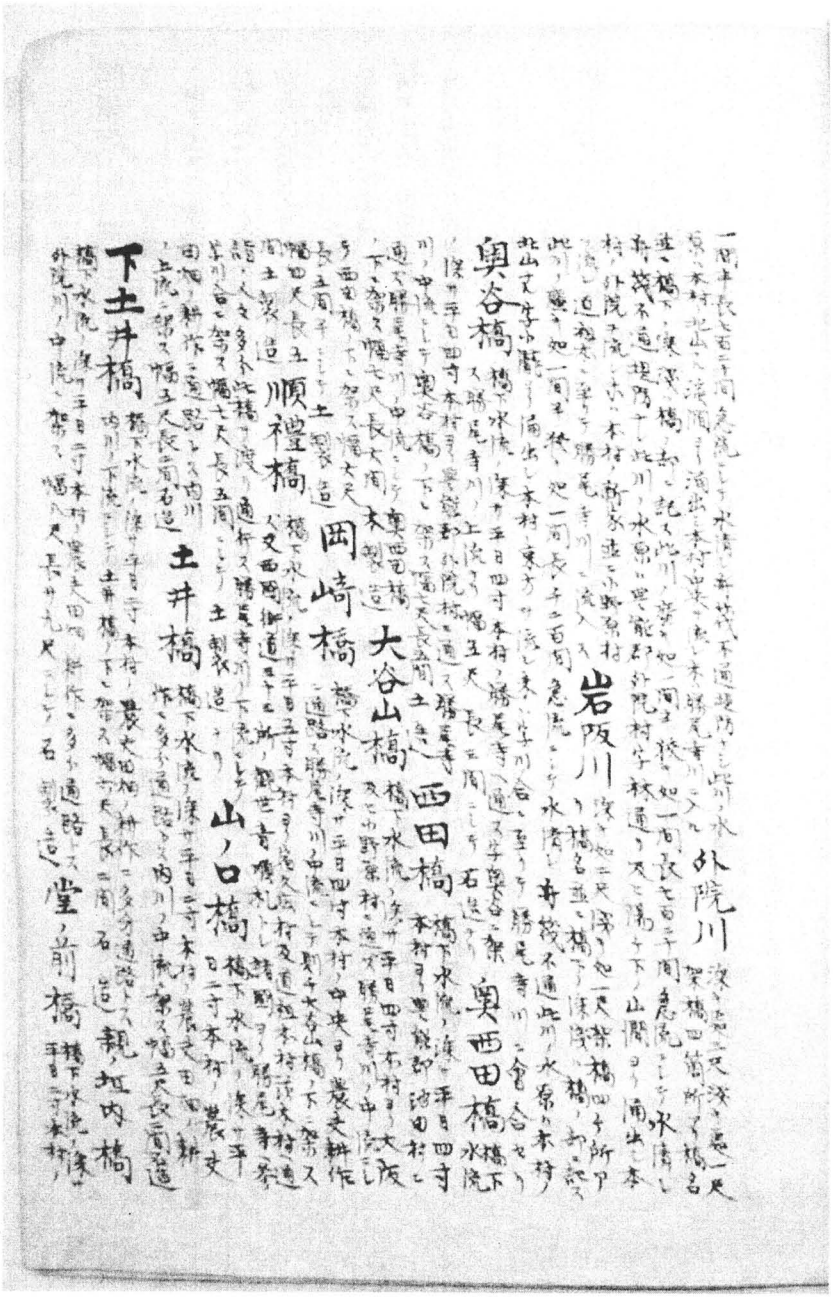
川

勝尾寺川　一名粟生川ト称ス、深キ処八尺浅き処二尺此川筋ニ架橋六箇所アリ、橋名並ニ橋下深浅ハ橋ノ部ニ記ス、此川ノ廣キ処五間狭キ処三間長三千二百四十間急流ニシテ水清シ、舟筏不通堤防ナシ、此川ノ水原ハ同郡泉原山ノ渓潤ヨリ涌出シ、本村ノ勝尾寺山及北山ノ渓潤ヲ経テ本村ニ流シ、夫ヨリ本村ノ巽ノ方字川合ニ至リテ岩阪川ト會合シ、流末ハ同郡宿久庄村清水村道祖本村郡村下井中河原村福井村ヲ流シ福井川トス、是ヲ手鞍川ト云フ、夫ヨリ耳原村上野村五日市村畑田村田中村茨木村澤良宜村ヲ経テ、流末ハ安威川

内川　深キ処四尺浅キ処二尺架橋三箇所アリ、橋名並ニ橋ト會シ神崎川ニ流入ス、下ノ深浅ハ橋ノ部ニ記ス、此ノ川ノ廣キ処ニ間狭キ處

（九）―②

一間半長七百二十間急流にして水清し舟筏不通堤防ナシ此川ノ水原ハ本村北山ヨリ流出シ本村中央ヲ流レ木ノ勝尾寺川ニ入ル



外院川 深キ處二尺深キ處一尺架橋四箇所アリ橋名並ニ橋下ノ深浅ハ橋ノ部ニ記ス此川ノ深キ如一間半狹キ如一間長七百二十間急流にして水清し舟筏不通堤防ナシ此川ノ水原ハ興能郡外院村字林通リ及ヒ陽ケ下ノ山間ヨリ涌出シ本村ノ外院ヲ流レ小ハ本村ノ新家並ニ小野原村ヲ流レ道祖太ニ至リテ勝尾寺川ニ流入ス

岩阪川 深キ如二尺深キ如一尺架橋四ヶ所アリ橋名並ニ橋下ノ深浅ハ橋ノ部ニ記ス此川ノ廣キ如一間半狹キ如一間長千二百間急流にして水清し舟筏不通此川ノ水原ハ本村ノ北山又字小瀧ヨリ涌出シ本村ノ東方ヲ流レ東ハ字川合ニ至リテ勝尾寺川ニ會合セリ

奥谷橋 橋下水流ノ深サ平日四寸本村ノ勝尾寺ヘ通ス字奥谷ニ架ス勝尾寺川ノ上流ナリ幅五尺長二間にして石造ナリ

奥西田橋 橋下水流ノ深サ平日四寸本村ヨリ興能郡沙田村ニ深サ平日四寸本村ヨリ興能郡外院村ニ通ス勝尾寺川ノ中流にして奥谷橋ノ下ニ架ス幅七尺長五間土造

西田橋 橋下水流ノ深サ平日四寸本村ヨリ興能郡沙田村ニ通ス勝尾寺川ノ中流にして奥西田橋ノ下ニ架ス幅七尺長五間木製造

大谷山橋 橋下水流ノ深サ平日四寸本村ヨリ大阪及ヒ小野原村ニ通ス勝尾寺川ノ中流にして西田橋ノ下ニ架ス幅七尺長五間土製造

岡崎橋 橋下水流ノ深サ平日四寸本村ノ中央ヨリ農夫耕作ニ通路ス勝尾寺川ノ中流にして則チ大谷山橋ノ下ニ架ス幅四尺長五間土製造

順禮橋 橋下水流ノ深サ平日五寸本村ヨリ宿久岡村及道祖本村ニ通ス又西國御道ニ至ル所ノ觀世音順礼トシ諸國ヨリ勝尾寺ヘ參詣ノ人々多ク此橋ヲ渡リ通行ス勝尾寺川ノ下流にして字川合ニ架ス幅七尺長五間にして土製造ナリ

山ノ口橋 橋下水流ノ深サ平日二寸本村ノ農夫田畑ノ耕作ニ通路トス内川ノ上流ニ架ス幅五尺長二間石造

土井橋 橋下水流ノ深サ平日二寸本村ノ農夫田畑ノ耕作ニ多分通路トス内川ノ中流ニ架ス幅五尺長二間石造

下土井橋 橋下水流ノ深サ平日二寸本村ノ農夫田畑ノ耕作ニ多分通路トス内川ノ下流にして土井橋ノ下ニ架ス幅六尺長二間石造

親垣内橋 橋下水流ノ深サ平日二寸本村ノ農夫田畑ノ耕作ニ多分通路トス外院川ノ中流ニ架ス幅八尺長サ九尺にして石製造

堂ノ前橋 橋下水流ノ深サ平日二寸本村ノ

一間半長七百二十間急流ニシテ水清シ、舟筏不通堤防ナシ、此川ノ水原ハ本村ノ北山ナル渓潤ヨリ涌出シ本村ノ中央ヲ流レ、木ハ勝尾寺川ニ入ル、

外院川 深キ處三尺浅キ處一尺架橋四箇所アリ、橋名並ニ橋下ノ深浅ハ橋ノ部ニ記ス、此川ノ廣キ処一間半、狭キ処一間、長七百二十間急流ニシテ水清シ、舟筏不通堤防ナシ、此川ノ水原ハ豊能郡外院村字林通リ及ヒ、陽ヶ下ノ山間ヨリ涌出シ、本村ノ外院ヲ流レ、末ハ本村ノ新家並ニ小野原村ヲ流レ、道祖所ニ至リテ勝尾寺川ニ流入ス、

岩阪川 深キ処二尺浅キ処一尺架橋四箇所アリ、橋名並ニ橋下ノ深浅ハ橋ノ部ニ記ス、此川ノ廣キ処一間半狭キ処一間長千二百間急流ニシテ水清シ、舟筏不通、此川ノ水原ハ本村ノ北山先字小瀧ヨリ涌出シ、本村ノ東方ヲ流レ、末ハ字川合ニ至リテ勝尾寺川ニ會合セリ、

奥谷橋 橋下水流ノ深サ平日四寸本村ノ勝尾寺ニ通ス、字奥谷ニ架ス、勝尾寺川ノ上流ナリ、幅五尺、長三間ニシテ石造ナリ、水流ノ深サ平日四寸、本村ヨリ豊能郡外院村ニ通ス、勝尾寺川ノ中流ニシテ奥谷橋ノ下ニ架ス、幅七尺長五間土造通ズ、勝尾寺川ノ中流ニシテ奥西田橋ノ下ニ架ス、幅七尺長六間木製造、

奥西田橋 橋下水流ノ深サ平日四寸、本村ヨリ大阪及ヒ小野原村ニ通ズ、勝尾寺川ノ中流ニシテ西田橋ノ下ニ架ス、幅六尺長五間土造ナリ、

大谷山橋 橋下水流ニ深サ平日四寸、本村ヨリ大阪本村ヨリ豊能郡池田村ニ通ズ、勝尾寺川ノ中流ニシテ則チ大谷山橋ノ下ニ架ス、幅四尺長五間半ニシテ土製造、

西田橋 橋下水流ノ深サ平日四寸本村ヨリ宿久庄村及道祖所村茨木村ヘ通ズ、又西國街道三十三ノ観世音順礼トシ、諸國ヨリ勝尾寺ヘ参詣ノ人々多分此橋ヲ渡リ通行ス、勝尾寺川ノ下流ニシテ字川合ニ架ス、幅七尺長五間ニシテ土製造ナリ、

岡崎橋 橋下水流ノ深サ平日五寸、本村ヨリ農夫耕作ニ通路ス、勝尾寺川ノ中流ニシテ則チ大谷山橋ノ下ニ架ス、幅四尺長五間土製造、

順禮橋 橋下水流ノ深サ平日二寸、本村ノ農夫田畑ノ耕作ニ多分通路トス、田畑ノ耕作ニ通路トス、内川ノ上流ニ架ス、幅五尺長二間石造

土井橋 橋下水流ノ深サ平日二寸、本村ノ農夫田畑ノ耕作ニ多分通路トス、内川ノ中流ニ架ス、幅五尺長二間石造

山ノ口橋 橋下水流ノ深サ平日二寸本村ノ農夫田畑ノ耕作ニ多分通路トス、内川ノ下流ニシテ土井橋ノ下ニ架ス、幅六尺長二間石造、

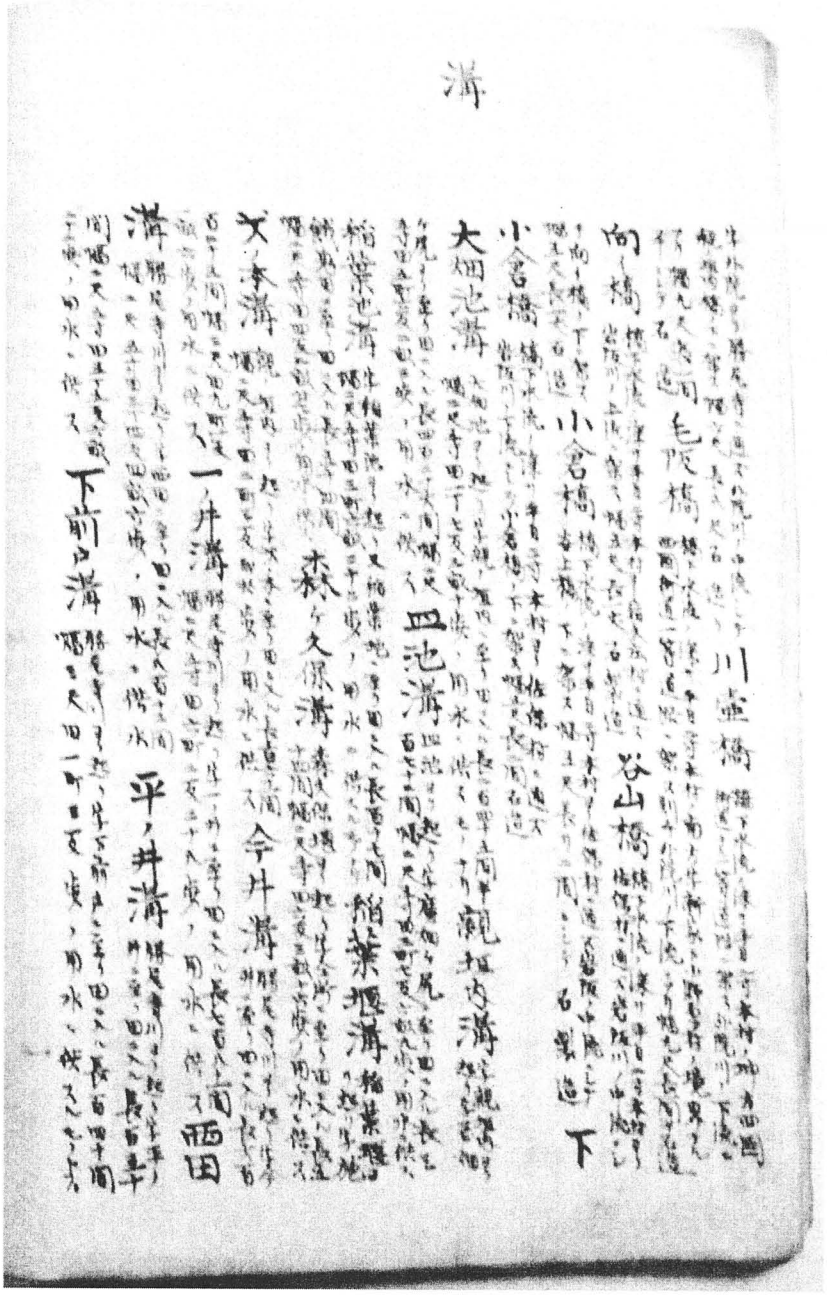
下土井橋 橋下水流ノ深サ平日二寸、本村ノ農夫田畑ノ耕作ニ多分通路トス、橋下水流ノ深サ平日二寸、本村ノ農夫田畑ノ耕作ニ多分通路トス、外院川ノ中流ニ架ス、幅八尺長サ九尺ニシテ石製造、

親ノ垣内橋 橋下水流ノ深サ平日二寸、本村ノ農夫田畑ノ耕作ニ多分通路トス、

堂ノ前橋 橋下水流ノ深サ平日二寸、本村ノ

（十）—①

溝



川壺橋

毛阪橋

谷山橋

向ヶ橋

小倉橋

小倉橋

下

大畑池溝

親垣内溝

四池溝

稲葉堰溝

稲葉池溝

森ヶ久保溝

大ノ本溝

今井溝

一ノ井溝

西田

溝

平ノ井溝

下前戸溝

溝

字外院ヨリ勝尾寺ニ通ズ、外院川ノ中流ニシテ

川壷橋 橋下水流ノ深サ平日二寸、本村ノ坤方西國街道一等道路ニ架ス、外院川ノ下流ニ親ノ垣内橋ノ下ニ架ス、幅六尺長八尺石造リ、アリ、幅九尺長一間

毛阪橋 橋下水流ノ深サ平日二寸、本村ノ南方字新家ト小野原村ノ境界ナル西國街道一等道路ニ架ス、則チ外院川ノ下流ニアリ、幅九尺長一間半石造、半ニシテ石造、

向イ橋 橋下水流ノ深サ平日二寸、本村ヨリ宿久庄村ニ通ズ、

谷山橋 橋下水流ノ深サ平日二寸、本村ヨリ岩阪川ノ上流ニ架ス、幅五尺長一丈石製造、佐保村ニ通ズ、岩阪川ノ中流ニシテ向イ橋ノ下ニ架ス、

小倉橋 橋下水流ノ深サ平日二寸、本村ヨリ佐保村ニ通ズ、岩阪ノ中流ニシテ下谷上橋ノ下ニ架ス、幅五尺長サ二間ニシテ石製造、幅五尺長一丈石造、

小倉橋 橋下ノ水流ノ深サ平日二寸、本村ヨリ佐保村ニ通ズ、岩阪川ノ下流ニシテ小倉橋ノ下ニ架ス、幅五尺長二間石造、

大畑池溝 大畑池ヨリ起リ字親ノ垣内ヘ至リ田ニ入ル、長二百四十五間半

親垣内溝 字親垣内ヨリ起リ廣畑幅二尺五寸田一丁七反三畝十歩ノ用水ニ供スモノナリ、ヶ尻ヨリ至リ田ニ入ル、長四百二十六間幅二尺

皿池溝 皿池ヨリ起リ字廣畑ヶ尻ニ至リ田ニ入ル、長三百七十二間幅二尺五寸田三町七反六畝九歩ノ用水ニ供ス五寸田五町六反二畝三歩ノ用水ニ供ス、

稲葉池溝 字稲葉池ヨリ起リ又稲葉池ニ至リ田ニ入ル、長百十七間

稲葉堰溝 稲葉堰ヨリ起リ、字施幅二尺五寸田三町六畝二十二歩ノ用水ニ供スルモノナリ、餓鬼田ニ至リ田ニ入ル、長百五十四間

森ケ久保溝 森久保堰ヨリ起リ字仝所ニ至リ田ニ入ル、長五十四間幅二尺五寸田四反二畝廿七歩ノ用水ニ供ス、

戈ノ本溝 親ノ垣内ヨリ起リあざ戈ノ本ニ至リ田ニ入ル、長百六十一間

今井溝 勝尾寺ヨリ起リ字今幅二尺五寸田二町三弐拾歩ノ用水ニ供ス、井ニ至リ田ニ入ル、長六百百二十五間幅二尺田九町一反

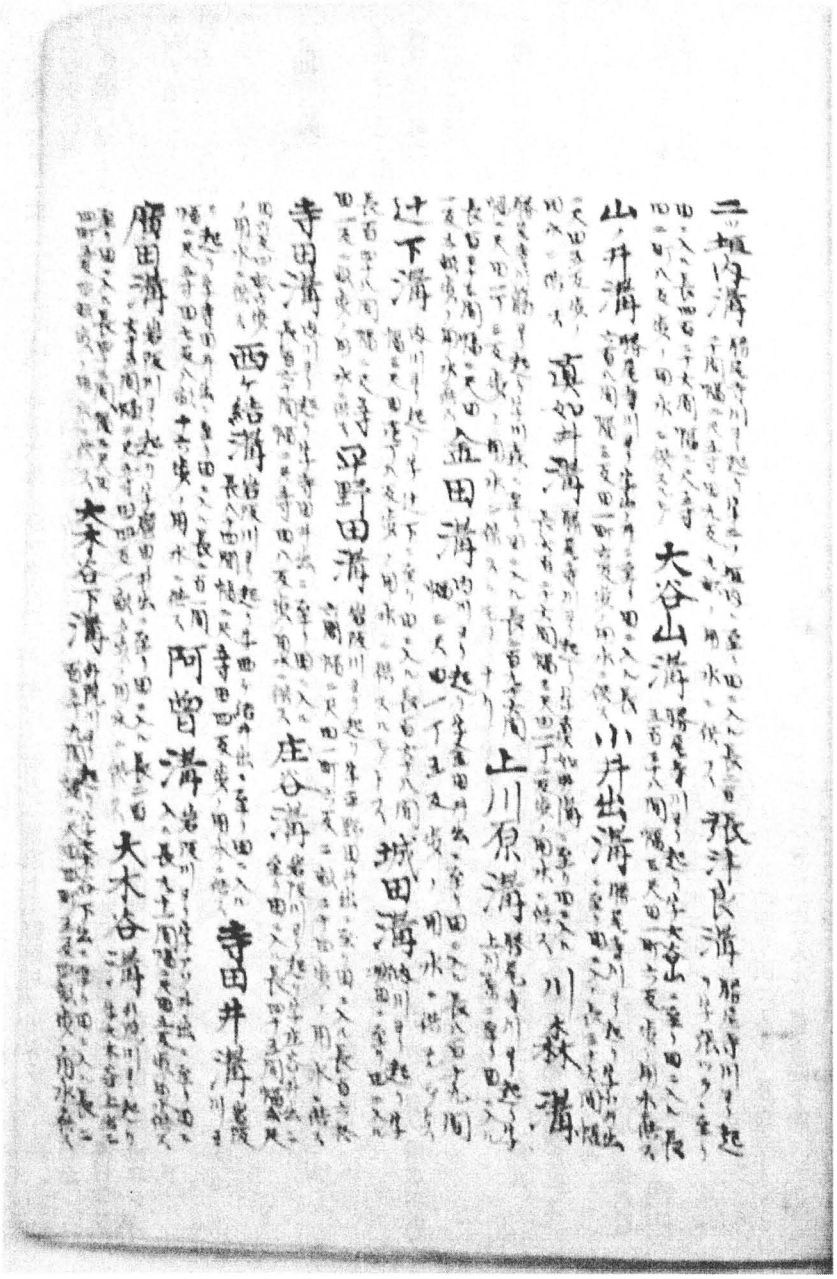
一ノ井溝 勝尾寺川ヨリ起リ字一ノ井ニ至リ田ニ入ル、長七百八十一間

西田 一畝六歩ノ用水ニ供ス、幅二尺五寸田六町二反二十八歩ノ用水ニ供ス、

溝 勝尾寺川ヨリ起リ字西田ニ至リ田ニ入ル、長八百十三間

平ノ井溝 勝尾寺川ヨリ起リ字平ノ幅二尺五寸田三丁四反四畝六歩ノ用水ニ洪水、井ニ至リ田ニ入ル、長百五十間幅二尺五寸田五丁五反六畝

下前戸溝 勝尾寺川ヨリ起リ字下前戸ニ至リ田ニ入ル、長百四十間二十二歩ノ用水ニ供ス、幅三尺田一町三反歩ノ用水ニ供スルモノトス、



二ツ垣内溝　勝尾寺川ヨリ起リ字二ツ垣内ニ至リ田ニ入ル、長二百二十間幅二尺五寸田九反九畝ノ用水ニ供ス、

張津良溝　勝尾寺川ヨリ起リ字張ツラニ至リ田ニ入ル、長四百二十六間幅二尺五寸

大谷山溝　勝尾寺川ヨリ起リ字大谷山ニ至リ田ニ入ル、長五百三十八間幅三尺田一町六反歩ノ用水ニ供ス、田二町八反歩ノ用水ニ供スルモノ、

山ノ井溝　勝尾寺川ヨリ字山ノ井ニ至リ田ニ入ル、長六百八間幅三反田一町六反歩ノ用水ニ供ス、

小井出溝　勝尾寺川ヨリ起リ字小井出ニ至リ田ニ入ル、長三十六間幅二尺田五反歩ノ用水ニ供ス、

真如井溝　勝尾寺川ヨリ起リ字真如井溝ニ至リ田ニ入ル、長六百二十六間幅三尺田一町二反歩ノ用水ニ供ス、

川森溝　勝尾寺川筋ヨリ起リ字川森ニ至リ田ニ入ル、長二百九十六間幅二尺田一丁三反歩ノ用水ニ供スルモノナリ、

上川原溝　勝尾寺川ヨリ起リ字上川原ニ至リ田ニ入ル、長百三十三間幅二尺田一反五畝歩ノ用水ニ供ス、

金田溝　内川ヨリ起リ字金田井出ニ至リ田ニ入ル、長八百十九間幅三尺田一丁五反歩ノ用水ニ供スルモノトス、

辻下溝　内川ヨリ起リ字辻下ニ至リ田ニ入ル、長百六十八間幅三尺田十四丁八反歩ノ用水ニ供スルモノトス、

城田溝　内川ヨリ起リ字城田ニ至リ田ニ入ル、長百四十八間幅二尺五寸田一反二畝歩ノ用水ニ供ス、

平野田溝　岩阪川ヨリ起リ字平野田井出ニ至リ田ニ入ル、長百六拾六間幅二尺田一町六反二畝二十四歩ノ用水ニ供ス、

庄谷溝　岩阪川ヨリ起リ字庄谷井出ニ至リ田ニ入ル、長四十五間幅弐尺寺田溝　内川ヨリ起リ字寺田井出ニ至リ田ニ入ル、長百六十間幅二尺五寸田八反歩ノ用水ニ供ス、

寺田井溝　岩阪川ヨリ起リ字寺田井出ニ至リ田ニ入ル、長二百一間幅二尺五寸田四反歩ノ用水ニ供ス、

阿曽溝　岩阪川ヨリ字アソ井出ニ至リ田ニ入ル、長二百一間

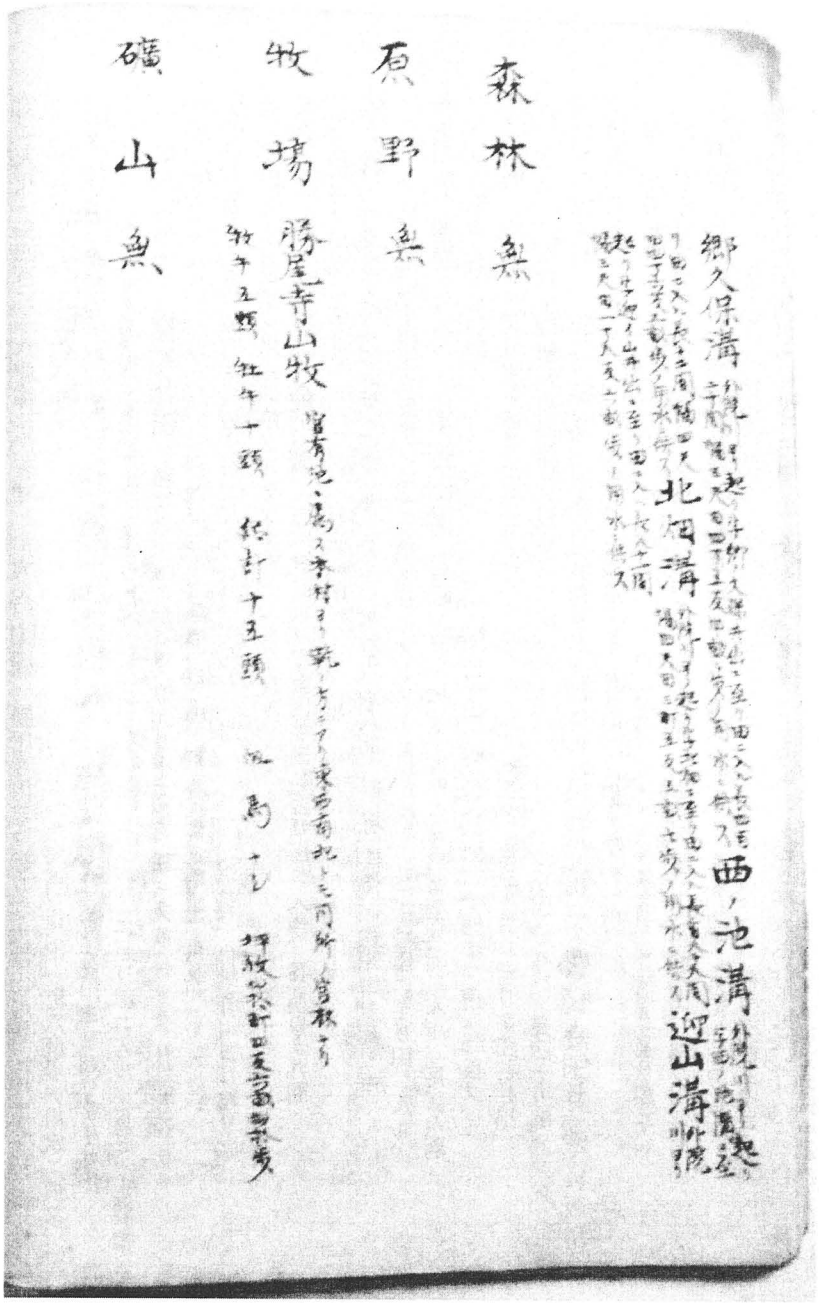
西ヶ結溝　岩阪川ヨリ起リあざ西ヶ結井出ニ至リ田ニ入ル、長八十四間幅二尺五寸田四反歩ノ用水ニ供ス、

阿曽溝　岩阪川ヨリ字アソ井出ニ至リ田ニ入ル、長二百一間

大木谷溝　外院川ヨリ起リ字大木谷上出ニ至リ田ニ入ル、長二百六十五間幅二尺五寸田四反一畝五歩ノ用水ニ供ス、

廣田溝　岩阪川ヨリ起リ字廣田井出ニ至リ田ニ入ル、長二百四町五反四畝歩ノ用水ニ供ス、

大木谷下溝　外院川ヨリ起リ字大木谷下出ニ至リ田ニ入ル、長二百三十九間幅二尺田四町五反四畝歩ノ用水ニ供ス、



森林　無

原野　無

牧場　勝屋寺山牧

礦山　無

郷久保溝　外院川ヨリ起リ字郷ノ久保井出ニ至リ田ニ入ル、長四百二十間幅三尺田四丁五反四畝歩ノ用水ニ供ス、

西ノ池溝　外院川ヨリ起リ字西ノ池溝ニ至リ田ニ入ル、長十二間幅四尺田四丁六反三畝歩ノ用水ニ供ス、

北畑溝　外院川ヨリ起リ字北畑ニ至リ田ニ入ル、長百八十八間幅四尺田三町五反五畝七歩ノ用水ニ供ス、

迎山溝　外院川ヨリ起リ字迎イ山井出ニ至リ田ニ入ル、長八十一間幅三尺田一丁八反六畝歩ノ用水ニ供ス、

森林　無

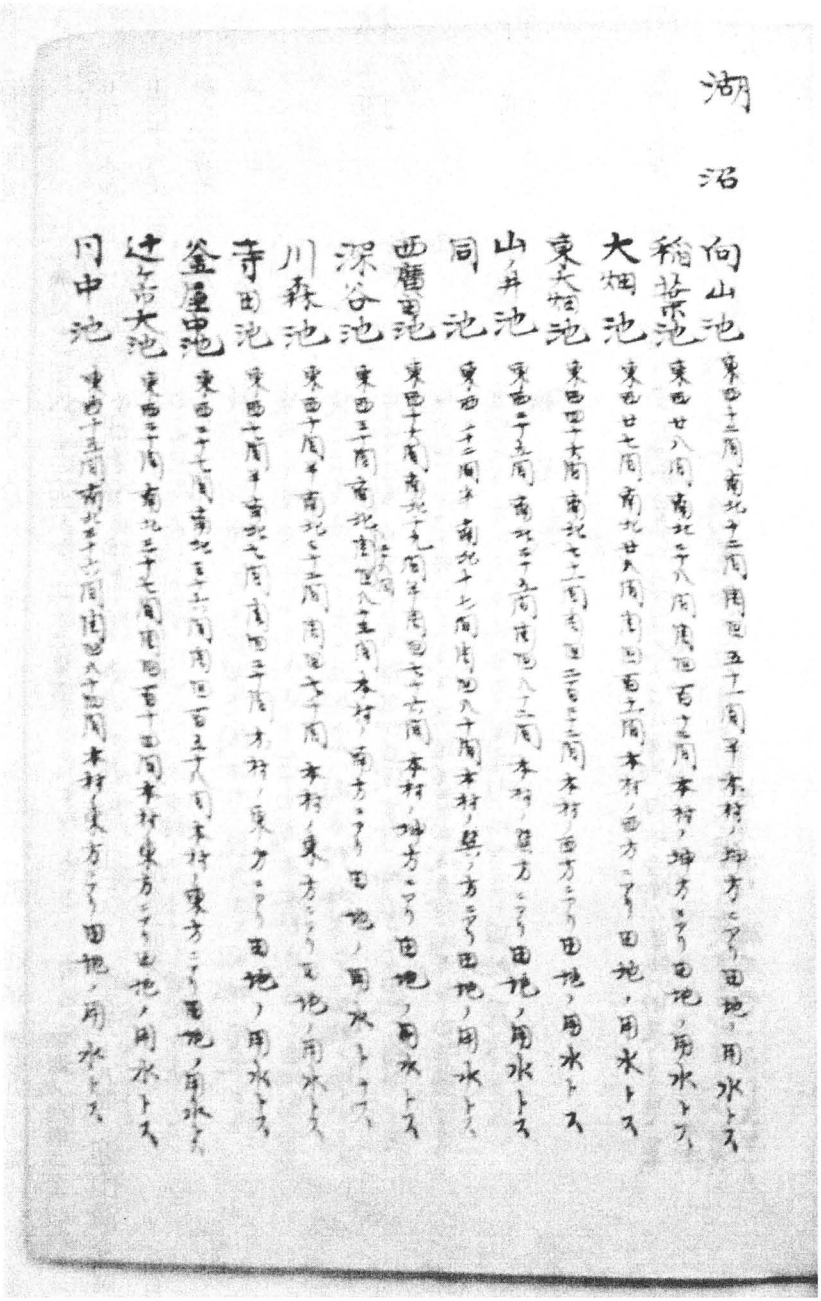
原野　無

牧場　勝尾寺山牧　官有地ニ属ス、本村ヨリ乾ノ方ニアリ、東西南北トモ同所ノ官林ナリ、

牧牛五頭　牡牛十頭　総計十五頭　但　馬　ナシ　坪数四拾町四反六畝四拾歩

礦山　無

（十一）―②



湖沼

向山池　東西十二間、南北十二間、周囲五十一間、半本村ノ坤方ニアリ田地ノ用水トス

稲葉池　東西廿八間、南北二十八間、周囲百十二間、本村ノ坤方ニアリ田地ノ用水トス

大畑池　東西廿七間、南北廿八間、周囲百十二間、本村ノ西方ニアリ田地ノ用水トス

東大畑池　東西四十六間、南北七十一間、周囲二百二十二間、本村ノ西方ニアリ田地ノ用水トス

山ノ井池　東西二十五間、南北二十五間、周囲八十二間、本村ノ巽方ニアリ田地ノ用水トス

同池　東西十二間半、南北十七間、周囲八十間、本村ノ巽ノ方ニアリ田地ノ用水トス

西鷹田池　東西十六間、南北十九間半、周囲七十六間、本村ノ坤方ニアリ田地ノ用水トス

深谷池　東西三十間、南北[illegible]間、本村ノ南方ニアリ田地ノ用水トス

川森池　東西十間半、南北七十二間、周囲七十間、本村ノ東方ニアリ田地ノ用水トス

寺田池　東西七間半、南北七間、周囲三十間、本村ノ東方ニアリ田地ノ用水トス

釜屋中池　東西二十七間、南北三十六間、周囲百五十八間、本村ノ東方ニアリ田地ノ用水トス

辻ヶ市大池　東西二十間、南北三十七間、周囲百十四間、本村ノ東方ニアリ田地ノ用水トス

円中池　東西十五間、南北二十六間、周囲八十四間、本村ノ東方ニアリ田地ノ用水トス

（十一）—②

湖沼

向山池　東西十二間、南北十二間、周回五十一間半、本村ノ坤方ニアリ、田地ノ用水トス、

稲葉池　東西廿八間、南北二十八間、周回百十二間、本村ノ坤方ニアリ、田地ノ用水トス、

大畑池　東西廿七間、南北廿八間、周回百十一間、本村ノ西方ニアリ、田地ノ用水トス、

東大畑池　東西四十六間、南北七十一間、周回二百二十二間、本村ノ西方ニアリ、田地ノ用水トス、

山ノ井池　東西二十五間、南北二十五間、周回八十二間、本村ノ巽方ニアリ、田地ノ用水トス、

同　池　東西三十二間、南北十七間、周回八十間、本村ノ巽ノ方ニアリ、田地ノ用水トス、

西廣田池　東西十六間、南北十九間半、周回七十六間、本村ノ坤方ニアリ、田地ノ用水トス、

深谷池　東西三十間、南北二十八間、周回八十三間、本村ノ南方ニアリ、田地ノ用水トス、

川森池　東西十間半、南北三十二間、周回七十間、本村ノ東方ニアリ、田地ノ用水トス、

寺田池　東西七間半、南北七間、周回二十間、本村ノ東方ニアリ、田地ノ用水トス、

釜屋中池　東西二十七間、南北三十六間、周回百五十八間、本村ノ東方ニアリ、田地ノ用水トス、

辻ケ市大池　東西二十間、南北三十七間、周回百十四間、本村ノ東方ニアリ、田地ノ用水トス、

同中池　東西十五間、南北三十六間、周回八十四間。、本村ノ東方ニアリ、田地ノ用水トス、

梶ヶ谷池　東西五十間、南北二十間、周回百八十間、本村ノ東方ニアリ田地ノ用水トス

田良原池　東西十三間、南北三十一間半、周回八十九間、本村ノ艮方ニアリ田地ノ用水トス

小龍池　東西廿一間、南北三十三間、周回八十八間、本村ノ艮方ニアリ田地ノ用水トス

大戸池　東西十七間、南北十八間、周回七十間、本村ノ艮方ニアリ田地ノ用水トス

同中池　東西二十九間、南北二十五間、周回七十四間半、本村ノ艮方ニアリ田地ノ用水トス

替地池　東西二十間、南北十六間半、周回六十八間、本村ノ坤方ニアリ田地ノ用水トス

宮池　東西三十三間、南北二十六間、周回四百間、本村ノ坤方ニアリ田地ノ用水トス

西池　東西四十九間半、南北十九間半、周回百五十四間、本村ノ坤方ニアリ田地ノ用水トス

迎山池　東西十六間、南北十三間、周回五十八間、本村ノ坤方ニアリ田地ノ用水トス

湖沼　無

道路

道路ハ西國街道一等道路ニ属ス本村ノ南方全郡小野原村界ヨリ起リ全郡今宮村界ニ至ル長二百九十三間幅三間半並木ナシ此街道筋新家ノ里ヨリ起リ北折シ勝尾寺ヘ通スル支道アリ

勝尾寺往還　本村ノ中央ニアリ巽方全郡宿久庄村界ヨリ乾方本村ノ勝尾寺ニ至ル長甲丁

梶ケ谷池　東西五十間、南北二十間、周回百八十間、本村ノ東方ニアリ、田地ノ用水トス、
田良原池　東西十三間、南北三十一間半、周回八十九間、本村ノ艮方ニアリ、田地ノ用水トス、
小龍池　東西廿一間、南北二十三間、周回八十八間、本村ノ艮方ニアリ、田地ノ用水トス、
大戸池　東西十七間、南北十八間、周回七十間、本村ノ艮方ニアリ、田地ノ用水トス、
同中池　東西二十一間、南北二十五間、周回七十四間半、本村ノ艮方ニアリ、田地ノ用水トス、
替地池　東西二十間、南北十六間半、周回六十八間、本村ノ坤方ニアリ、田地ノ用水トス、
宮池　東西三十二間、南北二十六間、周回四百間、本村ノ坤ノ方ニアリ、田地ノ用水トス、
西池　東西四十九間半、南北十九間半、周回百弐拾四間、本村ノ坤方ニアリ、田地ノ用水トス、
迎山池　東西十七間、南北十二間、周回六十八間、本村ノ坤方ニアリ、田地ノ用水トス、

湖沼　無

道路

道路ハ西國街道　一等道路ニ属ス、本村ノ南方仝郡小野原村界ヨリ豊島郡今宮村界ニ至ル、長二百九十二間、幅三間半並木ヲナシ此街道筋新家ノ里ヨリ北へ折レ勝尾寺往還　本村ノ中央ニアリ、巽方仝郡宿久庄村界ヨリ乾方本村ノ勝尾寺ニ至ル、長四十丁勝尾寺へ通ズル、支道アリ、

幅一間道敷一間半並木ナシ俗ニ順礼道トモ云

池田往還　本村中央ヨリ艮方仝郡佐保村界ヨリ西方豊島郡小浣村界ニ至ル長三十五丁幅一間　道敷一間半並木ナシ

鐵道　無

掲示場　本村ノ中央ヨリ艮方字白駒井ニ戸長役場ノ門前ニアリ東西一間南北一間面積一坪

堤塘　無

港　無

出崎　無

島　無

暗礁　無

燈明臺付　燈明船　無

瀧　無

温泉　無

冷泉　無

公園　無

幅一間道敷一間半並木　**池田往還**　本村ノ中央ニアリ、艮方仝郡佐保村界ヨリ西方豊島郡外院村界ニ至ル、長三十五丁幅一間

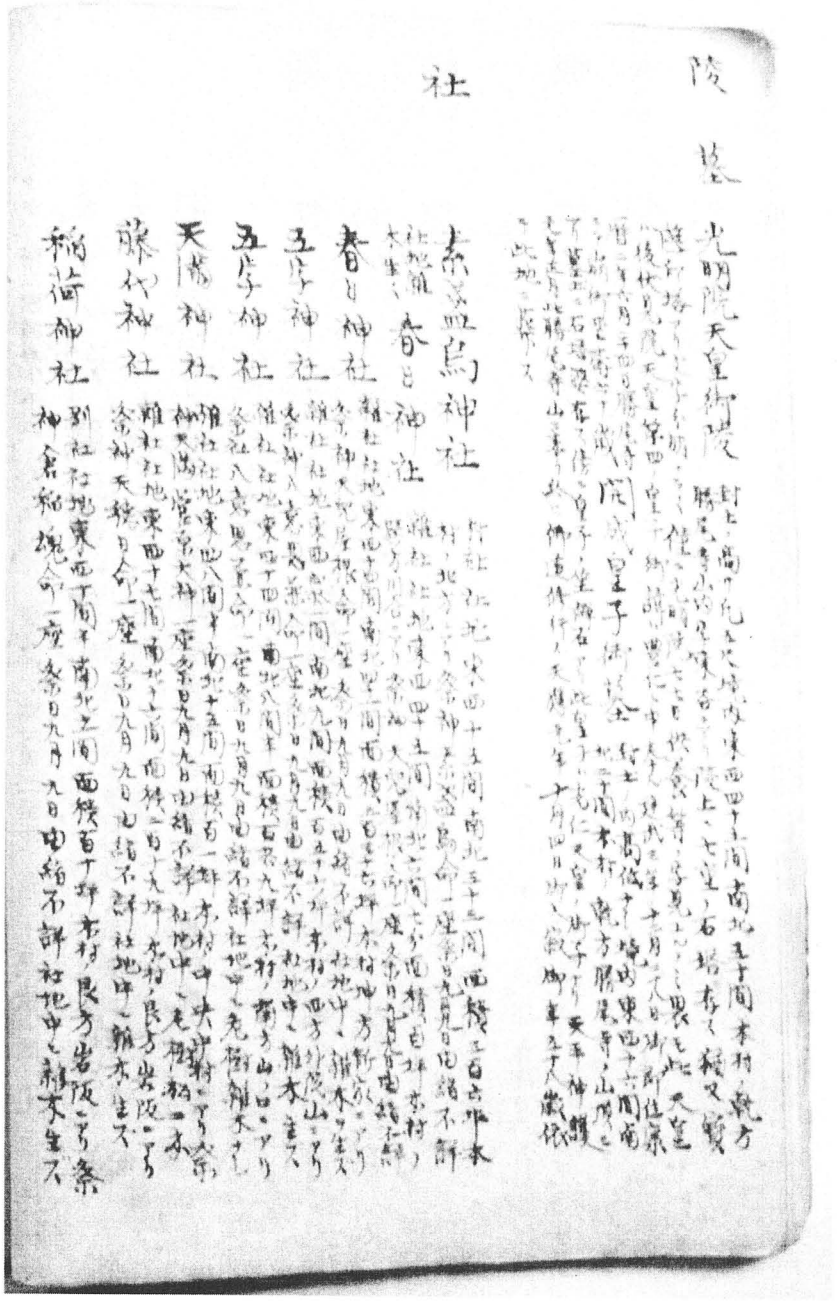
ナシ、俗ニ順禮道トモ云、

道敷一間半　**鐵道**　無

並木ナシ、

掲示場　本村ノ中央ヨリ艮方字白駒井戸長役場ノ門前ニアリ、東西一間、南北一間、面積一坪

堤塘	無
港	無
出崎	無
島	無
暗礁	無
燈明臺付燈明船	無
瀧	無
温泉	無
冷泉	無
公園	無



陵墓

光明院天皇御陵

社

素盞嗚神社

春日神社

五社神社

五社神社

天満神社

藤代神社

稲荷神社

陵墓

光明院天皇御陵

封土ノ高サ凡五尺、境内東西四十五間、南北五十間、本村ノ乾方勝尾寺山内字東谷ニアリ、陵上ニ七重ノ石塔存ス、猶又寶篋印塔アリ、文字分明ナラス僅ニ光明院七七日供養ノ字見エルノミ、畏モ此　天皇ハ後伏見院天皇第四ノ皇子御諱ハ豊仁ト申奉ル、建武三年十二月二十八日御即位康暦二年六月二十四日勝尾寺

開成皇子御墓

封土ノ内高低ナシ、境内東西十六間、南北二十間、本村ノ乾方勝尾寺ノ山頂ニニテ崩聖壽六十歳

アリ、墓ニ石塔婆存ス、傍ニ皇子ノ坐禅石アリ、此皇子ハ光仁天皇ノ御子ナリ、天平神護元年正月此勝尾寺山ニ来リ終ヒ佛道修業ス、天應元年十月四日御入寂、御年五十八歳依テ此地ニ葬ス、

社

素盞烏神社

村社社地東西十五間、南北三十三間、面積三百六坪本村ノ北方ニアリ、祭神素盞烏命一座祭日九月九日由緒不詳

春日神社

社地雑木生ス、

雑社社地東西四十五間、南北六間七分、面積百坪、本村ノ巽方川合ニアリ、祭神天兜屋根命一座祭日九月九日由緒不詳

春日神社

雑社社地東西十四間、南北四十一間、面積三百三十六坪、本村ノ坤方新家ニアリ、祭神天兜屋根命一座祭日九月九日由緒不詳、社地中ニ雑木ヲ生ズ、

五字神社

雑社社地東西弐拾一間、南北九間、面積百五十六坪、本村ノ西方外院山ニアリ、祭神八意思兼命一座祭日九月九日由緒不詳、社地中ニ雑木ヲ生ズ、

五字神社

雑社社地東西十四間、南北八間半、面積百壱拾九坪、本村ノ蘭方山ノ口ニアリ、祭社八意思兼命一座祭日九月九日由緒不詳、社地中ニ老樹雑木ナシ、

天満神社

雑社社地東西八間半、南北十五間、面積百一坪、本村ノ中央中村ニアリ、祭神天満菅原大神一座祭日九月九日由緒不詳、社地中ニ老樹松二本、

藤代神社

雑社社地東西十七間、南北十六間、面積二百十九坪、本村ノ艮方岩阪ニアリ、祭神天穂日命一座祭日九月九日由緒不詳、社地中ニ雑木生ズ、

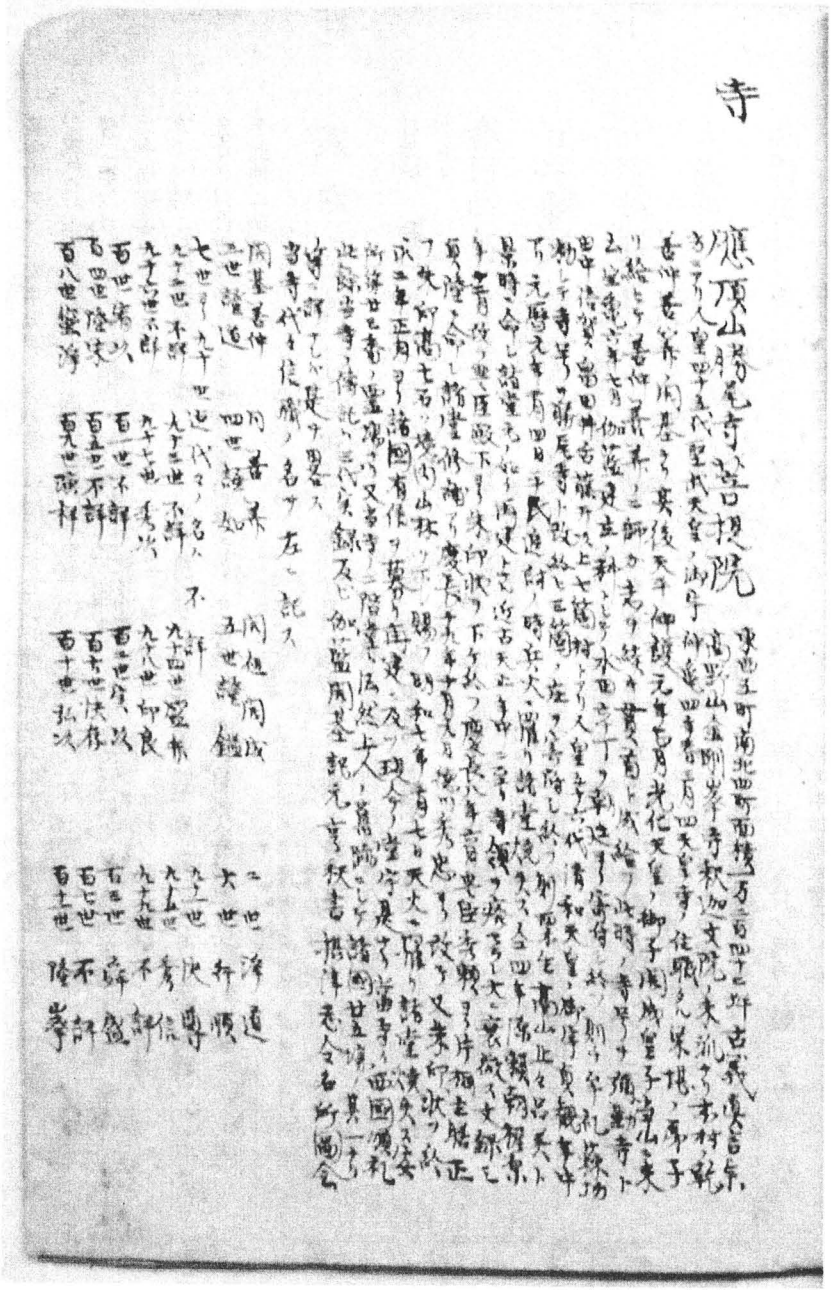
稲荷神社

別社社地東西十間半、南北十一間、面積百十坪、本村ノ艮方岩阪ニアリ、祭神倉稲魂命一座祭日九月九日由緒不詳、社地中ニ雑木生ズ、

（十三）—②

寺

應頂山勝尾寺菩提院



東西五町南北四町面積一万二百四十二坪古義眞言宗
高野山金剛峯寺釈迦文院ノ末流ナリ本村ノ乾
方ニアリ人皇四十五代聖武天皇ノ御宇仲亀四年春正月四天皇寺ノ住職タル栄堪ノ弟子
善仲善算ノ開基ナリ其後天平御護元年七月光仁天皇ノ御子開成皇子当山ニ来
リ給ヒテ善仲ノ善算ノ二師カ志ヲ続キ貫首ト成給フ此時ノ寺号ヲ彌勒寺ト
云宝亀六年七月伽藍建立ノ料トシテ水田六十丁ヲ朝廷ヨリ寄付シ給フ則チ年礼藤坊
田中信賀ノ留田神舌藤ヲ以上七箇村トアリ人皇五十六代清和天皇ノ御宇貞観年中
勅シテ寺号ヲ勝尾寺ト改給ヒ三箇ノ庄ヲ寄附シ給フ則栗生高山正々呂美ト
下ル元暦元年二月四日平民追討ノ時兵火ニ罹リ諸堂焼失ス又四年源頼朝祈祭
景時ニ命シ諸堂元ノ如ク再建ト云近古天正年中ニ至リ寺領ヲ疾ヲシ大ニ衰微ス文録ニ
年二月改ツ豊臣殿下ヨリ朱印状ヲ下ケ給フ慶長八年二月豊臣秀頼ヨリ片桐主膳正
貞隆ニ命シ諸堂修補アリ慶長十九年十月九日徳川秀忠ヨリ改テ又朱印状ヲ給
フ其印高七石ノ境内山林ヲ下ル賜フ明和七年二月七日天火ニ罹リ諸堂焼失ス安
政二年正月ヨリ諸国有作ヲ募リ再建ス及ツ現今ノ堂宇是ナリ當寺ノ西国順礼
所ニ於テ廿三番ノ霊場ナリ又当寺ノ二階堂ニ広然上人ノ嘗踏ニシテ諸国廿五境ノ其一ナリ
此録当寺ノ傳記ハ三代実録及ビ伽藍開基記元亨釈書摂津志今名所図会
等ニ詳ナレバ是ヲ略ス
当寺代々住職ノ名ヲ左ニ記ス

開基善仲	同善算	開祖開成	二世	浮道	
二世證道	四世證如	五世證鎰	六世	行順	
七世ヨリ九十世	近代々ノ名ハ不詳		九十一世	快尊	
九十二世不詳	九十三世不詳	九十四世靈弁	九十五世	秀信	
九十六世不詳	九十七世秀次	九十八世印良	九十九世	不詳	
百世宥次	百一世不詳	百二世実次	百三世	舜盛	
百四世隆次	百五世不詳	百六世快存	百七世	不詳	
百八世蜜浮	百九世瑞祥	百十世弘次	百十一世	隆峯	

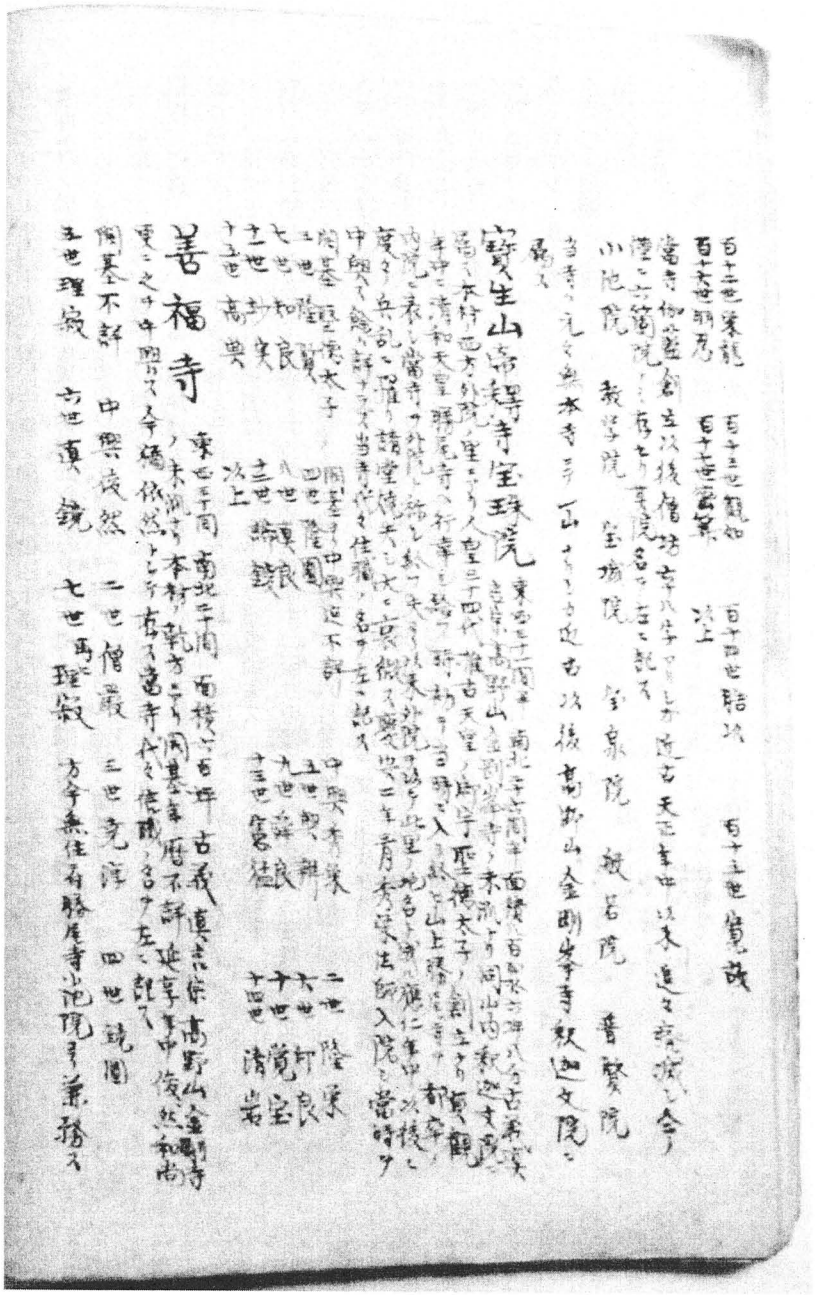
寺

應頂山勝尾寺菩提院　東西五町、南北四町、面積一万二百四十二坪、古義真言宗

高野山金剛峯寺釈迦文院ノ末派ナリ、本村ノ乾方ニアリ、人皇四十五代聖武天皇ノ御宇神亀四年春三月四天皇寺ノ住職タル栄堪ノ弟子善仲善・ノ開基ナリ、其後天平神護元年正月光仁天皇ノ御子開成皇子当山ニ来リ給ヒテ、善仲善・ノ二師ガ志ヲ続キ貫首ト成給フ、此時ノ寺号ヲ彌勒寺ト云、宝亀六年七月伽藍建立ノ料トシテ、水田六十丁ヲ朝廷ヨリ寄付シ給フ、則チ牟礼、蘇功田中、倍賀、畠田、井舌、藤井以上七箇村トアリ、人皇五十六代清和天皇ノ御宇貞観年中勅シテ寺号ヲ勝尾寺ト改給ヒ、三箇ノ庄ヲ寄附シ給フ、則粟生、高山、止々呂美トアリ、元暦元年二月四日平民追討ノ時兵火ニ罹リ諸堂焼失ス、仝四年源頼朝梶原景時ニ命シ諸堂元ノ如ク再建トナル、近古天正年中ニ至リ寺領ヲ廃セラレ大ニ衰微ス、文録三年十二月改テ豊臣殿下ヨリ朱印状ヲ下ケ給フ、慶長八年六月豊臣秀頼ヨリ片桐主膳正貞隆ニ命シ諸堂修補アリ、慶長十九年十月九日徳川秀忠ヨリ改テ又朱印状ヲ給フ、朱印高七石ハ境内山林ヲ下シ賜フ、明和七年三月七日天火ニ罹リ諸堂焼失ス、安永二年正月ヨリ諸國有儀ヲ募リ再建ニ及ブ、現今ノ堂宇是ナリ、當寺ハ西國順礼所第廿三番ノ霊場ナリ、又当寺ノ二階堂ハ法然上人ノ舊跡ニシテ、諸國廿五堺ノ其一ナリ、此餘当寺ノ傳記ハ三代実録及ビ伽藍開基記、元亨釈書、摂津志、仝名所圖会等ニ詳ナレバ是ヲ畧ス、

当寺代々信職ノ名ヲ左ニ記ス、

開基善仲　同善・　開祖開成　二世浄道
三世證道　四世證如　五世證鑑　六世　行順
七世ヨリ九十世迄代々ノ名ハ　不詳　九十一世　快尊
九十二世不詳　九十三世不詳　九十四世盛弁　九十五世秀信
九十六世不詳　九十七世秀次　九十八世印良　九十九世不詳
百世宥次　百一世不詳　百二世実次　百三世舜盛
百四世隆栄　百五世不詳　百六世快存　百七世不詳
百八世蜜浄　百九世演祥　百十世弘次　百十一世隆峯



百十二世栄龍　百十三世観如　百十四世膳次　百十五世寛故
百十六世明忍　百十七世蜜・　以上
當伽藍創立以後僧坊六十八字アリシガ、近古天正年中以来追々廃滅シ今僅ニ六箇院ノミ存セリ、其院名ヲ左ニ記ス、
小池院　教学院　宝城院　宝泉院　般若院　普賢院
当寺ハ元々無本寺ニテ一山ナリシカ、近古以後高野山金剛峯寺釈迦文院ニ属ス、

寶生山帝釈寺宝珠院

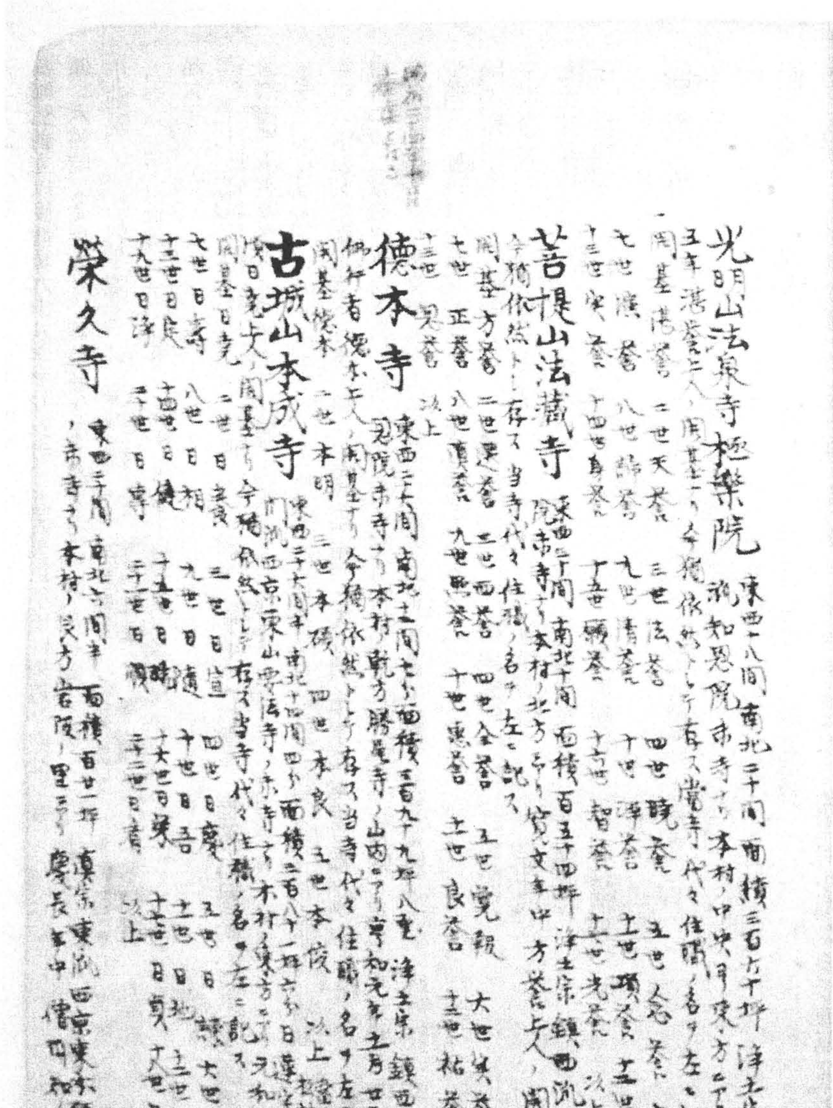
東西三十一間半、南北二十六間半、面積八百弐拾六坪八分古義真言宗高野山金剛峯寺ノ末派ナリ、同山内釈迦文院ニ属ス、本村ノ西方外院ノ里ニアリ、人皇三十四代推古天皇ノ御宇聖徳太子ノ創立ナリ、貞観年中ニ清和天皇勝尾寺へ行幸シ給フ、時初テ当時ニ入リ給ヒ山上勝尾寺ヲ都卒ノ内院ニ表シ當時ヲ外院ト称シ給フ、夫ヨリ以来外院ヲ以テ此里ノ地名ト成ル、應仁年中以後ニ度々ノ兵乱ニ罹リ諸堂焼失シ大ニ衰微ス、慶安二年三月秀栄法師入院シ當時ヲ中興ス、餘ハ詳ナラズ当寺代々住職ノ名ヲ左ニ記ス、

開基聖徳太子　開基ヨリ中興迄不詳　中興秀栄　二世隆栄
三世隆賢　四世隆圓　五世興辨　六世印良
七世知良　八世真良　九世舜良　十世覚宝
十一世妙実　十二世諦錂　十三世憲猛　十四世清岩
十五世高典　以上

善福寺

東西三十間、南北二十間、面積六百坪、古義真言宗高野山金剛寺ノ末派ナリ、本村ノ乾方ニアリ、開基年暦不詳、延享年中俊然和尚更ニ之ヲ中興ス、今猶依然トシテ存ス、當寺代々信職ノ名ヲ左ニ記ス、

開基不詳　中興俊然　二世僧厳　三世尭淳　四世鏡圓
五世理寂　六世真鏡　七世再ヒ理寂　方今無住ニ付、勝尾寺小池院ヨリ兼務ス、


光明山法泉寺極楽院　東西十八間　南北二十間　面積三百六十坪　浄土宗鎮西
派知恩院末寺ナリ　本村ノ中央ヨリ東ノ方ニアリ　寛永
五年湛誉上人ノ開基ニテ今猶依然トシテ存ス　当寺代々住職ノ名ヲ左ニ記ス
一開基湛誉　二世天誉　三世法誉　四世暁誉　五世念誉　六世臨誉
七世演誉　八世師誉　九世清誉　十世淨誉　十一世順誉　十二世潮誉
十三世実誉　十四世身誉　十五世願誉　十六世智誉　十七世光誉　以上
菩提山法蔵寺　東西二十間　南北十間　面積百五十四坪　浄土宗鎮西派智恩
院末寺ナリ　本村ノ北方ニアリ　寛文年中方誉上人ノ開基ニテ
今猶依然トシテ存ス　当寺代々住職ノ名ヲ左ニ記ス
開基方誉　二世連誉　三世西誉　四世全誉　五世覚観　六世実誉
七世正誉　八世貞誉　九世照誉　十世恵誉　十一世良誉　十二世祐誉
十三世忍誉　以上
徳本寺　東西二十六間　南北十三間七分　面積三百九十九坪八合　浄土宗鎮西派知
恩院末寺ナリ　本村乾ノ方勝尾寺ノ山内ニアリ　享和元年十二月廿五日念
仏行者徳本上人ノ開基ニテ今猶依然トシテ存ス　当寺代々住職ノ名ヲ左ニ記ス
開基徳本　二世本明　三世本磧　四世本良　五世本俊　以上
古城山本成寺　東西二十六間半　南北十四間四分　面積三百八十一坪六分　日蓮宗[illegible]
門派西京東山妙法寺ノ末寺ナリ　本村ノ東方ニアリ　元和二年ノ[illegible]
僧日亮上人ノ開基ニテ今猶依然トシテ存ス　当寺代々住職ノ名ヲ左ニ記ス
開基日亮　二世日養　三世日宣　四世日慶　五世日[illegible]
七世日寿　八世日相　九世日遵　十世日吾　十一世日[illegible]
十三世日良　十四世日饒　十五世日[illegible]　十六世日[illegible]　十七世日[illegible]
十九世日浄　二十世日寿　二十一世日[illegible]　二十二世日青　以上
栄久寺　東西二十間　南北十六間半　面積百廿一坪　真宗東派西京東本願寺
ノ末寺ナリ　本村ノ艮ノ方宮阪ノ里ニアリ　慶長年中僧[illegible]ノ開基

光明山法泉寺極楽院

東西十八間、南北二十間、面積三百六十坪、浄土宗鎮西派知恩院末寺ナリ、本村ノ中央ヨリ東方ニアリ、寛永五年湛誉上人ノ開基ナリ、今猶依然トシテ存ス、當寺代々住職ノ名ヲ左ニ記ス、

一開基湛誉　二世天誉　三世法誉　四世暁誉　五世念誉　六世臨誉
七世演誉　八世諦誉　九世清誉　十世浄誉　十一世頂誉　十二世調誉
十三世実誉　十四世身誉　十五世願誉　十六世智誉　十七世光誉　以上

菩提山法蔵寺

東西三十間、南北十間、面積百五十四坪、浄土宗鎮西派智恩院末寺ナリ、本村ノ北方ニアリ、寛文年中方誉上人ノ開基ナリ、今猶依然トシ存ス、当寺代々住職ノ名ヲ左ニ記ス、

開基方誉　二世還誉　三世西誉　四世全誉　五世覚報　六世実誉
七世正誉　八世真誉　九世照誉　十世恵誉　十一世良誉　十二世祐誉
十三世恩誉　以上

徳本寺

東西二十四間、南北十二間七分、面積三百九十九坪八厘、浄土宗鎮西派知恩院末寺ナリ、本村ノ乾方勝尾寺ノ山内ニアリ、亨和元年十一月廿五日念佛行者徳本上人ノ開基ナリ、今猶依然トシテ存ス、当寺代々住職ノ名ヲ左ニ記ス、

開基徳本　二世本明　三世本碩　四世本良　五世本俊　以上　當時ハ老松林庵と云

昭和二十四年十月廃虚となる

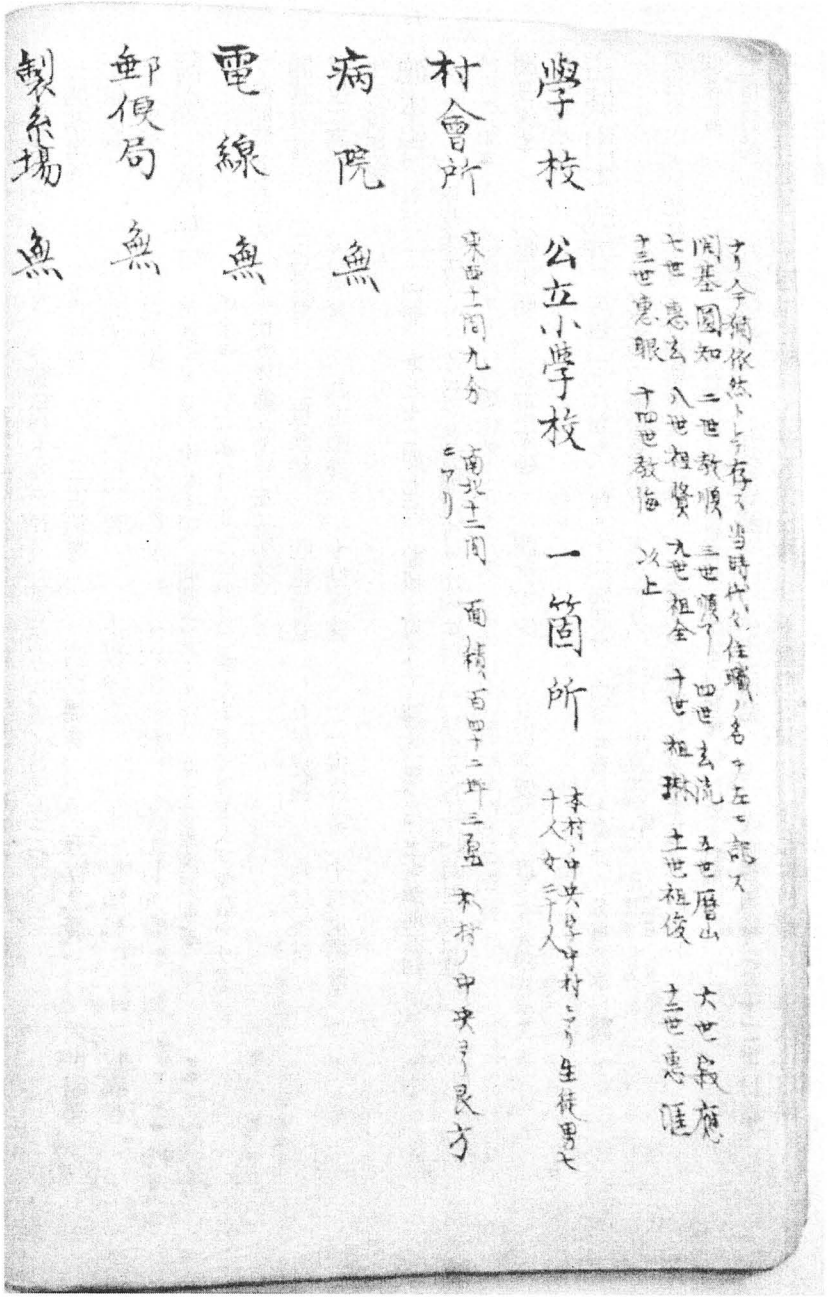
古城山本成寺

東西二十六間半、南北十四間四分、面積三百八十一坪六分日蓮宗日興門派西京東山要法寺ノ末寺ナリ、本村ノ東方ニアリ、元和二年ノ頃日尭上人ノ開基ナリ、今猶依然トシテ存ス、当寺代々住職ノ名ヲ左ニ記ス、

開基日尭　二世日養　三世日宣　四世日慶　五世日諫　六世日耀
七世日壽　八世日相　九世日隨　十世日吾　十一世日地　十二世日看
十三世日定　十四世日健　十五世日玲　十六世日栄　十七世日貞　十八世日保
十九世日浄　二十世日專　二十一世日順　二十二世日看　以上

榮久寺

東西二十間、南北六間半、面積百廿一坪、真宗東瓜西京東本願寺ノ末寺ナリ、本村ノ艮方岩阪ノ里ニアリ、慶長年中僧円知ノ開基



学校　公立小学校　一箇所　本村ノ中央字中村ニアリ生徒男七十人女三十人

村會所　東西十間九分　南北十二間　面積百四十二坪三厘　本村ノ中央ヨリ艮方ニアリ

病院　無

電線　無

郵便局　無

製糸場　無

ナリ、今猶依然トシテ存ス、当時代々住職ノ名ヲ左ニ記ス、

開基圓知　二世教順　三世順了　四世玄流　五世曆山　六世寂應
七世恵玄　八世祖賢　九世祖全　十世祖琳　十一世祖俊　十二世恵涯
十三世恵眼　十四世教海　以上

学校　公立小学校　一箇所　本村ノ中央字中村ニアリ、生徒男七十人、女二十人

村會所　東西十一間九分　南北十二間　面積百四十二坪三原　本村ノ中央ヨリ艮方ニアリ、

病院　無

電線　無

郵便局　無

製糸場　無

大工作場　無
官用地　無
城地屋隊　無
氣候　本村地ハ山ニ據ル西南ハ丘山ヲ負ヒ東ヲ襟ハ平野ナリ氣候夏炎冬寒ノ度暖計極暑凡九十五度極寒凡三十五度
風俗　淳朴古ヲ存スル者九分且家産ノ如キ山下僻隅ノ地ニシテ富者四分貧者大分ニ居ル
人物　無
宿町　無

大工作場　無

官用地　無

城地　陳屋　無

氣候　本村北ニ山嶺ヲ負ヒ、西南ニ丘山ヲ負ヒ、東ヨリ巽ハ平野ナリ、氣候夏炎、冬寒寒、暖計極署凡九十五度、極寒凡三十五度

風俗　淳朴古ヲ存スル者九分、且家産ノ如キ山下僻隅ノ地ニシテ、富者四分貧者大分ニ居ル、

人物　無

宿町　無

古跡

砦城古址　本村乾ノ方ニアリ東西凡三十間南北二十間四字形ナリ堀ノ跡存ス　俗ニ吾楠寺ノ東ノ塙山ト唱フ然レ氏築城ノ年月ト並ニ何人ノ　相伝フルニ此古址ハ由緒未盤不詳　何ノ時何人ノ旅館跡ニ砦城ニヤ [illegible]

同古跡　本村坤ノ方字新家ニアリ東西三十間南北三十間四字形ナリ　俗ニ新家ノ城ト云然レ氏築城ノ年月ト並ニ何合ナル由緒未詳ナラズ

名勝

勝尾寺山　本村乾ノ方ニアリ山内ニ勝尾寺ノ伽藍地観音ノ霊場アリ二前記山ノ部ニ詳記ス

明神水　本村西ノ方ニ在リ神社境内ヨリ水ヲ滴ニ落ル地アリ此水至テ美ナリト

玉ノ井清泉　本村中央字山ノ口ニアリ此水至テ美ナリ依テ名水ト云

松ノ井清水　本村ノ中央字同所ニアリ此水モ又美ナリ

物産

米　二千百八十石　余凡十分ノ四ハ日用食物ニ供シ十分ノ六ハ本国灘伊丹大阪清酒ノ醸米トス其質又美ナリ

裸麦　二百六十四石日用食物ニ供ス

小麦　四十六石八斗日用食物ニ供ス

糯米　八十七石日用食物ニ供ス

大豆　十三石　日用ハ味噌醤油ノ用トス

蠶豆　二十九石日用食物ニ供ス

菜種　百三十九石八斗近村絞油ノ家ニ売ル

西瓜　五百個池田ノ市ニ出ス

真瓜　千五百個池田村近村ノ市ニ出ス

李　三升入八百籠大阪天満市ニ出ス

桃　無シ

枇杷　一貫目入五百籠天満ノ市ニ出ス

綿　四百斤日用衣服縫糸ニ供ス

大根　八千本日用食物ニ供ス

古跡

砦城古趾 本村ノ乾方ニアリ、東西凡三十間、南北三十間、回字形ヲナシ堀ノ跡存ス、俗ニ善福寺原ノ城山ト唱フ、然シ氏築城ノ年月日並ニ何人ノ楯籠リシ砦ナルヤ

同古跡 本村ノ坤方字新家ニアリ、東西三十間、南北三十間、回字形ヲナス、俗ニ新家ノ城ト云、然シ氏築城ノ年月日並ニ何合戦ノ時何人ノ楯籠リシ砦城ナルヤ、是又由緒来歴詳ナラス、

名勝

勝尾寺山 本村ノ乾方ニアリ、山内ニ勝尾寺ノ伽藍地観音ノ霊場アリ、前記山ノ部ニ詳記ス、

明神水 本村ノ西方帝釈寺ニアリ、手足ノ痛ニ附テ功アリ、此水至テ美ナリトス、

玉ノ井清泉 本村ノ中央字山ノ口ニアリ、此水至テ美ナリ、依テ名水ト云、

松ノ井清水 本村ノ中央字同所ニアリ、此水モ又美ナリ、

物産

米 二千百八十石　余凡十分ノ四ハ日用食物ニ供シ、十分ノ六ハ本國灘、伊丹、大阪清酒ノ・米トス、其質美ナリ、

裸麥 三百六十四石日用食物ニ供ス、

小麦 四十六石八斗日用食物ニ供ス、

糯米 八十七石日用食物ニ供ス、

大豆 十三石日用ノ味噌醤油トス、

蠶豆 二十九石日用食物ニ供ス、

菜種 百三十九石八斗近村絞油ノ家ニ賣ル、

西瓜 五百個池田ノ市ニ出ス、

真瓜 千五百個池田村茨木村ノ市ニ出ス、

李 三舛入八百籠大阪天満市ニ出ス、

桃無シ 一貫目入五百籠天満ノ市ニ出ス、

枇杷 四百斤日用衣類縫糸ニ供ス、

綿 八千本日用食物ニ供ス、

大根

民業　男　農業ヲ勤ル者二百廿七戸
雑業ヲ勤ル者　三戸
薬職ヲ成ス

女　農業ヲ勤ル者五百廿四人　縫糸及ヒ雑
業ヲ勤ルモノ　一人　其余男女トモ閑暇ニ

右村誌草稿書上候也

明治十四年　四月

右村
總代　池上忠兵衛　印
用掛　森惣兵衛　印
仝　苗代万右衛門　印
戸長　植田治兵衛　印

（十六）—②

民業　男　農業ヲ勤ムル者二百廿七戸　女　農業ヲ勤ムル者五百六十四人、縫糸及ヒ雑業ヲ勤ムル者　三　戸　業ヲ勤ムルモノ五人、其餘男女トモ閑暇ニ藁職ヲ成ス、

右村誌草稿書上候也

明治十四年　四月

右村

総代　池上忠兵衛　印

用掛　森　惣兵衛　印

仝　苗代万右衛門　印

戸長　植田治兵衛　印

【摂津国豊島郡白嶋村差出明細帳】

（白島村共有文書）

白嶋村が領主一橋氏の指示に従い、田畠の面積や収穫高など村の明細を記したもの。白嶋村は文政 6 年（1823）にそれまでの忍藩（埼玉県）阿部氏の領地から幕府の直轄領となり、翌 7 年御三卿の一橋領となる。この明細帳はその時、新領主一橋氏の大坂における役所、「川口御役所」（大阪市西区川口）に白嶋村から「差出」、つまり提出した分の村側の控えである。

内容はまず村全体の収穫高 331 石 3 斗 4 升 7 合、耕地面積 32 町 3 反 9 畝 3 歩をあげ、以下、田・畠それぞれ上・中・下・下々の四段階にランク付けして、面積、石盛（1 反あたりの標準収穫量）、面積に石盛を掛けあわせた分米（つまりその面積分の収穫高）、及び免除分が列記されている。

続いて灌漑に必要な池や樋（配水管）などの大きさや構造が非常に詳しく記されており、用水を重視していることが窺える。その他、村内の寺社について建築物一つ一つに至るまで、竈数（世帯数）、人別（人口）など事細かな情報が記されている。

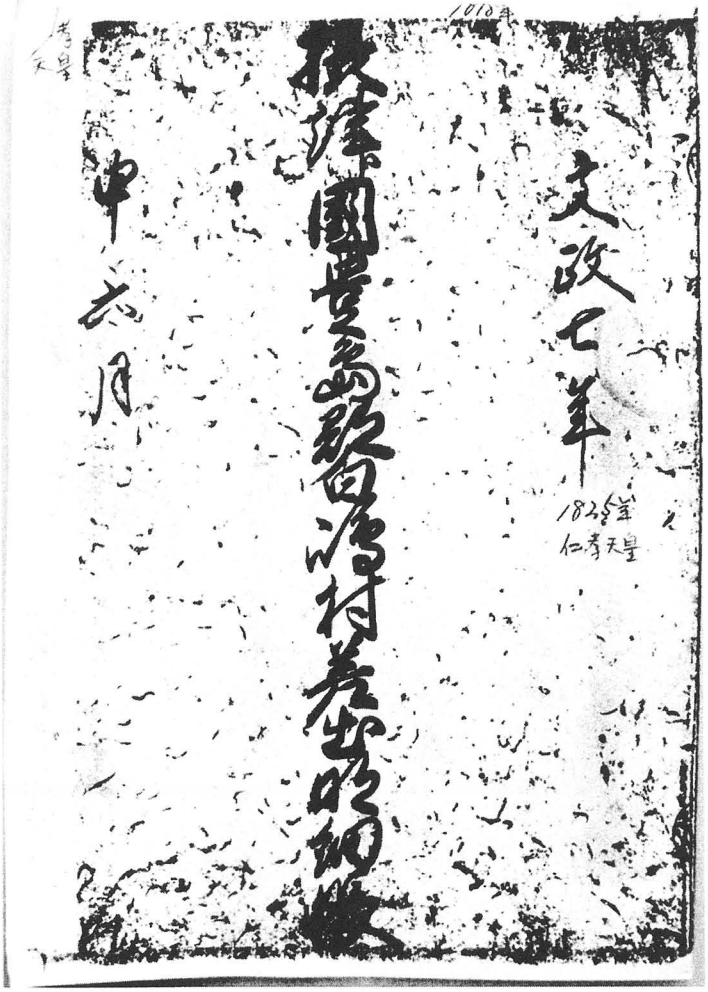
また当史料からは当時の村内部の制度についても概要がわかる。「非人番」と呼ばれる各種取り締まり、犯人探索などをつとめる賤民身分の者がいたこと、村役人として「庄屋」が一人おり、その給料が 4 石余あったこと、他にも庄屋の補佐として「年寄」が 2 人、人足をつとめる「定夫」1 人などがおり、彼らにも給料が支給されたことなどである。

さらに田植え、稲刈りなどの時期や干鰯のような金銭で購入する肥料の使用状況、土地を質に入れるときの相場や小作料の相場など白嶋村の農業の実態についても詳しく記されており、全体を通して当時の村がいかに農業に重点を置いていたかがよくわかる。

最後に庄屋・年寄・百姓代ら村役人 4 名が連署し、偽りなきことを記している。なおこの明細帳は提出分以外に同内容のものが 3 冊作成され、庄屋・年寄ら 3 家それぞれに配ったうちの 1 冊である。

【摂津国豊島郡白嶋村差出明細帳】

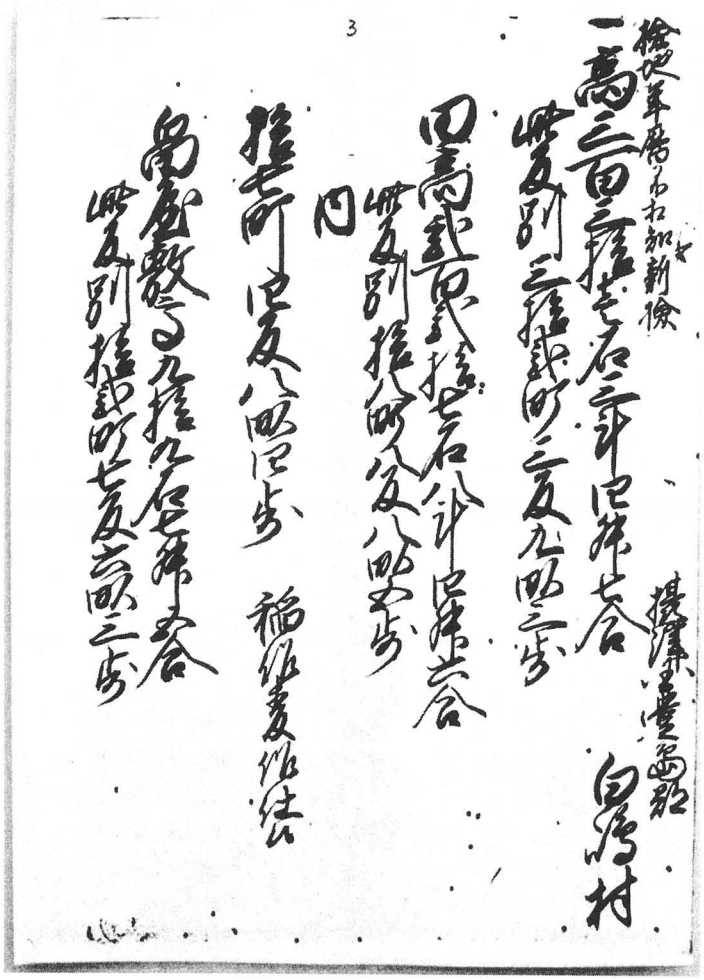
（一）



文政七年

摂津国豊島郡白嶋村差出明細帳

申六月



検地年暦不相知新検　　摂津国豊島郡

一高三百三拾壱石三斗四升七合　　白島村

此反別三拾弐町三反九畝三歩

田高弐百弐拾七石八斗四升六合

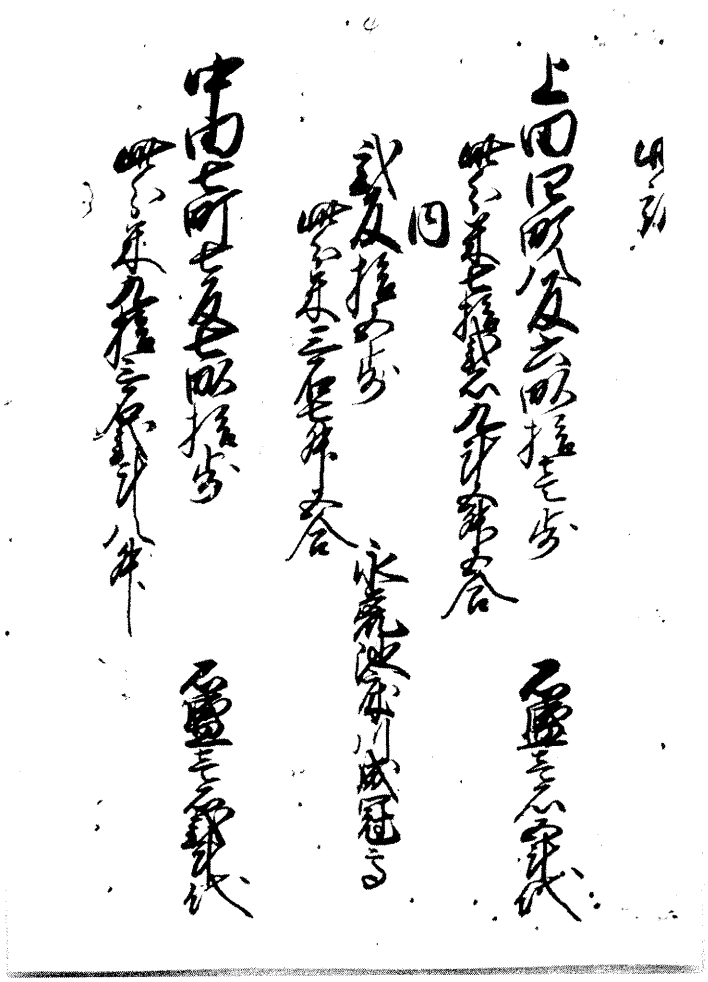
此反別拾八町八反八畝五歩

内

拾七町四反八畝四歩　稲作麦作仕候

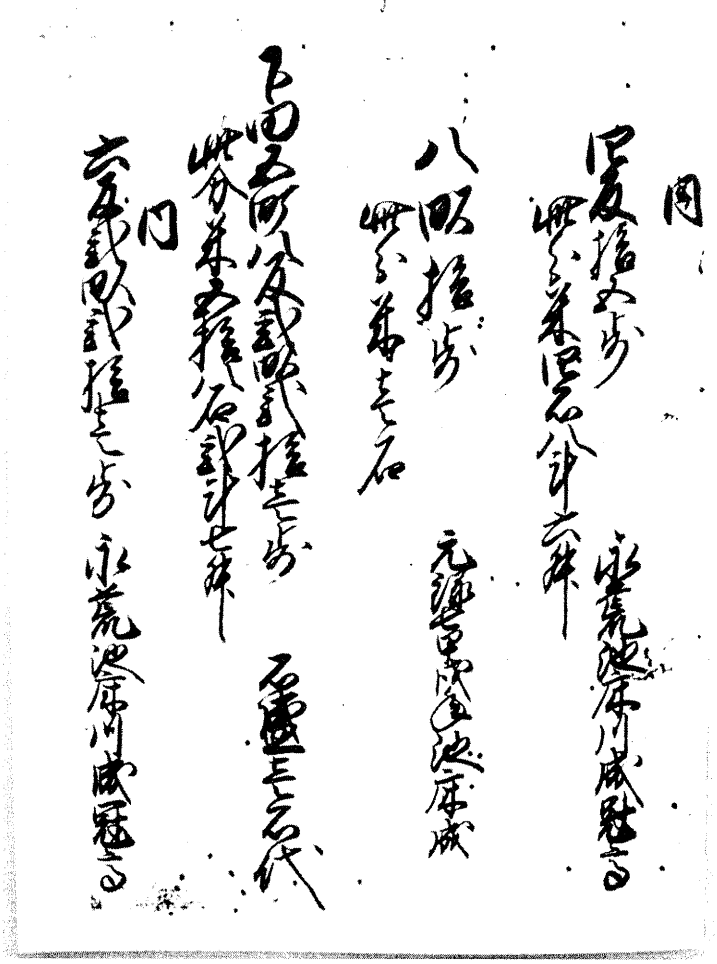
畠屋敷高九拾九石七升五合

此反別拾弐町七反六畝三歩



上田四町八反六畝拾壱歩　石盛壱石五斗代
此分米七拾弐石九斗五升五合
内
弐反拾五歩　永荒地池床川成冠高
此分米三石七升五合

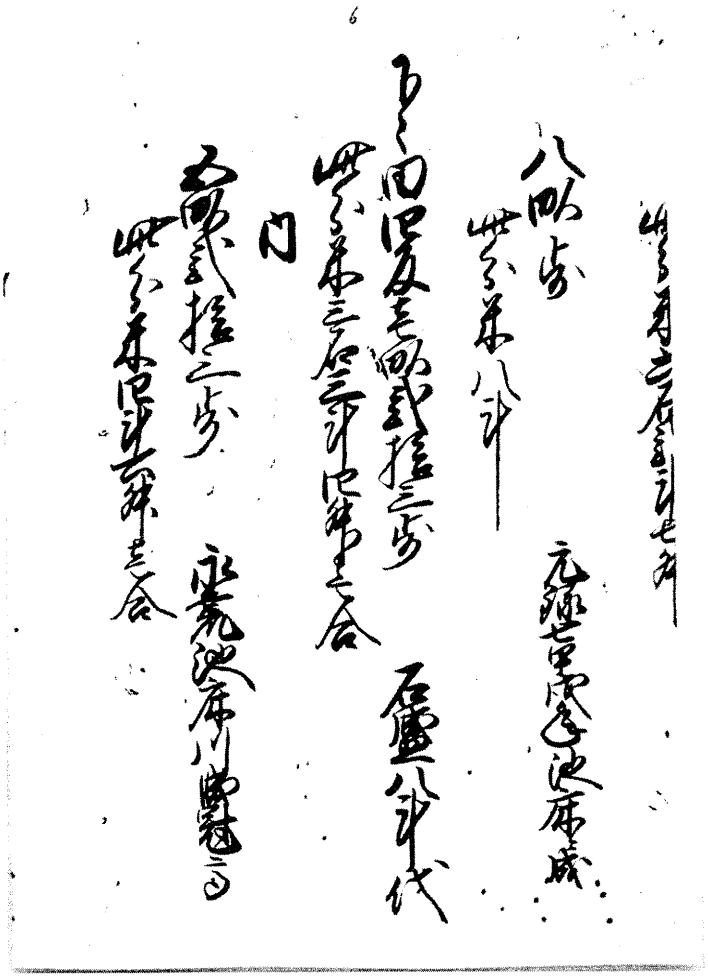
中田七町七反七畝拾歩　石盛壱石二斗代
此分米九拾三石二斗八升



四反拾五歩　永荒地床川成冠高
此分米四石八斗六升

八畝拾歩　元禄七甲戌年池床成
此分米壱石

下田五町八弐畝弐拾壱歩　石盛壱石代
此分米五拾八石弐斗七升
内
六反弐畝弐拾壱歩永荒地池床川成冠高

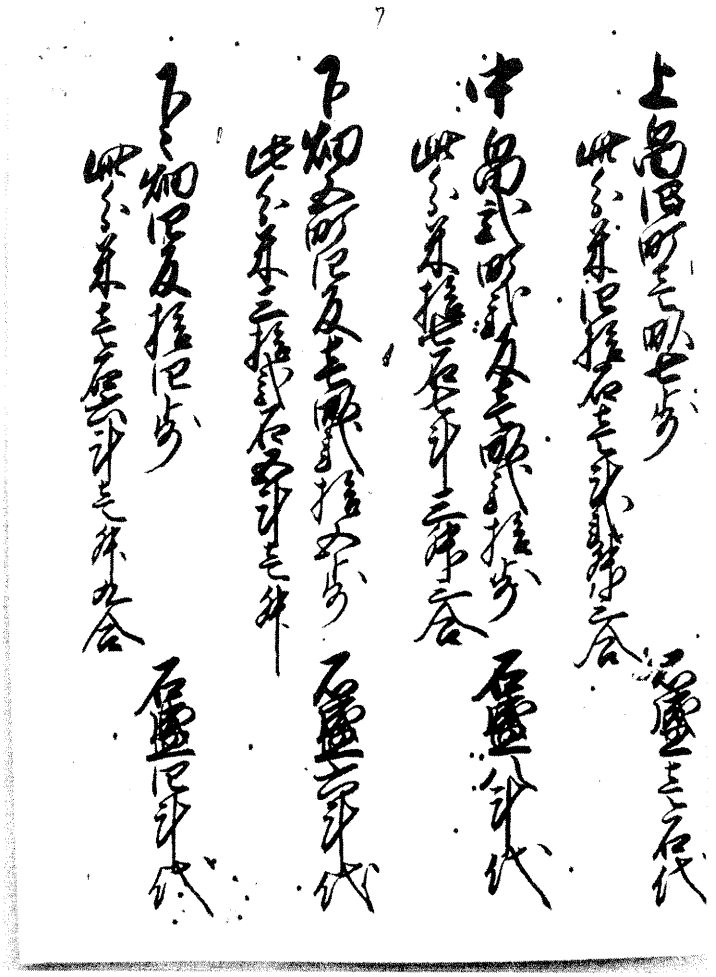


八畝歩　　元禄七甲戌年池床ニ成
此分米八斗

下々田四反壱畝弐拾三歩　　石盛八斗代
此分米三石三斗四升壱合

内

五畝弐拾三歩　　永荒地池床川成冠高
此分米四斗



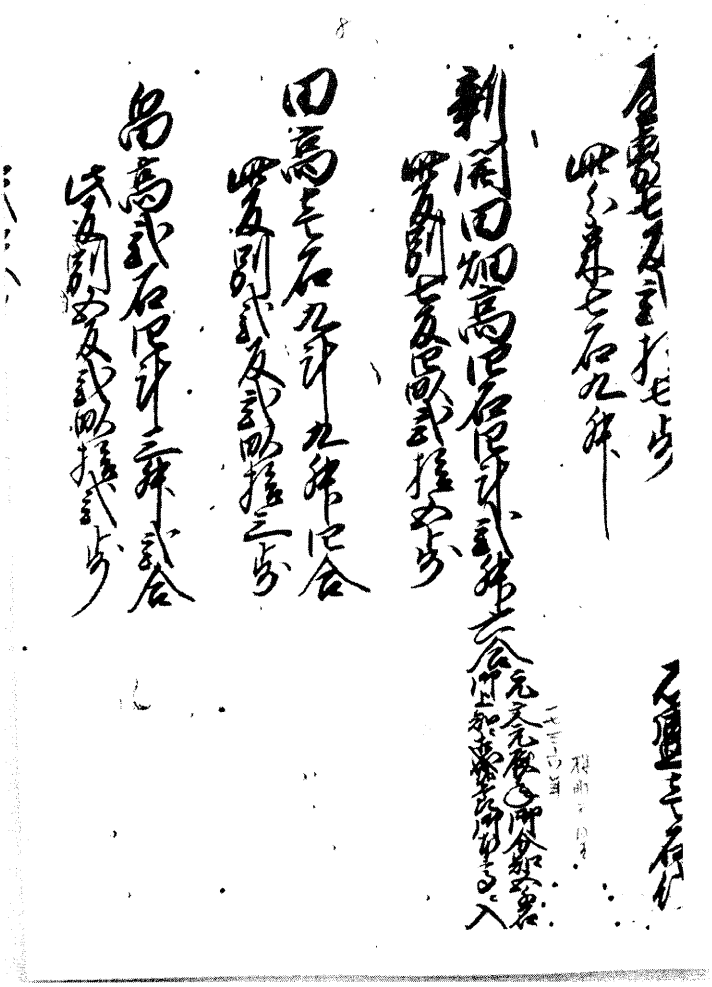
上畠四町壱畝七歩　石盛壱石代
此分米四拾石壱斗弐升三合

中畠弐町弐反壱畝弐拾歩　石盛八斗代
此分米拾七石七斗三升三合

下畑五町四反壱畝弐拾五歩　石盛六斗代
此分米三拾弐石五斗壱升

下々畑四反拾四歩　石盛四斗代
此分米壱石六斗壱升九

（七）

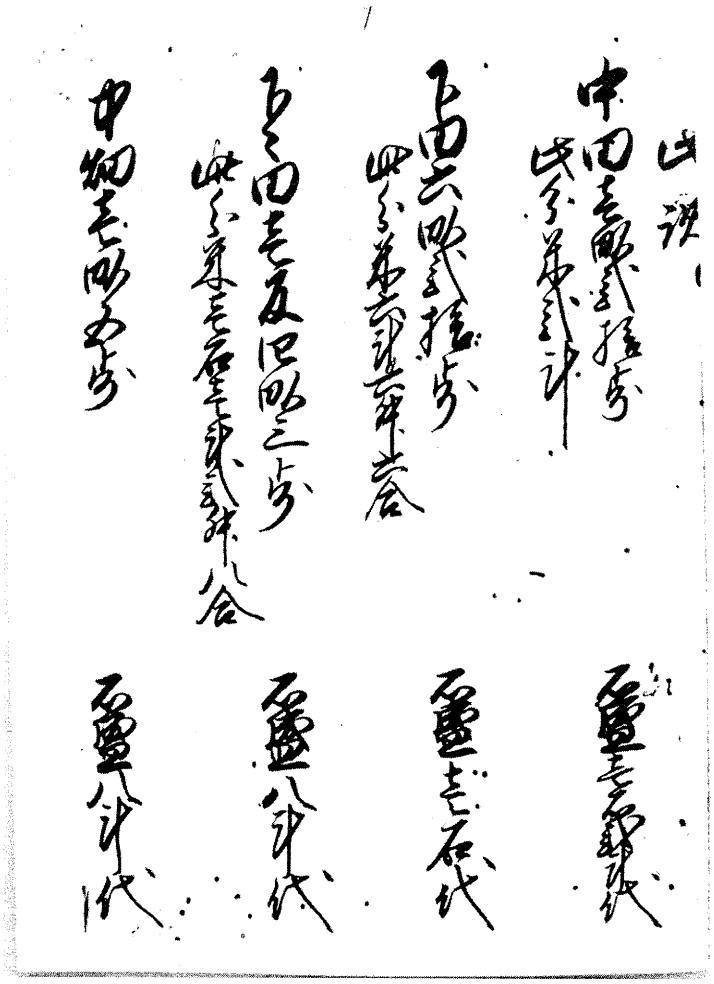


屋敷七反弐拾七歩　石盛壱石代
此分米七石九升

新開田畑高四石四升四斗二升六合元文元辰年御分知五千石
此反別七反四畝弐拾五歩

田高壱石九斗九升四合
此反別弐反弐畝拾三歩

畠高弐石四斗三升弐合
此反別五反弐畝拾弐歩



此訳

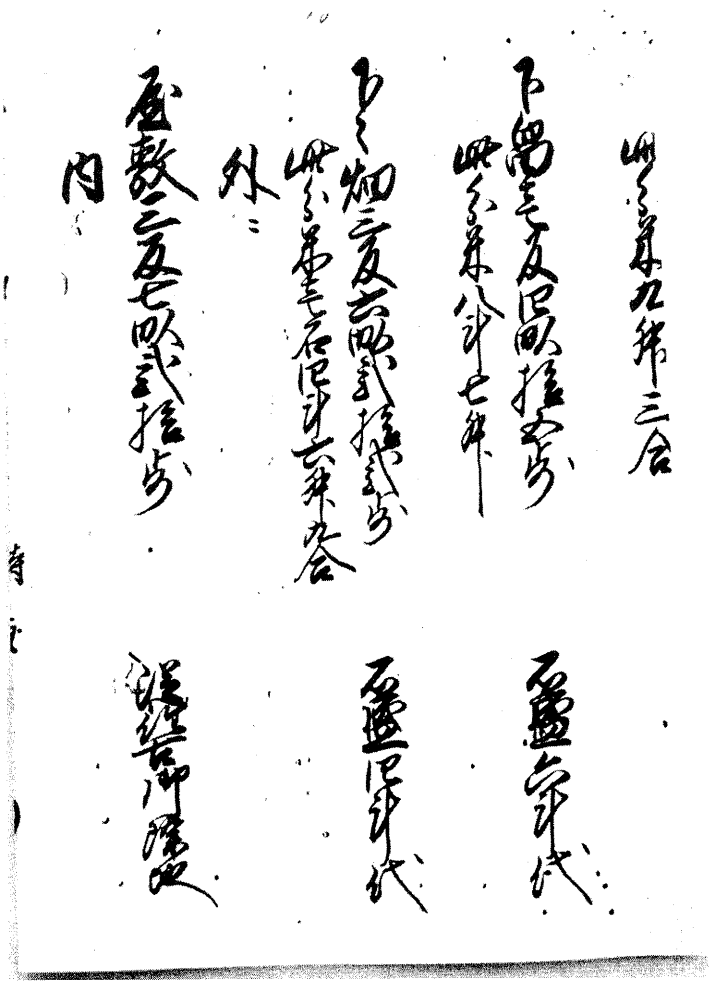
中田壱畝弐拾歩　石盛壱石弐斗代
此分米弐斗

下田六畝弐拾歩　石盛壱石代
此分米六斗六升六合

下々田壱反四畝三歩　石盛八斗代
此分米壱石壱斗二升八合

中畑壱畝五歩　石盛八斗代

（九）



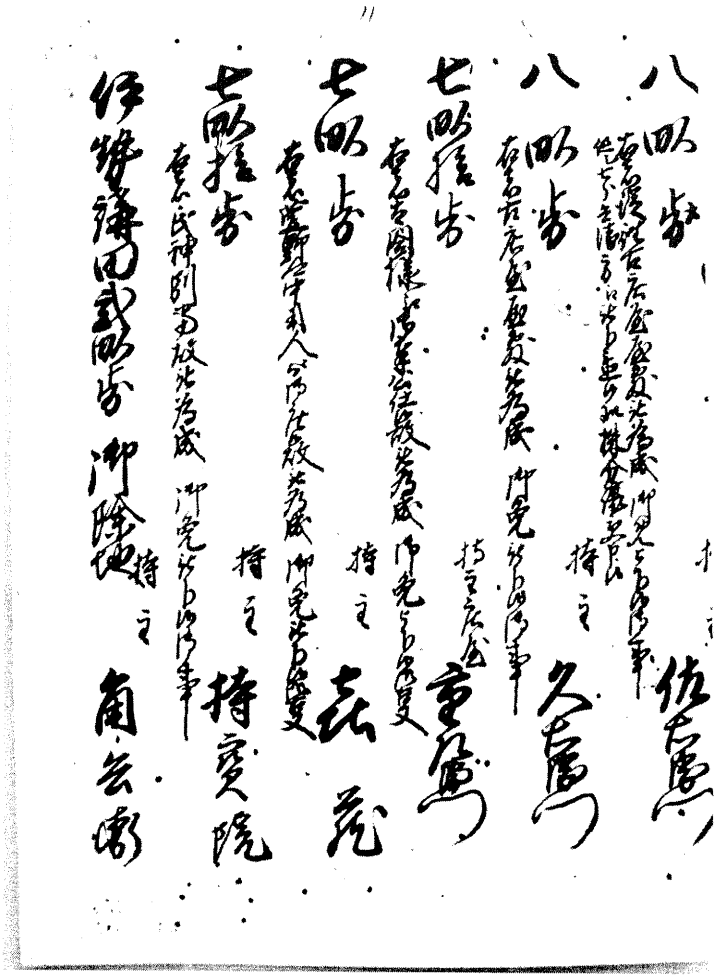
此分米九升三合

下畠壱反四畝拾五歩　石盛六斗代
此分米八斗七升

下々畑三反六畝弐拾弐歩　石盛四斗代
此分米壱石四斗六升九合

外ニ

屋敷三反七畝弐拾歩　従往古御除地
内



八畝歩　　持主　佐右衛門
右者従往古庄屋屋敷被為成御免被下候御事
但シ七郎兵衛方江被下置候処株分譲受申候

八畝歩　　持主　久右衛門
右者古庄屋屋敷被為成　御免被下候御事

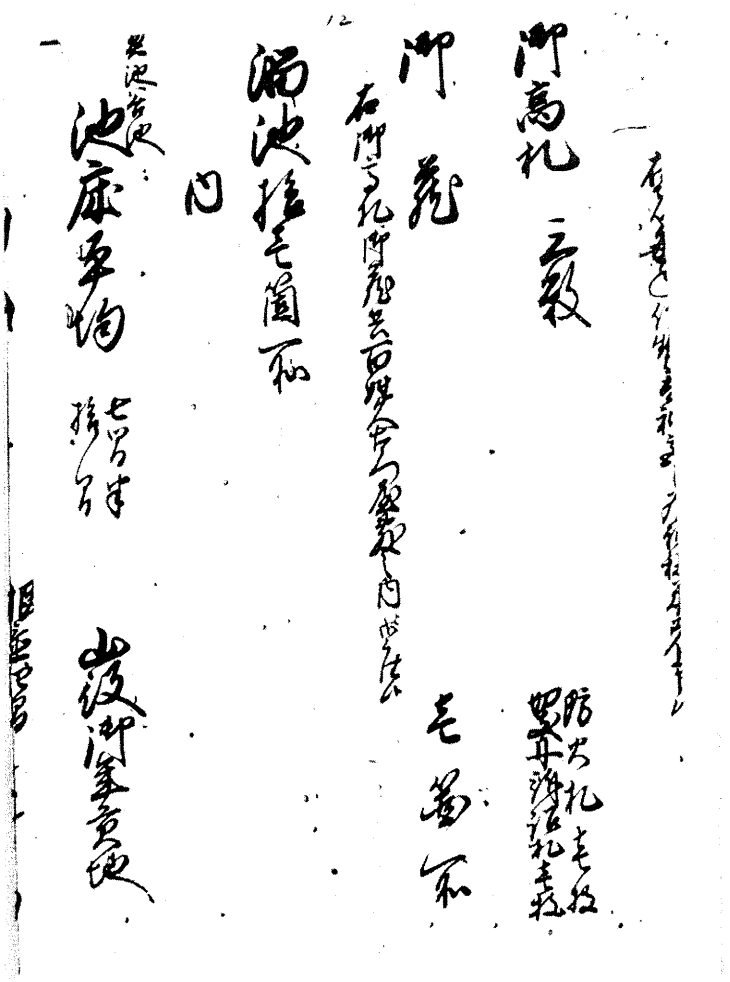
七畝拾歩　　持主庄屋　重左衛門
右者太閤様江御奉公仕候故被為成　御免被下候御事

七畝歩　　持主　喜蔵
右者萱野郷中用心ニテ御座敷被為成御免被下候御事

七畝拾歩　　持主　持寶院
右者氏神別当故被為成　御免被下候御事

伊勢講田弐畝歩　御除地　　持主　角兵衛

（十一）



右者毎年伊勢□神宮□為□□米差上申候

御高札　三数　　防火札壱枚
　　切支丹訴訟札壱枚

御蔵　　壱箇所

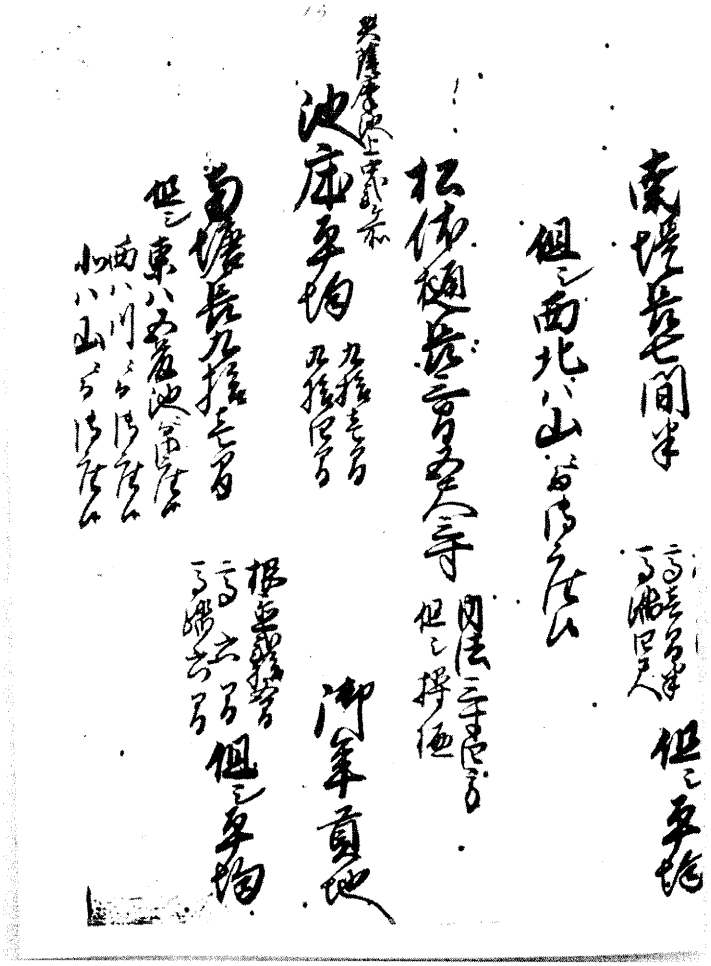
右御高札御蔵共百姓久右衛門屋敷之内ニ御座候

溜池拾壱箇所

内

奥池谷池　七間半
池床平均　拾間

山役御年貢地



南堤長七間半　根置四間　高壱間半　馬踏四尺　但シ平均
但シ西北ハ山ニテ御座候

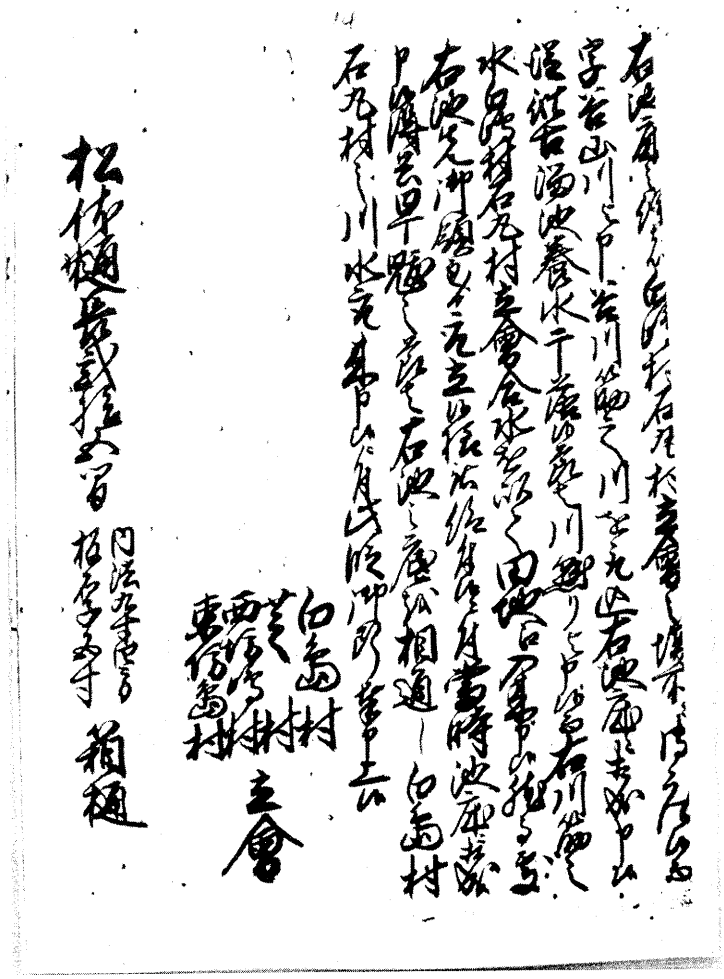
松体樋長三間五尺三寸　内法三寸四方　但シ操樋

御年貢地

奥薩摩池上中弐ケ所
池床平均　九拾壱間　九拾四間

南塘長九拾壱間　根置弐拾五間　高　六　間　馬踏六間　但シ平均
但シ東ハ五藤池ニテ御座候
西ハ川ニテ御座
北ハ山ニテ御座候

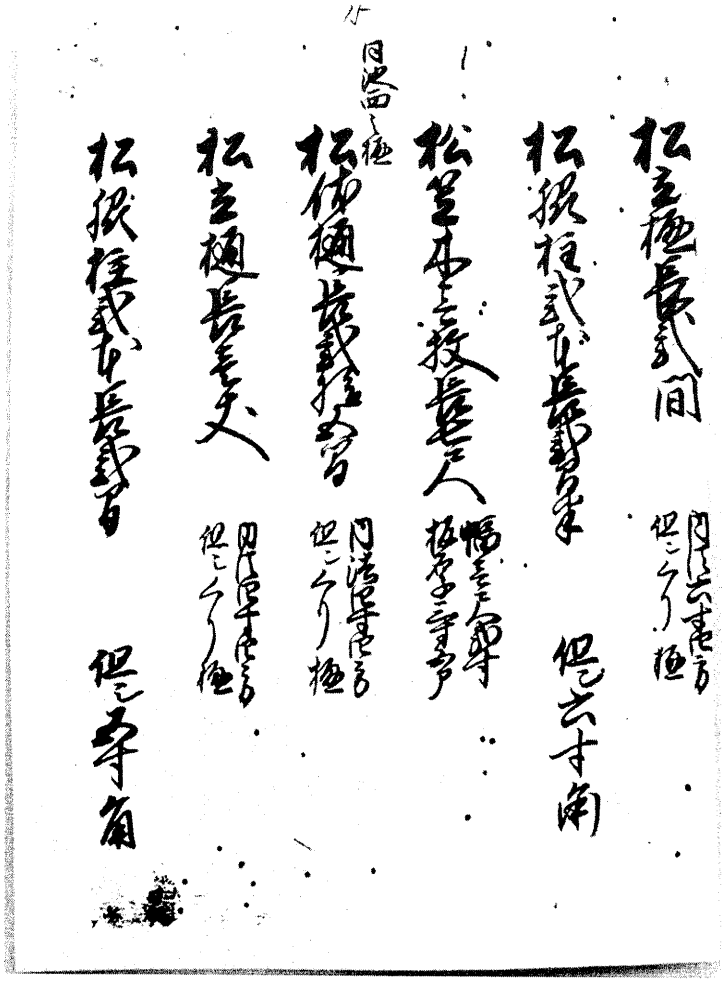
（十三）



右池床之件者白嶋村石丸村立會之場所ニ御座候テ
字谷山川ト申谷川筋之川を取込、右池床ニ相成申候、
従往古溜池養水干落候節者川懸りト申候テ、右川筋之
水白嶋村石丸村立會合水を以て田地江入来申候、然る處
右池先御領主ヨリ取立候様被仰付候ニ付、當時池床ニ相成
申候得共、旱魃之節者右池之底を相通し白島村
石丸村之川水取来申候ニ付、此段御断奉申上候、

白島村
芝　村　立會
西坊嶋村
東坊島村

松体樋長弐拾五間　内法九寸四方　箱樋
板厚五寸



松立樋長弐間　内法六寸四方　但シくり樋

松脇柱弐本長弐間半　但シ六寸角

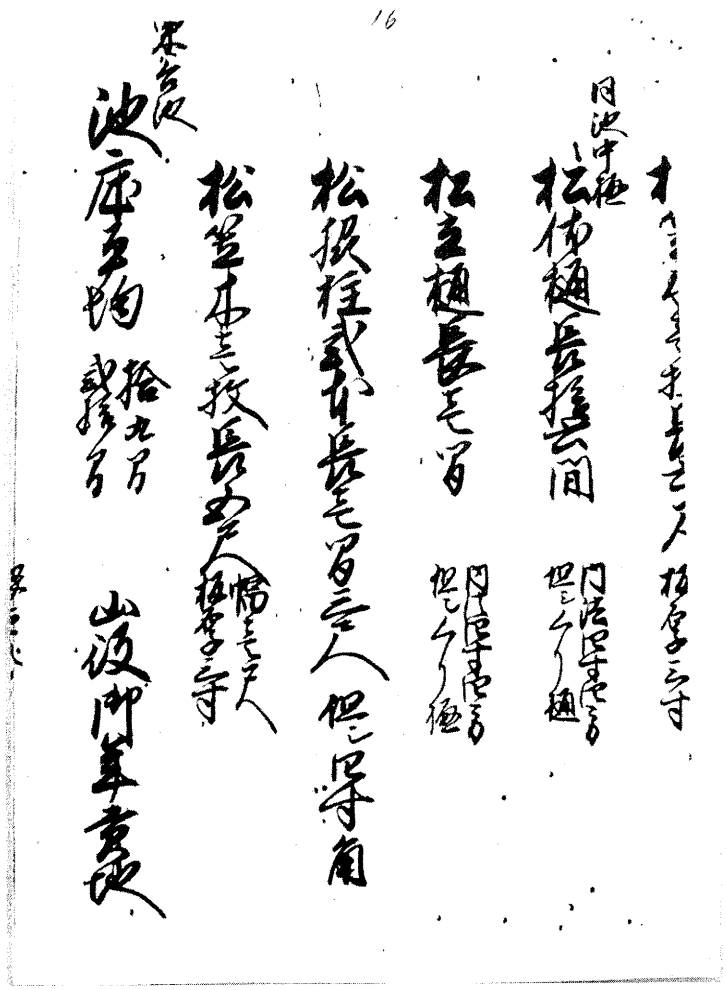
松笠木壱枚長七尺　幅壱尺弐寸　板厚三寸五部

同池西之樋
松体樋長弐拾五間　内法四寸四方　但シくり樋

松立樋長壱丈　内法四寸四方　但シくり樋

松脇柱弐本長弐間　但シ五寸角

（十五）



松笠木壱枚長六尺　板厚三寸

同池中樋
松体樋長拾六間　内法四寸四方　但シくり樋

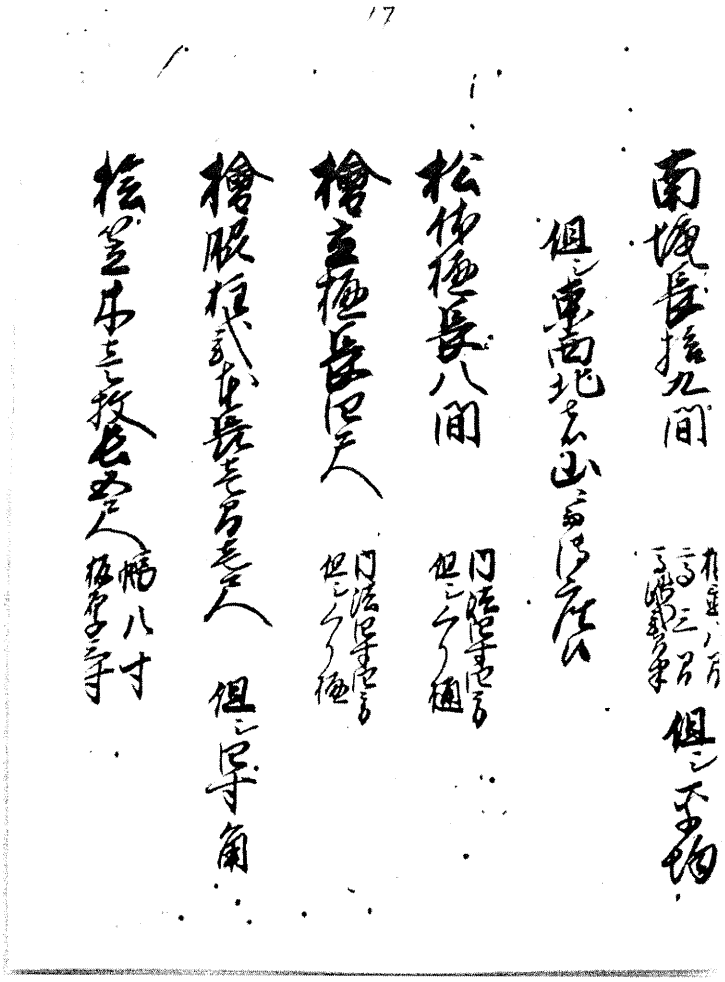
松立樋長壱間　内法四寸四方　但シくり樋

松脇柱弐本長壱間三尺　但シ四寸角

松笠木壱枚長五尺　幅壱尺　板厚三寸

東谷池
池床平均　拾九間　弐拾間

山役御年貢地



南塘長拾九間　根置八間　高三間　但シ平均　馬踏弐間半

但シ東西北者山ニテ御座候

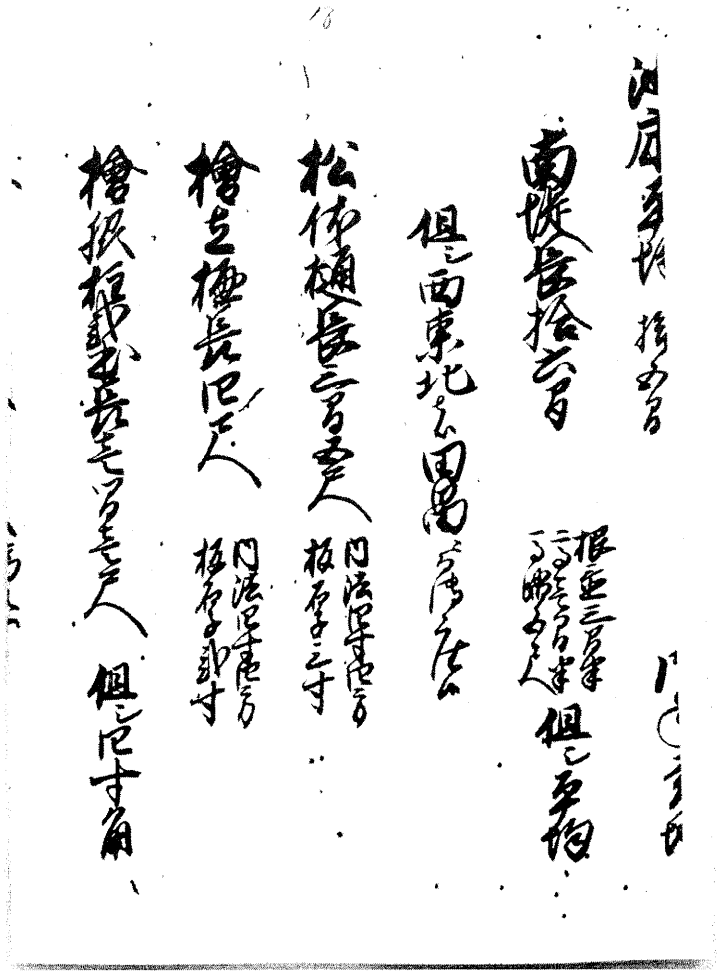
松体樋長八間　内法四寸四方　但シくり樋

檜立樋長四尺　内法四寸四方　但シくり樋

檜脇柱弐本長壱間壱尺　但シ四寸角

桧笠木壱枚長五尺　幅八寸　板厚三寸

（十七）



池床平均　拾五間　　御年貢地

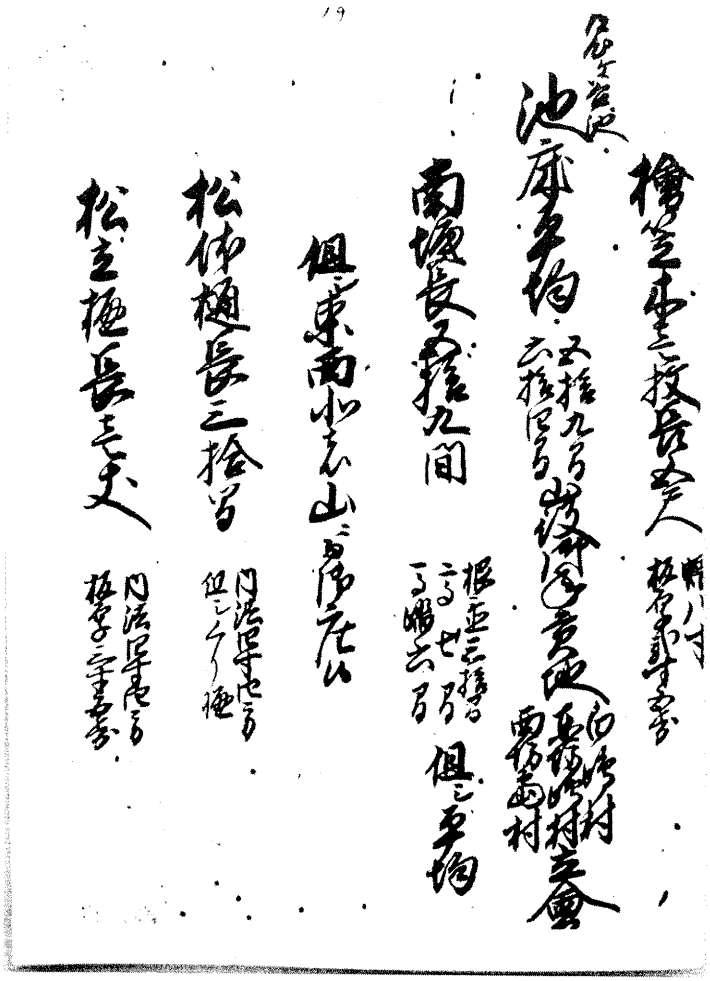
南堤長拾六間　根置三間半　高壱間半　馬踏五尺　但シ平均

但シ西東北者田畠ニテ御座候

松体樋長三間五尺　内法四寸四方　板厚三寸

檜立樋長四尺　内法四寸四方　板厚弐寸

檜脇柱弐本長壱間壱尺　但シ四寸角



檜笠木壱枚長五尺　幅八寸
板厚弐寸五歩

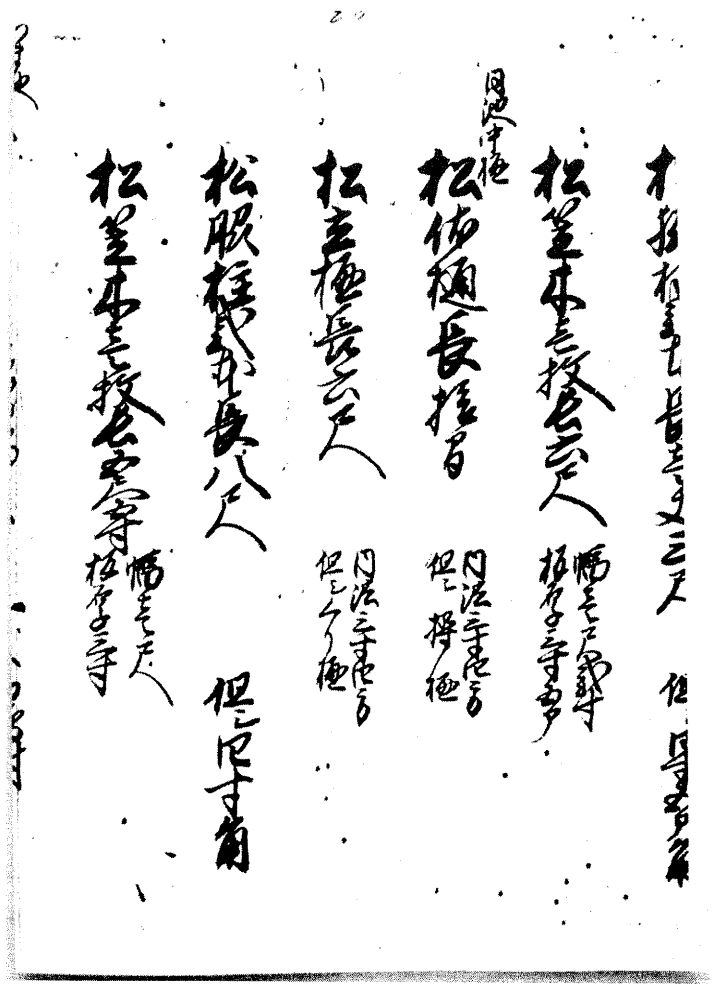
導心ケ谷池
池床平均　五拾九間　山役御年貢地　白嶋村
六拾四間　東坊嶋村　立會
西坊嶋村

南塘長五拾九間　根置三拾間
高　七　間　但シ平均
馬踏六間

但シ東西北者山ニテ御座候

松体樋長三拾間　内法四寸四方
但シくり樋

松立樋長壱丈　内法四寸四方
板厚三寸五歩



松脇柱弐本長壱丈三尺　但シ四寸五部角

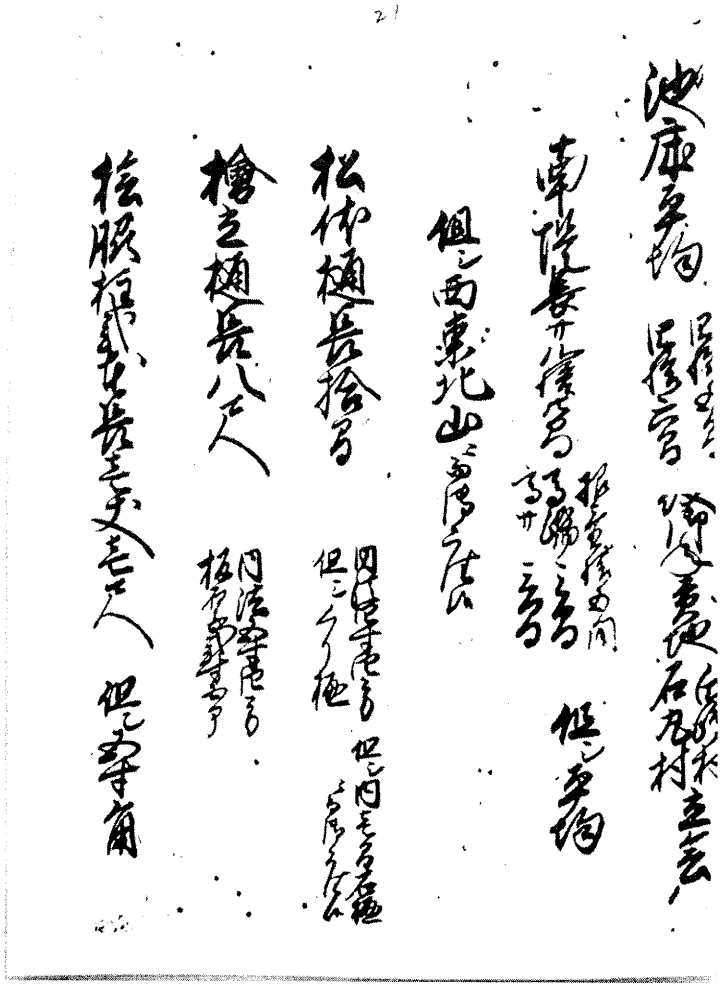
松笠木壱枚長六尺　幅壱尺弐寸　板厚三寸五部

同池中樋
松体樋長拾間　内法三寸四方　但シ操樋

松立樋長六尺　内法三寸四方　但シくり樋

松脇柱弐本長八尺　但シ四寸角

松笠木壱枚長五尺五寸　幅壱尺　板厚三寸



つま池
池床平均　四拾五間　四拾六間　役御年貢地　白嶋村　石丸村　立会

南塘長サ八拾四間　根置拾五間　馬踏三間　高サ三間　但シ平均

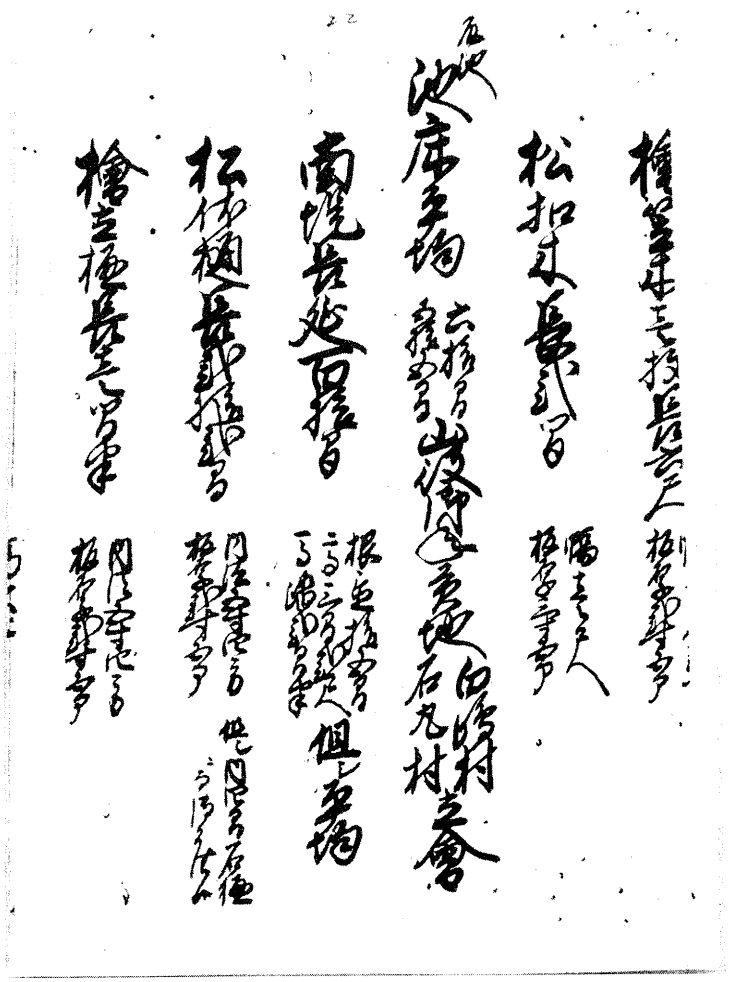
但シ西東北山ニテ御座候

松体樋長拾間　内法四寸四方　但シ内壱間石樋　但シくり樋　ニテ御座候

檜立樋長八尺　内法五寸四方　板厚弐寸五部

桧脇柱弐本長壱丈三尺　但シ五寸角

（二十一）



檜笠木壱枚長六尺　幅□□□　板厚弐寸五部

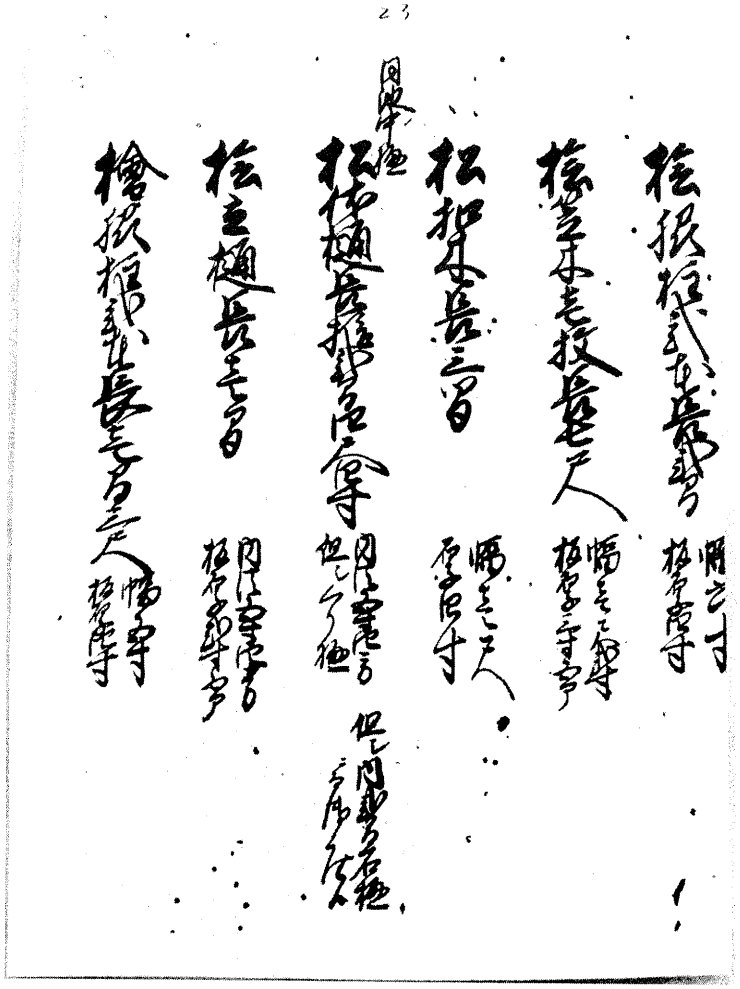
松控木長弐間　幅壱尺　板厚三寸五部

藤池
池床平均　六拾間　五拾五間　山役御年貢地　白鳩村　石丸村　立會

南堤長延百拾間　根置拾五間　高三間弐尺　馬踏弐間半　但シ平均

松体樋長弐拾弐間　内法五寸四方　板厚弐寸五部　但シ内四間石樋ニテ御座候

檜立樋長弐拾弐間　内法五寸四方　板厚弐寸五部



桧脇柱弐本長弐間　幅六寸　板厚四寸

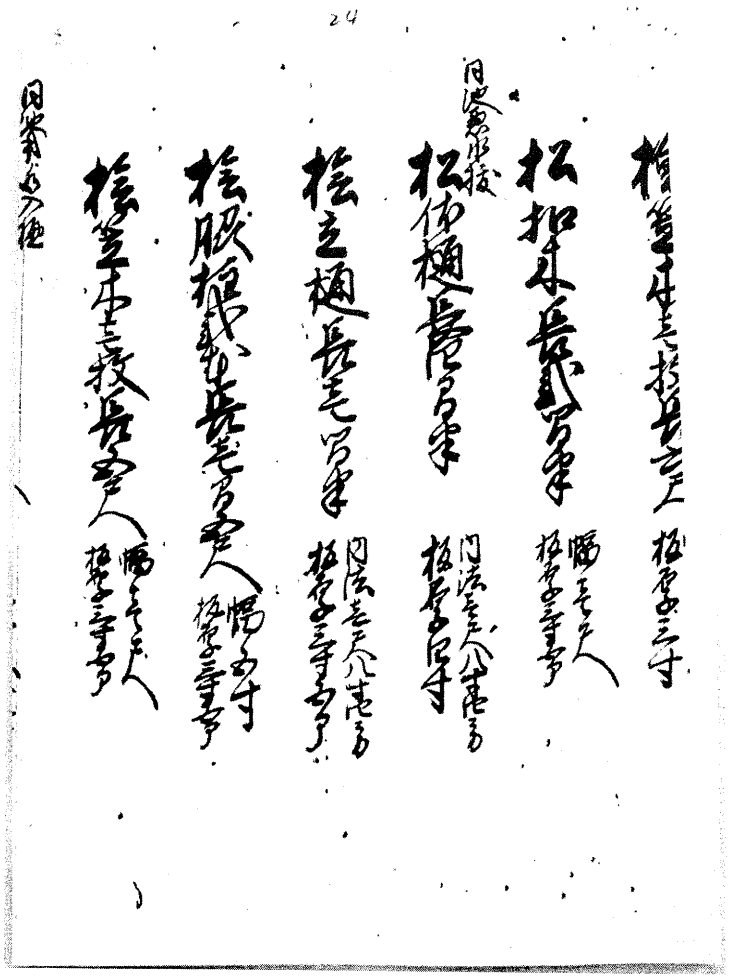
桧笠木壱枚長七尺　幅壱尺弐寸　板厚三寸五部

松控木長三間　幅壱尺　厚四寸

同池中樋
松体樋長拾弐間四尺四寸　内法五寸四方　但シ内弐間石樋　但シくり樋　ニテ御座候

桧立樋長壱間　内法五寸四方　板厚弐寸五部

檜脇柱弐本長壱間三尺　幅五寸　板厚四寸



檜笠木壱枚長六尺　□□□□
板厚三寸

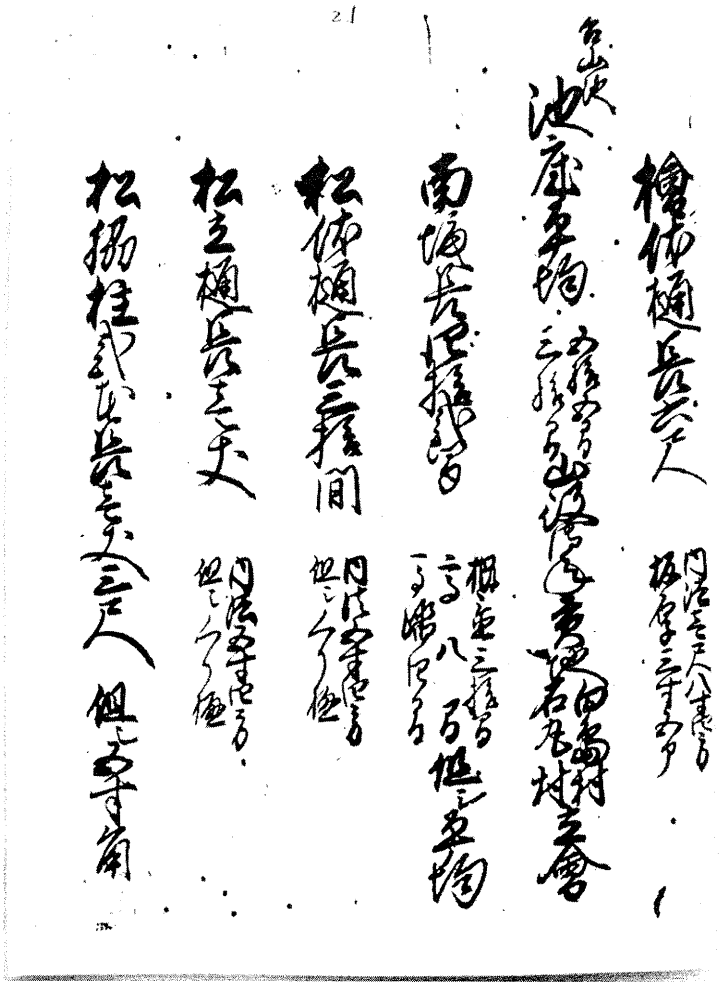
松控木長弐間半　幅壱尺
板厚三寸五部

同池悪水抜
松体樋長四間半　内法壱尺八寸四方
板厚四寸

桧立樋長壱間半　内法壱尺八寸四方
板厚三寸五部

桧脇柱弐本長壱間五尺　幅五寸
板厚三寸七部

桧笠木壱枚長五尺　幅壱尺
板厚三寸七部



同池用水入樋
檜体樋長六尺　内法壱尺八寸四方
板厚三寸五部

谷山池
池床平均　五拾五間　白島村
三拾間　山役御年貢地　石丸村　立會

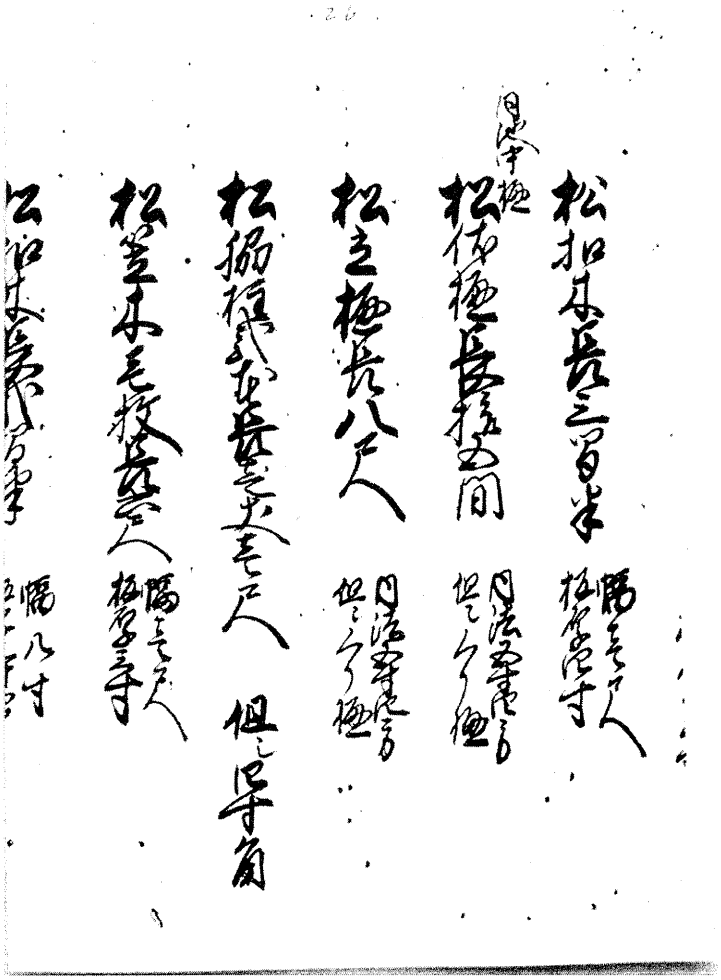
南塘長四拾弐間　根置三拾間
高　八　間　但シ平均
馬踏四間

松体樋長三拾間　内法五寸四方
但シくり樋

松立樋長壱丈　内法五寸四方
但シくり樋

松脇柱弐本長壱丈三尺　但シ五寸角

（二十五）



松控木長三間半　幅壱尺　板厚四寸

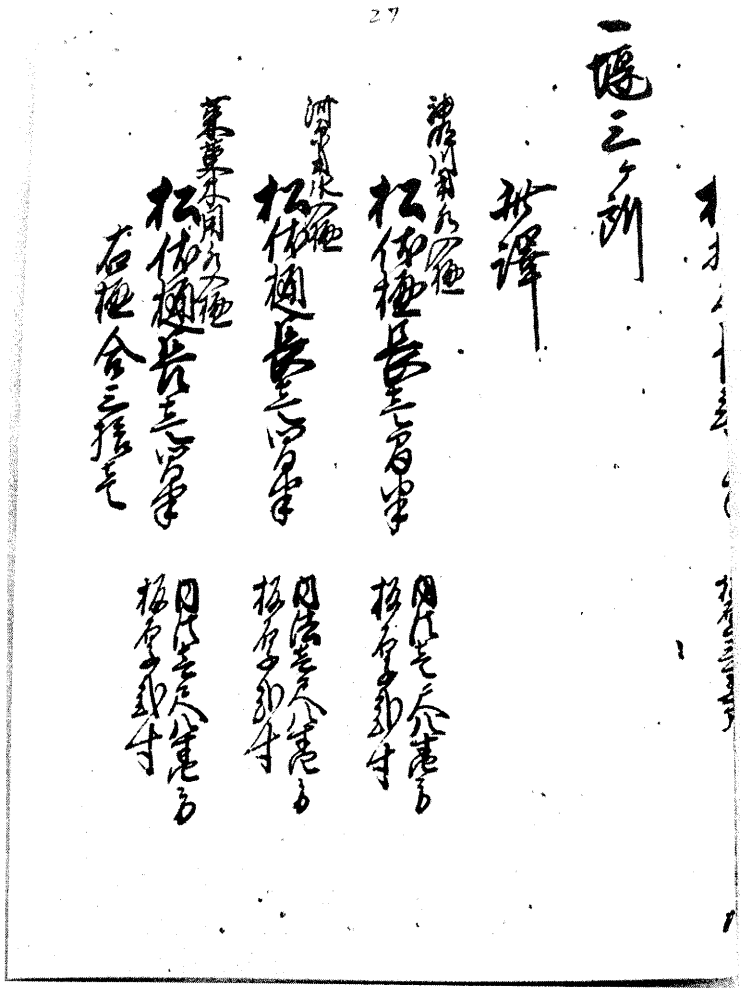
同池中樋
松体樋長拾五間　内法五寸四方　但シくり樋

松立樋長八尺　内法五寸四方　但シくり樋

松脇柱弐本長壱丈壱尺　但シ四寸角

松笠木壱枚長六尺　幅壱尺　板厚三寸

松控木長弐間半　幅八寸　板厚三寸五部



一堰三ヶ所

此譯

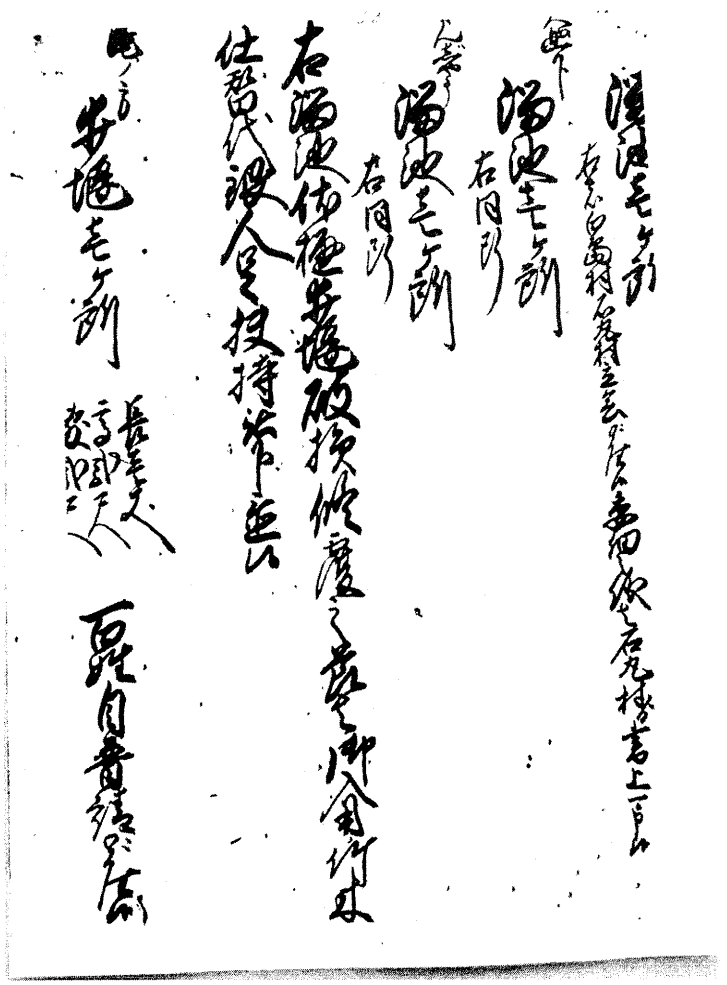
神明川用水入樋
松体樋長壱間半
内方壱尺八寸四方
板厚弐寸

河原用水入樋
松体樋長壱間半
内方壱尺八寸四方
板厚弐寸

薬・木用水入樋
松体樋長壱間半
内法壱尺八寸四方
板厚弐寸

右樋合三拾壱

（二十七）



溜池壱ケ所
右者白島村石丸村立会御座候、委細之儀者石丸村ヨリ書上可申候

□迦下
溜池壱ケ所
右同断

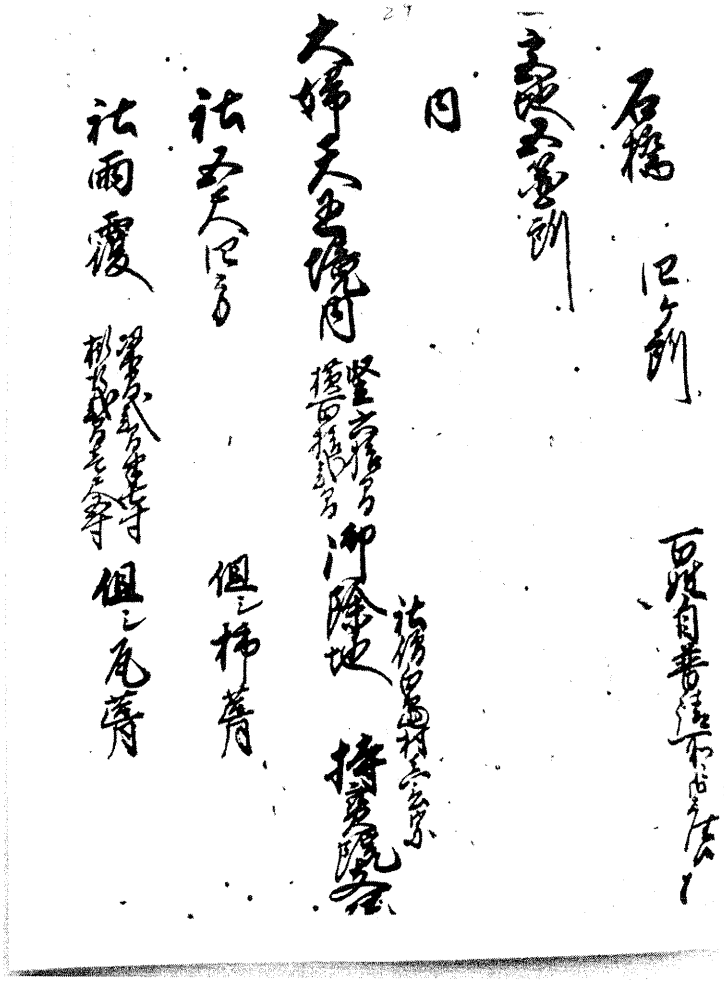
□じやう
溜池壱ケ所
右同断

右溜池体樋井堰破損修覆之節者御入用竹木
仕替代銀人足扶持被下置候

□ノ方
井堰壱ケ所　長壱丈　高弐尺　敷弐尺

百姓自普請ニ御座候

（二十八）



石橋　四ヶ所　百姓自普請所ニ御座候

一宮地五箇所

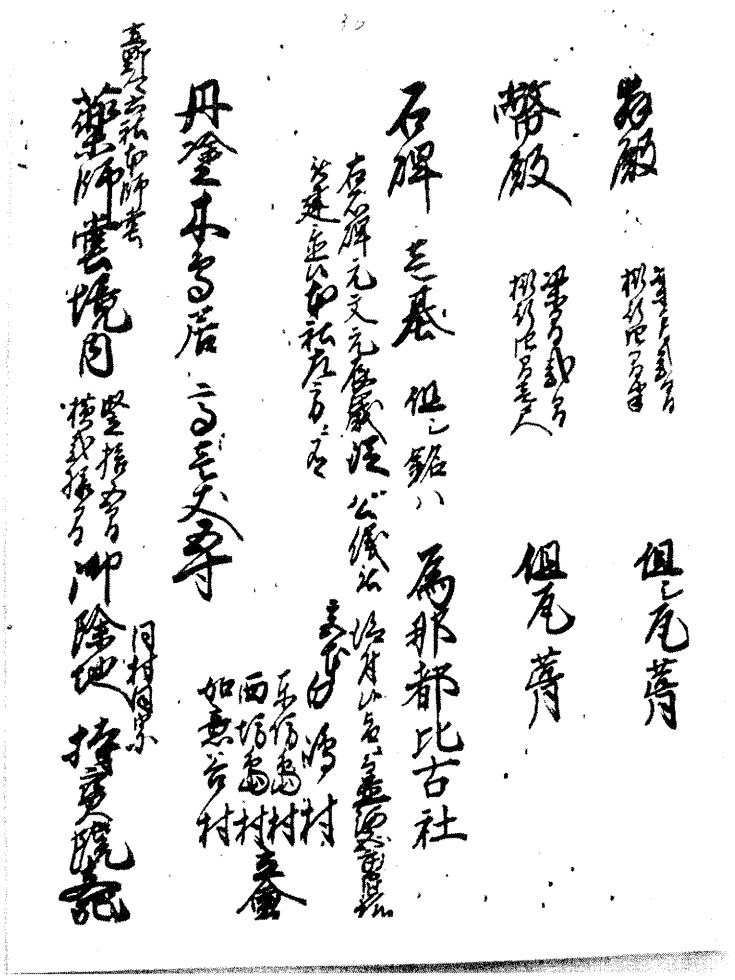
内

大婦天王境内　竪六拾間　横百拾弐間

御除地　社僧白島村真言宗　持寶院支配

社五尺四方　但シ柿葺

社雨覆　梁間弐間半七寸　桁行弐間壱尺五寸　但シ瓦葺



拝殿　梁間弐間　桁行四間半　但シ瓦葺

幣殿　梁間弐間　桁行四間壱尺　但瓦葺

石碑　壱基　但シ銘ハ　為那都比古社

右石碑元文元辰歳従公儀被仰付候旨ニテ並河五□□□

被建置候本社左方ニ有

宮本白嶋村　（五市郎殿カ）

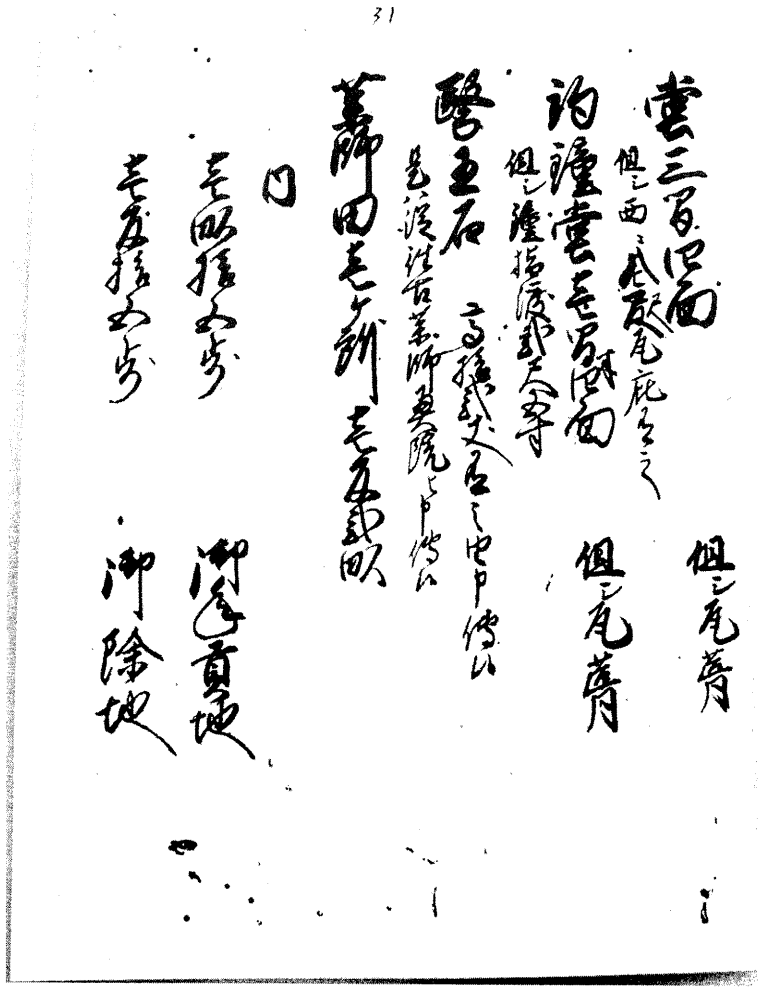
東坊島村

西坊島村　立會

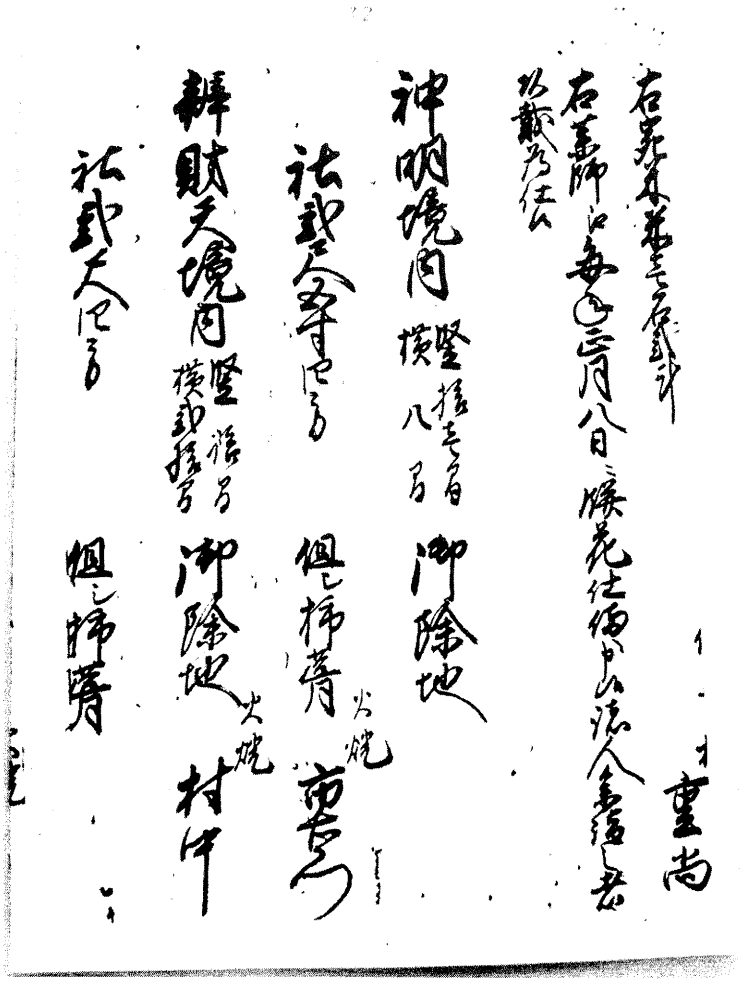
丹塗木鳥居高壱丈五寸　如意谷村

萱野郷六社本師堂

薬師堂境内　竪拾五間　横弐拾間　御除地　持寶院支配　同村同宗



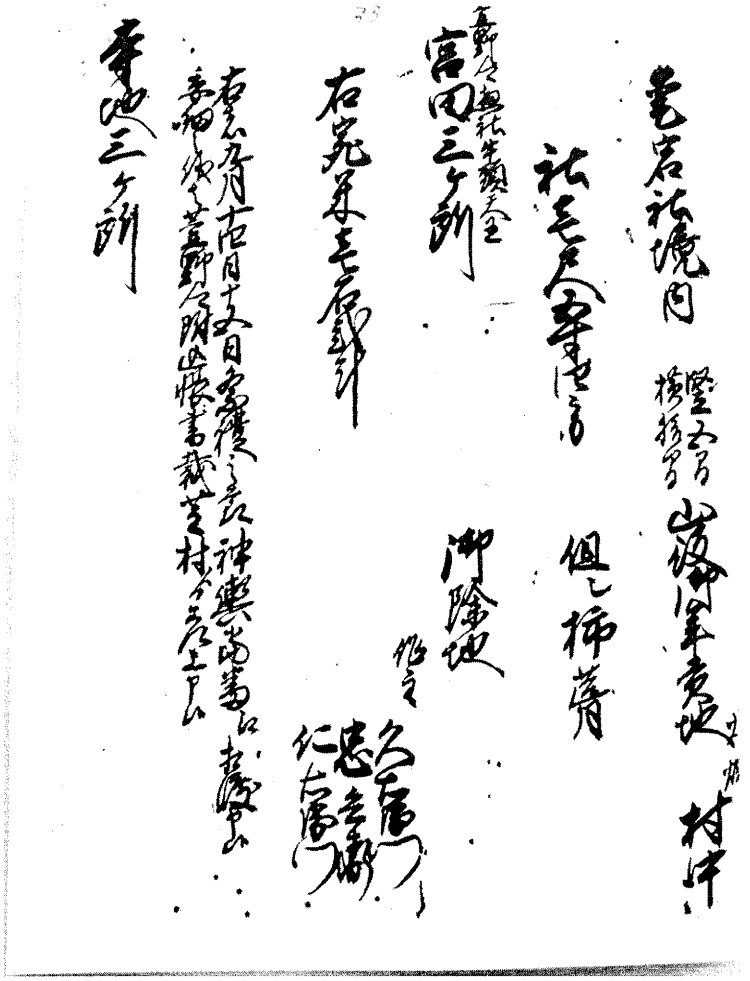
堂三間四面　但シ瓦葺
但シ西二八尺瓦庇有之
釣鐘堂壱間半四面　但シ瓦葺
但シ鐘指渡弐尺五寸
醫王石　高拾弐丈有之由申傳候
是ハ従往古薬師奥院ト申傳候
薬師田壱ケ所　壱二畝
内
壱畝拾五歩　御年貢地
壱反拾五歩　御除地



右宛米壱石弐斗
右薬師江毎年正月八日二餅花仕備申候、諸人参詣之者
以戴為仕候

神明境内　竪拾壱間　横八間　御除地
社弐尺五寸四方　但シ柿葺　火焼　市右衛門
弁財天境内　竪拾間　横弐拾間　御除地　火焼　村中
社弐尺四方　但シ柿葺

（三十二）



愛宕社境内　竪五間山役御年貢地　火焼
横拾間　村中

社壱尺五寸四方　但シ柿葺

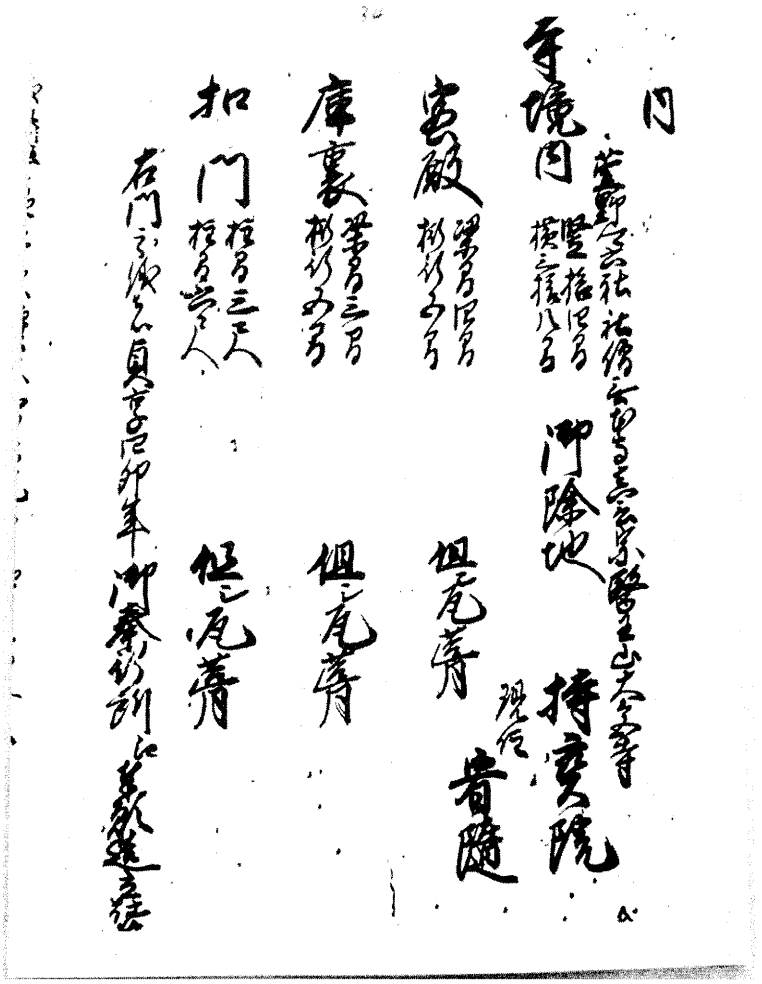
萱野郷惣社牛頭天王
宮田三ヶ所　御除地

右宛米壱石弐斗　作主　久右衛門
忠兵衛
仁右衛門

右者九月十四日十五日祭禮之節、御輿当番江相渡申候
委細之儀者萱野郷附込帳ニ書載、芝村ヨリ差上申候

寺地三ヶ所

（三十三）



内

寺境内　萱野郷六社社僧無本寺真言宗醫王山大宮寺
　竪拾四間　御除地　持寶院
　横拾八間

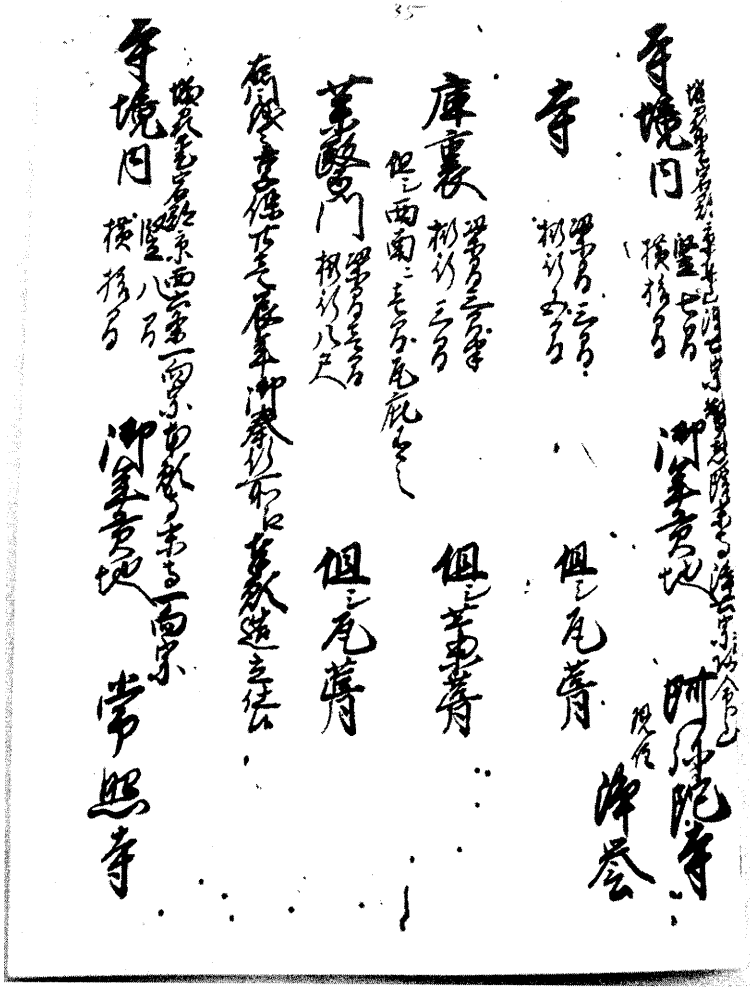
宮殿　梁間四間　但シ瓦葺　現住
　桁行五間　　宥随

庫裏　梁間三間　但シ瓦葺
　桁行五間

控門　柱間三尺　但シ瓦葺
　柱間六尺

右門之儀者貞享四卯年御奉行所江奉願造立仕候

（三十四）



城刕愛宕郡京東山浄土宗智恩院末寺浄土宗帰命山

寺境内　竪七間　横拾間　御年貢地　阿弥陀寺　現住　浄誉

寺　梁間三間　桁行五間　但シ瓦葺

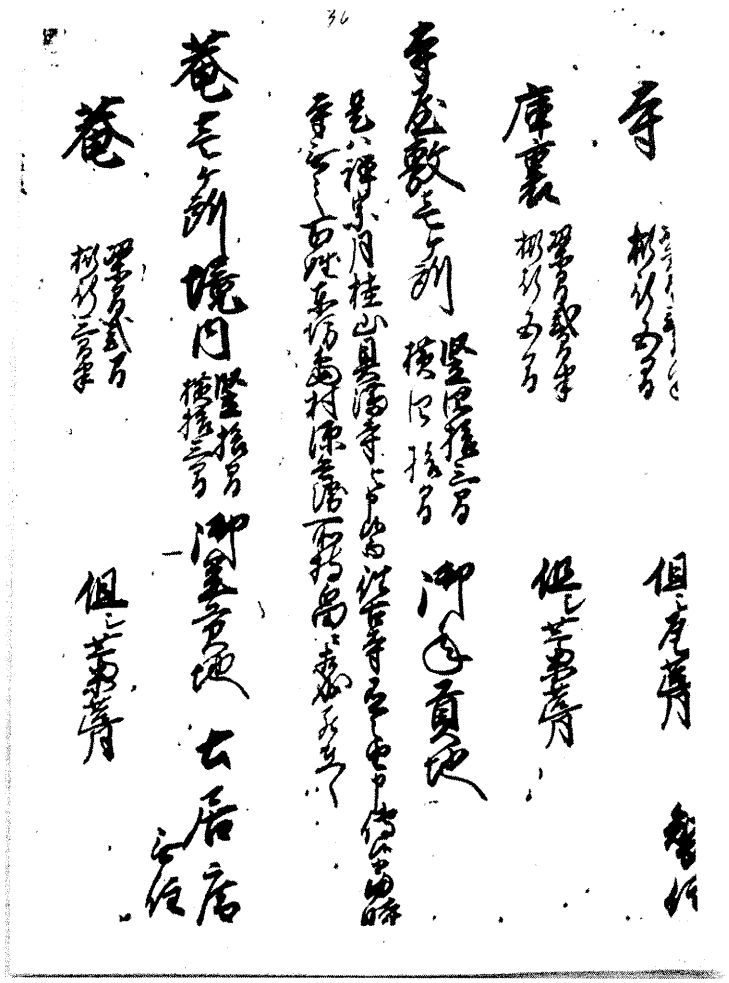
庫裏　梁間三間　桁行五間　但シ瓦葺
但シ西南二壱間瓦庇有之

薬醫門　梁間壱間　桁行八尺　但シ瓦葺

右門之儀者享保廿壱辰年御奉行所江奉願造立仕候

城刕愛宕郡京西六条一向宗本願寺末寺一向宗

寺境内　竪八間　横拾間　御年貢地　常照寺



寺　梁間弐間半　桁行五間　但シ瓦葺　智住

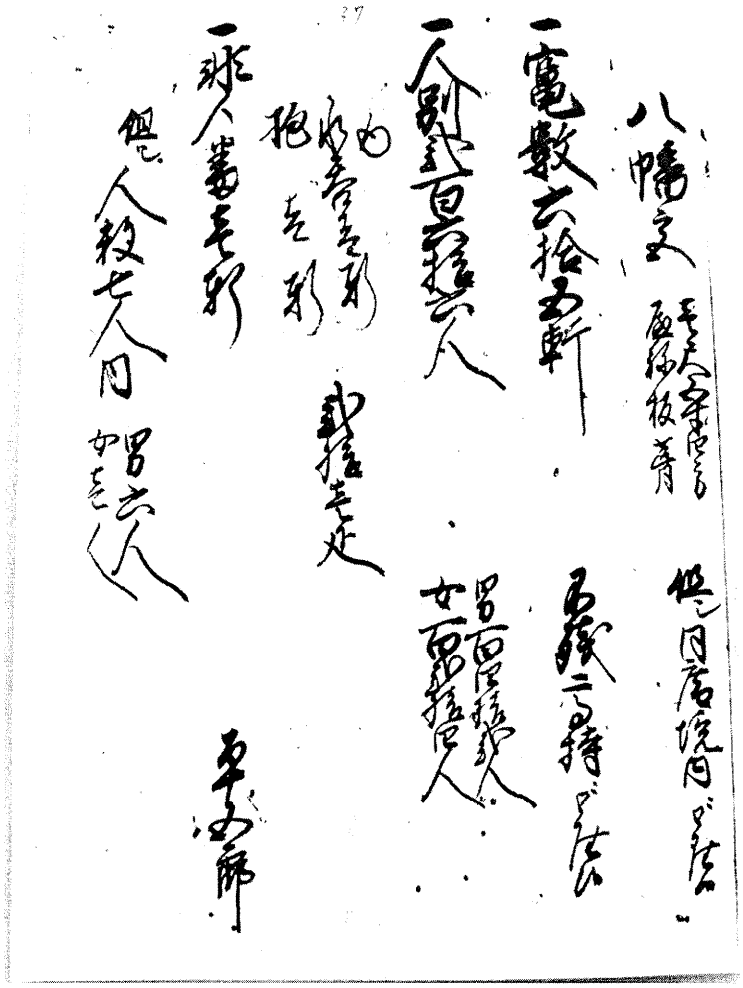
庫裏　梁間弐間半　桁行五間　但シ藁葺

寺屋敷壱ケ所　竪四拾三間　横四拾間　御年貢地

是ハ禅宗月桂山具満寺ト申候テ往古寺有之由申傳候、当時寺無之百姓東坊島村源兵衛所持畠二相成罷在候

菴壱ケ所境内　竪拾間　横拾三間　御年貢地　土居庵　無住

菴　梁間弐間　桁行三間半　但シ藁葺



八幡宮　壱尺五寸四方屋祢板葺　但シ庵境内ニ御座候

一竈数六拾五軒　不残高持ニ御座候

一人別弐百六拾六人　男百四拾弐人　女百弐拾四人

内

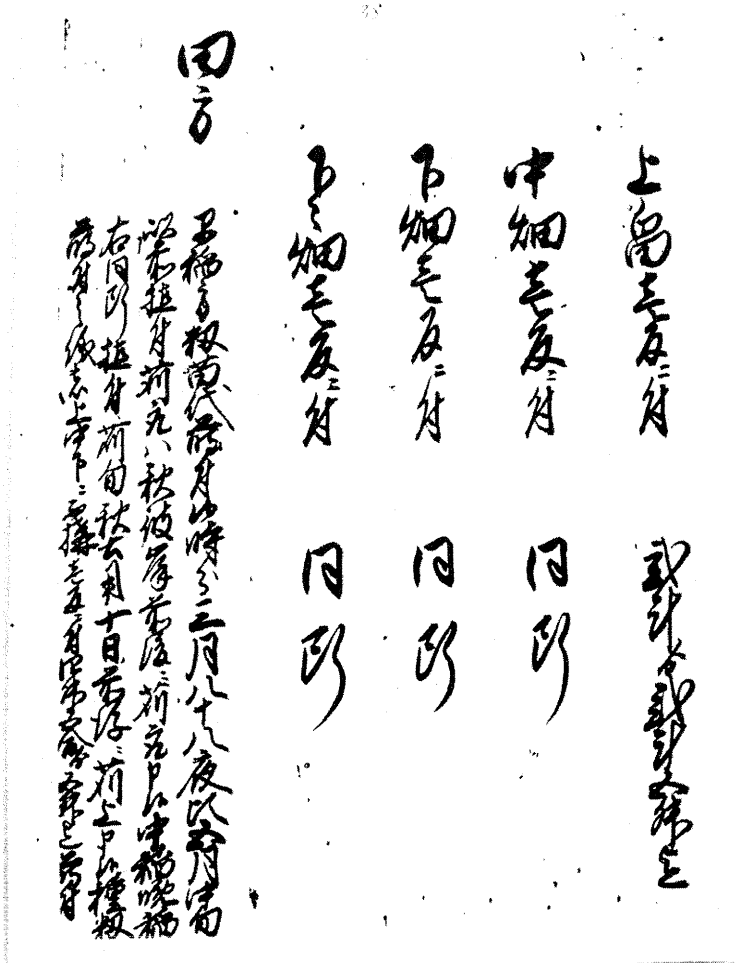
承在御壱軒　弐拾壱疋

抱壱軒

一非人番壱軒　平五郎

但シ

人数七人内　男六人　女壱人



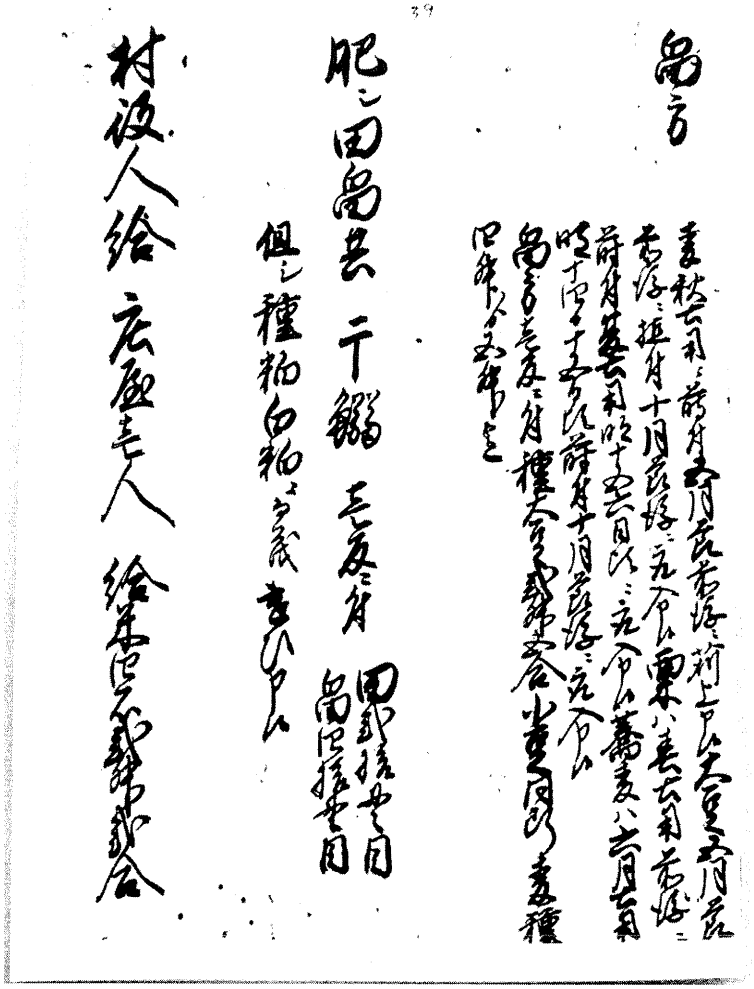
上畠壱反ニ付　弐斗ヨリ弐斗五升迄

中畑壱反ニ付　同断

下畑壱反ニ付　同断

下々畑壱反ニ付　同断

田方　早稲方籾苗代蒔付候時分三月八十八夜頃、五月中旬
以前植付苅取ハ秋彼岸前後ニ苅取申候、中稲晩稲
右同断、植付苅旬秋土用十日前後ニ苅上申候、種籾
蒔付之儀者上中下ニ不構、壱反ニ付四升五合ヨリ五升迄蒔付



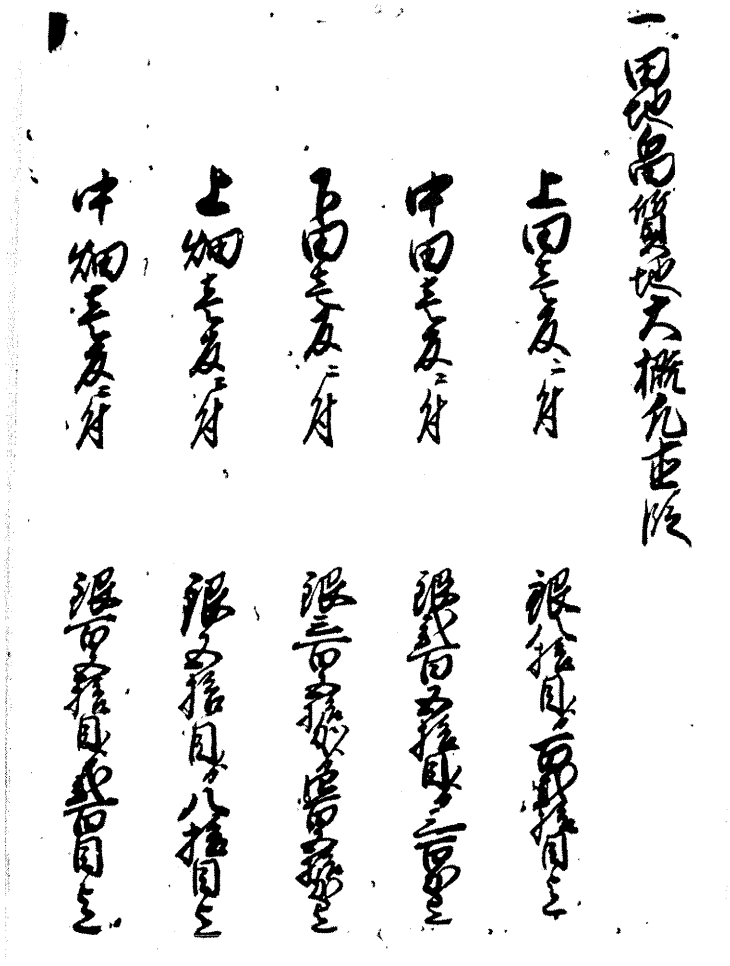
畠方

麦秋土用ニ蒔付五月節前後ニ苅上申候、大豆五月節前後ニ植付十月節後ニ取入申候、栗ハ春土用前後ニ蒔付夏土用明十五六日頃ニ取入申候、蕎麦ハ六月土用明十四日十五日頃蒔付十月節前後ニ取入申候、畠方壱反ニ付種大豆弐升五合小豆同断、麦種四升ヨリ五升迄

肥ン田畠共　干鰯　壱反ニ付　田弐拾貫目　畠四拾貫目

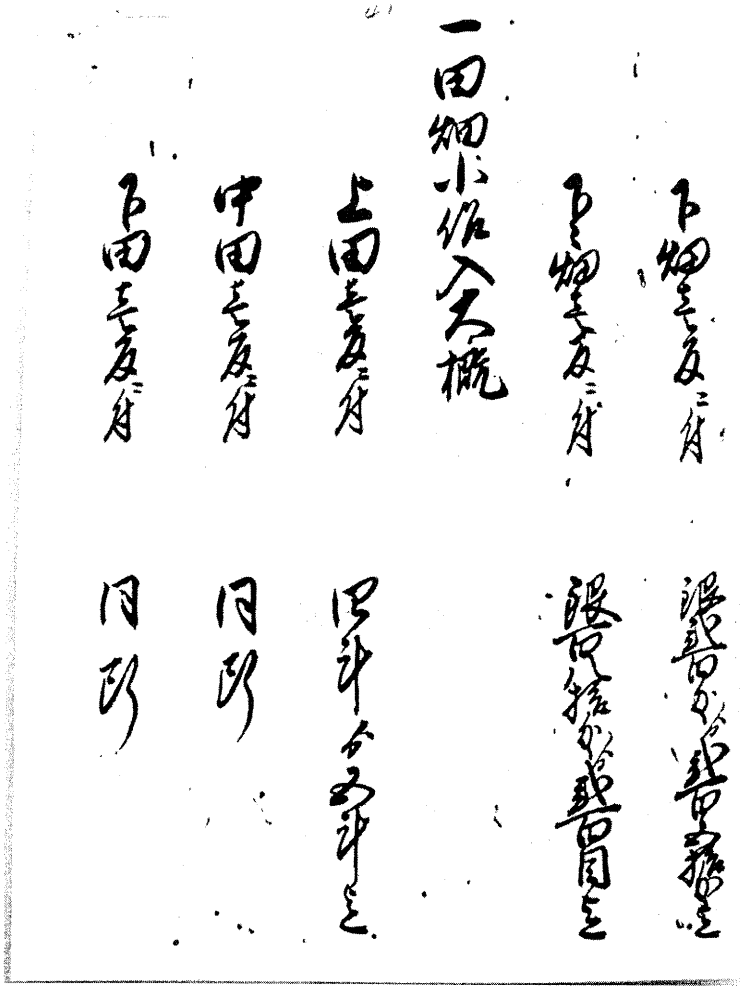
但シ種粕白粕ニテも　遣ひ申候

村役人給　庄屋壱人　給米四石弐升弐合



一田地畠質地大概・直段

上田壱反ニ付　銀八拾目ヨリ百弐拾目迄
中田壱反ニ付　銀弐百五拾目ヨリ三百匁迄
下田壱反ニ付　銀三百五拾匁ヨリ四百五拾匁迄
上畑壱反ニ付　銀五拾目ヨリ八拾目迄
中畑壱反ニ付　銀百五拾目ヨリ弐百目迄



下畑壱反ニ付　銀弐百匁ヨリ弐百五拾匁迄

下々畑壱反ニ付　銀百八拾匁ヨリ弐百目迄

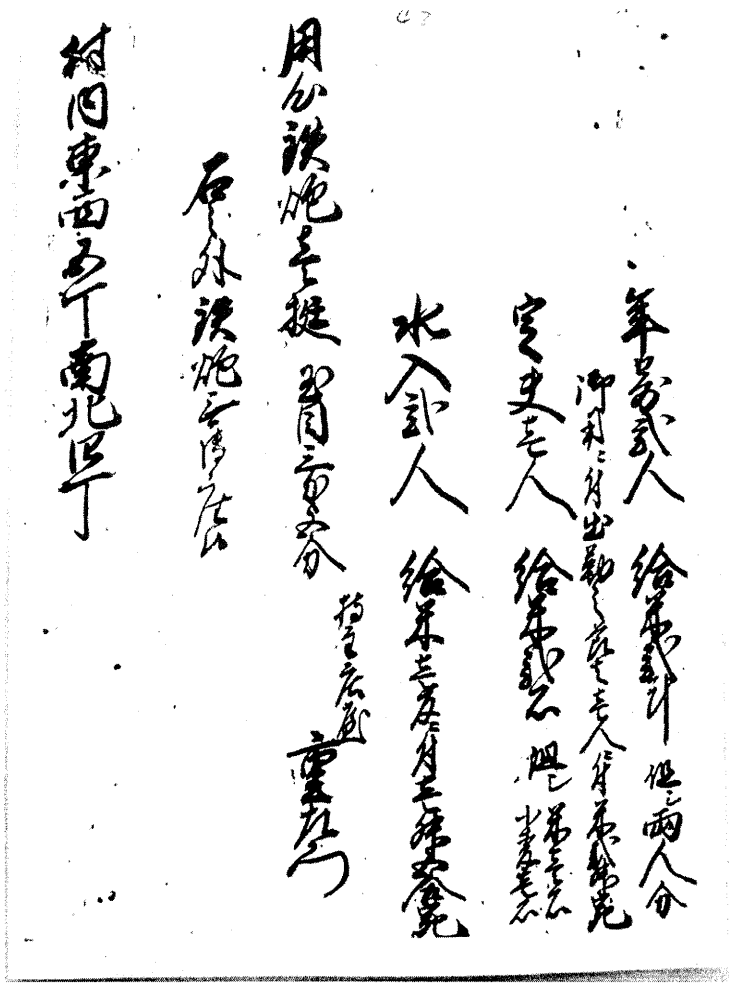
一田畑小作入大概

上田壱反ニ付　四斗ヨリ五斗迄

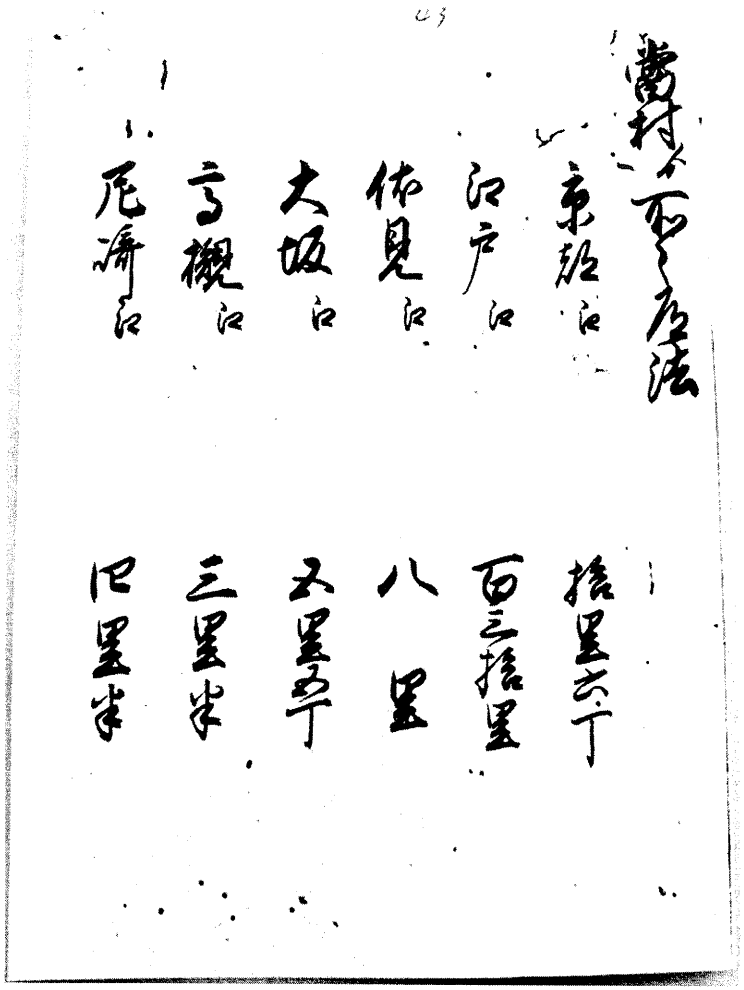
中田壱反ニ付　同断

下田壱反ニ付　同断

（四十一）



年寄弐人　給米弐斗　但シ両人分
　御用ニ付出勤之節者壱人ニ付米二升宛
定夫壱人　給米弐石　但シ　米壱石
　小麦壱石
水入弐人　給米壱反ニ付壱升五合宛
用心鉄炮壱挺　玉同三匁五分　持主庄屋　重左衛門
　石之外鉄炮無御座候
村内東西五丁南北四丁



當村ヨリ所々道法

京都江　拾里六丁

江戸江　百三拾里

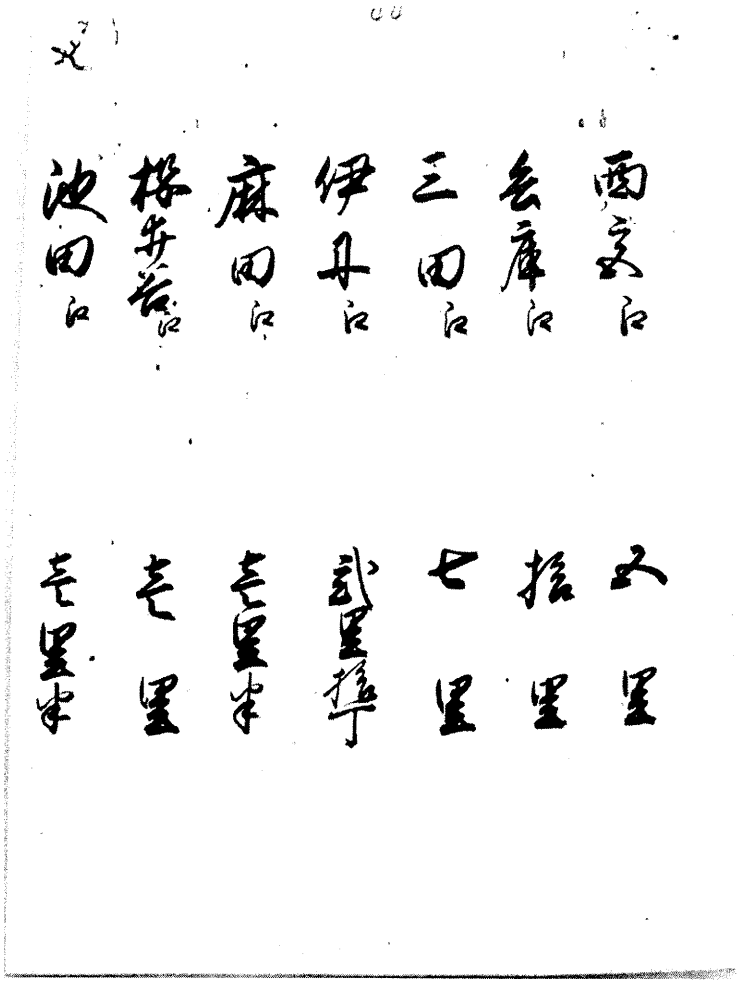
伏見江　八　里

大坂江　五里五丁

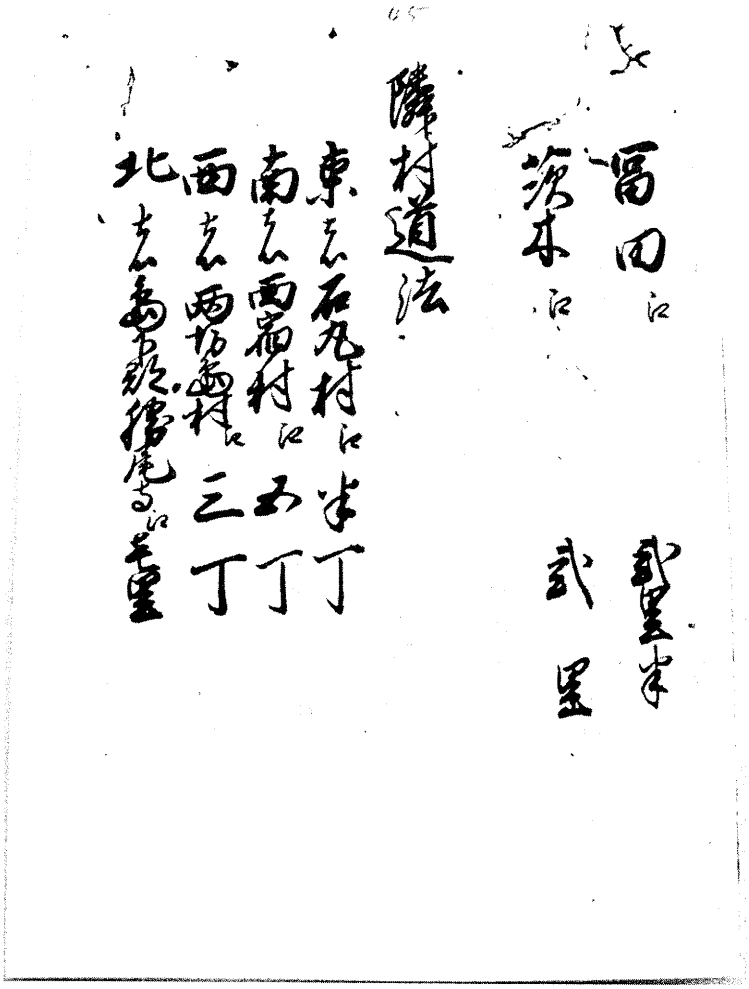
高槻江　三里半

尼崎江　四里半

（四十三）



西宮江　五里
兵庫江　拾里
三田江　七里
伊丹江　弐里拾丁
麻田江　壱里半
桜井谷江　壱里
池田江　壱里半



冨田江　弐里半

茨木江　弐　里

隣村道法

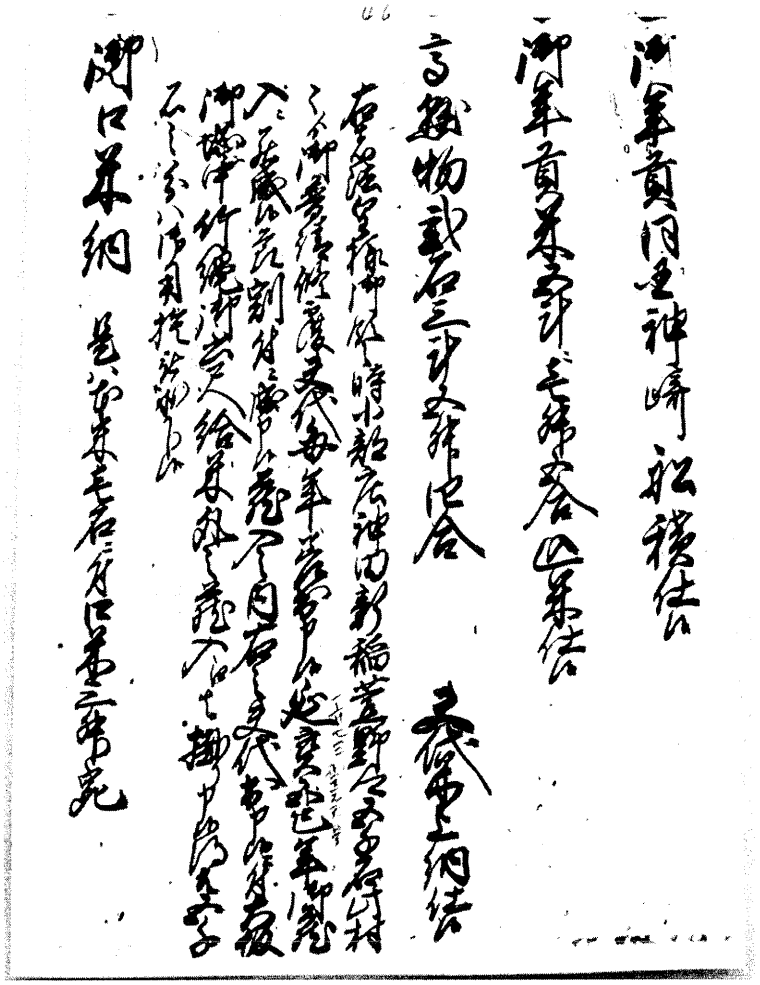
東者石丸村江半丁

南者西宿村江五丁

西者両坊島村江三丁

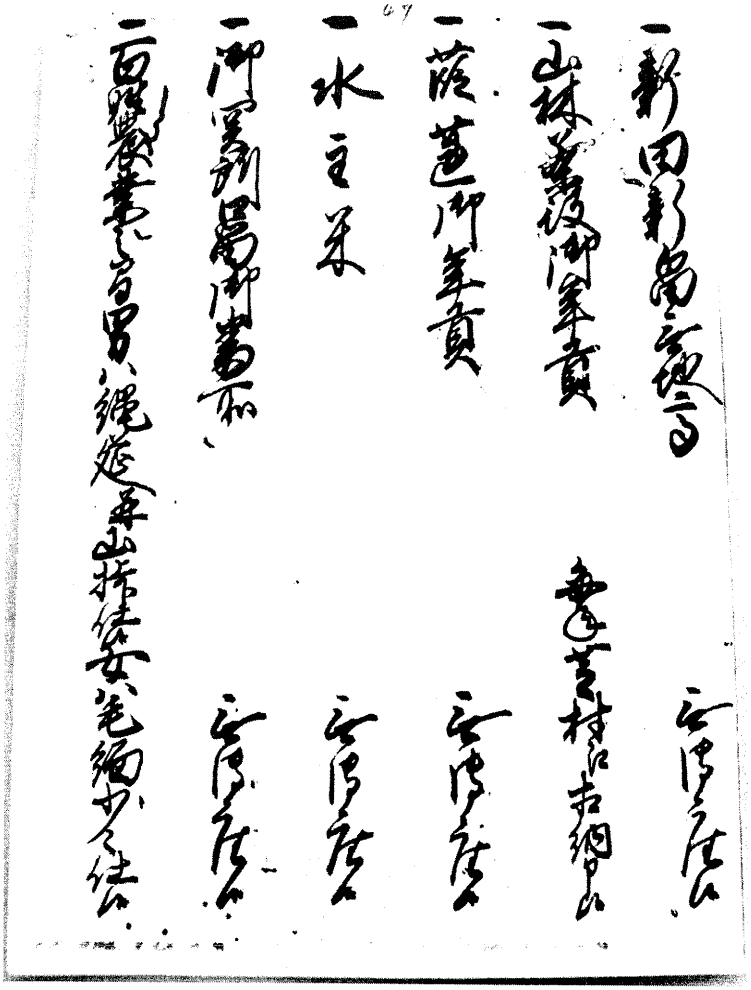
北者島下郡勝尾寺江壱里

（四十五）



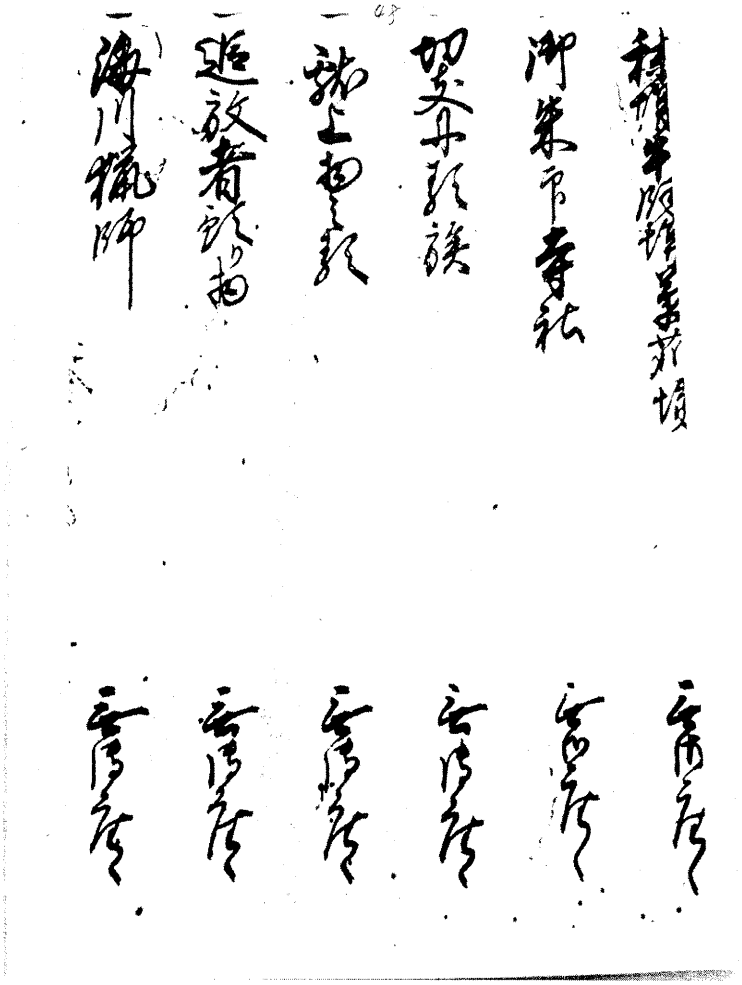
一御年貢同国神崎船積仕候
一御年貢米五斗ニ壱升五合込米仕候
一高懸物弐石三斗五升四合　夫代米上納仕候
右者法皇様御領之時、小部庄神田新稲萱野郷五千石此村々ヨリ御普請修覆夫代毎年差出申候、延寶五巳年御蔵入ニ罷成候節割付ニ成申候、蔵入之内右之夫代出申候ニ付、大坂御城中竹縄御六尺給米外之蔵入江者掛リ申候得共、五千石之分ハ御用捨被成下候、
御口米納　是ハ本来壱石ニ付口米三升宛

（四十六）



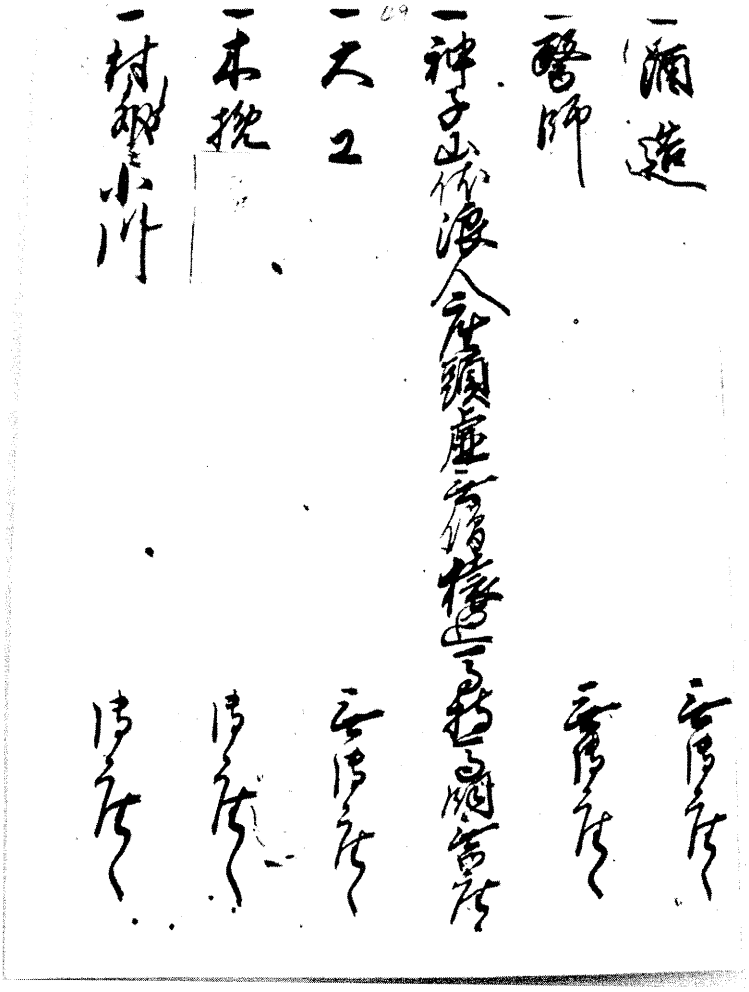
一新田新畠無地高　無御座候
一山林茶役御年貢　毎年芝村江相納申候
一葭蓮御年貢　無御座候
一水主米　無御座候
一御関所御留御番所　無御座候
一百姓農業之間男ハ縄莚并山・仕候、女ハ毛綿少々仕候

（四十七）



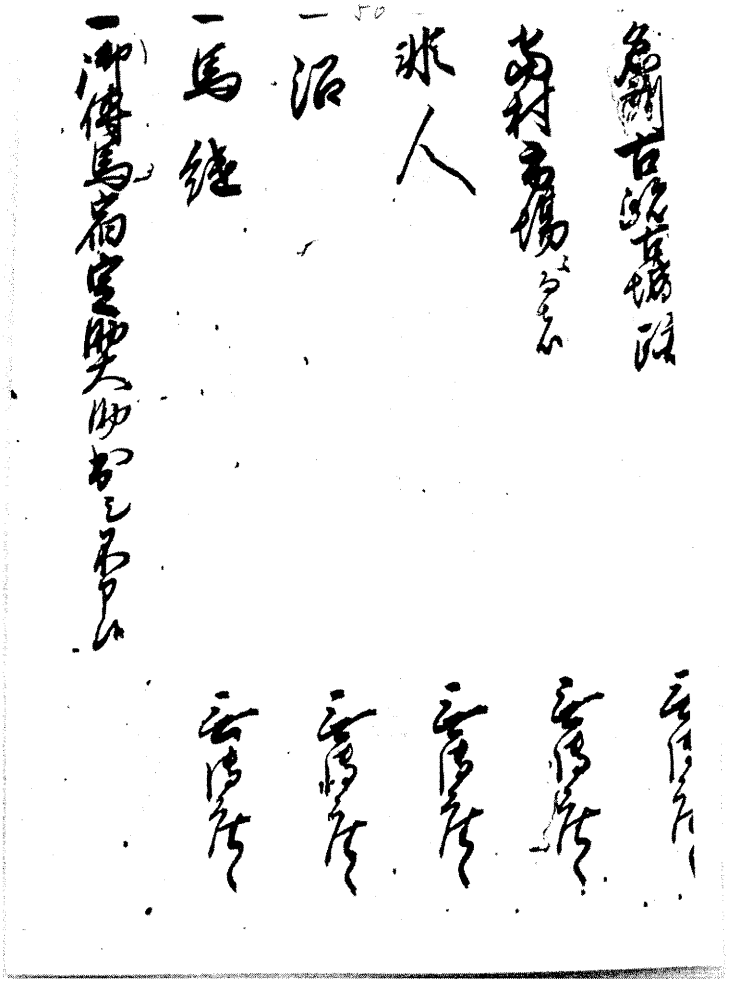
一秣場牛飼場草苅場　無御座候
一御朱印寺社　無御座候
一切支丹類族　無御座候
一献上物之類　無御座候
一追放者預り物　無御座候
一海川猟師　無御座候

（四十八）



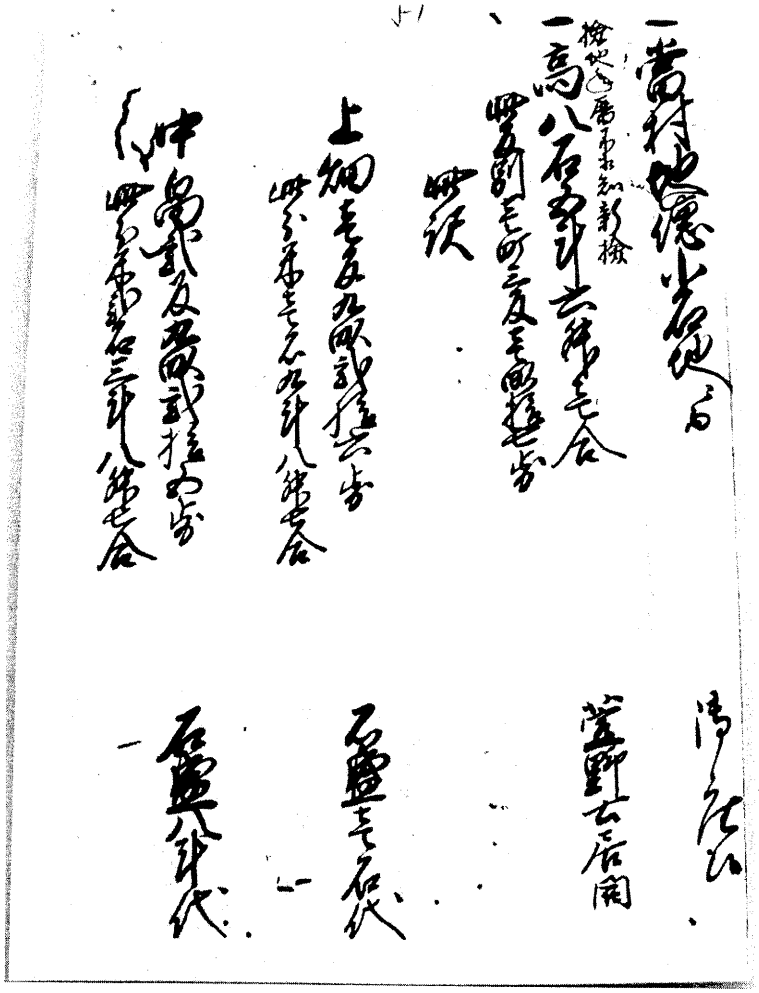
一酒造　無御座候
一醫師　無御座候
一神子山伏浪人座頭虚無僧猿廻馬持馬飼無御座候
一大工　無御座候
一木挽　御座候
一村之外ニ小川　御座候

（四十九）



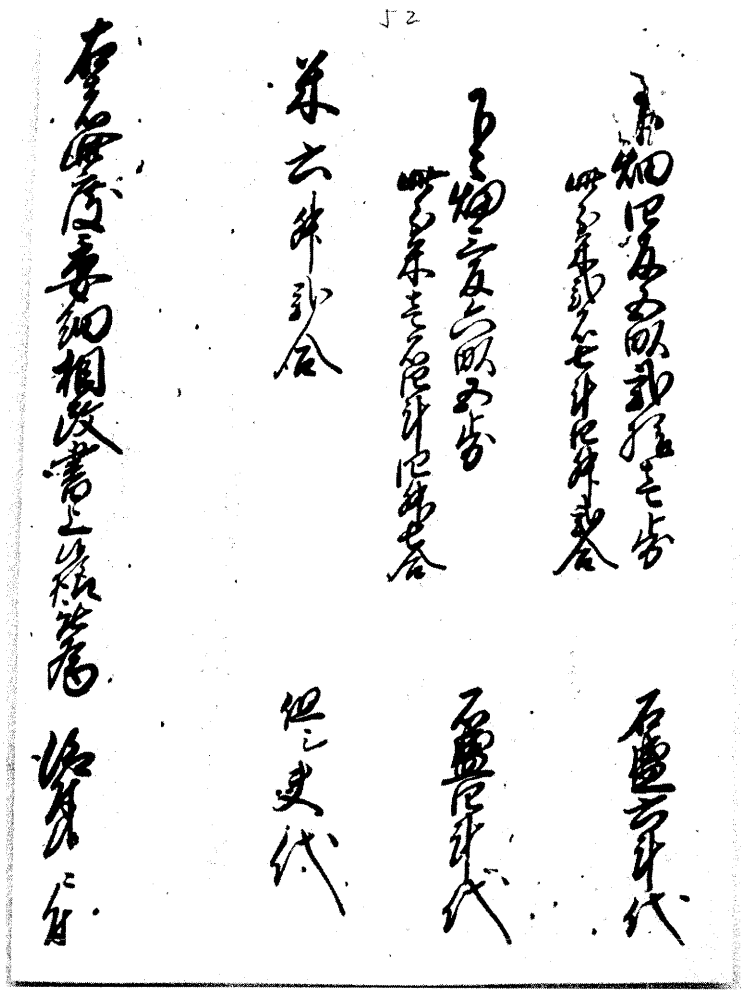
一名所古跡古城跡　無御座候
一当村市場ニテ者　無御座候
一非人　無御座候
一沼　無御座候
一馬継　無御座候
一御傳馬宿定助大助出シ不申候

（五十）



一當村地徳小石地ニテ　御座候
検地年暦不相知新検
一高八石五斗六升壱合　萱野土居開
此反別壱町三反壱畝拾七歩
此訳
上畑壱反九畝弐拾六歩　石盛壱石代
此分米壱石九斗八升七合
中畠弐反九畝弐拾五歩　石盛八斗代
此分米弐石三斗八升七合

（五十一）



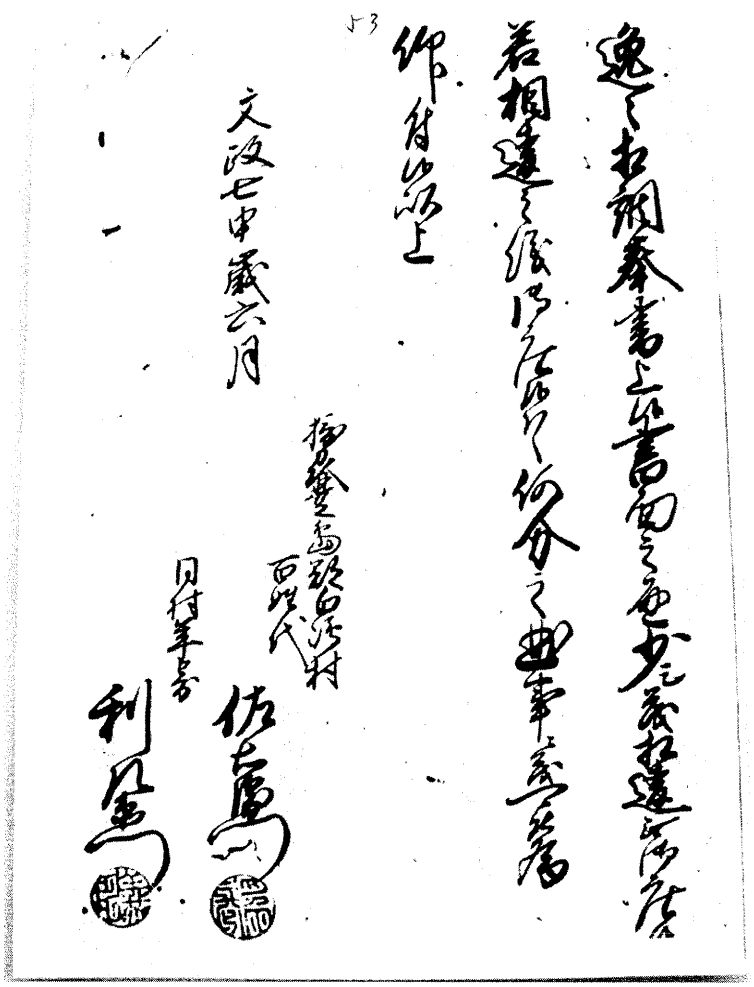
下畑四反五畝弐拾壱歩
此分米弐石七斗四升弐合
石盛六斗代

下々畑三反六畝五歩
此分米壱石四斗四升七合
石盛四斗代

米六升弐合
但シ夫代

右者此度委細相改書上候様被為仰付候ニ付

（五十二）

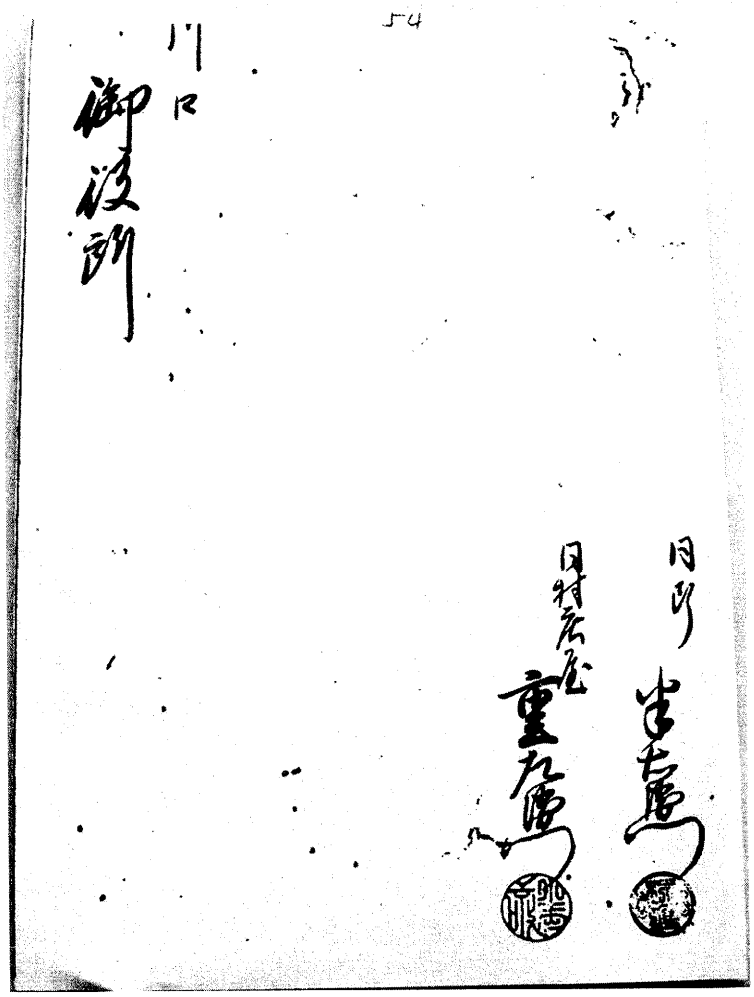


逸々相調奉書上候、書面之通少シも相違無御座候、
若相違之儀御座候ハヽ、何分之曲事ニも可被為
仰付候、以上

文政七申歳六月

摂刕豊島郡白嶋村
百姓代　佐右衛門（判）
同村年寄　利左衛門（判）

（五十三）

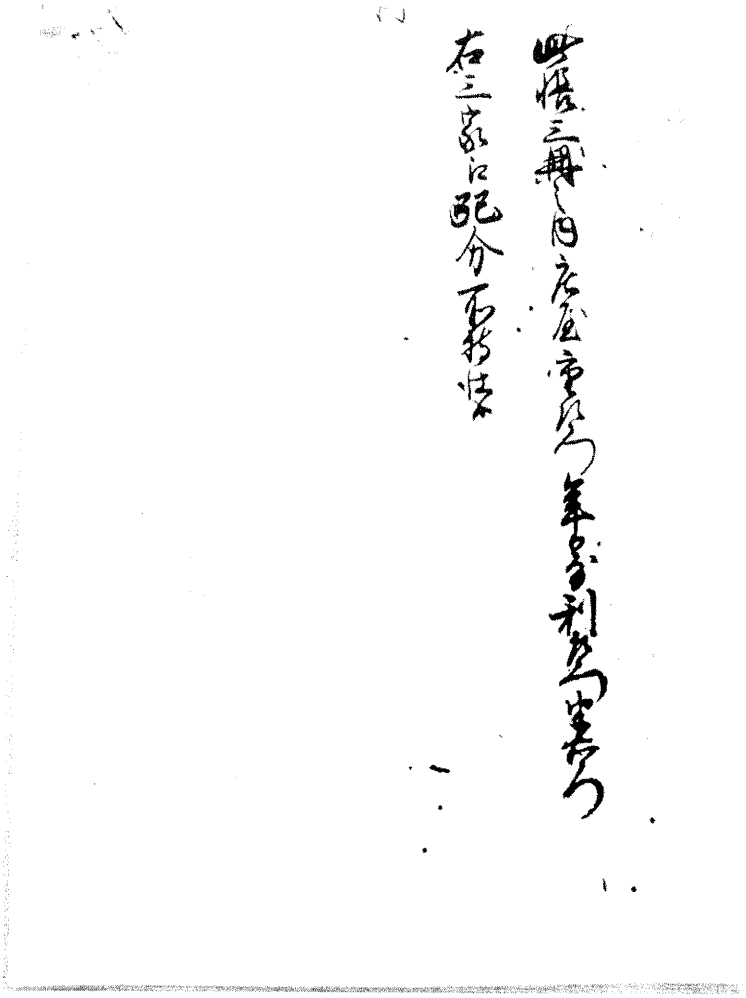


川口
御役所

同断
半右衛門（判）

同村庄屋
重左衛門（判）

（五十四）



此帳三冊之内、庄屋重左衛門年寄利左衛門半右衛門
右三家江配分所持仕候、

【増字新刻大節用】

節用集の一種。節用集とは室町時代後期に成立した国語辞書のことで、その流れを受け江戸時代には数多くの写本・刊本が作られた。江戸時代の中期以降になると様々な付録が加えられ、辞書であるにとどまらず家庭百科的要素が強くなった。特に元禄（17 世紀末）以後は内容・付録が増加し、多種の節用集が大量に刊行され流布した。

本書は冒頭に「戊申校改」とあることから、享保 13 年（1728）、天明 8 年（1788）、嘉永元年（1848）のいずれかに改訂されたものであろう。目次を見てもわかるように内容は実に多岐に渡っており、「富士山全体の図」や「日光山の風景」といった名所について、「白楽天の図」、「仲麻呂の図」といった人物について、また簡略な歴代天皇や将軍の業績一覧など、基礎的知識が図を多用することでわかりやすく紹介されている。その他「書札礼式条々」「祝言の状書法」といった手紙の書き方や金銭を預かった時に作成する手形の書き方を記した「証文手形案紙」など日常生活でも必要となってくる作法もあわせてまとめられている。また一年間の神事・祭事などをまとめた「年中行事之記」に取り上げられている行事は、ほぼすべて近畿地方での行事であるため、本書は近畿地方を対象に刊行されたことがわかる。

巻首目録

○巻首目録　　鶴峯戊申校改

一世界萬國之圖　一大日本圖并異國人物　一禁裏圖并洛陽各所　一富士山全躰之圖
一三社託宣之事　一伊勢道中之圖　一春日八幡之圖　一日光山之風景
一忠孝六欲之圖　一和漢英雄之人物　一祇園山鉾之圖　一金毘羅山之圖
一高野山之圖　一日本能書三筆三跡　一松島之風景　一西湖之風景
一樽箱物之書附　一歌書色紙短冊書法　一鷹名所之圖　一看板布篇等之書法
一扇子に物書様　一真草偏冠字盡　一人名頭字相生之事　一法躰尼等之名盡
一神功皇后之圖　一白樂天之圖　一莊子之圖　一殺生石之圖
一黑牡丹之故事　一仲麻呂之圖　一蘆葉之達磨　一人丸赤人之圖
一滿湘八景　一近江八景　一礼式当用躾方　一躾方手引之圖
一制札宿札等之書法　一武具之圖　一萬進物積様之事　一幕之圖
一馬形名所之圖　一馬具之圖　一弓矢鉄炮之圖　一漢土武具之圖
一年中行事之記　一長柄銚子提之圖　一立花手引指南　一生花投入之圖
一書札礼式條々　一茶湯手引指南　一太刀折紙之書法　一諸目録之書法
一茶湯道具之圖　一祝言之状書法　一書状發端留等上下　一人相九面之圖
一手筋見様之事　一当流折形之圖　一証文手形案紙　一改算塵劫記

一農家道具之圖　一能之面道具之圖　一十三門部分之注

○頭書目録

一天神七代地神五代系譜　一日本年代廣鑑　一御公家鑑　一百官諸職之事
一東百官名　一禁中御故實　一武将傳畧并花押　一将軍家傳畧
一日本國盡并名所　一御武鑑　一西國大名御船　一日本画人印譜
一海外書家大畧　一二十四孝絵抄　一庭訓往来絵抄　一小野篁哥字盡
一書札認方心得　一和漢故事絵抄　一四季諸用文章　一萬對名之事
一詩歌連俳初学抄　一倭音五十字　一三体いろは　一碁双六将碁之事
一日蝕月蝕之圖　一十二辰初正之圖説　一月之出入之事　一太刀刀銘鍛冶之事
一諸病妙薬集　一四季料理献立　一江戸伊勢道中記　一紋所書様之圖
一節用かな遣ひの事　一用字諺解　一助字諺解

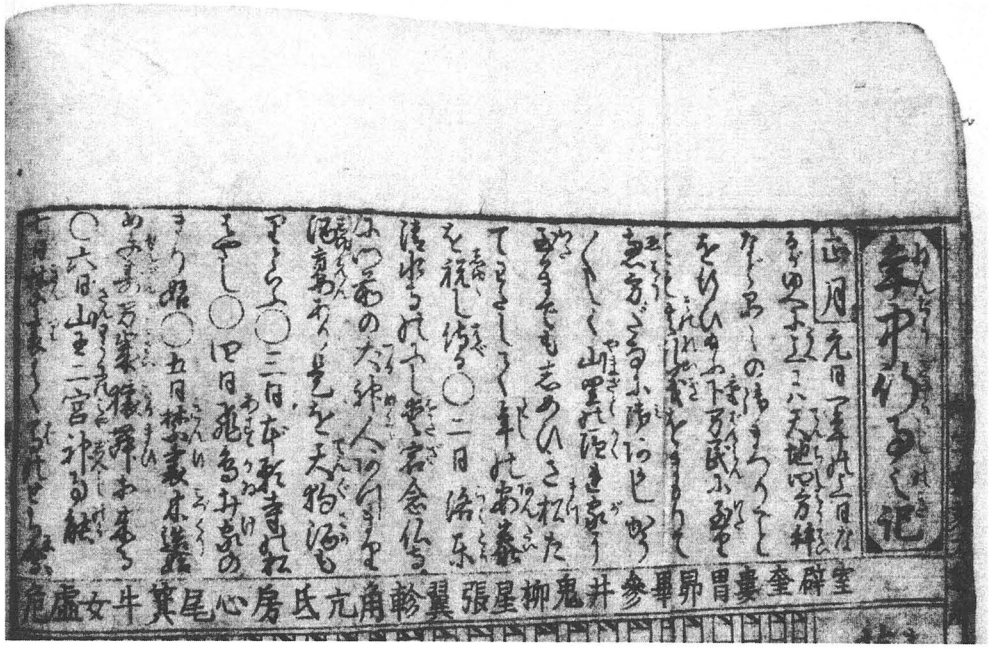
○巻尾目録

一毎日支干之繰様　一不成日悪日之事　一三都之圖　一名乗字并相生
一大佛殿之由来　一人倫之異名　一男女相性之事　一書法秘事袋
一米引心得之哥　一異名大概抄　一和俗制作之字　一支干異名之圖
一歳徳神方角之事　一潮時盈宕之事

（二）—②

（二）—①

『年中行事之記』（抜粋）（一）

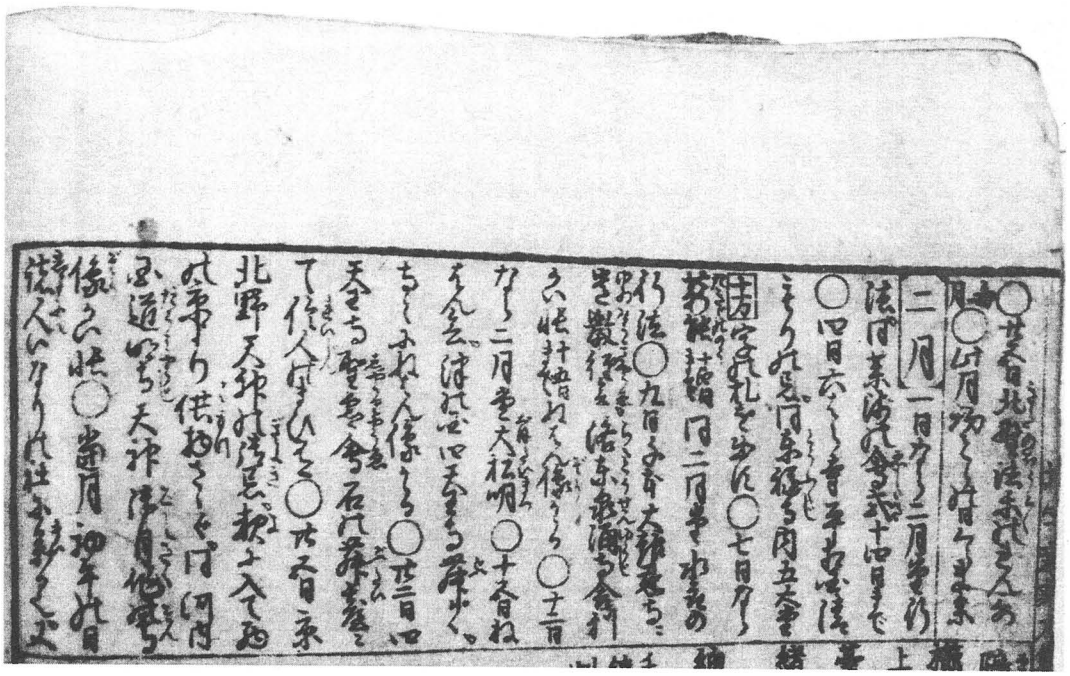


【年中行事之記】

［正月］元日一年の上日なるがゆへに、上にハ天地四方拝など品々の御まつりごとを行ひゐふ、下万民に至りても其礼儀をまもりて、恵方ざるに御あかしかうかうしく山里の隠れ家に至るまでもしめひき松たてわたしして年の安泰を祝侍る〇二日洛東清水寺のにし愛宕念仏寺に門前の大神人あつまり酒宴あり、是を天狗酒もりといふ〇三日本願寺の松はやし〇四日飛鳥井家のまり始〇五日禁裏木造始め千寿万歳猿舞等来る、〇六日山王二宮神事能七日禁裏はく馬のせち會

（二）

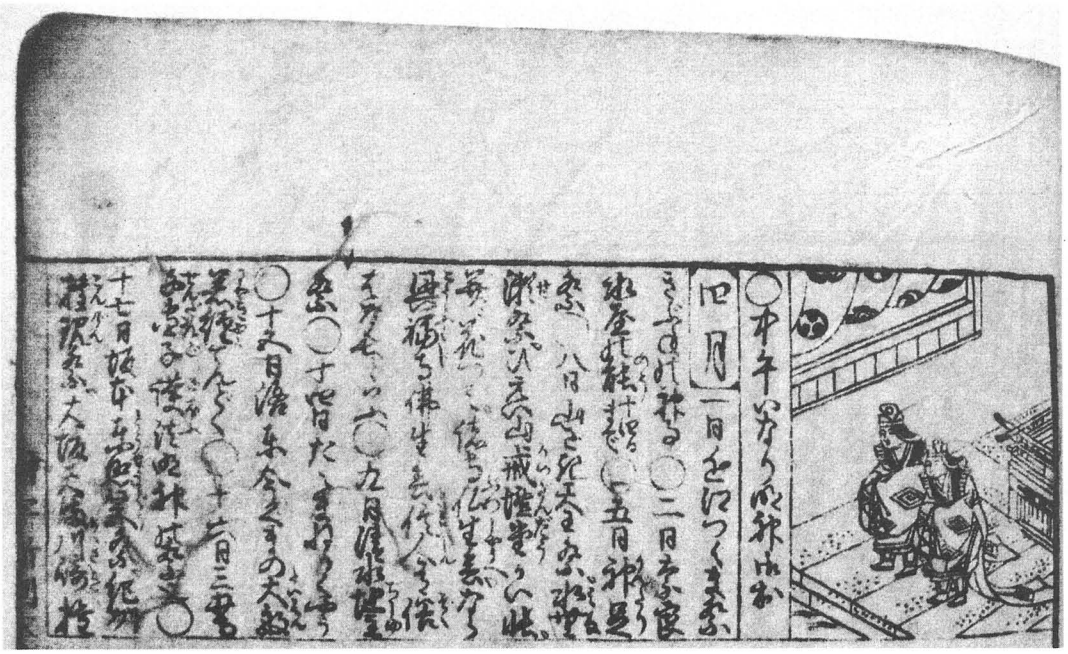
かもの神事初也。みのを山弁
財天冨札つく、夜ニ入〇八日禁裏
御修法十四日まて。空也堂はえた
たき出初の儀式〇十日摂
津国今宮えびす参〇十一日
上京柳原、今朝と廿一日の
朝と御酒をそなえか〇十
六日踏哥のせち会〇十七
日伶人の舞御覧并ニ鶴の
庖丁有〇十八日禁裏御左
義長〇十九日八幡厄神参



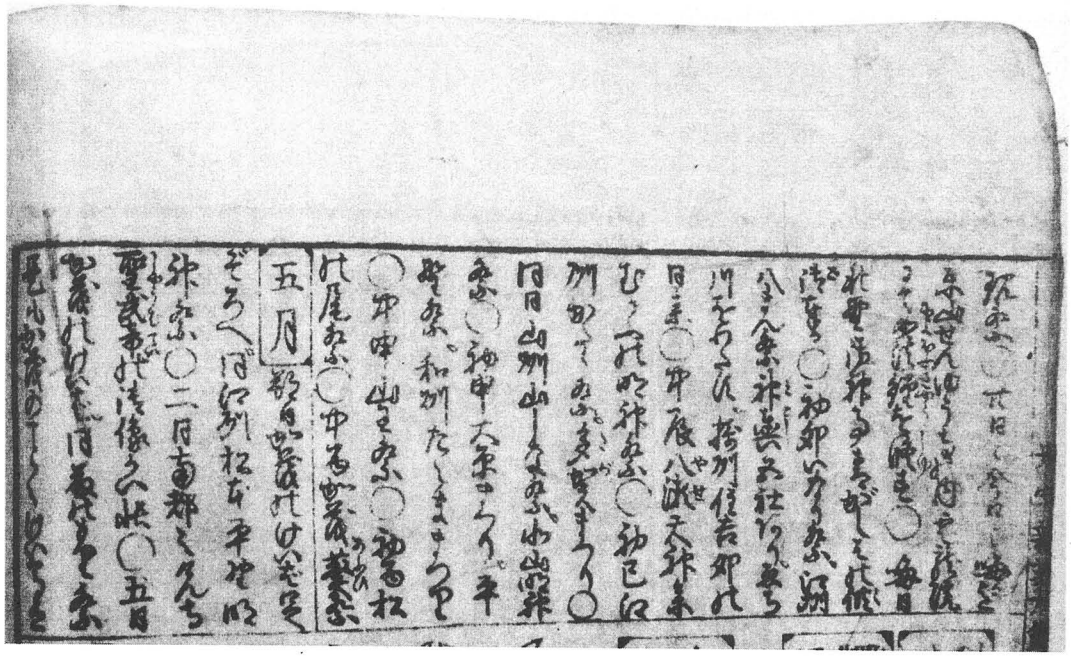
〇廿五日北野法楽のれん哥
毎月〇此月初とらの日くらま参、
【二月】一日なら二月堂行
法。同薬師の會式十四日まで
〇四日六はら寺平相国清
もりの忌。同東福寺内五大堂
十万】字の札を出す〇七日なら
薪能十四日まで、同二月堂水取の
行法〇九日千本大銀忍寺ニ
遣教経会。洛東泉涌寺舎利
かい帳十五日まで、ねはん像かる〇十二日
なら二月堂大松明〇十五日ね
はん会。津の国四天王寺舞がく。
寺々にねはん像かる〇廿二日四
天王寺聖霊會石の舞台ニ
て伶人のまひ有〇廿五日京
北野天神の御忌。夜に入て西
の京より供物ささぐ。同河内
国道明寺天神御自作の尊
像かい帳〇当月初午の日
諸人いなりの社に参る也。又

津の国まや山くわん音。泉州水
馬寺。皆はつ午参あり、
【三　月】三日禁裏とり合。加
茂の神事。摂州住よし汐干
貴賤くんじふする事夥し〇
九日さがの大念佛始る、十五日迄
〇十日加茂の安楽花祭〇
十二日けふあす両日天台礼拝
講日吉八王子の拝殿にてこれ
を修す〇十三日後白川法皇
の御忌五條長かう堂にして
行ひ奉る〇十四日ひがし山

禅林寺えいくわんだうといふ、百まん遍にて善導大師の御忌を行ふ。
壬生念仏はじまる、廿四日迄
〇十五日洛東しゆうごゐんの
森くまの権現のまつり〇十九
日さが清涼寺しやか如来御身
ぬぐひ〇廿一日東寺仁和寺
おむろの御所といふ、弘法大師御影禮
高雄神護寺御えいく。此日
女人参詣す〇廿四日今明
両日ひよし二宮のまへにて礼
拝講を修す〇廿五日二の
瀬山の神まつり。奈良はんに
や寺文珠会〇廿八日ひえい
山にて山王祭、さかきの枝を
きりとる〇初卯松尾明神
の御出。御たび所ハしゆしやか
のにしに有。此御出の日より七
日めに当りて、大宮の拝殿にて
法楽能有〇本卯江州三
尾明神祭〇本辰南まつり



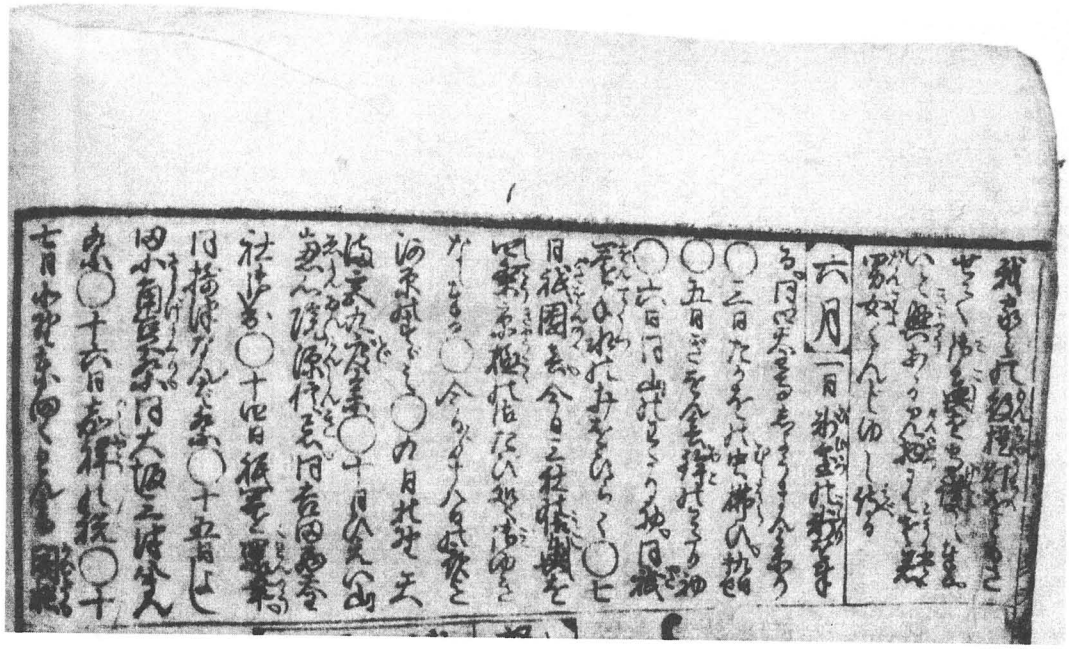
〇本午いなり明神御出
【四　月】一日近江つくま祭
きぶねの神事〇二日奈良
水屋の能十四日まで、〇五日神足
祭〇八日山ざき天王祭。水無
瀬祭。ひえい山戒壇堂かい帳。
并ニ花つミ。諸寺仏生会。なら
興福寺佛生会。信人其俗
はなんといふ〇九日清水地主
祭〇十四日たゝまねかくやう
〇十五日洛東今くまの大般
若経てんどく〇十六日三井寺
千團子護法明神の祭也〇
十七日坂本東照宮祭。紀州
権現祭。大坂天満川崎権



現祭〇廿日～今日～晦日迄
東山せんゆう寺の内雲龍院
にて如法経を修す〇晦日
北野御神事青がしはの供
御奉る〇初卯いなり祭。江州
八まん祭神輿五社あり。えち
川をわたす。摂州住吉卯の
日参〇本辰八瀬天神参
むかふの明神祭〇初巳江
州かたた祭。多賀まつり〇
同日山州山しな祭。北山明神
祭〇初申大原まつり。平
野祭。和州たしままつり
〇本申山王祭〇初酉松
の尾祭〇本酉加茂葵祭
【五月】朔日加茂のけいば足
ぞろへ。同江州松本平野明
神祭〇二日南都けごん寺
聖武帝の御像かい帳〇五日
加茂のけいば。藤のもり祭
是も加茂のことくけい馬有、

同三井寺新宮まつり。同関の
明神祭。同大津きぶねまつり。
〇七日今ミやの御出〇八日う
ぢ祭〇十五日今ミや祭
〇十六日永観堂大般若〇
廿三日清水寺田村忌。同坂本
両社まつり〇廿八日住よし
御田植。下京本中道寺祭
〇晦日祇園御こしあらひ。
今夜御こし壱基四条宮
河のほとりに出し奉りて、
水をそそぎ塵埃を除き
侍る。これを御こしあらひと
申、其義式しばゐの役者

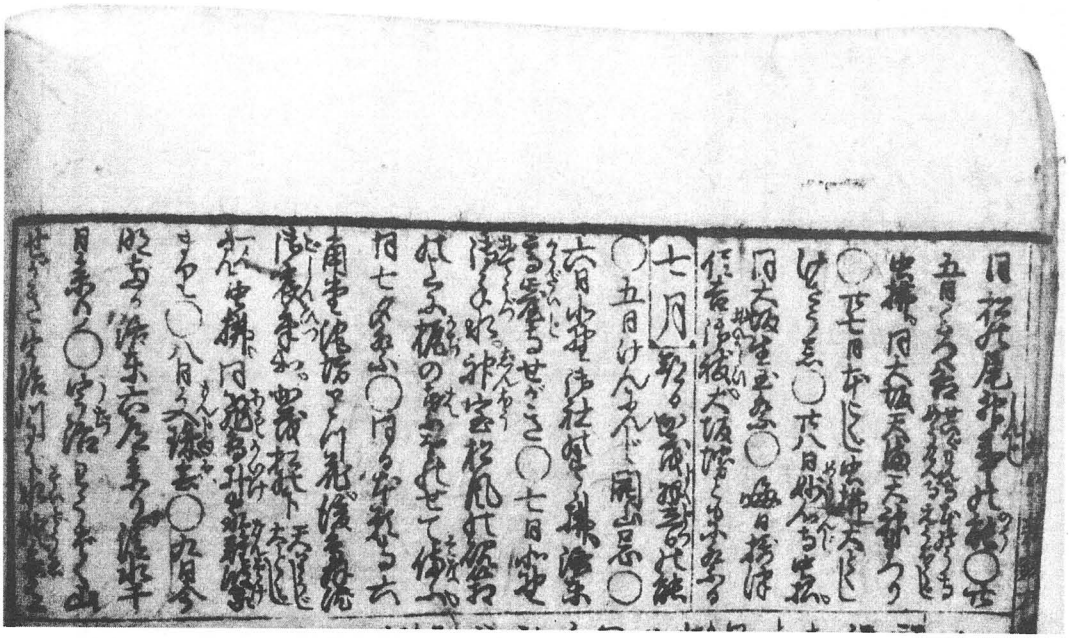
（九）



我家らの紋提灯をともさ
せて御輿を守護し奉る。
いと興ある見物にて老若
男女くんじゆし侍る
〔六月〕一日氷室の氷を奉
る。同日天王寺しようまん参り
〇三日たかをの虫拂ひ。九日まで
〇五日ぎをん会。鉾のする初
〇六日同山のする初。同祇
園手水の井をひらく〇七
日祇園会。今日三社の御輿を
四条京極の御たび処へ御ゆき
なし奉る〇今日ヨリ十八日の夜迄
河原のすずミ〇九日北野天
満宮九度参〇十日ひえい山
恵心院源信忌。同吉田西天王
社御出〇十四日祇園還幸。
同摂津なんば祭〇十五日よし
田小角豆祭。同大坂三津八まん
祭〇十六日嘉祥の祝〇十
七日北野東向くわん音開帳。

（十）

今明日〇十七日清水夜まいり。
同大坂御霊祭〇十八日大坂
高津祭。同うつら川神事能。同
ぎをん御こしあらひ〇十九日
座頂のすずミ。今日より廿日
までミたらしまふで〇廿日
くらま竹切〇廿一日四条大うん
院虫拂ひ。同大坂上なんばいなり
祭〇廿二日大坂座磨まつり。
同水無瀬後鳥羽院御影かい
帳〇廿四日あたご千日まいり。

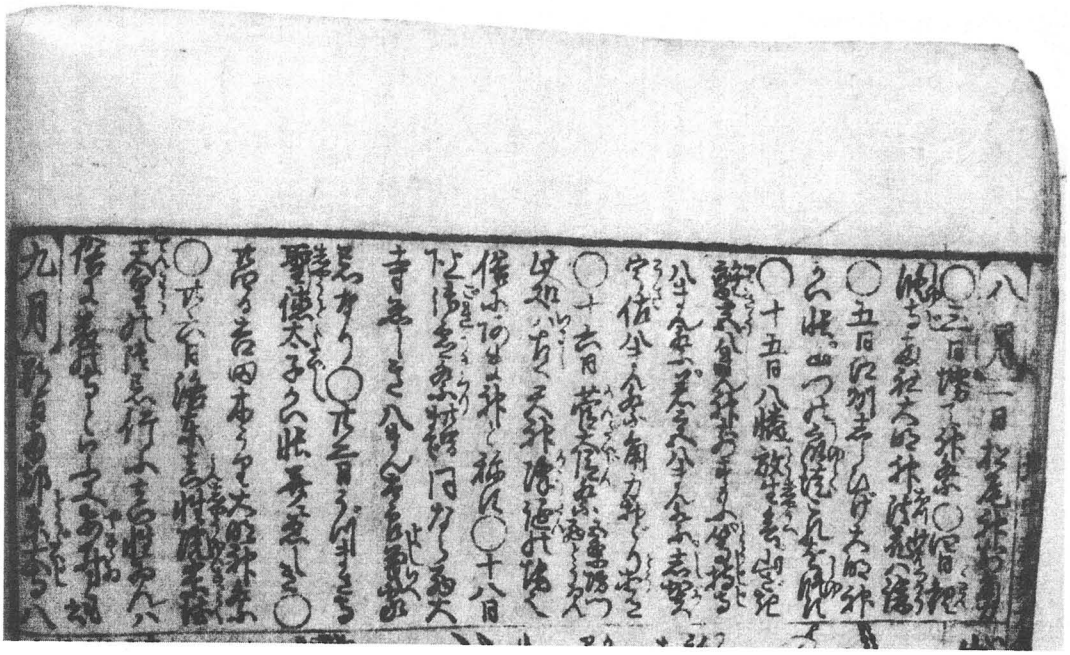


同松の尾神事の能〇廿
五日くろ谷 せいぐわん寺本のう寺
めうけん寺えうぼうじ
虫拂。同大坂天満大神まつり
〇廿七日本こくじ虫拂、大とくし
けさう忌〇廿八日妙心寺虫払。
同大坂生玉祭〇晦日摂津
住吉御祓。大坂堺ともに祭る
【七 月】朔日加茂翌日の能
〇五日けんにんじ開山忌〇
六日北野御社のすす拂。洛東
高臺寺せがき〇七日北野
御手水。神宝松風の硯箱
の上に梶のはふをのせて備ふ。
同七夕祭〇同日本願寺六
角堂池坊りつ花。後鳥羽院
御宸筆控。加茂松の下天りうじ大とくじ
一心ゐん虫拂。同飛鳥井家難波家
まり〇八日文珠会〇九日今
明両日洛東六道参り。清水千
日参り〇宇治わうばく山
せがき宇治川には水燈会有、

（十二）

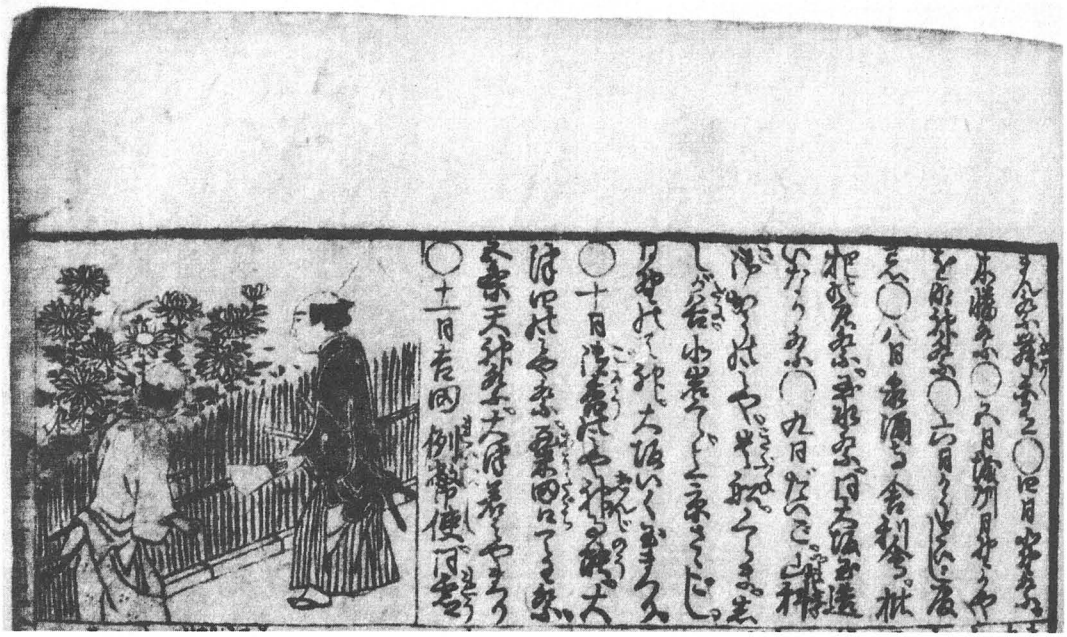
〇十四日十五日禁裏様御燈
籠。本願寺燈籠〇十五日八幡
あんど〇岩倉長谷の燈籠
おぐり。知恩院大せがき山門にて
行ふ。三井寺女人さんけい。今明日
岩屋山千日まいり。其日ヨリ十七日
までせんゆう寺の内、新善光
寺のあミだかい帳〇十六日千
本えんま堂参り。所々おく
り火。山ざきたから寺開帳〇廿
日廿一日高尾の文覚上人忌〇
六地蔵まいり、あたご千日参

（十三）



【八　月】一日松尾神前角力
〇三日堺天神祭〇四日観
修寺両社大明神法花八講
〇五日江州しらひげ大明神
かい帳。山門の衆徒これを修す
〇十五日八幡放生会。山ざき
離宮八幡神前すもふ。等持寺
八まん祭。若宮八まん祭。志賀
宇佐八まん祭角力おぐり等有。
〇十六日菅大臣祭五条坊門西とうゐん
此処ハ古へ天神降誕の地也、
俗にあま神と称す〇十八日
上下御霊祭廿四日まで、同なら西大
寺えしき八まん太郎義家
忌なり〇廿二日かづまさ寺
聖徳太子かい帳、并ニえしき〇
廿四日吉田きらり大明神祭
〇廿六日洛東真性院崇徳
天皇の御忌行ふ、真性ゐんハ
俗に藤の寺といふ、又安井とも云
【九　月】朔日南都東大寺八

（十四）

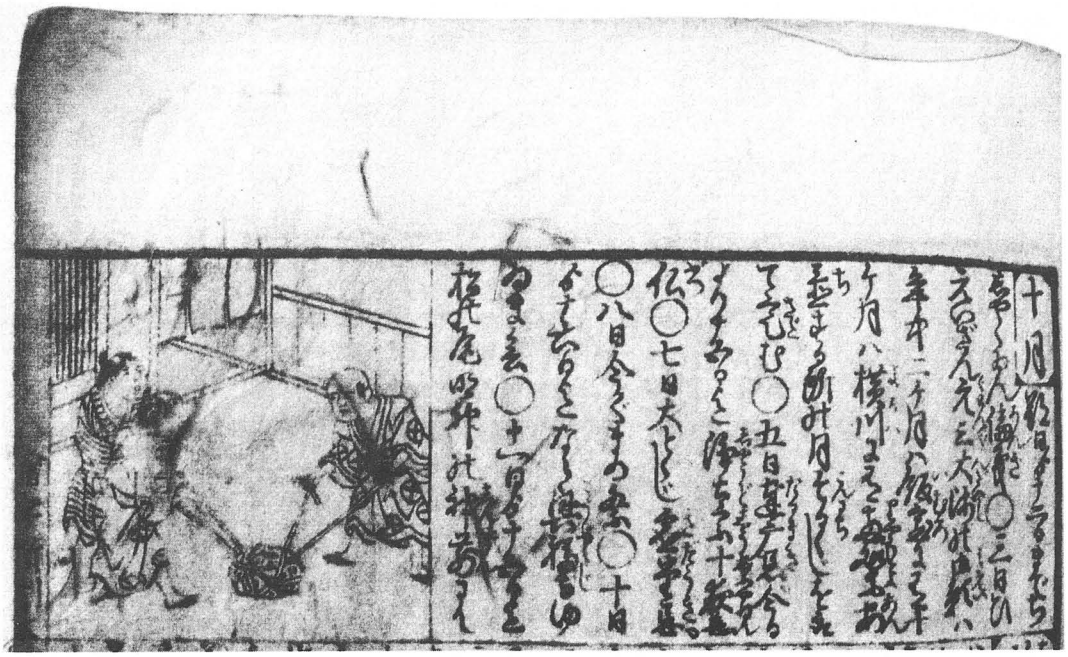


まん祭舞楽有〇四日北野祭。
木幡祭〇五日城州日野かや
を明神祭〇六日こうだいじ殿
忌〇八日泉涌寺舎利会。枇
杷の庄祭。玉水祭。同大坂玉造
いなり祭〇九日だいご。山科
御かうのミや。貴船。くらま。し
しが谷。北岩くら。上京さゝごし。
日野の天神。大坂いく玉まつり。
〇十日御香のミや神事能。大
津四のミや祭。粟田口天王祭。
五条天神祭。大津若ミやまつり
〇十一日吉田例幣使。同霊

（十五）

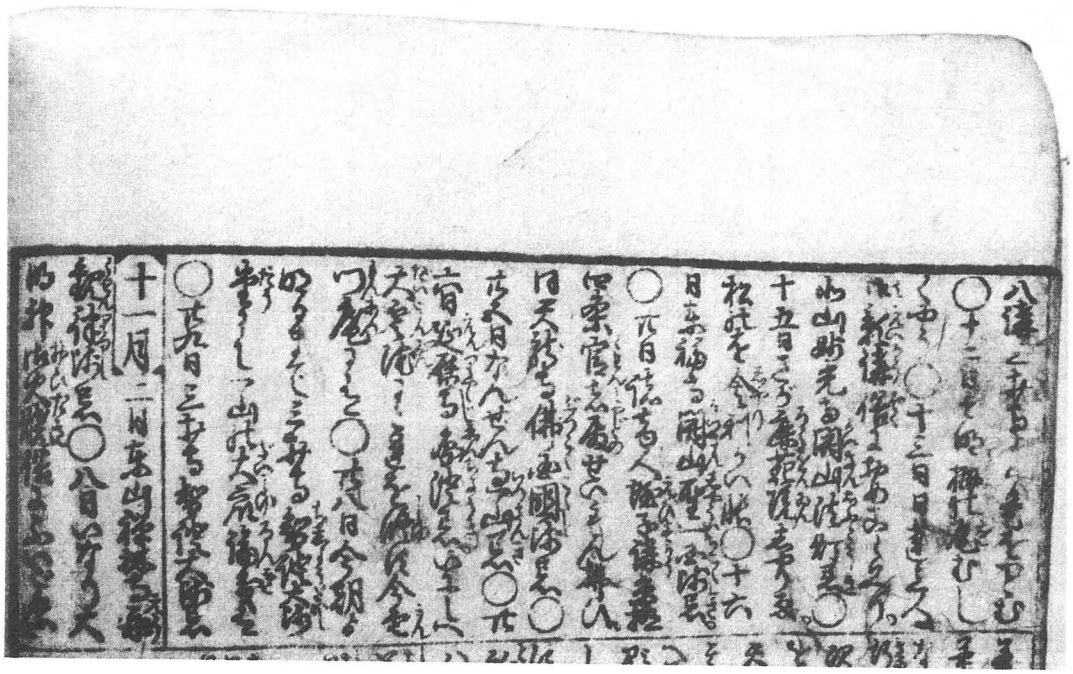
山国阿上人忌〇十二日かづ
まさ祭。伏見三栖祭御出
〇十三日新国津島祭　五でう松はら
通のにし。津の国住吉宝の市〇十
七日六條すわ明神祭〇十八
日津の国池田くれは祭　あやは八十九
日也、〇十九日南禅寺亀山院御
忌〇廿日城南寺祭　鳥羽ゑんをあがめ
奉る也、同竹田祭。だいご笠とり祭
〇廿一日久世はいがた祭。同大
坂上なんば祭〇廿二日大坂ざ
ま祭〇廿三日淀祭。江州
逆髪まつり〇廿四日江州せ
きの清水大明神祭。木幡祭。
浄土寺祭〇廿五日宇治田
原祭。同大坂天満天神やぶ
さめ〇廿六日北山天神社神
事。なるたき大明神祭。あべの
晴明祭〇廿七日大坂御霊
祭〇晦日夢想国師忌。同
津の国住吉神おくり。

（十六）



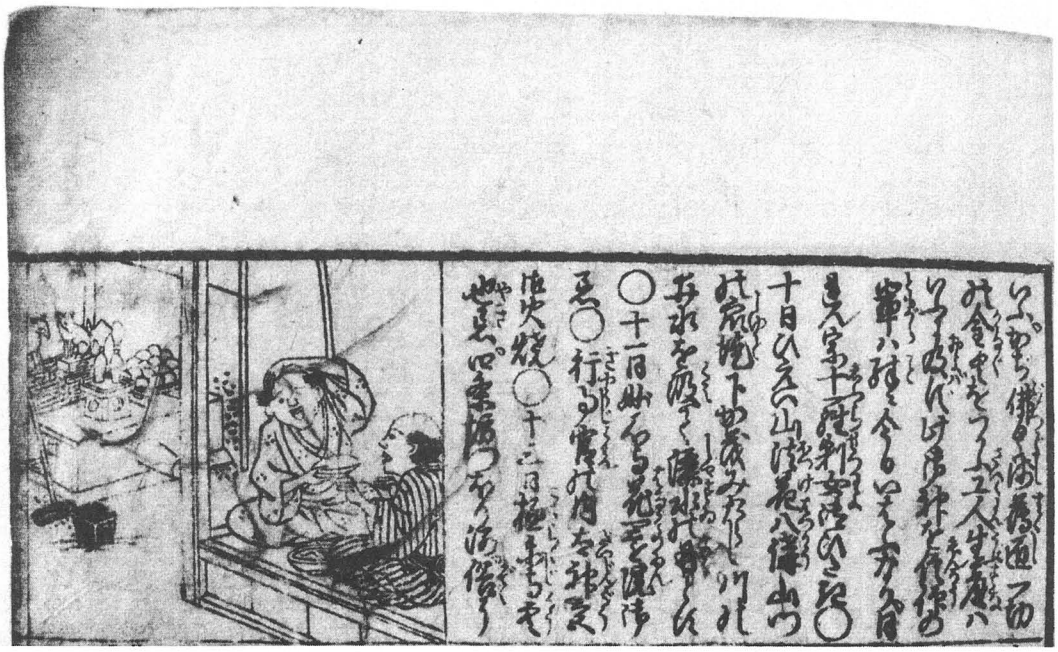
【十月】朔日ヨリ十二日までちしやくゐん論義〇三日ひえいざん元三大師の御影ハ年中二ヶ月ハ飯室に有、十ヶ月ハ横川に有、両処に安置する所の月今日くじを取て定む〇五日達磨忌。今日より十五日迄浄土宗十夜念仏〇七日大とくじ霊堂忌。〇八日今ぐまの祭〇十日ヨリ十六日迄なら興福寺ゆゐま会〇十一日ヨリ十五日迄松の尾明神の神前にて

（十七）



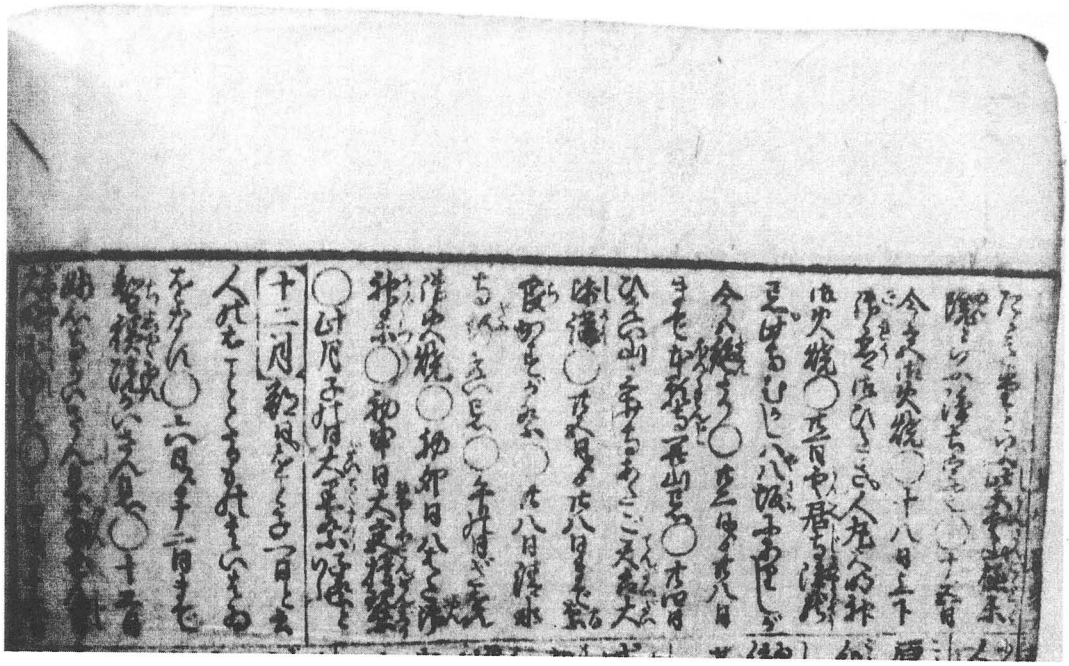
八講三井寺より是をつとむ、
〇十二日今明梅の尾むし
くやう〇十三日日蓮上人
御影講俗におめこしいへり。
北山妙光寺開山法灯忌〇
十五日さが鹿苑院しやりえ。
松のを舎利かい帳〇十六
日東福寺開山聖一国師忌。
〇廿日諸商人蛭子講京極
四条官者殿せいもん拂ひ。
同天龍寺佛国国師忌〇
廿五日なんぜん寺一山忌〇廿
六日延暦寺圓澄忌。いにしへ
大雲院にこれを修す、今雲
門庵に有〇廿八日今朝ヨリ
明日まで三井寺智證大師
堂にて一山の大衆論義有、
〇廿九日三井寺智證大師忌
【十一月】二日東山禅林寺永
観律師忌〇八日いなり大
明神御火焼、俗にふいご祭と

（十八）



いふ。かぢ佛具師薄・一切の金具をつかふ、工人生産ハいふに及ず、此御神を信仰の輩ハ殊に今日いはふなり。日れん宗十羅刹女御ひたき〇十日ひえい山法花八講山門の衆徒下加茂みたらし川の井水を汲て灑水の用とす、〇十一日妙心寺花還院御忌〇行事官の内太神宮御火焼〇十三日極楽寺空也忌。四条坊門ほり河。俗に

（十九）



たゝき堂といふ、紫雲山極楽
院といふ浄土宗也〇十五日
今宮御火焼〇十八日上下
御霊御ひたき。人丸大明神
御火焼〇廿一日雲居寺浄蔵
忌。此寺むかしハ八坂にありしが
今ハ絶たり〇廿二日ヨリ廿八日
まで本願寺開山忌〇廿四日
ひえい山三井寺あたご天台大
師講〇廿五日ヨリ廿八日まで奈
良かすが祭〇廿八日清水
寺行えい忌〇午の日ぎをん
御火焼〇初卯日八はた御
神楽〇初申日大宮権現祭
〇此月子の日大黒祭、子祭といふ
【十二月】朔日をと子一日と云、
人のことたるものはいはゐ
をなす〇六日ヨリ十二日まで
智積院かいさん忌〇十二日
妙心寺かいさん忌、南ぜん寺
大明国師忌〇十四日ヨリ

（二十）

まで泉涌寺佛名会〇十
九日廿一日迄槙の尾佛名会
〇廿日さがのしやか堂すす拂
本尊かい帳〇廿二日大とくじ
かいさん忌〇廿三日一遍上人
忌。時宗の寺々に法事有、
〇廿八日鉢たゝき結願極
楽寺にておどり念佛本堂
にて修す〇大晦日夜に入て
祇園の神前にて大般若経

（二十一）

転読、又子の刻より拝殿にてげつりかけの神事はしまる〇節分の五条天神まふて、此御社ハ少彦名命を祭る、是神代の遺風也、

【証文手形案紙】

預り申銀子之事

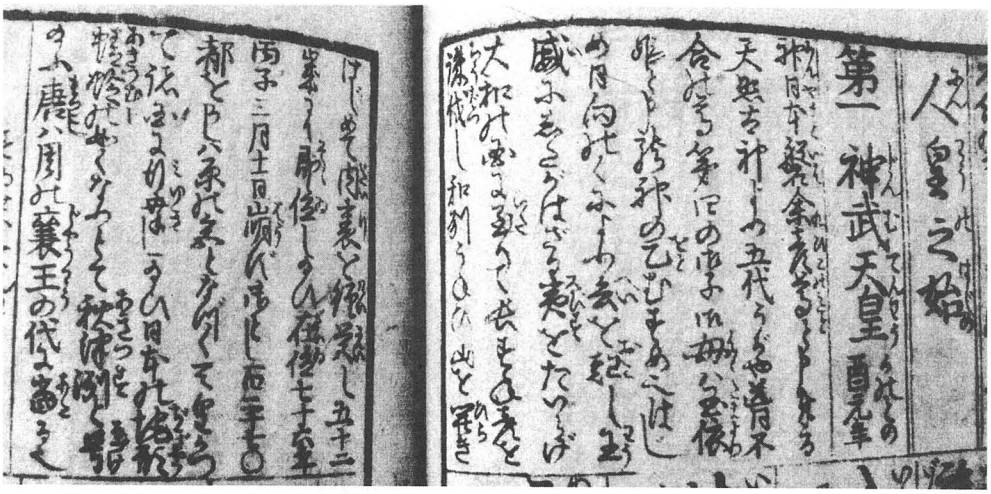
一合銀拾貫目也

右之銀子我々中へ慥ニ預り申処実正也、何時成共其元御入用次第以此手形無相違返済可申候、為後日銀子預り連印証文仍而如件、

年号　何屋

月日　何右衛門

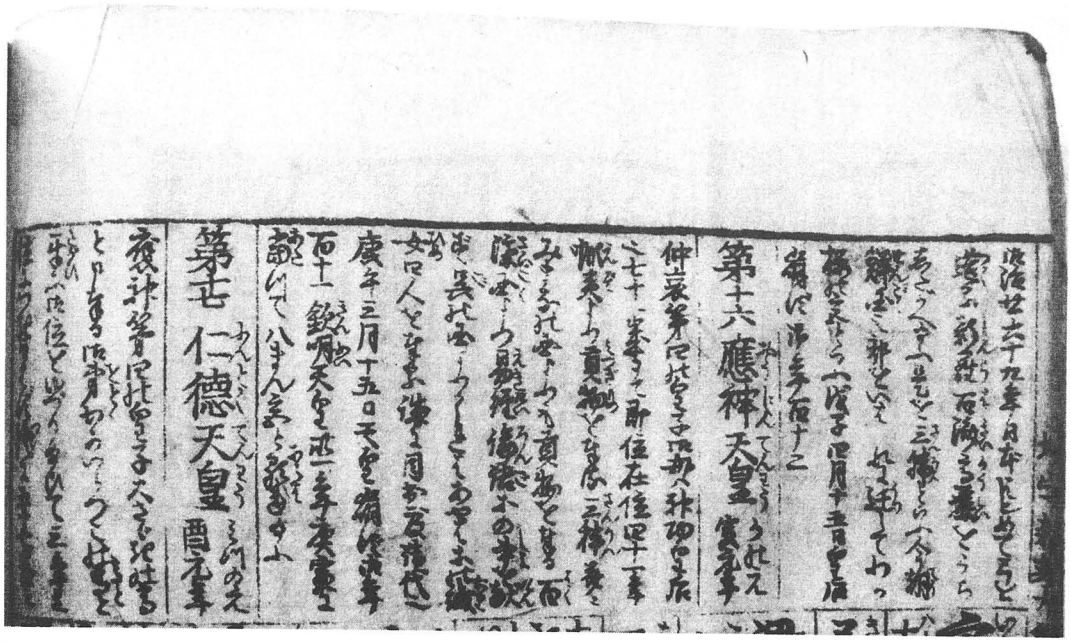
『人皇之始』（抜粋）（一）



人皇之始

第一神武天皇　かのとの酉元年

神日本磐余彦尊と申奉る
天照太神より五代かがや葺不
合の尊第四の御子、御母ハ玉依
姫と申龍神の乙むすめ也、はじ
め日向のくにより兵を起し、王
威にしたがはざる夷をたいらげ、
大和の国に至りて長すね彦を
誅伐し、和州かねひ山を開き
はじめて内裏を経営し、五十二
歳にて即位し為ひ、在位七十六年
丙子三月十一日崩ず、御とし百二十七〇
都をかしハ原の宮となづく、天皇かつ
て諸国に行幸し為ひ、日本の地形
情蛉の如くなりとて秋津洲と号
給ふ、唐ハ周の襄王の代に当る也、



第十六應神天皇　かのえ寅元年

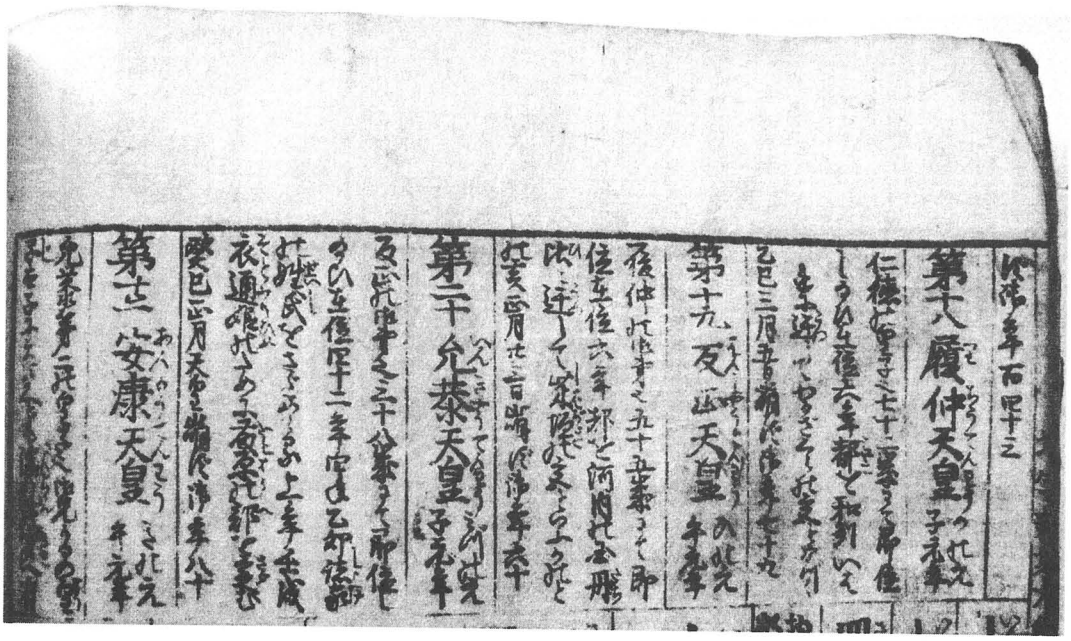
仲哀第四の皇子御母ハ神功皇后也、七十一歳にて即位在位四十一年蝦夷より貢物を奉る、三韓并ニみまなの国よりも貢物を奉る、百済国より易経論語等の書を献ず、呉の国よりくれはあやは等の織女四人を奉る、殊に目出度御代也、庚午三月十五日天皇崩ず、御年百十一、欽明天皇廿一年庚寅に当りて八まん宮と顕れ為ふ、

第十七仁徳天皇　みつのえ酉元年

應神第四の皇子大さざきの尊と申奉る、御弟わきいらつこの尊と互い御位をゆづりたひて三年迄位につきたまはず、終に五十七歳ニ

（三）

して即位し為ふ、在位八十七年都
を摂州なにはに遷して高津の宮
といふ、天皇仁心深く深くけれ
ハ、高臺より民のまつしきをえい
らんありて、三年の貢をゆるし為ふ、
十一年十月なには堀江の河をほる、
廿九年五月五日はじめて葱蒲を
奉る、六十二年六月一日はじめて氷
室を奉る、六十五年飛騨の国に
一身二面手足四ツある人出て、王
命にそむく詔してこれをたいらぐ、
七十八年十月武内の大臣薨す、年
三百十六景行帝より当代まで
六代の間、政をとる事二百四十余
年なり、己亥正月廿六日天皇崩



ず、御年百四十三

第十八履仲天皇　かのえ子元年

仁徳の皇子也、七十二歳にて即位し給ひ在位六年都を和州いはれに遷してわかざくらの宮となづく、乙巳三月五日崩ず、御年七十九

第十九反正天皇　ひのえ午元年

履仲の御弟也、五十五歳にて即位、在位六年都を河内の国丹比ニ遷して柴垣宮といふ、かのとの亥正月廿三日崩ず、御年六十

第二十允恭天皇　みづのえ子元年

反正の御弟也、三十八歳にて即位し給ひ在位四十二年、四年乙卯諸家の姓氏をさだめる上、年壬戌衣通姫のために藤原の都を定む、癸巳正月天皇崩ず、御年八十

（五）

第卅七孝徳天皇　大化乙巳元年

軽の皇子と申す皇極帝の御弟也、
在位十年都を摂州長柄に遷して
豊崎の宮となづく、此御代より年
号はじまりて大化といふ、白雉五
年甲寅十月天皇崩ず、

第卅八斉明天皇　きのとの卯元年

皇極帝ふたたび御位につき為ふ也、
在位七年、二年百さい国よりあふむ
を奉る、辛酉七月崩ず、御年四十六

第卅九天智天皇　みづのえ戌元年

舒明の皇子也、在位十年中大兄と
も葛城の皇子共申、八年己巳十
月大職冠鎌足薨ず、年五十
六、十年辛未十二月三日天皇江

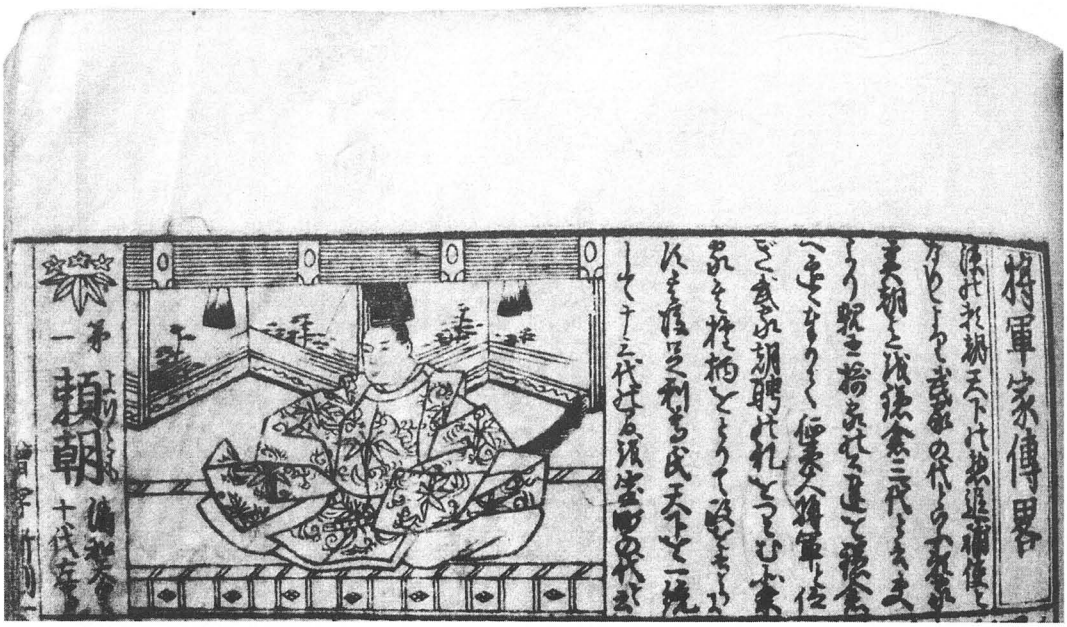
（六）

州しがの都に崩ず、御年四十六

第四十天武天皇　白鳳壬申元年

天智の御弟也、きよみ原の天皇と申す、在位十五年先帝の太子大友と江州あハ津が原にて合戦に及び、大とも戦ひ敗れて縊れ為ふ、よつて二年二月天武即位し為ふ、十一年はじめて黒漆の冠を造る、朱鳥元年丙戌九月九日天皇崩ず、

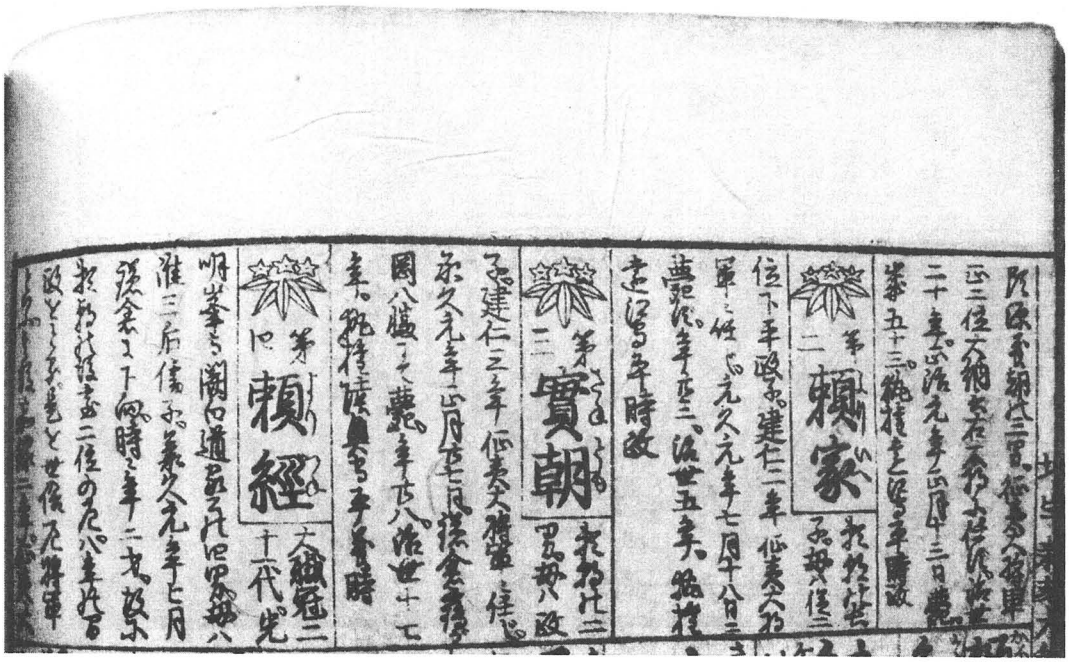
（七）



【将軍家傳畧】

源の頼朝天下の惣追補使となりしより武家の代といふ、頼家実朝迄を鎌倉三代と云、夫より親に摂家の公達を鎌倉へ迎へ奉りて征夷大将軍と仰ぎ、武家胡聘の礼をつとむ、北条家其権柄をとりて政を専らにす、其後足利尊氏天下を一統して十三代の間を室町の代と云、

第一　頼朝　清和天皇十代左馬



頭源義朝の三男。征夷大将軍
正二位大納言右大将に任ず。御世
二十年。正治元年正月十三日薨。
歳五十三。執権遠江守平時政

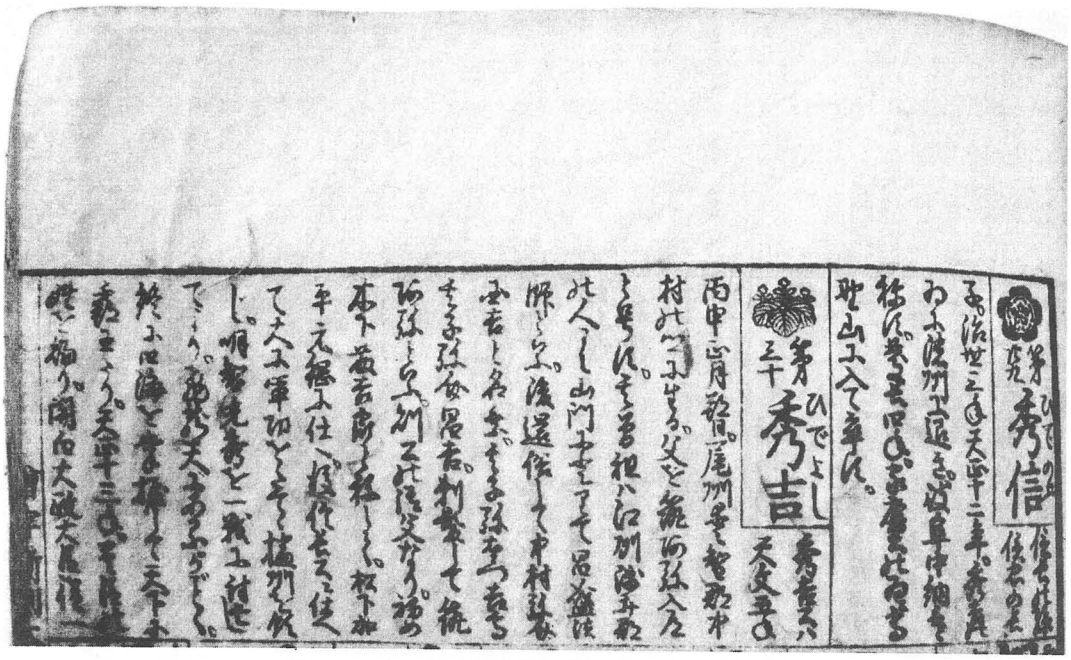
第二　頼家　頼朝の長子。母ハ従二
位下平政子。建仁二年征夷大将
軍ニ任じ。元久元年七月十八日ニ
薨ず。年廿三。治世五年。執権
遠江守平時政

第三　実朝　頼朝の次男。母ハ政
子。建仁三年征夷大将軍ニ任じ。
承久元年正月廿七日。鎌倉鶴が
岡八幡にて薨。年廿八。治世十七
年。執権陸奥守平義時

第四　頼経　大職冠二十一代。光
明峯寺関白道家公の四男。母ハ
准三后儒子。承久元年七月（以下略）

（九）

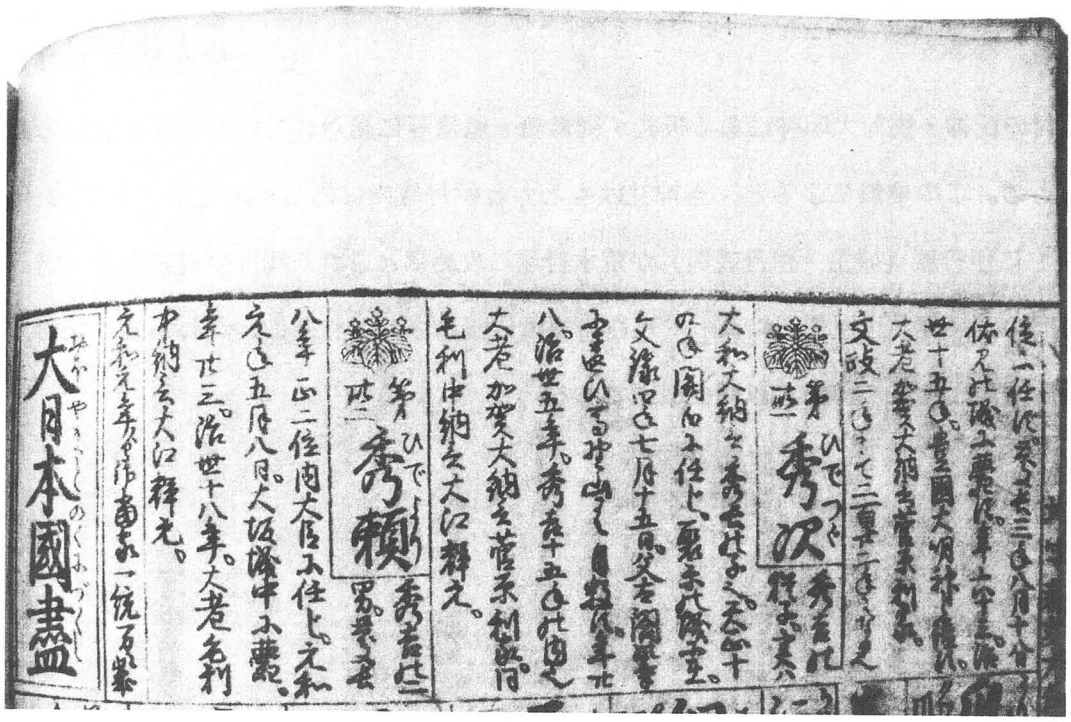
第廿八　信長　桓武天皇八代平相国清盛二十一代の後胤織田備後守平信秀の二男也。天正元年征夷大将軍に任じ。同十年六月二日。京都本能寺にて家臣明智光秀が為に自殺す。年四十九。治世十年。従一位大相国を賜らる。惣見院殿と号す、



第廿九　秀信　信長の孫、信忠の長子。治世三年天正十二年。秀吉の為に清州に退き。岐阜中納言と称す。慶長四年。家康公の為に高野山に入て卒す。

第三十　秀吉　秀吉公ハ天文五年丙申正月朔日。尾州愛智郡中村の地に生る。父を筑阿弥入道と号す。其曽祖ハ江州浅井郡の人にて、山門に登りて昌盛法師といふ。後還俗して中村弥介国吉と名乗。其子弥右衛門吉高其子弥介昌吉。剃髪して筑阿弥といふ。則公の御父なり。初め木下藤吉郎と称して。松下加平元綱に仕へ。後信長公ニ仕へて大に軍功をたて、播州を領じ。明智光秀を一戦に付亡してより。飛龍天にあるがごとく。終に四海を掌握して天下に覇王たり。天正十三年。豊臣の姓を賜り。関白大政大臣従一

（十二）



位に任ず。慶長三年八月十八日伏見の城に薨ず。年六十三。治世十五年。豊国大明神と諡す。大老加賀大納言菅原利家。文政二年まで二百廿二年になる也、

第卅一　秀次　秀吉の猶子。実ハ大和大納言秀長の子也。天正十九年関白に任じ。聚楽の城に在。文禄四年七月十五日。父太閤の気に違ひ高野山にて自殺す。年廿八・治世五年。秀吉十五年の内也、大老加賀大納言菅原利家。同毛利中納言大江輝元。

第卅二　秀頼　秀吉の二男。慶長八年正二位内大臣に任じ。元和元年五月八日。大坂城中に薨。年廿三。治世十八年。大老毛利中納言大江輝元。元和元年ヨリ御当家一統万々歳

（以上、一部抜粋）

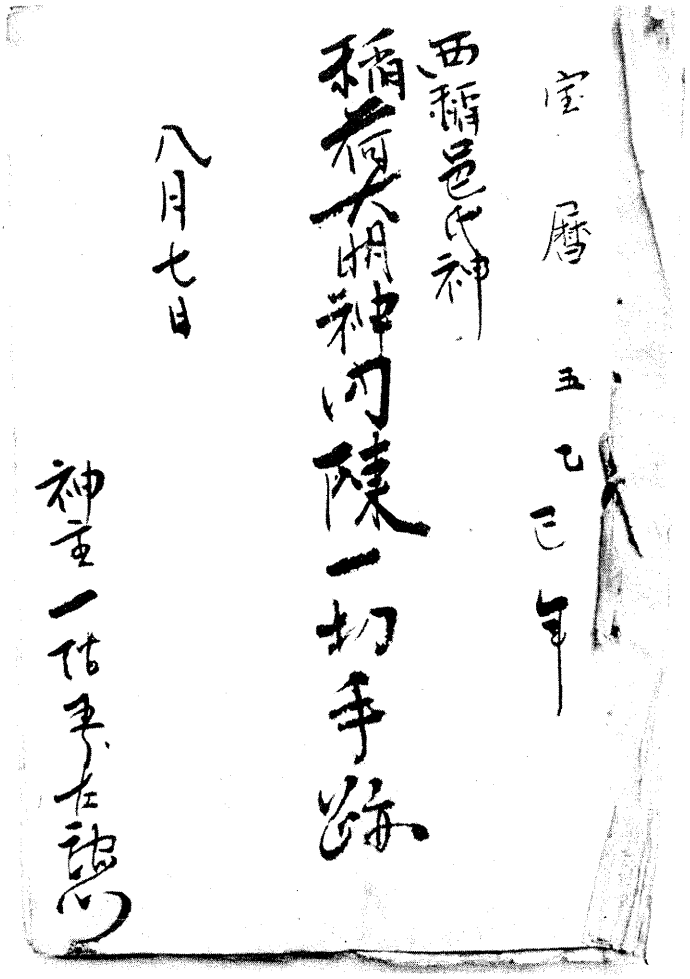
【稲荷大明神内陳一切手跡】

（一階律夫氏所有文書）

西稲村の氏神・稲荷大明神にある板札・御幣箱・燈篭等に書かれている文字を調査し記録したもの。この史料によると、当神社はもともと伊丹城内にあったのだが、天正 2 年（1574）に伊丹城（城主・伊丹親興）が荒木村重に攻め落とされた際、伊丹家家老一階五郎左衛門の「家徒」正左衛門によって現在の場所に移動させられたことがわかる。なお、当史料は、寛政 9 年（1797）以降の成立である。

【稲荷大明神内陳一切手跡】

（一）



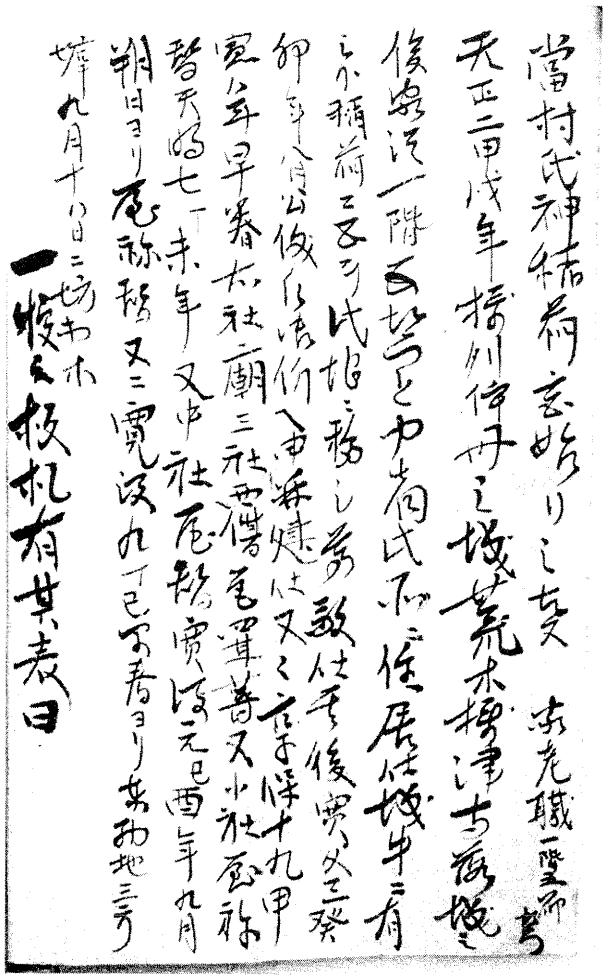
宝暦五乙巳年

西稲邑氏神

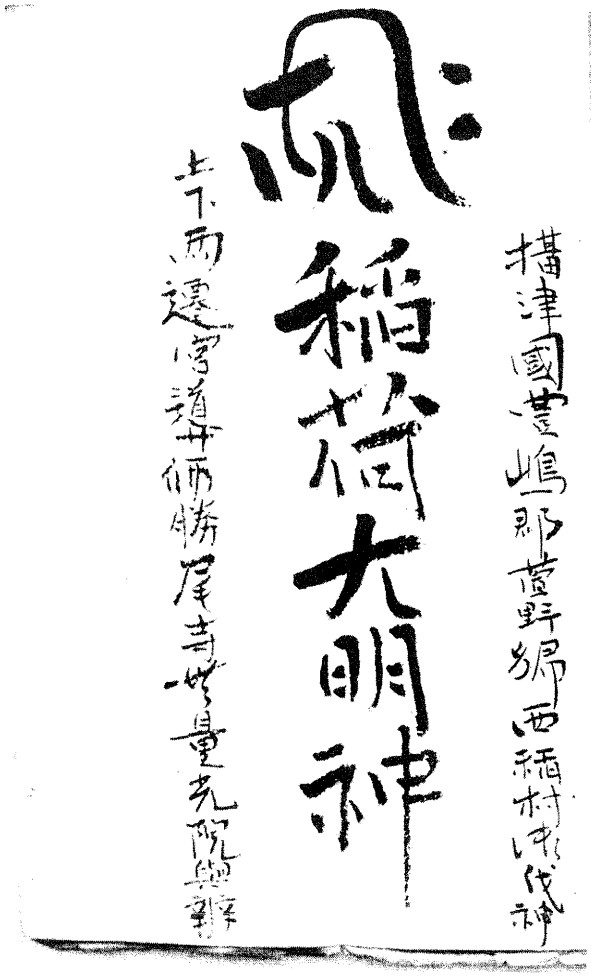
稲荷大明神内陳一切手跡

八月七日

神主一階五郎左衛門



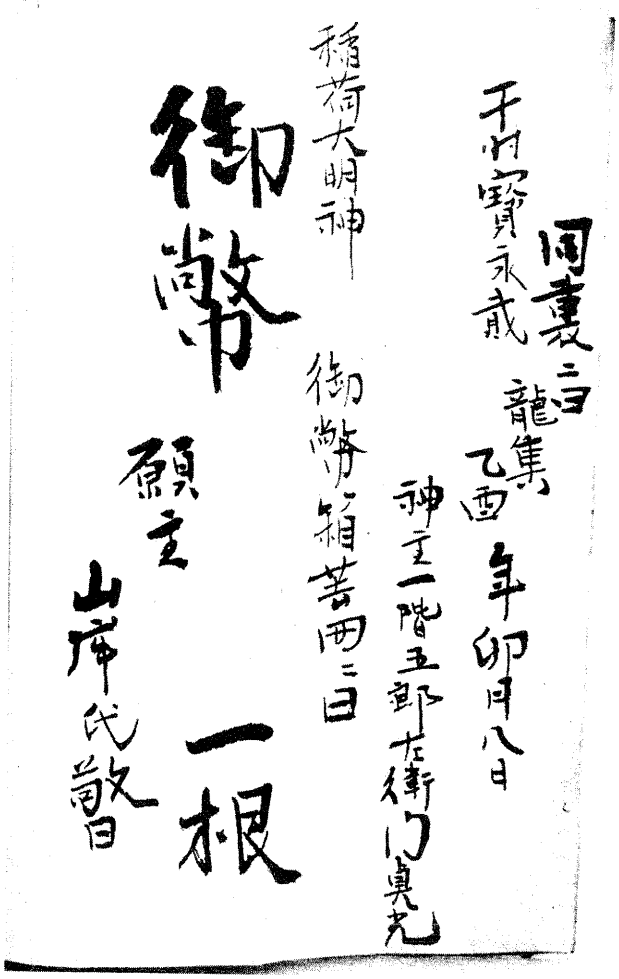
當村氏神稲荷宮始り之事　家老職一階五郎左衛門
天正二甲戌年摂州伊丹之城荒木摂津守落城之
後家徒正左衛門と申者此所ニ住居仕、城中ニ有
之候、稲荷宮ヲ此地ニ移シ尊殿仕、其後寛文三癸
卯年八月公儀江御訴へ申再建仕、又々享保十九甲
寅年早春右社廟三社覆瓦葺葺又小社屋祢
替天明七丁未年又中社屋替寛政元丁巳酉年九月
朔日ヨリ屋祢替又々寛政九丁巳早春ヨリ東西地三方
塀九月十八日ニ坊等等
一牧之板札有其表曰



稲荷大明神

摂津國豊嶋郡萱野郷西稲村御氏神

上下両遷宮導師勝尾寺無量光院與辨



同裏ニ曰

于時寶永貳　龍集乙酉年卯月八日

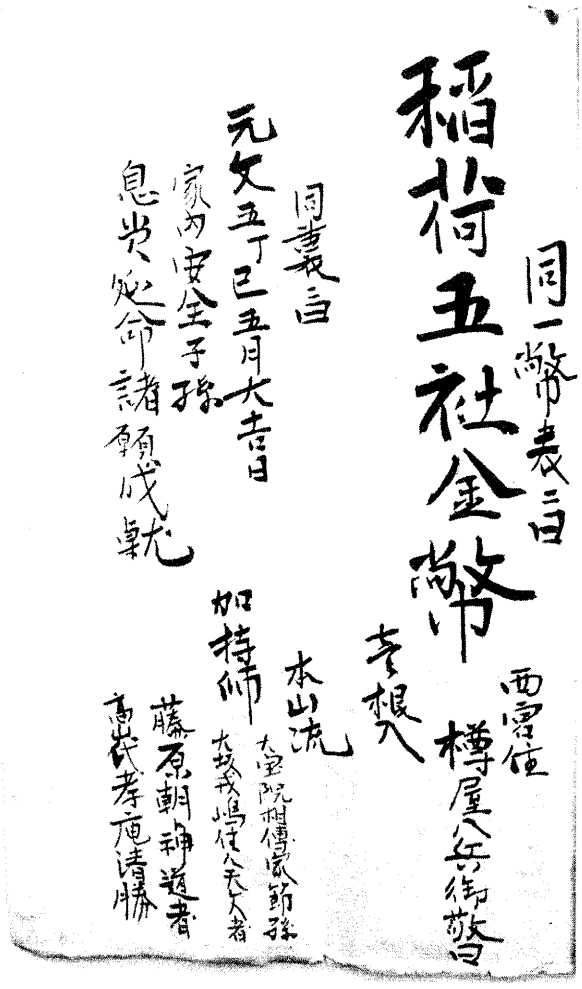
神主一階五郎左衛門貞光

稲荷大明神　御幣箱芸冊ニ曰

御幣　一根

願主

山岸氏敬曰



同一幣表二曰

稲荷五社金幣

西宮住　樽屋八兵御敬曰

壱根入

同裏二曰

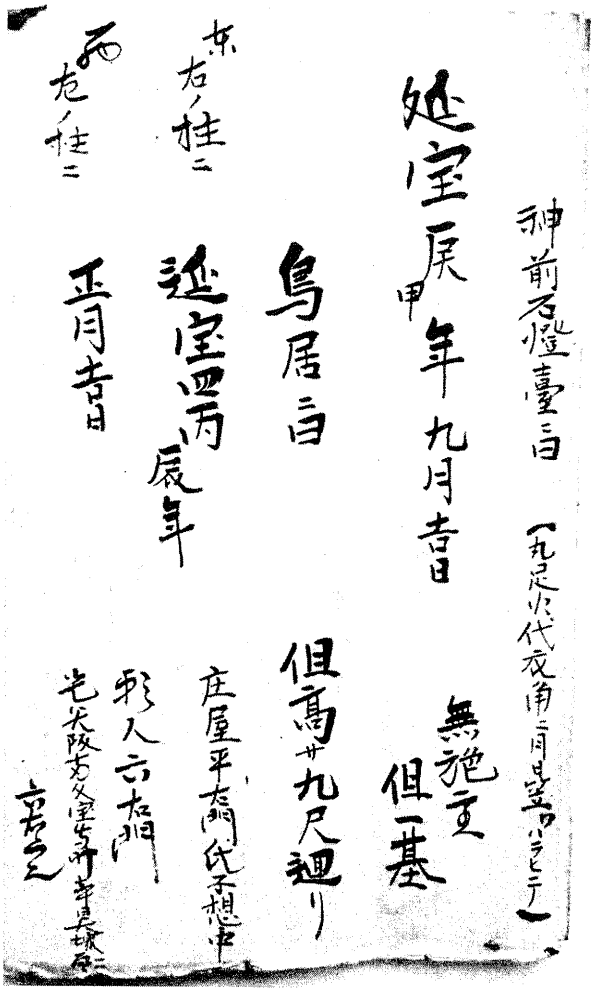
元文五丁巳五月大吉日　本山流

家内安全子孫　加持師　大宝院相傳家節孫

息災延命諸願成就　大坂戎嶋住八天文者

藤原朝臣神道者

高山代孝庵清勝



神前石燈臺ニ曰　（丸足火代衣角ニ月日笠ワハラヒテ）

延宝辰甲年九月吉日　無施主　但一基

鳥居ニ曰　但高サ九尺廻り

庄屋平右衛門氏子惣中

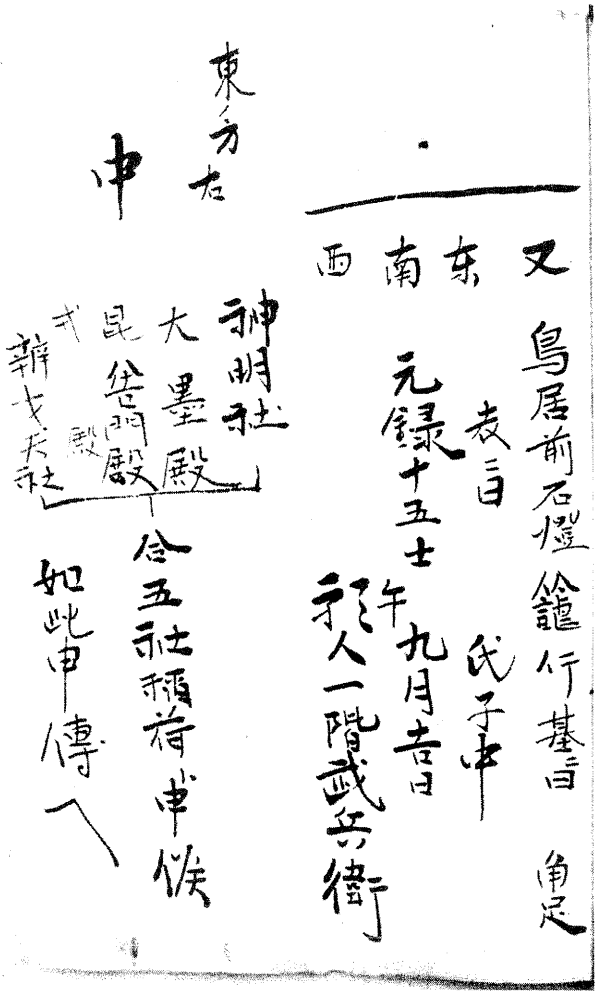
頼人六右衛門

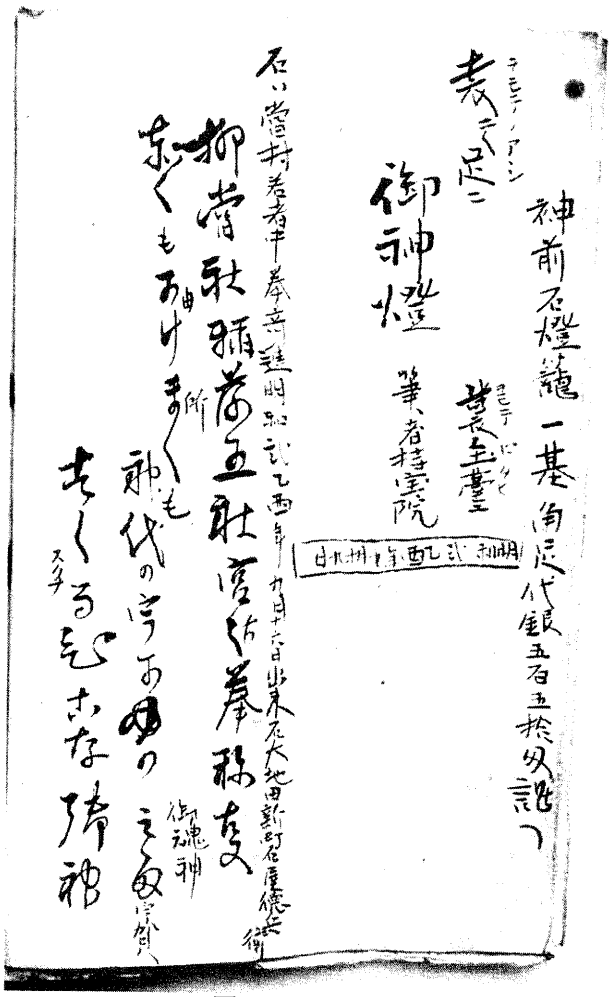
是ハ大坂両久宝寺寺町寺

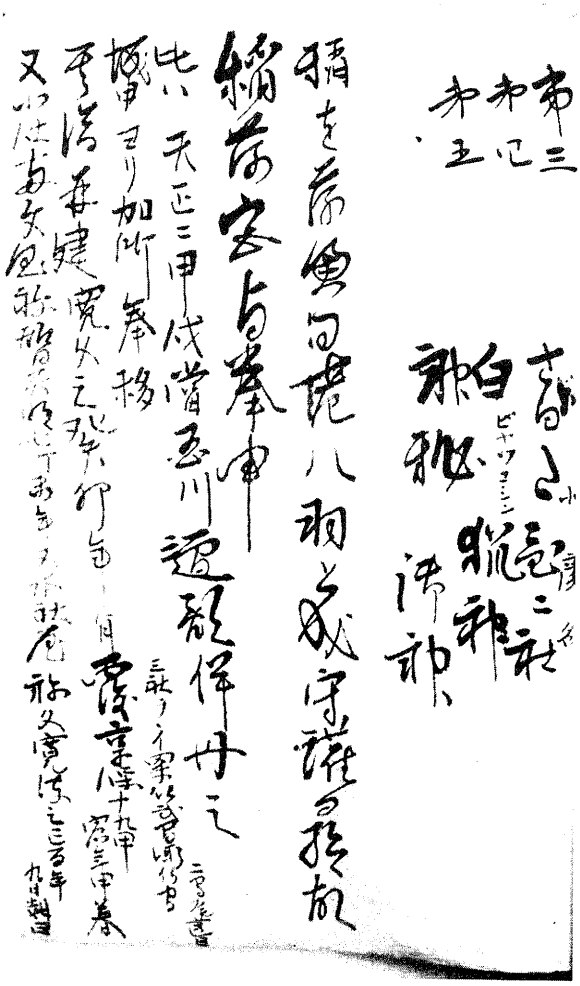
目大塚屋六右衛門

東右ノ柱ニ　延宝四丙辰年

西左ノ柱ニ　正月吉日

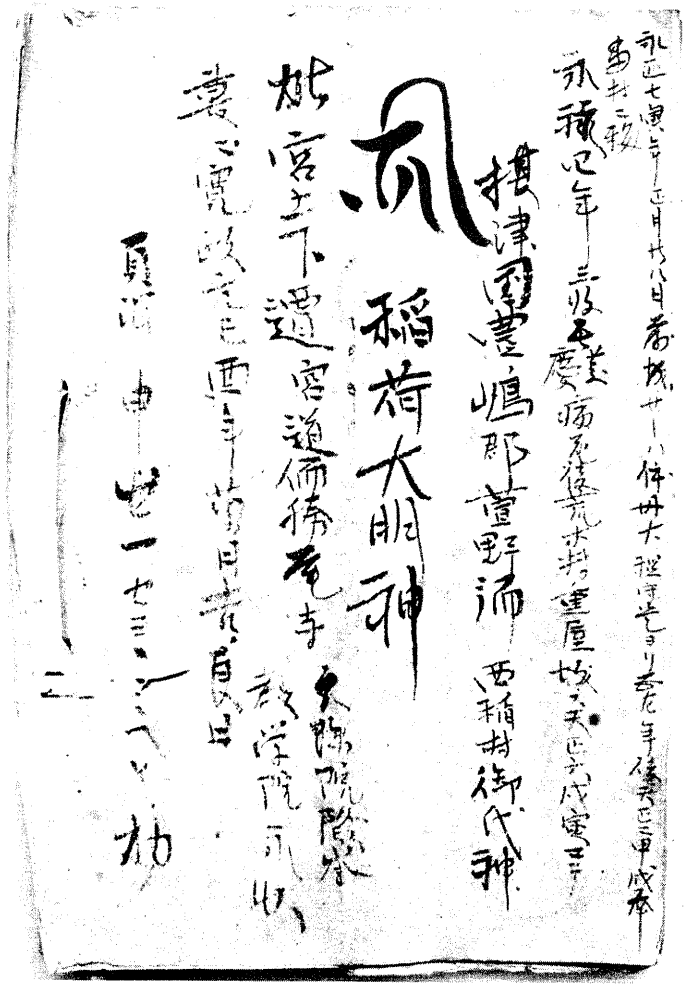

又 鳥居前石燈籠行基三日 角足
東 表三日 氏子中
南 元禄十五壬午九月吉日
西 頼人一階武兵衛
東ノ方右
中
神明社
大墨殿
昆舎門殿
戎 殿
辨才天社
合五社稲荷ト申候
如此申傳へ


神前石燈籠一基角足代銀五百五拾匁調へ
表之足ニ
御神燈
筆者持宝院
日九十月九年酉乙弐和明
石ハ當村若者中奉寄進明和弐乙酉年九月十六日出来石大地
田新町石屋徳兵衛
抑當社稲荷五社宮々奉称事
由所
とくもかけまくも
御魂神
神代のうがめの
みたま宇賀
すくるひこな御神
スクナ



第三　小彦名
第四　さるたひこニ社
第五　白ビヤワコシン猟神
　　神秘　御神

稲を荷奠る老八羽と成守護る給故
稲荷宮与奉申
比ハ天正二甲戌當国川邊郡伊丹之　二間瓦葺
城申ヨリ加所奉移　三社ヲ丶イ梁行弐間桁行間
其後再建寛文三癸卯年八月覆享保十九甲寅年甲春
又小社両文屋祢替天明七丁未年、又本社屋祢久寛政三巳酉年
九月朔日



永正七寅年正月廿八日落城せし八伊丹大和守是ヨリ宮左年後天正二甲戌奉
当社ニ移
永禄四年三好長慶病死後荒木村重居城ス天正六戌寅年
摂津国豊嶋郡萱野郷西稲村御氏神

稲荷大明神

此宮上下遷宮道師勝尾寺文珠院隊峯
教学院永収
裏ニ寛政元己酉年菊月吉良日

頁消　申セ一セヨここへ申朽

【天理改源水神白姫大明神鎮守祭祀歓請事由】

当社のいわれを記したものである。大正13年は稀にみる大旱魃で、各地で雨乞いの儀式が行われていたようである。当地でも例に漏れず水不足に苦しんでいたので、多田佐太郎という霊術者に雨乞い祈願をしてもらうことにした。8月18日に多田が水の神「龍神」に祈祷したところ21日に雨を降らすとのお告げが出たので、農民組合員全員で昼夜を通し拝んだ。すると21日にはお告げの通りに雨が降ったので人々は感謝し、山の中腹にあった「龍神」を山頂に移して「天理改源水神白姫大明神」と改称した、とのことである。

天理
改源　水神白姫大明神
鎮守祭祀歓請事由

改神祭水同ノ人時タト其喜少ラ廿ナ庄ス申中トテシシ其ニモモニ事暦
稱名祀神神歓ノマレナノビ量シ一ツ司トス神申香テタノテ事随襲ヲ上
シヲシノノ喜喜デバリ時十ノ其日タ保ノニ戸ス川居　効凡欠所ワ呼大
御天テ御妙ハビ降神昼農九雨ノ午　次事ハヨ者縣ル当果ニキニレビ正
社理居社味筆ハリノ夜民日ハ間后十郎ニ雨リ神大折地顕ル困生早　十
モ改タハヲ舌一続申ノ組ニ降毎三八ノテ乞八霊川柄方ハ雨難ジキ五三
頂源ガ山有ヲ方キサ別合ハラ日時日三右祈月術郡明モレ乞一　所月年
上水　ノ難以ナタルナ員神ス一ヨ夜名ヲ願十修神石其ズ行方国ハヨハ
ニ神神中クテラリ通ク全前ト時リノニ田致八行前金ノ万事ナ民田リ古
遷白妙腹感尽ズ　リ一員ニノ間八神テ行シ日ノ村助例人ヲラ一植全来
シ姫光ニ受シ神部廿念同テ事自時ノ祈人テ当為ノノニ困執ザ般モ国稀
タ大照龍シ難ノ落一込調祈ニ至間神祷ト必地メ夛従漏却リリモ出的ニ
リ明ニ神タク偉民日メ致リテ二ノ籤致明ズニ各田兄レノタキ飲来ニ見
　神依ト　住力一午テシタ大時雨ニス石雨来地佐弟ズ極ル　料ヌ大る
　トリシ　民妙般后拝一ルイ間ヲハ事金降リ遍太ニ憂ニモ国水府旱凶
　　テ　一法万三ミ心ガニノ降　ト助ラテ歴郎シ慮達　中ニ縣魃変

箕面市文化財総合調査報告書Ⅰ

２０００年度

２００１年３月

発行・編集　箕面市文化財総合調査団

印刷　　有限会社カレードスコープ